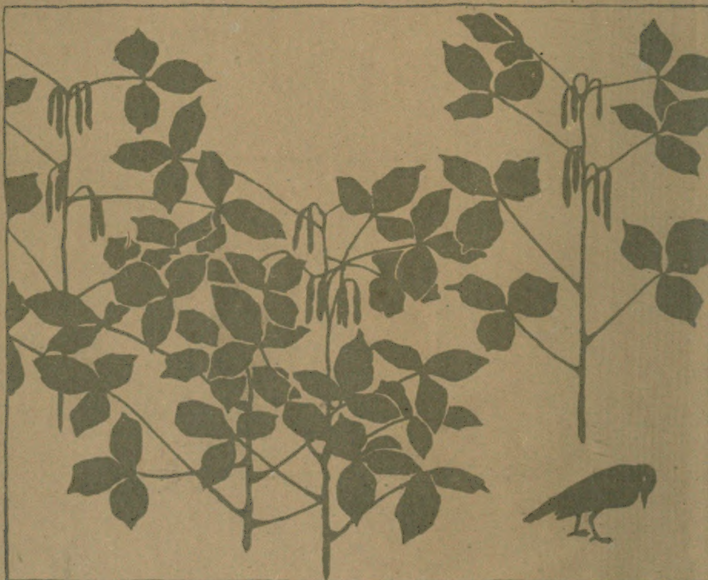
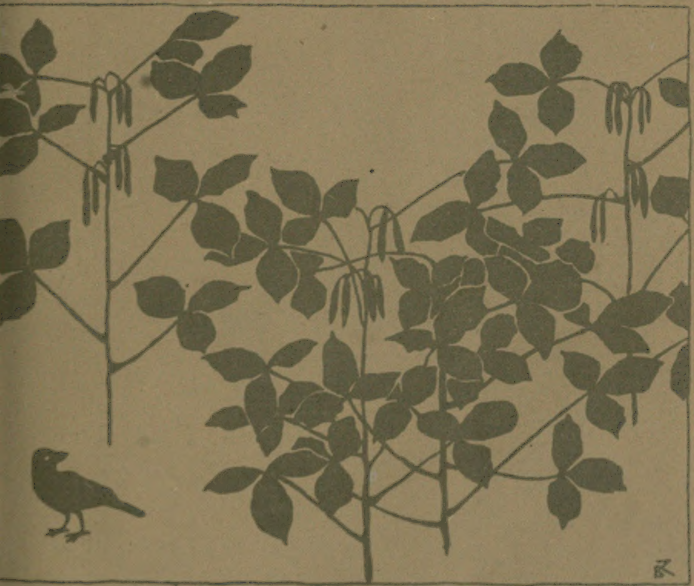




（岡山製本）

大正三年七月七日印刷
大正三年七月十日發行

有朋堂文庫
源氏物語　三
（非賣品）

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

らめ、と心苦しがり給ひて、二條院の西の對にわたい給ひて、(一)時々も通ひ給ふべく、忍びて聞え給ひければ、女(二)一宮の御方に、ことよせて思しなるにや、と思しながら、覺束(三)なかるまじきは嬉しくて宣ふなりけり。(四)さなゝりと中納言も聞き給ひて、(五)三條宮作りはてて渡い(六)奉らむことを思ひしものを、(七)かの御代になずらへても見るべかりけるを、など引きかへし心細し。(八)宮の思し寄るめりし筋は、いと似げなき事に思ひ離れて、大方の後見は我(九)ならでまた誰かは、と思すとや。

(一)中君を引取りて時々そこへ通へと
(二)引取るに托して實は女一宮の侍女に中君をする積ではないかと
(三)とにかく繁々逢はれるのが嬉しくて
(四)此趣を薫も聞きて
(五)薫の心
(六)大君を引取らんと
(七)斯うなりては中君を大君の代りと思ひて引取ればよかつた抔と
(八)匂の疑ひし點卽ち中君とよい中になる事は薫はとんでもなき事と思ひて丸で其氣は無く
(九)自分の外に中君の世話をやくものはあるまじと

(一)法事
(二)匂宮
(三)薫の心
(四)諸方から薫が一向無沙汰して居る事を小言を言ひ來る故
(五)薫が宇治に居馴れて
(六)宇治の人々
(七)大君逝去の時の
(八)今は靜まりて居る時だけに却て
(九)興ある機會にばかり薫が來て應答したりし過去よりも
(一〇)ゆつくり居附きて
(一一)薫の
(一二)人々涙にくれあへり
(一三)匂宮
(一四)手近き處へ中君を引取るべき手段を講じたりと
(一五)以下匂の斯く計りたる次第を説明する也
(一六)宇治の事を聞きて
(一七)定めて匂も中君には一通りならず熱くなつて居る事ならんと

む雪に、うち眺めつゝ明し暮し給ふ心地、盡きせず夢のやうなり。(一)御わざもいかめしうせさせ給ふ。(二)宮よりも御誦經など、こちたきまでとぶらひ聞え給ふ。(三)斯くてのみやは、新しき年さへ歎き過さむ、(四)此處彼處にも、覺束なくて閉ぢ籠り給へることを聞え給へば、今はとて歸り給はむ心地も、例へむ方なし。(五)斯くおはしならひて、人繁かりつる名殘なくならむを、思ひわぶる(六)人々、(七)いみじかりし折のさしあたりて悲しかりし騷よりも、(八)うち靜まりていみじく覺ゆ。人々「時々をりふし(九)をかしやかなる程に、聞えかはし給ひし年頃よりも、(一〇)かくのどやかにて過し給へる、日頃の御有樣けはひのなつかしく情深う、はかなき事にもまめなる方にも、思ひやり多かる(一一)御心ばへを、今は限に見奉りさしつること」と(一二)おぼほれあへり。かの(一三)宮よりは、「猶かう參り來る事もいと難きを、思ひわびて、(一四)近うわたい奉るべき事をなむ、たばかり出でたる」と聞え給へり。(一五)后の宮聞召しつけて、(一六)中納言もかく疎ならず思ひほれて居たゝなるは、(一七)實におしなべて思ひがたうこそは、誰も思さる

(一)大勢かゝりて薫の食事の給仕などするを見て匂が
(二)薫の樣子
(三)匂が悔みをいふ
(四)大君死去前後の樣子など、以下薫の心
(五)匂に愚痴らしく見られるのを怖れて
(六)薫の樣子
(七)自分が女なら必ず薫に思ひ附くべしと
(八)匂が自分の不埒な了簡から氣をまはすと中君が薫に惚れはせぬかと氣がもめる故
(九)世間から誹られず夕霧などにも恨まれぬ樣にして
(一〇)中君を
(一一)中君はまだ依然としてつれなけれど
(一二)帝などの御機嫌を氣づかひて
(一三)匂が
(一四)匂が
(一五)中君が相手のつれなきはどの位苦しきかを匂に思知らせんと思ひて
(大)薫京に歸らんとす、匂宮中君を京に引取らんとす
(一六)宇治の樣な寂しき處でなくても

じ方に住み馴れて、(一)人も數多して物參らせなどし給ふを、哀にもをかしうも御覽ず。(二)いといたう瘠せ靑み、ほれ〴〵しきまで物を思ひたれば、心苦しく見給ひて、まめやかに(三)とぶらひ給ふ。(四)ありし樣など、かひなき事なれど、この宮にこそは聞えめ、と思へど、打ち出でむにつけても、いと心弱く、(五)かたくなしく見え奉らむにはゞかりて、言少なり。(六)音をのみ泣きて日數經にければ、顏がはりのしたるも、見苦しくはあらで、いよ〳〵物淸げになまめいたるを、(七)女ならば必ず心うつりなむと、(八)己がけしからぬ御心ならひに思し寄るも、なまうしろめたかりければ、いかで(九)人の譏をも恨をもはぶきて、(一〇)京に移ろはしてむ、と思す。(一一)かくつれなきものから、(一二)內裏邊にも聞召して、いと惡しかるべきに思しわびて、今日は(一三)歸らせ給ひぬ。(一四)疎かならず言の葉をつくし給へど、(一五)つれなきは苦しきものと、一節を思し知らせまほしくて、心解けずなりぬ。

年の暮がたには、(一六)かゝらぬ所だに、空の氣色例には似ぬを、荒れぬ日なく降り積

(一)匂の
(二)中君が流石氣の毒に思ひて
(三)無數の神を證人にして、「誓ひつることの數多になりぬれば千々の社も耳なれぬらん」
(四)中君が
(五)來てくれぬつらさよりは
(六)匂の樣子
(七)是では嫌がる一方で通す譯にもゆかぬと
(八)「何たのむらむ」はなぜ約束するならんの意
(九)京に居て思ひやりしよりは逢つて却つて氣がもめる、匂の心
(一〇)此世をはかなく思ふならせめて目前だけでも我心に從ひ給へ
(一一)色々罪造りな心遣をし給ふな、何事も素直にし給へ
(一二)匂が
(一三)匂の心
(一四)まして此月頃我が無沙汰せしに對しては中君がどの位恨めしかりしならんと

きくらし給ひつ。夜の氣色いとゞ烈しき風の音に、人やりならず歎き(一)臥し給へるも流石(二)にて、例の物へだてて聞え給ふ。「千々の社」(三)をひきかけて、行くさき長きことを契り聞え給ふも、いかでかく口馴れ給ひけむ、と(四)心憂けれど、(五)餘所にてつれなき程の疎ましさよりは、哀に人の心もたをやぎぬべき御樣(六)を、一方(七)にも疎み果つまじかりけりと、唯つくづくと聞き給ひて、

中君　來しかたを思ひいづるもはかなきを行末かけて何たのむらむ(八)

とほのかに宣ふ。(九)なかなかいぶせう心もとなし。

匂　(一〇)行末をみじかきものと思ひなばめのまへにだに背かざらなむ

何事もいとかう見る程なき世を、罪(一一)深くな思しないそ」と、萬にこしらへ給へど、中君「心地も惱ましくなむ」とて、入り給ひにけり。人の見るらむもいと人わろくて、歎き(一二)あかし給ふ。恨み(一三)むも理なる程なれど、あまりに人憎くもと、つらき涙のおつれば、(一四)まして如何に思ひつらむと、樣々哀に思し知らる。中納言のある

心地もせず、(一)思し歎きたる樣の恥かしかりしを、(二)やがて見なほされ給はずなりにしも、今より後の御心あらたまらむは、かひなかるべく思ひしみて物し給へれば、誰も〳〵いみじう(三)理を聞え知らせつゝ、物越にてぞ、日頃の(四)意盡せず宣ふを、つく〴〵と聞き居給へる。(五)これもいとあるかなきかにて、後れ給ふまじきにやと聞ゆる御けはひの心苦しさを、後めたういみじと宮も思したり。今日は(六)御身を捨ててとまり給ひぬ。匂「(七)物越ならで」といたくわび給へど、中君「今少し物覺ゆる程にて侍らば」とのみ聞え給ひて、つれなきを、中納言も氣色聞き給ひて、さるべき人召出でて、薫「(八)御有樣に違ひて、心淺きやうなる御もてなしの、昔も今も心憂かりける月頃の罪は、さも思ひ聞え給ひぬべき事なれど、(九)憎からぬ樣にこそ勘へ奉り給はめ。(一〇)斯樣なる事まだ見知らぬ御心にて、苦しう思すらむ」など、忍びてさかしがり給へば、いよ〳〵(一一)この君の御心も恥かしうて、え聞え給はず。匂「あさましう心憂くおはしけり。(一二)聞えし樣をもむげに忘れ給ひける事」と、疎かならず歎

(一)中君の匂に捨てられたるを大君が歎きし樣
(二)とう〳〵大君の此恨が解けずして終りしに
(三)匂のもてなしが直りても大君亡くなりて後なればつまらぬと中君が思ひ込み居る故
(四)匂が言譯するを
(五)中君も樣子が危ふげにて引續き死にはせぬかと思はるゝ樣子の
(六)匂が思ひ切つて
(七)ぢかに中君に逢ひたしと
(八)匂の中君の思ふ樣でなく薄情らしき今迄の行に對しては左樣にすねられるのも尤なれど
(九)恨みも愛敬をこぼして言ふがよし
(一〇)匂は此樣な目にはあひつけぬ故さぞ迷惑なるべし
(一一)薫の手前も恥かしくて中君が匂に逢はず
(一二)前に約束した事も忘れて仕舞ひなされしか

(一)思慮深き樣子を見せず
(二)父八宮の遺言に背きたるを大君が歎きて
(三)中君の身の上
(四)大君の
(五)薫の心
(六)大君に
(七)雪踏分けて來るものあらんや
(八)匂宮
(九)門を
(一〇)匂宮の來れる也と知りて
(一一)まだ四十九日たゝぬ故遠慮すべきなれど匂が氣がかりに思ひて
(一二)中君が

み給ふめりしほどに、はかなき御菓子をも聞食し入れず、たゞ弱りになり弱らせ給ふめりし。上べには、何ばかり事々しく(一)物深げにもてなさせ給はで、下の御心の限なく、何事も思すめりしに、(二)故宮の御誡にさへ違ひぬることと、あいなう人の(三)御上を思し惱みそめしなり」と聞えて、折々に宣ひし事(四)など語り出でつゝ、誰も〳〵泣き惑ふこと盡せず。(五)我が心から、味氣なきことを思は(六)せ奉りけむ事と、取り返さまほしく、なべての世もつらきに、念誦をいと哀にし給ひて、まどろむ程なくあかし給ふに、まだ夜深き程の雪のけはひいと寒げなるに、人々聲あまたして、馬の音きこゆ。何人かは、斯かるさ夜中に雪を分くべき(七)、と大德達も驚き思へるに、宮(八)、狩の御衣にいたうやつれて、濡れ〳〵入り給ふなりけり。うち(九)叩き給ふ樣、然な(一〇)ンなりと聞き給ひて、中納言は隱ろへたる方に入り給ひて、忍びておはす。(一一)御忌は日數殘りたりけれど、心もとなく思しわびて、夜一夜雪に惑はされてぞおはしましける。日頃のつらさも紛れぬべき程なれど、對面(一二)し給ふべき

(一)此上なく美麗にせんと作り磨けるも此樣に光りはせぬと
(二)大君が生きて居たら
(三)雪山は藥のある山なれば死ぬる藥もあるべしと也と舊註にいへり
(四)佛雪山童子たりし時夜叉に法を求め給ひしに諸行無常是生滅法の二句を言ひて後半は我飢ゑて言ふ事能はずといひしかば童子我身を汝に與へて食はしめんと約して次の生滅々已寂滅爲樂の二句を聞き鬼の口に身を投げしといふ半偈捨身の故事
(五)法を求むるに托して實は戀の爲なるを心きたなしといへる也
㊅　匂宮宇治へ帀に行く、心解けぬ中の君
(六)薫が
(七)大君を亡くしたる事の殘念さを
(八)大君の
(九)匂宮が思の外中君に冷なるを見て
(一〇)中君には其心配を知られじと

風のいとはげしければ、蔀おろさせ給ふに、四方の山の鏡と見ゆる汀の氷、月影にいとおもしろし。京の家の限なく(一)と磨くも、え斯うはあらぬはや、と覺ゆ。僅に(二)生き出でてものし給はましかば、諸共に聞えまし、と思ひつゞくるぞ、胸よりあまる心地する。

薫「戀ひわびて死ぬるくすり(三)のゆかしきに雪の山にや跡を消なまし

(四)半なる偈教へけむ鬼もがな、ことつけて身も投げむ、と思すぞ、(五)心きたなき聖心なりける。

(六)人々近う呼び出で給ひて、御物語などせさせ給ふけはひなどの、いとあらまほしう、のどやかに心深きを、見奉る人々、若きは心にしめてめでたしと思ひ奉る。老いたるは口惜しう(七)いみじき事をいとゞ思ふ。老女等「(八)御心地の重くならせ給ひしことも、唯(九)この宮の御事を、思はずに見奉り給ひて、人笑へにいみじと思すめりしを、流石にかの御(一〇)かたにはかく思ふと知られ奉らじと、唯御心ひとつに世を恨



かしう淸げなり。人々のぞきつゝ見奉りて、人々「いふかひなき御事ならばさるものにて、この殿のかく見習ひ奉りて、今はと餘所に(一)思ひ聞えむこそ、あたらしう口惜しけれ。思の外なる御宿世(二)にもおはしけるかな。かく深き御心の程を、(三)かたがたに背かせ給へるよ」と泣きあへり。(四)この御方には、薫(五)「昔の御形見に、今は何事も聞え承らむとなむ思ひ給ふる。疎々しく思し隔つな」と聞え給へど、(六)萬の事憂き身なりけりと、物のみつゝましくて、まだ對面して物なども聞え給はず。(七)この君は、(八)けざやかなる方に、(九)今少し見めき、氣高くおはするものから、懷しう匂ある心ざまぞ、(一〇)劣り給へりけると、事に觸れておぼゆ、

雪のかきくらし降る日、終日にながめくらして、(一一)世の人のすさまじき事にいふなる十二月の月夜の、曇なくさし出でたるを、(一二)簾卷きあげて見給へば、向の寺の鐘の聲、枕を欹てて、(一三)「今日も暮れぬ」とかすかなるを聞きて、

薫　おくれじと空ゆく月を(一四)したふかなつひにすむべきこの世ならねば

(一)大君を失ひたる悲は更にも言はず、年來馴れし薫が是ぎり來なくなり給ふが殘念
(二)薫との御縁
(三)中君も大君も
(四)中君
(五)大君の形見として以後萬事御世話申すべしと
(六)中君が
(七)以下薫の中君に對する感
(八)はき／＼した方で
(九)大君よりも
(一〇)大君に
(一一)薫が
(一二)白居易の句、「遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峯雪撥簾看」
(一三)「山寺の入相の鐘の聲ごとに今日も暮れぬと聞くぞ悲しき」
(一四)大君を月に比す

（一）出家せんと
（二）母女三の手前を憚り
（三）中君
（四）「と」衍文歟
（五）大君の言の如く、以下薫の心
（六）中君を大君の形見に
（七）中君に
（八）大君を薫が
（九）薫が手厚く追善供養すれども何分夫婦でもなき事故喪服を著る譯にもゆかぬに、大君に仕へし女等が喪服を著たるを薫が見て
（一〇）悲は深けれども喪服を著られぬが殘念なり
（一一）紅色の薄きをいふ
（一二）紅の衣を擣ちて光澤を出したるが氷の樣に見ゆるなるべしといふ

憂く覺ゆる序に本意（一）遂げむ、と思さるれど、三條（二）の宮の思さむ事に憚り、この君（三）の御事の心苦しさと（四）に思ひみだれて、かの（五）宣ひしやうにて、形見（六）にも見るべかりけるものを、下の心は身を分け給へりとも、移ろふべくは覺えざりしを、かう物（七）思はせ奉るよりは、唯打語らひて、盡きせぬ慰めにも見奉り通はましものを、など思す。かりそめに京にも出で給はず、かき絶え慰む方なくて籠りおはするを、世の人も（八）おろかならず思ひ給へる事と見聞きて、内裏よりはじめ奉りて、御とぶらひ多かり。

はかなくて日頃は過ぎ行く。七日々々の事ども、いと尊くせさせ給ひつゝ、疎な（九）らず孝じ給へど、限あれば、御衣の色のかはらぬを、かの御方の心寄せわきたりし人々の、いと黑う著かへたるをほの見給ふも、

薫　くれなゐ（一〇）におつる涙もかひなきはかたみのいろをそめぬなりけり

（一一）ゆるし色の氷解（一二）けぬると見ゆるを、いとゞ濡しそへつゝ眺め給ふ樣、いとなまめ

（一）存生中の通りの　（二）何の廉で大君を斯く斯くの缺點ありし人として戀しさを醒ます事が出來やうぞ　（三）前に考へし如く佛が我をして此世を捨てしむる爲に大君を與へしものならば、此死骸に怖ろしき處を見せて我悲みをさます様にして下されの　（四）葬式の用意　（五）葬式に行きて驚の茫然たる様　（六）葬式の有様　（七）火葬の烟までが少なかりしが飽氣なしと　㊆薫宇治の宮に籠居す　（八）薫の居る故に多き也　（九）匂宮に捨てられたるを恥かしく思ふ也　（一〇）中君迄が死にさうに見える　（一一）匂宮　（一二）中君が思の外に匂に嫁ぎてやがて捨てられたるを大君がつらく思ひし心が遂に解けずして終りたるを思へば匂宮に訪ねられるもいやなり

御髪をかき遣るに、さと打匂ひたる、（一）たゞありしながらの匂に、懐しう香しきも有りがたう、（二）何事にてこの人を、少しも斜なりしと思ひさまさむ、（三）誠に世の中を思ひ捨て果つるしるべならば、怖ろしげに憂き事の悲しさも、醒めぬべき節をだに見つけさせ給へ、と佛を念じ給へど、いとゞ思ひのどめむ方なくのみあれば、言ふかひなくて、ひたぶるに煙にだになしはててむ、と思ほして、とかく（四）例の作法どもするぞあさましかりける。（五）空を歩むやうに漂ひつゝ、（六）限の有様さへはかなげにて、（七）煙も多くむすぼほれ給はずなりぬるもあへなしと、あきれてかへり給ひぬ。

御忌に籠れる（八）人數多くて、心細さは少し紛れぬべけれど、中の君は（九）人の見思ふらむことも恥かしき身の心憂さを、（一〇）思ひ沈み給ひて、又なき人に見え給ふ。（一一）宮よりも御とぶらひいと繁く奉れ給ふ。（一二）思はずにつらしと思ひ聞え給へりし氣色も思し直らで止みぬるを思すに、いと憂き人の御ゆかりなり。中納言、かく世のいと心



(一)中君の心は心配あるな
(二)大君が
(三)薫
(四)薫の心
(五)我に物思をさせるのかしら
(六)大君が息を引き取りたるは
(七)薫の情
(八)人に愚痴な奴と思はれるのも構つて居られず
(九)中君が途方にくれて居るを
(一〇)死人の側に居るは忌むべき事と
(一一)大君を
(一二)蟲の死體を何時迄も取置きて見る樣にする事が出來るならばと
(一三)人の臨終にする作法、受戒のかたを行ふ也

れば、御おもむけに隨ひ聞えずなりにし。今なむ、くやしう心苦しうも覺ゆる。されども(一)後めたくな思ひ聞え給ひそ」などこしらへて、(二)いと苦しげにし給へば、修法の阿闍梨ども召入れさせ、さま〴〵に驗ある限して、加持參らせ給ふ。(三)我も佛を念ぜさせ給ふこと限なし。(四)世の中を殊更に厭ひ離れねと、すゝめ給ふ佛などの、(五)いと斯くいみじき物は思はせ給ふにやあらむ。見る儘に物の枯れ行くやうにて、(六)消えはて給ひぬるはいみじきわざかな。引き留むべき方なく、(七)足摺もしつべく、(八)人のかたくなしと見む事も覺えず。限と見奉り給ひて、中の君の後れじと思ひ惑ひ給へる樣も、理なり。(九)あるにもあらず見え給ふを、例のさかしき女ばら、今はいと(一〇)ゆゝしき事と、引きさけ奉る。中納言の君は、さりとも、いと斯かる事あらじ、夢かとおぼして、大殿油を近うかゝげて(一一)見奉り給ふに、隱し給ふ顏も、唯寢給へるやうにて、變り給へる所もなく美しげにて、打臥し給へるを、斯くながら、(一二)蟲の骸のやうにても見るわざならましかばと、思ひ惑はる。(一三)今はの事どもするに

(一)髮の毛が
(二)直るものやら直らぬものやらと心配するならまだよけれど、最早其心配をも通り越してとても助からぬものと見ゆるが惜しくてならぬ
(三)氣あつかひして非常にめかして居る女よりも却て美しく
(四)私も此世に生きて居ようとは思はず
(五)跡に殘る中君が心にかゝると
(六)大君に返事させんとて
(七)中君の事を言ひ出す故
(八)如此短命の身なりしに君の御心に背く思ひやりなき奴と君に思はれるのもいやなれば
(九)中君を我と思ひて妻にして下されと申上げしに其通にして下されたらば死でも安心ならんにと
(一〇)跡まで念が殘りさうに
(一一)大君の外には心にとまる女もなかりしかば仰を背かざりし也

られたる、枕より落ち(一)たるきはの、艶々とめでたうをかしげなるも、如何(二)になり給ひなむとするぞと、あるべき物にもあらざゝめりと見るが、惜しき事類なし。ここら久しく惱みて、引きも繕はぬけはひの、心解け(三)ず恥かしげに、限なうもてなしさまよふ人にも多う勝りて、こまかに見る儘に、魂もしづまらむ方なし。薫「遂に打捨て給ひてば、世(四)に暫しもとまるべきにもあらず。命若し限ありて留るべうとも、深き山にさすらへなむとす。唯いと心苦しうて、とまり(五)給はむ御事をなむ思ひ聞ゆる」と、(六)答せさせ奉らむとて、かの(七)御事をかけ給へば、顏かくし給ふ御袖を少し引きなほして、大君「斯(八)くはかなかりける物を、思ひ限なきやうに思されたりつるもかひなければ、この(九)とまり給はむ人を、同じ事と思ひ聞え給へと、ほのめかし聞えしに、違へ給はざらましかば、後安からましと、これのみなむ怨めしき節にて(一〇)とまりぬべく覺え侍る」と宣へば、薫「斯くいみじう物思ふべき身にやありけむ。如何にも如何にも、(一一)ことざまにこの世を思ひかゝづらふ方の侍らざりつ

(一)我は心の限をつくして心配する效なく
(二)我を後にのこして死に行かれなば
(三)大君が人事不省の樣なれど
(四)薫の涙が
(五)他人に見られたくなしと
(六)薫の心
(七)大君のどこかに我が氣に入らぬ所があつてくれゝば其によりて戀の思をさましたしと思ひて見つむれども

がやき隱れぬる程に、いと近う寄りて、薫「いかゞ思さるゝ。(一)心地に思ひ殘すことなく、念じ聞ゆるかひなく、御聲をだに聞かずなりにたれば、いとこそ佗しけれ。(二)後らかし給はばいみじうつらからむ」と、泣く〳〵聞え給ふ。(三)物覺えずなりにたる樣なれど、顏はいとよく隱し給へり。大君「よろしき隙あらば、聞えまほしき事も侍れど、たゞ消え入るやうにのみなりゆくは、口惜しきわざにこそ」と、いと哀と思ひ給へる氣色なるに、いよ〳〵せき留め難くて、ゆゝしう斯く心細げに思ふとは見えじ(五)とつゝみ給へど、聲も(四)惜まれず。(六)如何なる契にて、限なく思ひ聞えながら、つらき事多くて別れ奉るべきにか、(七)少し憂き樣をだに見せ給はばなむ、思ひさます節にもせむ、とまもれど、いよ〳〵哀げにあたらしく、をかしき御有樣のみ見ゆ。肘などもいと細うなりて、影のやうに弱げなるものから、色あひ變らず、白う美しげになよ〳〵として、白き御衣どものなよびかなるに、衾を押しやりて、中に身もなき雛を臥せたらむ心地して、御髪はいとこちたうもあらぬ程にうち遣

(一)尼になるを不似合の事に思ひて薫にも取次がぬ故
(二)大君が
⑯ 薫の看護、大君逝去、葬送
(三)薫が
(四)薫を見舞に來る人もあり
(五)薫が大君の病を大事に思ふ樣子を見て
(六)十一月初の辰の日の宴會
(七)薫が
(八)薫が
(九)大君とは遂に夫婦になれずに終るのかと思へば
(一〇)恨みたくても恨まれぬ大君の仕方故、せめて一寸でも直らせて話がしたし
(一一)陰りくらしたる樣
(一二)日光をひかげ草にかけたり、日かげ草はひかげのかつらともいふ、豊明の節會の時之を冠につけて飾とす
(一三)皆薫の居るを頼みに思へり
(一四)大君の居間に近き處に薫が
(一五)老女等も恥かしく思ひて隠れたる間に大君に近づきて

何にあへなき様に思ひ聞え給はむ」と、(一)似げなき事に思ひて、頼もし人にも申しつがねば、(二)口惜しうおぼす。

かく(三)籠り居給へれば、聞き次ぎつゝ、(四)御訪ひにふりはへ物し給ふ人もあり。(五)疎かに思されぬ事と見奉れば、殿人、親しき家司などは、各々萬の御禱をせさせ歎ききこゆ。(六)豊明は今日ぞかしと、(七)京思ひやり給ふ。風いたう吹きて、雪の降る様あわたゞしう荒れ惑ふ。京にはいと斯うしもあらじかしと、人やりならず(八)心ぼそうて、(九)疎くて止みぬべきにやと、思ふ契はつらけれど、(一〇)恨むべうもあらず、懐しうらうたげなる御もてなしを、唯しばしにても例の様になして、思ひつる事ども語らはばや、と思ひ續けて眺め給ふ。(一一)光もなくて暮れはてぬ。

薫 かきくもり(一二)日かげも見えぬ奥山に心をくらすころにもあるかな

たゞ斯くて(一三)おはするを頼に皆思ひ聞えたり。例の(一四)近き方に居給へるに、御几帳などを、風のあらはに吹きなせば、中の君奥に入り給ふ。見苦しげなる(一五)人々も、か

(一)阿闍梨の寺也
(二)ひまを貰ひて
(三)佛神の咎めなどいふ類の病にもあらざる故
(四)大君自身も平癒を望みて念佛をもせば驗もあるべけれど
(五)以下大君の心
(六)薫
(七)我との間の隔が丸でなくなりたる故
(八)全快の上はいやでも夫婦にならねばならぬ
(九)夫婦になつた上にて今の薫の親切が後に段々薄らぎて互に疎々しくもならばいやな事なり
(一〇)尼になるべし
(一一)只此方法によりてのみ永く薫と相變らずの交際が出來る
(一二)どちらにしても是非尼にならんと、大君の心
(一三)其樣な利口ぶる樣な口は薫にはきけず
(一四)尼になりて受戒する事

れて、(一)おはしましょ御寺にも、御誦經せさせ給ふ。所々に、御禱の使出したてさせ給ひ、公にも私にも、(二)御暇のよし申し給ひて、祭祓、萬にいたらぬ事なくし給へど、(三)物の罪めきたる御病にもあらざりければ、何のしるしも見えず。(四)自らも平らかにあらむと佛をも念じ給はばこそあらめ、(五)猶かゝる序にいかで亡せなむ、(六)この君のかく添ひ居て、(七)殘なくなりぬるを、(八)今はもて離れむ方なし、さりとて、(九)かう疎かならず見ゆる心ばへの見劣りして、我も人も見えむが、心安からず憂かるべき事、もし命強ひてとまらば、病にことつけて、(一〇)かたちをも變へてむ、(一一)さてのみこそ、長き心をも、互に見果つべきわざなれ、と思ひしみ給ひて、(一二)とあるにてもかゝるにても、いかでこの思ふ事してむと思すを、(一三)然までさかしき事はえ打出で給はで、中の君に、大君「心地のいよ／＼頼もしげなく覺ゆるを、(一四)忌む事なむいと驗ありて、命延ぶる事と聞きしを、さやうに阿闍梨に宣へ」と聞え給へば、皆泣き騒ぎて、「いとあるまじき御事なり。斯くばかり思し惑ふめる中納言殿も、如



もこなたに進みたる御心にて、あはれ忍ばれ給はず。中の君、(二)切におぼつかなく
て、(一)奥の方なる几帳の後に寄り給へるけはひを聞き給ひて、(三)あざやかに居なほり
給ひて、薫「不輕の聲はいかゞ聞かせ給ひつらむ。(四)重々しき道には行はぬことなれ
ど、尊くこそ侍りけれ」とて、

薫　霜さゆる汀の千鳥うちわびてなく音かなしきあさぼらけかな

と(五)言葉のやうに聞え給ふ。(六)つれなき人の御けはひにも通ひて、思ひよそへらるれ
ど、答へにくゝて、辨してぞ聞え給ふ。

中君　あかつきの霜うち拂ひなく千鳥(七)もの思ふ人のこゝろをや知る

(八)似つかはしからぬ御代なれど、故なからず聞えなす。(九)斯樣のはかなしごとも、(一〇)つ
つましげなるものから、懷しうかひあるあまに取りなし給ふものを、今はとて別
れなば、いかなる心地せむ、と思ひ惑ひ給ふ。(一一)宮の夢に見え給ひけむ樣思し合す
るに、かう心苦しき(一二)御有樣どもを、天翔りても如何に見給ふらむ、と推しはから

(一)佛法歸依の心にて
(二)大君の樣子を氣にかけて
(三)薫が中君に會釋する也
(四)常不輕は手重き祈禱にはせぬ事なれど
(五)常不輕の聲を折から聞ゆる千鳥の聲に取なしてよめる也
(六)薫の樣子が匂に似た處もありて
(七)物思ふ人は中君自身也
(八)辨が中君の代をつとむるは不似合なれど
(九)薫の心
(一〇)大君は
(一一)八宮の夢にあらはれし樣を薫が考へ合するに
(一二)姫君等の

しば〳〵うちかみて、阿闍梨「いかなる所に(一)おはしますらむ。さりとも(二)涼しき方にぞと思ひやり奉るを、先頃夢になむ見えおはしましゝ。俗の御かたちにて、(三)世の中を深う厭ひ離れしかば、心とまる事なかりしを、(四)聊打ち思ひしことに亂れてなむ、唯しばし願の處を隔たれるを思ふなむ、いとくやしき、(五)勸むるわざせよと、いとさだかに仰せられしを、(六)忽に仕うまつるべき事の覺侍らねば、(七)堪へたるにしたがひて、行し侍る法師ばら五六人して、(八)なにがしの念佛なむ仕うまつらせ侍る。(九)さては思ひ給へ得たること侍りて、(一〇)常不輕をなむつかせ侍る」など申すに、(一一)君もいみじう泣き給ふ。(一二)かの世にさへ妨げ聞ゆらむ罪の程を、(一三)苦しき心地にも、いとど消え入りぬばかり覺え給ふ。いかでかの(一四)まだ定り給はざらむ先にまうでて、同じ所にもと聞き臥し給へり。阿闍梨は言少にて立ちぬ。この(一五)常不輕、そのわたりの里々、京までありきけるを、曉の嵐にわびて、阿闍梨のさぶらふあたりを尋ねて、(一六)中門のもとに居て、いと尊く(一七)つく。(一八)回向の末つ方の心ばへいと哀なり。客人

(一)八宮の死後の在所は何處ならん
(二)極樂に生れ給へるならんと思ひしに
(三)夢中の八宮の詞
(四)娘等の身の上の心配に心が亂れたる爲暫時極樂へゆかれぬのが殘念也
(五)極樂往生をすゝむる功德になる樣な事をしてくれよ
(六)差當り何としてよいか分らぬ故
(七)我の分相應に
(八)稱名念佛などなるべし
(九)其外には我の思ひ附きて
(一〇)法華經不輕品の「我深敬汝等」云々の偈をとなへて廣く禮拜しあるくことを「つかせ」は額づかせ也
(一一)薫
(一二)父の死後迄も妨ぐる自分の罪を
(一三)大君の
(一四)父の未來に生を受くべき場所がまだ定まらぬ中に自分も死にゆきて同じ所に生れたいものと
(一五)常不輕をつとめ歩く僧が
(一六)宇治宮の
(一七)額づく
(一八)回向の爲に唱ふる文句の末の方の意味

(一)日頃の御看病でお疲れなるべし、中君にいふ也
(二)私が夜伽すべし
(三)中君の心
(四)薫が面と向つて大君の顏を見はせねど
(五)大君が
(六)大君の心
(七)薫の心を一方の匂の心に比べて見れば
(八)強情に思ひ遣のなき事はしたくなしと
(九)大君が薫を押しのけず
(一〇)薫が側の人を差圖して
(一一)薫の心
(一二)大君の命を
(一三)曉から勤める番の僧が前のと交代したる
(一四)聲が
(一五)老功で
(一六)八宮

ゆ。薫「日頃見奉り給へらむ御心地も、(一)安からず思されつらむ。今宵だに心安くうちやすませ給へ。宿直人にて(二)さぶらふべし」と聞え給へば、うしろめたけれど、(三)然る樣こそはと思して、少し退き給へり。ひたおもてにはあらねど、(四)這ひ寄りつゝ見奉り給へば、いと苦しく恥かしけれど、(五)かゝるべき契こそありけめと思して、(六)こよなうのどやかに後やすき御心を、(七)かの片つかたの人に見くらべ奉り給へば、あはれとも思ひ知られにたり、空しくなりなむ後の思ひ出にも、心ごはく(八)思ひ隈なからじ、とつゝみ給ひて、はしたなくもえ押し放ち給はず。(九)夜もすがら人を(一〇)そそのかして、御湯など參らせ奉り給へど、露ばかりまゐる氣色もなし。いみじのわざや、如何にしてかはかけ留むべきと、(一二)言はむ方なく思ひ居給へり。(一一)不斷經の曉がたの、居かはりたる聲の(一三)いと尊きに、阿闍梨も夜居に侍ひて睡りたる、うち驚きて陀羅尼よむ。老い(一四)枯れにたれど、いと功づきて(一五)賴もしく聞ゆ。阿闍梨「いかゞ今宵はおはしましつらむ」など聞ゆる序に、故宮(一六)の御事など聞え出でて、鼻

(一)薫の居る方の
(二)大君の居る方
(三)薫が
(四)口をきく積でも
(五)お目にかゝらずに死んで仕舞ふのかと
(六)しやくりあげて
(七)大君が熱氣ある也
(八)何の罪で此樣な病氣にはかゝられしやら
(九)人に恨まるゝ人こそ此樣な目にもあふものなるに
(一〇)口を
(一一)若し此儘死なれたらばどの樣な心持ならん、薫の心

はぬなりけりと、皆思ひて、疎くもてなし隔て奉らず。初夜よりはじめて、法華經を不斷に讀ませ給ふ。聲尊きかぎり十二人して、いと尊し。燈はこなた(一)の南の間に燈して、内(二)は暗きに、几帳をひきあげて、少し(三)すべり入りて見奉り給へば、老人ども二三人ぞさぶらふ。中の君は、ふと隱れ給ひぬれば、いと人少に、心ぼそくて臥し給へるを、薫「などか御聲をだに聞かせ給はぬ」とて、御手をとらへて驚かし聞え給へば、大君「心地(四)には覺えながら、物言ふがいと苦しくてなむ。日頃音づれ給はざりつれば、覺束(五)なくて過ぎ侍りぬべきにやと、口惜しうこそ侍りつれ」と、息の下に宣ふ。薫「かく待たれ奉りつる程まで、參り來ざりける事」とて、さくり(六)もよよとなき給ふ。御首など少し熱く(七)ぞおはしける。薫「何(八)の罪なる御心地にか。人(九)の歎負ふこそかくはあンなれ」と、御耳にさしあてて(一〇)、物をおほく聞え給へば、うるさうも恥かしうも覺えて、顔をふたぎ給へり。いとどなよなよと、あえかにて臥し給へるを、空しう(一一)見なしていかなる心地せむと、胸もひしげておほ

(一)どうかして大君より先に死にたしと切に願ひ居ります
(二)御便りもせざりし氣がかりさ
(三)前々通りし座敷へ
(四)大君の
(五)阿闍梨以外の祈禱の驗ある僧等をも
(六)薫の
(七)あちらの御座敷へと薫を案内して
(八)薫と大君とは既によい中なりと誰も思ひて

え給はず。世に心憂く侍りける身の命長さにて、かゝる事を見奉れば、まづいかで先だち聞えなむと、思う給へ入りて侍り」と、言ひもやらず泣くさま理(一)なり。

薫「などか、斯くとも告げ給はざりける。院にも内裏にも、あさましう事繁き頃にて、日頃も(二)え聞えざりつる覺束なさ」とて、(三)ありし方に入り給ふ。(四)御枕上近くて物聞え給へど、御聲もなき樣にてえ答へ給はず。薫「かく重くなり給ふまで、誰も告げ給はざりけるがつらう、思ふにかひなき事」と恨みて、例の阿闍梨、(五)大方世にしるしありと聞ゆる人のかぎり、數多請じ給ふ。御修法、讀經、明くる日より始めさせ給はむとて、(六)殿人數多參り集ひ、上下の人立ち騷ぎたれば、心ぼそさの名殘なく賴もしげなり。

暮れぬれば、例の「彼方に」(七)と聞えて、御湯漬など參らせむとすれど、薫「近くてだに見奉らむ」とて、南の廂は僧の座なれば、東面の今少し氣近き方に、屏風など立てさせて入り居給ふ。中の君苦しと思したれど、(八)この御中を、猶もてはなれ給

え給へど、匂「暫し。(一)然思う給ふる樣なむ」など聞え否び給ひて、誠につらき目は(二)いかでか見せむなど、思す御心を知り給はねば、(三)月日に添へて物をのみ思す。
中納言も、見しほど(四)よりは、輕びたる(五)御心かな、さりともと思ひ聞えけるもいと(六)ほしく、心から覺えつゝ、をさ〳〵(七)參り給はず。山里(八)には、如何に〳〵と訪ひ聞え給ふ。この月(九)となりては、少し(一〇)よろしうおはすと聞き給ひけるに、公私物さわがしき頃にて、五六日人も(一一)奉り給はぬに、如何ならむと打ち驚かれて、わりなき事の繁きを打ち捨てゝ(一二)まうで給ふ。修法は癒り(一三)はて給ふまでと宣ひ置きけるを、よろしくなりにけるとて、阿闍梨をも返し給ひければ、いと人少にて、例の老人出で來て、御ありさま(一四)聞ゆ。辨「そこ(一五)はかと痛き處もなく、おどろ〳〵しからぬ御惱に、物をなむ更にきこし召さぬ。もとより人に似給はず、あえかにおはします中に、この(一六)宮の御事出で來にし後、いとゞ物思したる樣にて、はかなき御菓物だに御覽じ(一七)入れざりし積にや、あさましう弱くなり給ひて、更に賴むべくも見

(一)暫時待つて下され了簡がある
(二)中君に憂き目は見せぬ
(三)中君方では
⑮ 薫宇治を訪ふ、大君の病篤し、出家の望
(四)薫の心
(五)匂の
(六)中君の爲に
(七)匂へ
(八)薫が宇治へは再々使をやる
(九)十一月
(一〇)大君の病が
(一一)薫が使をやらぬに
(一二)宇治へ
(一三)全快まで續けよと
(一四)大君の容態を話す
(一五)非常に惡き處
(一六)匂宮の關係
(一七)食し給はざりし

につけても、怨めしさ増り給ふ。さばかり世にありがたき御有樣容貌を、いとゞいかで人にめでられむと、好ましく(一)艶にもてなし給へれば、(二)若き人の心よせ奉り給はむも理なり。程經るにつけても戀しう、(三)さばかり所狹きまで契り置き給ひしを、さりとも、いと斯くては止まじ、と思ひ直す心ぞ常に添ひける。御返、「今宵參りなむ」と聞ゆれば(四)、此彼(五)そゝのかし聞ゆれば、たゞ一言なむ、

中君あられふる深山のさとは朝夕にながむるそらもかきくらしつゝ

かく言ふは神無月の晦日なりけり。月(六)も隔たりぬるよと、(七)宮は靜心なく思されて、今宵〳〵と思しつゝ、「(九)障おほみ」なる程に、(一〇)五節など疾く出できたる年にて、內(八)裏わたり今めかしく紛れがちにて、わざともなけれど過い給ふ程に、あさましう待遠なり。(一一)はかなく人を見給ふにつけても、さるは(一二)御心に離るゝ折なし。左の大臣殿のわたりの事、大宮も、大君「なほ然る(一三)のどやかなる御後見をまうけ給ひて、その外の尋ねまほしう思さるゝ人あらば參らせて、重々しくもてなし給へ」と聞

(一)匂が
(二)中君
(三)あの立仰山に約束した中なれば、中君の心
(四)使が
(五)中君を
(六)宇治へ行かずして
(七)匂宮
(八)今夜こそ行かん〳〵と
(九)「湊入の蘆分小船さはり多みわが思ふ人に逢はぬころ哉」
(一〇)五節は十一月中の丑の日にはじまる故中の丑の日が早ければ隨つて早き也
(一一)一寸した戀をするにつけても
(一二)中君が
(一三)六君の如き重々しき本妻を娶りおきて外に氣に入りたる女あらば其をも呼びて [illegible]

(一)匂宮
(二)かく心細き時故
(三)中君
(四)大人しい返事をし給へ
(五)此儘私が死にたらば匂より一層疎末に扱ふ人が出て來て其方を弄ぶ事があらんかと心がかりなれば
(六)匂が稀にも通ふ事になり居らば他からけしからん懸想などをしかけて來る人はあるまじと思ふ故
(七)匂の疎遠なるをつらくは思へど力にして居る
(八)我を殘して姉上が獨り死にゆかんと
(九)壽命はきまつて居るもの故
(一〇)父宮逝去の當時直にも死ぬ樣に思ひしかど
(一一)皆其方の爲
(一二)其方を戀しく思ひて眺むる宮はいつも同じ物なるに、今日の時雨の空にはどういふものか餘計に戀しくてならぬ
(一三)「神無月いつも時雨は降りしかどかく袖ひづる折はなかりき」
(一四)匂の此歌の趣向は陳腐なるを
(一五)大體がだまつても居られぬ位の了簡でよこした歌と思ふ故

國にありけむ香の煙ぞ、いと得まほしく思さるゝ。いと暗うなるほどに、宮(一)より御使あり。(二)折は少し物思ひ慰みぬべし。(三)御方は疾にも見給はず、大君「猶心美しくおいらかなるさまに聞え給へ。(四)斯うではかなうもなり侍りなば、(五)これより名殘なき方に、もてなし聞ゆる人もや出でこむと、うしろめたきを、稀(六)にもこの人の思ひ出で聞え給はむに、さやうなるあるまじき心つかふ人はえあらじと思へば、つらき(七)ながらなむ頼まれ侍る」と聞え給へば、中君「お(八)くらさむと思しけるこそいみじう侍れ」と、いよ〱顔を引き入れ給ふ。大君「限あ(九)れば、片時(一〇)もとまらじと思ひしかど、ながらふるわざなりけりと思ひ侍るぞや。明日知らぬ世のさすがに歎かしきも、誰(一一)がため惜しき命にかは」とて大殿油參らせて見給ふ。例の細やかに書き給ひて、

匂 (一二)ながむるは同じ雲居をいかなればおぼつかなさをそふる時雨ぞ

「(一三)かく袖ひづる」などいふ事もやありけむ、耳(一四)馴れにたるを、(一五)なほあらじ事と見る

ひ續け給ふ。夕暮の空の氣色いとすごくしぐれて、木の下吹きはらふ風の音などたとへむ方なく、來しかた行くさき思ひ續けられて、添ひ臥し給へる樣、(一)あてに限なく見え給ふ。白き御衣に、髮は梳づる事もし給はで程經ぬれど、(二)迷ふ筋なくうち遣られて、日頃に少し青み給へるしも、なまめかしさ勝りて、眺め出し給へるまみ額つきの程も、(三)見知らむ人に見せまほし。(四)晝寢の君、風のいと荒きに驚かされて起きあがり給へり。山吹薄色など花やかなる色あひに、御顏は殊更に染め匂はしたらむ樣に、いとをかしう花々として、聊物思ふべき樣もし給へらず。中君「故宮(五)の夢に見え給へる、いと物思したる氣色にて、(六)このわたりにこそほのめき給へれ」と、語り給へれば、いとゞしく悲しさ添ひて、大君「亡せ給ひて後、いかで夢にも見奉らむと思ふを、更にこそ見奉らね」とて、二所ながらいみじう泣き給ふ。(七)この頃明暮思ひ出で奉れば、(八)ほのめきもやおはすらむ。いかで、おはすらむ處に尋ね參らむ。(九)罪深げなる身どもにて、と後の世をさへ思ひやり給ふ。人の(一〇)

(一)大君の樣
(二)こぐらかりたる毛がなく
(三)物のわかる人に
(四)中君
(五)八宮
(六)此の邊に見えて居られた
(七)大君の心
(八)亡靈が此處らをさまよひなさるのかも知れぬ
(九)斯く罪障多き身故後世も思ひやるらう
(一〇)唐國に昔ありしといふ反魂香がほしく思はる

目もあやにおぼろけならぬ事と人申す」など語りけるを、侍女「然こそ言ひつれ」など、人々の中にて語るを(一)聞き給ふにも、いとゞ胸ふたがりて、(二)今は限にこそあゝなれ、(三)やむごとなき方に定まり給はぬほどの、なほざりの御すさびに斯くまで思しけむを、さすがに中納言などの思はむ所を(四)思して、(五)言の葉のかぎり深きなりけり、と思ひなし給ふに、ともかくも(六)人の御つらさは思ひ知られず、いとゞ身の置き所なき心地して、しをれ臥し給へり。(七)弱き御心地は、いとゞ世に立ち留るべうも覺えず。(八)恥かしげなる人々にはあらねど、(九)思ふらむところ苦しければ、聞かぬやうにて寝給へるを、姫君、物思ふ時のわざと聞きし、轉寝の御様のいとらうたげにて、肘を枕にて(一〇)寝給へるに、御髪のたまりたる程など、ありがたう美しげなるを(一一)見やりつゝ、親の(一二)諫めし言の葉も、返すぐ〳〵思ひ出でられ給ひて悲しければ、(一三)罪深かゝなる底にはよも沈み給はじ、何處にも何處にも、(一四)おはすらむ方にむかへ給ひてよ、斯ういみじく物思ふ身どもを打棄て給ひて、夢にだに見え給はぬよ、と思

(一)大君が
(二)大君等の心
(三)中君へ通ひしは六君を貰ふ迄の一時の慰であつたのに
(四)匂が
(五)口先ばかり深い樣な事を言ふのであつた
(六)匂の薄情をば考へられず
(七)大君の
(八)侍女等は
(九)彼等の
(一〇)中君の
(一一)大君が
(一二)めつたに夫を持つなと戒めし事
(一三)父は地獄に往生などはし給ふまじ、大君の心
(一四)父の居る處へ引取りて下され

はむ程に」とて、いとかすかに哀なるけはひを限なう(一)心苦しうて歎き居給へり。さすがに徒然とかくておはし難ければ、いとうしろめたけれど(二)歸り給ふ。薫「かゝる御住居は猶苦しかりけり。(三)處去り給ふにことよせて、さるべき處に移ろはし奉らむ」など(四)聞えおきて、阿闍梨にも、御禱心に入るべく宣ひ知らせて、出で給ひぬ。

この君の御供なる人の、いつしかと、(六)こゝなる若き人を語らひよりたるありけり。(五)己がじしの物語に、(七)薫「かの宮の御忍びありき制せられ給ひて、内裏にのみ籠りおはします事。(八)右の大臣殿の姫君をなむ、(九)あはせ奉り給ふべかゝなるを、(一〇)女方は年頃の御本意なれば、思し滞ることなくて、年の内に(一一)ありぬべかゝなり。宮は澁々に思して、(一二)内裏わたりにも、たゞに好きがましき事に御心を入れて、帝后の御いましめに靜まり給ふべくもあらざゝめり。(一三)我が殿こそ、猶あやしう人に似給はず、あ(一四)まりまめにおはしまして、人にはもて惱まれ給へ。(一五)こゝにかく渡り給ふのみなむ、

(一)薫が
(二)薫が
(三)物怪などは場所を換ふれば立去る事もあるもの故場所をかへるにかこつけて
(四)辨などに言ふなるべし

㊃ 大君等の憂愁、匂宮なほ宇治を訪はず

(五)薫
(六)宇治の侍女に情を通じたる者あり
(七)匂宮
(八)夕霧
(九)匂に
(一〇)夕霧方は其が年來の希望故
(一一)婚禮が
(一二)内裏に居ても浮氣ばかりして居て
(一三)薫
(一四)正直で人に厄介がられる
(一五)宇治通ひばかりは思も寄らぬ事で、一通りの御執心ではあるまいと人が噂する

(一)匂との關係は決して御心配になる様な事はない筈
(二)匂の事まで取持口をきくのも
(三)大君が
(四)薫の如き他人が側に居るを
(五)其が心配で來た私を追出さうとなさるは迷惑
(六)大君の心
(七)わざとでも死にたく思ふ我身なるに祈禱でもあるまじと思へど
(八)人の親切を思ひ遣りなく斷るも
(九)矢張り此身の病が直れかしと大君の思へるも
(一〇)昨日の様な體裁で御話がしたし
(一一)薫の心
(一二)前々よりは薫を大君がなつかしがる様子の見えるが心配故、病の重くなりて弱りたるならんと思はるれば也
(一三)御話が出來ぬ

よ。(一)後めたうは世にあらじとなむ思ひ侍る」など、(二)人の御上をさへ扱ふも、かつは怪しく覺ゆ。夜々はましていと苦しげにし給ひければ、(四)疎き人の御けはひの近きも、中の君の苦しげに(三)思したれば、侍女「猶例のあなたに」と人々聞ゆれど、薫「ましてかく煩ひ給ふほどの覺束なさを、(五)思ひのまゝに參りきて、いだし放ち給へれば、いとわりなくなむ。かゝる折の御あつかひも、誰かははか〴〵しく仕うまつる」など、辨のおもとに語らひ給ひて、御修法ども始むべき事など宣ふ。(六)いと見苦しう、(七)殊更にもいとはしき身を、と聞き給へど、(八)思ひ限なく宣はむもうたてあれば、(九)流石にながらへよと、思ひ給へる心ばへも哀なり。又のあしたに、薫「少しもよろしく思さるや。(一〇)昨日ばかりにてだに聞えさせむ」とあれば、大君「日頃經ればにや、今日はいと苦しうなむ。さらば此方に」と言ひ出したまへり。(一一)いと哀に、いかに物し給ふべきにかあらむ、(一二)ありしよりはなつかしき御氣色なるも、胸つぶれて覺ゆれば、近う寄りて萬の事を聞え給ふ。大君「苦しうて(一三)え聞えず。少しためら

㊂ 薫、大君の病を訪ふ
(一)宇治
(二)矢張り匂に棄てられたるならんと
(三)薫
(四)大君の病氣をきゝて見舞へる也
(五)大君が病氣にかこつけて
(六)御病床の側へ入れて貰ひたし
(七)大君が
(八)不あしらひもせず
(九)匂が船遊の折に中君を訪ひ得ざりし故不滿足で歸られし樣子など
(一〇)ゆつくり構へて居よ、あせつて恨みなどしてはならぬ
(一一)妹は何とも言つては居らぬ
(一二)物は一樣にはゆかぬものなるに
(一三)無經驗のあなた方は

(一)待ち聞え給ふ所は、絶間遠き心地して、猶かうなンめりと心ぼそう眺め給ふに、中(二)納言おはしたり。惱ましげにし給ふと聞きて、御とぶらひなりけり。いと心地惑(三)ふばかりの御惱にもあらねど、ことつけて對面し給はず。薫「(四)驚きながら、遙けき程を參り來つるを、猶かの惱み給ふらむ御あたり近く」と、切に覺束ながり聞え給(五)へば、打解けて住ひ給へる方の御簾の前に入れ奉る。いとかたはらいたきわざ(六)と、苦しがり給へど、氣憎くはあらで、御頭もたげ御答など聞え給ふ。宮の御心(七)(八)も行かでおはし過ぎにし有樣など語り聞え給ひて、薫「のどかにおぼせ。心いられ(九)(一〇)してな恨み聞え給ひそ」など教へ聞え給へば、大君「こゝには、ともかくも聞え給は(一一)ざンめり。亡き人の御諫はかゝる事にこそと見侍るばかりなむ。いとほしかりけ
る」とて、泣き給ふ氣色なり。いと心苦しう、我さへ恥かしき心地して、薫「世の中はとてもかくでも、ひとつさまにて過す事難くなむ侍るを、如何なる事をも御(一二)(一三)覽じ知らぬ御心どもには、偏に怨めしなど思す事もあらむを、強ひて思しのどめ

（一）一部分だけを匂が見て
（二）眞の同胞でなく少しでも隔のある中ならば只は置くまじきにと
（三）同胞故戀をしかける譯にはゆかぬが君の美しさには心がひかされる
（四）女一方の侍女
（五）匂宮
（六）いふべき事もあらんに、かゝる事を歌によむとはけしからん、女一の心
（七）女一のだまり居るを匂が尤と思ひて
（八）匂と女一とをなじませて育てし故
（九）明石姫が女一を非常に大事にして
（一〇）使はるゝ女ども
（一一）侍女の中に
（一二）匂の移り氣なる事は「やすき」は「やすさ」の誤なるべし
（一三）女一の侍女に常座の關係などが出來て
（一四）中君

覽ずるに、御髪のうち靡きて、こぼれ出でたるかた（一）そばばかり、ほのかに見奉り給ふが、飽かずめでたく、少（二）しも物へだてたる人と、思ひ聞えましかば、と思すに忍びがたくて、

匂　若草（三）のね見むものとは思はねどむすぼほれたるこゝちこそすれ

御前（四）なりつる人々は、この宮（五）をば殊に恥ぢ聞えて、物の後に隱れたり。（六）事しもこそあれ、うたて怪し、と思せば、物も宣はず。理（七）にて、「うらなくものを」と言ひたる姫君も、ざれて憎くおぼさる。紫の上の、とりわきて、この二（八）所をばならはし聞え給ひしかば、數多の御中に、隔なく思ひかはし聞え給へり。世（九）になくかしづき聞え給ひて、侍（一〇）ふ人々も、かたほに少しあかぬ所あるは、はしたなげなり。やむごとなき人の御女などもい（一一）と多かり。御（一二）心の移ろひやすきは、珍（一三）らしき人々に、はかなく語らひつきなどし給ひつゝ、かの（一四）わたりを思し忘るゝ折なきものから、音づれ給はで日頃經ぬ。

物語聞え給ふ。(一)限もなくあてに氣高きものから、なよびかにをかしき御けはひを、年頃(二)二つなきものに思ひ聞え給ひて、(三)又この御有樣になずらふ人世にありなむや、冷泉院の姫宮ばかりこそ、御おぼえの程内々の御けはひも、心にくゝ聞ゆれど、(四)うち出でむ方もなく思しわたるに、かの(五)山里人は、らうたげにあてなる方の劣り聞ゆまじきぞかし、など先づ思ひ出づるに、いとゞ戀しさまさる慰めに、御繪どもの數多散りたるを見給へば、をかしげなる(六)女繪どもの、戀する男の住居など書きまぜ、山里のをかしき家居など、心々に世の有樣書きたるを、(七)よそへらるゝ事多くて、御目とまり給へば、(八)少し聞え給ひて、彼處へ奉らむと思す。(九)在五が物語書きて、妹に琴教へたる所の、(一〇)「人の結ばむ」と言ひたるを見て、いかゞ思すらむ、(一一)少し近く參り寄り給ひて、匂「古の人も、(一二)さるべき程は、隔なくこそならはして侍りけれ。いと疎々しうのみもてなさせ給ふこそ」と、忍びて聞え給へば、如何なる繪にかと(一三)思すに、(一四)おし卷きよせて、御前にさし入れ給へるを、(一五)うつぶして御

(一)女一の樣子
(二)匂が
(三)匂の心、女一に並ぶ美人は此世にあるまじ
(四)冷泉の姫宮に戀を打明くる機會なくて
(五)中君
(六)女をかきたる繪
(七)匂の我が境遇に比較せらるゝ事
(八)少し女一から貰ひ受けて中君へ贈らんと
(九)伊勢物語、在五は業平
(一〇)伊勢物語「昔男妹のいとをかしげなるを見居りて、うら若みねよげに見ゆる若草を人の結ばん事をしぞ思ふ、返し、初草のなどめづらしき言の葉ぞうらなく物を思ひける哉」
(一一)匂が女一の方へ
(一二)親しかるべき同胞の間柄などは
(一三)女一が
(一四)匂が
(一五)女一が

さるべき契やありけむ、親王(一)の後めたしと思したりし樣も哀に忘れ難く、(二)この君達の御有樣けはひも異なる事なくて、世に衰へ給はむ事の、惜しくも思ゆる餘に、(三)人々しうもてなさばやと、あやしきまで持て扱はるゝに、(四)宮も生憎に(五)とりもちて責め給ひしかば、(六)我が思ふかたは異なるに、讓らるゝ有樣もあいなくて、かくもてなしてしを思へば、怪しくもありけるかな、(七)いづれも我が物にて見奉らむに、咎むべき人も無しかし、取り返すものならねどをこがましう、心ひとつに思ひ亂れ給ふ。(八)宮は、まして御心にかゝらぬをりなく、(九)戀しううしろめたしと思す。明石姫「(一〇)御心につきて思す人あらば、此處にまゐらせて、例ざまにのどやかにもてなし給へ。(一一)筋殊に思ひ聞え給へるに、輕びたるやうに人の聞ゆべかめるも、いとなむ口惜しき」と、大宮は旦暮聞え給ふ。

時雨いたくしてのどやかなる日、(一二)女一宮の御方に參り給へれば、(一三)御前に人多くもさぶらはず、しめやかに、御繪など御覽ずる程なり。御几帳ばかり隔てて、御

(一)八宮が姫君等の身の上を心配したる樣子も
(二)大君中君の樣子もよい故
(三)人並の生活をさせたいものぢやと
(四)匂宮
(五)脇目もふらず中君の事ばかりを責められし故
(六)自分は大君を思ひ掛けて居るのに彼方から中君に乘換へよと言はるゝのが面白からずして匂に取持ちたる始末を思へば
(七)姉妹とも我物にして居ても
(八)匂宮
(九)中君を
(一〇)其方の御氣に入りの女があらば、手元へ呼び迎へて當前に落附いて居られよ
(一一)其方を東宮にも立つべき帝の思召なるに
● 匂宮、女一宮の侍女に戲れてやゝ宇治に疎し
(一二)匂の同胞
(一三)匂が

かで人々しう(一)も見なし奉らむと、思ひ扱ふをこそ、人知れぬ行先の頼にも思ひつれ、限(二)なき人にものし給ふとも、かばかり人笑へなる目を見てむ人の(三)、世の中に立ちまじり、例の人ざまにて經給はむは、類少く心憂からむ、など思し續くるに、いふかひもなく、この世にも聊思ひ慰む方なくて過ぎぬべき身どもなゝめり、と心細くおぼす。

宮は、立ち(五)かへり例のやうに忍びて、と出立ち(六)給ひけるを、内裏に、衞門(七)「かゝる(四)御忍び事により、山里の御ありきも、ゆくりかに思し立つなりけり。輕々しき御有樣と、世人も下に譏り申すなり」と、衞門(八)督の漏し申し給ひければ、中宮も聞召し歎き、上(九)もいとゞ許さぬ御氣色にて、帝「大方心に任せ給へる御里住のあしきなり」と、嚴しき事ども出で來て、内裏(一〇)につとさぶらはせ奉り給ふ。左の大臣殿(一一)の六の君を、うけ(一二)ひかず思したる事なれど、押したちて參らせ給ふべく皆定めらる。中納言殿聞き給ひて、あいなく物を思ひありき給ふ。(一三)我があまり異樣なるぞや、

(一)どうかして人竝の生活をさせて見たしと
(二)相手が匂の如き貴き人でも
(三)中君
✪匂宮嚴しく監督せらる、薰の後悔
(四)匂宮
(五)取つてかへして
(六)宇治へ
(七)中君の關係故
(八)不意に
(九)今上
(一〇)匂を内裡に始終住まはせる
(一一)夕霧
(一二)匂は不承知なれど強ひて娶らせる事に定めらる
(一三)自分は餘り偏屈ぢやわい、以下「をこがましう」まで薰の心

とゞしく哀と見奉り給ふ。(一)我も世にながらへば、斯う樣なる事見つべきにこそはあンめれ、(二)中納言の、とざまかうざまに言ひありき給ふも、人の心を見むとなりけり、(三)心ひとつに持て離れて思ふとも、こしらへやる限こそあれ。(四)在る人のこりずまに、かゝる筋のことをのみ、いかでと思ひたンめれば、心より外に、遂にもてなされぬべかンめり、これこそは、返す〴〵、(五)さる心地して世をすぐせ、と(六)宣ひおきしは、かゝる事もやあらむのいさめなりけり、(七)さもこそは憂き身どもにて、さるべき人々にも後れ奉るらめ、(八)やうのものと人笑へなる事を添ふる有樣にて、なき御影をさへ惱まし給ふらむがいみじさ、(九)猶我だに、さる物思にしづまず、罪などいと深からぬ前に、いかで亡くなりなむ、と思し沈むに、心地も誠に苦しければ、(一〇)物も露ばかり參らず、たゞ亡からむ後のあらましごとを、旦暮思ひ續け給ふに、(一一)物心細くて、この君を見奉り給ふもいと心苦しう、(一二)我にさへ後れ給ひて、如何にいみじう慰む方なからむ、あたらしくをかしき樣を、(一三)旦暮の見物にて、い

(一)大君の心
(二)薫が色々と口說くのも氣を引いて見るのぢや
(三)自分丈聽かぬ氣で居てもさう〳〵逃げ口上も續かぬ
(四)辨等は匂の事に懲りもせず夫を持たせる事のみ考へ居る故、遂には厭でも夫を持たせられるかも知れぬ
(五)用心して
(六)父が
(七)いくら運惡き身で父母に死後れたりとも
(八)我も妹も同じ樣に人に笑はれる樣な身になりて父母の死後にまで心配をかける氣の毒さ
(九)自分丈でも男の心配せず
(一〇)少しも食せず
(一一)中君
(一二)大君の心
(一三)中君の樣

とつゝましう、所せかるべきものと思ひしは、さしもあるまじきわざなりけり、あだめき給へるやうに故宮も聞き傳へ給ひて、かうやうに氣近き程までは、(一)思し寄らざりしものを、怪しきまで心深げに宣ひわたり、思の外に(二)見奉るにつけてさへ、身の憂さを思ひ添ふるが、味氣なくもあるかな、(三)かう見劣する御心を、かつはかの中納言も如何に思ひ給ふらむ、(四)こゝにも殊に恥かしげなる人はうち交らねど、各思ふらむが、人わらへにをこがましき事、と思ひ亂れ給ふに、心地も違ひて、いと惱ましうおぼえ給ふ。(五)正身は、たまさかに(六)對面し給ふ時、限なく深きことを賴め契り給へれば、然りとも(七)こよなうは思し變らじと、覺束なきも、わりなき障こそは物し給ふらめと、心の中に思ひ慰め給ふ方あり。(八)程經にけるが思ひ入られ給はぬにしもあらぬに、なか〳〵にて打過ぎ給ひぬるを、つらうも口惜しうも思ほゆるに、いとゞ物あはれなり。(九)しのびがたき御氣色なるを、(一〇)人竝々にもてなして、例の人めきたる住居ならば、斯う樣にもてなし給ふまじきをなど、姉君はい

(一)匂は浮氣者と父も聞きて娘の聟にせん積はなかりしに
(二)中君の聟にしたるにつけても
(三)匂が中君を見劣りして棄て氣味なるを薫が何と思ふならん
(四)我方には格別自分が恥かしがるべき程の人も居らねど
(五)中君
(六)匂に
(七)匂がさう丸で心變りする事はあるまじと
(八)匂の久しく來ぬのが氣にかゝらぬではない所へ、なまじ近所へ來て寄らずに歸りしを
(九)中君が
(一〇)人竝に中君をかしづく事が出來て人竝の住居をして居る身分ならば斯く匂が立寄らぬ事もあるまじきに、大君の心

匂（一）秋はててさびしさまさる木のもとを吹きなすぐしそ峰の松風

とて、いたう涙ぐみ給へるを、ほのかに知る人は、實にふかく（二）思すなりけり、今（三）日の便を過し給ふ御心苦しさと、見奉る人あれど、（四）ことぐ\しく引き續きて、えおはしまし寄らず。作りける文どもの、おもしろき所々うち誦じ、倭歌もことにつけて多かれど、かやうの醉泣の紛れに、ましてはかぐ\しき事あらむやは。片端書き留めてだに、見苦しくなむ。

（五）彼處には、（六）過ぎ給ひぬるけはひを、遠うなるまで聞ゆるさきの（七）聲々、たゞならず覺え給ふ。（八）心設しつる人々も、いと口惜しと思へり。姫君はまして、（九）猶音に聞く（一〇）月草の色なる御心なりけり、ほのかに人の言ふを聞けば、男といふものは、虛言をこそいとよくすなれ、思はぬ人を思ひ顏にとりなす言の葉多かるものと、この人數ならぬ（一一）女ばらの、昔物語に言ふを、さる（一二）なほぐ\しき中にこそは、けしからぬ心あるもまじるらめ、何事も（一三）筋ことなる際になりぬれば、人の聞き思ふこ

（一）峰の松風も姫君等の寂しき住居に對して心あれと也
（二）匂が中君を
（三）今日のよき機會をはづしなさるが氣の毒と
（四）餘り立派な御供廻り故宇治宮へ立寄り得ず
⊕大君姉妹の憂愁
（五）中君方
（六）立寄らずに立去りたる匂の樣子を
（七）先拂の聲
（八）匂を待ち受くる用意
（九）以下大君の心、匂は矢張評判通りの移り氣な人ぢやわい
（一〇）「いで人は言のみぞよき月草のうつし心は色ことにして」月草の色はうつりやすきものの喩
（一一）宇治宮の侍女等
（一二）下々の男女の中ならば其樣な不埒な男も居るならんが
（一三）貴き身分の人は外聞を恥ぢて其樣な事は出來ぬものと思ひしは間違であつた

人の御上は、かゝる山がくれなれど、自ら聞ゆるものなれば、人々「いとをかしけ(一)にこそ物し給ふなれ(二)。箏の琴上手にて、故宮の旦暮遊びならはし給ひければ」など、口々に言ふ。宰相中將、

いつぞやも花のさかりにひとめ見し木の本(三)さへや秋はさびしき

あるじ方と思ひて言へば(四)、中納言、

薫　櫻こそおもひ知らすれさきにほふ花ももみぢもつねならぬ世を

衛門督、

いづこよりあきはゆきけむ(五)山里の紅葉のかげは過ぎ憂きものを

宮の大夫、

見し人(六)もなき山里のいはがきにこゝろながくも這へるくずかな

中(七)に老いしらひてうち泣き給ふ。親王(八)の若くおはしける世の事など、思ひ出づるなゝめり。宮、

(一)すべて人の身の上といふものは
(二)宇治の姫君は美しいといふ事ぢや
(三)木の本は宇治宮をいふ
(四)薫を宇治姫君方の人と思ひて薫によみかけたれば
(五)我は是程こゝを立ち去りがたく思ふに、秋はどこからこゝを立ち去りし事やら
(六)見し人は八宮をいふ、大夫は老人にて八宮をも見し人なる事次の文にて知らる
(七)大夫は此中での老人にて
(八)八宮

(一)中君の遠慮也
(二)自分如きつまらぬ身分の者では、中君の心
(三)離れて居て逢はれぬは
(四)中君が
(五)氷魚迄も匂宮に靡くと見えて多く捕れたるを人々が紅葉を下敷にして玩ぶを、氷魚には紅葉を敷く事故實なりとぞ
(六)匂がお附合に面白さうなる顔はすれど
(七)宇治宮
(八)なまじ約束して置いて行かれぬとは歎かはしい事ぢやと薫も思ふ
(九)宇治の姫君等が父に別れてこゝに住み居る心細さを噂し合ふ
(一〇)匂が

れど、人目(一)しげく騒がしからむにとて、御返なし。数ならぬ有樣にては、めでたき御あたりに交らはむ、かひなきわざかな、といとゞ思し知り給ふ。(二)餘所にて隔たる月日は、(三)覺束なさもことわりに、さりともなど慰め給ふを、近き程にのゝしりおはして、つれなく過ぎ給ふなむ、つらくも口惜しくも思ひ(四)亂れ給ふ。宮はまして、いぶせくわりなしと思すこと限なし。網代の(五)氷魚も心よせ奉りて、いろいろの木の葉にかきまぜ弄ぶを、下人などはいとをかしき事に思へれば、人に(六)從ひつゝ、心ゆく御ありきに、自らの御心地は、胸のみつとふたがりて、空をのみ眺め給ふに、この(七)古宮の梢は、いとことに面白く、常盤木に這ひまじれる蔦の色なども、物ふかげに見えて、遠目さへすごげなるを、中納言の君も、なか〳〵(八)たのめ聞えけるを、うれはしきわざかな、と覺ゆ。去年の春御供なりし君達は、花の色を思ひ出でて、(九)後れてこゝに眺め給ふらむ心細さを言ふ。かう忍び〳〵に通ひ(一〇)給ふと、ほの聞きたるもあるべし。心知らぬもまじりて、大方に、とやかくやと、

(一)「いかなれば近江の海ぞかゝるてふ人を見るめのたえて生ひねば」
(二)中君がさぞ待遠しがり居るならんと
(三)作りたる詩を
(四)騒ぎが鎭まりたらば宇治宮へ行かんと
(五)其積で匂に打合せ居る中に
(六)夕霧の子
(七)宮樣の出あるきは、以下勅使の來たる譯を説明する也
(八)中宮が
(九)衛門督が
(一〇)匂が極りわるくなれり
(一一)御伴の人々が
(一二)今日は終日遊びたしと匂が思ふに
(一三)中宮大夫其他の殿上人
(一四)中宮より御迎へに遣はされたり
(一五)匂が
(一六)匂が中君へ
(一七)匂の文の趣也

して、「海仙樂」といふものを吹きて、おの〳〵心ゆきたる氣色なるに、宮は(一)「あふみの海」の心地して、(二)遠方人の怨み如何にとのみ、御心空なり。時につけたる題出して、うそぶき(三)誦しあへり。(四)人のまよひ少し鎭めておはせむと、中納言も思して、(五)さるべきやうに聞え給ふほどに、内裏より、中宮の仰言にて、宰相の兄の(六)衛門督、こと〴〵しき隨身ひき連れて、うるはしき樣して參り給へり。(七)かうやうの御ありきは、忍び給ふとすれど、自ら事ひろごりて、後の例にもなるわざなるを、重々しき人數あまたもなくて、俄におはしましにけるを、(八)聞召しおどろきて、殿上人あまた具して(九)參りたるに、(一〇)はしたなくなりぬ。宮も中納言も苦しと思して。物の興も無くなりぬ。御心のうちをば知らず、(一一)醉ひみだれて遊びあかしつ。(一二)今日はかくてと思すに、(一三)又宮の大夫さらぬ殿上人など、あまた(一四)奉れ給へり。(一五)心あわたゞしくて、口惜しく、かへり給はむ空なし。(一六)彼處には御文をぞ奉れ給ふ。(一七)をかしやかなる事もなく、いとまめだちて、思しける事どもを細々と書き續け給へ





(一)姬君等の御有樣を
(二)宇治にて待受の用意をする也
(三)綺麗にし
(四)薫より
(五)斯く何もかも薫の世話になるのも手許を見すかされる樣でいやなれど、大君の心
(六)匂の船遊びの騷ぎを大君等の聞き居る也
(七)匂宮
(八)匂に
(九)立派なるを
(一〇)織女星の樣に年に一度位の逢瀨でも夫を持つなら此樣な人を持つべきぢやと、姬君等の心
(一一)詩
(一二)匂の御供に
(一三)岸に
(一四)濃淡樣々の紅葉を冠の飾にさして

に尋ね參り來し是彼、かゝる使にことよせて、時雨の紛に見奉り顯すやうもぞ侍(一)る」など、こまやかに聞え給へり。御簾かけかへ(二)、此處彼處かき拂ひ、岩がくれに積れる紅葉の朽葉少しはるけ(三)、遣水の水草はらはせなどぞし給ふ。よしある菓物、さかななど、さるべき人なども奉れ給へり(四)。(五)かつはゆかしげなけれど、如何はせむ、これも然るべきにこそは、と思ひ許して、心まうけし給へり。

(六)船にてのぼりくだり漕ぎめぐり、おもしろく遊び給ふも聞ゆ。ほのぼの有樣見ゆるを、そなたに立出でて、若き人々見奉る。(七)正身の御有樣はそれと見わかねども、紅葉を葺きたる船の飾の錦と見ゆるに、聲々吹き出づる物の音ども、風につきておどろおどろしきまで覺ゆ。世の人の靡き(八)かしづき奉る樣、かく忍び給へる道にもいと殊に(九)、いつくしきを見給ふにも、實に七夕ばかりにても(一〇)、かゝる彥星の光をこそ待ち出でめ、など覺えたり。(一一)文作らせ給ふべき心まうけに、博士なども侍ひ(一二)けり。黃昏時に、御船さし寄せて(一三)遊びつゝ、文つくり給ふ。(一四)紅葉を薄く濃くかざ

(一)明石中宮
(二)一時匂が警戒されるのは氣の毒なれど
(三)たまに宇治へ行きても
(四)甘く計らつて上げたいものぢや
(五)殊に構ふものもあるまじと思ひて
(六)大君を引取る用意に
(七)當方よりも差當り其方に用ふべき處あるべしとて
(八)特に造りて宇治へ贈りたり

❾ 匂宮宇治に船遊す、中君に逢はんとして得ず

(九)薫が匂を
(一〇)宇治の
(一一)前の藏人少將
(一二)薫
(一三)宇治
(一四)其御邸に匂が
(一五)然るべく御用意あれ

かゝめるも、心苦しくて、忍びて斯く通ひ給ふよしを、中宮(一)などにも漏し聞しめさせて、(二)しばしの騷がれはいとほしくとも、女がたの御爲は咎もあらじ、(三)いとかく夜をだに明しはて給はぬ苦しげさよ、(四)いみじくもてなしてあらせ奉らばや、など思ひて、強にも隱ろへず、更衣など、(五)はかゞしく誰かはあつかふらむ、など思して、御帳の帷子、壁代など、三條の宮つくりはてて、(六)渡り給はむ心まうけに、しおかせ給へるを、「(七)まづ然るべき用なむ」など、いと忍びて聞え給ひて奉れ給ふ。樣々なる女房の裝束、御乳母などにも宣ひつゝ、(八)わざともせさせ給ひけり。

十月一日頃、網代もをかしき程ならむと、(九)そゝのかし聞え給ひて、(一〇)紅葉御覽ずべく申しさだめ給ふ。親しき宮人ども、殿上人の睦まじく思すかぎり、いと忍びてとおぼせど、所せき御勢なれば、自ら事ひろごりて、左の大殿の(一一)宰相中將も參り給ふ。さてはこの(一二)中納言殿ばかりぞ、上達部は仕う奉り給ふ。たゞ人は多かり。彼處(一三)には、論なう(一四)中宿し給はむを、(一五)さるべき樣に思せ。さきの春も、花見

(一)姫君等が
(二)中君等は匂との中が末始終どうなるかしらと
(三)以下匂の心
(四)人目につかぬ樣に中君の居るべき處もなし
(五)夕霧
(六)是非匂に遣らんと思ひし夕霧の六女を匂が受附けぬ故
(七)匂の行跡をきびしく夕霧が批難して
(八)六君を匂に遣りたき由願ふらしき故
(九)人の氣受もよくなき中君を引出して妻にするも
(一〇)一通りのてかけ妾は奉公人故却つて扱ひやすし
(一一)帝や中宮の計畫通り自分が東宮になる事もあらば中君を女御にもすべし抔と
(一二)行末は知らず現在は
(一三)中君の事が
(一四)普請が濟んでから大君を引取らんと思ふ
(一五)以下薫の心
(一六)匂が
(一七)匂と中君と

みじく思したる御心のうちを(一)知り給はねば、(二)女方には、如何ならむ、人わらへにや、と思ひ歎き給へば、實に心盡しに苦しげなるわざかなと見ゆ。(三)京にもかくろ(四)へて渡り給ふべき所も流石になし。六條院には、(五)左の大殿、片つ方に住み給ひて、(六)然ばかりいかでかと思したる六の君の御事を、思し寄らぬに、なま恨めしと思ひ聞え給ふべかゝめり。すきぐ＼しき御樣と(七)許しなくそしり聞え給ひて、内裏わたりにも(八)うれへ聞え給ふべかゝめれば、いよ＼／(九)覺なくて出しすゑ給はむも、憚る事いと多かり。(一〇)なべてに思す人のきはは、宮仕の筋にて、なか＼／心やすげなり、さやうの並々には思されず、若し世の中うつりて、(一一)帝后の思しおきつる儘にもおはしまさば、人より高き樣にこそなさめなど、(一二)たゞ今は、いと花やかに、(一三)御心にかゝり給へるまゝに、もてなさむ方なく、苦しかりけり。中納言は、三條の宮(一四)造りはてて、さるべき樣にて渡し奉らむと思す。(一五)實にたゞ人は心やすかりけり、かくいと心苦しき(一六)御氣色ながら、安からず忍び給ふからに、(一七)互に思ひ悩み給ふべ

(一九)匂の中君に對する熱心と自分が匂の態度を注意して居る樣子を語る
(一)甚だつらく大君が思ふならんと薫が思ひて
(二)薫の心
(三)他人に
(四)薫
(五)此前の樣に近づきて話がしたし
(六)此頃の衰へをいふ
(七)薫に顔を見せて愛想をつかされるのも
(八)薫がまだ他人あしらひにされて居ることは思ひも寄らず
(九)匂の無理な首尾して來ては直ぐ歸るを中君等が不滿足なるに

かく物思加ふる程過し、心地もしづまりて聞えむ」と宣ふ。人にくゝ氣遠くはもて離れぬものから、障子のかためもいと強し。強ひて破らむをば、(一)つらくいみじからむと思したれば、(二)思さるゝ様こそあらめ、輕々しく(三)ことざまに靡き給ふこと、はた世にあらじと、心のどかなる(四)人は、さはいへど、いとよく思ひしづめ給ふ。薫「唯いと覺束なく、物隔てたるなむ、胸あかぬ心地するを、(五)ありし様にて聞えむ」とせめ給へど、大君「(六)常よりも我が面影に恥づる頃なれば、(七)うとましと見給ひてむも、さすがに心苦しきは、如何なるにか」と、ほのかに打笑ひ給へるけはひなど、怪しう懐かしう覺ゆ。薫「かゝる御心にたゆめられ奉りて、終に如何なるべき身にか」と歎きがちにて、例の遠山鳥にて明けぬ。宮は、(八)まだ旅寢なるらむとも思さで、匂「中納言の、あるじ方に心長閑なる氣色こそ羨ましけれ」と宣へば、女君怪しと聞き給ふ。

(九)わりなくておはしましては、程なくかへり給ふが、飽かず苦しきに、宮も物をい

(一)薫の
(二)薫のいふ通り他人は中々薫の如く氣長ではないといふことがわかりて
(三)場所相當に鄭重に取扱ひて
(四)薫を主人方の人として打解けて取扱ふが
(五)一寸した客座敷の方に遠ざけおく故
(六)是はひどいと薫が思ひ居たり
(七)薫の
(八)大君が
(九)いつ迄も此樣に取扱はるゝのか
(一〇)薫の恨むを尤とは大君もやう〳〵思ふやうにはなりたれども
(一一)中君と匂との關係につきても
(一二)夫を持つ事を嫌なものに思ひ切りて
(一三)我は中君の樣に打解けて男に逢ふ事はしたくなし、以下大君の心
(一四)一旦肌を許して後は今の薫に對する溫情も必ずさめてつらく感ずる樣になるべし
(一五)我も薫も情のさめる事なく
(一六)薫が
(一七)大君が
(一八)果して宇治では匂の來ぬを心配して居たのぢやわいと薫が悟る樣に話したれば

思へど、心ばへ(一)の長閑に物深くものし給ふを、實に人は(二)かくはおはせざりけりと、見あはせ給ふに、有り難しと思ひ知らる。宮を、(三)所につけては、いと殊にかしづき入れ奉りて、(四)この君をば、あるじ方に心やすくもてなし給ふものから、(五)まだ客人居の假初なる方に出しはなち給へれば、いとからしと思ひ給へり。(七)恨み給ふもさすがにいとほしくて、物越に對面し給ふ。(八)(六)薫「戯れにくゝもあるかな。(九)斯くてのみや」と、いみじく恨み聞え給ふ。やう〳〵理(一〇)知り給ひにたれど、(一一)人の御上にても、物をいみじく思ひしづみ給ひて、いとゞか(一二)かる方を憂きものに思ひはてて、猶ひたぶるに、(一三)いかで斯く打解けじ、(一四)哀と思ふ人の御心も、必ずつらしと思ひぬべきわざにこそあゝめれ、(一五)我も人も見おとさず、心違はで止みにしがな、と思ふ心づかひ深くし給へり。宮の御有樣なども問ひ聞(一六)え給へば、(一七)かすめつゝ、(一八)さればよとおぼしく宣へば、いとほしくて、思したるさま、(一九)氣色を見ありくやうなど語り聞え給ふ。例よりは心うつくしう語らひて、大君「猶

(一)宇治へ行きたけれどどうしたものかと
(二)薫が
(三)「初時雨ふるの山里いかならんすむ人さへや袖のぬるらん」
(四)匂が
(五)中君の
(六)匂と薫との
(七)宇治邸の人々をいふ
(八)匂の無沙汰をぶつぶつ言ひし名殘もなく
(九)宇治の老侍女等の娘や姪など
(一〇)前から呼び寄せてある也
(一一)此新參の娘や姪をいふ
(一二)匂や薫を見て
(一三)かゝる時に匂の來たれば也
(一四)薫

に、時雨めきてかきくらし、空の村雲おそろしげなる夕暮、宮いとゞ靜心なくながめ給ひて、(一)如何にせむと、御心ひとつを出立ちかね給ふをり、推し量りて參り(二)給へり。薫(三)「ふるの山里いかならむ」と、おどろかし聞え給ふ。いと嬉しと(四)思して、諸共に誘ひ給へば、例のひとつ御車にておはす。分け入り給ふ儘にぞ、まいて眺め給ふらむ(五)心のうち、いとゞ推し量られ給ふ。道のほども、唯この事の心苦しきを、語らひ聞え給ふ。黃昏時のいみじく心細げなるに、雨冷やかにうちそゝぎて、秋はつる氣色の凄きに、うちしめり濡れ給へる(六)匂どもは、世のものに似ず艶にて、うち連れ給へるを、(七)山賤どもは、いかゞ心惑もせざらむ。女ばら、(八)日頃うちつぶやきつる名殘なく笑みさかえつゝ、御座ひきつくろひなどす。京にさるべき所所に行き散りたる(九)女ども、姪だつ人二三人尋ねよせて(一〇)參らせたり。年頃あなづり聞えける心あさき人々、(一一)珍らかなる客人と(一二)思ひ驚きたり。姫君も(一三)折嬉しくおもひ聞え給ふに、(一四)さかしら人の添ひ給へるぞ、恥かしくもありぬべく、なま煩はしう

のぞきて見奉る。侍女「中納言殿は、懐かしく恥かしげなる樣ぞ添ひ給へりける。思(一)ひなしの今一際にや、この御樣はいと殊に」などめで聞ゆ。

道すがら、心苦しかりつる御氣色を思しいで(二)つゝ、立ちも歸りなまほしく、樣あ(三)しきまで思せど、世の聞を忍びて歸らせ給ふほどに、え(四)容易くも紛れ給はず。御文は明(五)くる日ごとに、數多かへり奉らせ給ふ。(六)疎かにはあらぬにやと思ひながら、(七)覺束なき日數の積るを(八)いと心づくしに見じと思ひしものを、身にまさりて心苦しくもあるかなと、姫君は思し歎かるれど、(一〇)いとゞこの君の思(九)ひしづみ給はむにより、つれなくもてなして、(一一)自らだに猶かゝること思ひ加へじと、いよ〳〵深くおぼす。

中納言の君も、(一二)待遠にぞ思すらむかしと思ひやりて、(一三)我が過にいとほしくて、(一四)宮を聞え驚かしつゝ、絶えず御氣色を見給ふに、(一五)いといたく思ほし入れたる樣なれば、さりともと後安かりけり。九月十日の程なれば、野山の景色も思ひやらるゝ

(一)薫より一段身分の高い御方と思ふ故か
(二)匂が
(三)見つともない位に
(四)容易にぬけ出して宇治へ行く譯にゆかず
(五)毎日
(六)匂も此樣子では中君を愛せぬでもなからんとは大君が思ひながら
(七)來ぬ日が多き故
(八)此樣な心配の種は拵へたくなしと初から思ひしに
(九)我身が夫を持ちたるより增りて
(一〇)大君が心配しては中君が彌〻心配する譯故
(一一)自分丈でも夫を持ちて此樣な心配を添へる事はすまじと
㊇匂宮薫を誘ひて宇治に行く、薫なほ戀を遂げず、匂宮薫等の苦心
(一二)宇治で
(一三)宇治の姬君等にかかる心配をさするも自分の咎の樣に思はれて
(一四)匂宮
(一五)中君に熱心なる樣子故

は思ふ方異にて、いといたく澄みたる氣色の、(一)見えにくゝ恥かしげなりしに、(二)餘所に思ひ聞えしは、ましてこよなく遥に、一行書き出で給ふ御返だに、つゝましく覺えしを、(三)久しうと絶え給はむは、心細からむと思ひならるゝも、我ながらうたて、と思ひ知り給ふ。(四)人々いたく聲づくり(五)催し聞ゆれば、京におはしまさむ程はしたなからぬ程にと、いと心あわたゞしげにて、(六)心より外ならむ夜がれを、かへすがへす宣ふ。

匂　(七)中絶えむものならなくにはし姫のかたしくそでや夜半にぬらさむ

出で難に、立ち返りつゝやすらひ給ふ。

中君　(八)たえせじのわがたのみにや宇治橋のはるけき中を待ちわたるべき

言には出でねど、物歎かしき御けはひ、(九)限なく思されけり。(一〇)若き人の御心にしみぬべく、類すくなげなる朝開の姿を(一一)見送りて、名殘とまれる御移香なども、人知れず物哀なるは、(一二)ざれたる御心かな。今朝ぞ、(一三)物のあやめも見ゆる程にて、人々

(一)氣づまりに
(二)匂を噂に聞き居し時分には薫にも勝りて氣がおかれて
(三)逢ひて見れば無沙汰されたらば心細からんと思ふ氣になるも
(四)匂の供人
(五)歸りを
(六)來たくは思ひても來られぬ夜があるべき由を
(七)縁のきれる抔といふ心配は決して無用なれど我が來ぬによりて待焦れる夜は定めしあるべし
(八)縁のきれる事はなしと宣ふを力にして遠方から通ひなさる君を我は待ちづゝ暮すなるべし
(九)匂が
(一〇)若い女はふるひ附きたい程に思ふべき匂の姿を
(一一)中君が
(一二)中々隣へはゐけぬ中君の心哉
(一三)昨夜までは眞暗な中に匂が歸りたる也



(一)我身柄を考へ合せて
(二)匂が
(三)中君を
(四)華奢なる匂の心には
(五)中君、以下匂の心
(六)此事位な物ぢや
(七)氣のせいで我が同胞の女一宮などは立派に思はれるのぢや
(八)却て中君の方が勝れて居ると思はる
(九)匂が
(一〇)中君が
(一一)二世かけて
(一二)匂に身を任せんとは思ひ寄らざりし事なれど
(一三)兼て知り合の薫に逢ふよりは寧ろ知らざりし匂に逢ふ方が恥かしさが少なしと
(一四)薫は、以下中君の心

の程しるきにや、と心おかれて、(一)我が御有樣から、さま〴〵物歎かしくてなむありける。明け行く程の空に、妻戸(二)押しあけ給ひて、諸共に(三)誘ひ出でて見給へば、霧りわたれる樣、所がらの哀多く添ひて、例の柴積む船のかすかに行きかふ跡の白浪、目馴れずもある住居の樣かなと、(四)色なる御心にはをかしく思しなさる。山の端の光やう〳〵見ゆるに、(五)女君の御容貌のまほに美しげにて、限りなくいつき居ゑたらむ姫君も、(六)かばかりこそはおはすべかゝめれ、(七)思ひなしの我が方樣のいといつくしきぞかし、こまやかなる匂など、打解けて見まほしう、(八)なか〳〵なる心地す。水の音なひ懷かしからず、宇治橋のいと物古りて見え渡さるゝなど、霧晴れ行けば、いとゞ荒ましき岸のわたりを、「かゝる處にいかで年を經給ふらむ」など、(九)うち涙ぐまれ給へるを、いと(一〇)恥かしと聞き給ふ。男の御樣の限なくなまめかしく淸らにて、(一一)この世のみならず契り賴め聞え給へば、(一二)思ひ寄らざりし事とは思ひながら、なか〳〵(一三)かの目馴れたりし中納言の恥かしさよりは、と覺え給ふ。(一四)彼

我あしとやは思へる、(一)うしろでは知らず顔に、(二)額髪をひきかけつゝ、色どりたる顔づくりをよくして、うち振舞ふめり、(三)わが身にては、まだいと彼が程にはあらず、目も鼻も(四)なほしと覺ゆるは、心のなしにやあらむと、うしろめたく、見出して臥し給へり。(五)恥かしげならむ人に見えむことは、いよ〳〵かたはらいたく、今一年二年あらば、衰へ勝りなむ、はかなげなる身の有様をと、御手つきの細やかにか弱く、哀なるを(六)さし出でても、世の中を思ひつゞけ給ふ。

(七)宮は、(八)あり難かりつる御暇の程を思しめぐらすに、なほ(九)心安かるまじき事にこそはと、いと胸ふたがりて覺え給ひけり。(一〇)大宮の聞え給ひし様など(一一)語り聞え給ひて、

匂「(一二)思ひながらとだえあらむを、如何なるにかと思すな。(一三)夢にても疎かならむに、かくまでも參り來まじきを、(一四)心の程やいかゞと疑ひて、思ひ亂れ給はむが心苦しさに、(一五)身を捨ててなむ。常に斯くはえ惑ひありかじ。(一六)然るべき樣にて近くわたし奉らむ」と、いと深く聞え給へど、(一七)絶間あるべく思さるらむは、音に聞きし御心

(一)後から人に見られる姿の醜さは知らぬふりして
(二)顔をあらはに見られぬ樣につくろふ樣也
(三)大君自身は
(四)あたり前なりと思はるゝは氣のせいかしらんと
(五)薰如き男に見ゆるは、以下大君の心
(六)出して自らながめても
(七)匂宮
(八)今夜出て來がたかりし始末を考へると
(九)宇治通ひにつきては心遣の絶えぬ事ならんと
(一〇)明石姫
(一一)中君に
(一二)氣にはかけて居ても不少汰する事あるべければ其を心配するな
(一三)聊でも不實の心があるなら斯く今夜來る事もない譯なれど
(一四)我が心
(一五)今夜は身を捨てる積で來りしなり
(一六)然るべき用意をして手近な處へ引取るべしと
(一七)不沙汰をすべしと今から思ひ居らるゝは兼て聞く浮氣心の著はれたるならんと、中君の心

（一）果して一時弄ばれたるならんと大君がと胸をついて居る處へ
（二）大君が
（三）中君も多少心が解けて匂の親切を感じたる樣子なり
（四）中君の樣
（五）匂の
（六）中君の御器量なるに
（七）つまらぬ聟を取りなされては
（八）匂を聟にしたるは運に叶ひたりといふもの
（九）大君の薫になびかぬ了簡を
（一〇）批難し
（一一）侍女等の樣
（一二）不似合に
（一三）是なら我慢が出來るといふ位な器量の女が一人もなきを
（一四）以下大君の心
（一五）銘々の了簡では此老女等も自分を醜しと思ひ居るものはなし

さで、御文のあるを、（一）さればよと胸つぶれておはするに、夜中近うなりて、荒ましき風のきほひに、いともなまめかしく淸らにて、匂ひおはしたるも、（二）いかゞ疎かに覺え給はむ。（三）正身も聊うち靡きて、思ひ知り給ふ事あるべし。（四）いみじくをかしげに盛と見えて、引き繕ひ給へる樣は、まして類あらじはやと覺ゆ。さばかりよき人を多く見給ふ（五）御目にだに、けしうはあらず、容貌よりはじめて、多く近勝したりと思さるれば、山里の老人どもは、まして口つき憎げにうち笑みつゝ、老女「斯く（六）あたらしき御有樣を、（七）斜なるきはの人の見奉り給はましかば、いかに口惜しからまし。（八）思ふやうなる御宿世」と聞えつゝ、（九）姫君の、御心を怪しくひがひがしくもてなし給ふを、（一〇）もどき口ひそめ聞ゆ。盛過ぎたる（一一）樣どもに、あざやかなる花のいろ〱、似つかはしからぬをさし縫ひ著つゝ、（一二）ありつかず取繕ひたる姿どもの、（一三）罪許されたるもなきを見渡され給ひて、姫君、（一四）我もやう〱盛過ぎぬる身ぞかし、鏡を見れば瘠せ〱になりもてゆくを。（一五）己がじしは、この人どもも、

宮も、斯くぞおはしますべかゝめる、如何ならむ折にか、かばかりにても物近く、御聲をだに聞き奉らむ、と哀に覺ゆ。(一)好いたる人の、思ふまじき心つかふらむも、斯う樣なる御中らひの、さすがに(二)氣遠からず、入り立ちて心にかなはぬ折の事ならむかし、我が心のやうに、ひが〳〵しき心の類やは、又世にあべかゝめる、それだに(三)猶動きそめぬるあたりは、えこそ思ひ堪へね、と思ひ居給へり。(四)侍ふかぎりの女房の容貌心ざま、いづれとなく惡びたるなく、目やすく取々にをかしき中にも、あてに勝れて目とまるあれど、(五)更に〳〵亂れそめじの心にて、いときすぐにもてなし給へり。(六)殊更に見えしらがふ人もあり。大方恥かしげにもてしづめ給へる(七)あたりなれば、(八)上べこそ心ばかりもてしづめたれ、心々なる世の中なりければ、(九)色めかしげにすゝみたる、下の心漏りて見ゆるもあるを、(一〇)樣々にをかしくも哀にもあるかなと、立ちても居ても、(一一)唯常なき有樣を、思ひありき給ふ。

(一二)彼處には、(一三)中納言殿の事々しげに言ひなし給へりつるを、夜更くるまで(一四)おはしま

(一)世間の浮氣者がけしからん了簡を起すのも、以下薫の心

(二)女に疎くもなくさりとて踏み込んで自由な眞似をする事も出來ぬといふ場合の事ならん

(三)大君に對する戀をいふ

(四)明石中宮方に

(五)決して心を動かすまじと薫が決心して

(六)わざと薫に見られんと思ひてちらつく女もあり

(七)明石中宮の家風なれば

(八)仕へ居る女房も上べはしとやかに構へ居れど

(九)浮氣がしたい樣な下心の見えすいて見える女もあるを

(一〇)薫の心

(一一)世間の無常を

(一二)宇治

(一三)薫は今夜は御用もあらんかと思ふなどと泣言ひ來りしに拘はらず

(一四)匂が來ず文ばかりよこしたるを見て

(一)明石中宮が
(二)わざと惡くいふ人がある故なるべし
(三)批難を受ける程の放埒はした覺がない
(四)我が貴き身分を
(五)今夜行けば中宮に騷がれ行かねば宇治で騷がれる、どちらにしても一方で恨まれる事は免れぬ事故
(六)中君に對する方は私事故宇治へ行き給へ
(七)「山城の木幡の里に馬はあれどかちよりぞゆく君を思ひかねて」
(八)馬で行きては輕々しき樣にて體裁がわるからんが
(九)同行はすまじ
(一〇)薫
(一一)薫が
(一二)其方が叱らぬが惡いと
(一三)明石中君の子ども
(一四)明石中君
(一五)中宮の第一女、以下薫の心

はしき宮仕のしるしに、あいなき勘當や侍らむと、顔の色違ひ侍りつる」と申し給へば、匂「いと聞きにくゝぞ思し宣ふや。(一)多くは人(二)のとりなす事なるべし。世に咎(三)あるばかりの心は、何事にかは使ふらむ。すべて所狹き身の程こそ、なか〳〵なるわざなりけれ」とて、誠に厭(四)はしくさへ思したり。いとほしう見奉り給ひて、薫(五)「同じ御騷がれにこそはおはすなれ。今宵(六)の罪にはかはり聞えさせて、身をも徒になし侍りなむかし。木幡(七)の山に馬はいかゞ侍るべき。いとゞ(八)物の聞えやさはり所なからむ」と聞え給へば、たゞ暮れに暮れて更けにける夜なれば、思しわびて、御馬にて出で給ひぬ。薫「御供にはなか〳〵(九)仕う奉らじ。御後見を」とて、この君(一〇)は内裏にさぶらひ給ふ。中宮の御方に參り(一一)給へれば、中宮「宮は出で給ひぬなり。あさましくいとほしき御樣かな。いかに人見奉るらむ。上聞召しては、(一二)いさめ聞えぬがいふかひなきと、思し宣ふこそわりなけれ」と宣はす。數多宮達(一三)のかく大人びとゝのひ給へど、(一四)大宮はいよ〳〵若くをかしきけはひなむ増り給ひける。女一(一五)

心あわたゞしく思ひ亂れ給へる名殘に、(一)いとゞなほ〳〵しきを、(二)思しけるまゝと、待ち見給ふ(三)人は、唯哀にぞ思ひなされ給ふ。(四)宮はその夜内裏に參り給ひて、えまかで給ふまじげなるを、人知れず御心も空にて、思し歎きたるに、中宮、明石姫「なほかく(五)一人おはしまして、世の中に好い給へる御名のやう〳〵聞ゆる、猶いと惡しき事なり。何事も(六)物好ましく、立てたる心なつかひ給ひそ。(七)上も後めたけに思し宣ふ」と、(八)里住がちにおはしますを、諫め聞え給へば、いと苦しと思して、御宿直所に出で給ひて、御文書きて(九)奉れ給へる、名殘もいたく打眺めておはしますに、(一〇)中納言の君參り給へり。(一一)其方の心よせと思せば、例よりも嬉しうて、(一二)匂「如何すべき、いとかく暗くなりぬめるを、心も亂れてなむ」と、歎かしげに思したり。能く御氣色を見奉らむと思して、(一三)薫「日頃經てかく參り給へるを、今宵侍はせ給はで、急ぎまかで給ひなむ、いとゞよろしからぬ事にや、(一四)思し聞えさせ給はむ。(一五)臺盤所の方にて承りつれば、(一六)人知れず煩

(一)一層返歌が平凡なるを
(二)思ふ儘をよみたるならんと
(三)薫
(四)匂宮
(五)獨身で
(六)好色らしく
(七)帝も其事を心配して居られる
(八)匂の
(九)中君へ
(一〇)薫
(一一)薫は中君方の方人と思へば匂が嬉しくて
(一二)今夜は三つ目故宇治へ行かねばならぬがどうした物であらうぞ
(一三)幾日も缺勤してやつと今日參内せられしなるに
(一四)帝が
(一五)女官の居る方にて承りたる所によれば
(一六)私が匂宮を窃に宇治へ手引したるによりて明石中宮からつまらぬ御譴責を受けるかも知れぬと思ひて

へ恨みてなむ。(一)今宵は雜役もやと思ひ給ふれど、(二)宿直所のはしたなげに侍りし亂り心地いとゞ安からで、やすらはれ侍る。

と、陸奥紙に(三)おいつき書き給ひて、まうけの物ども、細かに縫ひなどもせざりける、色々おし卷きなどしつゝ、御衣櫃(四)あまた懸子に入れて、老人のもとに、「人々の料に」とて給へり。(五)宮の御方に侍ひけるに從ひて、いと多くもえ取集め給はざりけるにやあらむ、(六)たゞなる絹綾など、下には入れ隱しつゝ、(七)御料とおぼしき二領、いと淸らにしたるを、單衣の御衣の袖に、(八)古代のことなれど、

薫(九)さよ衣きてなれきとはいはずともかごとばかりはかけずしもあらじ

とおどし聞え給へり。(一〇)げに此方彼方ゆかしげなき御事を、恥かしういとゞ見給ひて、御返もいかゞ聞えむと思し煩ふほど、(一一)御使かたへは逃げ隱れにけり。あやしき下人を(一二)ひかへてぞ、御返賜ふ。

大君(一三)へだてなき心ばかりはかよふともなれしそでとはかけじとぞおもふ

(一)中君の三つ日で何かと御用があるかも知れぬと思ひ居れど

(二)私を疎な所にも置いて下さらざりし爲に恐くなつた心持がまだ直らずぐづ〳〵して居る

(三)散らし書などにもせぬをいふとぞ

(四)三日の夜の中君の著料の衣裳

(五)折節女三方に有合せたる品をよこしたりと見えて

(六)練りも染めもせぬ

(七)中君の著料

(八)古めかしき趣向なれど

(九)大君が我に逢はぬ樣な事をいふとも我はいひがかりめきたる事を言はずにはおかぬ

(一〇)姉妹共に薫に見られて仕舞ひたるを大君が此を見て殊に恥かしく思ひて

(一一)一部分は

(一二)つかまへて

(一三)君と我と心は隔なく交るべけれど、逢ひたる中とは言はれたくなし

(一)中君は大事にしてくれる人こそないが
(二)思ひもよらず男に見ゆるのが恥かしく
(三)中君
(四)大君よりも
㊆三日の夜の宇治の待受、匂宮内裏を拔け出でて宇治へ行く、中君との中睦まじ
(五)三つ目の夜は祝の餅を食するが常例なりと
(六)大君が
(七)大君が自ら差圖して拵へるけれどもよくも分らず
(八)是は總領の氣性といふのかして、大君の性質をいふ
(九)いくら親切を見せても其效能がなささうなるに嫌になりてやめたり

兄など言ひつゝ、人のたゞずまひをも見なれ給へるは、物の恥かしさも、斜にやならむ。(一)家にあがめ聞ゆる人こそなけれ、かく山ふかき御あたりなれば、人に遠く物深くてならひ給へる心地に、(二)思ひかけぬ有樣のつゝましく恥かしく、何事も世の人に似ず、怪しう田舍びたらむかしと、はかなき御答にても言ひ出でむ方なく、つゝみ給へり。さるは(三)この君しもぞ、らうらうじくかどある方の(四)匂は勝り給へる。

(五)三日にあたる夜は餅なむ參ると、人々の聞ゆれば、殊更にさるべき祝の事にこそはと(六)思して、(七)御前にてせさせ給ふもたどたどしう、かつは大人になりておきて給ふも、人の見るらむこと憚られて、面うち赤めておはする樣、いとをかしげなり。(八)このかみ心にや、のどかに氣高きものから、人の爲哀になさけなさけしくぞおはしける。中納言殿より、

薫 昨夜參らむと思う給へしかど、(九)宮仕の勞もしるし無げなめる世に、思う給

(一)疎な分別もなき自分の我を張りていつ迄獨身で置くでもなしと
(二)不意に恥かしい目に其方をあはせて心配せんとは
(三)其方の心が落附きたらば自分が匂宮を手引せざりし次第を話すべし
(四)我を
(五)大君の斯く言ふは我爲惡しかれと思ひての事にもあらざるべきに、以下中君の心
(六)此上若し匂に捨てられる樣な事がありて姉君に心配をかけたらば氣の毒ならんと
(七)中君の不意を喰つてあきれたる時の前夜の容貌さへ美しかりしに
(八)當前にやさしみある今夜の風采を見ては匂の愛も一入なるに
(九)匂が
(一〇)中君が
(一一)非常に大事にされる姫君でも
(一二)父兄などの女に關係する樣子などを見馴れ居る姫君は恥かしがるも程のあるものなるが

世の理をも知りたらむ、(一)はかぐ〵しくもあらぬ心一つをたてて、かうてのみやは見奉らむと、思ひなる樣もありしかど、たゞ今かく、(二)思ひもあへず恥かしき事どもに亂れ思ふべくは、更に思ひかけ侍らざりしに、これや實に人の言ふめる、遁れ難き御契なりけむ。いとこそ苦しけれ。少し(三)思し慰みなむに、知らざりし樣をも聞えむ。(四)憎しとな思し入りそ。罪もぞ得給ふ」と御髮をなでつくろひつゝ聞え給へば、答もし給はねど、さすがに(五)斯く思し宣ふが、實にうしろめたく惡しかれとも思しおきてしを、(六)人わらへに見苦しきこと添ひて、見あつかはれ奉らむがいみじきを、萬に思ひ居給へり。

(七)さる心もなく、あきれ給へりしけはひだに、なべてならずをかしかりしを、まいて(八)少し世の常になよび給へるは、御志も勝るに、容易く通ひ給はざらむ山道の遙けさも、胸いたきまで(九)思して、心深げに語らひ頼め給へど、哀とも如何にとも(一〇)思ひわき給はず。(一一)言ひ知らずかしづく物の姫君も、少し世の常の人げ近く、(一二)親

なる人になむ贈らせ給ふ。ことごとしき御使にもあらず、例奉れ給ふ上童なり。殊更に人に氣色もらさじと思し(一)ければ、昨夜(二)のさかしがりし老人のしわざなりけりと、ものしくなむ聞召しける。

その夜も、かのしるべ(三)誘ひ給へど、薫「冷泉院に必ず侍ふべき事侍れば」とて、とまり給ひぬ。(四)例の、(五)ことに觸れてすさまじげに世をもてなすと、憎く思す。(六)如何はせむ、本意ならざりし事とて、疎にやは、と思ひよわり給ひて、御しつらひなど(七)うちあはぬ住處の樣なれど、さる方にをかしくしなして、(八)待ち聞え給ひけり。遙なる御中道を、(九)急ぎおはしましたりけるも、嬉しきわざなるぞ、かつは怪しき。(一〇)正身は我にもあらぬ樣にて、(一一)つくろはれ奉り給ふまゝに、濃き御衣の袖のいたくぬるれば、(一二)さかし人も打泣きつゝ、(一三)姉君「世の中に久しくもと覺え侍らねば、且暮のながめにも、唯御事をのみなむ心苦しう思ひ聞ゆるに、(一四)この人々もよかるべき樣の事と、聞きにくきまで言ひ知らすめれば、(一五)年經たる心どもには、さりとも

(一)匂が
(二)此使への贈物と見て是は昨夜案内せし辨のした事ならんと
(三)案内せよと薫を匂が誘ひたれど
(四)匂の心
(五)薫が何かにつけて世にすねた擧動をすると
(六)大君の心、匂宮との關係が斯うなつた上は是非がなし、望まぬ緣でも斯うなりては疎末にも出來ぬと
(七)揃はぬ
(八)匂宮を
(九)匂宮が
(一〇)中君
(一一)世話されて衣などきせかへらるゝ也、濃きは紅なるべし
(一二)大君
(一三)我は長生しさうにもなければ
(一四)侍女等も匂宮に其方の身を任すは可然事と
(一五)老人の分別は

宮はいつしかと御文奉(一)り給ふ。山里(二)には誰(三)も〳〵現の心地し給はず、思ひ亂れ給へり。樣々(四)に思し構へけるを色にも出し給はざりけるよと、疏ましうつらく、姉君をば思ひ聞え給ひて、目も見あはせ奉り給はず。知(五)らざりし樣をも、さはさはとはえあきらめ給はで、理に心苦しく思ひ聞え給ふ。人々も、「如何に侍りしことにか」など御氣色見奉れど、思(六)しほれたる樣にて、たのもし人のおはすれば、怪しきわざかなと思ひあへり。御文(七)もひきときて見せ奉り給へど、更に起(八)きあがり給はねば、「いと久しくなりぬ」と御使詫びけり。

匂　世(九)のつねに思ひやすらむ露ふかき道のさゝ原わけて來つるも

書き馴れ給へる墨つきなどの、ことさらに艶なるも、大方(一〇)につけて見給ひしは、をかしう覺えしを、後(一一)めたう物思はしくて、我(一二)さかし人にて聞えむも、いとつゝましければ、まめやかに、ある(一三)べき樣を、いみじくせめて書(一四)かせ奉り給ふ。紫苑色の細長一襲に、三重襲の袴具してたまふ(一五)。御使苦(一六)しげに思ひたれば、包(一七)ませて、供

㊅ 匂宮、又宇治に行く
(一)中君へ
(二)宇治
(三)大君中君
(四)中君の心
(五)大君は自分の知つた事でなかりし由を明白に言譯する事も出來ず
(六)肝腎の大君がぼんとして居る故
(七)匂の
(八)中君が
(九)遠路を遙々尋ね行きし我志を一通りの戀の樣に君は思はるゝかも知れぬ
(一〇)無關係で見し時は
(一一)大君の感
(一二)自分がさし出て代筆せんも
(一三)書くべき文句を
(一四)中君に
(一五)使に
(一六)忍びたる使故かく當前に取扱はるゝを苦しがる也
(一七)やりたる衣裳を

大君かた〴〵にくらすこゝろを思ひやれ人やりならぬ道にまどはば(一)とほのかに宣ふを、いと飽かぬ心地すれば、薫「如何にこよなう隔たりて侍るめれば。いとわりなうこそ」など、よろづに恨みつゝ、(二)ほの〴〵と明けゆく程に、(三)昨夜の方より出で給ふなり。いと柔かにふるまひなし給へる匂ひなど、艶なる御心げさうには、言ひしらずしめ(四)給へり。ねび人どもは、(五)いと怪しく心え難く思ひ惑はれけれど、さりとも(六)惡樣なる御心あらむやは、と慰めたり。暗き程にと急ぎ歸り給ふ。道の程も歸るさはいと遙けく思されて、(七)心安くもえ行き通はざらむ事の、かねていと苦しきを、(八)「夜をや隔てむ」と思ひ惱み給ふなめり。まだ人騒がしからぬ朝の程に(九)おはしつきぬ。(一〇)廊に御車よせて下り給ふ。異樣なる女車の樣して隱ろへ入り給ふに、(一一)皆わらひ給ひて、薫「おろかならぬ宮仕の御志となむ思ひ給ふる」と申し給ふ。(一二)しるべのをこがましさをば、いと妬くて、(一三)うれへも聞え給はず。

(一)自分でしてかしたる事につきてさへ左樣に嘆かるゝを、まして左もなくて我身妹の身の上につきて色々心配のみ多き私の心中を察して下され
(二)どの樣に我と君との間に隔があればとて斯く唐紙越では餘りひどい
(三)昨夜入りし方より匂が
(四)香をたきしめ
(五)匂宮の忍び入りしを知らざれば不審する也
(六)薫が惡意がある筈はなしと
(七)匂の心
(八)「若草の新手枕をまきそめて夜をや隔てん憎からなくに」
(九)京へ
(一〇)六條院の
(一一)匂も薫も
(一二)匂に魅されて案内者の自分が本望をとげぬ馬鹿らしさを
(一三)愚痴もこぼさず

(一)つらがる故
(二)其方の心を我は何處迄も破らじと思へばこそ斯く馬鹿固く今迄我慢しても居るなれ
(三)私を
(四)唐紙越でもよいから御話申したし
(五)大君が奧へ
(六)決して此上手を出す事はせじ
(七)山鳥は雌雄別々の峯に寢ると言ひ傳へたり
(八)匂が
(九)薰が
(一〇)案内されし匂は目的を達したるに、案内の私は達し得ずして歸り路も分らぬ

こにうち休まむ許し給へ」と、いといみじく侘び(一)給へば、さすがに理をばいと能く宣ふが、心恥かしくらうたく覺えて、薰「あが君、御心(二)に從ふことの類なければこそ、斯くまでかたくなしくなり侍れ。言ひ知らず憎く疎ましきものに思しなす(三)めれば、聞えむ方なし。いとゞ世に跡留むべくなむ覺えぬ」とて、薰「さらば、隔(四)てながらも聞えさせむ。ひたぶるになうち棄てさせ給ひそ」とて、許し奉り給へれば、這ひ入りて(五)、さすがに入りも果て給はぬを、いと哀と思ひて、薰「斯ばかりの御けはひを慰めにて明し侍らむ。ゆめ〳〵(六)」と聞えて、うちもまどろまず。いとどしき水の音に目もさめて、夜半の嵐に、山鳥(七)の心地して明しかね給ふ。例の明け行くけはひに、鐘の聲など聞ゆ。(八)寢ぎたなくて出で給ふべき氣色もなきよと、(九)心やましく、聲づくり給ふも、實にあやしきわざなり。

薰(一〇)しるべせし我やかへりて惑ふべきこゝろもゆかぬあけぐれの道

かゝる例世にありけむや」と宣へば、

（一）匂は中君に心あるを
（二）戀の叶はぬ自分ばかり
（三）仕方がないと諦めて我に靡きたまへ
（四）私と其方と無關係なりとは誰も思はぬ
（五）私に案内させたる匂も私が此樣なつまらぬざまにて夜を明す事とは思はれまじ
（六）「行くさきを知らぬ涙の悲しきは只目の前におつるなりけり」
（七）我々を此樣な目に合せてどうするお積かと
（八）我々の身の上を
（九）斯く計らひたる薫の了簡を匂もよくは思はぬに違なし
（一〇）色々にして私を心配させ給ふな
（一一）少し落附いてから御目にかゝるべし

に侍るめれば、（一）かの御志はことに侍りけるを、いとほしく思ひ給ふるに、（二）叶はぬ身こそおき所なく心憂く侍りけれ。（三）猶如何はせむに思し弱りね。この御障子の固ばかりいと強きも、（四）誠に物清く推し量り聞ゆる人も侍らじ。（五）しるべと誘ひ給へる人の御心にも、まさにかく胸ふたがりて、明すらむとは思しなむや」とて、障子をも引き破りつべき氣色なれば、言はむ方なく心づきなけれど、こしらへむと思ひしづめて、大君「この宣ふ宿世といふらむ方は、目にも見えぬ事にて、如何にも如何にも思ひたどられず。（六）知らぬ涙のみ霧り塞がる心地してなむ。（七）こは如何にもてなし給ふぞと、夢の樣にあさましきに、（八）後の世の例に言ひいづる人もあらば、昔物語などに、殊更に嗚乎めきて作り出でたるものの譬にこそは、なりぬべかンめれ。（九）かく思し構ふる心のほどをも、如何なりけるとかは推し量り給はむ。猶いと斯くおどろ〳〵しう心憂く、（一〇）な取集めまどはし給ひそ。心より外にながらへば、少し思ひのどまりて聞えむ。心地も更にかきくらす樣にて、いと惱ましきを、こ（一一）

(一)薫の教へし通り前夜薫の入りし戸口に寄りて
(二)匂が
(三)薫を賺して中君の方へ導かんと
(四)薫が
(五)匂を手引したる由内内にも大君に知らせざりし事を、後になりて大君に恨まれては申譯なかるべければ
(六)「知らせざりける」の誤なるべし
(七)匂
(八)否とも言へず
(九)匂が
(一〇)奥へ紛れこみし樣子
(一一)利口だてをする人、辨
(一二)是では大君に嫌はれ中君は匂に取られて我は虻蜂取らずになりて
(一三)我が幼稚な心に打解けたる隙で
(一四)幾重にもお詫を申して足らずば
(一五)其方は匂を慕はるる樣なれど

哀なり。

宮は、教へ(一)聞えつるまゝに、一夜の戸口によりて、扇を鳴し給へば、辨參りて導き聞ゆ。前々も馴れにける道のしるべ、をかしと思しつゝ(二)入り給ひぬるをも、姫君は知り給はで、こしらへ(三)入れてむと思したり。(四)をかしうもいとほしくも覺えて、(五)内々に心も知ら(六)ざりける、恨みおかれむも、罪さり所なき心地すべければ、薫「宮(七)の慕ひ給ひつれば、え(八)聞え否びで、こゝにおはしつる。音もせでこそ紛れ(一〇)給ひぬれ。このさかしだつめる人や、語らはれ奉り(九)ぬらむ。中空に人わらへにもなり侍りぬべきかな(一一)」と宣ふに、今少し思ひ寄らぬことの、目(一二)もあやに心づきなうなりて、大君「かう萬に珍らかなりける御心の程を知らで、いふかひなき心幼(一三)さも見え奉りにける怠に、思し侮づるにこそは」と、言はむ方なく思ひ給へり。薫「今は言ふかひなし。理は(一四)返すぐ聞えさせてもあまりあらば、抓みも捻らせ給へ。(一五)やむごとなき方に思し寄るめるを、宿世などいふめるもの、更に心に叶はぬもの

侍るを、(一)思し放つさま見奉りてしにいと恥かしけれど、(二)ひたやごもりにてはえやむまじきを、今しばし更かしてを、ありし様には導き給ひてむや」など、うらもなく語らひ給へば、(三)何方にも同じ事にこそは、と思ひて參りぬ。然なむと(四)聞ゆれば、(五)さればよ思ひ移りにけりと嬉しくて、心おちゐて、かの入り給ふべき道にはあらぬ廂の障子を、いとよくさして、(六)對面し給へり。薫「一言聞えさすべきが、又人聞くばかりのゝしらむはあやなきを、いさゝかあけさせ給へ。いといぶせし」と(七)聞え給へど、大君「斯くてもいとよく聞えぬべし」とて、あけ給はず。(八)今はとうつろひなむを、たゞならじとて言ふべきにや、何かは、例ならぬ對面にもあらず、人にくゝ答へで、夜も更かさじ、など思ひて、(九)斯ばかりも出で給へるに、障子の中より(一〇)御袖をとらへて、引きよせて、いみじう怨むれば、(一一)いとうたてもあるわざかな、(一二)何に聞き入れつらむ、と悔しうむづかしけれど、(一三)こしらへて出してむと思して、(一四)他人と思ひわき給ふまじき様に、かすめつゝ語らひ給へる心ばへなど、いと

(一)私をお嫌ひなさる事が分りし故斯かる事を頼むも恥かしけれど
(二)默つて居る譯にはゆかぬ事故
(三)大君に取持つも中君に取持つも同じ事と
(四)薫の詞を大君に申上ぐると
(五)大君の心
(六)大君が薫に
(七)他人にも聞える程の大聲で話すも工合惡き故
(八)愈中君に乘り換へるのを無斷ですまじと思ひて其斷りを言ふ積かしら、大君の心
(九)此處迄も大君が出て來しなるに
(一〇)薫が大君の
(一一)大君の心
(一二)對面を斷ればよかつたと
(一三)薫をだまして出てもらはんと
(一四)中君を自分と同樣に思ひくれよと

廿八日彼岸のはてにて、よき日なりければ、人知れず心づかひして、いみじく忍びて(一)率て奉る。(二)后の宮など聞しめしつけては、かゝる御歩行いみじく制し聞え給へば、いと煩はしきを、切に思したる事なれば(三)然りげなく、と持て扱ふもわりなくなむ。船渡なども所狭ければ、(四)事々しき御宿なども借り給はず、そのわたりいと近き(五)御庄の人の家に、いと忍びて、宮をばおろしたて奉り給ひて(六)おはしぬ。(七)見咎め奉るべき人もなけれど、宿直人(八)は僅に出でありくにも氣色知らせじとなるべし。例の、(九)中納言殿おはしますとて經營しあへり。(一〇)君達なま煩はしく聞き給へど、(一一)うつろふ方ことに匂はし置きてしかば、と姫君は思す。中の君は、(一二)思ふ方ことなゝめりしかば、然りとも、と思ひながら、(一三)心憂かりし後は、ありしやうに姉君をも思ひ聞え給はず、心おかれて物し給ふ。何やかやと(一四)御消息のみ聞え通ひて、如何なるべき事にかと、人々も心苦しがる。宮をば、御馬にて、暗きまぎれに(一五)おはしまさせ給うて、辨召し出でて、「(一六)こゝもとに(一七)唯一言聞えさすべき事なむ

㊄ 薫匂宮、宇治に行く、戀を遂げたる匂宮、遂げざる薫

(一)薫が匂宮を宇治へ案内す
(二)明石姫君、匂の母
(三)そつと連れて行かんと
(四)夕霧の別莊
(五)薫の領地の
(六)薫が一人八宮邸へ
(七)直に匂を同行しても誰に見られる筈もなければ
(八)「は」は「の」の誤なるべし
(九)八宮邸にては
(一〇)姫君等
(一一)中君に乘換へてくれる樣にと薫へ匂はして置いたれば今度は相手になり安しと大君が思ふ
(一二)薫は大君に懸して居る故いくら何でも我は安心なものと
(一三)薫の忍び入りし事ありし後は、これを大君のさしがねと中君は思へる也
(一四)取次の口上ばかりで對面なき故
(一五)八宮邸へ呼び取りて
(一六)私の方に
(一七)中君に

(一)なべてやは」など、妬まし聞ゆれば、匂「あなかしがまし」(二)と、はて〳〵は(三)腹立ち給ひぬ。年頃かく(四)宣へど、人の御有様を如何ならむと、後めたく思ひしに、容貌なども見おとりし給ふまじく推し量らるゝ(五)心ばせの、近劣する様もやなどぞ、危く思ひ渡りしを、(六)何事も口惜しくは物し給ふまじかゝめりと(七)思へば、かのいとほしく、(八)内々に思ひたばかり給ふ有様も、違ふ様ならむも、情なき様なるを、さりとて、(九)然はたえ思ひ改むまじく覺ゆれば、まづ讓り(一〇)聞えて、(一一)いづ方の恨をも負はじ、など下に思ひ構ふる心(一二)をも知り給はで、(一三)心せばくとりなし給ふもをかしけれど、薫「例の(一四)輕らかなる御心ざまに、物思はせむこそ心苦しかるべけれ」など、(一五)親がたになりて聞え給ふ。匂「よし見給へ。かばかり心にとまる事なむまだ無かりつる」など、いとまめやかに宣へば、薫(一六)「かの御心どもには、然もやと打靡きぬべき氣色は見えずなむ侍る。仕う奉りにくき宮仕にぞ侍るや」とて、(一七)おはしますべき樣など、こまかに聞え知らせ給ふ。

(一)誰にでもといふ譯にはゆかぬ
(二)「秋の野になまめき立てる女郎花あなかしがまし花も一時」
(三)匂が
(四)匂が懸想はして居るものゝ中君の人物如何と薫が不安心なりしに
(五)氣立が近づきて見てがつかりする樣な人ではなきかと
(六)前後の經緯によれば缺點は無いらしいと
(七)薫が
(八)大君が内々中君を薫にと思ひ附き居るをぶちこはすも氣の毒なれども
(九)さう思ひ直す譯にもゆかぬ心持がする故
(一〇)中君を匂に
(一一)匂と中君の怨か
(一二)薫の
(一三)薫が氣が狹くて匂を宇治へ案内せぬ樣に匂の思ふのも
(一四)匂の浮氣から中君に苦勞をさせるは氣の毒
(一五)中君の親めかして
(一六)中君方では靡きてもよしといふ樣な樣子はなし此媒人は甚むつかしくて
(一七)宇治へ行くにつきての注意など

にほひの、いと著くうち薫るに、ふとそれと驚かれて、御直衣奉り、亂れぬ樣に(一)引き繕ひて出で給ふ。階をのぼりも果て(二)ずつい居(三)給へれば、「猶上に」なども(四)宣はで、勾欄により居給ひて、世の中の御物語聞えかはし給ふ。(五)かのわたりの事をも、物の序には思し出でて、(六)萬に恨み給ふもわりなしや。(七)自らの心にだに叶ひ難きをと思ふ〳〵、(八)然もおはせなむと思ひなる樣のあれば、例よりはまめやかに、(九)あるべき樣など申し給ふ。あけぐれの程、生憎に霧りわたりて、空のけはひ冷かなるに、月は霧に隔てられて、木の下も暗くなまめきたり。(一〇)山里の哀なるありさま、思ひ出で給ふ。宮、(一一)匂「このごろの程に、必ずおくらかし給ふな」と語らひ給ふを、猶煩はしがれば、(一二)

匂 女郎花さけるおほ野をふせぎつゝ心せばくやしめを結ふらむ

と戯れ給ふ。(一三)

薫「霧ふかきあしたのはらの女郎花こゝろをよせて見る人ぞみる(一四)

(一)薫の匂ひが
(二)薫の來れるよと匂が氣がつきて
(三)薫が
(四)匂が
(五)宇治
(六)匂が
(七)自分の戀さへ叶はぬに人の取持どころかとは薫が思ひながらも
(八)匂の戀が遂げればよいと思ふ點もある故、さすれば大君は自然薫の手に入るべしと思へば也
(九)斯く〳〵に計らひたらば杯と
(一〇)宇治の
(一一)宇治へ案内せよ
(一二)薫がうるさがる故
(一三)宇治へ同行を拒むとはけちな了簡ではないか、しめを結ぶとは圍をすること
(一四)宇治の姫君は中々容易に人に逢はぬ女故、餘程志篤き人ならでは逢ひ見難し

(一)大君が中君に讓りたき樣子を薫に見せても薫が承知せぬに困りて昨夜の樣に巧みしならん、以下薫の心
(二)薫が前と變らぬ態度を取りたらば
(三)大君に思はれて
(四)大君に對する戀
(五)我と大君との間に取次の役をつとむる辨の
(六)大君に懸想しはじめたのが今更後悔で
(七)嫌はれても〳〵同じ女に執念く附纏ふは
(八)「堀江漕ぐ棚なし小船漕ぎかへり同じ人にや戀ひわたりなん」
(九)匂宮が
(一〇)近くなりての後即ち六條院に移りて後は
(一一)薫の見たる六條院の樣
(一二)薫の想像通り
(一三)匂が

四 薫匂宮と共に宇治へ行かん事を約す

身をわけて(一)など、讓り給ふ氣色は度々見えしかど、うけひかぬに佗びて、かまへ給へるなゝめり、そのかひ無く斯くつれなからむ(二)も、いとほしく情なきものに思ひ置かれて(三)、いよ〳〵はじめの思(四)かなひ難くやあらむ、とかく言ひ傳へ(五)などすめる老人の思はむ所も輕々しく、とにかくに心(六)を染めけむだに悔しく、かばかりの世の中を思ひ捨てむの心に、自らも叶はざりけり、と人わろく思ひ知らるゝを、ましておしなべたる好色者のまねに(七)、同じあたりに返す〴〵漕ぎめぐらむ、いと人わらへなる棚なし小船(八)めきたるべし、など終夜思ひ明し給ひて、まだ有明の空もをかしき程に、兵部卿宮の御方に參り給ふ。三條の宮燒けにし後は、(九)六條院にぞうつろひ給へれば、(一〇)近くては常に參り給ふを、宮も思すやうなる御心地し給ひけり。(一一)紛るゝことなく、あらまほしき御住居に、御前の前栽外のには似ず、同じき花の姿も、木草の靡き樣も殊に見なされて、遣水にすめる月の影さへ、繪に畫きたる樣なるに、(一二)思ひつるも著く、(一三)起きおはしましけり。風につきて吹き來る

（一）大君
（二）是から薫に捨てられてはどうしたものぞと
（三）色々の點で齟齬して居る老女等のはからひを憎く思ふ
（四）大君が苦心し居る處へ
（五）薫の意向を危ぶみ居る處へ文が來し故安心して嬉しく思ひし也
（六）文を紅葉の枝につけたる也
（七）此歌舊註諸說あれど只青葉と紅葉とを二人の姫君に見立てゝどちらが勝れるか我には判斷が出來ぬと言ひて、暗に兩人ともよく見たる事をほのめかしたるなるべし
（八）昨夜の事につきては口をつぐめるを
（九）何となくごまかして、大君の心
（一〇）老女等やかましく
（一一）中君に
（一二）君の心は既に中君に移りて我よりも中君を深く思へるならんの意なるべし
（一三）大君を怨みたれども中直りせぬ譯にはゆかぬ樣な心持がする

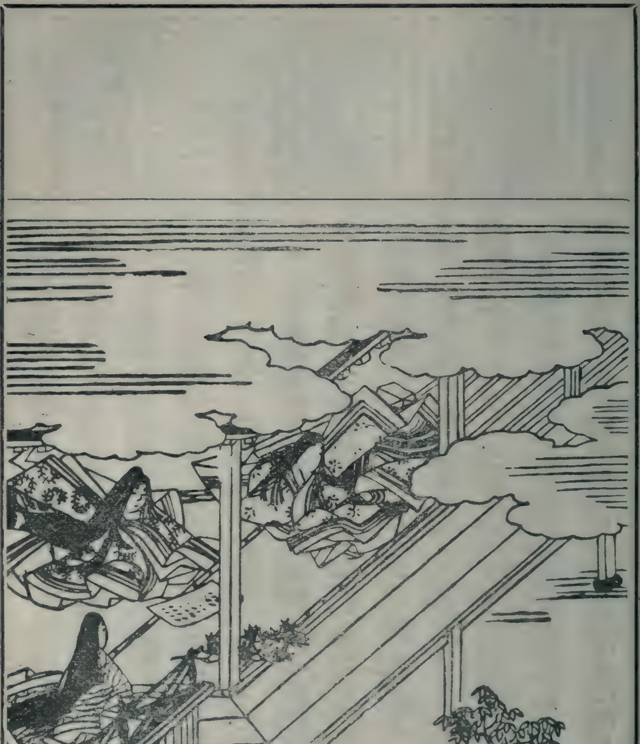
も急ぎ出で給ひぬ。侍女等「誰が御爲もいとほしく」と、さゝめきあへり。姫君（一）も、如何にしつることぞ、もし疎（二）かなる心も物し給はば、と胸つぶれて心苦しければ、（三）すべてうちあはぬ人々のさかしらを、憎しと思す。さまぐ（四）思ひ給ふに、御文あり。（五）例よりは嬉しと覺え給ふも、かつは怪し。秋の氣色も知らず顏に、青き枝の片枝は、いと濃く紅葉（六）したるを、

薫　おなじ（七）枝をわきてそめける山姫にいづれかふかき色ととはゞや

さばかり恨みつる氣色もなく、言少にことそぎて、おしつゝみ（八）給へるを、そこは（九）かと無くもてなして止みなむとなゝめりと見給ふも、心さわぎて、耳（一〇）かしがましう「御かへり」といへば、聞え給へ（一一）と讓らむもうたて覺えて、流石に書きにくゝ思ひ亂れ給ふ。

大君　山姫のそむるこゝろはわかねどもうつろふ（一二）方やふかきなるらむ

ことなしびに書き給へるが、をかしく見えければ、猶（一三）え怨じ果つまじく覺ゆ。



と思ひ聞え給ふ。明けにける光につきてぞ、壁の中の蟋蟀(一)は這ひ出で給へる。(二)思すらむ事のいとゞいとほしければ、互に物も言はれ給はず。(三)ゆかしげなう心憂くもあるかな、今より後も、心ゆるびすべくもあらぬ世にこそ、と思ひ亂れ給へり。辨は彼方(四)に參りて、あさましかりける(五)御心強さを(六)聞き顯して、いとあまり深く、(七)人憎かりける事と、いとほしく思ひほれ居たり。「(八)來し方のつらさは、猶殘りある心地して、萬に思ひ慰めつるを、今宵なむ誠に恥かしく、身も投げつべき心地する。捨てがたく(九)おとし置き奉りたまへりけむ、心苦しさを思ひ聞ゆる方こそ、又ひたぶるに、身をもえ思ひ捨つまじけれ。(一〇)かけ〳〵しき筋は、何方にも思ひ聞えじ、(一一)憂きもつらきも、かた〴〵に忘られ給ふまじくなむ。(一二)宮などの、恥かしげなく聞え給ふめるを、同じくは心高くと、思ふ方ぞ、殊に物し給ふらむと心得はてつれば、いとゞ理に恥かしくて、(一三)又參りて人々に見え奉らむ事もねたくなむ。よし、斯くをこがましき身の上、また人にだに洩し給ふな」と怨じ置きて、例より

(一)大君
(二)中君の心中を大君が氣の毒に思ふ故
(三)姉妹共に薫に見られて仕舞ひて、以下大君の心
(四)薫の方に
(五)大君の
(六)薫から聞きて
(七)憎らしき仕打と
(八)今迄の大君のつらき仕打は猶餘地のある樣で
(九)「おとし」は「おぼし」の誤なるべし、八宮が跡まで姫君等の身の上を氣懸りに思はれし點を思へば無暗に身を投げる譯にもゆかぬ
(一〇)自分はどちらへも手を出す氣はなし
(一一)大君に振附けられたるつらさは忘れられぬ
(一二)匂が立派に口說き寄る故同じ靡くなら高尙に構へて匂へ靡かんとする大君の御了簡ならんと推測したれば御尤と恥かしくなりて
(一三)此後參りて皆樣に御目にかゝるもつらし

何(一)ぞの物かつかせ給はむ。たゞ、人に遠くて生ひ出でさせ給ふめれば、かゝる事にも、つぎ〴〵(二)しげにもてなし聞え給ふ人もなくおはしますに、はしたなく思さるゝにこそ、今自ら見奉り馴れ給ひなば、思ひ(三)聞え給ひてむ」など語らひて、「とく打解け(四)て、思ふ樣にておはしまさなむ」と言ふ〳〵寢入りて、鼾などかたはらいたくするもあり。

「逢(五)ふ人から」にしもあらぬ秋の夜なれど、程もなく明けぬる心地して、何れ(六)とわくべくもあらず、なまめかしき御けはひを、人(七)やりならず飽かぬ心地して、薫「あひ思せよ。いと心憂くつらき人(八)の御樣、見習ひ給ふなよ」など、後(九)瀨を契りて出で給ふ。我(一〇)ながら怪しく夢のやうに覺ゆれど、猶つれなき人(一一)の御氣色、今一度見はてむの心に、思(一二)ひのどめつゝ、例の出でて臥し給へり。辨參りて、辨「いと怪しく、中の君は何處にかおはしますらむ」と言ふを(一三)、いと恥かしく思ひかけぬ御心地に、如何なりけむ事にかと思(一四)ひ臥し給へり。昨(一五)日宣ひし事を思し出でて、姫君をつらし

(一)つき物なぞがするものか
(二)工合よく取りさばく人もなき故極り惡く思はるゝならん
(三)大君が薫を大事になさるに違なし
(四)大君が薫に打解けて
(五)「長しとも思ひぞはてぬ昔より逢ふ人からの秋の夜なれば」
(六)大君とどちらが優れたりとは言へぬ中君の美しさを
(七)自分の自由にすれば出來た中君に手も出さずに明したるなれば物足らぬ感あるも心がらぞと自ら感ずる也
(八)大君
(九)後の逢瀨
(一〇)薫が
(一一)大君
(一二)我慢して
(一三)中君の心に
(一四)中君が
(一五)昨日の大君の詞を中君が思ひ出して

に、やうやうあらざりけりと見るに、同じ事ながら美しくらうたげなる氣色はま(二)さりてやと覺ゆ(一)。あさましげに(三)あきれ惑ひ給へるを、(四)げに心も知らざりけりと見ゆれば、いといとほしくもあり、又(五)おしかへして、隱れ給へらむつらさの、まめやかに心憂くねたければ、(六)これをも餘所の物とはえ思ひ離るまじけれど、猶本意違はむ口惜しくて、(七)うちつけに淺かりけりとも覺え奉らじ、この一節は猶過して、遂に(八)宿世のがれずば、此方ざまにならむも、何かは他人の樣にやは、と思ひさまして、例のをかしく懷しき樣に語らひてあかし給ひつ。

老人どもは、仕損じつと思ひて、辨等「中の君は何處にかおはしますらむ。怪しきわざかな」とたどりあへり。辨等「さりとも、(九)ある樣あらむ」など言ふ。大方、例の(一〇)見奉るに皺のぶる心地して、めでたく哀に見まほしき御容貌有樣を、などていともて離れては聞え給ふらむ。何か、これは世の人の言ふめる、(一一)怖ろしき神ぞ憑き奉りたらむ」と、齒はうち透きて、愛敬なげに言ひなす女あり。又、「あな凶々し。

(一)人違なりしと悟るに
(二)却て中の君の方が勝れて居るかと思はる
(三)中君が目をさまして
(四)中君は丸で譯を知らぬ樣に見ゆる故
(五)薫のうらをかきて大君が
(六)中君をも人の物にして仕舞ふはいやなれど
(七)突然此處で中君に乘りかへて大君への情の淺かつた樣に思はれる事はすまじ、以下薫の心
(八)免れぬ緣ならば中君の方を取つても萬更他人を身代りにした樣にはあるまじ
(九)何か仔細のある事ならん
(一〇)薫は見れば老をも忘れる程のよい御器量の方なるに、なぜ大君は嫌ひなさるかしら
(一一)大君につき物がして居ると見える

(一)中君は外へ行つて寢て下されとも言はれず
(二)何方が大君か中君かよく薫が知り居るならんと
(三)辨が
(四)大君が
(五)大君が
(六)中君が
(七)大君の心
(八)中君と共に
(九)隠れたものを今更取つて返す事もならず
(一〇)薫が
(一一)大君の心に中君が氣の毒で
(一二)大君が
(一三)中君に薫を讓らんといふ話をしたばかりの時さへ中君が嫌がりしに
(一四)ひどい事をしたとさぞ中君が我を恨むならんと
(一五)八宮が
(一六)薫
(一七)大君も共積りで待つて居たのかと

(一)外々にともいかゞ聞えむ。御けはひをも、(二)たど〳〵しからず見奉り知り給へつらむと(三)思ひけるに、(四)うちもまどろみ給はねば、ふと聞きつけ給ひて、やをら起き出で給ひぬ。いと疾く(五)這ひ隠れ給ひぬるに、何心もなく(六)寢入り給へるを、いといとほしく、(七)如何にするわざぞ、と胸つぶれて、(八)諸共に隠れなばやと思へど、(九)さもえ立ちかへられで、戰く〳〵見給へば、火のほのかなるに、(一〇)袿姿にて、いと馴れ顔に、几帳の帷子をひきあげて入りぬるを、(一一)いみじういとほしく、如何に覺え給はむと思ひながら、怪しき壁の面に、屏風を立てたる後の、むづかしげなるに(一二)居給ひぬ。(一三)あらましごとにてだに、つらしと思ひ給へるを、まいていかに珍かに思し疎まむと、いと心苦しきにも、すべてはか〴〵しき後見なくて(一四)落ち留る身どもの悲しきを思ひ續け給ふに、今はとて山に(一五)登り給ひし夕の御樣など、たゞ今の心地して、いみじく戀しく悲しく覺え給ふ。

(一六)中納言は、一人臥し給へるを、(一七)さる心しけるにやと嬉しくて、心ときめきし給ふ

に例の様に大殿籠りぬ。(一)後めたう如何にもてなさむと聞え給へど、殊更めきてさし籠り、隠ろへ給ふべき物の隈だになき御住居なれば、なよゝかにをかしき御衣、(二)上に引き著せ奉り給ひて、まだけはひ暑き程なれば、(三)少しまろび退きて臥し給へり。

辨は宣ひつる様を客人に聞ゆ。(四)如何なれば、いと斯うしも世を思ひ離れ給ふらむ、(五)聖だち給へりしあたりにて、(六)常なきものに思ひ知り給へるにやと思すに、いとゞ我が心に(七)通ひて覺ゆれば、(八)さかしだち憎くも覺えず。薫「さらば、(九)物越などにも、今はあるまじき事に思しなるにこそはあゝなれ。今宵ばかり、(一〇)大殿籠るらむあたりに、忍びてたばかれ」と宣へば、心して(一一)人疾くしづめなど、心知れるどちは思ひ構ふ。宵少し過ぐるほどに、風の音荒らかにうち吹くに、はかなき様なる蔀などは、ひしひしと紛るゝ音に、(一二)人の忍び給へる振舞は、え聞きつけ給はじと思ひて、やをら導き入る。(一三)同じ所に大殿籠れるを、うしろめたしと(一四)思へど、常の事なれば、

(一)辨抔が薫を引入れる事もあらんかと不安心に思へど、大君の心
(二)中君に著せたる也
(三)薫が入り來らば中君を身代りにせん用意也
(四)薫の心
(五)坊主じみた父の側に育ちて
(六)世間の無常を悟れるにやと
(七)似て居る樣に
(八)大君の心が
(九)物を隔てゝ對面する事も嫌と思はるゝにや
(一〇)大君の
(一一)女どもを早く寢かしなどして
(一二)薫の忍込む物音は大君に聞えぬならんと辨が思ひて
(一三)大君と中君と
(一四)辨が

(一)薫の[illegible]
(二)八宮の
(三)相當な聟がなく身分不相應なつまらぬ夫でも持つ事にならんかと思召して
(四)以下八宮の詞を眞似ていふ。薫が大君を貰ふ氣があるなら一人丈は安心で嬉しい
(五)身分の高下を論ぜず
(六)孤兒になりたる人は
(七)誘る人もなし
(八)わざ〳〵探しても來たき程の御身柄の薫が
(九)決心した通りに
(一〇)雲や霞を食して過す譯にもゆくまい、矢張り生活の爲に苦勞せねばならぬ
(一一)大君が
(一二)大君の樣子を

と、うしろめたう悲しうのみ見奉るを、(一)後の御心は知りがたけれど、美しくめでたき御宿世どもにこそおはしましけれとなむ、かつ〴〵思ひ聞ゆる。(二)故宮の御遺言違へじと、思しめす方は理なれど、それは、(三)然るべき人のおはせず、品程ならぬ事やおはしまさむと思して、誡め聞えさせ給ふめりしにこそ。(四)この殿のさやうなる心ばへ物し給はましかば、一所後安く見置き奉りて、如何に嬉しからまし、と折々宣はせしものを、(五)程々につけて、(六)思ふ人に後れ給ひぬる人は、高きも下れるも、心の外に、あるまじき様にさすらふ類だにこそ多く侍るめれ。それ皆例の事なゝめれば、(七)もどき言ふ人も侍らず。まして斯くばかり、(八)殊更にも作り出でまほしげなる人の御有様に、志深うありがたげに聞え給ふを、あながちにもて離れさせ給ひて、(九)思しおきつるやうに、行の本意を遂げ給ふとも、さりとて(一〇)雲霞をやは」など、すべてこと多く申し續くれば、いと憎く心づきなしと思して、(一一)ひれ臥し給へり。中の君も、あいなくいとほしき御氣色かな、(一二)と見奉り給ひて、諸共

み給ふめるこそわりなけれ。(一)世に人めきてあらまほしき身ならば、かゝる御事をも、何かはもて離れても思はまし。されど昔より(二)思ひ離れそめたる心にて、いと苦しきを、(三)この君の盛過ぎ給はむも口惜し。げにかゝる住居も、たゞ(四)この御ゆかりに所せくのみ覺ゆるを、(五)誠に昔を思ひ聞え給ふ志ならば、同じ事に思ひなし給へかし。身をわけたる心のうちは、(六)皆ゆづりて見奉らむ心地なむすべき。猶かやうに(七)よろしげに聞えなされよ」と恥らひたるものから、あるべき樣を宣ひつゞくれば、いと哀と見奉る。辨「(八)さのみこそは、さき〴〵も御氣色を見給ふれば、いとよく聞えさすれど、(九)然はえ思ひ改むまじき、(一〇)兵部卿宮の御恨深さ勝るめれば、又其方ざまに、いとよく後見聞えむ、となむ聞え給ふ。それも思ふ樣なる御事どもなり。(一一)二所ながらおはしまして、殊更にいみじき御心盡してかしづき聞えさせ給はむには、(一二)えしもかく世にありがたき御事ども、さし集ひ給はざらまし。畏けれど、かくいとたづきなげなる御有樣を見奉るに、(一三)如何になりはてさせ給はむ

(一)人並の生活をしたき願ある身ならば薫の懸想も受附けぬといふ譯もなし
(二)夫を持つことは思ひ切りたる事故
(三)中君
(四)中君故にこそ不足に思ふのであるが
(五)薫が眞に八宮との交を思ひてくれるならば中君を我と思つて娶つて下されたし
(六)中君に讓りて
(七)甘く薫に取りなしてくれ
(八)前々から其御讓りと心得居る故其樣に薫に申上ぐれど
(九)其樣に思ひ直す譯にはゆかぬ、以下薫の詞を眞似ていふ
(一〇)さうしては匂にいよいよ恐まれる譯なれば、中君をば匂に振向けてよく御世話申すべしと
(一一)假令御兩親御揃ひで御骨折なさるとも斯う願つても無い御縁の揃ふ事はあるまじ
(一二)「には」は「にも」の誤なるべし
(一三)末始終どうなる事かと

(一)此樣な事にかけては大君よりも不案内で
(二)譯が分らぬ故
(三)大君の心
(四)あたり前の色の著物を大君に著せかへよ
(五)薫を引入れる用意
(六)大君の心
(七)作者の詞、此場合侍女等のするが儘にて誰もとめてがなし
(八)「世の中を憂しといひても何處にか身をばかくさん山なしの花」
(九)斯う顯にして人に世話やかれず、以下薫の心
(一〇)づる〱べつたりにせんと
(一一)大君が不承知なら
(一二)辨等
(一三)是は何といひても侍女丈に考の淺いのか
(一四)薫の御親切は他人に異なる御仕向と
(一五)八宮が
(一六)案外な御懸想で

て、動ぜられ給はず。同じ心に何事も語らひ聞え給ふ中の君は、(一)かゝる筋には今少し心も得ずおほどかにて、(二)何とも聞き入れ給はねば、(三)怪しうもありける身かなと、唯奥ざまに向きておはす。侍女等「(四)例の色の御衣ども奉りかへよ」など、そゝのかし聞えつゝ、(五)皆さる心すべかめる氣色を、(六)あさましく、(七)實に何のさはり所かはあらむ、程もなくて、かゝる御住居のかひなき、(八)山なしの花ぞのがれむ方なかりける。客人は、(九)かく顯證に、此彼にも口入れさせず、忍びやかに、(一〇)いつありそめけむ事ともなくもてなしてこそ、と思ひそめ給ひける事なれば、薫「(一一)御心ゆるし給はずば、いつも〱かくて過さむ」と思し宣ふを、(一二)この老人の、おのがじし語らひて、顯證にさゝめきなどす。(一三)さはいへど、深からぬけにや老いひがめるにや、いとほしくぞ見ゆる。姫君おぼし煩ひて、辨が參れるに宣ふ。大君「年頃も、(一四)人に似ぬ御心よせとのみ、(一五)宣ひわたりしを聞きおき、今となりては、萬に殘なく賴み聞えて、怪しきまで打解けにたるを、(一六)思ひしに違ふ樣なる御心ばへのまじりて、恨

（一）侍女等が自分を
（二）薫
（三）薫の傳言をして、薫の恨まるゝが尤なる由を
（四）どうしたらよいのやら、以下大君の心
（五）父か母かが在世なら
（六）假令どうなりても
（七）相當の人の計らひによる事故
（八）緣は自分の心まかせにもならぬ事故
（九）どうなりても是が世の習と見做されて瑕もかくれてゆくのであるが
（一〇）今居る侍女等は皆老人で
（一一）得意になりて
（一二）それ相當の意見を立つれども
（一三）老女等の下司な了簡から一方だけを見て言ふに過ぎぬ
（一四）老女等が手を引張らぬ計に勸むにいふも

添ひたるやうにこそ思されたゝめりしか。心細き御慰めには、かう朝夕に見奉るより、「如何なる方にか」と、なま怨めしく思ひ給へれば、實にといとほしうて、大君猶（一）これかれ、うたてひが〱しきものに、言ひ思ふべかゝめるにつけて、思ひ亂れ侍るぞや」と、言ひさし給ひつ。

暮れ行くに、（二）客人はかへり給はず、姫君いとむつかしと思す。辨參りて、（三）御消息ども聞え傳へて、恨み給ふを理なるよしを、つぶ〱と聞ゆれば、答もし給はず、うち歎きて、（四）如何にもてなすべき身にかは、（五）一所おはせましかば、（六）ともかくも、（七）さるべき人にあつかはれ奉りて、（八）宿世といふなる方につけて身を心ともせぬ世なれば、（九）皆例の事にてこそは、人わらへなる咎をも隱すなれ、（一〇）ある限の人は年つもり、さかしげに己がじしは思ひつゝ、（一一）心をやりて、（一二）似つかはしげなる事を聞え知らすれど、こははか〲しき事かは、（一三）人めかしからぬ心どもにて、唯一方に言ふにこそは、と見給へば、（一四）引き動かしつばかり聞えあへるも、いと心憂く疎ましう

(一)さう言はねば大君に對する情が淺い樣に人に思はれるのを憚りて居る點もあるならんと
(二)丸で中君に知らせなかつたらば
(三)我身にくらべて中君が氣の毒故
(四)八宮の御遺言も
(五)我々が父上御存生中のはだしになりて
(六)せめては別れに臨みて仰せられた事だけも守りたしと
(七)今の生活を自分は別段心細くも思はぬに侍女等が我が薫に靡かぬを強情なりと批難するが迷惑
(八)我が獨身なりとて同じ樣に揃つて中君も獨身にて過すのも
(九)中君の身の上をのみ
(一〇)其方だけも世間竝に夫を持つて
(一一)姉の私も其によりて面目を保つ位にしたし
(一二)斯ういふ姉君の了簡はどういふのかしらんと
(一三)獨身で果てよとは姉君ばかりへの御遺言でもなかりし也
(一四)私の方が却つて勝つて居る樣に父上も思ひ居られし樣子

むあらぬと、うけひく氣色のなかゝなるは、かたへは人の思はむ事を、あいなう淺き方にやなど、つゝみ給ふならむ、と思し構ふるを、(一)氣色だに知らせ給はずば罪もや得むと、(二)身をつみていとほしければ、萬にうち語らひて、(三)大君「(四)昔の御おもむけも、世の中をかく心細うて過し果つとも、なか〳〵人笑へに、輕々しき心つかふな、など宣ひおきしを、(五)おはせし世の御絆にて、行の御心を亂りし罪だにいみじかりけむを、(六)今はとて、さばかり宣ひし一言をだに違へじ、と思ひ侍れば、(七)心細くなども殊に思はぬを、この人々の、怪しう心ごはきものに憎むめるこそ、いとわりなけれ。實にさのみ、(八)樣のものと過し給はむも、明け暮るゝ月日に添へても、(九)御事をのみこそ、あたらしう心苦しう悲しきものに思ひ聞ゆるを、(一〇)君だに世の常にもてなし給ひて、(一一)かゝる身の有樣もおもだたしく、慰むばかり見奉りなさばや」と聞え給へば、(一二)如何に思すにかと心憂くて、中君(一三)「一所をのみやは、さて世に果て給へとは聞え給ひけむ。はか〳〵しくもあらぬ身のうしろめたさは、(一四)數

(一)喪服をぬぎたる愁に心亂れて御語も出來ぬ
(二)辨の君
(三)侍女等は皆現在の心細き生活の慰としては薫をのみ力にして居る者共故
(四)己等の希望通り大君が薫の妻になりて京住居などする事にならば結構な事と相談して
(五)薫を大君の處へ
(六)辨を薫が特に重んじ手なづけ居る故薫方になりてけしからん計をするかも知れぬ、以下大君の心
(七)女の男に逢ふは本人の了簡からする事はなし側の者のさしがねでするのが多い
(八)大君の心、薫がひどく恨んだらば中君を授けてやらん
(九)中君が我に劣りて居ても、一旦關係した上は不あしらひはしさうもなき薫の氣立なるに
(一〇)況や中君位の器量なれば一寸でも見さへすれば薫が満足するに違ない
(一一)假令さう思つて居ても口へ出して中君でもよいといふ奴はない
(一二)中君に心はないと斷る樣な事を薫のいふは

しうおぼゆれば」と、とかう聞えすまひて對面し給はず。薫「思の外に心憂き御心かな。人も如何に思ひ侍らむ」と御文にて聞え給へり。大君「今はとて脱ぎ捨てはべ(一)りし程の心惑に、なかく沈み侍りてなむえ聞えぬ」とあり。恨み侘びて、例の(二)人召して萬に宣ふ。(三)世に知らぬ心細さの慰には、この君をのみ頼みきこえたる人々なれば、思にかなひ給ひて、(四)世の常の住處にうつろひなどし給はむを、いとめでたかるべき事に言ひ合せて、唯入れ(五)奉らむと皆語らひ合せけり。姫君その氣色をば、深う見知り給はねど、斯うとりわきて人めかしなつけ給ふめるに、打解けてうしろめたき心もやあらむ、昔物語(六)にも、心もてやは、とある事も、かゝる事もあゝめる、打解くまじきは人の心にこそあゝめれ(七)、と思ひ寄り給ひて、せめ(八)て恨深くば、この君をおし出でむ、劣りざまならむにてだに、さても見そめてば、あさはかにはもてなすまじき心なゝめるを(九)、ましてほのかにも見そめては(一〇)、慰みなむ、言に出でては(一一)、いかでかは、ふと然る事を待ち取る人のあらむ、本意にな(一二)

(一)姫君等の心
(二)父の死後に生存すべしとは思はざりしに
(三)除服の後も志篤き者は尚しばらく薄鼠色の衣を用ふる也とぞ
(四)大君が中君を
(五)大君の心、自分が內內計畫して居る通りになりて中君が薰に嫁ぐ場合に
(六)此器量ならば近づきてから見劣りのする氣遣はなかるべしと
(七)自分の外に中君の世話をして貰ふ人もなき故
(八)薰
㊂　薰大君に迫る、大君逃れて逢はず
(九)前には忌服中なるを遠慮せしが其服も九月になれば常服に代ふる筈なれども待遠なる故九月にならぬ中に又宇治を訪へる也
(一〇)此前の通りにして御目にかゝりたしと薰から取次にて言はすれども
(一一)不快にて

中納言殿より御文あれど、大君「今朝よりいと惱ましうなむ」とて、人傳にぞ聞え給ふ。「さも見苦しう、若々しうおはす」と、人々つぶやき聞ゆ。御服などはてて、脫ぎ捨て給へるにつけても、片時(一)も後れ(二)奉らむものと思はざりしを、はかなく過ぎにける月日の程を思すに、いみじう思の外なる身の憂さと、泣き沈み給へる御樣ども、いと心苦しげなり。月頃黑うならはし給へる御姿、薄鈍(三)にて、いとなまめかしうて、中の君は實にいと盛にて、美しげなるにほひまさり給へり。御髮などすましつくろはせて見奉り(四)給ふに、世の物思忘るゝ心地して、めでたければ、(五)人知れず思ふ樣に叶ひて、人に見え給はむに、さりとも近劣り(六)しては思はずやあらむと、賴もしう嬉しうて、今は又見ゆづる(七)人もなくて、親心にかしづきたてて見聞え給ふ。

(八)かの人、はつゝみ(九)聞え給ひし藤の衣も改め給ひつらむなが月も、しづ心なくて又おはしたり。例(一〇)のやうに聞えむと、又御消息あるに、大君「心(一一)あやまりして、煩は

思ひつゞけて、音泣きがちにて明し給へるに、名殘いと惱ましければ、中の君の臥し給へる、奥の方に添ひ臥し給ふ。例ならず人のさゞめきし氣色も怪し、と此(一)の君は思しつゝ寢給へるに、かくて(二)おはしたれば嬉しくて、御衣(三)ひき著せ奉り給ふに、所せき(四)御移香の紛るべくもあらず、くゆりかゝる心地すれば、宿直人がもてあつかひけむ(五)思ひ合せられて、誠なるべし(六)といとほしうて、寢ぬる樣にて物も宣はず。客人(七)は、辨のおもと呼び出で給ひて、こまかに語らひ置き、御消息す(八)くすくしう聞えおきて出で給ひぬ。總角(九)をたはぶれにとりなしゝも、心もて「尋(一〇)ばかり」の隔にても、對面しつるとや、この君も思すらむと、いみじう恥かしければ、心地あしとて惱み暮し給ひつ。人々、「日(一一)は殘なく侍りぬ。はかぐ\しうはかなき事をだに、又仕(一二)うまつる人もなきに、折惡しき御惱かな」と聞ゆ。中の君、組(一三)などしはて給ひて、中君「心葉(一四)などはえこそ思ひより侍らね」と、せめて聞え給へば、暗うなりぬるまぎれに、起き給ひて、諸共に結びなどし給ふ。

(一)中君
(二)大君がやつて來た故
(三)大君に
(四)非常な薫の移り香
(五)薫に貰つた衣の香の甚しきを持扱ひし事を思ひ合せて
(六)侍女等がひそ〳〵言ひ居し事が
(七)薫
(八)眞面目らしく
(九)前に總角の歌を戲によみかはしたのも我が兼て薫に逢はん下心ありての事にて、假令肌はゆるさぬにしても昨夜もあひしならんと中君が思ふならんと、大君の心
(一〇)總角の歌の句
(一一)一週忌の法事迄に餘日はなし
(一二)大君の外に世話やく人もなきに
(一三)組絲、名香の絲
(一四)しんのかざりにする作り花

(一)此様に戀しく思ふ位なら、薫の心
(二)大君
(三)昨夜の始末につきての人の思はくを憚りて
(四)大君の心
(五)侍女等も方々の男から來る文などを取次ぎてそれに靡けといふ樣な事を言ひ出す始末なれば
(六)飛でもなき男の手につかまる事などもあるかも知れぬと
(七)薫の様子が實意のあるらしく、大君の心
(八)八宮
(九)薫が其氣なら大君を遣りたしと
(一〇)獨身で暮さん
(一一)夫を持たせて人並に暮させたらば
(一二)妹の夫にしてならば自分は姉故十分に世話もすべし
(一三)自分は誰も世話のしてくれてがなし
(一四)薫が通常の人で目にも立たぬ人物ならば年來の親切に對して薫の戀を聞入れぬでもなけれど
(一五)逢ふのが氣づまりな様な立派な様子で氣がおける相手故我は獨身で暮さん

まれず。名殘戀しうて、いとかく思はましかば、月頃も今まで心のどかならましや、など、歸らむことも(一)物憂く覺え給ふ。

(二)姫君は、(三)人の思ふらむ事のつゝましきに、頓にもうち臥され給はで、(四)頼もしき人なくて世を過す身の心憂きを、(五)ある人どもも、よからぬこと何やかやと、つぎつぎに隨ひつゝ、言ひ出づめるに、(六)心より外の事ありぬべき世なゝめり、と思し廻らすには、(七)この人の御けはひ有樣の、疎ましくはあるまじく、(八)故宮も、(九)さやうなる心ばへあらばと、をりをり宣ひ思すめりしかど、自らは(一〇)猶かくて過してむ。我よりはさま容貌も盛に、あたらしげなる中の君を、(一一)人並々に見なしたらむこそ嬉しからめ。(一二)人の上になしては、心の至らむかぎり思ひ後見てむ。(一三)自らの上のもてなしは、又誰かは見あつかはむ。(一四)この人の御樣の、斜にうち紛れたる程ならば、かく見馴れぬる年頃のしるしに、うちゆるぶ心もありぬべきを、恥かしげに見え(一五)にくき氣色も、なかなかいみじうつゝましきに、我世はかくて過しはててむ、と

露もえ分け侍るまじ。又人は(一)いかゞ推し量り聞ゆべき。(二)例の樣になだらかにもてなさせ給ひて、唯世に違ひたる事にて、今より後もたゞかやうにしなさせ給ひてよ。世に(三)うしろめたき心はあらじと思せ。斯ばかりあながちなる心の程も、哀と思し知らぬこそかひなけれ」とて、出で給はむ氣色もなし。大君「あさましう、かた(四)はならむ」とて、大君「今より後は、(五)さればこそもてなし給はむ儘にあらむ。今朝はまた聞ゆるに(六)隨ひ給へかし」とて、いと術なしと思したれば、薫「あな苦しや。曉(七)のわかれや。まだ知らぬことにて、實に惑ひぬべきを」と歎きがちなり。鷄も、何方にかあらむ、ほのかに音なふに、京思ひ出でらる。

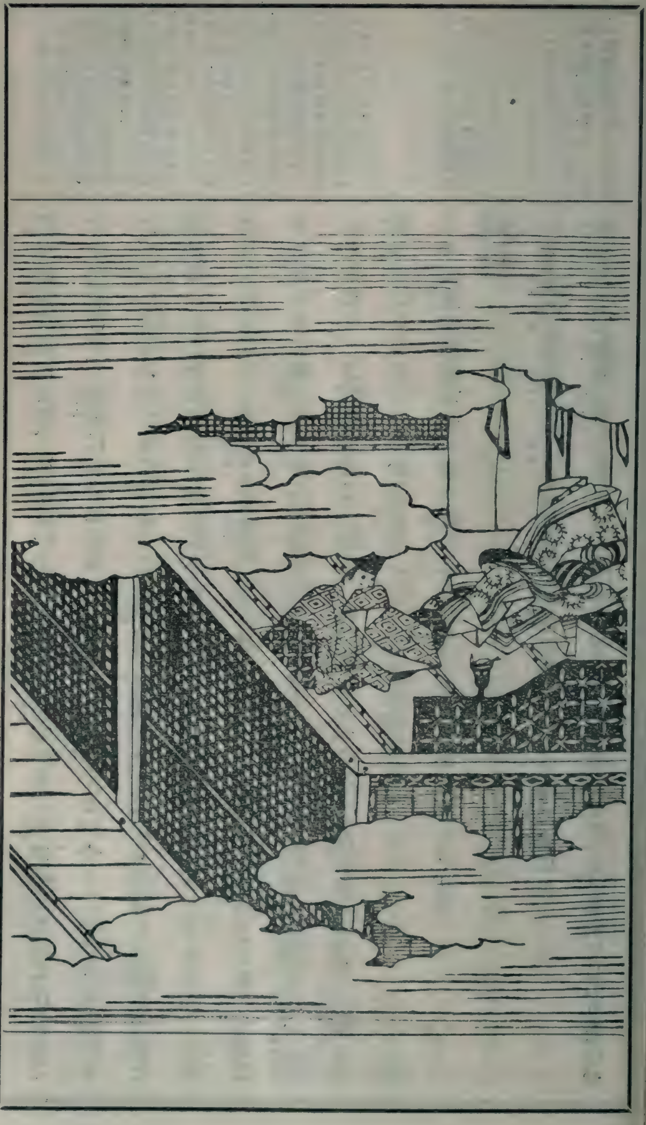
薫　山里のあはれ知らるゝ聲々に(八)とりあつめたるあさぼらけかな

女君、

大君　鳥の音も聞えぬ山とおもひしを世の憂きことは尋ね來にけり

障子口まで送り(九)奉り給ひて、昨夜入りし戸口より出でて、臥し(一〇)給へれどまどろ

(一)他人はかく綺麗な仲とは思ふまじ
(二)上べは通常の夫婦の様にして實際は世間竝の夫婦關係でなく
(三)無理往生な事をする了簡はないから安心せられよ
(四)歸らずに居られては見つともなし
(五)君の御心を酌めばこそ御意の通りにすべし
(六)我が意に隨ひ給へ
(七)「まだ知らぬ曉起きの別れには路さへまどふものにぞありける」
(八)物の哀を取り集めたる、とり—鳥、取り
(九)大君を薫が
(一〇)薫が



(一)大君の心、生きて居れば斯う心外な目にも逢ふ事よと
(二)涙が
(三)樣子
(四)薫が
(五)あかりのさしたる
(六)斯く面と向つて極り惡き思をせずに物越しに御目にかゝるならば
(七)せめて今でも出て行つて下され
(八)振りつけられた姉に眞の戀人の處に泊つた樣に朝早く歸る事も出來ぬ

ど思し出づるに、(一)實に、ながらへば心の外にかくあるまじき事も見るべきわざにこそは、と物のみ悲しうて、水の音に(二)流れ添ふ心地し給ふ。

はかなく明け方になりにけり。御供の人々起きて聲づくり、馬どもの嘶ゆるをも、旅の宿の(三)ある樣など人の語る(四)思しやられて、をかしうも思さる。(五)光見えつる方の障子を押しあけ給ひて、空の哀なるを諸共に見給ふ。女も少しゐざり出で給へるに、程もなき軒の近さなれば、荵の露もやう〳〵光り見えもて行く。互にいと艶なる樣かたちどもを、薫「何とはなくて、唯かやうに月をも花をも、同じ心に玩び、はかなき世の有樣を聞え合せてなむ、過さまほしき」と、いと懷しき樣して語らひ聞え給へば、やう〳〵怖ろしさも慰みて、大君「(六)斯ういとはしたなからで、物隔ててなど聞えば、誠に心の隔は更にあるまじくなむ」と答へ給ふ。明くなりゆき、村烏の立ちさまよふ羽風近う聞ゆ。夜深き朝の鐘の音かすかに響く。大君「(七)今だに。いと見苦しきを」と、いとわりなう恥かしげに思したり。薫「(八)ことあり顔に朝

めたる事めきてやは思さるべき。(一)なか〳〵なる御わきまへ心になむ」とて、かの物の音聞きし有明の月影より始めて、折々の思ふ心の忍び難くなりゆく樣を、いと多く聞え給ふに、(二)恥かしうもありけるかな、と疎ましう、(三)か〻る心ばへながら、つれなくまめだち給ひけるかなと、聞き給ふ事おほかり。御傍なるみじかき几帳を、佛の御方にさし隔てて、假初に添ひ臥し給へり。(四)名香のいとかうばしく匂ひて、樒のいと花やかに薫れるけはひも、(五)人よりはけに、佛をも思ひ聞え給へる御心にて煩はしく、(六)墨染の今更に、折節心いられしたる樣に、あは〳〵しう、思ひそめしに違ふべければ、か〻る忌なからむ程に、(七)この御心にも、さりとも少し撓み給ひなむなど、(八)せめてのどかに思ひなし給ふ。秋の夜のけはひは、か〻らぬ所だに、おのづから哀多かるを、まして峰の嵐も籬の蟲も、心細げにのみ聞きわたさる。常なき世の御物語に、(九)時々さしいらへ給へる樣、いと見所多くめやすし。(一〇)いぎたなかりつる人々は、斯うなりけりと(一一)氣色とりて皆入りぬ。(一二)宮の宣ひし樣な

(一)餘り分別すぎる
(二)大君の心
(三)先々から其樣な下心を持ちながら何くはぬ顏で眞面目腐つて居られたのかと
(四)佛前の香
(五)人一倍佛を尊む薫の氣質故其香が邪魔になりて
(六)まだ喪服で居る今大君を犯すのも餘りあせり過ぎて心なき仕方で從來のわが思はくに違ふ譯なれば
(七)大君の了簡も
(八)強ひて落著く
(九)大君が
(一〇)今まで寢こけて居たる侍女等は
(一一)樣子をけどりて
(一二)八宮

髪のこぼれかゝりたるを、かき遣りつゝ見給へば、（一）人（二）の御けはひ、思ふやうに薫をかしげなり。（三）かく心細うあさましき御住處に、好（四）いたらむ人はさはり所あるまじげなるを、我ならで尋ね來る人もあらましかば、さ（五）てや止みなまし、いかに口惜しきわざならましと、來（六）し方の心のやすらひさへ、危く覺え給へど、（七）いふかひなく憂しと思ひて泣き給ふ御氣色の、いといといとほしければ、斯（八）くはあらで、おのづから心ゆるびし給ふ折もありなむ、と思ひわたる。わ（九）りなき樣なるも心苦しくて、樣よくこしらへ聞え給ふ。大君「か（一〇）ゝる御心の程を思ひよらで、怪しきまで聞え馴れにたるを、（一一）ゆゝじき袖の色など、見顯し給ふ心あさゝに、自（一二）らのいふかひなさも思ひ知らるゝに、樣々慰む方なく」と怨みて、何心もなくやつれ給へる墨染の火影（一三）を、いとはしたなく侘しと思ひ惑ひ給へり。薫「いと斯（一四）うしも思さるゝ樣こそはと恥かしきに、聞えさせむ方なし。（一五）袖の色を引きかけさせ給ふはしも、理なれど、こゝら御覽じなれぬる志のしるしには、（一六）さばかりの忌おくべく、今始

（一）大君の顔を
（二）大君
（三）薫の心
（四）浮氣者がどんな事をしようと自由なるを
（五）それでおしまひになる譯
（六）今迄自分がぐづぐづして居た事をさへ
（七）大君が
（八）此樣な無理をせずとも、薫の心
（九）大君が非常につらき樣なるが氣の毒にて
（一〇）薫に此樣な心があるのを氣がつかずに
（一一）喪服にやつれて居る姿を見あらはす薫の思ひやりなさにつけて
（一二）自分の身分の賤しさも分りて
（一三）燈火のかげにて薫に見らるゝを
（一四）此程迄に恥しがらるゝも私を厭はるゝ故と思へば
（一五）喪中を口實にせらるゝは道理なれど、今迄盡し來た私の志に免ぜられたらば
（一六）喪服で見だてがない位の事を憚るべきではあるまい

(一)大君が不安心で
(二)わざと目のさめぬ樣して居る也
(三)靜養して
(四)遠方を來た私は
(五)大君の感じ
(六)大君が半分奥の間へ引込みかけたる處を
(七)薫を恥しめる樣子が
(八)私の隔てなき心が御分りにならぬ故分らせて上げ樣と思ふのぢや
(九)珍らかなりと仰しやるは私が何をすると思ひて仰せらるゝのか
(一〇)滅多な事はせぬ故さう怖がりなさるな
(一一)他人は私が此場合になつても手も出さずに居るとは思ふまじけれど私は手も出さずに馬鹿になつて居ります
(一二)大君の

べかゝめれば、いとしもまもり聞えず、さし退きつゝ、皆寄り臥して、佛の御燈火もかゝぐる人もなし。物むづかしうて、(一)忍びて人召せど驚かず。(二)大君「心地のかき亂り惱ましう侍るを、ためらひて、(三)曉方にも又聞えむ」とて、入り給ひなむとする氣色なり。薫「山路分け侍りつる人は、(四)ましていと苦しけれど、かう聞え承るに、慰めてこそ侍れ。うち捨てて入らせ給ひなば、いと心細からむ」とて、屏風をやをら押し開けて入り給ひぬ。いとむくつけうて、(五)半ばかり入り給へるに、(六)引き留められて、いみじうねたう心憂ければ、大君「隔無きとは、斯かるをやいふらむ。珍らかなるわざかな」と、(七)あばめ給へる樣のいよ〳〵をかしければ、薫「隔て(八)ぬ心を更に思しわかねば、聞え知らせむとぞかし。(九)珍らかなりとも、如何なる方に思し寄るにかはあらむ。佛の御前にて誓言も立て侍らむ。(一〇)うたて、な怖ぢさせ給ひそ。御心破らじと思ひそめて侍れば、(一一)人はかくしも推し量り思ふまじかゝめれど、世に違へるしれものにて過し侍るぞや」とて、心憎きほどなる火影に、(一二)御

(一)大體が珍らしくしはらしき心立の薫故
(二)大君佛間に居りて簾を隔てて薫に對面する也
(三)薫の居る處
(四)失禮な行儀をして居るから明るくしては困る
(五)側に寄りて臥したり
(六)仰山らしからぬ樣にして
(七)酒を
(八)侍女や供人等が
(九)大君薫の處は
(一〇)大君の樣
(一一)非常に薫の氣に入りて
(一二)薫の心、此位の隔に邪魔されて本望を遂げずにぐづ〳〵して居るとは馬鹿らし過ぎると
(一三)何くはぬ風で
(一四)侍女等が側に居る樣にと大君が言ひ附けおきたれど
(一五)大君がそんなに薫を警戒する必要はないと侍女等が思ひ居る樣子で別に張番もして居ず

うて、打解けて聞え給はむ事も、いよ〳〵苦しけれど、(一)大方にてはありがたう哀なる人の御心なれば、こよなくももてなし難うて、對面したまふ。(二)佛のおはする中の戸を開けて、燈明の火けざやかにかゝげさせて、簾に屏風を添へてぞおはする。(三)外にも大殿油參らすれど、「惱ましうて無禮(四)なるを、あらはに」など諫めて、(五)かたはら臥し給へり。御菓子など、(六)わざとはなくしなして參らせ給へり。御供の人々にも、故々しき肴などして、(七)出させ給へり。廊めいたる方に(八)集まりて、この(九)御前は人げ遠くもてなして、しめ〴〵と物語聞え給ふ。(一〇)打解くべうもあらぬものから、懐しげに愛敬づきて、物宣へる樣などの、(一一)斜ならず心に入りて、思ひ入らるゝもはかなし。(一二)かく程もなき物の隔ばかりを障り所にて、覺束なく思ひつゝ過す心おそさの、餘りをこがましうもあるかなと、思ひ續けらるれど、(一三)つれなくて、大方の世の中のことども、哀にもをかしうも、さま〴〵聞き所多く語らひ聞え給ふ。内には、(一四)人々近うなど宣ひおきつれど、(一五)さしもて離れ給はざらなむと思ふ

思ひの儘なるくだ〳〵しさを、聞え觸るべきにもあらず。(一)三條の宮は、親と思ひ聞ゆべきにもあらぬ御若々しさなれど、限あれば、容易く馴れ聞えさせずかし。その外の女は、すべていと疎くつゝましう怖ろしう覺えて、(二)心からよるべなく心細きなり。(三)等閑のすさびにても、懸想だちたることは、(四)いとまばゆくありつかず、はしたなき(五)骨々しさにて、まいて(六)心にしめたる方の事は、打出づることも難くて、怨めしうもいぶせくも、思ひ聞ゆる(七)氣色をだに見え奉らぬこそ、我ながら限なく頑しきわざなれ。(八)宮の御事をも、さりとも(九)あしざまには聞えじと、任せてやは見給はぬ」など言ひ居給へり。老人はた、(一〇)かばかり心細きに、(一一)あらまほしげなる御有様を、いと切にさもあらせ奉らばやと思へど、(一二)何方も恥かしげなる御有樣どもなれば、思ひの儘にはえ聞えず。

今宵は(一三)泊り給ひて、物語などのどやかに聞えまほしうて、(一四)やすらひ暮し給ひつ。(一五)あざやかならず、物恨みがちなる御氣色、やう〳〵わりなくなりゆけば、(一六)煩はし

(一)女三宮
(二)わが心がらで
(三)薫自身の性質をいふ
(四)恥かしく極りわるく
(五)無骨さにて
(六)思ひ込んで居る大君の事は言ひ出しかねて
(七)様子さへ大君に示さぬは
(八)匂宮
(九)薫が悪くは計らふまいと私に任せて下さらぬか
(一〇)辨の心
(一一)薫を大君の聟にするは願つたり叶つたりの御縁故是非成立たせたしと思へど
(一二)薫も大君も心深き人故
㊀ 薫又情を訴ふ、猶靡かぬ大君、中君を薫に與へんとす
(一三)薫が
(一四)ぐづ〳〵して日を暮したり
(一五)明かには言はずして大君のつれなきを恨む薫の様子
(一六)大君が

給ふめるに、(一)かの御方をさやうに趣けて聞え給はば、となむ思すべかンめる。宮の御文など侍るめるは、更に(二)まめ〳〵しき御事ならじと侍るめる」と聞ゆれば、「哀なる(三)御一言を聞き置き奉りにしかば、露の世にかゝづらはむ限は、(四)聞え通はむの心あれば、(五)何方にも見え奉らむ、同じ事なるべきを、然まではた、(六)思し寄るなる、いと嬉しき事なれど、(七)心の惹くかたなむ、斯ばかり思ひ捨つる世に、猶留まりぬべきものなりければ、改めて然は、(八)え思ひ直すまじくなむ。(九)世の常のなよびかなる筋にもあらずや。たゞかやうに物隔て、言残いたる様ならず、さし向ひて、とにかくに定なき世の物語を、隔なく聞えて、つゝみ給ふ御心の隈残らずもてなし(一〇)給はむなむ、(一一)兄弟などのさやうに睦まじき程なるも無くて、いとさうざうしくなむ、世の中の思ふ事の、哀にも、をかしうも、うれはしうも、時につけたる有様を、心に籠めてのみ過ぐる身なれば、流石にたづきなく覺ゆるに、(一二)疎かるまじう頼み聞ゆる。(一三)后の宮はた、馴れ〳〵しく、さやうに、そこはかとなき

(一)中君を薫が望む様なら薫に娶らせたしと大君が思ひ居られる
(二)本氣でするのではあるまじと思ひ居られる
(三)八宮の御頼ありし故
(四)常に御尋ね申すべき心故
(五)どの姫君を娶るも同じ譯なれど
(六)大君の思ひ附かるゝも
(七)好不好はいくら思ひ捨てた世の中でも矢張あるもの故
(八)乘り換へる氣にはなれぬ
(九)私の大君に對する心は通常の浮きたる戀にはあらず
(一〇)此句下の「頼み聞ゆる」へかゝる
(一一)私は
(一二)大君が疎々しからず同情して下されん事を望むばかり也
(一三)明石姫君、薫の姉、明石にはつまらぬ愚痴も言へぬと也

を捨て難く思ふ限は、程々につけてまかンで散り、昔のふるき筋なる人も(一)、多く見奉り棄てたるあたりに、まして今は暫時も立ちとまり難げに侘び侍りつゝ、(二)おはしましゝ世にこそ、(三)限ありて、かたほならむ御有様は、いとほしくもなど、古代なる御うるはしさに思しも滞りつれ、今はかう又頼みなき御身どもにて、如何にも如何にも世に靡き給へらむを、強に譏り聞えむ人は、却りて物の心をも知らず、言ふかひなき事にてこそはあらめ、(四)如何なる人か、いと斯くて世をば過しはて給ふべき。松の葉を(五)すきてつとむる山伏だに、生ける身の捨て難さによりてこそは、佛の御教をも、(六)道々別れては行ひなすなれ、などやうの善からぬ事を聞え知らせ、若き御心ども亂れ給ひぬべき事多く侍るめれど、(七)撓むべくもものし給はず、中の君をなむ、いかで(八)人めかしうもあつかひなし奉らむと、思ひ聞え給ふべかめる。(九)かく山深う尋ね聞えさせ給ふめる(一〇)御志の年經て、(一一)見奉り馴れ給へるけはひも、疎からず思ひ聞えさせ給ひ、(一二)今はとざまかうざまに、細なる筋に聞え通ひ

(一)古き縁故のある人々も
(二)八宮存生中こそ、此句「滞りつれ」へかゝる、以下「行ひなすなれ」迄侍る女等の日常姫君等を諌む詞をまねていふ
(三)身分が身分丈に餘り見つともなき事は出來ぬなどと昔形氣なきちやうめんな御氣性で嫁入らする事を躊躇もせられたが
(四)どの樣な人でも今の姫君等の樣にして一生を終る事は出來ぬ
(五)食して
(六)己々の流派をたてゝ
(七)大君が志を曲げさうにもせず
(八)並の女のくらしをさせたしと
(九)以下大君の分別を語る也
(一〇)薫の
(一一)薫の親しくなれるを姫君等の方でも睦まじく思ひ
(一二)色々立入りたる相談にも薫が預る樣な仲故

（一）下の事をいふ
（二）私は變な性分で此世に執著する心はなかりしに
（三）世人も私を大君の聟ぢや抔と評判する樣になりたれば
（四）八宮の御趣意にも背かず
（五）通常の夫婦の語らひをしたいものぢやと
（六）不似合かも知れぬが例のない事でもなし
（七）匂を中君にと申上げても安心の出來る相手として同意して下さらぬは何か姫君等の御考がある事と見える
（八）是が一通りのつまらぬ侍女であつたら
（九）體裁のよき事ばかり言ふ筈なるが、辨の君はさうはせず
（一〇）よい御緣ぢやがと思へど
（一一）相手の如何に拘はらず夫を持たるゝ御積はなし
（一二）侍女等
（一三）八宮御存生中さへ

やと、疑はしき事さへ添ひてなむ。おのづから聞き傳へ給ふ樣もあらむ。いと怪しき本性にて、世の中に心をしむる方（一）なかりつるを、然るべきにてや、斯うまで（二）も聞え馴れにけむ。世人（三）もやう〳〵言ひなす樣あるべかめるに、同じうは昔の（四）御事も違へ聞えず、我も人も世（五）の常に心とけて聞え通はばや、と思ひ寄るは、（六）つきなかるべき事にても、さやうなる例なくやはある」など宣ひ續けて、宮の（七）御事をも斯う聞ゆるに、うしろめたうはあらじと、打解け給ふさまならぬは、内々にさりとも思ほし向けたる事の樣あらむ。猶いかに〳〵」とうち眺めつゝ宣へば、（八）例のわろびたる女房などは、かゝる事には、憎きさかしらも言ひまぜて、言よ（九）がりなどもすめるを、いと然はあらず、心の中には、（一〇）あらまほしかるべき御事どもをと思へど、辨「もとより、かく人に違ひ給へる御癖どもに侍ればにや、如何に（一一）も如何にも、世の常に何やかやなど、思ひ寄り給へる御氣色になむ侍らぬ。かくて侍ふ（一二）これかれも、年頃（一三）だに、何の頼もしげある木の本のかくろへも侍らざりき。身

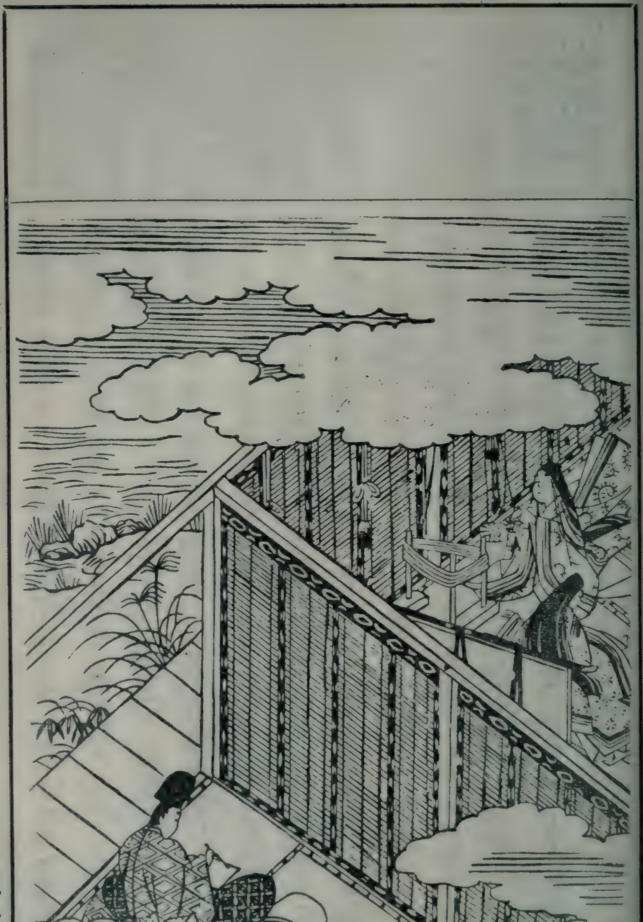
(一)愚なる私は何に附けても足らはぬ中にも
(二)私が夫を持つ事につきては
(三)父存生中も
(四)其點につきて斯かる場合は斯くせよ抔と
(五)色々の事につきての遺言に加へて
(六)八宮が
(七)何時迄も獨身で
(八)夫を持つ事は斷念せよといふ父の意向なりしならんと
(九)生先が長くて此儘埋れ木にするは可愛想な妹の身を
(一〇)どうかしてやりたく
(一一)若き女の事故大人らしく自分の事をはきはき言へぬも尤、薫の心
(一二)辨の君
(一三)佛法を習ふばかりが目的で
(一四)八宮が
(一五)姫君等をよき樣に世話してくれよと
(一六)八宮の御趣意とは違ひて
(一七)姫君等がひどく強情張らるゝはどんな御了簡があつてさうせらるゝのかと

あらむ人は、思ひ残すことはあるまじきを、(一)何事にも後れそめにける中に、(二)この宣ふめる筋は、(三)古も、更に(四)かけて、とあらばかゝらばなど、(五)行末のあらましごとにとりまぜて、(六)宣ひ置く事も無かりしかば、猶(七)かゝる樣にて、(八)世づきたる方を思ひ絶ゆべく、思しおきてけりとなむ思ひ合せ侍れば、ともかくも聞えむ方なくて。さるは少し(九)世籠りたるほどにて、み山隱には心苦しう見え給ふ人の御上を、いとかく朽木にはなしはてずもがなと、人知れず(一〇)あつかはしう覺え侍れど、如何なるべき世にかあらむ」と、打歎きて物思ひ亂れ給ひけるけはひ、いと哀げなり。(一一)けざやかに大人びても、いかでかはさかしがり給はむと、理にて、例の(一二)ふる人召し出でて語らひ給ふ。辨「年頃は、たゞ(一三)後の世樣の心ばへにて、進み參りそめしを、物心細げに思しなる(一四)めりし御末の頃ほひ、(一五)この御事どもを心に任せてもてなし聞ゆべくなむ宣ひ契りてしを、(一六)思しおきて奉り給ひし御有樣どもには違ひて、(一七)御心ばへどもの、いとゞ生憎に物強げなるは、いかに思しおきつる方の異なるに

(一)類なき悲に何時死ぬかも知れぬ命なるに、君と長き契を結ぶ杯とは以ての外
(二)「片絲を彼方此方によりかけてあはずば何を玉の緒にせん」
(三)薫自身の大君に對する戀は相手が相手にならず極りが惡き故言ひ出しにくゝて匂を中君に媒する方の事を大君に話す
(四)匂は女好故さ程深くは思はねど、一旦言ひ出した事を引込めぬ了簡で中君の事を今だに言ひ居るのかも知れぬと色々氣を引いて見たり
(五)所が匂は實際熱心なので中君をまかせても不安心な點はなさそうなのになぜ強ひて拒まるゝぞ
(六)隔がましくして私の言ふ事を御聞入れなき故
(七)私の心持と齟齬して
(八)御分別のある處をはつきり承りたし
(九)御親切を無にすまじと思へばこそ世間に類のない程打解けて萬事御世話にもなり居る也
(一〇)君の御志の淺い處もある樣に思はる

(大君)(一)ぬきもあへずもろき涙の玉のをに長きちぎりをいかゞむすばむ

とあれば、(中君)(二)「あはずば何を」と、怨めしげに眺め給ふ。(三)自らの御上は、斯くそこはかとなくもて消ちて、恥かしげなるに、すか〴〵ともえ宣ひ寄らで、宮の御事をぞまめやかに聞え給ふ。(中君)(四)「さしも御心に入るまじきことを、かやうの方に少しすゝみ給へる御本性にて、聞えそめ給ひけむまけじ魂にやと、とざまかうざまに、いとよくなむ御氣色見奉る。(五)誠にうしろめたうはあるまじげなるを、など斯う強ちにしも、もてはなれ給ふらむ。世の有様など思しわくまじくは見奉らぬを、うたて(六)遠々しくのみもてなさせ給へば、かばかりうらなく頼み聞ゆる(七)心に違ひて怨めしくなむ。ともかくも(八)思しわくらむ様などを、さわやかに承りにしがな」と、いとまめだちて聞え給へば、(大君)(九)「違へ聞えじの心にてこそは、かうまで怪しき世の例なる有様にて、隔てなくもてなし侍れ。それを思しわかざりけるこそは、(一〇)淺き事もまじりたる心地すれ。實にかゝる住居などに、心



（一）薫や阿闍梨が無くばどうするならんと
（二）薫
（三）服あけの見舞
（四）佛前の香机の四隅に結び垂るゝ絲也といふ
（五）「身をうしと思ふに消えぬものなれば斯くても經ぬる物にぞありける」
（六）姫君等が
（七）絲くり臺、方形の臺に柱を立てたる物
（八）名香の絲を搭へ居るならんと薫が察して
（九）「より合せてなくなる聲を絲にしてわが涙をば玉に貫かなん」伊勢が七條后薨去の時よめる歌
（一〇）薫の誦するを聞く人々の思ふ也
（一一）姫君等
（一二）「絲による物ともなしに別路の心細くも思ほゆる哉」、姫君等の心
（一三）生別をさへ心細き事に言へるに、是は死別なれば一層の悲なりと
（一四）佛前にてよみあぐる文を薫が起稿する也
（一五）願文に
（一六）總角結びにする名香の絲の幾度も同じ處へ出逢ふ如く君と我と逢ひたし

従ひて營み給ふも、いと物はかなく哀に、（一）斯かる餘所の御後見なからましかば、と見えたり。自らも（二）まうで給ひて、今はと脱ぎ（三）捨て給ふほどの御訪らひ淺からず聞え給ふ。阿闍梨もこゝに參れり。名香（四）の絲ひき亂りて、（五）「かくても經ぬる」など、うち語らひ給ふ程なりけり。結びあげたる（七）たよりの、簾のつまより、几帳の綻に（六）透きて見えければ、その（八）事と心得て、薫（九）「我が涙をば玉にぬかなむ」とうち誦し給へる、伊勢の御も斯うこそはありけめと、（一〇）をかしう聞ゆるも、（一一）内の人は、聞き知り顔に、さしいらへ給はむもつゝましうて、（一二）「物とはなしに」とか、（一三）貫之がこの世ながらの別れをだに、心細き筋にひきかけけむをなど、實に故事ぞ、人の心をのぶるたよりなりけるを、思ひ出で給ふ。（一四）御願文つくり、經佛供養せらるべき心ばへなど、（一五）書き出で給へる硯のついでに、客人、

薫（一六）あげまきに長きちぎりをむすびこめおなじ所によりもあはなむ

と書きて見せ奉り給へば、例のとうるさけれど、

❶ 八宮の一週忌の用意
薫大君の靡かぬを恨む

(一)宇治大君が八宮の一週忌の法事を
(二)薫
(三)姫君等は

總角

梗概

❶ 八宮の一週忌の用意。薫、大君の靡かぬを恨む。❷ 薫又情を大君に訴ふ。尚靡かぬ大君。中君を薫に與へんとす。❸ 薫、大君に迫る。大君逃れて逢はず。❹ 薫、匂宮と共に宇治に行かん事を約す。❺ 薫、匂宮と宇治に行く。戀を遂げたる匂宮、遂げざる薫。❻ 匂宮又宇治に行く。❼ 三日の夜の宇治の待受。匂宮、内裏を拔け出でて宇治に行く。中君との中睦じ。❽ 匂宮、薫を誘ひて宇治に行く。猶戀を遂げぬ薫。薫、匂宮等の苦心。❾ 匂宮宇治に船遊す。中君に逢はんとして得ず。❿ 大君姉妹の憂愁。⓫ 匂宮嚴しく監督せらる。薫の後悔。⓬ 匂宮、女一宮の侍女に戲れて宇治に疎し。⓭ 薫、大君の病を訪ふ。⓮ 大君等の憂愁。匂宮猶宇治を訪はず。⓯ 薫、宇治を訪ふ。大君の病篤し。出家の望。⓰ 薫の看護。大君逝去。葬送。⓱ 薫、宇治の宮に籠居す。⓲ 匂宮、宇治へ弔に行く。心解けぬ中君。⓳ 薫、京に歸らんとす。匂宮、中君を京に引取らんとす。

あまた年、耳馴れ給ひにし河風も、この秋はいとはしたなく物悲しくて、御はて(一)の事急がせ給ふ。大方のあるべかしき事どもは、中納言殿(二)、阿闍梨なむ仕う奉り給ひける。(三)此處には法服の事、經の飾、こまかなる御あつかひを、人の聞ゆるに

(一)中君よりも
(二)中君

なり。紫の紙に書きたる經を、片手に持ち給へる手つき、彼(一)よりも細さ勝りて、瘠せ〳〵なるべし。立ちたりつる君(二)も、障子口に居て、何事にかあらむ、こなたを見おこせて笑ひたる、いと愛敬づきたり。

なして、珠數ひき隱して持給へり。いと(一)そびやかに、樣體をかしげなる人の、髮袿に少し足らぬ程ならむと見えて、末まで(二)塵のまよひなく、艶々とこちたう美しげなり。(三)傍めなど、あならうたげと見えて、匂ひやかに柔かにおほどきたるけはひ、(四)女一宮も斯う樣にぞおはすべきと、ほの見奉りしも思ひ比べられて、打歎かる。(五)またゐざり出でて、大君「(六)かの障子は、あらはにもこそあれ」と見おこせ給へる用意、打解けたらぬ樣して、由あらむと覺ゆ。頭つき、かんざしのほど、(七)今少しあてになまめかしき樣なり。侍女「(八)彼方に屏風も添へて立てて侍りつ。急ぎてしものぞき給はじ」と、若き人々何心なく言ふあり。大君「いみじうもあるべきわざかな」とて、うしろめたげにゐざり入り給ふ程、氣高う心にくきけはひ添ひて見ゆ。(九)黑き袷一襲、(一〇)同じやうなる色あひを著給へれど、これはなつかしうなまめきて、哀げに心苦しうおぼゆ。(一一)髮さばらかなる程に落ちたるなるべし、末少し細りて、(一二)色なりとかいふめる、翡翠だちていとをかしげに、絲をよりかけたる樣

(一)すらりとして
(二)少しも亂れず
(三)横顔
(四)明石中君腹、今上の第一女
(五)又一人出來たる也、是大君也
(六)薫ののぞき居る方の唐紙が唐紙一重にて外に隔つるものなきを見て彼方より見えん事を危む也
(七)中君よりも
(八)薫の間の方には唐紙に添へて屏風も立ててあり
(九)大君の服裝
(一〇)中君と同じ樣なる
(一一)少し薄き樣をいふ
(一二)翡翠色即ちかはせみの羽色の樣なるを單にいろともいふなるべし

(一)宮のおはせし西の廂に、宿直人召し出でて(二)おはす。そなたの母屋の佛の御前に、(三)君達ものし給ひけるを、(四)け近からじとて、我が御方にわたり給ふ御けはひ、忍びたれど、自らうちみじろき給ふ程近く聞えければ、なほあらじに、此方に通ふ障子のはしの方に、かけがねしたる所に、(五)穴の少し開きたるを見置き給へりければ、外に立てたる屛風をひき遣りて見給ふ。(六)こゝもとに几帳を添へて立てたる、あな口惜しと思ひて、ひき歸る折しも、風の簾をいたう吹き揚ぐべかンめれば、女房「あらはにもこそあれ。その御几帳押し出でてこそ」といふ人あンなり。(七)をこがましきものの嬉しうて、見給へば、(八)高きも短きも、几帳を(九)二間の簾に押し寄せて、この障子に向ひて、あきたる障子より、(一〇)彼方に通らむとなりけり。(一一)まづ一人たち出でて、几帳よりさしのぞきて、この御供の人々の、とかう行きちがひ、涼みあへるを見給ふなりけり。(一二)濃き鈍色のひとへに、(一三)萱草の(一四)袴のもてはやしたる、なかなか様かはりて花やかなりと見ゆるは、著なし給へる人柄なンめり。帶はかなげにし

(一)八宮
(二)薫が
(三)姫君等
(四)薫の居所より遠ざからんとて
(五)薫がじつとしては居られず
(六)薫ののぞき居る方へよせて几帳が立ててある故見えぬ也
(七)几帳を簾の方へ押し出せば却て薫の方よりはあらはに見ゆる故をこがましく薫が思ふ也
(八)丈高き几帳をも低き几帳をも
(九)次の間
(一〇)姫君が自分の居間へ行かんとする積
(一一)中君也
(一二)中君の服裝、鈍色は鼠色、喪服也
(一三)萱草の花の色
(一四)ひき立たせたる樣

(一)共様な浮氣な事では宇治へ取持つ事はできぬ
(二)今の浮氣は氣に入つた女が手に入らぬ間の當座の慰ぢや
(三)匂が夕霧の六女の聟に望まれて居ながら一向構ひつけぬを
(四)夕霧
(五)夕霧の娘を匂が貰ふは餘り平凡なるのみならず夕霧が萬事手重く面倒にて滅多な事をすると見咎められるのが嫌で
(六)内々は
(七)六の君の事を承知せず
【十二】薫大君姉妹を隙見す
(八)女三宮
(九)薫が
(一〇)薫
(一一)大君は自分の物と極めては居ながら
(一二)常人が打解けぬ間は此方から戯れかゝりて無理な事をすまじと
(一三)八宮に盡す我志の深さに大君が感動せよかしと
(一四)薫が宇治へ

ざまをも、見顯す時々は、薫「いかでか(一)斯からむには」など申し給へば、宮も御心づかひし給ふべし。匂「心(二)に叶ふあたりを、まだ見つけぬ程ぞや」と宣ふ。大殿(三)の六の君を思し入れぬこと、なま怨めしげに(四)大臣も思したりけり。されど、匂「ゆか(五)しげ無き中らひなる中にも、大臣のことごとしく煩はしくて、何事の紛をも見咎められむがむづかしき」と、下(六)には宣ひてすまひ(七)給ふ。

その年三條の宮燒けて、入(八)道宮も六條院に移ろひ給ひ、何くれと物騷がしきにまぎれて、宇治のわたりを久しう音(九)づれ聞え給はず。まめやかなる人(一〇)の御心は、又いと異なりければ、いとのどかに、己(一一)が物とはうち頼みながら、女(一二)の心ゆるび給はざらむ限は、あざればみ情なき樣に見えじと思ひつゝ、(一三)昔の御心忘れぬ方を深く見知り給へと思す。

その年常よりも暑さを人々わぶるに、河面涼しからむはやと思ひ出でて、(一四)俄にまうで給へり。朝すゞみの程に出で給ひけれど、生憎にさしくる日影まばゆくて、

㊉ 匂宮、中君を挑む、中君肯かず

(一)匂が「同じかざしを折りてける哉」とよみし去年の事を思ひ出して
(二)匂が
(三)去年は餘所ながらにのみ見し姫君を今年は直接に手に入れたし
(四)よい氣になりて
(五)中君が
(六)表向の挨拶だけは美しくして先方の體面を缺かさじとて
(七)私は猶父の喪に籠り居る身分故中々其樣な事はなされ難き筈
(八)中君が丸で相手にならず
(九)匂が
(一〇)薫が
(一一)姫君の萬事を支配せる監督者の樣な顏をして應答して
(一二)匂の浮氣らしき點を見つくると

折過さず訪ひ聞え給ふ。うるさく何となき事多かる樣なれば、例の書き漏したるなゝめり。

花ざかりの頃、宮かざし(一)を思し出でて、その折見聞き給ひし君達なども、君達「いと故ありし親王の御住居を、またも見ずなりにし事」など、大方のあはれを口々聞ゆるに、いと(二)ゆかしう思されたり。

匂「つて(三)に見しやどの櫻をこのはるはかすみへだてず折りてかざさむ

と心を(四)やりて宣へりけり。あるまじき事かなと見給ひ(五)ながら、いと徒然なる程に、見所ある御文の、上べ(六)ばかりを持て消たじとて、

中君「いづく(七)とか尋ねて折らむ墨ぞめにかすみこめたるやどのさくらを

猶かくさし(八)離ちて、つれなき御氣色のみ見ゆれば、誠に心憂しと思しわたる。御心(九)に餘り給ひては、唯中納言を、とざまかうざまに責め恨み聞え給へば、をか(一〇)しと思ひながら、いと(一一)うけばりたる後見顏にうち答へ聞えて、あだ(一二)めいたる御心

所々に、御庄(一)など仕うまつる人々に、御秣とりに遣りける、君も知り給はぬに、田舍びたる人々(二)、おどろ〳〵しくひき連れ參りたるを、怪しうはしたなきわざかなと御覽ずれど、老人(三)にまぎらはし給ひつ。大方(四)かやうに仕うまつるべく、仰せ置きて出で給ひぬ。

年かはりぬれば、空の氣色うらゝかなるに、汀の氷解けわたるにつけても、斯うまでながらへけるも有り(五)がたくも、と(六)眺め給ふ。聖(七)の坊より、「雪消に摘みて侍るなり」とて、澤の芹、峰の蕨など奉りたり。いもひ(八)の御臺に參れる。「所につけては、かゝる草木の氣色に從ひて、行きかふ月日のしるしも見ゆるこそをかしけれ」など、人々の言ふを、何のをかしきならむと聞き給ふ。

大君(九)　君がをる峰のわらびと見ましかば知られやせまし春のしるしも

中君(一〇)　雪深きみぎはのこぜり誰がために摘みかはやさむ親なしにして

など、はかなきことどもを打語らひつゝ明し暮し給ふ。中納言殿よりも宮よりも、

(一)薫の領地の世話する人々の處へ秣を取りにやりし事は供人の計らひにて薫は知らぬに
(二)薫が
(三)辨にあはん爲に此處へは來たる由に田舍人等の前は言ひくろめたり
(四)いつも此通りに宇治の姬君方へ氣をつけて仕へよと
(五)案外なる事哉と
(六)姬君等が
(七)山の阿闍梨
(八)精進の膳部に其蕨芹を料理してつけたり
(九)此蕨も父上の折りてよこし給ひし物ならば興をも覺えんものを
(一〇)父君がなき今は誰の爲に小芹をも摘みて賞翫すべき

と見聞き居給へり。御菓子よしある樣にてまゐり、御供の人々にも、肴などめやすき程にて、土器さし出させ給ひけり。かの御うつり香もてさわがれし宿直人ぞ、(一)鬘鬚とかいふ頬つき、心づきなくてある。(二)はかなの御たのもし人やと見給ひて、召し出でたり。薫「如何にぞ。(三)おはしまさで後、心細からむな」と問ひ給ふ。うち顰みつゝ、心弱げに泣く。宿直人「世の中に賴むよるべも侍らぬ身にて、(四)一所の御蔭に隱れて、三十餘年を過し侍りにければ、今はまして、(五)野山にまじり侍らむも、如何なる木の本をかは賴むべく侍らむ」と申して、いとゞ(六)人わろげなり。(七)おはしましゝ方あけさせ給へれば、塵いたう積りて、佛のみぞ、花のかざり衰へず、(八)行ひ給ひけりと見ゆる御床など取りやりて、かき拂ひたり。(九)本意をも遂げばと契り聞えしこと思し出でて、

薫　(一〇)立ちよらむかげとたのみし椎が本むなしき床になりにけるかな

とて柱に寄り居給へるをも、若き人々はのぞきてめで奉る。日暮れぬれば、近き

(一)長く垂れたるをいふか、又つくり鬚をいふか、未詳
(二)此男が姫君等の便とは餘り力にならな過ぎると
(三)八宮の
(四)八宮御一人の
(五)落ぶれて路頭に迷ふにしても
(六)見つともなげなり
(七)八宮の居られし持佛の方
(八)八宮が常に坐りて勤をせられし物と見ゆる床をかたづけて
(九)薫が私が出家したらば八宮を師と賴まんと
(一〇)師と賴むべしと思ひし八宮が亡くなられたる悲しさよ



薫「つらゝとぢこまふみしたく山河を(一)しるべしがてらまづや渡らむ
然らばしも(二)、影さへ見ゆる(三)しるしも、淺うは侍らじ」と聞え給へば、思はずにも(四)のしうなりて、殊にいらへ給はず。けざやかに(五)、いと物遠くすみたる樣には見え給はねど、今やうの若人達のやうに、艶氣にもてなさで、いとめやすく長閑なる心ばへならむとぞ、推し量られ給ふ人(六)の御けはひなる。斯うこそはあらまほしけれと、思ふ(七)に違はぬ心地し給ふ。事に觸れて(八)氣色ばみよるも、知らず顏なる樣にのみもてなし給へば、心恥かしうて、昔物語などをぞ、物まめやかに聞え給ふ。供人「暮れはてなば、雪いとゞ空も閉ぢぬべう侍り」と、御供の人々聲づくれば、かへり給ひなむとて、薫「心苦しう見めぐらさるゝ御住居の樣なりや。唯山里の樣にいと靜なる(九)所の、人も行きまじらぬ所に侍るを、さも思しかけば(一〇)、如何に嬉しく侍らむ」など宣ふも、いとめでたかる(一一)べきことかなと、片耳に聞きて、うち笑む女ばらのあるを、中の君は、いと見苦しう、如何にさやうにはあるべきぞ

(一)匂宮を取持つ瀬踏みに私がまづ君に對して思を遂げたし
(二)さうなつてこそ御媒も十分心を入れてする事も出來よう
(三)「淺香山影さへ見ゆる山の井の淺き心は我が思はなくに」「しるし」は「しるべ」の誤ならんといふ
(四)大君が案外で
(五)薫の眼より見たる大君の樣子、離れきつて近づき難くすましたる風ではなけれど
(六)大君の
(七)薫がかねての推量に違はぬ樣に思ふ
(八)薫は機會を求めては戀慕の情を仄めかせども
(九)靜かな私の屋敷が
(一〇)其處へ引移る御積があらば
(一一)薫に姫君が引取らるゝ事にならば結構至極な事と

(一)中君の事にして自分は親らしき地位に立ちて返事すべしと
(二)男女の中の方へ話を持つて行かるゝ故御返事も出來ぬ
(三)匂の話を大君御自身の事に思ひなさるにも及ばぬ、御自身の方は私が私の篤き志を御分り下さる丈で十分なり
(四)姉としての心持
(五)匂の懸想し居るは中君の方也
(六)匂が中君に文をやりし事を仄めかしたる事もあれど
(七)匂への返事を御兩人の中誰がなさるか
(八)大君の心、よく今迄匂へ自分が返事をせざりし事よ
(九)若し返事した事があらば
(一〇)我は君以外に文を通はしたる事なし
(一一)言譯をなさる丈却て氣がおかれる

御自らの事とは思しもかけず、(一)人の親めきて答へむかし、と思しめぐらし給へど、猶いふべき言の葉もなき心地して、大君「如何にとかは、かけ(二)〴〵しげに宣ひ續くるに、なか〴〵聞えむことも覺え侍らで」と、うち笑ひ給へるも、おいらかなるものから、けはひをかしう聞ゆ。薫「必ず(三)御自ら聞しめし負ふべき事とも思う給へず。それは雪を踏み分けて、參り來たる志ばかりを、御覽じわかむ(四)御このかみ心にても、過させ給ひてよかし。(五)かの御心よせは、又異にぞ侍かゝめる。(六)ほのかに宣ふ樣もはべゝめりしを、いさや、それも人のわき聞え難きことなり。御返などは、(七)何方にかは聞え給ふ」と問ひ申し給ふに、(八)ようぞ戲にも聞えざりける、何となけれど、かう宣ふにも、(九)いかに恥かしう胸つぶれまし、と思ふに、え答へやり給はず。

大君(一〇)雪ふかき山のかけはし君ならでまたふみかよふあとを見ぬかな

と書きてさし出し給へれば、薫(一一)「御ものあらがひこそ、なか〴〵心おかれ侍りぬべけれ」とて、

人は聞えなすべかめれど、心の底怪しう深うおはする宮なり。(一)なほざりごとなど宣ふわたりの、心輕うて、靡きやすなるなどを、珍らしからぬものに思ひおとし給ふにやとなむ聞く事も侍り。何事にもあるに從ひて、(二)心をたづる方もなく、おほどけたる人こそ、唯世のもてなしに從ひて、(三)とあるもかゝるも斜に見なし、少し心に違ふ節あるにも、(四)いかゞはせむ然るべきにぞなども、思ひなすべかめれば、なか(五)〳〵心長き例になる樣もあり。(六)崩れそめては、(七)龍田の川の濁る名をもけがし、いふがひなく名殘なきやうなる事なども、皆うちまじるめれし。(八)心の深くしみ給ふべかめる御心樣にかなひ、ことに背く事多くなど、ものし給はざらむをば、更に輕々しく、はじめをはり違ふやうなる事など、見せ給ふまじき氣色になむ。(九)人の見奉り知らぬことを、いとよう見聞えたるを、もし似つかはしく、さも(一〇)やと思し寄らば、そのもてなしなどは、心のかぎり盡して仕う奉りてむかし。御(一一)中道のほど、みだり脚こそ痛からめ」と、いとまめやかにて言ひ續け給へば、我が(一二)

(一)一寸冗談いうても靡く女を
(二)我をたてず
(三)どの樣な事をも大目に見て
(四)仕方がない是も運命ぢやと諦めれば
(五)男の浮氣なるが却て末の遂げる元になる事もあり
(六)一旦中が破れ初めると
(七)名譽をも汚し丸で緣が切れて仕舞ふ事もある、「龍田の川の」は「濁る」の枕詞
(八)匂は自分の好によく叶ひ氣に入らぬ事少き女をば輕々しく捨てゝ首尾を全うせぬ樣な人ではなし
(九)我は匂に就いて他人の知らぬ點迄知り居るが
(一〇)匂を夫にしてもよしとの御心あらば媒人の役は出來る丈致すべし
(一一)若しさうならば彼是の中を取持つに嘸脚がくたびれるであらう
(一二)大君が自身の事とは思はず

れて、御座などひきつくろはせ給ふ。(一)墨染ならぬ御火桶、物の奧なる取り出でて、塵掻き拂ひなどするにつけても、宮の(二)待ち喜び給ひし御氣色などを、人々も聞え出づ。(三)對面し給ふことをば、(四)つゝましくのみ思いたれど、大君(五)「思ひ隱なきやうに人の思ひ給へれば、いかゞはせむ」とて(六)聞え給ふ。打解くとはなけれど、さきぐよりは少し言の葉續けて、物など宣へる様、いとめやすく心恥かしげなり。かや(七)うにてのみは、え過しはつまじと(八)思ひなり給ふも、いと(九)うちつけなる心かな、猶移りぬべき世なりけりと(一〇)思ひ居給へり。薫「宮の(一一)いと怪しく怨み給ふことの侍るかな。哀なりし御一言(一二)を承り置きし様など、事の序にも漏し聞えたりけむ、又いと隈なき御心のさがにて、推し量り給ふにや侍らむ、(一三)こゝになむ、ともかくも聞えさせなすべきと賴むを、つれなき御氣色なるは、もてそこなひ聞ゆるぞと、度度怨じ給へば、(一四)心より外なる事と思ひ給へれど、(一五)里のしるべいとこよなうもえあらがひ聞えぬを、(一六)何かは、いとさしもてなし聞え給ふらむ。好い給へるやうに

(一)喪中は火鉢も黒きを用ひ居る也
(二)いつも薫の來訪を喜びし様子抔を
(三)薫に
(四)大君が
(五)對面せぬと思ひ遣りなく人の親切を無にする様に薫が思ふ故仕方がない
(六)薫に應答す
(七)此様な交際で何時迄も居る譯にはゆかぬ、矢張手に入れねば滿足が出來ぬと
(八)薫が
(九)突然なる出來心哉、矢張人の心は移り氣なるもの哉と
(一〇)薫が
(一一)匂宮
(一二)八宮の御遺言を我が受けし事を私が事の序に匂に話した事があるかも知れぬ
(一三)以下「聞ゆるぞ」迄は、薫の詞、姫君等の身の上は、薫次第になる筈なるに、匂が文をやりても返君のつれなきは薫の仕方が惡いのぢやと
(一四)思もよらぬ事とは
(一五)取持をすべき地位の私故強く斷る譯にもゆかず、「あまのすむ里のしるべにあらなくにうらみんとのみ人の言ふらん」
(一六)なぜ其様に振附けなさる

(一)此方からは毎年必ず
(二)向の山に
(三)八宮が假令出家せられても生きてさへ居られれば
(四)父の逝去後寺への往復も絶えたる今は、かの山の松の雪をも我は一入あはれと眺むる也、君は何と思はるゝぞ
(五)松につもる雪は消えても又降り添ふ事あれば亡き人の再び歸らぬには比ぶべくもなし
㊈ 薫中君を匂宮に媒せんとするにつけて己の戀を大君に打明く
(六)薫
(七)一寸は尋ねる譯にもゆくまいと思ひて又宇治を訪問せり
(八)一通りの人さへ來訪せずなりたるに
(九)薫が立派な樣子で
(一〇)姫君方でいつもよりは丁寧に取扱ひて

必ず、冬籠る山風防ぎつべき綿衣など遣しゝを、思し出でて遣り給ふ。法師ばら(一)童などののぼり行くも、見えみ見えずみ、いと雪深きを、泣く〳〵立ち出でて見送り給ふ。(二)姫君等「(三)御髪などおろし給ひても、さる方にておはしまさましかば、かやうに通ひ参る人も、自ら繁からまし。いかに哀に心ぼそくとも、逢ひ見奉ることと絶えて止ままましやは」など語らひ給ふ。

大君(四)君なくて岩のかけ道絶えしより松の雪をもなにとかは見る

中の君、

奥山の松葉につもる雪とだに消えにし人をおもはましかば

(五)羨ましくぞまたも降り添ふや。

(六)中納言の君は、新しき年は(七)ふとしもえ訪ひ聞えざらむと思して、おはしたり。雪もいと所せきに、(八)よろしき人だに見えずなりにたるを、(九)斜ならぬけはひして、輕らかに物し給へる心ばへの、淺うはあらず思ひ知られ給へれば、(一〇)例よりは見入



(一)例見ぬ人影もうち連れ、聲づくれば、まづ胸つぶれて、物怖ろしく佗しう覺ゆる事さへ添ひにたるが、いみじう堪へ難きこと」と、(二)二所うち語らひつゝ、干す世もなくて過し給ふに、年も暮れにけり。雪霰降り敷く頃は、いづくも斯くこそはある風の音なれど、今始めて思ひ入りたらむ山住の心地し給ふ。女ばらなど、「あはれ年は更りなむとす。(三)心細く悲しき事を、改まるべき春待ち出でてしがな」と、(四)心を消たず言ふもあり。難き事かなと(五)聞き給ふ。(六)向の山にも、時々の御念佛に(七)籠り給ひし故こそ、人も參りかよひしか、阿闍梨も、(八)如何と、大方に稀に(九)おとづれ聞ゆれど、今は何しにかはほのめき參らむ。いとゞ人目の絶えはつるも、然るべき事と思ひながら、いと悲しくなむ。何とも見ざりし山賤も、(一〇)おはしまさで後、たまさかにさしのぞき參るは、珍らしく覺え給ふ。この頃の事とて、薪木實拾ひて參る山人どもあり。阿闍梨の室より、炭などのやうの物奉るとて、阿闍梨「(一一)年頃に習ひ侍りにける宮仕の、今はとて絶え侍らむが、心ぼそきになむ」と聞えたり。

(一)見馴れぬ人が打連れ來て案内をすると
(二)姉妹二人
(三)此悲しい運命が直る様な春が來ればよい
(四)未來に希望を持ちて
(五)姫君等が
(六)阿闍梨の寺
(七)八宮が
(八)姫君等の御機嫌如何と
(九)便りはよこせど用もなき故自身來訪はせず
(一〇)八宮の逝去後に
(一一)毎年定例で差上げた物を八宮が御逝去なりとてやめるのは心細き故不相變進上いたします

ぬ」と申せば、眺めさして立ち給ふに、雁鳴きてわたる。

薫（一）秋霧のはれぬ雲居にいとどしくこの世をかりと言ひ知らすらむ

兵部卿宮に（二）對面し給ふ時は、まづこの君達の御事を（三）あつかひぐさにし給ふ。（四）今はさりとも心やすきをと思して、（五）宮は懇に聞え給ひけり。はかなき御返も、聞えにくゝつゝましき方に、（六）女がたは思いたり。（七）世にいといたう好き給へる御名の廣りて、（八）好しく艶に思さるべかゝめるに、かういと埋れたる葎の下よりさし出でたらむ手つきも、いかに初々しく古めきたらむ、など（九）思ひくたし給へり。

姫君等「さても、あさましうて明け暮さるゝは月日なりけり。かく頼み難かりける（一〇）御世を、（一一）昨日今日とは思はで、（一二）唯大方定なきはかなさばかりを、旦暮のことに聞き見しかど、（一三）我も人も後れさきだつ程しもやは經むなど、うち思ひけるよ。來し方を思ひ續くるも、何の頼もしげなる世にもあらざりけれど、唯いつとなく長閑に眺め過し、物怖ろしくつゝましき事もなくて經つるものを、（一四）風の音も荒らかに、

（一）唯さへ胸の思の晴れぬ處へいとゞ雁までが此世の假なることを告ぐるか
（二）顏が
（三）話の種
（四）もう斯うなれば事が安いと
（五）句が
（六）姫君の方では
（七）句は甚しき浮氣者といふ評判、以下姫君等の心
（八）句は萬事浮々と伊達な氣風の人ならんに
（九）自分を見くびり居る
㊅心細き宇治の住居
（一〇）父の命なるに
（一一）昨今死別るべきものとは思はずして
（一二）世間の無常といふ事は常に父に聞かされて居たれど
（一三）只一概にすべての人がやかて引續き死にゆくものと計り思ひて、斯く死殘る悲しさ抔は考へざりし事よ
（一四）今では

る序なく、（一）忍び籠めたりけれど、（二）中納言の君は、（三）ふる人の問はず語、皆例の事なれば、おしなべて淡々しうなどは言ひひろげずとも、（四）いと恥かしげなる御心どもには、聞き置き給へらむかし、と推し量らるゝが、妬くもいとほしくも覺ゆるにぞ、（五）又もて離れては歇まじと、思ひ寄らるゝつまにもなりぬべき。（六）今は旅寢もすゞろなる心地して、歸り給ふにも、（七）「これや限の」など宣ひしを、などか、（八）さしもやはと打頼みて、又見奉らずなりにけむ、（九）秋やはかはれる、數多の日數も隔てぬ程に、（一〇）おはしにけむ方も知らず、あへなきわざなりや、殊に（一一）例の人めいたる御しつらひなく、いと事そぎ給ふめりしかど、いと物清げにかき拂ひ、あたりをかしくもてない給へりし御住居も、大徳達出で入り、此方彼方（一二）ひき隔てつゝ、御念誦の具どもなどぞ、變らぬ樣なれど、佛は皆かの寺に移し奉りてむとすと（一三）聞ゆるを、（一四）聞き給ふにも、（一五）かゝる樣の人影などさへ絶えはてむ程、とまりて思ひ給はむ心地どもを、酌み聞え給ふも、いと胸痛う思しつゞけらる。供人「いたく暮れ侍り

（一）辨が心一つに胸にたたみて居たれど
（二）薫の方では
（三）老人の餘計な口をきくは一般の事故、辨が無暗に柏木の祕密を話しまはる樣の事はない迄も
（四）姫君等は知つて居るに違ひなしと思はれるのが
（五）姫君等と萬更他人になつて仕舞ひたくはなしと思ふ動機になりさうなり
（六）八宮が居なくなりては泊るも極り惡くて
（七）八宮が、以下薫の心
（八）其樣な事がある筈はなしと先を當にして
（九）今も猶同じ秋の中なるに
（一〇）八宮の
（一一）俗人らしき修飾もせず
（一二）しきりをして其處に僧等が居る也
（一三）姫君等に
（一四）薫が
（一五）僧等までが來なくなりて後

(一)生き殘れる姬君等を我が羈絆なり抔と言ひては如何にも懸想して居る樣に聞ゆれども
(二)八宮に賴まれし趣意を完うして御世話申上げたしと思ふ故出家も見合せて居る
(三)思もよらぬ柏木の祕密
(四)辨の君
(五)薰の樣子が丸で柏木の通りに思はるゝ故
(六)涙にくれて居たり
(七)辨は柏木の乳母の子にて
(八)八宮の北方、辨のいとこ
(九)柏木方
(一〇)辨の人柄重々しからず
(一一)物のわかる女と八宮が思ひて
(一二)柏木の身の上話は
(一三)姬君等

初の世思ひ知らるゝ心も催されにたれど、心苦しうてとまり給へる御事どもの、(一)ほだしなど聞えむは、かけ〳〵しき樣なれど、ながらへても、(二)かの御言あやまたず、聞えうけたまはらまほしさになむ。さるは、(三)覺なき御古物語聞きしより、いとゞ世の中に跡とめむとも覺えずなりにたりや」と、打泣きつゝ宣へば、(四)この人はましていみじく泣きて、えも聞えやらず。(五)御けはひなどの唯それかと覺え給ふに、年頃うち忘れたりつる古の御事をさへ取り重ねて、聞えやらむ方もなく、(六)おほほれ居たり。(七)この人は、かの大納言の御乳母子にて、父はこの姬君達の母北の方の、母方の叔父、左中辨にて失せにけるが子なりけり。年頃遠き國にあくがれ、(八)母君もうせ給ひて後、(九)かの殿には疎くなり、この宮には尋ね取りてあらせ給ふなりけり。(一〇)人もいとやむごとなからず、宮仕へ馴れにたれど、(一一)心地なからぬものに宮も思して、姬君達の御後見だつ人になし給へるなりけり。(一二)昔の御事は、年頃かく朝夕に見奉りなれ、心隔つるくまなく思ひ聞ゆる(一三)君達にも、一言うち出で聞ゆ

(一)隙見せし時の樣子
(二)涙即ち涙は色かはる袖を置き所にすれども、我身は一向便り所なし
(三)「藤衣はつるゝ絲はわび人の涙の玉の緒とぞなりぬる」
(四)匂の想像
(五)辨が飛んでもなき代人として出て來て
(六)柏木と女三との祕密の一部始終
(七)薫が
(八)源氏
(九)榮華
(一〇)我が氣に入りたりし
(一一)八宮逝去ありし故

苦しげなるに、ましておはすらむ樣、(一)ほの見し明けぐれなど思ひ出でられて、

薫 色かはるあさぢを見ても墨染にやつるゝそでをおもひこそやれ

と獨言のやうに宣へば、

大君「(二)色かはる袖をばつゆのやどりにて我身ぞさらにおきどころなき

(三)はつるゝ絲は」と末は言ひ消ちて、いといみじく忍び難きけはひにて入り給ひぬ(四)なり。ひき留めなどすべき程にもあらねば、飽かず哀におぼゆ。老人ぞ、(五)こよなき御かはりに出で來て、昔今をかき集め、悲しき御物語ども聞ゆる。(六)有り難くあさましき事どもをも見たる人なりければ、かう怪しう衰へたる人とも(七)思し捨てられず、いとなつかしう語らひ給ふ。薫「いはけなかりし程に、(八)故院に後れ奉りて、いみじう悲しきものは世なりけりと、思ひ知りにしかば、人となり行く齡にそへて、官位、世の中の匂(九)も、何とも覺えずなむ。唯かう靜やかなる御住居などの、(一〇)心にかなひ給へりしを、(一一)かくはかなく見なし奉りつるに、いよいよいみじく、假

(一)何かにつけてあなたの御心の深さの限なさがわかる
(二)日光を憚るも自分から進んで出てこそ恐からんが、人の相手に餘儀なく出るのは仔細のない筈
(三)斯う陽がましく取扱はれては鬱陶しくてたまらぬ
(四)聞いて御氣を晴らして上げたし
(五)類なき姫君の御愁傷を
(六)大君の
(七)自分等への同情からでなく父に對する志からするにしても
(八)姫君等の愁傷
(九)八宮と約束せし事
(一〇)薫が
(一一)薫は
(一二)應對するのが厭はしく極が惡くはなけれど
(一三)薫を力にする樣な樣になれば
(一四)大君の
(一五)氣ぬけのして居る
(一六)薫が

えみじろき侍らぬ」と聞え給へれば、「ことゝいへば(一)、限なき御心の深さになむ。月日のかげは(二)、御心もて晴々しくもて出でさせ給はばこそ、罪も侍らめ。行く方(三)もなく、いぶせうおぼえ侍り。又思さるらむ端々をも、あきらめ聞えまほしくなむ」と申し給へば、人々「實にこそいと類なげなゝめる(五)御有樣を(四)、慰め聞え給ふ御心ばへの、淺からぬ程」など、人々聞え知らす(六)。御心地にも、さこそいへ、やう〳〵心しづまりて、萬思ひ知られ給へば、昔ざまにても(七)、斯うまで遙けき野邊を分け入り給へる志なども、思ひ知り給ふべし。少しゐざり寄り給へり。思すらむ樣(八)又(九)宣ひ契りし事など、いと細やかになつかしう言ひて(一〇)、うたて雄々しきけはひなどは見え給はぬ人なれば(一一)、氣疎く(一二)漫はしくなどはあらねど、知らぬ人にかく聲を聞かせ奉り、すゞろに賴み(一三)顏なることなどもありつる日頃を思ひ續くるも、流石に苦しうてつゝましけれど、ほのかに一言など答へ聞え給ふ樣の(一四)、實によろづ思(一五)ひほれ給へるけはひなれば、いと哀と(一六)聞き奉り給ふ。黒き几帳の透影の、いと心

(一)男といふものを多く見て居る譯ではないが匂こそよい男といふのであらうと
(二)その匂の品もあり情もある仕打に對して互角の受答をしてゆくのは不似合な自分達故
(三)田舍娘になりすまして居ようと
㊆忌明に薫宇治を訪ふ、薫の心やうやく大君に傾かんとす
(四)薫への返事丈は
(五)薫よりの文も眞面目なもの故
(六)薫が宇治へ
(七)廂の間の一段ひくゝなりて居る處に居る也、喪に服する間なれば也
(八)姫君等が
(九)薫が
(一〇)辨を
(一一)薫の樣
(一二)姫君が
(一三)八宮の御遺言通り隔なくして下されてこそ御尋ね申すかひもあるといふもの
(一四)色めかしい仕方はした事がなき故御取次では口もきかれぬ
(一五)あきらめ樣なき悲みに
(一六)日光にあたるのも憚り多くて

の葉も、をかしき樣になまめき給へる御けはひを、(一)數多は見知り給はねど、これこそはめでたきなめれと見給ひながら、(二)その故々しく情ある方に言をまぜ聞えむもつきなき身の有樣どもなれば、何か唯斯る(三)山伏だちて過してむと思す。(四)中納言殿の御返ばかりは、(五)彼よりもまめやかなる樣に聞え給へば、これよりもいと氣疎げにはあらず、聞え通ひ給ふ。御忌はてても、(六)自らまうで給へり。東の廂(七)のくだりたる方に、やつれて(八)おはするに、近う(九)たち寄り給ひて、(一〇)古人召し出でたり。闇に惑ひ給へる御あたりに、(一一)いとまばゆく匂ひ滿ちて、入りおはしたれば、かたはらいたうて、御答などをだにえ(一二)し給はねば、薫「かやうにはもてなし給はで、(一三)昔の御心むけに從ひ聞え給はむ樣ならむこそ、聞え承るかひあるべけれ。(一四)なよび氣色ばみたる振舞をならひ侍らねば、人傳に聞え侍るは、言の葉も續き侍らず」とあれば、大君「あさましう、今までながらへ侍る樣なれど、(一五)思ひさまさむ方なき夢に惑はれ侍りてなむ、心より外に(一六)空のひかり見侍らむもつゝましうて、端近うも

て參りたれば祿賜ふ。前々御覽ぜしにはあらぬ手の、今少し大人びまさりて、由づきたる書き樣などを、(一)いづれかいづれならむと、うちも置かれず御覽じつゝ、頓にも大殿籠らねば、侍女「(二)待つとて起きおはしまし、又御覽ずるほどの久しきは、如何ばかり御心にしむ事ならむ」と、御前なる人々さゝめき聞えて、にくみ聞ゆ。睡たければなゝめり。まだ朝霧深きあしたに、いそぎ起きて奉り給ふ。(三)

匂　朝霧に友まど(四)はせる鹿の音を大かたにやはあはれとも聞く

(五)諸聲は劣るまじくこそ。

とあれど、(六)あまり情だたむもうるさし、(七)一所の御蔭にかくろへたるを賴み所にてこそ、何事も心やすくて過しつれ、心より外にながらへて、(八)思はずなる事の紛つゆにでもあらば、うしろめたげにのみ思しおくめりし、なき御魂にさへ疵やつけ奉らむと、(九)なべていとつゝましう怖ろしうて、聞え給はず。(一〇)この宮などをば、輕らかにおしなべての樣にも思ひ聞え給はず。(一一)なげの走り書い給へる御筆づかひ言

(一)どちらの手が姉でどちらの手が妹ならんと
(二)御返事を待つて
(三)又文を宇治へ
(四)友まどはせるは父八宮に分れたるをいふ、姫君達の悲には私も一通りならず同情すると也
(五)我が泣く聲も君に劣らず
(六)又々返事して餘り情を解したる樣な應答をしすぐるもいやなり、以下大君の心
(七)今迄は父の蔭にかくれて居たればこそ
(八)不慮なる間違で飛でもなき男に關係する樣な事が少しでもあつてはと父が非常に氣遣はしさうに遺言しおきたるに
(九)一切の他人に對して用心ぶかく
(一〇)大君も匂などをば一通りの輕々しき人々と一樣には思はず
(一一)匂が假初に走り書したる

(一)硯を

(二)いくら悲しくても悲しも限あるものと

(三)大君が

(四)匂宮の

(五)宇治に著したり

(六)是から歸る譯にはゆくまい、泊りて行け

(七)直に歸り參るべし

(八)自分一人が分別あり顏に氣を落著けるといふ譯ではなけれど、此場合見ても居られず

(九)鹿を自分姉妹にたとへたり

(一〇)暗くてよく分らぬ故別によく書かんともせず

(一一)雨夜に

(一二)「篠の隈ひのくま川に駒とめてしばし水かへ影をだに見ん」

(一三)匂が使を

硯など近くひき寄せて見るべきものとやは思ひし、心憂くも過ぎにける日數かな、と思すに、又かきくもり、物見えぬ心地し給へば、押しやりて、(一)中君「猶えこそ書き侍るまじけれ。やう〳〵斯う起き居られなどし侍るが、(二)實に限ありけるにこそと覺ゆるも、恨めしう心憂くて」と、らうたげなる樣に泣きしをれておはするも、(三)いと心苦し。夕暮の程より來ける(四)御使、宵すこし過ぎてぞ來たる。(五)(六)「いかでか歸り參らむ。今宵は旅寢して」と言はせ給へど、使者(七)「立ちかへりこそ參りなめ」と急げば、いとほしうて、(八)我さかしう思ひしづめ給ふにはあらねど、見煩ひ給ひて、

大君　涙のみ霧りふたがれる山里はまがきにしかぞもろごゑになく(九)

黑き紙に、夜の墨つぎもたど〳〵しければ、(一〇)ひきつくろふ所もなく、筆に任せておし包みて出し給ひつ。御使は、木幡山のほども、(一一)雨もよにいと怖ろしげなれど、さやうの物怖すまじきをや選り出で給ひけむ、むづかしげなる(一二)篠のくまを、駒ひき留むる程もなく、うち早めて、片時に參りつきぬ。(一三)御前に召しても、いたく濡れ



の、御忌に籠りたる限りは、哀に行ひて過す。

兵部卿宮よりも、度々とぶらひ聞え給ふ。さやうの御返など、(一)聞えむ心地もし給はず、(二)覺束なければ、(三)中納言には斯うもあらざゝなるを、我をば猶思ひ放ち給へるなめり、と怨めしく思す。紅葉の盛に、(四)文など作らせ給はむとて、出で立ち給ひしを、(五)斯くこのわたりの御逍遙、便なき頃なれば、思し止まりて口惜しくなむ。御忌もはてぬ。限あれば(六)涙の隙もやと思しやりて、いと多く(七)書きつゞけ給へり。時雨がちなる夕つかた、

匂(八)をじかなく秋の山里いかならむ小萩がつゆのかゝるゆふぐれ

(九)只今の空の氣色を、思し知らぬ顏ならむも、あまり心づきなくこそあるべけれ。枯れゆく野邊もわきて眺めらるゝ頃になむ。

などあり。大君「實に、(一〇)いとあまり思ひ知らぬ樣にて度々になりぬるを、猶聞え給へ」など、中の君を例のそゝのかして、書かせ奉りたまふ。(一一)今日までながらへて、

㊅ 匂宮の慰問、大君の返事

(一)姫君等が
(二)文をやりても手答がなき故
(三)薫に對しては此樣ではあるまいに、匂の心
(四)宇治へ出かけて詩でもつくらんと匂が心掛け居たりしに
(五)八宮の逝去で宇治へ遊びに行くは都合惡くなりたれば
(六)此頃は姫君等の歎も少しは薄らぎたるべしと匂が想像して
(七)宇治への文を
(八)此夕暮を宇治では如何に暮さるゝぞ、「小萩が露の」は時の景色を述べて「かゝる」へのかけ詞としたる也
(九)此折柄の哀を知らぬ顏をして我が此文に返事もなさらんでは餘り氣のきかぬといふもの
(一〇)何度御文が來ても御返事せず餘り人情を解せぬ樣な仕打が度重なりて居る事故
(一一)中君の心、今頃はとうに死んで居る筈と思ひしにの意

(一)薫の外には言ひ越す人もなき位の
(二)悲にくれて分別を失へる姫君等の心にも
(三)薫の
(四)尋常一樣の死別でも其場に當りては自分程の悲はなき樣にのみ思はるゝものなるに、薫の心
(五)姫君等は
(六)葬式法事など
(七)老女等に贈る風にして僧への布施物なども不自由を察して贈る
(八)是では姫君等の御命もつゞくものではないと
(九)山にても法會を營みたる也
(一〇)八宮の居間なりし持佛堂は

訪らひも細やかに聞え給ふ。かゝる御訪らひなど、また音づれ聞ゆる人だになき(一)御有樣なれば、(二)物覺えぬ御心地どもにも、年頃の(三)御心ばへの哀なめりしなどをも、思ひ知り給ふ。(四)世の常の程の別だに、さしあたりては、又類なき樣にのみ、皆人の思ひ惑ふものなゝめるを、(五)慰む方なげなる御身どもにて、如何樣なる心地どもし給ふらむ、と思しやりつゝ、(六)後の御わざなどあるべき事ども推しはかりて、阿闍梨にもとぶらひ給ふ。(七)此處にも老人どもにことよせて、御誦經などの事ども、思ひやり聞え給ふ。

明けぬ夜の心地ながら、九月にもなりぬ。野山の氣色、まして袖の時雨を催しがちに、ともすれば爭ひ落つる木の葉の音も、水のひゞきも、涙の瀧も、ひとつものの樣にくれ惑ひて、(八)斯うてはいかでか、限あらむ御命も、しばしめぐらひ給はむと、侍ふ人々は心細く、いみじく慰め聞えつゝ思ひ惑ふ。(九)此處にも念佛の僧侍ひて、(一〇)おはしましゝ方は、佛をかたみに見奉りつゝ、時々參り仕うまつりし人々

(一)再び姫君等に逢ひ給ふなと八宮にも申上げおきたれば
(二)八宮山籠り中の樣子を聞くにつけても
(三)姫君等が
(四)八宮が出家の望は
(五)外に世話する人なき姫君等を捨つるに忍びずして
(六)八宮が生涯姫君等を側に置くを寂しき生活の慰とも思ふ故、打棄てて出家も出來にくかりしに
(七)死別となりては
(八)薫
(九)八宮に申上ぐべき事
(一〇)世間の無常
(一一)八宮が
(一二)薫の
(一三)朝ありても夕は當にならぬ世間の無常を勝れて觀じ居る心故
(一四)昨日や今日八宮に別れんとは

かは侍るべき。日頃も、(一)また逢ひ見給ふまじきことを聞え知らせつれば、今はまして、互に御心留め給ふまじき御心づかひを、ならひ給ふべきなり」とのみ聞ゆ。(二)おはしましける御有樣を聞き給ふにも、阿闍梨の餘りさかしき聖心を、憎くつらしとなむ思しける。(三)(四)入道の御本意は、昔より深くおはせしかど、かう見ゆづる(五)人なき御事どもの見捨て難きを、(六)生けるかぎりは旦暮え去らず見奉るを、世に心細き世の慰にも、思し離れ難くて過い給へるを、(七)限ある道には、先だち給ふも慕ひ給ふ御心も、叶はぬわざなりけり。

(八)中納言殿には、聞き給ひて、いとあへなく口惜しく、今一度心のどかにて聞ゆべ(九)かりけること多う殘りたる心地して、(一〇)大方世の有樣思ひつゞけられて、いみじう泣い給ふ。八宮「またあひ見むこと難くや」など宣ひしを、(一一)(一二)猶常の御心にも、朝夕の(一三)隔知らぬ世のはかなさを、人よりけに思ひ給へりしかば、耳なれて、(一四)昨日今日と思はざりけるを、かへすぐ飽かず悲しくおほさる。阿闍梨の許にも、君達の御



(一)悲しき
(二)八宮の居らるゝ山に面したる
(三)父の逝去を
(四)姫君等が
(五)死別といひても死目に逢ひて別るゝが通常なるに、是は側にも居らざりし事故覺束なき處もありて
(六)父に死後れて
(七)父の跡を追ひたしと
(八)八宮との約束通り

八月二十日のほどなりけり。大方の空の氣色もいとゞしき(一)頃、君達は、朝夕霧の晴るゝ間もなく、思し歎きつゝながめ給ふ。有明の月のいと花やかにさし出でて、水の面もさやかに澄みたるを、(二)そなたの蔀あげさせて、見出し給へるに、鐘の聲かすかに響きて、明けぬなりと聞ゆる程に、人來て、「この夜中ばかりになむ亡せ給ひぬる」と泣く〳〵申す。心にかけて、いかに〳〵とは絶えず思ひ聞え給へれど、(三)うち聞き給ふには、あさましく物覺えぬ心地して、いとゞかゝる事には、涙も何方か去にけむ、たゞ(四)うつぶし臥し給へり。(五)いみじきことも、見る目の前にて、覺束なからぬこそ常のことなれ、覺束なさそひて、思し歎くこと理なり。しばしにても、(六)後れ奉りて世にあるべきものと思しならはぬ御心地どもにて、(七)いかでかは後れじと泣き沈み給へど、限ある道なりければ、何のかひなし。阿闍梨、年頃(八)契り置き給ひけるまゝに、後の御事も萬に仕う奉る。姫君「亡き人になり給へらむ御樣容貌をだに、今一度見奉らむ」と思し宣へど、阿闍梨「今更に、なでふ然ること

暮さまし。今行末も定なき世にて、若し別るゝ(一)様もあらば」など、泣きみ笑ひみ、戯事も實事も、同じ心に慰めかはして過し給ふ。

(二)かの行ひ給ふ三昧今日果てぬらむと、いつしかと待ち(三)聞え給ふ夕暮に、人まゐりて、使者「(四)今朝より惱ましう(五)てなむえ參らぬ。風かとて、とかくつくろふ(六)と物する程になむ。さるは、例よりも對面(七)心もとなきを」と聞え給へり。胸潰れて、如何なるにかと思し歎き、御衣ども綿厚くて急ぎせさせ給ひて、奉れなどし給ふ。二三日は降り(八)給はず。如何に〳〵と人奉り給へど、八宮「殊(九)におどろ〳〵しくはあらず、そこはかとなく苦しうなむ。少しもよろしうならば、今念じて(一〇)」など、言葉にて聞え給ふ。阿闍梨つと侍ひて仕う奉りけり。阿闍梨「はかなき御惱と見ゆれど、限(一一)の度にもおはしますらむ。君達の御事、何かおぼし歎くべき。人は皆(一二)御宿世といふもの異々なれば、御心にかゝるべきにもおはしまさず」と、いよ〳〵思し離る(一三)べき事を聞え知らせつゝ、阿闍梨「今更(一四)にな出で給ひそ」と、諫め申すなりけり。

(一)姉妹別居する様な事にならば如何にせん

㊄ 八宮逝去、二女の悲歎、薫の世話

(二)八宮のつとむる念佛三昧、三昧は專思寂想の意といふ

(三)姫君等が

(四)八宮の傳言をいふ也

(五)病氣にて歸られぬ

(六)色々療治して居る最中也

(七)逢ふことが出來まいかと氣遣はるゝ

(八)山より

(九)病氣はさう激しくはなし

(一〇)我慢して歸るべし

(一一)御終焉と見ゆる

(一二)銘々別々の運を持つて居るもの故

(一三)此世に執心を殘すまじき由を

(一四)此山を出て御歸りなさるな

(一)我が安心の出來る樣に娘達に仕へてくれ
(二)元來身分輕く
(三)子孫の衰へも人目につかぬ
(四)宮とも言はるゝ身分になれば
(五)落魄する運命に陷るのが勿體なく
(六)あたり前の事
(七)榮枯に拘らず身分相應の格式を守りて居るのが人が聞きても自分にも咎がなく思はれる
(八)どうせ出世を望みても出來ぬものならば
(九)姫君方
(一〇)我死後も屈託するな
(一一)心配するな
(一二)大君と中君
(一三)我々二人の中どちらか一人が居なくならば

き人の堪へ籠りては過い給はむと、涙ぐみつゝ、念誦し給ふ樣いと淸げなり。大人びたる人々召し出でて、八宮「(一)うしろやすく仕うまつれ。何事も、(二)もとよりかやすく、世に聞あるまじき際の人は、(三)末の衰も常の事にて、紛れぬべかゝめり。(四)かかる際になりぬれば、人は何とも思はざらめど、口惜しう(五)てさすらへむ契かたじけなく、いとほしき事なむ多かるべき。物さびしく心ぼそき世を經るは、(六)例のことなり。(七)生れたる家のほど、おきてのまゝにもてなしたらむなむ、聞き耳にも、我が心地にも、あやまちなくは覺ゆべき。(八)賑はしく人數めかむと思ふとも、その心にも叶ふまじき事ならば、ゆめ〳〵輕々しく、善からぬ方にもてなし聞ゆな」など宣ふ。まだ曉に出で給ふとても、(九)此方に渡り給ひて、八宮「(一〇)亡からむ程心ぼそくな思しわびそ。心ばかりは遣りて遊びなどはし給へ。何事も思ふにえ叶ふまじき世を、(一一)な思し入れそ」など、顧みがちにて出で給ひぬ。(一二)二所いとゞ心ぼそく物思ひ續けられて、起き伏し打語らひつゝ、「(一三)一人々々なからましかば、いかでか明し

べき事にはあらねど、(一)我が身ひとつにあらず、過ぎ給ひにし御面伏に、輕々しき心どもつかひ給ふな。(二)おぼろげのよすがならで、人の言に打靡き、この山里をあくがれ給ふな。たゞ斯う人に違ひたる(三)契異なる身と思しなして、こゝに世を盡してむと思ひとり給へ。(四)ひたぶるに思ひしなせば、ことにもあらず過ぎぬる年月なりけり。まして女は、さる方に堪へ籠りて、(五)著しくいとほしげなる餘所のもどきを負はざらむなむよかるべき」など宣ふ。(六)ともかくも身のならむ樣までは、思しも流されず、(七)唯如何にしてか、後れ奉りては世に片時もながらふべき、(八)と思すに、かく心細き樣の(九)御あらましごとに、言ふ方なき御心惑どもになむ。(一〇)心のうちにこそ思ひ捨て給ひつらめど、旦暮御傍に習はい給ひて、俄に別れ給はむは、つらき心ならねど、實に怨めしかるべき御有樣になむありける。明日(一一)入り給はむとての日は、例ならず此方彼方たゝずみありき給ひて見給ふ。(一二)いと物はかなく、かりそめの宿にて過い給ひける御住居の有樣を、亡からむ後如何にしてかは、若

(一)我爲のみならず亡母の名譽の爲なれば其方等はよく〳〵身を愼みて輕率な振舞をするな
(二)おぼろげならぬ極々確な相手でなければ身を許して此邸を離れるな
(三)變つた運命を持つて生れた身と諦めて此邸で生涯を終る覺悟をせよ
(四)氣をつよく張つて居れば別段何の事なく過されるものぢや
(五)人目に立つ樣な事をして批難をうけぬ樣にするがよい
(六)姫君等が我身の所置の附け方など迄は思案がとゞかず
(七)父に死別れたらばどうして一日も此世に居られようぞと
(八)姫君等が
(九)父の豫言
(一〇)出家形氣の八宮なれば今迄も心中には娘等の事も思ひ切りて居たには相違なけれど、兎に角側に置き慣し來りて
(一一)山へ
(一二)八宮の心

しかるべく、領じたる(一)心地しけり。

まだ夜深きほどに歸り給ひぬ。心細く殘なげに思いたりし(二)御氣色を、思ひ出で聞え給ひつゝ、騷がしき程(三)過してまうでむとおぼす、兵部卿宮も、この秋のほどに紅葉(四)見におはしまさむと、さるべき序を思しめぐらす。御文は絶えず奉り給ふ。女は、まめやかに(五)思すらむとも思ひ給はねば、煩はしく(六)もあらで、はかなき樣にもてなしつゝ、折々に聞えかはし給ふ。

秋深くなり行くまゝに、宮(七)はいみじう物心細く覺え給ひければ、例の靜なる所(八)にて、念佛をも紛なくせむと思して、君達にもさるべき事ども聞え給ふ。八宮「世(九)の事として、つひの別を遁れぬわざなゝめれど、思ひ慰む方ありてこそ、悲しさをも醒すものなゝめれ。又(一〇)見ゆづる人もなく、心ぼそげ(一一)なる御有樣どもを、うち捨ててむがいみじき事。されども、さばかり(一二)の事に妨げられて、長き(一三)世の闇にさへ惑はむが益なさ。かつ見奉る(一四)ほどだに思ひ捨つる世を、去りなむうしろの事知る

(一)我物にした樣な心持
(二)八宮の
(三)公の節會など
(四)宇治へ
(五)匂が實際執心で文をよこすとも思はぬ故
(六)文をよこされても別にうるさくも思はず
㊃ 八宮山籠りせんとして二女を訓誡す
(七)八宮
(八)阿闍梨の山寺
(九)世間の習として死別は免れぬ事なるが
(一〇)お前達の世話を頼むべき人もなく
(一一)心細げなお前達をすてて死行くのが悲し
(一二)其位の事に
(一三)死後永劫成佛出來ぬもつまらぬ
(一四)側に居る間でさへ思ひ切つて居るのに、死後の事迄構ふべきではないけれど

かゝる對面もこの度や限ならむと、物心細きに、忍びかねて、頑しき僻言多くもなりぬるかな」とて、うち泣き給ふ。客人、

薫「(一)いかならむ世にかかれせむ長きよのちぎりむすべる草のいほりは

相撲など、公事どもまぎれ侍る頃過ぎて侍はむ」など聞え給ふ。(二)こなたにて、かの問はず語の(三)ふる人召し出でて、(四)殘り多かる物語などせさせ給ふ。入り方の月は隈なくさし入りて、透影なまめかしきに、君達も奧まりておはす。(五)世の常の懸想びてはあらず、心深う物語のどやかに聞えつゝものし給へば、さるべき御答など(六)聞えたまふ。(七)三宮はいとゆかしう思いたる物をと、(八)心のうちには思ひ出でつゝ、(九)我が心ながら、猶人には異なりかし、さばかり(一〇)御心もてゆるい給ふ事の、さしも急がれぬよ、(一一)もて離れて、はたあるまじき事とは流石に覺えず、かやうにて物をも聞えかはし、をりふしの花紅葉につけて、哀をも情をも通はすに、にくからず物し給ふあたりなれば、(一二)宿世ことにて、外ざまにもなり給はむは、さすがに口惜

(一)永く御世話申すべしと御約束申したる上は變る事あるべからず
(二)姫君方にて
(三)辨の君
(四)先日猶多く話し殘したる
(五)薫の樣
(六)姫君等が
(七)匂宮
(八)薫が
(九)以下薫の心
(一〇)八宮の方から進んで我に許してくれる姫君を急いで手に入れんとも思はぬ事哉
(一一)さりとて手を出すのがいやと言ふでもなし
(一二)我に縁なくて姫君が他人の物になる事もあらば殘念なるべく

しかるべき」など、大方(一)のことにつけて宣へる、いかゞ然思さざらむと、心苦しく思ひやらるゝ御心のうちなり。薫「すべて誠に(二)しか思う給へ捨てたる氣にや侍らむ、みづからの事にては、いかにも〳〵深う思ひ知る方の侍らぬを、實にはかなき事なれど、聲に(三)めづる心こそ、背きがたきことに侍りけれ。さかしう聖だつ迦葉(四)も、されば(五)や、立ちて舞ひ侍りけむ」など聞えて、飽かず一聲聞きし御琴(六)の音を、切にゆかしがり給へば、疎々(七)しからぬはじめにもとや思すらむ、御自ら彼方に入り給ひて、切にそゝのかし聞え給ふ。箏の琴をぞいとほのかに、掻き鳴らして止み給ひぬる。いとゞ人のけはひも絶えて、哀なる空の氣色、所の様に、わざと(八)なき御遊の心に入りて、をかしう思ゆれど、打解けてもいかでかは彈きあはせ給はむ。八宮「自ら(九)かばかり馴らしそめつる殘は、世ごもれるどちに讓り聞えてむ」とて、宮は佛の御前に入り給ひぬ。

八宮「我亡くて草のいほりは荒れぬとも(一〇)このひとことは枯れじとぞ思ふ

(一)世間話の様にしてわが娘の事を言はれるを聞きては其様思はるゝも尤と薫が八宮の心中を察しやる
(二)前申上げし如く世を思ひ捨て居る故か音樂の事は自分では一向不得手なるが
(三)音樂を聞く事が好きで是ばかりは捨てられぬ
(四)釋尊の第一の弟子
(五)矢張音樂が捨てられぬので樂を聞いて舞ひしならん、舊註大樹緊那羅經をひく、「緊那羅於二佛前一彈二瑠璃琴一奏二八萬四千音樂一迦葉尊者忘二威儀一而起出」
(六)大君の
(七)姫君等を薫に親しましむる手始めにする積かして八宮自ら姫君の方に行きて
(八)事々しくひかぬ姫君の箏の音が薫には非常に面白く感じられたれど
(九)是程迄に引合せたる上は跡は若い者同士の心まかせにするがよし
(一〇)君が娘等を引受けるとの約束は違へぬならんと思ふ

(一)時の上手ばかり集りて事々しく合奏する表だちたる音樂よりも
(二)内心では競爭しあひながら上べの交際は美しくして居る後宮で夜更け人靜まりたる時分に人の氣をそゝる樣な音が幽に聞えたのが却て感興の深いものであつた
(三)慰みの相手によいもので
(四)役には立たぬものの
(五)親が子故にする心配を考へて見ても男の子は左迄心配にはならぬ樣也
(六)心配すれば際限がないしとてどうせ仕方のないものと思切て仕舞はねばならぬにつけても

方にてもめぐらひ侍らむ限は、變らぬ志を御覽じ知らせむとなむ、思ふ給ふる」など聞え給へば、いと嬉しと思いたり。

夜深き月のあきらかにさし出でて、山の端近き心地するに、念誦いと哀にし給ひて、昔物語し給ふ。八宮「この頃の世は如何なりにたらむ。宮中などにて、かやうなる秋の月に、御前の御遊のをりに侍ひあひたる中に、(一)物の上手とおぼしき限とりどりにうち合はせたる拍子など、事々しきよりも、由ありとおぼえある女御更衣の御局々の、(二)おのがじしはいどましく思ひ、うはべの情をかはすべかめるに、夜深きほどの人の氣しめりぬるに、心やましくかい調べ、ほのかにほころび出でたる物の音など、聞き所あるが多かりしかな。何事にも、女は(三)玩びのつまにしつべく、(四)物はかなきものから、人の心を動かすくさはひになむあるべき。されば罪の深きにやあらむ。(五)子の道の闇を思ひやるにも、男はいとしも親の心を亂さずやあらむ。女は、(六)限ありていふかひなき方に思ひ捨つべきにも、猶いと心苦

㊂ 八宮二女を薫に託す、薫の躊躇

(一)薫
(二)父母の祕密を知りての後は氣がかりにて
(三)柏木の逝去の當時の事情が思ひやられて
(四)柏木の死後の罪
(五)辨の君
(六)人目につく樣にせず
(七)宇治へ
(八)都の内はまだ秋らしき景氣もなきに音羽山近くなりては風の音も秋らしく
(九)宇治に入りての景
(一〇)八宮
(一一)我死後も娘どもに目をかけて下されと
(一二)水をむけて
(一三)以前にも宮を賴むとの御一言を承りし故
(一四)何事にもひかへ勝なる私故
(一五)生甲斐なくとも生きて居る間は

宰相中將(一)、その秋中納言になり給ひぬ。いとゞ匂勝り給ふ世の營に添へても、思すこと多かり。如何なる事と、いぶせく思ひ渡りし年頃よりも、心苦しうて(二)、過ぎ(三)給ひにけむ古ざまの思ひやらるゝに、罪(四)輕くなり給ふばかり。行もせまほしくなむ。かの老人(五)をば哀なるものに思ひおきて、著き樣ならず(六)、とかく紛らはしつゝ、心よせとぶらひ給ふ。宇治に詣でで久しうなりにけるを、思ひ出でて參り(七)給へり。七月ばかりになりにけり。都(八)にはまだ入りたゝぬ秋の氣色を、音羽の山近く、風の音もいと冷やかに(九)、槇の山邊も僅に色づきて、猶尋ね來たるに、をかしう珍らしうおぼゆるを、宮(一〇)はまいて、例よりも待ち喜び聞え給ひて、この度は心細げなる物語、いと多く申し給ふ。八宮「亡(一一)からむ後、この君達をさるべきものの便にも訪らひ、思ひ捨てぬものに數まへ給へ」(一二)などおもむけつゝ聞え給へば、薫「一言(一三)にても承りおきてしかば、更に思う給へ怠るまじくなむ。世の中に心を留めじと(一四)、省き侍る身にて、何事も頼もしげなき生先の少さになむ侍れど、さる(一五)

(一)宮は重く愼み給ふべき年なりけり。物心ぼそく思して、御行常よりもたゆみなくし給ふ。世に心とゞめ給はねば、(二)出でたち急ぎをのみ思せば、(三)涼しき道にも赴き給ひぬべきを、唯こ(四)の御事どもにいといとほしく、限なき御心強さなれど、必ず今(五)はと見捨て給はむ御心は亂れなむと、見奉る人も推し量りきこゆるを、思す(六)樣にはあらずとも、斜にさても人聞き口惜しかるまじう、見許されぬべき際の人の、眞心に後見聞えむなど、思ひ寄り聞ゆるあらば、知らず顔にて許してむ、一(七)所一所世に住みつき給ふよすがあらば、それを見譲る方に慰めおくべきを、さまで深き心に尋ね聞ゆる人もなし、稀々ははかなき便に、(八)すきごと聞えなどする人は、まだ若々しき人の心のすさびに、物詣の中宿、(九)往來のほどのなほざりごとに、氣色ばみかけて、さすがにかく眺め給ふ有樣など推しはかり、侮づらはしげにもてなすは、(一〇)めざましうて、なげの答をだにせさせ給はず。(一一)三宮ぞ、なほ見では止まじと思す御心深かりける。(一二)然るべきにやおはしけむ。

(一)八宮が厄年などに當れる也
(二)後生願ばかりして居らるゝ故
(三)一筋に極樂往生をのみ願ふべき筈なるに
(四)姫君等の身の上が可愛さうで
(五)御別れ際にならば姫君等の事の爲に正念も亂れるならんと
(六)十分とはゆかぬ迄も曲りなりにも外聞悪くなく我慢の出來る聟が有つて眞實に引受けてくれるなら、以下八宮の心
(七)二人の中どちらでも一人縁が定まりたらば其聟を後見に頼んで安心して死ぬ事も出來れど
(八)姫君に懸想しかけて來る人は
(九)通り一遍の一時の慰みに
(一〇)八宮がけしからん事に思ひて假初の返事もさせず
(一一)匂宮
(一二)是も前世の因縁なるべし

(一)詩も歌も
(二)筆の手引をまたず直接に
(三)御返事を差上げよ
(四)其御返事は色氣は含ませぬがよい、なまなか色氣を含ませると氣がもめる種になる
(五)匂は好色者故斯樣斯樣な娘が我方にあると聞いて只は置けぬので慰みに文をよこすならん
(六)御返事を
(七)此樣な文の返事は戯にもすべきものとも思はぬ程の愼深さなり
■八宮二女の所置につきて憂慮す
(八)八宮方の樣
(九)姫君等の
(一〇)父八宮が
(一一)姫君等が醜くてもあらば却て不憫なものとの感情は薄かるべきに拵

めやる程の見所あるに、唐の(一)も大和のも歌どもも多けれど、うるさくて尋ねも聞かぬなり。

物騒がしくて、思ふまゝにもえ言ひやらずなりにしを、飽かず宮は思して、しる(二)べなくても御文は常にありけり。宮も、八宮「猶聞え給へ(三)。わざと懸想だちてもも(四)てなさじ。なかなか心ときめきにもなりぬべし。いと(五)好き給へる親王なれば、かかる人なむと聞き給ふが、なほもあらぬすさびなゝめり」と、そゝのかし給ふ時々、中の君ぞ聞え給ふ(六)。姫君は、かやうのこと(七)戯れにももてはなれ給へる御心深さなり。

いつとなく(八)心細き御有様に、春の徒然は、いとゞ暮し難く眺め給ふ。ねびまさり給ふ御様容貌ども(九)、いよいよ勝り、あらまほしくをかしきも、なかなか心苦しう(一〇)、かたほにもおはせましかば、あたらしくをしき方の思ひは薄くやあらまし、など旦暮思しみだる(一一)。姉君廿五、中の君廿三にぞなり給ひける。

（一）可愛らしいのを使にして
（二）櫻の如き美しき人の處へ來て櫻の花を折りかざして遊ぶ事哉
（三）「春の野に菫つみにと來し我ぞ野をなつかしみ一夜ねにける」
（四）姫君等が
（五）返事の延引するも
（六）我が垣根を素通せられぬは只花がある爲ならん
（七）特に我家をなつかしく思ひて來られしにはあらざるべし
（八）匂方と八宮方と隔なきを表する如く
（九）紅梅、柏木の弟
（一〇）勅命によりて
（一一）匂宮
（一二）然るべき序をこしらへて又來訪せんと

御供に侍ふ上童の（一）をかしきして奉り給ふ。

匂　山櫻（二）にほふあたりを尋ねきておなじかざしを折りてけるかな

野（三）を睦まじみ。

とやありけむ。御かへりは、いかでかはなど、聞えにくゝ思（四）し煩ふ。「かゝる折の事、わざとがましくもてなし、程（五）の經るも、なかなかにくき事になむし侍りし」など、ふる人ども聞ゆれば、中の君にぞ書かせ奉り給ふ。

八宮　かざし（六）をる花のたよりに山がつの垣根を過ぎぬはるのたび人

野（七）をわきてしも。

と、いとをかしげに、らうらうじく書き給へり。實に河風（八）も心わかぬさまに、吹き通ふ物の音ども、おもしろく遊び給ふ。御迎に藤（九）大納言、仰言（一〇）にて參り給へり。人々數多參り集ひ、物騷がしくてきほひ歸り給ふ。若き人々、飽かずかへりみのみなむせられける。宮（一一）は又さる（一二）べき序してとおぼす。花盛にて、四方の霞もなが

びたる（一）網代屏風などの、殊更に（二）いとそぎて、見所ある御しつらひを、（三）さるこゝろしてかき掃ひ、いといたうしなし給へり。（四）古の音など、いと二なき彈物どもを、（五）わざと設けたるやうにはあらで、つぎ〳〵（六）彈き出で給ひて、（七）壹越調のこゝろに、「櫻人」あそび給ふ。あるじの宮の御琴を、（八）かゝる序にと人々思ひ給へれど、箏の琴をぞ、心にも入れず折々（九）かきあはせ給ふ。耳馴れぬけにやあらむ、いと物ふかく面白しと、若き人々思ひしみたり。所につけたる饗應、（一〇）いとをかしうし給ひて、餘所に思ひやりし程よりは、なま孫王めく賤しからぬ人（一一）あまた、王の四位の古めきたるなど、（一二）かく人め見るべきをりと、かねていとほしがり聞えけるにや、然るべき限參りあひて、瓶子とる人もきたなげならず、さる方に古めきて、よし〳〵しうもてなし給へり。客人たちは、御女たちのすまひ給ふらむ御有樣思ひやりつゝ、心つくす人もあるべし。（一三）かの宮は、（一四）まいてかやすき程ならぬ御身をさへ、處せく思さるゝを、かゝる折にだにと、忍びかね給ひて、面白き花の枝を折らせ給ひて、

(一)檜板又は竹などを網代に編みたるものを漆塗の骨にとぢ附けたる屏風
(二)簡單にして
(三)注意して掃除しうまく調へたり
(四)古き樂器など
(五)特に用意しておきたる樣には見せずに取出して
(六)來客の人々が
(七)櫻人は雙調の曲なるを壹越調にひく也
(八)かゝる序に聽きたしと
(九)八宮が
(一〇)八宮方にて
(一一)侍女等
(一二)八宮に斯く來客のあるを兼ねてより知りて人手のなきを氣の毒がりてか
(一三)匂宮
(一四)かねて手輕ならぬ己の身分を窮屈に思はるる位なれば



(一)薫
(二)避けて、
(三)輕率らしからんと
(四)八宮より薫へ
(五)風の便に樂の音はよく聞ゆれども此方へ一向御沙汰もなきは恨めし
(六)匂宮が此文を我が戀人の處から來たものと見て取りて
(七)隔なく親しみて貰ひたしと也
(八)薫が八宮を訪問す
(九)舟を漕ぐ間
(一〇)八宮の山莊の有樣

はる〴〵と霞み渡れる空に、散る櫻あれば今開けそむるなど、いろ〳〵見渡さるゝに、河ぞひ柳の起きふし靡く水影など、疎ならずをかしきを、見ならひ給はぬ人は、いと珍らしく見捨て難しとおぼさる。宰相(一)は、かゝる便を過ぐさず彼の宮に詣でばやと思せど、數多の人目をよぎて(二)、一人漕ぎ出で給はむ船わたりの程も輕らかにや(三)、と思ひやすらひ給ふほどに、かれより御文あり(四)。

八宮　山風にかすみ吹きとく聲はあれどへだてて見ゆるをちのしら波(五)

草にいとをかしう書き給へり。宮思すあたりと見給へば(六)、いとをかしく思いて、

匂「この御かへりは我せむ」とて、

匂　をちこちのみぎはの波はへだつともなほ吹きかよへ宇治の河風(七)

中將はまうで給ふ。遊に心入れたる君達さそひて、さしやり給ふほど(九)、「酣醉樂」遊びて(八)、水にのぞきたる廊に、造りおろしたる橋の心ばへなど、さる方にいとをかしう、故ある宮なれば(一〇)、人々心して船よりおり給ふ。こゝはまた樣異に、山里

かの聖の宮(一)にも、唯さしわたる(二)程なれば、追風に吹き來るひゞきを(三)聞き給ふに、昔の事思し出でられて、八宮「笛をいとをかしくも吹き(四)とほしたなるかな。誰ならむ。昔の六條院の御笛の音聞きしは、いとをかしげに愛敬づきたる音にこそ吹き給ひしか。これは澄みのぼりて、事々しき氣の添ひたるは、致仕の大臣(五)の御族の笛の音にこそ似たなれ」など、獨言ちおはす。八宮「哀に久しくなりにけりや。かやうの遊などもせで、あるにもあらで(六)過し來にける年月の、流石に多く數へらるゝこそかひなけれ」など宣ふついでにも、姫君たちの御有樣あたらしく(七)、かゝる山懐に(八)ひき籠めては止まずもがな、と思し續けらる。宰相(九)の君の、同じうは近きゆかりにて見まほしげなるを、さしも思ひ寄るまじかめり、まいて今やうの心淺からむ人をば、いかでかは(一〇)、など思し亂れて、徒然とながめたまふ所は、春の夜もいと明しがたきを、心やり給へる(一一)旅寢の宿は、醉ひの紛にいと疾う明けぬる心地して、飽かず歸らむことを宮はおぼす。

(一)八宮の邸
(二)舟にて直に達する程の近さなれば
(三)八宮が
(四)吹きて十分に音を出したる事哉
(五)頭中
(六)生活して居るとも言ひにくき侘しき暮しをして
(七)惜しきものと思ひ
(八)一生埋れ木にして仕舞ひたくはなしと
(九)薫を同じ事なら聟にしたけれど薫に其氣がない様ぢや、以下八宮の心
(一〇)どうして娘の聟に出來るものかなど
(一一)匂宮の方では

(一)陰陽師などが
(二)御詫
(三)夕霧の來ぬを面白からず思ひしに
(四)薰
(五)夕霧に來られるよりは
(六)八宮方へ薰をつてにして近寄らんと思ひて滿足せり
(七)夕霧を匂宮はけぶたく思ひて
(八)夕霧の
(九)匂宮は
(一〇)人の一體の氣受も
(一一)匂宮を内々の主君の樣に思ひて
(一二)田舍相應の饗應など
(一三)中高なる盤の兩端に碁石をならべ指にて彈きて向の石にあて勝負を爭ふ戲
(一四)宇治に宿りたき心
(一五)樂の音をひきたゝせて

へさの御迎に參り給ふべく思したるを、俄なる御物忌の、重く愼み給ふべく(一)申したれば、え參らぬ由の(二)かしこまり申し給へり。宮なま(三)すさまじと思したるに、(四)宰相中將、今日の御迎に參りあひ給へるに、(五)なかなか心やすくて、(六)かのわたりの氣色も傳へ寄らむと御心ゆきぬ。(七)大臣をば、うちとけて見えにくゝ、事々しきものに思ひ聞え給へり。(八)御子の君達、右大辨、侍從の宰相、權中將、頭少將、藏人の兵衛佐など、皆さぶらひ給ふ。(九)帝后も心ことに思ひ聞え給へる宮なれば、(一〇)大方の御おぼえもいと限なく、まいて六條院の御方ざまは、つぎつぎの人も、皆(一一)私の君に心寄せ仕うまつり給ふ。(一二)所につけたる御しつらひなど、をかしうしなして、碁、雙六、(一三)彈碁の盤どもなどとり出でて、心々にすさびくらし給ひつ。宮は、ならひ給はぬ御ありきに、惱ましく思されて、(一四)此處にやすらはむの御心も深ければ、うち休み給ひて、夕つ方ぞ御琴など召して遊び給ふ。

例のかう世離れたる所は、(一五)水の音ももてはやして、物の音すみまさる心地して、

椎本

梗槩

一 匂宮、初瀬詣の歸途宇治に宿す。八宮と交を結ぶ。二 八宮、二女の處置につきて憂慮す。三 八宮、二女を薫に託す。薫の躊躇。四 八宮、山籠りせんとして二女を訓誡す。五 八宮逝去。二女の悲歎。薫の世話。六 匂宮の慰問。大君の返事。七 忌明に薫宇治を訪ふ。薫の心漸く大君に傾かんとす。八 心細き宇治の住居。九 薫、中君を匂宮に媒せんとするにつけて己の戀を大君に打明く。十 匂宮、中君を挑む。中君肯かず。十一 薫、大君姉妹を隙見す。

一 二月の二十日のほどに、兵部卿の宮初瀬に詣で給ふ。ふるき御願なりけれど、(一)おぼしも立たで年頃になりにけるを、(二)宇治のわたりの御中宿のゆかしさに、多くは(三)催され給へるなるべし。(四)怨めしといふ人もありける里の名の、なべて睦まじう思さるゝ故もはかなしや。上達部いとあまた(五)仕う奉り給ふ。殿上人などさらにも言はず、世に殘る人少く仕うまつれり。(六)六條院より傳はりて、左の大殿知り給ふ所は、河より(七)をちに、いと廣く面白くてあるに、(八)御まうけせさせ給へり。(九)大臣も、(一〇)か

一 匂宮初瀬詣の歸途宇治に宿す、八宮と交を結ぶ

(一)參詣を實行せずして

(二)今度實行する氣になりしは

(三)行く氣になりしなるべし

(四)「世を宇治山」とよみし喜撰法師もあるに、其宇治といふ名が何となく床しく匂宮が思はるゝも外ではあるまい

(五)匂宮の御供に

(六)源より讓り受けて夕霧の領し居る地所は

(七)彼方に

(八)其處にて匂宮を饗應すべき用意

(九)夕霧

(一〇)匂宮の歸途

(一)父母の爲に
(二)二つとはあるまじと
(三)女三宮
(四)經など讀むをも人前にて晴がましくするを恥らひたるは此頃の貴女の風俗也
(五)薫の心
(六)柏木との祕密を我が知れりと女三に知らせるには及ばぬ

りたらましかばと、うしろめたう、いとほしき事どもなり。(一)かゝる事世にまたあらむやと、(二)心ひとつにいとゞ物思はしさ添ひて、内裏へ參らむと思しつるも、出で立たれず。宮(三)の御前に參り給へれば、いと何心もなく、若やかなる樣し給ひて、經讀み給ふを、恥(四)らひてもて隱し給へり。何(五)(六)かは知りにけりとも知られ奉らむなど、心にこめて、よろづに思ひ居給へり。

(一)女三の返事
(二)柏木の手にて書ける文
(三)以下柏木の文の意味
(四)文通する事も
(五)女三の出家せしをいふ

(六)君に別れて死にゆく我が悲は堪へがたし

(七)生れし兒即ち薫の身の上は源の子として大事にせらるゝ筈なれば心配はなけれど
(八)我命あらば餘所から薫になりとも薫の生先を見て慰めんものを、岩根は女三、松は薫
(九)筆跡
(一〇)辨のいふ通り人目につかば一大事と

怖ろしう覺え給ふ。いろ〳〵の紙にて、たまさかに通ひける御文の返事(一)、五六ぞある。さては、かの(二)御手にて、(三)病は重くかぎりになりたるに、又ほのかにも聞え(四)むこと難くなりぬるを、ゆかしう思ふことは添ひにたり、(五)御容貌も變りておはしますらむが、さま〴〵悲しきことを、陸奥紙五六枚に、つぶ〳〵とあやしき鳥の跡のやうに書きて、

柏木　めの前にこの世をそむく君よりも餘所(六)にわかるゝたまぞ悲しき

また端に、

柏木　(七)めづらしく聞き侍る二葉のほども、うしろめたう思ひ給ふる方はなけれど、
(八)命あらばそれとも見まし人しれずいはねにとめし松のおひする

書きさしたる樣に、いと亂りがはしくて、『侍從の君に』と上には書きつけたり。紙魚といふ蟲の住處になりて、古めきたる黴くさゝながら、(九)あとは消えず、唯今書きたらむにも違はぬ言の葉どもの、こま〴〵と定かなるを見給ふに、實に(一〇)落ち散



(一)薫の御手でなくして仕舞ひて下され
(二)「我」より「なりにたり」迄柏木の詞
(三)辨に
(四)共れぎりで小侍從にも逢はずに仕舞ひしは
(五)私情でなく主人への奉公の遂げぬを悲しく思ふ
(六)薫が何げなく受取りたる書類をかくす
(七)薫の心
(八)女三と柏木の秘密を
(九)繰返し他言はせざりし由を誓ひたればさうかも知れぬと
(一〇)強飯は蒸したるもの
(一一)薫が食す
(一二)以下薫の八宮に對していふ趣意
(一三)休日
(一四)物忌中は人の出入を禁ずる也、今日は物忌もあきたる筈故參內せんと也
(一五)冷泉院
(一六)物がはつきり見える樣な
㊤　薫柏木の形見の文を見る
(一七)薫が
(一八)浮き織の地模樣ある帛
(一九)組紐
(二〇)柏木の名を書きたり

る。辨「御前にてうしなはせ給へ。(一)(二)我猶生くべくもあらずなりにたり」と宣はせて、この御文をとり集めて賜はせ(三)たりしかば、小侍從に又あひ見侍らむ序に、定かに傳へ參らせむと思う給へしを、やがて別れ(四)侍りにしも、私事(五)にはあらず悲しうなむ思ひ給ふる」と聞ゆ。(六)つれなくて、これは隱い給ひつ。(七)かやうの古人は、問はず語にや、怪しきことの例に(八)言ひ出づらむと、苦しくおぼせど、(九)かへすぐ\も散らさぬよしを誓ひつる。さもや、と又思ひ亂れ給ふ。御粥強飯(一〇)など參り給ふ。(一一)(一二)昨日は暇の日(一三)なりしを、(一四)今日は內裏の御物忌もあきぬらむ、院(一五)の女一宮惱み給ふ御とぶらひに、必ず參るべければ、かたぐ\暇なく侍るを、又この頃過して、山の紅葉散らぬさきに參るべきよし、聞え給ふ。八宮「かく屢たち寄らせ給ふ光に、山の蔭も少し物あきらむる(一六)心地してなむ」など、喜び聞え給ふ。

(一七)歸り給ひて、まづこの袋を見給へば、唐の浮線綾(一八)を縫ひて、「上」といふ文字を上に書きたり。細き組(一九)して口の方を結ひたるに、かの御名(二〇)の封つきたり。あくるも

(一)辨を連れて行きし男も九州にて死して後
(二)別世界へ來る樣な心持で上京せしに
(三)父方の縁者なりしかば、辨の父左中辨は八宮の北方の母方の叔父
(四)弘徽殿、柏木の妹
(五)其方へたよりて行くべき譯なるが極りわるく思ひて
(六)宇治の山里に引籠る事になりたり
(七)生きて居る
(八)我がうろ覺えに覺えて居る處では
(九)薫が
(一〇)其方に逢はねば眞の父をも知らず罪ふかき身で終るべきであつた
(一一)辨が

とさへ跡絶えて、(一)その人もかしこにてうせ侍りにし後、十年あまりにてなむ、(二)あらぬ世の心地して、まかり上りたりしを、この宮は(三)父方につけて、童より參り通ふ故侍りしかば、今はかう世に交らふべき樣にも侍らぬを、冷泉院の(四)女御どのの御方などこそは、昔聞き馴れ奉りしわたりにて、(五)參り寄るべく侍りしかど、はしたなく覺え侍りて、えさし出で侍らで、(六)深山がくれの朽木になりにて侍るなり。小侍從はいつか亡せ侍りにけむ。そのかみの若盛と見侍りし人は、數少くなり侍りにける末の世に、多くの人におくるゝ命を、悲しく思う給へてこそ、流石に(七)めぐらひ侍れ」など聞ゆるほどに、例の明けはてぬ。「薫よし。然らばこの昔物語は盡きすべうなむあらぬ。又人聞かぬ心やすき所にて聞えむ。侍從といひし人は、(八)ほのかに覺ゆるは、(九)五六ばかりなりし程にや、俄に胸を病みて亡せにきとなむ聞く。(一〇)かゝる對面なくば、罪重き身にて、過ぎぬべかりけること」など宣ふ。小やかにおし卷き合せたる反故どもの、黴くさきを袋にぬひ入れたる、(一一)取り出でて奉

（一）柏木の臨終に
（二）私如き賤しき身にはどうしてよいか分らず
（三）薫の御耳に入れたものかと
（四）かゝる奇遇もあるによりて
（五）薫に見せねばならぬもの
（六）今迄の辨の了簡を語る也
（七）柏木に賴まれし品を
（八）何時死ぬか分らぬ身で
（九）跡にのこして死にたらば人目にかゝる事もあればと
（一〇）薫が八宮へ時々來らるゝ樣の機會にあひし故
（一一）これも前世の因緣なるべし
（一二）薫が
（一三）柏木の
（一四）辨の母
（一五）辨が主人と母との二重の喪に服して
（一六）辨に懸想して居た男が
（一七）辨をだまして
（一八）連れて行きしかば

えさせず。（一）今はのとぢめになり給ひて、いさゝか宣ひおく事の侍りしを、（二）かゝる身には置き所なく、いぶせく思う給へ渡りつゝ、如何にしてかは（三）聞召し傳ふべきと、はかぐ\しからぬ念誦のついでにも、思う給へつるを、佛は世におはしましけりとなむ、（四）思う給へ知りぬる。（五）御覽ぜさすべき物も侍り。（六）今は何かは、（七）燒きも捨て侍りなむ、かく（八）朝夕の消を知らぬ身の、（九）うち捨て侍りなば落ち散るやうもこそと、いとうしろめたく思ひ給ふれど、（一〇）この宮わたりにも、時々ほのめかせ給ふを、待ち出で奉りしかば、少し賴もしく、かゝる折もやと念じ侍りつる、力出でまうで來てなむ。更にこれは、（一一）この世の事にも侍らじ」と、泣く\/細に、（一二）生れ給ひける程のことも、よく覺えつゝ聞ゆ。辨「（一三）空しうなり給ひし騷に、（一四）母に侍りし人は、やがて病づきて、ほども經ず隱れ侍りにしかば、いとゞ思う給へしづみ、（一五）藤衣もたちかさね、悲しきことを思ひ給へしほどに、年頃よからぬ（一六）人の心をつけたりけるが、（一七）人をはかりごちて、西の海の果まで（一八）取りもてまかりにしかば、京のこ

(一)柏木
(二)生涯
(三)薫の心
(四)其方の如く女三と柏木との關係を知れる人も今猶生存せるは珍らしくも恥かしくも思ふ譯なるが、此事件につきて其方の樣に祕密を知つて居る人が外にもあるか
(五)除きては
(六)他人に語りし事なし
(七)柏木に仕へしかば
(八)女三との關係をも知りたりしかば
(九)小侍從と辨との間にて

ど、みやびかに故あるけはひして、物など聞ゆ。(一)故權大納言の君の、(二)世とともに物を思ひつゝ、病づきはかなくなり給ひにし有樣を聞え出でゝ、泣くこと限なし。(三)げに餘所の人の上と聞かむだに哀なるべき古事どもを、まして年頃覺束なくゆかしう、如何なりけむ事のはじめにかと、佛にもこの事をさだかに知らせ給へと、念じつる驗にや、かく夢のやうに哀なる昔がたりを、覺えぬ序に聞きつけつらむ、と思すに、涙とゞめ難かりけり。薫「さても、斯く(四)その世の心知りたる人も、殘り給へりけるを、珍らかにも恥かしうも、覺ゆることの筋に、猶かくいひ傳ふる類やまたもあらむ、年頃かけても聞き及ばざりけるを」と宣へば、辨「小侍從と辨と(五)はなちて、又知る人侍らじ。一言にても、(六)又こと人にまねび侍らず。かく物はかなく、數ならぬ身のほどに侍れど、晝夜かの(七)御かげにつき奉りて侍りしかば、おのづから(八)物の氣色をも見奉りそめしに、御心よりあまりて思しける時々、(九)唯二人の中になむ、たまさかの御消息の通ひも侍りし。かたはらいたければ、委しく聞

いとかたはならむ」とひき入りつゝ、皆聽き給はず。度々そゝのかし聞え給へど、とかく聞えすまひてやみ給ひぬめれば、いと口惜しう(一)覺ゆ。その序にも、かく怪(二)しう世づかぬ思ひやりにて、すぐす有樣どもの、思の外なることなど、恥かしう思いたり。八宮「人にだに(三)いかで知らせじと、はぐくみ過せど、今日明日とも知らぬ身の、殘すくなさに、さすがに行末(四)遠き人は、(五)落ちあぶれてさすらへむ事、これのみこそ、實に世を離れむきはのほだしなりけれ」と、打ち語らひ給へば、心苦しう見奉り給ふ。薫「(六)わざとの御後見だち、はかぐ\しき筋に侍らずとも、疎々しからず思し召されむとなむ思う給ふる。(七)しばしもながらへ侍らむ命のほどは、一言もかく打ち出で聞えさせてむ樣を、違へ侍るまじくなむ」など申し給へば、八宮「いと嬉しきこと」と思し宣ふ。

さて曉方、宮の御行し給ふほどに、かの老人(八)召し出でてあひ(九)給へり。(一〇)姫君の御後見にて侍はせ給ふ。辨の君とぞいひける。年は六十にすこし足らぬほどなれ

(一)薫が
(二)姫君等を他人から如何にも世間離れた田舎娘の樣に思はれて過させるのが不本意と八宮が思へり
(三)姫君等の身の上を
(四)生先長き娘どもは
(五)落魄してさまよひ歩かん事
(六)私は姫君等の歷とした御世話人といふ程でなくとも、御心置なく御世話申上げたしと
(七)私存命中は
(八)辨の君
(九)薫が
(一〇)辨の君の身分の註解

たりや。しるべ(一)する物の音につけてなむ、思ひ出でらるべかりける」とて、琵琶召して、客人(二)にそゝのかし給ふ。取りてしらべ給ふ。薫「更(三)にほのかに聞き侍りし同じものとも、思う給へられざりけり。御琴(四)の響がらにやとこそ思ひ給へしか」とて、心解けてもかきたて給はず。八宮「いで、あな(五)さがなや。しか御耳とまるばかりの手などは、何處(六)よりか此處までは傳りこむ。あるまじき御事なり」とて、琴かきならし給へる、いと哀に心すごし。かた(七)へは、峰の松風のもてはやすなるべし。い(八)とたどたどしげにおぼめき給ひて、心ばへある手ひとつばかりにてやめ給ひつ。八宮「この(九)わたりに、覺なくて、折々ほのめく箏の琴の音こそ、心得たる(一〇)にやと聞く折侍れど、心留めてなどもあらで、久しうなりにけりや。心にまかせて、各かきならすべかめるは、河浪(一一)ばかりやうち合すらむ。論なう、物の用(一二)にすばかりの拍子なども、とまらじとなむ覺え侍る」とて、八宮「かきならし給へ」(一三)と彼方に聞え給へど、姫君「思ひ寄らざりし獨(一四)ごとを、聞き給ひけむだにあるものを、

(一)合奏してくれる人があらば
(二)薫にすゝむ
(三)今此琴の調子を調べて見るに曾て我が聞いた同じ琴とは思はれず
(四)前に姫君等のひくを聞きし時には樂器がよい故よき音が出るならんと思ひしに
(五)意地の惡い事を仰しやる
(六)誰に習つて私の子どもが出來ませう
(七)琴の音に身にしみて思はるゝは琴の音のよき故のみならず松風の手傳ひて然感ぜしむるならん
(八)八宮が忘れて覺束ない樣な振をして
(九)私の家で不慮に時々娘どもの彈く琴の音は
(一〇)修業がつんで居る樣に思はるゝ事もあれど
(一一)浪の音より外に相手になるものもなからん
(一二)實際物になつて居る程に習ひ得ては居るまじと思ふ
(一三)姫君等に
(一四)獨り彈き居し琴を薫に聞かれしさへ恥かしきに、改つて彈くは彌々恥さらしならん

十月になりて、五六日のほどに、宇治へまうで(一)給ふ。「網代(二)をこそこの頃は御覧ぜめ」と、聞ゆる人々あれど、「何かはその蜉蝣(三)にあらそふ心にて、網代にもよらむ」と、そぎ捨て給ひて、輕らかに網代車にて、縑(四)の直衣指貫縫はせて、ことさら(五)び著給へり。宮(六)待ち喜び給ひて、所につけたる御饗など、をかしうしなし給ふ。暮れぬれば、大殿油近くて、さき〴〵見さし給へる文どもの深き(七)など、阿闍梨も請じ(八)おろして、義などいはせ給ふ。うちもまどろまず、河風のいと荒ましきに、木の葉の散りかふ音、水のひゞきなど、哀も過ぎて、物怖ろしく心ほそき所の樣なり。明けがた近くなりぬらむと思ふ程に、ありしのゝめ思ひ出でられて、琴の(一〇)音の哀なることの序つくり出でて、薫「前の度霧(九)にまどはされ侍りし曙に、いと珍らしきものの音、ひと聲承りし殘なむ、なか〳〵にいといぶかしう(一一)、飽かず思ひ給へらるゝ」など聞え給ふ。八宮「色をも香をも思ひ捨ててし後、昔聞きしことも皆忘れてなむ」と宣へど、人召して琴とりよせて、八宮「(一二)いとつきなくなりに

㊉ 薫辨の君より柏木と女三宮との祕密を聽く、柏木の形見の文を受取る
(一)薫が
(二)網代は冬のものなれば也
(三)網代は氷魚をとる爲のものなれば「ひを」と「ひをむし」とをかけて、はかなさを蜉蝣と爭ふ假の身で網代見物でもあるまじと言へる也
(四)平絹也、やつしたる服裝也
(五)ことさらにやつして
(六)八宮
(七)深き意味など
(八)山から呼び下して意味を講釋させる
(九)此前來し時の明方の景色を薫が思ひ出して
(一〇)琴の音といふ物は趣あるものなりといふ話の緒口を引出して
(一一)心がかりで
(一二)琴をひく杯は不似合になつて仕舞ひたり

(一)立派なものならん
(二)匂宮が眞底から
(三)大抵の女には惚れまじき薫が、以下匂の心
(四)薫を
(五)勝手な眞似がしたくても出來ぬ身分の窮屈さをうるさがる程
(六)仔細ある身で
(七)當座の冗談も言ひかねる私なるに
(八)自分で自分の儘にならぬ戀情が起る樣な事もあらば
(九)其結局を見たいものぢや
(一〇)薫の
(一一)元からの自分の疑を刺激されて
(一二)女の方の事は

のかなりし月影の見劣りせずば、まほならむはや。けはひ有樣はた、然ばかりならむをぞ、あらまほしき程と覺え侍るべき(一)」など聞え給ふ。はて〳〵は、(二)まめだちていとねたく、おぼろげの人に心うつるまじき人の、かく深く思へるを、疎ならじ、とゆかしう(三)思すこと限なくなり給ひぬ。匂「尙また〳〵よく氣色見給へ」と、(四)人をすゝめ給ひて、(五)限ある御身のほどのよだけさを厭はしきまで、心もとなしと思したれば、をかしくて、薫「いでや、よしなくぞ侍る。しばし世の中に心とゞめじと、(六)思ひ給うる樣ある身にて、(七)なほざりごともつゝましう侍るを、(八)心ながら叶はぬ心つきそめなば、おほきに思ふに違ふべき事なむ侍るべき」と、聞え給へば、匂「いであな事々し。例のおどろ〳〵しき聖詞、(九)見はててしがな」とて笑ひ給ふ、(一〇)心のうちには、かの古人のほのめかしゝ筋などの、いとゞ(一一)うち驚かされて、物哀なるに、(一二)をかしと見ることも、めやすしと聞くあたりも、何ばかり心にもとまらざりけり。

御心さわがし奉らむ、と思して、のどやかなる夕暮に參り給へり。例のさまざまなる御物語、聞えかはし給ふ序に、宇治の宮のこと語り出でて、見し曉のありさまなど、くはしく聞え給ふに、宮いと切にをかしと思いたり。さればよと(一)御氣色を見て、いとゞ御心動きぬべく言ひつゞけ給ふ。匂「さてそのありけむ返事は、(二)などか見せ給はざりし。(三)まろならましかば」と怨み給ふ。(四)薫「さかし。(五)いとさまざま御覽ずべかめるはしをだに、見せさせ給はぬ。(六)かのわたりは、斯くいとも埋れたる身にひき籠めて止むべきけはひにも侍らねば、(七)必ず御覽ぜさせばやと思ひ給へれど、(八)いかでか尋ねよらせ給ふべき。(九)かやすき程こそ、好かまほしくはいとよく好きぬべき世に侍りけれ。(一〇)うち隱ろへつゝ多かめるかな。(一一)さる方に見所ありぬべき女の、物思はしきうち忍びたる住處も、山里めいたる隈などに、おのづから侍るべかめり。(一二)この聞えさするわたりは、いと世づかぬ聖さまにて、こちごちしうぞあらむと、年頃は思ひ侮り侍りて、耳をだにこそ留め侍らざりけれ。(一三)ほ

(一)薫が見て取りて
(二)大君の返事
(三)我ならば必ず君に見せるのに
(四)嘲弄的に反對いひたる也
(五)色々の女から來る手紙をつひぞ御見せなされた事がない
(六)宇治の姫君は私如き數ならぬ身だけの關係にして置くのは惜しきもの故
(七)匂宮に姫君等を
(八)中々彼處へ御出はむつかしかるべし
(九)輕い身分の者こそ勝手に浮氣も出來る
(一〇)人知れぬ處に面白い事が多い樣子ぢや
(一一)匂宮がかねて斯かる女を好物なるを知りてわざといふ也
(一二)此の申上ぐる宇治の姫君は世間離れた坊主くさくて無骨な樣子ならんと
(一三)遙かに月の光で見た器量が

（一）身體は生れかはる譯にはゆかぬもの故（二）窮屈なり（三）宿直人が其香の爲に（四）なくして仕舞ひたしと思へど（五）薫の（六）洗ひても落ちぬとは餘り甚しい事ぢや
㊈薫匂宮に宇治の姫君の事を語る、心を惹かされたる匂宮
（七）薫（八）八宮（九）薫から（一〇）薫に對して姫君が色めかしき挨拶をするは却て異なものなるべし（一一）薫は通例の若者の樣ではなき人で（一二）我が曾て我が死後を賴むと一言言ひし事ある故（一三）八宮自身も薫の贈物の夥しかりし禮などを手紙で言ひ越されし故（一四）薫が八宮を訪問せんと思ひて（一五）匂兵部卿宮、以下薫の心（一六）世に知られぬ女で近づいて見れば案外によいといふ樣なのが面白いと（一七）空なる希望としてさへ（一八）宇治の噂を大袈裟にして

狩の御衣ども、えならぬ白き綾の御衣の、なよ〳〵と言ひ知らず匂へるをうつし著て、身を（一）はたえかへぬものなれば、似つかはしからぬ袖の香を、人ごとに咎められ賞でらるゝなむ、なか〳〵（二）所せかりける。（三）心にまかせて身を安くも振舞はれず、いとむくつけきまで人の驚く匂を、（四）失ひてばやと思へど、所せき（五）人の御うつり香にて、（六）えも濯ぎ捨てぬぞ餘りなるや。

君（七）は、姫君の御返事いとめやすく兒めかしきを、をかしく見給ふ。宮（八）にも、かく（九）御消息ありきなど、人々聞えさせ御覽ぜさすれば、八宮「なにかは、懸想（一〇）だちてもてない給はむも、なか〳〵うたてあらむ。（一一）例の若人に似ぬ御心ばへなゝめるを、（一二）亡からむ後もなど、一言うちほのめかしてしかば、さやうにて心ぞ留めたらむ」など宣ひけり。（一三）御自らも、さま〴〵の御訪らひの、山の岩屋にあまりしことなど宣へるに、（一四）まうでむと思して、（一五）三の宮の、かやうに（一六）奥まりたらむあたりの、見勝りせむこそをかしかるべけれど、（一七）あらましごとにだに宣ふものを、（一八）聞えはげまして、

えたるに、筆はひきつくろひ擇りて、墨つぎ見所ありて書き給ふ。

薫(一)うちつけなる樣にやと、(二)あいなくとゞめ侍りて、殘り多かるも苦しきわざになむ。(三)かたはし聞え置きつるやうに、今よりは御簾の前も、(四)心やすく思し許すべくなむ。御山ごもり果て侍らむ日數も承りおきて、(五)いぶせかりし霧のまよひもはるけ侍らむ。

などぞ、いとすくよかに書き給へる。左近の將監なる人御使にて、薫「かの老人尋ねて、文もとらせよ」と宣ふ。宿直人が寒げにてさまよひしなど、哀に思しやりて、大きなる檜破子やうのもの、數多(六)せさせ給ふ。またの日、かの御寺にも奉(七)り給ふ。(八)山籠の僧ども、この頃の嵐には、いと心細く苦しからむを、さて(九)おはしますほどの布施賜ふべからむ、と思しやりて、絹綿など多かりけり。(一〇)御行果てて出で給ふ朝なりければ、行人どもに、綿、絹、袈裟、衣など、すべて一領の程づつ、あるかぎりの大德だちに賜ふ。宿直人、(一一)かの御脱ぎすての、艶にいみじき

(一)思ふ通りの事を申上げたらば餘りだしぬけて失禮ならんと斟酌して
(二)何とはなしに言はずに仕舞ひて
(三)既に聊か申上げおきし通り
(四)自由に御目にかゝる樣にして下されし
(五)深き霧をわけて行きし先日の辛勞を今度は取りかへしたし
(六)調へて持たせてやる
(七)使を
(八)薫の心
(九)八宮御滯在中僧に必ず布施を遣はさるゝならんと
(一〇)使の行きしは
(一一)薫に貰ひたる衣



（一）そう毛立ちたる
（二）一通りの品では恥かしき御手紙なれど、斯かる場合は早いが專一と
（三）川長に托して自分の身の憂きを述べたる也、川長は渡守
（四）大君の文を見ての薫の感
（五）八宮歸邸の時分に
（六）宿直人に與へて
㊇　薫、八宮父子へ文を贈る
（七）姫君の
（八）かゝる女がありては出家も出來にくしと

ながめ給ふらむかし。
とて、宿直人にもたせ給へり。寒げにいらゝぎたる（一）顔して持てまゐる。御かへり、紙の香などおぼろげ（二）ならむは恥かしげなるを、疾きをこそはかゝる折は、とて、

大君（三）さしかへる宇治の川をさ朝夕のしづくや袖をくたしはつらむ
身さへ浮きて。

と、いとをかしげに書き給へり。（四）まほにめやすく物し給ひけりと、心とまりぬれど、「御車ゐて参りぬ」と人々騒がし聞ゆれば、宿直人ばかりを召しよせて、薫（五）「かへり渡らせ給はむ程に、必ず参るべし」など宣ふ。濡れたる御衣どもは、皆この（六）人に脱ぎかけ給ひて、取りにつかはしつる御直衣に奉りかへつ。
老人の物語、心にかゝりて思し出でらる。思ひしよりはこよなく勝りて、おほどかにをかしかりつる御け（七）はひども、面影にそひて、（八）猶思ひ離れがたき世なりけりと、心弱く思ひ知らる。御文奉り給ふ。懸想だちてもあらず、白き色紙の厚肥



少しうち歎き給へる氣色、淺からず哀なり。(一)何ばかりをかしき節は見えぬあたりなれど、實に(二)心苦しきこと多かるにも、明うなり行けば、流石にひたおもてなる(三)心地して、薫「なか／＼(四)なるほどに、承りさしつることも多かる殘りは、今少し面馴れてこそは、怨み聞えさすべかめれ。さるは、かく(五)世の人めいてもてなし給へば、(六)思はずに物思しわかざりけりと、怨めしうなむ」とて、宿直人がしつらひたる、西面におはして眺め給ふ。

「網代に人騒がしげなり。されど氷魚も寄らぬ(七)にやあらむ、すさまじげなる氣色なり」と、御供の人々見知りて言ふ。怪しき船どもに柴苅り積み、おの／＼(八)何となき世の營どもに、行きかふ樣どもの、はかなき水の上に浮びたる、(九)誰も思へば同じ如なる世の常なさなり、我は浮ばず、玉の臺に靜けき身と思ふべき世かは、と思ひつゞけらる。硯召し出でて、(一〇)(一一)あなたに聞え給ふ。

薫(一二)「はし姫のこゝろをくみて高瀬さす棹のしづくに袖ぞぬれぬる

(一)何の風情もなき此山莊なれど
(二)薫が
(三)直接に顏を見られる心持、恥かしき心持
(四)なまじ詞をかはしてまだ眞情を打明ける迄にはゆきかねたる其殘りは
(五)私を普通一般の人の樣に取扱はるゝ故
(六)案外物の差別を御存じがないわいと
(七)網代へよりつかぬと見えて
(八)樣々なる
(九)薫の心、無常なる世に生活する危さは誰が身の上もかの水に浮べる人達に異ならず
(一〇)我身は彼等の如く浮きたるものにあらず
(一一)姫君に
(一二)引舟の往來を見て斯かる處に住まはるゝ姫君達の心を思遣り同情に堪へず、宇治に橋姫の社あり、高瀬は瀬の淺き處

(一)無骨に趣なき樣なるべければ
(二)其丈の御話では何の話といふ見當はつかねど
(三)霧晴れて物の色目が明らかになりては、恥かしき此見すぼらしき姿をすつかり見られて仕舞はねばならぬ故
(四)心で思つて居る程に長居も出來ぬが殘念
(五)八宮の籠り居る寺
(六)「思ひやる心ばかりはさはらじを何隔つらん峯の八重雲」
(七)薫の心
(八)引籠思案なるも道理と
(九)「都の」より「聞えたるを」まで二句挿入文
(一〇)よき人を見つけたる都人の目にさへ薫は特によく思はるゝに
(一一)侍女等が
(一二)雲が元よりある上に霧まで立隔てゝ御歸の路を覺束なくする事哉

ひて、夜を明しはてむも、(一)こちぐ\しかるべければ、薫「(二)そこはかと思ひわく事は無きものから、古の事と聞き侍るも物哀になむ。さらば必ずこの殘り聞かせ給へ。(三)霧晴れゆかばはしたなかるべきやつれを、面なく御覽じ咎められぬべき樣なれば、(四)思ひ給ふる心の程よりは、口惜しうなむ」とて立ち給ふに、(五)かのおはします寺の鐘の聲、かすかに聞えて、霧いと深くたち渡れり。(六)峯の八重雲思ひやるへだて多く哀なるに、猶この姫君達の御心のうちども心苦しう、(七)何事を思し殘すらむ、斯くいと(八)奧まり給へるも理ぞかし、など思す。

薫「あさぼらけ家路も見えずたづねこし槇の尾山はきりこめてけり

心細くも侍るかな」と、立ちかへり休らひ給へるさまを、(九)(一〇)都の人の目馴れたるだに、猶いとことに思ひ聞えたるを、まいていかゞは珍らしう見ざらむ。御かへり聞え傳へにくげに(一一)思ひたれば、例のいとつゝましげにて、

大君(一二)「雲のゐる峯のかけぢを秋霧のいとゞへだつるころにもあるかな

(一)柏木が死なれてから
(二)薫の
(三)柏木の
(四)辨が柏木に
(五)柏木が人には言はれず
(六)私を
(七)其遺言の中に薫に申上げねばならぬ事一つあれど
(八)是丈申上げたるを聞召して此殘りをも聞きたき御心があらば
(九)又ゆつくり御耳に入れませう
(一〇)若き侍女等
(一一)語らんとせし目的の話はせずに仕舞ひたり
(一二)自分がかねて疑問にして居る柏木の事を話す故
(一三)不意に

る事も侍らむ。(一)すぎ給ひて、いくばくも隔たらぬ心地のみし侍る、その折の悲しさも、まだ袖のかわくをり侍らず思ひ給へらるゝを、手を折りて數へ侍れば、かく大人しくならせ給ひにける御齢の程も、(二)夢のやうになむ。かの(三)故權大納言の御乳母に侍りしは、辨が母になむ侍りし。朝夕に(四)仕う奉り馴れ侍りしに、人數にも侍らぬ身なれど、人に(五)知らせず、御心よりはた餘りけることを、をりをりうちかすめ宣ひしを、今は限になり給ひにし御病の末つ方に、(六)召し寄せて、いさゝか宣ひ置くことなむ侍りしを、(七)聞し召すべき故なむ一事侍れど、(八)かばかり聞え出で侍るに、のこりをと思し召す御心侍らば、(九)のどかになむ聞し召し果て侍るべき。(一〇)若き人々も、かたはらいたく、さし過ぎたりと、つきじろひ侍るめるも理になむ」とて、流石に(一一)打ち出でずなりぬ。あやしく、夢がたり、巫女やうのものの、問はず語りするやうに、珍らかに思さるれど、(一二)哀に覺束なく思し渡ることの筋を聞ゆれば、いとおくゆかしけれど、げに人目もしげし、(一三)さしぐみに古物語にかゝづら

しき折に侍るを、まだきにおぼほれ侍る涙にくれて、えこそ聞えさせ侍らね」とうちわなゝく氣色、(一)誠にいみじく物悲しと思へり。大方、さだすぎたる人は、涙もろなるものとは見聞き給へど、(二)いと斯うしも思へるも、怪しうなり給ひて、薫「ここにかく參ることは、度重なりぬるを、かく哀知り給へる人もなくてこそ、露けき道のほどに、一人のみそほぢつれ。嬉しき序なゝめるを、(三)言な殘い給ひそかし」と宣へば、辨「かゝる序しも侍らじかし。また侍りとも、(四)夜の間の程知らぬ命の、頼むべきにも侍らぬを、さらば唯、かゝる(五)古者世に侍りけりとばかり、知ろし召され侍らなむ。三條の宮に侍ひし小侍從は、はかなくなり侍りにけると、ほのかに聞き侍りし、そのかみ睦まじう(六)思う給へし、(七)おなじ程の人、多く亡せ侍りにける世の末に、(八)遙なる世界より傳はりまうできて、この五年六年のほどなむ、これ(九)に斯くさぶらひ侍る。え知ろし召さじかし、(一〇)この頃藤大納言と申すなる御兄(一一)の、衞門督にてかくれ給ひにしは、物のついでなどにや、かの御上(一二)とて聞し召し傳ふ

(一)話し出さぬ中から溢れる涙の爲に
(二)かねて薫が
(三)あらひざらひ言うて下され
(四)今夜死ぬかも知れぬ私の命は當にならねば
(五)老人、辨自身をさす
(六)柏木と女三宮との中を取持ちし女三の侍女
(七)私と同年輩の人
(八)私は遠國からやつて來て、筑紫より來りし也、此事末に見えたり
(九)八宮方に仕へ居る
(一〇)今藤大納言と言はれて居る人の御兄で
(一一)柏木
(一二)柏木といふ人は斯樣斯樣の人物なりと

(一)八宮が
(二)音信して上き宮の人人さへ段々來なくなる一方である中へ度々御尋ね下さる薫の有難き御志は
(三)私の心にも
(四)姫君等の
(五)言い出しにくきならん
(六)老女の樣子人物くさく
(七)取附き處なき心持なりしに其方の御挨拶で嬉しい
(八)何もかも分つて居る其方が居るので心強い
(九)女等が
(一〇)此樣な事を話したらさし出がましからんかと我慢すれど
(一一)薫に申上げ
(一二)佛に申す願の中に此事をも申し來りし驗にや

數にもあらぬ御有樣にて、(一)然もありぬべき人々だに、訪らひ數まへ聞え給ふも、見え聞えずのみなりまさり侍る(二)めるに、ありがたき御志のほどは、數にも侍らぬ(三)心にも、あさましきまで思ひ給へ聞えさせ侍るを、(四)若き御心地にも思し知りながら、(五)聞えさせ給ひにくきにや侍らむ」と、いとつよみなく物馴れたるも、なま憎きものから、(六)けはひいたう人めきて、よしある聲なれば、辨「いと(七)たづきも知らぬ心地しつるに、嬉しき御けはひにこそ。(八)何事も實に、思ひ知り給ひける賴こよなかりけり」とて、寄り居給へるを、几帳の側より見れば、(九)曙のやうやうものの色わかるゝに、實にやつし給へると見ゆる、狩衣姿のいと濡れしめりたる程、うたてこの世の外の匂にやと、怪しきまで薫り滿ちたり。

この老人はうち泣きぬ。辨「さし過ぎたる罪もやと、思う給へ忍ぶれど、哀なる昔の御物語の、如何ならむ序に、(一〇)打出で(一一)聞えさせ、かたはしをもほのめかし、知ろし召させむと、年頃念誦(一二)のついでにも、うちまぜ思う給へわたるしるしにや、嬉

所しも、あまりおぼめかせ給へらむこそ、口惜しかるべけれ。ありがたう萬を(一)思ひすましたる御住居などに、たぐひ聞えさせ給ふ御心のうちは、何事も涼しく推し量られ侍れば、猶かく(二)忍びあまり侍る深さ淺さの程も、わかせ給はむこそかひは侍らめ。(三)世の常のすきずきしき筋には、思し召し放つべくや。さやう(四)の力は、わざとすゝむる人侍りとも、靡くべうもあらぬ心强さになむ。(五)おのづから聞し召しあはする樣も侍りなむ。(六)徒然とのみ過し侍る世の物語も、聞えさせ所に賴み聞えさせ、又かく世離れて眺めさせ給ふらむ、御心の紛らはしにも、さしも驚かさせ給ふばかり聞えなれ侍らば、いかに思ふ樣に侍らむ」など、多く宣へば、つゝましく答へにくゝて、起しつる(七)老人の出で來たるにぞ讓り給ふ。たとしへなくさし過(八)して、辨「あな辱(九)や。かたはらいたき御座の樣にも侍るかな。御簾の内に(一〇)こそ。若き人々は、ものの程知らぬやうに侍るこそ」など、したゝかにいふ聲の、さだすぎたるも、かたはらいたく君達はおぼす。辨「いとも怪しく、世の中に住ひ給ふ人の

(一)悟り切りたる父に伴ひ居らるゝ姫君等は已に萬を悟り居らるべければ
(二)つゝみ切れぬ程の私の心を酌み取り下されてこそ悟られたかひもあるといふもの
(三)私の心盡しを尋常の色戀の筋とは別に思召して戴きたし
(四)色戀の方
(五)其點は自然人の噂を聞かれても分る筈
(六)私からは姫君等を退屈ざましの話相手とし、姫君等からも又退屈ざましに其方から進んで私に文通もせらるゝ位に親しくなりたらば
(七)辨の君
(八)出過ぎて
(九)失禮な
(一〇)簾内に薫を入るゝが至當

（一）氣のつかざりし遲鈍さよと
（二）薫と姫君等との挨拶を取次ぐ女も
（三）萬事は其場合によるべき事なれば斯かる場合に遠慮するは惡しと薫が思ひて
（四）隙見しおきたる簾の前の簀子
（五）御簾の內へ入れて下されてもよき筈、簾外に置かるゝは居心が惡い
（六）一時の出來心位では尋ね來る事は出來ぬ程の大儀な路と思ふに
（七）私をこゝに置かるゝはちと變な御取扱と思ふ
（八）私の了簡が御分りになる事もあらうと
（九）調子よく應答の出來る女もなく
（一〇）恥かしがり居るらしきも座が白けて極りが惡き故
（一一）奧深く居る侍女を
（一二）何も分らぬ私共の分際で
（一三）一方では心得て居ながら知らん顏するも世の習とは思へど
（一四）大君にしてなほ且空知らずせらるゝは殘念也

がけぬ程なれば、驚かざりつる（一）心おそさよと、心も惑ひて恥ぢおはさうす。御消（二）息など傳ふる人も、いと初々しき人なゝめるを、（三）折からにこそ萬のことも、と思いて、まだ霧のまぎれなれば、（四）ありつる御簾の前にあゆみ出でて、つい居給ふ。山里びたる若人どもは、さし答へむ言の葉も覺えで、御褥さし出づる樣もたど〳〵しげなり。薫「（五）この御簾の前には、はしたなく侍りけり。（六）うちつけに淺き心ばかりにては、かくも尋ね參るまじき、山のかけ路に思う給ふるを、（七）樣異にてこそ。かく露けき旅を重ねてば、さりとも（八）御覽じ知るらむとなむ、賴もしう侍る」と、いとまめやかに宣ふ。若き人々の、（九）なだらかに物聞ゆべきもなく、消え返り（一〇）かゞやかしげなるも、かたはらいたければ、（一一）女房の奧深きをおこし出づるほど、久しくなりて、わざとめいたるも苦しうて、大君「（一二）何事も思ひ知らぬありさまにて、知り顏にもいかゞは聞ゆべき」と、いと由ありあてなる聲して、ひき入りながら仄に宣ふ。薫「（一三）かつ知りながら、憂きを知らず顏なるも、世のさがと思う給へ知るを、（一四）一





(一)薫の心
(二)かく思ひ懸けぬ處に思の外なる美人を見附くる事などを書きてあるを
(三)此姫君等の事より推せば實際小説にある様な事もありさうな世ぢやわいと
(四)姫君に
(五)客來の趣を知らせる人があると見えて
(六)人々が引込む態度が
(七)薫が
(八)薫が
(九)宿直人
(一〇)隙見して
(一一)私の參れる由を申上げよ
(一二)不足を申上げん
(一三)薫に隙見されたかしら杯とは姫君等が思もよらず
(一四)奏樂
(一五)姫君等の心

うをかし。(一)昔物語などに語り傳へて、若き女房などの讀むを聞くに、必ず(二)かやうのことを言ひたる、然しもあらざりけむ、と憎く推し量らるゝを、(三)實に哀なるものの隈ありぬべき世なりけりと、(四)心うつりぬべし。霧の深ければ、さやかに見ゆべくもあらず。又月さし出でなむと思すほどに、奥の方より(五)人おはすと告げ聞ゆる人やあらむ、簾おろして皆入りぬ。(六)驚き顔にはあらず、なごやかにもてなして、やをら隠れぬるけはひども、衣の音もせず、いとなよゝかに心苦しうて、いみじうあてにみやびやかなるを、(七)哀と思ひ給ふ。

やをら(八)立出でて、京に、御車率て參るべく、人走らせ給ひつ。ありつる(九)侍に、「折あしく參り侍りにけれど、(一〇)なか〳〵嬉しく、思ふこと少し慰めてなむ、(一一)かく侍ふよし聞えよ。いたう濡れにたる(一二)かごとも聞えさせむかし」と宣へば、參りてきこゆ。かく(一三)見えやしぬらむとは思しもよらで、打解けたりつる(一四)事どもを、聞きやし給ひつらむと、いといみじく恥かし。(一五)怪しくかうばしく匂ふ風の吹きつるを、思ひ

む」とて、あなたの御前は、竹の透垣しこめて、皆隔ことなるを、教へ寄せ奉れり。御供の人(一)は、西の廊に呼びすゑて、この宿直人(二)あへしらふ。あなたに(三)通ふべかゝめる透垣の戸を、少し押し明けて見給へば、月をかしきほどに霧り渡れるをながめて、簾を短く巻き上げて、人々居たり。簀子に、いと寒げに身細くなえばめる童一人、同じさまなる大人など居たり。内なる人、一人は、柱に少し居隠れて、琵琶を前に置きて、撥を手まさぐりにしつゝ居たるに、雲隠れたりつる月の俄にいと明くさし出でたれば、大君「(四)扇ならで、これしても、月はまねきつべかりけり」とて、さしのぞきたる顔、いみじくらうたげに匂ひやかなるべし。添ひ臥したる人(五)は、琴の上に傾きかゝりて、中君「(六)入る日をかへす撥こそありけれ。様異にも(七)思ひ及び給ふ御心かな」とて、打笑ひたるけはひ、今少し重りかによしづきたり。大君「及ばずとも、これも月に離るゝものかは」(八)など、はかなきことを、うち解け宣ひかはしたる御けはひども、(九)更に餘所に思ひやりしには似ず、いと哀になつかし

(一)姫君等の居る所の前
(二)別にしきりてあるを
(三)姫君の居間の方に
(四)扇を以て月を招く故事見當らず、故に宣長は「まねき」は「まねび」の誤ならんといへり、摩訶止觀に、「月隱重山、今擧扇喩之、風息大虛、今動樹敎之」ちとむつかし過る樣なれど天台佛敎の盛なる當時の事にて殊に八宮の姫君等なれば此位の事は言ひても不相應にもあるまじき歟
(五)中の君
(六)「還城樂」に陵王入日を撥を以て招きかへす事あり
(七)撥を月の方に持つてゆくとは妙な處へ氣のつきなされた事故
(八)琵琶に撥を納むる穴あり、之を隱月といふ、故に月に離れぬ緣ありといふ也
(九)薫の惑

(一)突然無暗に私が參つて其爲に皆彈きやめなされたらば
(二)宿直人の卑しき心地にも
(三)此處の姫君等の事は世に珍らしき美人として噂が傳はり居るらしきに
(四)どういふものか一通りの女等の樣には思はれず、見たく思ふ也
(五)御案内をして隙見をさせたらば後で知れて、心無い事をしたりと叱られるならん

と宣はせばなむ慰むべき」と宣へば、見にくき顔うち笑みて、宿直人「申させ侍らむ」とて立つを、薫「しばしや」と召し寄せて、薫「年頃人傳にのみ聞きて、ゆかしく思ふ御琴の音どもを、嬉しき折かな。しばし、少したち隱れて聞くべき、物の隈ありや。(一)つきなくさし過ぎて參りよらむ程、皆ことやめ給ひてば、いと本意なからむ」と宣ふ。御けはひ顔容貌の、(二)さる直々しき心地にも、いとめでたく辱く覺ゆれば、宿直人「人聞かぬ時は、旦暮かくなむあそばせど、下人にても、都のかたより參り、立ちまじる人侍る時は、音もせさせ給はず。大方、かくて女君達おはしますことをば、隱させ給ひ、なべての人に知らせ奉らじと、思し宣はするなり」と申せば、うち笑ひて、薫「あぢきなき御物隱なり。しか忍び給ふなれど、(三)皆人有り難き世のためしに、聞き出づべかゝめるを」と宣ひて、薫「猶しるべせよ。我はすきずきしき心など無き人ぞ。かくておはしますらむ御有樣の、(四)怪しく實になべてに覺え給はぬなり」と細やかに宣へば、宿直人「あなかしこ。(五)心なきやうに後の聞や侍ら

はかとなき水の流どもを、ふみしだく駒の足音も、猶忍びてと用意し給へるに、かくれなき御匂ぞ、風にしたがひて、(一)主知らぬ香とおどろく寢覺の家々ぞありける。

近くなる程に、(二)その事とも聞き別れぬ物の音ども、いとすごげに聞ゆ。(三)常にかく遊び給ふと聞くを、ついでなくて、(四)親王の御琴の音の名高きも、え聞かぬぞかし、よき折なるべし、と思ひつゝ入り給へば、琵琶の聲のひゞきなりけり。黄鐘調にしらべて、世の常のかきあはせなれど、所がらにや耳馴れぬ心地して、(六)搔き返す撥の音も、(五)物淸げに面白し。箏の琴、哀になまめいたる聲してたえ〴〵聞ゆ。しばし聞かまほしきに、忍び給へど、御けはひしるく聞きつけて、宿直人めく男なま頑しき、出で來たり。宿直人「(七)しか〴〵なむ籠りおはします。御消息をこそ聞えさせめ」と申す。薫「何かは。しか(八)限ある御行の程を、紛らはし聞えさせむにあいなし。かく濡れ〳〵參りて、(九)いたづらに歸らむうれへを、姫君の御方に聞えて、(一〇)哀

(一)「主知らぬ香こそ匂へれ秋の野に誰がぬぎかけし藤袴ぞも」
(二)何の音とも分らぬ
(三)八宮父子が常に帝に音樂を弄ぶ由は聞きたれど、薫の心
(四)八宮
(五)珍らしからぬ調子なれど
(六)すくひ撥の音なりといふ
(七)斯く〳〵の次第で八宮は寺に御引籠り中也
(八)日限のある御勤の最中を邪魔するは心なき事ぢや
(九)無駄足して歸り行く不足を
(一〇)姫君から氣の毒と言って貰へば滿足

㊆ 八宮の留守に薫宇治の山莊を訪ふ、姫君等を隙見す、辨の君に逢ふ

(一)八宮が
(二)宇治川の邊なる八宮の山莊は
(三)八宮が
(四)宇治へ
(五)船に乘る世話もなく
(六)宇治の山里へ
(七)心がちで
(八)先拂の聲をたてさせず

秋の末つ方、四季(一)にあてつゝし給ふ御念佛を、この河面は、網代の浪も、この頃はいとゞ耳かしがましく靜ならぬをとて、かの阿闍梨(二)の住む寺の堂に(三)うつろひ給ひて、七日のほど行ひ給ふ。姫君達は、いと心ぼそく徒然まさりて眺め給ひける頃、中將の君久しく參らぬかなと、思ひ出で聞え給うけるまゝに、有明の月の、まだ夜深くさし出づる程に出でたちて、いと忍びて、御供に人なども無く、やつれておはし(四)けり。河の此方なれば、船(五)などもわづらはで、御馬にてなりけり。入(六)りもて行くまゝに、霧ふたがりて、道も見えぬ繁木の中をわけ給ふに、いと荒ましき風のきほひに、ほろ〳〵と落ち亂るゝ木の葉の露の散りかゝるも、いと冷に、(七)人やりならずいたく濡れ給ひぬ。かゝるありきなども、をさ〳〵ならひ給はぬ心地に、心細くをかしく思されけり。

薫　山おろしにたへぬ木の葉の露よりもあやなくもろき我が涙かな

山賤の驚くもうるさしとて、隨身(八)の音もせさせ給はず、柴の籬をわけつゝ、そこ

れたる、いとものしくて、晝はおほやけごとに暇なくなどしつゝ、しめやかなる宵の程、氣近き御枕上などに(一)召し入れ、語らひ給ふにも、いとさすがに物むづか(二)しくなどのみあるを、(三)いとあてに心苦しきさまして、宣ひ出づる言の葉も、同じ佛の御教をも、耳近き喩にひきまぜ、(四)いとこよなく深き御悟にはあらねど、よき人は、物の心を得たまふ方の、いとことに物し給うければ、やうやう(五)見馴れ奉り給ふたびごとに、常に見奉らまほしうて、暇なくなどして程經る時は、(六)戀しうおぼえ給ふ。

この君の、かく貴がり聞え給へれば、冷泉院よりも、常に御消息などありて、年(七)頃音にもをさをさ聞え給はず、いみじく寂しげなりし(八)御住處に、やうやう人目見る時々あり。をりふしに(九)とぶらひ聞え給ふこといかめしう、(一〇)この君も、まづ然るべき事につけつゝ、(一一)をかしき樣にも、まめやかなる樣にも、心よせ仕う奉り給ふこと、三年ばかりになりぬ。

(一)薫が
(二)其樣な卑しき僧を呼ぶは嫌な感じがして、兎角適當の人がなくて困り居しに
(三)八宮は
(四)八宮の佛學はさ程深くはなけれど
(五)薫が
(六)薫が八宮を
(七)薫が八宮を
(八)八宮の
(九)冷泉院より
(一〇)薫
(一一)風流趣味の方につけても生活上の手助の方につけても

るしもこそ、(一)心とまらぬ催ならめ、(二)女君達、何心地して過し給ふらむ、(三)世のつねの女しくなよびたる方は遠くやと、推しはからるゝ御有樣なり。(四)佛の御方には、障子ばかりを隔ててぞおはすべかゝめる。すき心あらむ人は、氣色ばみ寄りて、(五)人の御心ばへをも見まほしう、流石にいかゞと、ゆかしうもある御けはひなり。されど、(六)さる方を思ひ離るゝ願に、山深く尋ね聞えたる本意なく、すき〳〵しきなほざりごとを打ち出で、あざればまむも、ことに違ひてや、など思ひ返して、(七)宮の御有樣のいと哀なるを、懇にとぶらひ聞え給ひ、たび〳〵參り給ひつゝ、思ひし樣に、(八)優婆塞ながら(九)行ふ山の深き心、法文など、わざとさかしげにはあらで、(一〇)いとよく宣ひ知らす。聖だつ人、才ある法師などは、世におほかれど、あまりこはごはしう、(一一)氣遠げなる宿德の僧都、僧正のきはは、世に暇なく(一二)きすぐにて、物の心を問ひあらはさむも、ことぐ〳〵しく(一三)覺え給ふ、(一四)又その人ならぬ佛の御弟子の、忌むことを保つばかりの尊さはあれど、けはひ卑しく言葉だみて、(一五)骨なげに物馴

(一)此世に執心を殘さぬ助となりてよからんが、以下薫の心
(二)姫君たちは
(三)此樣な所にばかり居ては通常の女らしく優美な風は乏しかるべしと
(四)姫君達の居間は八宮の居る佛間とは唐紙一重の隔らしい
(五)姫君達の氣風
(六)もと〳〵世間を遁れたしとの趣意で此樣な處まで尋ね來たのに、姫君が居るからとて浮氣らしき當座の戲を言ふも不都合な話、薫の心
(七)八宮
(八)俗體にて佛門に入れる男の稱
(九)宇津保に「優婆塞が行ふ山の椎が本あなそばそばし床にしあらねば」
(一〇)知つたかぶりをせずして八宮が解き聞かす
(一一)より附き難げなる老僧どもになると
(一二)ぶつきらぼうにて
(一三)薫が
(一四)地位學問などのなき僧は戒律を守る方では尊けれど
(一五)無骨にて馴れ〳〵しきが氣障で

事も、我が身にうれへある時、(一)なべての世怨めしう思ひ知る初ありてなむ、道心も起るわざなゝめるを、年若く世の中思ふにかなひ、何事も飽かぬことはあらじと覺ゆる(二)身の程に、(三)然はた後の世をさへ、たどり知り給ふらむが有り難さ。(四)こゝには、然べきにや、唯いとひ離れよと、殊更に佛などの勸めおもむけ給ふやうなる有樣にて、おのづからこそ、靜なる思ひに叶ひゆけど、(五)のこり少き心地するに、はかぐ\しくもあらで過ぎぬべかゝめるを、來し方行く末、更にえたどる所なく思ひ知らるゝを、(六)かへりては心恥かしげなる法の友にこそはものし給ふなれ」など宣ひて、互に御消息かよひ、(七)自らもまうで給ふ。

實に聞きしよりも哀に、住ひ給へる樣よりはじめて、(八)いと假なる草の庵に思ひなし、ことそぎたり。同じき山里といへど、(九)さる方にて心とまりぬべく、のどやかなるもあるを、(一〇)いと荒ましき水の音波の響に、物忘れうちし、夜など心解けて、夢をだに見るべき程もなげに、すごく吹き拂ひたり。(一一)聖だちたる御爲には、斯か

(一)世間が怨めしくなる機會ありてこそ
(二)薫の身分で
(三)左樣に後世の事迄心にかけらるゝとは殊勝なり
(四)我は斯くあるべき運と見えて丸で佛に此世を厭へ〳〵と勸めらるゝ樣な身の成行で
(五)最早餘命も何程もなき此年になりても碌に悟りも出來ず仕舞になりさうなるに
(六)薫は我が彼に教ふるどころか、彼に對して我こそ恥かしかるべき佛道の友であるらしく思はるゝ
(七)薫自らも八宮を訪問す
㊅薫八宮に經文を習ひて其人となりを愛慕す
(八)假の住居と思ひて萬事を手輕にしたり
(九)寂しきなりに氣に入りて閑寂なよき處もあるに
(一〇)此宇治の山莊は
(一一)坊主生活をする八宮の爲には

(一)普通の身分の人の
(二)使者を歓待する
(三)別に山籠りして悟りきつて居る譯ではなし、只世を憂く思ひて此樣な所に引込みたる迄の事也
(四)佛道の方の自分の修行を
(五)薫
(六)經文の意味を知りたき心が、以下「頼み聞えさする」迄薫の詞を阿闍梨が眞似て話す也
(七)わざ〳〵其爲に閉ぢ籠りて經文を習ひ、つまらぬ身分の癖に我こそ世を厭ふといふ顏をするのも何も悪い譯ではないが
(八)取紛れがちにて
(九)八宮の珍らしき御身の上を
(一〇)八宮を佛教の師と頼む
(一一)假の世と悟り
(一二)此世を厭ふ心の

阿闍梨、この御使をさきに立てて、かの宮にまゐりぬ。(一)斜なるきはの、さるべき人の使だに稀なる山陰に、いと珍らしく待ち喜び給ひて、所につけたる肴などして、(二)さる方にもてはやし給ふ。御かへし、

八宮 あとたえて(三)心すむとはなけれども世をうぢ山に宿をこそかれ

(四)聖のかたをば卑下して、聞えなしたまへれば、猶世に怨残りけりと、いとほしく御覽ず。阿闍梨、(五)中將の君の道心深げに物し給ふなど、語り聞えて、阿闍梨「(六)法文などの心得まほしき志なむ、いはけなかりし齡より深く思ひながら、え去らず世にあり經る程、公私にいとま無く明け暮し、(七)わざと閉籠りて習ひ讀み、大方はかばかしくもあらぬ身にしも、世の中を背き顏ならむも、憚るべきにあらねど、自らうち倦み、(八)紛はしくてなむ過しくるを、(九)いとありがたき御有樣を承り傳へしより、かく心にかけてなむ(一〇)頼み聞えさする、など懇に申し給ひし」など語り聞ゆ。宮、八宮「(一一)世の中をかりそめのことと思ひ取り、(一二)厭はしき心のつき初むる

(一)古風なほめ方をする故
(二)八宮をいふ、坊さんの側でそだちては其姫君も世俗的の事には疎からんと思はるゝに琴が上手とは面白き事也
(三)八宮が持餘して居らるゝなら、若自分が八宮より跡に生き殘りたらば其間だけ姫君を預りたいものぢや
(四)冷泉は第十子、八宮の弟也
(五)女三宮
(六)冷泉の心、宇治の姫君等が手に入れたし
(七)薫は却て姫君の事は考へず八宮の悟りきつて居る樣子を見たく思へり
(八)宇治の山へ
(九)私が八宮へ參りて御教を受けらるゝ樣に内々御許を得て下され
(一〇)使に傳言もし歌もおくる也
(一一)我も君を齊しく世を厭ふ身なるに、我と君との間の疎遠なるは宇治山の雲を障壁にして我を隔て給ふならん

河浪にきほひて聞え侍るは、いと面白く、極樂思ひやられ侍るや」と、古代(一)にめづれば、帝はゝ笑み給ひて、冷泉「さる聖(二)のあたりにおひ出でて、この世の方樣はたど〳〵しからむと押しはかられるゝを、をかしの事や。うしろめたく思ひ捨てがたく、もて(三)煩ひ給ふらむを、もししばしもおくれむほどは、讓りやはし給はぬ」などぞ宣はする。この(四)院の帝は、十の御子にぞおはしましける。朱雀院の故六條院にあづけ聞え給ひし、入道(五)の宮の御ためしを思し出でて、かの君達(六)をがな、つれづれなる遊敵に、など打思しけり。中將(七)の君はなか〳〵、親王の思ひすまし給へらむ御心ばへを、對面して見奉らばや、と思ふ心ぞ深くなりぬる。さて阿闍梨の歸り(八)入るにも、「必ず(九)參りて物習ひ聞ゆべく、まづ内々にも、氣色賜はり給へ」など語らひ給ふ。帝は御言傳(一〇)にても、哀なる御住居を人傳に聞くことなど聞え給うて、

冷泉(一一)　世をいとふ心は山にかよへども八重たつ雲をきみやへだつる

この阿闍梨は、冷泉院にも親しく侍ひて、御經など教へ聞ゆる人なりけり。京に出でたる序に參りて、例の(一)さるべき文など御覽じて、問はせ給ふこともある序に、阿闍梨「八宮の、いとかしこく、(二)内教の御才さとり深く物し給ひけるかな。さるべきにて生れ給へる人にや物し給ふらむ。心深く思ひすまし給へる程、誠の聖の(三)おきてになむ見え給ふ」と聞ゆ。冷泉「いまだ容貌はかへ給はずや。俗聖とか、こ(四)の若き人々の附けたなる(五)、哀なることなり」など宣はす。(六)宰相中將も、御前に侍ひ給ひて、(七)我こそ、世の中をいとすさまじく思ひ知りながら、行など人に目留めらるゝばかりはつとめず、口惜しくて過し來れ、と人知れず思ひつゝ、(八)俗ながら聖になり給ふ心のおきてやいかにと、耳留めて聞き給ふ。阿闍梨「(九)出家の志はもとより物し給へるを、(一〇)はかなきことに思ひとゞこほり、今となりては、心苦しき女子どもの御上を、え思ひ捨てぬとなむ、歎き侍り給ふ」と奏す。さすがに物の(一一)音めづる阿闍梨にて、阿闍梨「實にはた、この姫君達の、琴彈きあはせて遊び給へる、

㊄ 宇治の阿闍梨冷泉院に八宮の事を語る、薫阿闍梨を介して八宮に交を求む
(一)冷泉が經文を見て僧に質問せらるゝ序に
(二)佛教
(三)尊き法師になるべき因緣ありて
(四)心の持方
(五)あだ名を
(六)薫
(七)以下薫の心
(八)俗聖と名をとりたる八宮の心の持方はどんなものぞと
(九)阿闍梨が八宮の詞を眞似ていふ也
(一〇)つまらぬ事の爲に延び〳〵になり
(一一)音樂好な僧にて

八宮「見し(一)人も宿もけぶりになりにしをなどて我身の消えのこりけむ

生けるかひなくぞ思し焦るゝや。

いとゞ山重れる御住處に、尋ね參る人もなし。あやしき下種など、田舍びたる山賤どものみ、稀に馴れ參り仕う奉る。峯の朝霧晴るゝ折なくて、明し暮し給ふに、この宇治山に聖(二)だちたる阿闍梨住みけり。才いとかしこくて、世の覺も輕からねど、をさ〱公事にも出で仕へず籠り居たるに、この宮のかく近き程に住み給ひて、寂しき御樣に、尊(三)きわざをせさせ給ひつゝ、法文(四)などを讀み習ひ給へば、尊み(五)聞えて常にまゐる。年頃學び(六)知り給へる事どもの、深き心を解き聞かせ奉り、いよ〱、この世の假初に味氣なき事を申し知らすれば、八宮「心ばかりは蓮(七)の上に思ひのぼり、濁なき池にも住みぬべきを、いとかく幼き人々を、見捨てむうしろめたさばかりになむ、えひたみち(八)に容貌をもかへぬ」など、隔なく物語し給ふ。

(一)妻も家も
(二)仙人じみたる僧、阿闍梨は僧の通稱
(三)佛道の修行
(四)經文
(五)此僧が宮を尊みて
(六)八宮の
(七)極樂淨土に直樣往生もする氣で居るが子どもの氣がかりさに無暗に出家もせずに居る、極樂淨土に七寶池あり、其中に八功德水とて清淨なる水滿ち〱て大さ車輪の如き蓮華其中に咲き、後生よき人は其蓮の上に生るといふ
(八)無暗に出家する事も出來ぬ

(一)弘徽殿女御が奸謀で八宮を東宮にせんと
(二)己の羽振よきにまかせて八宮を持上げたる騷ぎに
(三)源方には交際を斷たれたれば
(四)今は源の子孫ばかりが繁昌する時節故
四　八宮宇治の山莊に移る、宇治の阿闍梨に親しむ
(五)其でなくてさへ憂き事のみまさる世に
(六)山莊
(七)京を
(八)以下宇治の山莊の有樣、網代は氷魚を取る爲に宇治川の中に設けたる仕かけ、梯形に二行に杭を立て狹き方の端にて網をひく
(九)氣ばらしの便につけて
(一〇)北方が生きて居たらばと

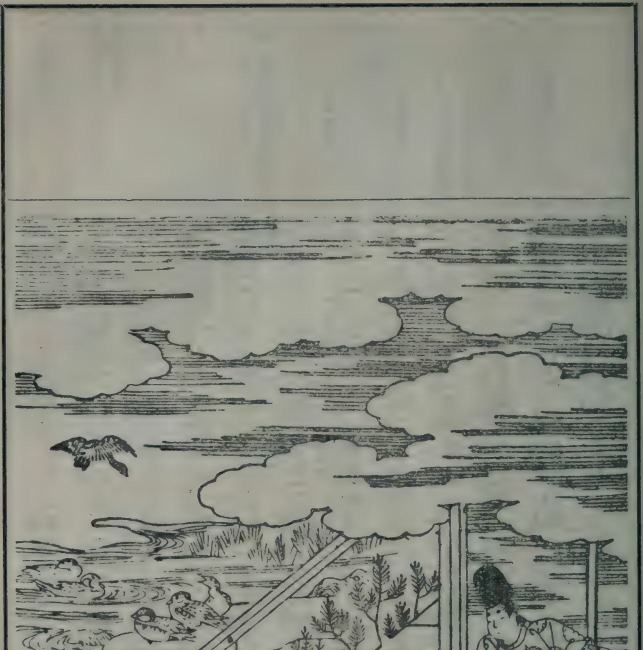
源氏の大臣の御弟八宮とぞ聞えしを、冷泉院の東宮におはしましゝ時、朱雀院の大后(一)の、よこざまに思し構へて、この宮を世の中に立ち繼ぎ給ふべく、我が(二)御時もてかしづき奉り給ひける騷に、あいなく、あなた(三)樣の御中らひには、さし放たれ給ひにければ、いよ〳〵かの(四)御次々になりはてぬる世にて、え交らひ給はず。又この年頃、かゝる聖になりはてて、今は限とよろづを思し捨てたり。

かゝる程に住み給ふ宮燒けにけり。いとゞしき(五)世に、あさましうあへなくて、移ろひ住み給ふべき所の、よろしきも無かりければ、宇治といふ所に、よしある山(六)里持たまへりけるに渡り給ふ。思ひ捨て給へる世なれども、今はと住み(七)離れなむを哀に思さる。網代(八)のけはひ近く、耳かしがましき川のわたりにて、靜なる思にかなはぬ方もあれど、如何はせむ。花紅葉水の流にも、心(九)をやる便によせて、いとゞしく眺め給ふより外のことなし。かく絶え籠りぬる野山の末にも、昔(一〇)の人ものし給はましかばと、思ひ出で聞え給はぬ折なかりけり。

御衣どもなど萎えばみて、御前に又人も無く、いと寂しく徒然げなるに、(一)樣々いとらうたげにて物し給ふを、(二)哀に心苦しう如何おぼさざらむ。(三)經を片手に持給ひ・て、かつ讀みつゝ唱歌をし給ふ。姫君に琵琶、若君に箏の御琴を、まだ幼けれど、常に合せつゝ習ひ給へば、聞きにくゝもあらで、いとをかしくきこゆ。

(四)父帝にも母女御にも、(五)疾くおくれ給ひて、はかぐ\しき御後見の、(六)取り立てたるおはせざりければ、(七)才など深くもえ習ひ給はず。まいて(八)世の中に住みつく御心おきては、いかでかは知り給はむ。(九)貴き人と聞ゆる中にも、あさましう、あてにおほどかなる女の樣におはすれば、ふるき世の御寶物、(一〇)祖父大臣の御處分、何やかやと(一一)盡きすまじかりけれど、行方もなく、はかなく失せはてて、御調度などばかりなむ、(一二)わざと麗しくて多かりける。參りとぶらひ聞え、心よせ奉る人もなし。徒然なるまゝに、雅樂寮の(一三)物の師どもなど樣の、勝れたるを召し寄せつゝ、はかなき御遊に心を入れて、おひ出で給へれば、その方はいとをかしく勝れ給へり。

(一)姫君等が
(二)父が
(三)父が
㊂八宮の過去
(四)以下八宮の來歴をいふ
(五)早く分れて
(六)れつきとした人もなかりしかば
(七)學問
(八)世渡りの心得などは
(九)此八宮は貴人の中でも殊に
(一〇)母方の祖父の遺産
(一一)夥しくありし筈なれど
(一二)殊更に立派で
(一三)音樂の師



哀にをかしく聞ゆれば、涙を浮け給ひて、

八宮「うちすててつがひさりにし水鳥のかりのこの世にたちおくれけむ(一)

心づくしなりや」と、目押しのごひ給ふ。容貌いと清げにおはします宮なり。年頃の御行に痩せ細り給ひにたれど、さてしも(二)あてになまめきて、君達をかしづき(三)給ふ御心ばへに、直衣(四)の萎えばめるを著給ひて、しどけなき(五)御様いと(六)恥かしげなり。姫君、御硯をやをらひき寄せて、手習のやうに書きまぜ給ふを、八宮「これに書きたまへ。硯には(七)書きつけざゝなり」(八)とて、紙奉り給へば、恥らひて書き給ふ。

総角いかでかく巣立ちけるぞとおもふにもうき水鳥のちぎりをぞ知る(九)

よからねど(一〇)、その折は哀なりけり。手は、おひさき見えて(一一)、まだよくもつゞけ給はぬ程なり。八宮「若君も書き給へとあれば、今少し幼げに、久しく(一二)書き出で給へり。

中君泣く／＼もはねうち著する君なくば我ぞ巣守りになるべかりける(一三)

(一)妻が我を棄て死往きたる此世になぜ生き殘りたる事ぞ、かり—假、雁
(二)痩せて却つて
(三)子どもを大事に育てる注意から
(四)直衣を著たるは行儀をくづさぬ也
(五)取繕はぬ八宮の容體
(六)之に對する人が
(七)硯に
(八)硯に物はかゝぬものぞや
(九)我身が誰に育てられて斯く人となりしぞと考へるにつけて、母上を早く亡ひし我身の不運を思ひ知る
(一〇)よい歌では無いが
(一一)成長の後は嘸と思はれて
(一二)久しくかゝりて、「久しくて」とあるべし
(一三)歌の中に父上が育てゝ下さらねば我は成長し得ぬのであつた、「巣守り」はかへらぬ卵

思し出で給はざりけり。人々「などかさしも、(一)別るゝ程の悲みは、又世に類なきやうにのみこそは、覺ゆべかゝめれど、(二)あり經れば然のみやは。猶世人に(三)準ふ御心づかひをし給ひて、いとかく見苦しくたづきなき宮の内も、自ら(四)もてなさるゝわざもや」と、人は(五)もどき聞えて、何くれと(六)つき〴〵しく聞えごつ事も、類に觸れて多かれど、聞召し入れざりけり。

御念誦の隙々には、この君達(七)をもてあそび、やう〳〵およずけ給へば、琴ならはし、碁うち、扁(八)つきなど、はかなき遊びわざにつけても、心ばへどもを見奉り給ふに、姫君は、らう〳〵じく、深く重りかに見え給ふ。若君は、おほどかにらうたげなる樣して、物づつみしたるけはひ、いと美しう、樣々におはす。春のうらゝかなる日影に、(九)池の水鳥どもの羽うち交しつゝ、おのがじし囀る聲などを、常ははかなき事と見(一〇)給ひしかども、つがひ離れぬを羨しくながめ給ひて、君達に御琴ども教へ聞え給ふ。いとをかしげに、(一一)小き御程に、とり〴〵かき鳴し給ふ物の音ども、

(一)それ程になさるには及ばぬ
(二)月日が立てばいつ迄も其樣にはないものぢや
(三)人並の御了簡を御持ちなされて後妻を娶りなされたら
(四)自ら取締のつく事もあるべし
(五)八宮の獨身を批難して
(六)甘い事を言ひて縁組を申込む事も
㊁ 八宮、二女に琵琶琴を敎ふ
(七)姫君等
(八)詩句などの中のある字の扁を隱して旁のみを見せ、其字を當てさする遊
(九)内氣なる樣子
(一〇)八宮が
(一一)小さいなりで

次々にしたがひて、(一)まかで散りつゝ、(二)若君の御乳母も(三)さる騒に、はかぐ\しき人をしも、擇りあへ給はざりければ、(四)程につけたる心淺さにて、(五)幼きほどを見捨て奉りにければ、唯宮ぞ育み給ふ。

流石に廣く面白き宮の、池山などの氣色ばかり、昔に變らでいといたう荒れまさるを、徒然と眺め給ふ。家司なども、(六)むね〲しき人も無かりければ、(七)とり繕ふ人も無きまゝに、草青やかにしげり、軒の(八)しのぶぞ所え顔に青み渡れる。折々につけたる花紅葉の色をも香をも、(九)同じ心にみはやし給ひしにこそ、慰むことも多かりけれ、いとゞしく寂しく、よりつかむ方なき儘に、持佛の御飾ばかりを、(一〇)わざとせさせ給ひて、旦暮行ひ給ふ。(一一)かゝる絆どもにかゝづらふだに、思の外に口惜しう、我が心ながらも叶はざりける契と覺ゆるを、まいて(一二)何にか世の人めいて今更に、とのみ、年月に添へて、世の中を思し離れつゝ、心ばかりは聖になりはて給ひて、(一三)故君の亡せ給ひにしこなたは、例の(一四)人ざまなる心ばへなど、戲にても

(一)暇を取りて立去つてしまひ
(二)中の君の
(三)北方逝去の騒ぎの中で雇ひ入れし事とてよき人を擇んで頼む事も出來にくゝ、よい加減に雇ひ入れし乳母故
(四)乳母は乳母丈の身元思案にて
(五)まだ中の君の頑是なきを捨てゝ暇を取りたれば
(六)重立ちたる
(七)邸の手入をする
(八)今「やつめらん」といふもの
(九)亡き北方と
(一〇)仕事にして
(一一)以下八宮の心、子どもにひかされて出家が出來ぬのすら殘念にて、自分を自分の思ふ儘に出來ぬ因縁と諦め居る位なるに
(一二)何の爲に人並に今更後妻などを持たんやと
(一三)故北方
(一四)常人の様な考

(一)時も時とて悪い時に生れなされた
(二)ろくに世話もせざりしかど
(三)北方臨終の時
(四)中の君を
(五)此子故に北方が煩ひて死ぬかと思へば、何の因果で斯る廻り合せにはなりしぞとつらく思はるれど是も因縁と諦めて
(六)北方が死際まで此子を心にかけて
(七)中の君の
(八)大君
(九)可憐に品格ある事は姉の方が立勝りて
(一〇)父八宮が

したゆたひつゝ、年月も經れば、おの〱およずけ勝り給ふ樣容貌の、美しうあらまほしきを、旦暮の御慰にて、おのづからぞ過し給ふ。後に生れ給ひし君をば、侍ふ人々も、「いでや、(一)をりふし心憂く」など、うち呟きて、(二)心に入れてもあつかひ聞えざりけれど、(三)限の樣にて、何事も思しわかざりし程ながら、(四)これをいと心苦しと思ひて、北方「唯この君をば形見に見給ひて、哀と思せ」とばかり、唯一言なむ宮に聞え置き給ひければ、(五)前の世の契もつらき折節なれど、然るべきにこそはありけめと、(六)今はと見えしまでいと哀と思ひて、うしろめたげに宣ひしを、と思し出でつゝ、この君をしもいとかなしうし奉り給ふ。(七)容貌なむ誠にいと美しう、ゆゝしきまで物し給ひける。(八)姫君は、心ばせ靜によしある方にて、見るめもてなしも、氣高く心にくき樣ぞし給へる。(九)いたはしくやむごとなき筋は勝りて、いづれをも、(一〇)樣々に思ひかしづき聞え給へど、叶はぬこと多く、年月にそへて、宮の内物寂しくのみなり増る。侍ひし人も、たづきなき心地するに、得忍びあへず、

様など、思ひ出で給ふに、たとしへなきこと多かれど、深き御契のふたつなきばかりを、憂き世の慰にて、互に(一)またなく頼みかはし給へり。

年頃經るに、御子ものし給はで、心もとなかりければ、さうぐしく徒然なる慰めに、いかでをかしからむ兒もがなと、宮ぞ時々思し宣ひけるに、珍らしく、女君(二)のいと美しげなる、生れ給へり。これを限なく哀と思ひかしづき聞え給ふに、又さしつゞき氣色ばみ(三)給ひて、この度は男にても(四)など思したるに、同じ様にて(五)、平かにはし給ひ(六)ながら、いといたく(七)煩ひて亡せ給ひぬ。宮あさましうて思し惑ふ。

あり(八)經るにつけて、いとはしたなく、堪へがたきこと多かる世なれど、見捨てがたく哀なる人(九)の御有様心ざまに、かけとゞめらるゝ絆にてこそ、過し來つれ、一人とまりて(一〇)、いとゞすさまじくもあるべきかな、いはけなき人々(一一)をも、一人育み立てむほど、限ある身にて(一二)、いとをこがましう、人惡かるべき事、と思したちて、本意(一三)も遂げまほしうし給ひけれど、見譲る(一四)人もなくて殘し留めむを、いみじく思

(一)八宮夫婦が
(二)大君、又總角の君と名づく
(三)懷胎して
(四)男であれかしと
(五)矢張女子で、此子を中の君と名づく
(六)安産はしたれど
(七)北方が
(八)以下八宮の心
(九)北方
(一〇)生殘りて
(一一)子ども
(一二)瘠せても枯れても宮といふ身分故餘り疎末では
(一三)出家もしたく思ひしかども
(一四)世話をしてくれる人もなきに子どもを跡に殘す事を

橋姫（はしひめ）

梗概

㊀宇治の八宮の寂しき生活。男やもめの身にて二女を育む。㊁八宮、二女に琵琶琴を敎ふ。㊂八宮の過去。㊃八宮、宇治の山莊に移る。宇治の阿闍梨に親しむ。㊄宇治の阿闍梨、冷泉院に八宮の事を語る。薫、阿闍梨を介して八宮に交を求む。㊅薫、八宮に經文を習ひて其の人となりを愛慕す。㊆八宮の留守に薫宇治の山莊を訪ふ。姫君等を隙見す。辨の君に逢ふ。㊇薫、八宮父子に文を贈る。㊈薫、匂宮に宇治の姫君の事を語る。心を惹かれたる匂宮。㊉薫、辨の君より柏木と女三宮との祕密を聽く。柏木の形見の文を受取る。⑪薫、柏木の形見の文を見る。

その頃、世に數まへられ給はぬ(一)古宮おはしけり。母方なども、やむごとなくものし給ひて、(二)筋異なるべき覺などおはしけるを、時移りて世の中に(三)はしたなめられ給ひけるまぎれに、(四)なか〳〵いと名殘なく、御後見なども(五)物怨しき心々にて、かたがたにつけて、世を背き去りつゝ。(六)公私により所なく、さし放たれ給へる樣なり。北の方も、昔の大臣の御女なりける哀に心細く、(七)親達の思しおきてたりし

㊀宇治の八宮の寂しき生活、男やもめの身にて二女を育む
(一)宇治の八宮と名づく、朱雀源氏などの兄弟
(二)東宮にも立つべき程に重んぜられしが、冷泉東宮に立ちし時弘徽殿大后が此八宮を立てんとせしことある也
(三)落附の悪いものにされたる拍子に
(四)勢盛なりし丈落目になれば却て其名殘も見られぬ位にひどく衰へて
(五)望を失ひたれば也
(六)公私につけて便なく
(七)親達は八宮が東宮に立たば娘も后になるべしと望を屬したりし事など思ひ出せば言ふ由もなく悲しき事多けれど

どの、いと盛に匂ひ、花やかなる容貌し給へり。玉鬘「見苦し(一)の君達の、世の中を
心のまゝに傲りて、官位をば何とも思はず、過し(二)いますがらふや。故殿(三)おはせ
ましかば、こゝなる人々も、かゝるすさびごとにぞ。心は亂らまし」とうち歎き
給ふ。(五)右兵衛督、(四)右大辨にて、皆非參議なるを、うれはしと思へり。侍從(六)と聞ゆ
めりしぞ、この頃頭中將ときこゆめる。年齢(七)ほどはかたはならねど、人におく
ると歎き(八)給へり。宰相(九)はとかくつきぐしく。

(一)氣樂らしくて見つともなき事哉、藏人少將等は世の中が思ふ儘なる故
(二)過して居らるゝ事よ
(三)髯黑
(四)我が子息等も出世の事などは氣にかけずに女の心配でもして暮すならんに
(五)髯黑の子供、兄は右兵衛督次は右大辨にて、まだ參議にもなり得ぬを玉鬘が嘆く也
(六)玉鬘の三男
(七)年の若きに合せては出世もおそしといふ程ではなけれど
(八)母は
(九)藏人少將は尚とやかくと此場をうまく振辨ひなして歸れりとの意なるべし

如何なるにかあらむ、御心も留め給はざりける。源中納言(一)の、いとゞあらまほしう、ねび整ひ、何事もおくれたる方なくものし給ふを、大臣(二)も北の方も目留め給ひけり。

隣の斯くのゝしりて、行きちがふ車の音、先おふ聲々も、昔のこと思ひ出でられて、(三)この殿には物哀にながめ給ふ。玉鬘「故宮(四)うせ給ひて程もなく、この大臣の通ひ給ひし事を、いと淡つけい様に、世人はもどくなりしかど、思ひ(五)も消えずかくてものし給ふも、流石さる方にめやすかりけり。定なの世や。いづれ(六)にか寄るべき」など宣ふ。

左の大殿の宰相中將(七)、大饗のまたの日、夕つけてこゝに參り給へり。御息所(八)里におはすると思ふに(九)、いとゞ心げさう添ひて、中將「(一〇)おほやけの數まへ給ふよろこびなどは、何ともおぼえ侍らず。わたくし(一一)の思ふ事かなはぬ歎のみ、年月にそへて、思う給へはるけむ方なき事」と、涙押し拭ふも、故らめいたり。二十七八(一二)のほ

(一)薫
(二)紅梅夫婦が聟の候補者として注目せり
(三)玉鬘方
(四)螢兵部卿の歿後程なく紅梅が眞木柱の許に通ひし事を無分別の所爲として人は誹りしが
(五)其中が絶えもせず今日まで繁昌せらるゝも
(六)どうしたがよいのか分らぬ
(七)元の藏人少將
(八)玉鬘方へ
(九)姫君
(一〇)帝の御氣に入りて昇進したる事抔は嬉しとも思はず
(一一)姫君への戀
(一二)藏人少將の年輩

(一)薫に泣き附かうと
(二)餘り手輕き御判斷
(三)すべてを切廻して居るに合せては
(四)大樣らしき
(五)鬚黑の姫君も、以下薫の心
(六)八宮の姫君が我氣に入りたる點も
(七)中の君
(八)薫が
(九)玉鬘は此人を聟にしたらばとふと思へり
㊈紅梅右大臣の大饗、藏人少將玉鬘を訪ふ
(一〇)紅梅の邸
(一一)大臣の就任披露の宴の取持役の人々
(一二)匂宮
(一三)夕霧
(一四)あとの饗應
(一五)出席せしを紅梅が思ひて
(一六)紅梅が大事がる我娘共を特に匂宮に嫁らしたしと熱心になり居れど

すべきことにも侍らぬことになむ」と、いとすくぐしう申し給へば、玉鬘「對面の序に(一)うれへ聞えむと、待ちつけ奉りたるかひもなく、(二)あはの御理や」と、打笑ひておはする、人の親にて、(三)はかぐ〜しがり給へる程よりは、いと若やかに(四)おほどいたる心地す。(五)御息所もかやうにぞおはすべかゝめる、(六)宇治の姫君の心とまりて覺ゆるも、斯う樣なるけはひのをかしさぞかし、と思ひ居給へり。(七)尙侍もこの頃まかで給へり。此方彼方すみ給へるけはひをかしく、大方のどやかに紛るゝことなき御有樣どもの、簾のうち心恥かしう覺ゆれば、(八)心づかひせられて、いとゞもてしづめ目安きを、(九)大上は、近うも見ましかばと、うち思しけり。

(一〇)大臣殿は、唯この殿の東なりけり。(一一)大饗の垣下の君達など、あまた集ひ給ふ。(一二)兵部卿宮、(一三)左の大殿の賭弓の(一四)かへりだち、相撲の饗應などには、(一五)おはしましゝを思ひて、今日の光と請じ奉り給ひけれど、おはしまさず。(一六)心にくゝもてかしづき給ふ姫君達を、さるは心ざし殊に、いかでかと思ひ聞え給ふべかゝめれど、宮ぞ、

(一)姫君自身丈は
(二)里へ下らせたるが
(三)外聞悪い程に冷泉も
(四)冷泉へよく取りなして下され
(五)彼方此方を力に思ひて姫君を宮仕に上げた當座は
(六)考が幼稚で身の程を思はなかつた自分が嫌になる
(七)其程迄御心配なさるにも及ばぬ
(八)冷泉が
(九)御在位中の様に花やかならぬ御生活になりたる後は
(一〇)后や女御達が
(一一)恨めしく思ひて譯もなき事に喜憂するは
(一二)其位の面倒すらない事と思召して宮仕に御上げなされたのか
(一三)男の口から其様な事は申上げられませぬ

さて侍ひ給ふ、このいと交らひにくげなる自ら(一)は、かくて心安くだに眺め過ぐい給へとて、まかでさせたるを(二)、それにつけても、(三)聞き憎くなむ、上にもよろしからず思し宣はすなる。序あらば、(四)ほのめかし奏し給へ。(五)とざまかうざまに、頼もしく思ひ給へて、出し立て侍りし程は、何方をも心安く、うちとけ頼み聞えしかど、今はかゝる事あやまりに、(六)幼うおほけなかりける、自らの心をもどかしくなむ」と、うち歎い給ふ氣色なり。寓「更に斯う(七)まで思すまじき事になむ。かゝる御交らひの安からぬ事は、昔より然ることとなり侍りけるを、(八)位を去りて、靜におはしまし、何事もけざやか(九)ならぬ御有様となりにたるに、(一〇)誰もうちとけ給へる様なれど、おの〳〵内々には、いかゞ挑ましくも思す事もなからむ。人は何の咎と見ぬことも、我が御身にとりては恨めしく(一一)なむ、あいなき事に心を動し給ふこと、女御后の常の御癖なるべし。(一二)さばかりの紛もあらじものとてや、思し立ちけむ。唯なだらかにもてなして、御覧じ過すべきことに侍るなり。(一三)男の方にて、奏

(一)玉鬘へ薫が
(二)素通りなさらぬ
(三)源の事
(四)何時迄も若き事かな、薫の心
(五)冷泉
(六)今に一騷動おこるならん
(七)中納言になりたりとて心には格別嬉しくも思はねど兎に角御目にかゝりに參りたり
(八)私が疎遠にのみして居るを御咎めの御詞か
(九)年寄の愚痴など言ふ折でないと遠慮すれど
(一〇)對面の時でなくては言はれぬくだ〳〵しき事なれば今日御咄申す也
(一一)冷泉院に仕へ居る姫君が
(一二)中ぶらりんに迷ひ居るが
(一三)弘徽殿を力にし
(一四)秋好もいくら何でも勘辨して下さるならんと
(一五)兩人から無禮な許せぬ奴と思はれ居る樣子故
(一六)姫君腹の御子達は其儘冷泉院に置きて

の御よろこびに、前の(一)尚侍の君に參り給へり。御前の庭にて拜し奉り給ふ。かんの君對面し給ひて、玉鬘「斯くいと草深くなりゆく葎の門をよぎ(二)給はぬ御心ばへにも、まづ昔の御事思ひ出でられてなむ」など聞え給ふ御聲、あてに愛敬づき、聞かまほしう今(三)めきたり。古り(四)難くもおはするかな、かゝれば院(五)の上は、恨み給ふ御心絶えぬぞかし、今遂(六)に、事ひき出で給ひてむ、と思ふ。薫「よろこび(七)などは、心にはいとしも思う給へねども、まづ御覽ぜられにこそ參り侍れ。よぎぬなど宣はするは、おろか(八)なる罪にうちかうがへさせ給ふにや」と申し給ふ。玉鬘「今日は、(九)さだすぎにたる身のうれひなど、聞ゆべき序にもあらずとつゝみ侍れど、わざと立ち寄り給はむ事は難きを、對面(一〇)なくてはた、流石にくだ〳〵しき事になむ。院に(一一)侍はるゝが、いといたう世の中を思ひみだれ、中空(一二)なるやうにたゞよふを、女御(一三)を頼み聞え、又后の宮の御方(一四)にも、さりとも思し許されなむと、思ひ給へ過すに、何方(一五)にもなめげに許さぬものに思されたゞめれば、いとかたはらいたくて、宮達は(一六)

び增りぬべかゝめり」など、言ひおはさうず。少將(一)なりしも、三位の中將とかいひて覺あり。「容貌(二)さへ、あらまほしかりきや」など、なま心わろき仕うまつり人(三)は、打忍びつゝ、「うるさ(四)げなる御有樣よりは」など言ふもありて、いとほしうぞ見えし。この中將は、猶思ひ(五)そめてし心絶えず、憂くもつらくも思ひつゝ、左大臣(六)の御女を得(七)たれど、をさ〳〵心もとめず、「道(八)のはてなる常陸帶の」と、手習にも言種にもするは、いかに思ふ樣のあるにかありけむ。(九)御息所安げなき世のむづかしさに、里(一〇)がちになり給ひにけり。かんの君(一一)、思ひしやうにはあらぬ御有樣を、口惜しとおほす。(一二)內裏の君は、なか〳〵今めかしう心安げにもてなして、世にもゆゑあり、心にくき覺にて侍ひ給ふ。

左大臣失せ給ひて、(一三)右は左に、藤(一四)大納言、左大將かけ給へる右大臣になり給ふ。次次の人々なりあがりて、この薫中將は中納言に、(一五)三位の君は宰相になりて、よろこびし給へる、人々、この御族より外に人なき頃ほひになむありける。中納言(一六)

(一)藏人少將
(二)此少將は御器量もよかつた杯と
(三)玉鬘方の侍女等は
(四)面倒な御宮仕よりは此少將に嫁られた方がよかつた
(五)髭黑の姫君を
(六)竹河左大臣と名づく
(七)妻にしたれど
(八)「東路の路のはてなる常陸帶のかごとばかりも逢はんとぞ思ふ」
(九)髭黑の姫君
(一〇)とかく自分の里に下り居る樣になれり
(一一)玉鬘
(一二)中の君
㊅　夕霧以下昇進、玉鬘大君の事を薰に訴ふ
(一三)夕霧が左大臣になり
(一四)紅梅
(一五)元の藏人少將
(一六)出世の慶にあへる人々

(一)弘徽殿の方にのみ道理をつけて
(二)姫君方
(三)果して此通り也、前に諫めしは惡い事ではなかりしに
(四)玉鬘が
(五)我如く苦しまずに
(六)よく〳〵仕合のよき人でなくては宮仕はするものでないと
(七)玉鬘
(八)姫君に懸想せし人々
(九)立身しつゝ
(一〇)姫君の聟にしても恥しからぬ位に立派になれるが多し
(一一)薫
(一二)匂宮と竝べて
(一三)娘の親から聟にと望むをも
(一四)姫を挑みし時分は

理えたる方にこそ、あいなき大凡の人も、心をよするわざなゝめれば、院の内の上下の人々、いとやむごとなくて、久しくなり給へる御方(一)にのみことわりて、はかなき事にも、この御方様(二)をよからず取りなしなどするを、御兄の君達も、中將等(三)「さればよ。惡しうやは聞えおきける」と、いとゞ申し給ふ。心安(四)からず聞き苦しきまゝに、玉鬘「斯(五)からで、のどやかに目安くて、世を過す人も多かゝめりかし。限(六)なき幸なくて、宮仕の筋は、思ひ寄るまじきわざなりけり」と、大上(七)は歎き給ふ。

聞えし(八)人々の、目安くなり(九)のぼりつゝ(一〇)、さてもおはせましに、かたはならぬぞ數多あるや。その中に(一一)源侍從とて、いと若うひはづなりと見しは、宰相中將にて、「匂ふや薫や」(一二)と、聞きにくゝめで騒がるなる。實にいと人がら重りかに心にくきを、やむごとなき親王達大臣の、御女(一三)を志ありて宣ふなども、聞き入れずなどあるにつけて、玉鬘「そのかみ(一四)は若う心もとなきやうなりしかど、めやすくね

あらそひ、はかなき折にも、心寄せ給ひし名殘に、(一)思し貶しけるよと、怨めしう思ひ聞え給へり。(二)院の上はた、ましていみじうつらしとぞ思し宣はせける。冷泉「古(三)めかしきあたりにさし放ちて、思ひおとさるゝも、理なり」とうち語らひ給ひて、哀にのみ思しまさる。

年頃ありて、又(四)男御子產み給ひつ。そこら侍ひ(五)給ふ御方々にかゝる事なくて、年頃になりにけるを、疎ならざりける御宿世など、世人驚く。帝(六)はまして限なう珍らしと、この今(七)宮をば思ひ聞え給へり。おりゐ給はぬ世ならましかば、如何にかひあらまし。今は何事も榮なき世を、いと口惜しとなむ(八)思しける。女一の宮を限なきものに(九)思ひ聞え給ひしを、斯くさま〴〵美しうて、數添ひ給へれば、珍らかなる方にて、(一〇)いと殊に思いたるをなむ、(一一)女御も、あまり斯うまでは物しからむと、御心動きける。事に觸れて安からず、くね〳〵しき事出で來などして、おのづから(一二)御中も隔たるべかゝめり。世の事として、數ならぬ人の中らひにも、(一三)もとより

(一)我を中の君より輕く思ふよと
(二)冷泉も玉鬘を恨む
(三)其方は我如き老人の處へ追ひ遣られたる身なれば母に安く思はるゝも尤なりと
㊆ 大君殊寵を受く、弘徽殿女御と中惡し、玉鬘の後悔
(四)姫君が
(五)多くの后女御等に
(六)冷泉
(七)誕生の皇子
(八)冷泉が
(九)冷泉が
(一〇)鬚黑の姫君を冷泉が特に寵愛あるを
(一一)弘徽殿も餘り是ではけしからんと
(一二)弘徽殿と姫君との中
(一三)前々から權利のある方即ち本妻の方へ深き譯も知らぬ世人も贔屓するが常なれば

事どもをなむ。姉君は、容貌など名高う、をかしげなりと(一)聞召しおきたりけるを、引き違へ給へるを、(二)なま心ゆかぬ様なれど、(三)これもいとう〳〵じく、心憎くもてなしてさぶらひ給ふ。

前の(四)かんの君、容貌(五)をかへてむと思したつを、子息等(六)「方々にあつかひ聞え給ふ程に、行も心あわたゞしうこそ思されめ。今少し何方も(七)心のどかに見奉りなし給ひて、もどかしき所なく、(八)ひたみちにつとめ給へ」と、君達の申し給へば、思しとゞこほりて、内裏には時々忍びて參り給ふ折もあり。(九)院には、(一〇)煩はしき御心ばへのなほ絶えねば、さるべき折も更に參り給はず。(一一)古を思ひしが、さすがに、辱う覺えし畏りに、(一二)人の皆許さぬ事に思へりしをも、知らず顔に思ひて(一三)參らせ奉りて、(一四)自らさへ、戯にても、若々しきことの世に聞えたらむこそ、いとまばゆく見苦しかるべけれ、と思せど、(一五)さる忌によりと、はた御息所にも顯し聞え給はねば、(一六)我を昔より、(一七)故大臣は取りわきて思しかしづき、かんの君は、(一八)若君を、櫻の

(一)今上が
(二)今上が御不滿足の樣なれど
(三)中の君も
● 玉鬘出家せんとして果さず
(四)玉鬘
(五)尼にならんと
(六)娘等の宮仕に出た當座で色々世話のやける間は
(七)落着いてから
(八)專心に佛いぢりをなされたらよからん
(九)冷泉院
(一〇)御懸想心が
(一一)昔玉鬘が冷泉の志を無にして髭黒の妻になりしを思ひ出して其が勿體なさに、以下玉鬘の心
(一二)姫君を冷泉へ上るは筋違なりと人の思へるをも構はず差上げて
(一三)冷泉へ
(一四)玉鬘までが假初にも浮名を流す樣では
(一五)斯樣々々の憚ある故冷泉へは行かぬとは姫君にも言はぬ故
(一六)姫君の心
(一七)父は特に寵愛し
(一八)中の君を

て、中の君をおほやけ樣にて(一)まじらはせ奉らむことを思して、尙侍を讓り聞え(二)給ふ。朝廷(三)いと難うし給ふことなりければ、年頃かう(四)思しおきてしかど、え辭し給はざりしを、故大臣(五)の御心を思して、久しうなりにける昔の例など(六)引き出でて、その事叶ひぬ。この君(七)の御宿世にて、年頃申し給ひしは難きなりけりと見えたり。かくて、心安くて(八)內裏仕もし給へかしと、思すにも(九)、いとほしう(一〇)、少將の事を、母北の方のわざと宣ひしものを、たのめ(一一)聞えしやうにほのめかし聞えしも、いかに思ひ給ふらむと、思しあつかふ。辨の君して、心美しきやうに、大臣(一二)に聞え給ふ。玉鬘「內裏よりかゝる仰言のあれば、樣々にあながちなる交らひの好と、世の聞耳もいかゞと思う給へて(一三)なむ、煩ひぬる」と聞え給へば、夕霧「內裏の御氣色は、(一四)思し咎むるも、理になむ。公事につけても、宮仕し給はぬは、さるまじきわざになむ。はや思し立つべきになむ」と聞え給へり。又この度は、中宮(一五)の御氣色取りてぞ參り給ふ。大臣(一六)おはせましかば押し消ち給はざらましなと、哀なる

(一)御妾としてゞなく女官として宮中に奉公させんと思ひて
(二)中君に
(三)尙侍は朝廷にて重んずる職掌なれば
(四)辭職せんと玉鬘が思ひ居たれども
(五)髭黑の忠誠を今上が思召して
(六)親が子に尙侍を讓る例
(七)中君がなるべき運命あるによりて今迄辭職が叶はざりしものと見ゆ
(八)中君が
(九)玉鬘が
(一〇)以下玉鬘の心
(一一)中君を少將に約束した樣に言ひ置きしに、尙侍にしては雲井の思はく如何ならんと
(一二)夕霧
(一三)中君を尙侍にせよと
(一四)姫君の事を御咎めあるは尤と
(一五)明石中宮に氣兼して
(一六)髭黑が存生ならば娘が人に壓されもすまいにと玉鬘が悔しがる

〔十四〕大君女一宮を産む、弘徽殿女御と大君との中疎し
（一）髭黒姫君の腹に
（二）女子なれば
（三）冷泉の意向
（四）夕霧
（五）赤兒を
（六）里にて産みたる也
（七）姫君が女一宮を連れて冷泉院へ
（八）冷泉の女子は只一人のみなりしは、弘徽殿腹のみ
（九）冷泉が可愛がる
（一〇）冷泉が姫君方にのみ居らるゝ
（一一）弘徽殿附の女等
（一二）此樣な事は無くてもよさゝうな物なるにとて
〔十五〕玉鬘、中君に尚侍を讓る
（一三）弘徽殿と姫君
（一四）中を惡くするでは無けれど
（一五）ひねくれた仕向抔
（一六）姫君の兄
（一七）何と言つても兄は兄だけの了簡にて
（一八）的中して
（一九）以下玉鬘の心
（二〇）姫君が
（二一）冷泉の御寵愛は深けれど
（二二）中宮女御等
（二三）髭黒の姫君が冷泉へ行きし事を不都合に思召して度々其事を仰せられると
（二四）玉鬘に

卯月に女宮（一）生れ給ひぬ。（二）ことにけざやかなる物の榮もなき樣なれど、（三）院の御氣色に隨ひて、（四）右の大殿よりはじめて、御産養し給ふ所々多かり。かんの君（五）つと抱きもちてうつくしみ給ふに、（六）疾う參り給ふべきよしのみあれば、五十日のほどに（七）まゐり給ひぬ。（八）女宮一所おはしますに、いと珍らしう美しうておはすれば、い（九）といみじう思したり。いとゞ（一〇）唯此方にのみおはします。女御がたの（一一）人々、いと斯（一二）からでありぬべき世かなと、たゞならず言ひ思へり。

（一三）正身の御心どもは、殊に輕々しく背き（一四）給ふにはあらねど、さぶらふ人々の中に、（一五）曲々しき事も出で來などしつゝ、かの中將の君の、（一六）さいへど人の兄にて、（一七）宣ひし事叶ひて、（一八）かんの君も、（一九）無下に斯く言ひ〳〵ての果いかならむ、人笑へに、はしたなうもや、（二〇）もてなされむ、（二一）上の御心ばへは淺からねど、年經て侍ひ給ふ御（二二）方、よろしからず思ひ放ち給はば、苦しくもあるべきかな、と思ほすに、內裏には誠（二三）にものしと思しつゝ、度々御けしきありと、人の告げ（二四）きこゆれば、煩はしく

あなかしこ」とて立つ程に、「此方に」(一)と召し出づれば、はしたなき心地すれど參り給ふ。冷泉「故六條院の踏歌のあしたに、女方にてあそびせられける、いと面白かりきと、(二)右の大臣の語られし。何事もかの(三)わたりのさしつぎなるべき人、難くなりにける世なりや。いと物の上手なる女さへ(四)多く集りて、如何にはかなき事もをかしかりけむ」など、思し遣りて、御琴ども調べさせ給ひて、箏は(五)御息所、琵琶は侍從にたまふ。和琴を(六)彈かせ給ひて、「この殿」(七)などあそび給ふ。(八)御息所の御琴の音、まだかたなりなる所ありしを、(九)いとよく教へない奉り給ひてけり、今めかしう爪音よくて、歌、(一〇)曲のものなど、上手にいとよく彈き給ふ。(一一)何事も心もとなく、後れたることは物し給はぬ人なゝめり。容貌はたいとをかしかるべし、と猶心とまる。(一二)かやうなる折多かれば、おのづから氣遠からず見なれ給ふ。(一三)うたて、狎れ狎れしうなどは恨みかけねど、折々につけて、思ふ心の違へる歎かしさをかすむるも、いかゞ思しけむ、(一四)知らずかし。

(一)冷泉院から
(二)夕霧
(三)源の跡繼となる人
(四)六條院には
(五)髯黑の姫君
(六)冷泉自ら
(七)催馬樂の曲名
(八)以下薫の心
(九)冷泉がよく仕込んだと見える
(一〇)舊註に、歌はつけ物也、曲は樂の曲也
(一一)姫君は
(一二)薫の執心が增す
(一三)薫が姫君を
(一四)姫君が



びにし給ひつゝ、御息所の御方に渡らせ給へれば、御供に參り給ふ。(二)物見に參りたる里人多くて、例(一)よりも花やかに、けはひ今めかし。渡殿の戸口に暫し居て、(三)聲聞き知りたる人に、物など宣ふ。薫「一(四)夜の月影は、はしたなかりしわざかな。藏(五)人の少將の月の光に輝きたりし氣色も、桂の影に耻づるには、あらずやありけむ、雲の上近くては、(六)さしも見えざりき」など語り給へば、人々哀と聞くもあり。女等「闇(七)はあやなきを、月映今少し心異なりと、さだめ聞えし」などすかして、(八)内より、(九)

女房竹河(一〇)のそのよのことは思ひいづや忍ぶばかりのふしはなけれど

とはかなきことなれど、涙ぐまるゝも實にいと淺くは覺えぬことなりけりと、自(一一)ら思ひ知らる。

薫流(一二)れてのたのめむなしき竹河によは憂きものとおもひ知りにき

物哀なる氣色を、人々をかしがる。さるは、(一三)おり立ちて人のやうにも侘び給はざりしかど、人樣のさすがに心苦しう見ゆるなり。薫「(一四)うち出で過すこともこそ侍れ。

(一)髭黒の姫君
(二)薫が
(三)薫が
(四)踏歌の夜は月が餘り明くて極りが悪かりき
(五)少將は美男故月の前に出ても耻かしくなかつたのであらうが
(六)一向際立ちて美しくも見えざりき
(七)闇夜では香を以て優れたる薫も「闇はあやなし」でつまらぬが、月の光にはえては一層美しと皆言ひ合ひたり
(八)慰めて
(九)薫内より
(一〇)玉鬘方にて竹河を謠ひし時の事は思ひ出すか、格別思出になる程の事もなかりし事なれど
(一一)薫が
(一二)其時分は行末に希望をかけ居たりしに、其が空しくなりたれば世は憂きものとつく〴〵悟りたり
(一三)薫は人の様に身を入れて姫君を慕ふといふ程の事はなかりしかど人柄によりて人が同情するのである
(一四)長居すると思ふ事を言ひ過ぎる虞あり

(一)髯黒の姫君が
(二)踏歌の男等の冠のかざり、かざしの綿といふ
(三)人物によりて別の物の樣に見えて
(四)玉鬘方にての
(五)少將が
(六)思ひ迫りて疎忽な擧動もしかねぬ程にて
(七)秋好
(八)冷泉
(九)姫君が何と思ふならんと思へば少將が氣が氣でなく
(一〇)慰勞の饗應に盃を出されても自分丈にわざとさゝるゝ樣に思はれるも
(一一)踏歌にてかけ廻りて
(一二)薫
(一三)今日の內裏の踏歌の樣子
(一四)老年の人がする前例なるに若年の其方が選任せられたるは

恥かしう、ことに思ひ聞えて、皆人用意を加ふる中にも、藏人の少將は、見給ふ(一)らむかしと思ひやりて、靜心なし。匂もなく見苦しき綿花(二)も、かざす人(三)がらに見わかれて、樣も聲もいとをかしくぞありける。「竹河」謠ひて、御階のもとに踏み寄る程、過(四)ぎにし夜のはかなかりし遊(五)も思ひ出でられければ、僻事(六)もしつべくて涙ぐみけり。(七)后の宮の御方にまゐれば、(八)上もそなたに渡らせ給ひて御覽ず。月は夜深うなるまゝに、晝よりもはしたなう澄み昇りて、(九)いかに見給ふらむとのみ覺ゆれば、踏む空もなう漂ひありきて、盃(一〇)もさして一人をのみ咎めらるゝは、面目なくなむ。

夜一夜所々(一一)かきありきて、いと惱ましう苦しくて臥したるに、源侍從(一二)を院より召したれば、薫「あな苦し、しばし休むべきに」とむづかりながら參り給へり。御前(一三)の御事どもなど問はせ給ふ。冷泉「歌頭(一四)はうち過したる人の先々するわざを、選ばれたるほど、心にくかりけり」とて、うつくしと思したゝめり。「萬春樂」を御口ずさ

さるは(一)限なき御思のみ、月日に添へてまさる。(二)七月より孕み給ひにけり。(三)うち惱み給へる樣、(四)實に人のさま〴〵に聞え煩はすも、理ぞかし、いかでかはかゝらむ人を、(五)なのめに見聞き過しては歇まむ、とぞ覺ゆる。(六)日暮御遊をせさせ給ひつゝ、(七)侍從も氣近う召し入るれば、(八)御琴の音などは聞き給ふ。かの「梅が枝」にあはせたりし、中將のおもとの和琴も、常に召し出でて彈かせ給へば、聞きあはするにも、(九)たゞには覺えざりけり。

その年かへりて、男踏歌せられけり。殿上の若人どもの中に、物の上手多かる頃ほひなり。その中にも、勝れたるを選らせ給ひて、(一〇)この四位の侍從、(一一)右の歌頭なり。かの藏人の少將、樂人の數の中にありけり。十四日の月の花やかに曇なきに、(一二)御前より出でて、冷泉院にまゐる。女御もこの(一三)御息所も、(一四)上に御局して見給ふ。上達部親王達ひき連れて參り給ふ。(一五)右の大殿、致仕の大殿の族を離れて、きらきらしう淸げなる人は無き世なりと見ゆ。內裏の御前よりも、(一六)この院をばいと

(一)冷泉の姬君に對する寵愛
(二)姬君が
(三)惱める姬君の美しさ
(四)傍觀者の感
(五)たゞは置かれやうかと
(六)冷泉が
(七)薰
(八)姬君の琴を薰が
(九)薰が

(旨) 新年の男踏歌、薰冷泉院に召さる

(一〇)薰
(一一)音頭取
(一二)今上の
(一三)髭黑の姬君
(一四)冷泉の御殿
(一五)夕霧と頭中との一族以外には
(一六)冷泉院

たりははしたなげなゝめるを、今(一)は心やすき御有樣なゝめるに、まかせ(二)聞えてと思ひ寄りしなり。誰もく\、便(三)なからむ事は、ありのまゝにも諫め給はで、今(四)ひきかへし右の大臣も、僻々しきやうに、おもむけて宣ふなれば、苦しうなむ。これも然るべきにこそは」と、なだらかに宣ひて、心も騷がい給はず。中將「その(五)昔の御宿世は、目に見えぬものなれば、かう思し宣はするを、これは契異なるとも、いかゞは奏し直すべき事ならむ。中宮(六)を憚り聞え給ふとて、院の女御をば、いかゞし奉り給はむとする。後見や何やと、(七)かねて思しかはすとも、さしもえ侍らじ。よし見聞き侍らむ。よう思へば、内裏は中宮おはしますとて、他人(八)は交らひ給はずや。君に仕うまつることは、それが(九)心やすきこそ、昔より興あることにはしけれ。女(一〇)御は、いさゝかなる事の違ひめありて、よろしからず思ひ聞え給はむに、僻みたるやうになむ、世の聞耳も侍らむ」など、二(一一)所して申し給へば、かんの君、いと苦しと思しぬ。

(一)冷泉は
(二)冷泉の御意に隨はんと思ひし迄也
(三)不都合な事は其當座にとめてくれゝばよいのに左樣はせずして
(四)今になりて夕霧も
(五)縁といふものは目に見えぬもの故、帝の仰に對して縁がないから差上げませぬとは言はれぬ
(六)帝へは明石姫君を憚りて上げぬと仰せられるが冷泉の弘徽殿は如何
(七)前々には弘徽殿を姫君の力にする積で居てもさうは行くまじ
(八)他にも御妾があるではないか
(九)傍輩の仲よきをこそ
(一〇)弘徽殿女御と少しの行違で中が惡くならば外聞も異なものならん
(一一)中將と弟の辨と

方なくなむ覺えける。聞え給ひし人々(一)、中の君をと移らふもあり。少將の君をば(二)、母北の方の御怨により、さもやと思して、ほのめかし聞え給ひしを、絶えて音づれずなりにたり。院には(三)、かの君達も、したしくもとより侍ひ給へど、この參り給ひて後はをさ〳〵(四)參らず、まれ〳〵殿上の方にさしのぞきても、あぢきなう、逃げてなむまかり出でける。

内裏には、故(五)大臣の(六)志しおき給へるさま殊なりしを、かく引き違へたる御宮仕を、如何なるにかと思して、中將を(七)召してなむ宣はせける。中將「御氣色(八)よろしからず。さればこそ(九)世人の心のうちも、傾きぬべきことなりと、かねて申しゝことを、思し取る(一〇)かた異にて、斯う思し立ちにしかば、ともかくも(一一)聞えがたくて侍るに、かゝる仰言の侍るは、なにがしらが身の爲も、あぢきなくなむ侍る」と、いとものしと思ひて、かんの君を(一二)申し給ふ。玉鬘「いさや、たゞ今かう俄にしも思ひ立たざりしを、あながちに、いとほしう宣はせ(一三)しかば、後見なき交らひの、内裏わ

(一)姫君に懸想せし男等
(二)玉鬘が雲井雁に憚りて少將を中君の聟にせんかと思ひて其趣を仄めかしたれど、少將が姫君冷泉へ行きて後は一向疎遠也
(三)冷泉院には夕霧の子どもは元より親しく立入り居れど
(四)少將が
(五)少將が
㊆ 今上、大君の冷泉に仕へたるを喞む、玉鬘の迷惑、大君懷胎
(六)鬚黑が姫君を内裏へ差上ぐる積なりしを
(七)姫君の兄を召して今上が趣意を問はれし也
(八)今上の御機嫌惡し、以下中將の母にいふ詞
(九)冷泉へ姫君を上げたらば世人も變に思ふならんと
(一〇)玉鬘は意見を異にして
(一一)強ひて反對する譯にも行かずして居る處へ
(一二)母を責む
(一三)冷泉が



らひありき給ふ。この(一)御方にも、心よせあり顔にもてなして、下には、いかに(二)見給ふらむの心さへ添ひ給へり。夕暮のしめやかなるに、藤侍従と連れてありくに、かの御方の御前近く見やらるゝ五葉に、藤のいとおもしろく咲きかゝりたるを、水の邊の石に、苔を席にてながめ(三)居給へり。まほにはあらね(四)ど、世の中怨めしげにかすめつゝ語らふ。

薫　手(五)にかくるものにしあらば藤の花まつよりこゆるいろを見ましや

とて、花を見上げたる氣色など、あやしく哀に心苦しくも思はゆれば、我(六)が心にあらぬ世の有様にほのめかす。

藤侍　むらさき(七)のいろはかよへど藤の花こゝろにえこそかゝらざりけれ

まめなる君にて、いとほしと思へり。いと(九)心惑ふばかりは思ひ入られざりしかど、(八)口惜しうは覺えけり。

かの少將の君はしも、まめやかに如何にせましと、あやまち(一〇)もしつべく、靜めむ

(一)髭黒の姫君の方
(二)内々姫君が何と思つて居るか氣を引いて見る心持
(三)薫が
(四)姫君の事をあらはには言はねど
(五)姫君が儘になるものならば冷泉に取られて見ては居まじきに
(六)藤侍従が姫君の宮仕は我が本意に非ざる趣をとて
(七)姫君は我が同胞なれど我が勝手にする譯にはゆかぬ
(八)藤侍従は篤實なる人で
(九)薫は非常に姫君に熱心といふ程ではなかりしかど
(一一)藏人少將、中君に心なし
(一〇)焦心の餘り不埒も働きかねまじく

(一)文を見て姫君の感
(二)姫君の附添
(三)姫君が冷泉院の御前へ出る前に先づ弘徽殿女御の方へ行く也
(四)玉鬘附添ひ行きし也
(五)冷泉
(六)秋好、弘徽殿
(七)姫君は
(八)冷泉の御疎ならぬ筈
(九)姫君が
(一〇)此儘當分居るならんと冷泉が思ひ居しに
⊕ 薫の大君に對する淡き戀
(一一)薫
(一二)冷泉が
(一三)薫の
(一四)薫が

侍らましを。

などあるに、うたても答をしてけるかな、書きかへでやりつらむよ、と苦しげに思して、物も宣はずなりぬ。(一)大人、(二)わらは、めやすき限をとゝのへられたり。大方の儀式などは、内裏に參り給はましに變ることなし。

(三)まづ女御の御方に渡り給ひて、(四)かんの君は御物語など聞え給ふ。夜更けてなむ上(五)に參う上り給ひける。后、(六)女御など、皆年頃經てねび給へるに、(七)いと美しげにて、盛に見所あるさまを、見奉り給ふは、(八)などてかは疎ならむ、(九)花やかに時めき給ふ。たゞ人だちて、心安くもてなし給へる樣しもぞ、實にあらまほしうめでたかりける。かんの君を、(一〇)暫しさぶらひ給ひなむと、心留めて思しけるに、いと疾く、やをら出で給ひにければ、口惜しう心憂しと思したり。

(一一)源侍從の君をば、(一二)旦暮御前に召しまつはしつゝ、實に唯昔の光源氏の生ひ出で給ひしに、劣らぬ人(一三)の御覺なり。院の内には、いづれの御方にも疎からず、(一四)馴れ交

のにし給ひて、互に渡り通ひおはするを、餘所々々にならむことを思すなりけり。心殊にしたて、引き繕ひ奉り給へる御樣、(一)いとをかし。殿の思し宣ひしさまな(二)どを思し出でて、物哀なる折からにて、とりて見給ふ。(三)大臣北の方の、さばかり(四)立ち並びて、頼もしげなる御中に、など斯うすゞろごとを思ひ言ふらむ、と怪しきにも、限とある(五)を、まことにやと思して、やがてこの御文の端に、

姫君　あはれてふ(六)常ならぬ世のひと言も如何なる人にかくるものぞは
ゆゝしき方にてなむ(七)、ほのかに思ひ知りたる。

と書き給ひて、姫君「斯う言ひやれかし」と宣ふを、やがて奉れ(八)たるを、限なう珍らしきにも、折(九)を思しとがむるさへ、いとゞ涙も留らず。立ちかへり(一〇)、少將「誰(一一)が名はたゞじ」など、かごとがましくて、

少將　生ける(一二)世の死は心にまかせねば聞かでややまむきみがひとこと
塚(一三)の上にもかけ給ふべき御心の程と思ひ給へましかば、ひたみちにも急がれ(一四)

（一）化粧したる姫君の容貌
（二）父髭黒が我を宮仕に出さんと希望せし事
（三）姫君が文を
（四）少將は兩親立派に揃ひて不足はあるまいに、姫君の心
（五）少將の文の中に
（六）尋常の死人などを悼む場合の外にあはれといふ詞を人に用ふるはどういふ時の事か我は知らぬ
（七）死人などの場合
（八）中將が少將に
（九）場合を考へれば猶々今日限り姫君が人のものとなるをいふ
（一〇）折かへして少將が文を贈る
（一一）「戀死なば誰が名は立たじ世の中を常なきものと言ひはなすとも」
（一二）死者に對しては哀といふ事を知れる君故さらば死んで君に哀といつて貰ひたけれど、生きながら死ぬといふ事も出來ねばつまり君の哀といふ詞は到底聞き得ぬのであらう
（一三）呉の季札が徐君の生前に贈らんと思ひし劍を徐君の死後其塚にかけし故事
（一四）死を

(一)日が悪いので参りませぬ
(二)子ども
(三)禮を言ひやる
(四)紅梅
(五)供人の乗用の車
(六)紅梅の
(七)髭黒
(八)玉鬘のまゝ子
(九)髭黒存生ならばと
(一〇)藏人少將
(一一)媒の中將のお許へ
(一二)姫君が
(一三)命が繋がれて
(一四)一所に住みなれて
(一五)二人は戸一枚を隔てゝ西東に分れて居るのをさへ不足に思ひて

臣も御文あり。

夕霧自らも參るべきと思う給へつるに、愼む事の侍りてなむ。(一)男(二)ども、雜役にとて參らす。疎からず召し使はせ給へ。

とて、源少將、兵衞佐など奉れ給へり。玉鬘、「情はおはすかし」と、(三)よろこび聞え給ふ。大納言殿(四)よりも、人々の(五)御車奉れ給ふ。北の方は(六)故大臣の(七)御女、眞木柱の姫君なれば、いづ方につけても、睦じう聞え通ひ給ふべけれど、さしもあらず。藤中納言(八)はしも、自らおはして、中將、辨の君達、諸共に事行ひ給ふ。(九)殿のおはせましかばと、萬につけて哀なり。藏人の君、(一〇)例の人(一一)にいみじき詞を盡して、

少將今はかぎりと思ひ侍る命の、さすがに悲しきを、哀と思ふとばかりだに、一言宣はせば、(一二)それにかけ留められて、(一三)暫しもながらへやせむ。

などあるを、持て參りて見れば、姫君二所うち語らひて、いといたう屈し給へり。晝夜諸共にならひ給ひて、(一四)中の戸ばかり隔てたる、(一五)西東をだにいといぶせきも

(一)平人には決してやらぬと髭黒が極めて居たのに
(二)藏人少將の文
(三)君が浮々とした風で居ながら如何ばかり深く花に心を移したるかは今日はじめて知れり
(四)代筆の女房等が
九　大君冷泉院へ參る、藏人少將の歎
(五)姫君が冷泉院へ
(六)夕霧
(七)雲井雁
(八)雲井と玉鬘と餘り親しくはせざりしに
(九)姫君の一件の爲に
(一〇)又疎遠になるも
(一一)氣ぬけのしたる少將を介抱するにかまけて御用を承る事もせざりしに其方から言ひ附けて下されぬは隔のある御仕方
(一二)不滿を
(一三)玉鬘が

(一)たゞ人にはかけてあるまじきものに、故殿のおぼしおきてたりしものを、院に參り給はむだに、行末の榮々しからぬを、思したる折しも、(二)この御文とり入れて哀がる。御かへし、

玉鬘　(三)今日ぞ知る空をながむる氣色にて花にこゝろをうつしけりとも

「あないとほし。戲にのみも取りなすかな」など言へど、(四)うるさがりて書きかへず。

九日にぞ參りたまふ。(五)(六)右の大殿、御車御前の人々數多奉り給へり。(七)北の方も怨めしと思ひ聞え給へど、年頃もさもあらざりしに、(八)この御事故しげう聞えかよひ給へるを、(九)又かき絶えむもうたてあれば、(一〇)被物ども、よき女の裝束數多奉れ給へり。雲井　あやしう現心もなきやうなる人の有樣を、(一一)見給へあつかふ程に、承り留むることもなかりけるを、驚かさせ給はぬも、疎々しくなむ。とぞありける。おいらかなる樣にてほのめかし給へるを、(一二)いとほしと見給ふ。(一三)大

泣きみ笑ひみ語らひ明す。

またの日は卯月になりにければ、兄弟の君達の、(一)内裏に參りさまよふに、いたう(二)屈し入りて眺め居給へれば、母北の方(三)は涙ぐみておはす。大臣も、夕霧院の(四)聞召す所もあるべし。何にかはおふな〳〵聞き入れむと思ひて、くやしう、對面の序にもうち出で聞えずなりにし。(五)自らあながちに申さましかば、さりともえ違へ給はざらまし」など宣ふ。さて例の、

少將　花を見て春はくらしつ今日よりやしげきなげき(六)のしたにまどはむ

と聞え給へり。(七)御前にてこれかれ上臈だつ人々、(八)この御懸想人の、様々にいとほしげなるを、聞え知らするなかに、中將のおもと、(九)「生死をと言ひし様の、言にのみはあらず、心苦しげなりし」など聞ゆれば、かんの君もいとほしと聞き給ふ。(一〇)大臣北の方のおぼす所により、せめて人の御怨深くはと、取り換へありておぼす、この御まゐりを、妨げざまに思ふらむはしも、めざましきこと、限なきにても、

(一)少將の
(二)少將は
(三)雲井雁
(四)冷泉の手前もあれば少將の望を申入れても玉鬘が承諾する筈はなしと思ひて玉鬘に面會しても言ひ出さざりし
(五)夕霧が自分で懇望したらば玉鬘も承知せぬ譯にもゆくまい
(六)今日は夏に入りたればいふ也、なげき―嘆き、木
(七)玉鬘の
(八)姫君に戀をしかくる男等の
(九)少將が
(一〇)夕霧の夫婦の手前もあれば此人達に深く怨まれてはならぬと思ひて代りに中君を差出して迄する姫君の宮仕を妨げんとするは心外なるにつけても、以下玉鬘の心

べき氣色もなければ、實にかの夕暮の(一)顯證なりけむに、いとゞかう生憎なる心は添ひたるならむと、理に思ひて、中將「(二)聞召させたらば、いとゞ如何にけしからぬ御心なりけりと、疎み聞え給はむ。心苦しと思ひ聞えつる心も亡せぬ。いと後めたき御心なりけり」と、(三)向火つくれば、少將「いでや、(四)さばれや。今は限の身なれば、物怖ろしくもあらずなりにたり。さても(五)負け給ひしこそ、いといとほしかりしか。(六)おいらかに召し寄せで。(七)めくはせ奉らましかば、こよなからましものを」など言ひて、

少將(八)いでやなぞ數ならぬ身にかなはぬは人にまけじのこゝろなりけり

中將うち笑ひて、

中將(九)わりなしやつよきによらむ勝負をこゝろひとつにいかゞまかする

と答ふるさへぞ(一〇)つらかりける。

少將(一一)あはれとて手をゆるせかしいきしにを君にまかする我身とならば

(一)姫君を少將があちはに見たるによりて
(二)隙見の事を玉鬘へ申上げたらば
(三)此方からも攻擊すれば
(四)どうでもよい
(五)姉姫君が
(六)穩かに私を呼ばれゝばよかりしに
(七)私が御側に居て目まぜて助力したらば立派に勝つべかりしに
(八)人に負けぬ心は有ても其が叶はぬは抑何といふ譯ぞ、姫君を冷泉に取られたるを嘆く也
(九)強い方が勝つにきまつて居るものを勝手にせんとは無理ではないか
(一〇)少將が恨めしく思ふ
(一一)我生死は今は其方次第也、我を憐みて姫君に逢はせ給へ、手をゆるせとは相撲などの勝負に擬していふなるべし

たうも隱さず。(一)そこはかとなくて、唯世を怨めしげにかすめたり。

薫 (二)つれなくて過ぐる月日をかぞへつゝ物うらめしき春の暮かな

(三)人は斯うこそのどやかに、樣よくねたげなゝめれ、我がいと人笑はれなる心いられを、(四)かたへは目馴れて、侮りそめられにたる、と思ふも、胸痛ければ、ことに物も言はれで、(五)例かたらふ中將のおもとの曹司のかたに行くも、例のかひあらじかしと歎きがちなり。侍從の君は、(六)「この御返事せむ」とて、(七)上に參り給ふを見るに、いと腹立しう安からず、若き心地には、ひとへに物ぞ覺えける。(八)あさましきまで恨み歎けば、(九)この前申しも、あまり戯れにくゝ、いとほしと思ひて、答もをさ〳〵せず。かの御碁の見證せし夕暮のことも言ひ出でて、(一〇)少將「さば(一一)かりの夢をだに又見てしがな。あはれ何を頼みにて生きたらむ。(一二)かう聞ゆる事も殘り少う覺ゆれば、(一三)つらきも哀といふ事こそ誠なりけれ」と、まめだちて言ふ。(一四)哀とて、いひやるべき方なき事なり、(一五)かの慰め給はむ御樣、露ばかり嬉しと思ふ

(一)其文の文句は別に何といふ事もなく
(二)只暮春の情を述べたる樣にて、裏には姫君のつれなく冷泉院へ行くを恨みたる也
(三)他人は此樣に大樣に體裁よく恨を言つて居るが、以下薫の文を見ての少將の心
(四)又例の性急よと人が馴れこになりて
(五)少將がいつも話相手にする中將の部屋へ行くにつけても
(六)薫への返事
(七)玉鬘の方へ此文を見せに行くを少將が見て
(八)少將が中將のおもとに對して
(九)侍女をいふ、中將のおもと
(一〇)少將が
(一一)又隙見でもせめてしたきもの
(一二)かく其方と話するも今暫くの間と思はるれば
(一三)引歌未詳
(一四)何程氣の毒なりとて最早仕方のなき事也、以下中將のおもとの心
(一五)代りに中君をやる事

(一)此樣な妙な事を御願ひ申すも
(二)畢竟子故の闇の親馬鹿故
(三)親心を尤と御察し下さらば
(四)親の氣の濟む樣にして下されい
(五)どう極めてよいか分らぬに
(六)冷泉院
(七)眞實御志があるならば暫時御待ち下されて
(八)御慰め申す方法が自らある、其を待つて下さるのが外聞も宜しからん
(九)姫君を冷泉へ差上げて後中君を少將へやらんと
(一〇)二人一時に片附けては、玉鬘の心
(一一)少將はまだ官位も卑ければ暫時見合せての事
(一二)少將は玉鬘の注文通り中君に乘變へる氣にならず
(一三)取附き處なく
(一四)藏人少將が
(一五)藤侍從が
(一六)少將が
(一七)なまじ隱しだてしては猶々何か事のある樣に見ゆべしと侍從が思ひて

雲井「いとかたはらいたき事につけて、ほのめかし聞ゆるも、世にかたくなしき暗の迷になむ。(一)思し知る方もあらば、(二)推しはかりて、猶慰めさせ給へ。(三)」など、いとほしげに聞え給ふを、玉鬘「苦しうもあるかな」と、打歎き給ひて、(四)

玉鬘(五)如何なることと思う給へ定むべき樣もなきを、(六)院よりわりなく宣はするに、思ひ給へ亂れてなむ。(七)まめやかなる御心ならば、この程を思ししづめて、(八)慰め聞えむ樣をも見給ひてなむ、世の聞えもなだらかならむ。

など申し給ふも、(九)この御まゐり過して、中の君をと思すなるべし。(一〇)さし合せては、うたてしたり顏ならむ、(一一)まだ位などもあさへたる程を、など思すに、(一二)男は更にしか思ひ移るべくもあらず、ほのかに見奉りて後は、面影に戀しう、如何ならむ折にとのみ覺ゆるも、かう賴みかゝらずなりぬるを、思ひ歎き給ふこと限なし。(一三)かひなき事も言はむとて、例の侍從の曹司に(一四)來たれば、源侍從の文をぞ(一五)見居給へりける。引き隱すを、さなめりと見て、(一六)奪ひとりつ。(一七)事あり顏にやと思ひて、い

（一）かき集めて
（二）姫君附のなれきといふ女童
（三）いくら我物にしても袖で掩ひて外へ匂を散らさぬ譯にも行くまい

❽大君冷泉院へ宮仕の事定まる、藏人中將の愁

（四）玉鬘
（五）冷泉
（六）弘徽殿女御
（七）姫君の宮仕を遮るは冷泉方を嫌ふのか
（八）冷泉は我が邪魔をする故なりと
（九）姫君をよこし給へ
（一〇）緣があるのであらう、玉鬘の心
（一一）侍女等の衣服
（一二）姫君を冷泉へ差上ぐる用意をする也
（一三）雲井雁

童大ぞらの風に散れどもさくらばなおのがものとぞかきつめ（一）て見る

左のなれき（二）、
「さくらばな（三）匂あまたに散らさじとおほふばかりの袖はありやは
心せばげにこそ見ゆめれ」など言ひ貶す。

かく言ふに、月日はかなく過すも、行末うしろめたきを、（四）かんの殿はよろづに思す。院（五）よりは、御消息日々にあり。女（六）御、「（七）うと〳〵しく思し隔つるにや。上（八）はこゝに聞え疎むるなゝめりと、いと憎げに思し宣へば、戯にも苦しうなむ。同じくば、この頃のほどに思（九）し立ちね」など、いとまめやかに聞え給ふ。然る（一〇）べきにこそはおはすらめ、いと斯う生憎に宣ふも忝し、など思したり。御調度などは、許多し置かせ給へれば、人々（一一）の裝束、何くれのはかなきことをぞ急ぎ（一二）給ふ。これを聞くに、藏人の少將は死ぬばかり思ひて、母北（一三）の方をせめ奉れば、聞きわづらひ給ひて、

給へる折、心地なくやは、(一)と思ひて出でて去ぬ。またかゝる紛もやと、影に添ひてぞ伺ひ歩きける。(二)
(三)君達は花のあらそひ(四)をしつゝ、明し暮し給ふに、風荒らかに吹きたる夕つ方、亂れおつるがいと口惜しうあたらしければ、負け方の姫君、

姫君　さくらゆゑ風にこゝろのさわぐかな(五)おもひぐまなき花と見る〳〵

(六)御方の宰相の君、

宰相　(七)咲くと見てかつは散りぬる花なればまくるを深きうらみともせず

と(八)聞え助くれば、右の姫君、

中君　風にちることは世のつね(九)えだながらうつろふ花をたゞにしも見じ

(一〇)この御方の大輔の君、

大輔　こゝろありて池のみぎはにおつる花あわとなりても我が方に寄れ

勝方の童べおりて、花の下にありきて、散りたるをいと多く拾ひて、持て參れり。

(一)無遠慮に差出るでもあるまいと
(二)隙見すべき折を少將が
(三)姫君等
(四)賭物の櫻につきての爭
(五)思ひやりのなき花とはかねて知り居れども
(六)姫君附の
(七)咲くかと思へば直に散るつまらぬ花故此木を取られても悔しくもなし
(八)負方の肩を持てば
(九)枝についた儘で我手に移りて仕舞ひたるは殘念であらうが、うつろふ―移る、散る
(一〇)中君附の



賭物にて、「三番に數ひとつ勝ち給はむ方に、花を寄せてむ」(一)と戯れかはし聞え給ふ。暗うなれば、端近うて打ちはて給ふ。御簾卷きあげて、人々(二)皆挑み念じ聞ゆ。折しも例の少將、(三)侍從の君の御曹司に來たりけるを、(四)うち連れて出で給ひにければ、大方人少なるに、廊の戸のあきたるに、やをら寄りて覗きけり。(五)かう嬉しき折を見つけたるは、佛などの顯はれ給へらむに、參りたらむ心地するも、はかなき心になむ。夕暮の霞のまぎれは、さやかならねと、つく〴〵と見れば、櫻色の(六)あやめもそれと見わきつ。實に「散りなむ後の形見」(七)にも見まほしく、匂多く見え給ふを、いとどことざまになり給はむ事わびしく思ひまさる。若き人々(九)の打解けたる姿ども、夕榮(八)もをかしう見ゆ。右勝たせ給ひぬ。(一〇)「高麗の亂聲遲しや」(一一)など、はやりかに言ふもあり。「右に(一二)心よせ奉りて、西の御前によりて侍る木を、左に(一三)なして、年頃の御爭の、斯かればありつるぞかし」と、右方は心地よげにはげまし聞ゆ。(一四)何事と知らねど、をかしと聞きて、(一五)さしいらへもせまほしけれど、打解け

(一)櫻の所有權をわたさん
(二)侍女等が各我が主人に勝たせんとする也
(三)藏人少將
(四)侍從が兄等と出で行きしあとなれば
(五)少將の心
(六)櫻色の衣を着たるが姉姫君也と見分けがつく
(七)衣の色の縁にて櫻によそへて姫君の器量を形容したる也、「櫻色に衣は深くそめて著ん花のちりなん後の形見に」
(八)人のものにして仕舞ふ事
(九)侍女等
(一〇)妹中君勝ちし也
(一一)競馬に右勝てば高麗樂を奏すれば也
(一二)木が妹君を慕ひて
(一三)姉姫君が左のもの即ち我がものなりと言ひて
(一四)藏人少將が
(一五)口を出したけれど

は、いと若うきよげに、猶盛の御容貌と見え給へり。冷泉院の帝は、多くは、こ(一)の御有樣の猶ゆかしう、昔戀しう思し出でられければ、何につけてかはと(二)思しめぐらして、姫君の御事を、强に聞え給ふにぞありける。(三)院へ參り給はむことは、この君達ぞ、「(五)猶物の榮なき心地こそすべけれ。萬の事、時につけたるをこそ、世の(四)人もゆるすめれ。(六)實にいと見奉らまほしき御有樣は、この世に類なくおはしますめれど、(七)盛ならぬ心地ぞするや。琴笛のしらべ、花鳥の色をも音をも、時に隨ひてこそ、人の耳にもとまるものなれ。(八)東宮はいかゞ」など申し給へば、玉鬘「いさや、(九)初よりやむごとなき人の、かたはらもなき樣にてのみ、物し給ふめればこそ、なかなかにて交らはむは、胸いたく人わらはれなる事もやあらむと、(一〇)つゝましければ。(一一)殿おはせましかば、(一二)行末の御宿世々々は知らず、たゞ今はかひある樣に、(一三)もてなし給ひてましを」など宣ひ出でて、皆ものあはれなり。

中將など立ち給ひて後、(一四)君達は打ちさし給へる碁打ち給ふ。昔より(一五)爭ひ給ふ櫻を

(一)玉鬘の
(二)何か口實を設けて玉鬘に近づかんと
(三)姫君を冷泉へ上げる事につきては
(四)中將等
(五)冷泉院では宮仕も榮えぬ心地がする
(六)冷泉の御人柄は
(七)御隱居の事故
(八)東宮へ差上げては如何
(九)東宮へ已に夕霧の第一女といふ此上もなき人が無雙の寵を恣にして居る故
(一〇)其點に氣がおかれる故見合せたり
(一一)髭黑存生ならば
(一二)行末の運不運は兎に角
(一三)姫等の身の上を
(一四)姫君姉妹
(一五)中將の噂したる櫻

(一)中將が玉鬘を
(二)中將が
(三)此姬君等を髭黑の豫定通り其々身の收まりをつけたきものと
(四)姬君と中君と
(五)髭黑
(六)玉鬘
(七)中君の
(八)中將が其を聞きて格別泣きわめきもせねど
(九)先だち死なれたる
(一〇)中將が今は他に妻を持ち居る故何時もこゝにゆつくりして居る事はなきに
(一一)玉鬘
(一二)中將等の

ふ。碁打ちさして恥らひておはさうずる、いとをかしげなり。中將「内裏わたりなどまかり歩きても、故殿のおはしまさましかばと、思う給へらるゝ事多くこそ」など、涙ぐみて見奉り給ふ。(一)(二)廿七八の程に物し給へば、いとよく整ひて、(三)この御有樣どもを、いかで古思しおきてしに違へずもがな、と思ひ居給へり。御前の花の木どもの中にも匂まさりてをかしき櫻を折らせて、姫等「外のには似ずこそ」などもてあそび給ふを中將「幼くおはしましゝ時、この花は我がぞ〳〵と爭ひ(四)給ひしを、故殿、(五)姫君の御花ぞと定め給ふ。(六)上は、(七)若君の御木とさだめ給ひしを、いと然は泣きのゝしらねど安からず思ひ給へられしはや」とて、中將「この櫻の(八)老木になりにけるにつけても、過ぎにける齡を思ひ給へ出づれば、數多の人に後(九)れ侍りにける、身の愁も止めがたうこそ」など泣きみ笑ひみ聞え給ひて、例よりはのどやかにおはす。(一〇)人の婿になりて、今は心しづかにも見え給はぬを、花に心とめて物し給ふ。(一一)かんの君、かくおとなしき(一二)人の親になり給ふ御年の程思ふより

（一）平人の妻にせんには
（二）次女中の君
（三）衣の色
（四）髮の特に色うつくしきをいふ
（五）せい格好が
（六）すらりとして
（七）くつきりとして
（八）姉に
（九）姉に非常に劣ると
（一〇）姉妹が
（一一）髮つき
（一二）藤侍從が立合人の役をするとて
（一三）姬君等の御贔屓
（一四）長男
（一五）姬君達の御贔屓が侍從に劣る樣になりしは
（一六）姬君への御奉公を、辨官は忙がしき役なれば斯くいふ也

かに氣高う、今めかしき樣し給ひて、實にたゞ人（一）にて見奉らば、似げなうぞ見え給ふ。櫻の細長、山吹などの、折にあひたる色あひの、なつかしき程に重りたる裾まで、愛敬のこぼれ落つる樣に見ゆる、御もてなしなども、らう〳〵じう心恥かしき氣さへ添ひ給へり。今一所（二）は、薄紅梅（三）に、御髮色（四）にて、柳（五）の絲のやうにたをたをと見ゆ。いとそびやか（六）になまめかしう、澄み（七）たる樣して、おもりかに心深きけはひは（八）まさり給へれど、匂ひやかなるけはひは、こよなし（九）とぞ人思へる。碁うち給ふとて、さし（一〇）向ひ給へる、かんざし（一一）御髮のかゝりたる樣ども、いと見所あり。侍從（一二）の君見證し給ふとて、近うさぶらひ給ふに、兄君達さしのぞき給ひて、「侍從の覺（一三）こよなくなりにけり。御碁の見證許されにけるをや」とて、大人々々しき樣して、つい居給へば、御前なる人々とかう居直る。中將（一四）、「宮仕のいそがしうなり侍る程に、人に（一五）劣りにたるは、いと本意なきわざかな」と憂へ給へば、右中辨「辨官はまいて、私（一六）の宮仕おこたりぬべき儘に、さのみやは思し棄てむ」など申し給

(一)薫は早く父に別れ
(二)自分の子どもの
(三)玉鬘に比ぶるゝ丈ありて成程幼稚な手で
(四)早く御歸りなされしを皆不審がりたり
(五)急いで御歸りなされしも尤何も御心にとまる程の事はなかりしかば
(六)之をきつかけにして薫が藤侍從を尋ね來て大君に心あるをほのめかす
(七)薫に
(八)藤侍從
七　大君中君と圍碁、櫻の賭物、藏人少將の隙見
(九)「櫻さく櫻の山の櫻花咲く櫻あれば散る櫻あり」「櫻花散りかひくもれ老いらくの來んといふなる路まがふがに」
(一〇)玉鬘方をいふ
(一一)端近に姫君達が出て居ても人に見らるゝ事もなささう也
(一二)姫君達は
(一三)姉妹それ〴〵に
(一四)長女大君

と書きたり。寝殿に持て參りて、これかれ見給ふ。玉鬘手なども、いとをかしうもあるかな。如何なる人、今よりかく整ひ給ふらむ。(一)幼くて院にもおくれ奉り、母宮のしどけなうおほし立て給へれど、猶人には勝るべきにこそはあめれ」とて、かんの君は、(二)この君達の手など惡しきことを辱め給ふ。返事(三)實にいと若く、

藤侍從よべは水驛(四)をなむ、人々咎め聞ゆめりし。

竹河(五)に夜をふかさじといそぎしもいかなるふしを思ひおかまし。

實にこの節(六)をはじめにて、この君の御曹司におはして、氣色ばみ寄る。少將の推し量りしもしるく、皆人心よせたり(七)。侍從の君も(八)、若き心地に、近きゆかりにて、旦暮睦びまほしう思ひけり。

三月になりて、(九)咲く櫻あれば散りかひくもり、大方の盛なる頃、のどやかにおは(一〇)する所は、紛るゝこともなく、(一一)端ちかなる罪もあるまじかゝめり。その頃十八九の程(一二)にやおはしけむ、御容貌も心ばへも、(一三)とり〴〵にぞをかしき。姫君(一四)はいとあざや

(一)有合せに任せて玉鬘より薫に贈る
(二)何といふ事ぞ、思ひがけなき賜物よの義
(三)戯れて
(四)主人の藤侍從にかへしたる也
(五)藤侍從が薫を、
(六)水驛は踏歌の時只一寸立留りて小休する所也、竹河は踏歌の時の落物なれば一寸立寄りて歸る積なりしが思の外に遲くなりしとの意を戯れていへる也
(七)少將の心、此處へは薫がちよい〳〵立廻る故
(八)花は薫、獨り惑ふは少將自身
(九)折につけての情は誰に對してもあるべし、獨り薫をのみ珍重する譯ではなし
(一〇)薫
(一一)玉鬘にも見てくれとの積りらしく
(一二)竹河の歌にて一端を漏せし我心の中を察して下されしや否、竹河「竹河の橋のつめなるや花園に我をばはなてめざしたぐへて」大君に心あるをほのめかしたる也

たるを、取り敢へたるまゝに(一)かづけ給ふ。薫「何ぞもぞ(二)」などさうどきて(三)、侍從はあるじの君に(四)うちかづけて去ぬ。引き留めて(五)かづくれど、薫「水驛にて(六)夜更けにけり」とて逃げにけり。少將は、この(七)源侍從の君の斯うほのめき寄るめれば、みな人これにこそ心寄せ給ふらめ、我が身はいとゞ、屈じいたく思ひ弱りて、あぢきなうぞ怨むる。

少將人は(八)みな花に心をうつすらむひとりぞまどふはるの夜のやみ

うち歎きて立てば、内の人のかへし、

侍女をりからや(九)哀も知らむ梅の花たゞ香ばかりにうつりしもせじ

旦に四位の侍從の許より、あるじの侍從のもとに、

薫(一〇)昨夜は、いと猥りがはしかりしを、人々いかに見給ひけむ。

と、見給へ(一一)とおぼしう、假名がちに書きて、端に、

薫竹河(一二)のはしうちいでしひとふしにふかき心のそこはしりきや

(一)恥かしがりて指をくはへて居るでもあるまいと薫が思ひて
(二)頭中は一向親しくもせざりし我親なれど、玉鬘の心
(三)親は
(四)柏木の樣子によく似て
(五)柏木の彈いて居る樣に思はれる
(六)年が寄つたしるしの
(七)催馬樂の曲の名
(八)餘計な世話をやく老人も交つて居ぬ故
(九)父髯黑
(一〇)音樂の方は下手で酒ばかり飲んで居る故
(一一)御祝儀だけでも謠へ
(一二)催馬樂の曲の名
(一三)他の人々と同音に
(一四)言ひそこなひする
(一五)土器を受け取らず

へかし」と、宣ひ出したれば、(一)あまえて爪くふべきことにもあらぬをと思ひて、をさをさ心にも入らず、搔きわたし給へる氣色、いとひゞき多く聞ゆ。(二)常に見奉り睦びざりし親なれど、世におはせずなりにきと思ふに、いと心細きに、はかなきことの序にも思ひ出で奉るに、いとなむ哀なる。玉鬘、(三)大方この君は、あやしう(四)故大納言の御有樣に、いとよう覺え、琴の音など、(五)唯それとこそ覺えつれ」と泣い給ふも、(六)古めい給ふしるしの淚もろさにや。少將も聲いと面白うて、(七)「さき草」うたふ。(八)さかしら心つきて、打過したる人もまじらねば、おのづから互に催されて遊び給ふに、あるじの侍從は、(九)故大臣に似奉り給へるにや、(一〇)かやうの方はおくれて、盃をのみ進むれば、(一一)「壽詞をだにせむや」と、恥かしめられて、(一二)「竹河」を(一三)おなじ聲にいだして、まだ若けれど、をかしう謠ふ。簾のうちより土器さし出づ。醉のすゝみては、忍ぶる事もつゝまれず、(一四)僻言するわざとこそ聞き侍れ。如何にもてない給ふぞ」と、とみに(一五)承引かず。小袿重なりたる細長の、人香なつかしう染み



り。中門入り給ふ程に、同じ直衣姿なる人立てりけり。隱れなむと思ひけるを、(一)ひき留めたれば、この常に立ち煩ふ少將なりけり。(三)寢殿の西面に、琵琶箏の琴の聲(二)するに、(四)心を惑はして立てるなめり。苦しげや、人のゆるさぬ事思ひはじめむは、(五)罪深かるべきわざかな、と思ふ。琴の聲も止みぬれば、「いざ、しるべし給へ。まろはいとたど〳〵し」(六)とて、引き連れて、西の渡殿の前なる、紅梅の木のもとに、「梅が枝」(七)をうそぶきて立ち寄るけはひの、花よりもしるく、さと打匂へれば、妻戸おしあけて、人々あづまをいとよく搔き合せたり。(八)女の琴にて、呂の歌は斯う(九)しもあはせぬを、いたし、と思ひて、今一遍、をり返し謠ふを、(一〇)琵琶も二なく今めかし。(一一)故ありてもてない給へるあたりぞかしと、心とまりぬれば、今宵は少し打解けて、(一二)はかなしごとなども言ふ。内より和琴さし出でたり。互にゆづりて(一三)手觸れぬに、侍從の君して、かんの殿、玉鬘故致仕の大臣の御爪音になむ、(一四)通ひ給へると聞きわたるを、まめやかにゆかしくなむ。(一五)今宵は、猶鶯(一六)にもさそはれ給

(一)其人が
(二)薫が
(三)來馴れたる藏人少將
(四)薫の心
(五)此少將の樣に無理な戀をするは
(六)一向不案内也
(七)催馬樂の梅が枝を口笛に吹いて
(八)倭琴を梅が枝の調子に合せて彈きたり
(九)薫の心、梅が枝は呂の歌也、その調は女にはむつかしきものなるにこれは中々甘くやると
(一〇)薫等が梅が枝を
(一一)薫の心、此邸は中中趣深く氣取つて居るわいと
(一二)薫が
(一三)薫と藏人少將と
(一四)薫の琴の音は頭中の音に似たりと
(一五)眞實聞きたく思ふ
(一六)鶯の音に誘はれて自分も音を立て給へ

(一)空と思はゞかゝり合ひて見給へ
(二)「色よりも香こそ哀と思ほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも」
(三)薫にしがみ附きかねぬ位にさわぐ
(四)薫の樣な眞面目男をさへ其樣に騷ぐか、よくよく頰の皮の厚い奴ぢや
(五)薫の感じ、我は眞面目男とつけられたがぞつとせぬ名ぢやと
(六)玉鬘の三男、夕霧を送りて既に歸りたる也
(七)殿上に勤めぬ故年賀にも方々へは行かぬ也
(八)沈香の若きもの
(九)夕霧
(一〇)源によく似たり
(一一)薫は
(一二)源の
(一三)薫が歸りたる後に殘れる
㊅薫藤侍從の許にて箏をひく、漸く玉鬘方の人人に睦む
(一四)薫
(一五)我を無骨者あしらひせし浮氣女どもを懲らしてやらんと思ひて
(一六)玉鬘の三男

さらば袖ふれて見給へ」など言ひすさぶに、侍女等「まことは色よりも」(二)と、口々引き(一)も動しつべくさまよふ。(三)かんの君、奥の方よりゐざり出で給ひて、「うたての御達や。恥かしげなるまめ人(四)をさへ。よくこそ面なけれ」と忍びて宣ふなり。(五)まめ人とこそつけられけれ、いと屈しなる名かな、と思ひ居給へり。あるじの侍從、(六)殿上な(七)どもまだせねば、所々もありかで、おはし合ひたり。(八)淺香の折敷二つばかりして、菓子盃ばかりさし出で給へり。玉鬘「大臣(九)は、ねびまさり給ふまゝに、故院(一〇)にいとようこそ覺え奉り給へれ。この君(一一)は、似給へる所も見え給はぬを、けはひのいとしめやかに、なまめきたるもてなしぞ、かの御若盛(一二)思ひやらるゝ。斯う樣にぞおはしけむかし」など、思ひ出で聞え給ひて、うちしほたれ給ふ。名殘(一三)さへとまりたる芳しさを、人々はめでくつがへる。

侍從の君(一四)、まめ人の名を慨しと思ひければ、二十日餘の頃、梅の花盛なるに、匂(一五)少げに取りなされしすきもの習はさむかし、と思して、藤侍從(一六)の御許におはした

(一)若き女中等は
(二)矢張薫は特別な御器量
(三)大君の婿君には薫をして上げたし
(四)薫の樣子
(五)いくら世間知らずのお姫樣でも
(六)薫が人に勝れたる所は分る筈ぢや
(七)薫が
(八)大樣、聲の調はぬ也
(九)艶っぽくやって貰ひたき(侍女等の感じ)
(一〇)侍女等が埒もなき口をたゝくに
(一一)薫が
(一二)第四句が主意也
(一三)即座によくよみしよと薫が思ひて
(一四)色香もなき私と思はるゝか知らぬが中々下地はさうではなし「もぎ木」は枝なき木

いとこよなく目とまる心地して、例の物めでする若き人たち(一)は、「猶殊なりけり」(二)など言ふ。「この(三)殿の姫君の御傍には、これをこそさし並べて見め」と、聞き憎く言ふ。實(四)にいと若うなまめかしき樣して、うちふるまひ給へる匂香など尋常ならず。姫君(五)と聞ゆれど、心おはせむ人は、實(六)に人よりはまさるなゝめりと、見知り給ふらむかしとぞ覺ゆる。かんの殿、御念誦堂におはして、玉鬘「こなたに」と宣へば、東の階より昇りて(七)、戸口の御簾の前に居給へり。御前近き若木の梅、心もとなくつぼみて、鶯の初聲もいとおほどかなる(八)に、いと好か(九)せ奉らまほしき樣のし給へれば、人々(一〇)はかなきことをいふに、言少(一一)に心にくき程なるを、ねたがりて、宰相の君と聞ゆる上臈の詠みかけ給ふ。

宰相 折りて(一二)見ばいとどにほひもまさるやとすこし色めけ梅のはつはな

(一三)口はやしと聞きて、

薫 餘所(一四)にてはもぎ木なりとやさだむらむしたに匂へる梅のはつはな



樣は、(一)古り難くのみおはしますめるを、(二)よろしう生ひ出づる女子侍らましかばと、思ひ給へよりながら、恥かしげなる御中に、交らふべきものの侍らでなむ、口惜しう思う給へらるゝ。そもく、(三)女一宮の(四)女御は許し聞え給ふや。(五)さきぐの人、さやうの憚により、滯る事も侍りし」と申し給へば、玉鬘「女御なむ、徒然にのどかになりにたる有樣も、(六)同じ心にうしろみて、慰めまほしきを、など、(七)彼のすゝめ給ふにつけて、(八)いかゞなどだに思う給へ寄るになむ」と聞え給ふ。これかれ、こゝに集り給ひて、(九)三條の宮に參り給ふ。(一〇)朱雀院のふるき心物し給ふ人々、六條院の方ざまのも、方々につけて、猶かの(一一)入道宮をば、(一二)えよぎずまゐり給ふなめり。この殿の(一三)左近中將、右中辨、侍從の君なども、やがて(一四)大臣の御供に出で給ひぬ。ひき連れ給へる勢ことなり。

(一五)夕つけて(一六)四位の侍從參り給へり。そこらおとなしき若君達も、あまた樣々に、いづれかは惡びたりつる。皆目安かりつる中に、立ち後れてこの君の立出で給へる、

(一)何時迄もお若くて御出なさるから
(二)人並の娘を持ちたらば冷泉へ差上げたしとは思ひながら
(三)冷泉の女一宮
(四)女一宮の母弘徽殿は冷泉の女御にて玉鬘の姉妹也、先比人の承諾なくては玉鬘の大君の冷泉への宮仕は出來ぬわけ也
(五)先々冷泉への宮仕を心がけし人々も
(六)女御が冷泉と心を合せて大君の世話をして
(七)弘徽殿女御の
(八)差上げようか位にも
(九)女三宮方
(一〇)朱雀院の舊恩を思ふ人々も源を思ふ人々も
(一一)女三宮
(一二)素通りが出來ず
(一三)三人共に髯黑の子玉鬘腹
(一四)夕霧

㊄ 薫、玉鬘を訪ふ

(一五)夕方になりて
(一六)薫が玉鬘方へ

事を思ふらむと見えたるべし。世と共に(一)、藏人の君は、かしづかれたる様異なれど、うち濕りて思ふことあり顔なり。大臣は御几帳へだてて、昔に變らず御物(二)語聞え給ふ。夕霧「その(三)事となくて、しば〳〵もえ承らず。年の數添ふまゝに、内裏にまゐるより外のありきなど、(四)初々しくなりにて侍れば、いにしへの御物語も、聞えまほしき折々多く過し(五)侍るをなむ。若き男ども(六)は、さるべき事には召しつかはせ給へ。必ずその(七)志御覽ぜられよと、いましめ侍る」など聞え給ふ。玉鬘「今は斯く、世に經る數にもあらぬ様になりゆく有様を、(八)思し數まふるになむ、過ぎにし御事もいとゞ忘れがたく、思う給へられける」と申し給ひけるついでに、(九)院より宣はすること、ほのめかし聞え給ふ。玉鬘「(一〇)はか〴〵しう、後見なき人のまじらひは、なか〳〵見苦しきをと、かた〴〵思ひ給へなむ煩ふ」と申し給へば、夕霧「(一一)内裏に仰せらるゝ事のあるやうに承りしを、いづ方に思ほし定むべき事にか。(一二)院は實に、御位を去らせ給へるにこそ、盛過ぎたる心地すれど、世にありがたき御有

(一)此句は「うちしめりて」へかゝる
(二)玉鬘と
(三)用がないので度々參上もせず
(四)おつくうに
(五)思ひながら其儘に過すが殘念
(六)私の子どもは
(七)此方の志を見知らるる様に親切に御用を勤めよと常に言ひ聞かせて居る
(八)人がましく思召し下さるにつけて源の事が忘れられぬ
(九)冷泉より長女を懇望せらるゝ事
(一〇)冷泉へ上げてもよけれど
(一一)今上からも宮仕に出せと仰ある様に聞きしが
(一二)冷泉院

うと思ひなすが、心ことなるにやあらむ、世の中に自らもてかしづかれ給へる人なり。(一)若き人々は、心ことにめであへり。かんの殿も、玉鬘「實にこそめやすけれ」など宣ひて、なつかしう(二)物聞え給ひなどす。玉鬘「(三)院の御心ばへを思ひ出で聞えて、慰む世なう、いみじうのみ思ほゆるを、その御形見にも、誰をかは見奉らむ。(四)右の大臣はこと〴〵しき御程にて、ついでなき對面も難きを」など宣ひて、(五)兄弟のつらに思ひ聞え給へれば、(六)かの君も然るべき所に思ひて參り給ふ。世の常のすきずきしさも見えず、いといたう靜まりたるをぞ、此處彼處の若き人ども、口惜しくさう〴〵しき事に思ひて、(七)言ひ惱ましける。

正月の朔日ごろ、かんの君の御兄弟の(八)大納言、(九)「高砂」謠ひしよ、藤中納言、(一〇)故大殿の太郎、眞木柱のひとつ腹など(一一)參り給へり。(一二)右の大臣も、御子ども六人ながらひき連れておはしたり。御容貌よりはじめて、飽かぬことなく見ゆる(一三)人の御有樣おぼえなり。(一四)君達も、樣々いと淸げにて、年のほどよりは、官位も過ぎつゝ、(一五)何

(一)玉鬘方の若き女中達は
(二)薫と話もする
(三)源の氣立を玉鬘が思ひ出して
(四)夕霧は自分が立派で
(五)玉鬘が薫を兄弟の樣に思ひ居る故
(六)薫
(七)薫をそゝる
四　正月、夕霧玉鬘を訪ふ、大君の宮仕の相談
(八)紅梅
(九)此人は前に高砂を謠ひし人也と作者の註
(一〇)これも註、此藤中納言は髭黒の長男にて眞木柱と同胞
(一一)玉鬘方へ
(一二)夕霧
(一三)夕霧の
(一四)夕霧の子ども
(一五)心配がなささう也

(一)玉鬘が此緣を非常に不似合な事とも思はねど女の方で不承知なるに手込に抔されては外聞も惡き事故取次の女中にも
(二)玉鬘がいふに氣先を折られて
㊂ 薫、玉鬘に愛せらる
(三)源の晩年に
(四)女三
(五)薫
(六)玉鬘
(七)玉鬘の邸は女三の三條邸と近鄰なれば
(八)髭黑の子どもに伴はれて薫が來る事あり
(九)いつも入りびたりの
(一〇)薫
(一一)薫は源の近親と思ふ故に特によき男の樣に思はれるのか知れぬが

盗みも取りつべく、むくつけきまで思へり。(一)こよなき事とは思さねど、女方の心ゆるし給はぬ事のまぎれあるは、世の音ぎきもあはつけきわざなれば、聞えつぐ人をも、「あなかしこ、過引き出づな」など宣ふにくたされてなむ、(二)煩しがりける。

(三)六條院の御末に朱雀院の宮(四)の御腹に生れ給へりし君、(五)冷泉院に御子の樣に思しかしづく四位の侍從、その頃十四五ばかりにて、いときびはに幼かるべき程よりは、心おきて大人々々しく、めやすく人に優りたる生先しるく見え給ふを、(六)かんの君は、婿にても見まほしく思したり。(七)この殿は、かの三條の宮といと近き程なれば、さるべき折々のあそび所には、君達にひかれて見え給ふ時々あり。(八)心にくき女のおはする所なれば、若き男の心づかひせぬ無う、見えしらがひさまよふ中に、容貌のよきは、この立ち去らぬ(九)藏人の少將、なつかしく心恥かしげにて、なまめいたる方は、この四位の侍從(一〇)の御有樣に似る人ぞなかりける。(一一)六條院の御けはひ近

(一)玉鬘の心
(二)心ならずけしからん奴と冷泉に思はるゝ樣な成行になりしが恥しく勿體なき事故、晩年の今になりてせめて娘を上げて御機嫌を直したものかしらと
(三)娘が
(四)夕霧
(五)雲井雁
(六)親達が兒達よりも大事にして居る
(七)玉鬘の娘に文をよこす
(八)夕霧とは重縁の中なれば
(九)夕霧の子どもが
(一〇)玉鬘の方で
(一一)取次の侍女がやかましく藏人少將の申込の事を言ふを
(一二)玉鬘
(一三)雲井雁も此縁の成就する樣にと手紙で言ひ來る
(一四)藏人少將はまだ輕い身分なれど親爺台の事故御承諾もあるべきかと
(一五)此長女をば平人に嫁せしめんとは玉鬘が思はず
(一六)次女をば藏人少將が今少し人聞悪しからぬ位に出世したらば遣ってもよしと
(一七)藏人少將の方では

めやかに聞え給ひければ、如何(一)はあるべき事ならむ、自らのいと口惜しき宿世にて、(二)思の外に心づきなしと思されにしが、恥かしう忝きを、この世の末にや御覽じなほされまし、など定めかね給ふ。容貌(三)いとようおはする聞ありて、心かけ申し給ふ人多かり。右の大殿(四)の藏人の少將とか言ひしは、三條殿(五)の御腹にて、兄(六)君達よりもひきこし、いみじうかしづき給ひ、人がらもいとをかしかりし君、いと懇に申し給ふ。(七)何方(八)につけても、もて離れ給はぬ御中らひなれば、(九)この君達の睦びまゐり給ひなどするは、(一〇)氣遠くももてなし給はず。女房にも氣近う馴れよりつゝ、思ふ事を語らふにも便ありて、夜晝(一一)あたりさらぬ耳かしがましさを、うるさきものの心苦しきに、かんの殿(一二)も思したり。母北の方(一三)の御文も、しば〳〵奉り給ふ。夕霧(一四)「いと輕びたる程に侍れど、思しゆるす方もや」となむ、大臣も聞え給ひける。姫君(一五)をば、更にたゞの樣にも思しおきて給はず、中の君(一六)をなむ、今少し世の聞輕々しからぬ程に、なずらひならば、然もや、と思しける。許し給はずば、(一七)

(一)夕霧
(二)源の遺志をつぎて
㊁大君を宮仕に出さんとす、藏人少將の戀
(三)出世もすべし
(四)玉鬘が
(五)髭黒がかねて
(六)娘どももう年頃になりしならんと
(七)宮仕に上げよと帝から
(八)明石姫君
(九)外の女御更衣等はあれども無きが如くなる其席末に就きて
(一〇)明石姫君に睨まれるのも
(一一)娘が仲間の御妾等に劣り輕蔑されるを見て居るのも心配の種なるべしと玉鬘が躊躇して居る
(一二)玉鬘の娘を懇望して
(一三)玉鬘が冷泉の望に背きて髭黒に嫁せし恨迄事新らしく言ひたてて
(一四)自分が玉鬘を望みし時より老人になり

ども書きおき給へる、御處分の文どもにも、中宮の御次に加へ奉り給へれば、(一)右の大殿などは、なか〳〵(二)その心ありて、さるべき折々音づれ聞え給ふ。男君達は御元服などして、各〳〵おとなび給ひにしかば、殿おはせで後、心もとなく哀なることもあれど、おのづからなり出で(三)給ひぬべかゝめり。姫君達をば如何にもてなし奉らむと、(四)思し亂る。内裏にも必ず宮仕の本意深きよしを、(五)大臣の奏し置き給ひければ、(六)おとなび給ひぬらむかしと、年月を推量らせ給ひて、(七)仰言絶えずあれど、(八)中宮のいよ〳〵並なくのみなり勝り給ふ御けはひに壓されて、(九)皆人無徳にものしたまふめる末にまゐりて、遙に目をそばめられ(一〇)奉らむも、煩はしく、また人に劣り、數ならぬ樣にて見むはた、心づくしなるべきを思したゆたふ。冷泉院より、(一一)いと(一二)懇に思し宣はせて、かんの君の(一三)昔本意なくて過し給ひしつらさをさへ、とりかへし恨み聞え給ひて、冷泉「今はまいてさだすぎ、(一四)すさまじき有樣に思ひ捨て給ふとも、後やすき親になずらへて、ゆづり給へ」と、いとま

年の數つもり、耄けたりける人の、僻言にや」など怪しがりけるは、いづれかは誠ならむ。

尚侍(一)の御腹に、故殿(二)の御子は、男三人、女二人なむおはしけるを、樣々にかしづき立てむ事を思し(三)おきて、年月の過ぐるも心もとながり給ひし程に、あへなく亡せ(四)給ひにしかば、夢のやうにて、いつしかと急ぎ思しゝ御宮仕(五)もおこたりぬ。人の心時(六)にのみ寄るわざなりければ、さばかり勢いかめしくおはせし大臣(七)の御名殘、內々の御寶物、領じ給ふ所々など、(八)その方の衰はなけれど、大方の有樣引きかへたる樣に、殿の內しめやかになりゆく。(九)かんの君の御近きゆかり、そこらこそは世にひろごり給へど、(一〇)なか〳〵やむごとなき御中らひの、もとよりも親しからざりしに、故殿(一一)の情少しおくれ、むら〳〵しさ過ぎ給へりける御本性にて、心おかれ給ふこともありけるゆかりにや、誰にもえなつかしく聞え(一二)通ひ給はず。六條院には、すべて猶昔に變らず、(一三)數まへ聞え給ひて、亡せ(一四)給ひなむ後の事

(一)玉鬘
(二)髭黑、髭黑の逝去せし事こゝに見えたり
(三)髭黑が
(四)髭黑が
(五)娘たちを宮中に御奉公に上る事
(六)襟元につく人情なれば
(七)髭黑
(八)財力の方はかはる事もなけれど
(九)玉鬘の近親即ち頭中の子供は羽振よきが多けれども
(一〇)貴人は親類合も親しからず
(一一)髭黑の性質情に厚からずむら氣にて人に親しまれざりし故にや
(一二)玉鬘が
(一三)源は不相變玉鬘を子分扱にして
(一四)源の遺產處分の遺言狀にも明石姬君の次に玉鬘を載せたれば

竹河

梗概

【一】髭黑の死後、世に遠ざかりたる玉鬘の生活。【二】大君を宮仕に出さんとす。藏人少將の戀。【三】薫、玉鬘に愛せらる。【四】正月、夕霧、玉鬘を訪ふ。大君の宮仕の相談。【五】薫、玉鬘を訪ふ。【六】薫、藤侍従の許にて琴をひく。漸く玉鬘方の人々に睦む。【七】大君、中君と圍碁。櫻の賭物。藏人少將の隙見。【八】大君、冷泉院へ宮仕の事定まる。藏人少將の怨。【九】大君、冷泉院へ參る。藏人少將の歎。【十】薫の大君に對する淡き戀。【十一】藏人少將、中君に心なし。【十二】今上、大君の冷泉院に參れるを憾む。玉鬘の迷惑。大君懷胎。【十三】新年の男踏歌。薫、冷泉院に召さる。【十四】大君、女一宮を生む。弘徽殿女御と大君との中疎し。【十五】玉鬘、中君に尚侍を讓る。【十六】玉鬘出家せんとして果さず。【十七】大君殊寵を受く。弘徽殿女御と中惡し。玉鬘の後悔。【十八】夕霧以下昇進。玉鬘、大君の事を薫に訴ふ。【十九】紅梅右大臣の大饗。藏人少將、玉鬘を訪ふ。

【一】髭黑の死後世に遠ざかりたる玉鬘の生活
(一)此卷に記す事は
(二)源の一門ではなき
(三)髭黑、玉鬘は源の實子に非ざる故源氏の族にあらずといふ也
(四)よくもなき女中達
(五)源氏に緣ある人々の身の上の話とは違ふ樣なれど
(六)源の子孫につきて色色惡しき噂などの交れるは

(一)これは、(二)源氏の御族にも離れ給へりし、(三)後の大殿わたりにありける、(四)わる御達のおちとまり殘れるが、問はず語しおきたるは、(五)紫のゆかりにも似ざめれど、かの女どもの言ひけるは、「(六)源氏の御末々に、僻事どもの交りて聞ゆるは、我よりも

寄せ給ひつゝ、忍びやかに御文あれど、(一)大納言の君深く心がけ聞え給ひて、(二)さも思ひたちて宣ふことあらばと、(三)氣色とり、(四)心まうけし給ふを見るに、いとほしう(五)眞木「ひき違へて、かく思ひ(六)寄るべくもあらぬ方にしも、なげの言の葉を盡し給ふ。かひなげなる事」と、(七)北の方も思し宣ふ。はかなき御返などもなければ、負けじの(八)御心そひて、思ほし歎くべくもあらず。(九)何かは、人の御有樣、などかはさても見奉らまほしう、生先遠くなどは見えさせ給ふに、など、北の方おもほしよる時時あれど、(一〇)いといたう色めき給ひて、通ひ給ふ忍び所多く、(一一)八の宮の姫君にも、御志淺からで、いと繁うまうでありき給ふ、頼もしげなき御心の、あだ〳〵しさなども、いとゞつゝましければ、(一二)まめやかには思ほし絶えたるを、かたじけなきばかりに、忍びて母君ぞ、たまさかに(一三)さかしらがり聞え給ふ。

(一)宮の君へ
(二)匂を聟にとらんと
(三)匂から申込んで來たらばと
(四)匂に水をむけ
(五)眞木柱が氣の毒にて
(六)一向受附ける氣のない宮の君の方へたとへ心からで無きにもせよ詞を盡して言ひ寄るはつまらぬ事
(七)眞木柱
(八)匂が
(九)眞木柱の心、匂の人物は聟には上々吉で將來も望のある人故いつそ宮の君を許さんかと
(一〇)匂が
(一一)橋姫の卷に出づる宇治の優婆塞の宮
(一二)眞面目に相手になる氣はなけれど返事せぬも失禮故
(一三)差出て返事をする

(一)紅梅から匂へ手紙でも遣られしか
(二)捨て置かれず
(三)宮中に宮仕する女などは匂程に焚きしめる事は出來ぬ
(四)匂の様に
(五)身から出る香
(六)匂の噂をする、中君の智にせん下心あれば也
(七)聞いて氣がつかぬでは無けれど
(八)男を持つ氣などは丸でなし
(九)襟元につく心
(一〇)現在歷々の親に大事にされて居る娘には
(一一)宮の君は父なき身故
(一二)匂は宮の君こそ我に相應なるべしと思ひて
(一三)大夫を匂が

怨じ給ひしこそをかしかりしか。(一)こゝに御消息やありし。さも見えざりしを」と宣へば、「然かし。梅の花めで給ふ君なれば、あなたのつまの紅梅、いと盛なりしを、(二)たゞならで、折りて奉れたりしなり。移香はげにこそ心ことなれ。(三)交らひし給はむ女などは、さはえしめぬかな。源中納言は、(四)斯う様に好ましうは燕き匂はさで、(五)人香こそ世になけれ。怪しう前の世の契いかなりける報にかと、ゆかしき事にこそあれ。同じ花の名なれど、梅はおひ出でけむ根こそ哀なれ。この宮などのめで給ふ、さる事ぞかし」など、花によそへてもまづ(六)かけ聞え給ふ。宮の御方は、物思し知る程にねびまさり給へれば、何事も見知り、(七)聞き咎め給はぬにはあらねど、(八)人に見え、世づきたらむ有様は、更にと思し離れたり。世の人も、(九)時による心ありてにや、(一〇)さな向ひたる御方々には、心をつくし聞えわび、今めかしきこと多かれど、(一一)こなたは萬につけ、物しめやかに引き入り給へるを、(一二)宮は御ふさひの方に聞き傳へ給うて、深ういかでと思ほしなりにけり。(一三)若君を常に纏はし

(一)浮氣者と云はれる資格は十分なるに
(二)蔭口をきいて
(三)大夫が内裏へ行く故
(四)匂の元より香ばしき袖に觸れたらば花も一層の香を増すべし、花は中君
(五)匂の心、中の君を眞に我に許す氣で言ふのかしらと
(六)花を尋ねては行きたけれど人の批難が恐ろしい、通り一遍の挨拶也
(七)紅梅が
四 紅梅夫婦の思案
(八)眞木柱
(九)他人は矢張大夫自身の匂と思ひ居しに東宮が氣がつきて
(一〇)其では我を嫌ふも尤もぢやと

るには、いとものまめやかに、御心をさめ給ふこそをかしけれ。(一)あだ人とせむに足らひ給へる御樣を、強ひてまめだち給はむも、見所すくなくやあらまし」など、(二)しりうごちて、今日もまゐらせ給ふに、(三)また、

紅 (四)本つ香のにほへる君が袖ふれば花もえならぬ名をや散らさむ

すき〴〵しや。あなかしこ。

と、まめやかに聞え給へり。(五)誠にいひなさむと思ふ所あるにやと、さすがに御心ときめきし給ひて、

匂 (六)花の香をにほはす宿にとめゆかばいろにめづとや人の咎めむ

など、猶心解けずいらへ給へるを、心やましと(七)思ひ居給へり。

(八)北の方まかンで給ひて、内裏わたりの事宣ふ序に、眞木「若君の、一夜宿直して、罷り出でたりし匂の、いとをかしかりしを、(九)人はなほと思ひしを、宮のいと思ほし寄りて、兵部卿の宮に近づき聞えにけり、(一〇)うべ我をばすさめたりと、氣色とり、

(一)紅梅が物事のよく分り居る匂に我娘を差上げたしと言ひ居るを聞けり
(二)紅梅は中君を我に娶らせんと思居るのぢやなと思合すれど、自分の望は宮の君の方にある故
(三)はつきりした返歌はやられず
(四)退出する大夫に托して
(五)不熱心な樣な書方で
(六)御意に從ふ事の出來る身なら早速飛んでも參るべきであるが出來ぬので殘念
(七)紅梅に口を出させず汝が窃に宮の君に手引してくれ
(八)大夫も宮の君をば
(九)異腹の大君中君等は却て大夫にも顔を見せて
(一〇)宮の君の心ばへなれば
(一一)どれも同じ姉とは思へど宮の君の東宮に出ぬのが殘念故せめて匂を宮の君の聟にしたしと
(一二)我等が得心せずといふ事を匂が聞きて、夕霧や我々の前では

心知らむ人になどこそ、聞き侍りしか」など語り聞ゆ。(二)大納言の御心ばへは、我が(一)方様に思ふべかめると、聞き合せ給へど、思ふ心は異にしみぬれば、この返事(三)けざやかにも宣ひやらず。つとめて、(四)この君のまかづるに、(五)なほざりなる様にて、

匂(六)花の香にさそはれぬべき身なりせば風のたよりを過さましやは

さて、匂「猶今は(七)翁どもにさかしらせさせで、忍びやかに」とかへすがへす宣ひて。(八)この君も東のをば、やむごとなく睦まじう思ひ増したり。(九)なかなかこと方の姫君は、見え給ひなどして、例の兄弟の様なれど、童心地に、いとおもりかにあらまほしうおはする(一〇)心ばへを、かひある様にて見奉らばや、と思ひありくに、東宮の御方のいと花やかにもてなし給ふにつけて、(一一)同じ事とは思ひながら、いと飽かず口惜しければ、この宮をだに、氣近くて見奉らばやと思ひありくに、うれしき花の序なり。これは昨日の御返なれば見せ奉る。紅「ねたげにも宣へるかな。あまり好きたる方にすゝみ給へるを、(一二)ゆるし聞えずと聞き給ひて、右の大臣、我らが見奉

（一）此頃は東宮から暇が出て居るであらう
（二）以前は始終呼び附けられて居たのに、此頃は姉の大君に寵を奪はれて外聞が惡からう
（三）君に呼び附けられて居るのはよいが
（四）大君が我を輕蔑して嫌つたさうな
（五）腹が立つ
（六）珍らしからぬ我と同樣な宮系統で
（七）宮の君也
（八）我とよい中になつてくれぬかと
（九）自分が嫌はれたる恨を言ひ遣りての後に此歌を贈られたのでは甚だまづかつたらうに
（一〇）色香を兼備して
（一一）梅は匂の好みの花なれば
（一二）持ち來りし甲斐ありて
（一三）どうせ内裏に泊るのであらうから我宿直所に寢よ
（一四）父の言傳もある故姉の大君の所へ行かんと思ひしかど行かれぬ也
（一五）匂の樣
（一六）大夫が
（一七）宮の君はなぜ東宮へ宮仕には出なかつたのぢや

になりぬれば、匂「東宮には、(一)暇少しゆるされにたゝめりな。(二)いと繁う思ほし纒はすめりしを、時とられて人わろかゝめり」と宣へば、大夫「まつはさせ給へりしこそ苦しかりしか。(三)御前にはしも」と聞えさして居たれば、匂「(四)我をば人氣なしと思ひ放たれたるとな。理なり。されど(五)安からずこそ。(六)ふるめかしき同じすぢにて、(七)東と聞ゆなるは、(八)あひ思ひ給ひてむやと、忍びて語らひ聞えよ」など宣ふついでに、この花を奉れば、うち笑みて、「(九)怨みて後ならましかば」とて、うちも置かず御覽ず。枝のさま花房、色も香も世の常ならず。匂「園に匂へる紅の色にとられて、香なむ白き梅には劣れると言ふめるを、いとかしこく、(一〇)とり並べても咲きけるかな」とて、(一一)御心留め給へる花なれば、(一二)かひありてもてはやし給ふ。匂「(一三)今宵は宿直なゝめり。やがて此方にを」と召し籠めつれば、(一四)東宮にもえ參らず、花も恥かしく思ひぬべく(一五)かうばしくて、氣近く臥せ給へるを、(一六)若き心地には、類なく嬉しくなつかしく思ひ聞ゆ。匂「(一七)この花の主は、など東宮にはうつろひ給はざりし」大夫「知らず。

昔の戀しき御形見には、この宮ばかりこそは。佛のかくれ給ひにけむ御名殘には、(二)阿難が光放ちけむを、(一)二度出で給へるかと疑ふ、さかしき聖のありけるを、(三)闇に惑ふはるけどころに、聞え犯さむかしとて、

紅　(四)心ありて風のにほはす園の梅にまづうぐひすの訪はずやあるべき

と、紅の紙に若やぎ書きて、(五)この君の懐紙に取りまぜ、押したゝみて出したて給ふを、幼き心に、いと(七)馴れ聞えまほしと思へば、(六)急ぎまゐり給ひぬ。

中宮の上の御局より、御宿直所に出で給ふほどなり。殿上人あまた御送にまゐる(八)中に、見つけ給ひて、匂「昨日は、などいと疾くは罷出にし。いつ參りつるぞ」など宣ふ。(九)大夫「疾くまかンで侍りにし悔しさに、まだ内裏におはしますと人の申しつれば、急ぎ參りつるや」と、幼げなるものから(一〇)馴れ聞ゆ。匂「内裏ならで心やすき所にも、時々は遊べかし。若き人どもの、そこはかとなく集る所ぞ」と宣ふ。(一一)この(一二)君召し離ちて語らひ給へば、人々は近うも參らず、罷出散りなどして、しめやか

(一)匂宮があるのみぢや
(二)釋尊第一の弟子、釋尊の死後弟子等集りて經文を編纂せし時阿難高座に上りて其形釋迦に似たりしかば人々佛の再現かと思ひし事(大論)
(三)やる方なき源の戀しさの慰めに、に手紙を上ぐべしとて
(四)中の君を梅に匂を鶯にたとへて匂を聟にしたき心をほのめかす也
(五)大夫の
(六)大夫を内裏へやる也
(七)匂に親しくしたく思ふ故
㊂匂宮却て宮の君に心あり
(八)恰も匂が明石姫君の上局より下りて自分の宿直所へ歸る所で、上局は清涼殿へ上りし時の自分の部屋
(九)大夫を
(一〇)匂が
(一一)我が二條院へも來て
(一二)匂が大夫を別の所へ呼んで話をする故



このわたりにて、おのづから物に合する氣なり。猶かきあはせさせ給へ」と責め(一)聞え給へば、苦しと思したる氣色ながら、爪彈にいとよく合せて、唯少しかき鳴らし給ふ。(二)かはぶえふつゝかに馴れたる聲して、この東のつまに、軒近き紅梅の、いとおもしろく匂ひたるを見給ひて、紅「御前の花、心ばへありて見ゆめり。兵部卿の宮内裏におはすなり。(三)一枝折りて參れ。(四)知る人ぞ知る」とて、紅「あはれ光源氏の、いはゆる御盛の大將などにおはせし頃、(五)童にてかやうにて交らひ馴れ聞えしこそ、世と共に戀しう侍れ。この宮達を、(六)世の人もいと殊に思ひ聞え、(七)實に人にめでられむと、なり給へる御有様なれども、端がはしにも覺え給はぬは、猶類あらじと、思ひ聞えし心のなしにやありけむ。(八)大方にて思ひ出で奉るも、胸あく世なく悲しきを、氣近き人のおくれ奉りて生きめぐらふは、(九)おほろけの命長さならじかしとこそ覺え侍れ」など、聞え出で給ひて、物哀にすごく思ひめぐらし、しをれ給ふ。ついでの忍び難きにや、花折らせて、急ぎ參らせ給ふ。(一〇)紅「如何はせむ。

(一)宮の君を
(二)皮笛、口笛の事なりといふ、紅梅が口笛ふく也
(三)一枝折りて匂へ持參せよ
(四)「君ならで誰にか見せん梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」
(五)自分が
(六)匂などを
(七)匂等は人の褒め物になる爲に生れたる人なれども
(八)源の爪葉程にも思はれぬは矢張源を無類と思ひ込みしせいかも知れぬ
(九)我如き薄き關係の者でも源を思ひ出せば戀しさやる方なきに
(一〇)大夫を内裏へ

遊の方は取りわきて心留め給へるを、手づかひ少しなよびたる撥音なむ、大臣(一)にはず及び給はずと思ひ給ふるを、この(二)御琴の音こそ、いと能く覺え給へれ。琵琶は、押手しづやかなるを、よきにするものなるに、柱(三)さすほど、撥音の樣かはりて、なまめかしう聞えたるなむ、(四)女の御事にて、なか〳〵をかしかりける。いで遊ばさむや、御琴まゐれ」と宣ふ。(五)女房などは、(六)かくれ奉るもをさ〳〵なし。いと若き上臈だつが、(七)見え奉らじと思ふはしも、心にまかせて居たれば、紅「さぶらふ人さへ斯くもてなすが、安からぬ」と腹立ち給ふ、(八)若君、內裏へ參らむと、(九)宿直姿にて參り給へる、わざとうるはしき(一〇)みづらよりも、いとをかしく見えて、いみじく美しと思したり。(一一)麗景殿(一二)に御ことつけ聞え給ふ。紅「讓り(一三)きこえて、今宵もえ參るまじく、惱ましくなむと聞えよ」と宣ひて、紅「笛(一四)すこし仕うまつれ。ともすれば、御前の御遊に召し(一五)出でらるゝ、かたはらいたしや。まだいと若き笛を」とうち笑みて、雙調吹かせ給ふ。いとをかしう吹い給へば、紅「けしう(一六)はあらずなりゆくは、

(一)夕霧
(二)其方の琵琶の音はよく夕霧のに似て居る、琵琶をもこととい ふ也
(三)柱を押して彈く事なりとぞ
(四)女のひくには
(五)宮の君附の女中
(六)紅梅の前に恥ぢて出ぬ樣なるは無し
(七)紅梅に逢ひたくなしと思ふものは心任せに引込み居たれば
(八)紅梅の長男大夫
(九)直衣を著て髪を解き下げて居るをいふとぞ、束帶の時は髻をみづらに結ぶ
(一〇)儀式ばりたる
(一一)紅梅が
(一二)大君
(一三)大夫が參內する故
(一四)大夫にいふ也
(一五)汝が呼出されて笛を吹くは
(一六)其方の笛が段々聞苦しくなくなるは宮の君の所にて合奏する效なり

ふ。御聲けはひなど、あてにをかしう、樣かたち思ひやられて、哀に覺ゆる人の(一)御有樣なり。(二)我が御姫君たちを、人に劣らじと思ひおごれど、この君にえしも勝らずやあらむ、かゝればこそ、世の中廣きうちは煩はしけれ、(三)類あらじと思ふに、勝る方もおのづからありぬべかめり、など、(四)いとゞいぶかしう思ひ聞え給ふ。

紅「月頃何となく物さわがしき程に、御琴の音をだに承らで、久しくなり侍りにけり。西の方に侍る人は、(五)琵琶を心に入れて侍る。(六)さもまねび取りつべくや覺え侍るらむ。(七)なまかたほにしたるに、聞きにくき物の音がらなり。同じくば御心留めて敎へさせ給へ。翁は、(八)とりたててならふ物侍らざりしかど、そのかみ盛なりし世に、遊び侍りし力にや、(九)聞き知るばかりのわきまへは、何事にもいとつきなくは侍らざりしを、(一〇)うちとけても遊ばさねど、時々承る御琵琶の音なむ、むかし覺え侍る。故六條院の御傳にて、(一一)右の大臣なむ、この頃世に殘り給へる。(一二)源中納言、兵部卿の宮、何事にも昔の人に劣るまじう、(一三)いと契ことに物し給ふ人々にて、

(一)宮の君の
(二)紅梅の心
(三)我娘は無類の美人なるべしと思ふに
(四)宮の君を見たく
(五)中の君
(六)一通りは出來る樣になれるかしら
(七)琵琶は半熟では聞くに堪へぬものなり
(八)私は
(九)巧拙を聞き分ける位の事は何の樂器につきても萬更でなかりしに
(一〇)宮の君が
(一一)夕霧が源の琵琶の弟子として殘りて居る
(一二)薫、中納言に昇進せる也
(一三)格別の運を持った人々で

心ばへけはひの埋れ(一)たる様ならず、愛敬づき給へることはた、人よりもすぐれ給へり。斯く内裏まゐりや何やと、(二)我が方様をのみ思ひ急ぐやうなるも、心苦しなど思して、紅「さるべからむ様に思し定めて宣へ。(三)おなじ事とこそ仕う奉らめ」と、母君にも聞え給ひけれど、母君「(四)更にさやうの世づきたる様、思ひたつべきにもあらぬ氣色なれば、なか〳〵(五)ならむ事は心苦しかるべし。御宿世にまかせて、(六)世にあらむかぎりは見奉らむ。(七)後ぞ哀にうしろめたけれど、(八)世を背く方にても、おのづから人わらへに、淡つけき事なくて過し給はなむ」など、打泣きて、(九)御心ばせの思ふ様なることをぞ聞え給ふ。(一〇)いづれもわかず親がり給へど、(一一)御かたちを見ばやとゆかしう思して、紅「かくれ給ふこそ心憂けれ」と恨みて、人知れず、見え給ひぬべしやと、のぞきありき給へど、絶えてかたそばをだにえ見奉り給はず。紅「上(一二)おはせぬほどは、立ちかはりて參りくべきを、疎々しく思しわくる(一三)御氣色なれば、心憂くこそ」など聞えて、御簾の前に居給へば、(一四)御答などほのかに聞え給

(一)引込思案ならず
(二)我が實の娘の事にのみかゝつて居る樣なるを宮の君に氣の毒に思ひて
(三)宮の君の身の上を然るべく思案してきめてくれ、實子と同じ樣に世話すべし、眞木柱がまだ大君について參內せぬ時分の話なり
(四)宮の君はまだ男を持つ樣な事は丸で考へて居らぬ樣なれば
(五)生中の緣組は
(六)我存生中は世話すべし
(七)我死後は
(八)假令尼になりても
(九)夫の志を有り難がる
(一〇)紅梅が實子繼娘の隔なく
(一一)宮の君の
(一二)眞木柱の留守中は自分が其代りに來べき筈なれど
(一三)分け隔をなさる御樣子故
(一四)宮の君が

(一)大君を東宮に差上ぐる支度を
(二)皇后は必ず藤原家より立つべき由春日の神詫ありし事ありしならんといふ
(三)頭中
(四)秋好が源家より中宮に立ちしを不平に思ひし
(五)宮中の交
(六)眞木柱が附添ひて
(七)眞木柱が大君を大事にして
㊀紅梅の君に琵琶を彈かしむ、子の大夫に托して梅花を匂宮に贈り中君を許さんとする意を告ぐ
(八)大君が宮仕に上りたるあとの屋敷は
(九)中の君は今迄大君と一處に居馴れし故
(一〇)宮の君
(一一)今迄大君と互に疎遠にせず
(一二)宮の君に大君等が習ひ
(一三)宮の君を
(一四)宮の君が
(一五)偏窟な位に

にこそは、よろしからむ女子は見せ奉らまほしけれ。心のゆくに任せて、かしづきて見奉らむに、命延びぬべき宮の御樣なり」と宣ひながら、まづ(一)東宮の御事をいそぎ給ひて、(二)春日の神の御ことわりも、我世にやもし出で來て、(三)故大臣の、院の(四)女御の御事を、胸いたくおぼして止みにし、なぐさめの事もあらなむと、心のうちに祈りて、參らせ奉り給ひつ。いと時めき給ふよし人々聞ゆ。かゝる(五)御交らひの馴れ給はぬ程に、はかぐ\しき御後見なくては如何とて、(六)北の方添ひてさぶらひ給へば、誠に限もなく(七)思ひかしづき、後見聞え給ふ。

(八)殿は、徒然なる心地して、(九)西の御方はひとつにならひ給ひて、いとさうぐ\しうながめ給ふ。(一〇)東の姬君も、(一一)疎々しく互にもてなし給はで、夜々は一所に御殿ども り、よろづの(一二)御事ならひ、はかなき御遊わざをも、(一三)此方を師の樣に思ひ聞えてぞ。誰も習ひ遊び給ひける。(一四)物恥を世のつねならずし給ひて、母北の方にだに、さやかには、をさぐ\さし向ひ奉り給はず。(一五)かたはなるまで、もてなし給ふものから、

て、次々に従ひつゝ聞え(一)給ふ人多く、内裏東宮より(二)御氣色あれど、(三)内裏には中宮おはします、いかばかりの人かは、(四)かの御けはひにならび聞えむ、さりとて(五)思ひ劣り、卑下せむもかひなかるべし、東宮には、(六)右の大殿の女御、並ぶ人なげにて侍ひ給ふは、(七)きしろひにくけれど、(八)然のみ言ひてやは、人に勝らむと思ふ女子を、(九)宮仕に思ひ絶えては、何の本意かはあらむ、と思したちて、(一〇)參らせ奉り給ふ。十七八の程にて、美しう匂多かる心地し給へり。

中の君も、(一一)うちすがいて、あてになまめかしう、澄みたる樣は勝りて、をかしうおはすれば、(一二)たゞ人にてはあたらしう見せま憂き御樣を、(一三)兵部卿の宮の然も思し寄らば、などぞ思したる。(一四)この若君を、内裏にてなど見つけ給ふ時は、(一五)召し纏はし、戲敵にし給ふ。(一六)心ばへありて、(一七)奧推し量らるゝまみ額つきなり。匂「(一八)せうとを見てのみはえ歇まじと、大納言に申せよ」など宣ひかくるを、然なむと(一九)聞ゆれば、(二〇)うち笑みて、いとかひありと思したり。紅「人に劣らむ宮仕よりは、この宮

(一)懸想しかくる人
(二)御奉公に上げよと仰あれど
(三)紅梅の心、中宮は明石姫君
(四)明石にならぶ譯にはゆかぬ
(五)及ばぬ物と諦めて自ら卑下しつゝ明石と同じ宮仕をするもつまらぬ
(六)夕霧の娘
(七)競爭しにくけれど
(八)さう計り言うても居られぬ
(九)宮中の御奉公を思ひ切りては
(一〇)東宮へ大君を宮仕に差上ぐ
(一一)大君に引續きて
(一二)臣下の人に遣つて仕舞ふは惜しく遣りたくなき人柄なれば
(一三)匂が中君に懸想して來たらば其に從ふべし
(一四)眞木柱腹の男子大夫
(一五)匂が手なづけて
(一六)大夫の樣
(一七)生先がさぞと思はるゝ
(一八)お前だけでは滿足が出來ぬ中の君をも手に入れたし、せうとは兄の義、男は女の同胞より年少にても兄といひし也
(一九)大夫が父に
(二〇)紅梅が

(一)螢の遺腹の子、紅梅の繼子
(二)紅梅は實子繼子の隔なく
(三)子どもの附々の侍女等は中よからぬ事もありて
(四)ねじけたる
(五)眞木柱
(六)實子繼子の爭を罪のなき戲事の樣にして取上げず
(七)自分にとりて迷惑な事をも
(八)三人の姫たち
(九)次々
(一〇)紅梅の實の長女
(一一)實の次女
(一二)螢の遺子
(一三)一通りの考から言へば宮の御方に實父のなきは氣の毒なる樣なれど
(一四)亡父や亡祖父抔より傳來の財寶多くて
(一五)紅梅が三人の姫を大事にかけて育て居るのが評判になりて

めり。御子は、故北の方の御腹にも、女二人のみぞおはしければ、さうぐ\しとて、神佛に祈りて、今の御腹にぞ男君一人まうけ給へる。(一)故宮の御形見に、女君一所おはす。隔てわかず、(二)いづれをも同じごと、思ひ聞えかはし給へるを、(三)おのおの御方の人などは、うるはしうもあらぬ心ばへ打交り、(四)なまくねぐ\しき事も出で來る時々あれど、(五)北の方、いと晴々しう今めきたる人にて、(六)罪なく取りなし、(七)我が御方ざまに苦しかるべき事をも、なだらかに聞きなし、思ひなほし給へば、聞きにくからで目安かりけり。(八)君達同じほどに、(九)すぎ〱おとなび給ひぬれば、御裳など著せ奉り給ふ。七間の寢殿、廣く大きにつくりて、南面に大納言殿の(一〇)おほい君、西に(一一)中の君、東に宮(一二)の御方と、住ませ奉り給へり。(一三)大方にうち思ふ程は、父宮のおはせぬ心苦しきやうなれど、(一四)此方彼方の御寶物多くなどして、内々の儀式有樣など、心にくゝ氣高くなどもてなして、けはひあらまほしうおはす。(一五)例の斯くかしづき給ふ聞えあり

㊀紅梅大臣の三人の娘、大君東宮に參る
(一)紅梅右大臣となづく
(二)頭中
(三)柏木
(四)すぐの弟
(五)髭黒
(六)眞木柱の姫君
(七)眞木柱の外祖父
(八)螢兵部卿、螢の薨去ここにて見えたり
(九)紅梅が

紅梅

梗槪

㊀紅梅大臣の三人の娘。大君東宮に參る。㊁紅梅宮の君に琴を彈かしむ。子の大夫に托して梅花を匂宮に贈り、中君を許さんとする意を告ぐ。㊂匂宮却つて宮の君に心あり。㊃紅梅夫婦の思案。

その頃按察(一)の大納言と聞ゆるは、故(二)致仕の大臣の次郎なり。亡せ給ひにし右衛門(三)督のさしつぎ(四)よ。童よりらう／＼じう、花やかなる心ばへものし給ひし人にて、なりのぼり給ふ年月にそへて、まいていと世にあるかひあり。あらまほしうもてなし、御覺いとやむごとなかりけり。北の方二人ものし給ひしを、もとよりのは亡くなり給ひて、今ものし給ふは、後の太政大臣(五)の御女、眞木柱離れがたくし給ひし君(六)を、式部卿(七)の宮にて、故兵部卿の親王(八)にあはせたてまつり給へりしを、親王うせ給ひて後(九)、忍びつゝ通ひ給ひしかど、年月經れば、え然しも憚り給はぬな

衛門督、權中納言、右大辨など、さらぬ上達部あまた、これかれに乘りまじり、誘ひ立てて、六條院へおはす。道のやゝ程ふるに、雪いさゝか散りて、艶なる黄昏時なり。物の音をかしき程に、(一)吹き立て遊びて入り給ふを、實に此所をおきて、いかならむ佛の御國にかは、かやうの折節の心やり所を覓めむ、と見えたり。寢殿の南の廂に、常のごと南向に、中少將(二)著きわたり、北向に(三)むかへて、(四)階下の親王達上達部の御座あり。御土器など始りて、物面白くなりゆくに、「求子」(五)舞ひて、(六)かよれる袖どもの、打返す羽風に、御前近き梅の、いといたく綻びこぼれたる匂の、さと打散り渡れるに、例の中將の御薫の、いとゞしくもてはやされて、言ひ知らずなまめかし。僅に覗く女房なども、(七)「闇はあやなく心もとなき程なれど、香にこそ實に似たるものなかりけれ」と、めであへり。大臣もめでたしと見給ふ。(八)(九)容貌用意も常より勝りて、亂れぬ樣に(一〇)をさめたるを見て、夕霧(一一)右のすけも聲くはへ給へや。いたう(一二)客人だたしや」と宣へば、憎からぬ程に、(一三)「神のます」など。

(一)車上にて
(二)づちりと著座し
(三)向きあひて
(四)相伴役の
(五)風俗歌の曲名、ここにては將監以下のものゝ舞ふなりとぞ
(六)ひるがへる
(七)「春の花の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隱るゝ」
(八)「降る雪に色はまがひぬ梅の花香にこそ似たるものなかりけれ」
(九)薫の
(一〇)取り澄したるを
(一一)右近衛の次將、即ち薫の事
(一二)お客樣めかすではないか
(一三)薫が求子の歌をうたふ也、求子「やをとめはわがやをとめたつや乙女神のますこのみ社に」

(一)夕霧が母典侍の處から引取りて落葉の許におきたり
(二)夕霧の心、殊更見せびらかす樣にせずして匂や薫に六君を見せたらば
(三)女の目利の上手な彼等は人と違ひて直に六君を見出すならん
(四)六君を餘り窮屈に箱入にしては置かず
(五)正月天子弓場殿にて衞府の舍人等の弓術を御覽あり、其事終りて大將の家にて饗應ある也
(六)夕霧が
(七)明石姫君腹
(八)匂
(九)いつも勝ちつけの左近衞府方が今日も非常に勝ちたり
(一〇)夕霧
(一一)明石姫君腹の中務宮
(一二)薫
(一三)ひそかに
(一四)夕霧の子供

きに、(一)迎へとりて奉り給へり。(二)わざとは無くて、この人々に見せそめてば、必ず心留め給ひてむ、(三)人の有樣をも見知る人は、殊にこそあるべけれ、など思して、(四)いといつくしうはもてなし給はず、今めかしくをかしき樣に、物好せさせて、人の心つけむ便多くつくりなし給ふ。

(五)賭弓の還饗のまうけ、六條院にて、(六)いと心殊にし給ひて、親王をもおはしまさせむの心づかひし給へり。その日親王達、大人におはするは、皆侍ひ給ふ。(七)后腹のは、いづれともなく、氣高く淸げにおはします中にも、(八)この兵部卿の宮は、實にいと勝れてこよなう見え給ふ。四の御子、常陸の宮と聞ゆる、更衣腹のは、思ひなしにや、けはひこよなう劣り給へり。(九)例の左、あながちに勝ちぬ。例よりは、疾く事はてて、(一〇)大將まかで給ふ。兵部卿の宮、常陸の宮、(一一)后腹の五の宮と、ひとつ車に招き乘せ奉りて、罷出給ふ。(一二)宰相中將は負方にて、(一三)音なく罷出給ひにけるを、夕霧「親王達おはします御送に參り給ふまじや」と、推しとゞめさせて、(一四)御子の

(一)唯何とはなしに情を見せてゆく處が
(二)女
(三)薫に時々にても逢はん爲に女三宮方に集まる也
(四)薫が其女どもに對して何くはぬ顔をして居るを見るも
(五)奉公などする筈でないよき身分の女で
(六)薫の
(七)自分で自分の心に欺かるゝ樣な形で
(八)女三存生中は御無沙汰をせぬをせめてもの孝行にしたし
(九)夕霧
(一〇)どれか一人は薫に娶せたしと
(一一)餘り平凡な縁組なればと思ひ直せど
(一二)比べものになる聟を
(一三)雲井雁腹の娘よりも
(一四)世間から輕く見られて居る娘が生憎一番優れて居るのを
(一五)夕霧が
(一六)落葉宮が子供がなくて寂しき故

らはし、(一)そこはかとなく情なからぬ程の、なか〱心やましきを、思ひ寄れる人(二)は、誘はれつゝ、(三)三條の宮に參り集るはあまたあり。(四)つれなきを見るも、苦しげなるわざなゝめれど、絶えなむよりはと、心細きに思ひわびて、(五)さもあるまじき際の人々の、はかなき契に頼をかけたる多かり。流石にいとなつかしう、見所ある(六)人の御有樣なれば、見る人皆(七)心にはからるゝ樣にて見過さる。(八)「宮のおはしまさむ世のかぎりは、朝夕に御目かれず御覽ぜられ、見奉らむをだに」と思ひ宣へば、(九)右の大臣も、あまた物し給ふ御女たちを、(一〇)一人〱はと心ざし給ひながら、え言に出で給はず。さすがに(一一)ゆかしげ無きなからひなるをとは思ひなせど、この君たちを措きて、外には(一二)なずらひなるべき人を覓め出づべき世かは、と思し煩らふ。(一三)やむごとなきよりも、典侍腹の六の君は、いと優れてをかしげに、心ばへなども足らひて生ひ出で給ふを、(一四)世の覺の貶しめざまなるべきしも、斯くあたらしきを、心苦しう(一五)思して、(一六)一條の宮の、さる扱ひぐさ持たまへらで、さう〴〵し

さをさ好まず、萬の事もて鎭めつゝ、自からおよずけたる(一)心様を、人にも知られ
給へり。(二)三宮の年に添へて心を碎き給ふめる、(三)院の(四)姫宮の御あたりを見るにも、
(五)ひとつ院の内に、旦暮立ちなれ給へば、事にふれても、(六)人の有様を聞き見奉るに、
實にいとなべてならず、心にくゝゆゑ〳〵しき御もてなし限なきを、(七)同じくば、
實に斯様ならむ人を見むにこそ、生ける限の心ゆくべきつまなれ、と思ひなが
ら、(八)大方こそ隔つることなく思したれ、姫宮の御方様の隔は、こよなく氣遠くな
らはさせ給ふも、理に煩はしければ、(九)あながちにも交らひ寄らず。(一〇)若し心より外
の心もつかば、我も人もいと惡しかるべき事、と思ひ知りて、物馴れ寄ることも
無かりけり。
(一一)我がかく人にめでられむと、なり給へる有様なれば、(一二)はかなくなげの言葉を散ら
し給ふあたりも、こよなくもてはなるゝ心なく、靡きやすなる程に、(一三)自らなほざ
りの通ひ所も、數多になるを、(一四)人の爲に、事々しくなどもてなさず、いとよく紛

(一)老成なる
(二)匂
(三)冷泉院
(四)女一宮
(五)薫が女一と同じ朱雀院の内に
(六)女一の
(七)薫の心
(八)冷泉が大體は薫を隔なく取扱ひはすれど、女一宮との隔は非常に嚴重にしつけて置くも
(九)強ひて女一方に親しまんともせず
(一〇)自分が心ならず女一を思ひ込む事もあらば自他の爲にならぬと
㊄ 夕霧六の君を落葉宮の養子として風流才子を釣らんとす、騎射の還饗
(一一)薫の爲人は自ら人に好かるゝ様に出來て居る故
(一二)一寸捨言葉をかけても女の方ではもう嬉しい中になる積でぢきに靡く故
(一三)薫が常座の慰に通ふ女
(一四)其女の爲に

けて思す方は、殊になかりけり。冷泉院の女一宮をぞ、(二)さやうにても見奉らばや、かひありなむかし、と思したるは、母女御(一)もいと重く、心にくゝ物し給ふあたりにて、姫君の御けはひ、實にとありがたく勝れて、餘所の聞もおはしますに、まして少し近くも、侍ひ馴れたる女房などの、委しき御有様の、事に觸れて聞え傳ふるなどもあるに、いとゞ忍びがたく思す(三)べかゝめり。(四)中將は、世の中を、深くあぢきなきものに思ひすましたる心なれば、なか〳〵(五)心留めて行き離れ難きおもひや殘らむ、など思ふに、(六)煩はしき思ひあらむあたりに拘づらはむは、つゝましくなど思ひ捨て給ふ。(七)さしあたりて、心にしむべき事の無き程、さかしだつにやありけむ。人の許なからむ事などは、まして思ひ寄るべくもあらず。(九)十九になり給ふ年、三位(八)の宰相にて、猶中將もはなれ給はず。帝后の御もてなしに、たゞ人(一一)にては憚(一〇)なき、めでたき人の覺にてものし給へど、心のうちには、(一二)身を思ひ知る方ありて、物哀になどもありければ、心にまかせて、(一三)はやりかなるすきごと、を

(一)弘徽殿腹
(二)妻にもしたし、妻にしてもしがひがあらんと匂が思ひたるは
(三)匂が
(四)薫は
(五)若し女に惚れ込む樣の事あらば執著心の爲に出家がしにくかるべしと思ふ故
(六)色戀の沙汰になりさうな處へ立寄るのが險呑にてやめる氣になる
(七)作者の評、是も差當り深く思込むべき相手が無い間だけ斯く悟つた樣な顏をするのかも知れぬ
(八)無理な戀路などは薫は況して思ひもよらぬ
(九)薫が
(一〇)參議兼近衞中將也
(一一)臣下としては立派なる此上もなき寵遇なれど
(一二)柏木と女三との祕密を知れる也
(一三)輕率なる女狂などは一向好まず



め給ひ、朝夕の(一)ことわざにあはせ營み、御前の前栽にも、春は、梅の花園をながめ給ひ、秋は、世の人のめづる女郎花、小牡鹿の妻にすめる萩の露にも、をさをさ御心うつし給はず、老を忘るゝ菊に、衰へ行く藤袴、物氣なき地楡などは、いとすさまじき霜枯の頃ほひまで、(二)思し捨てずなど、わざとめきて、(三)香にめづる思ひをなむ立てて、好ましうおはしける。かゝる程に、少しなよび和らぎ過ぎて、好きたる方にひかれ給へりと、世の人は(四)思ひ聞えたり。昔の(五)源氏は、すべて、斯くたてて其の事と、樣かはり、しみ給へる方ぞなかりしかし。源中將、(六)この宮には常に參りつゝ、遊などにも、きしろふものの音を吹き立て、實に挑ましくも、若きどち思ひかはし給ひつべき人の樣になむ。例の世の人は、匂ふ兵部卿、薫る中將と、聞きにくゝ言ひつゞけて、その頃よき女おはする、(七)やうごとなき所々は、(八)心ときめきに、聞えごちなどし給ふもあれば、宮は樣々に、をかしうもありぬべきわたりをば宣ひ寄りて、(九)人の御けはひ有樣をも氣色とり給ふ。(一〇)わざと御心につ

(一)仕事として薫物を調合し
(二)何れも香あるものなれば也
(三)香を愛するといふ物數寄を看板に現はして
(四)匂宮を
(五)源は匂の樣に何事によらず一風人にかはりたる物數寄をして其に凝り固まるといふ事はなかりき
(六)薫が匂を常に訪ひて
(七)やんごとなき
(八)どうかして此兩人を聟にもしたしと私に胸をどらせて噂し合ふもある故
(九)相手の女の樣子を見る
(一〇)特別に匂の方から思をかけて居る女はなし

(一)薫香の名に百歩香といふがある故に實にといへり
(二)誰でも薫位の貴公子となればなりふりに構はぬはなき筈にて
(三)薫は不思議な位に一寸物陰に忍びて立寄りても自分の居るのが直ぐ分る程なるをうるさがりて
(四)薫物を身につけねど
(五)薫のは
(六)特別の香ある故に雨に濡るゝをも厭はず其梅の香を身に染むる人多く
(七)「主知らぬ香こそ匂へれ秋の野に誰がぬぎかけし藤袴ぞも」
(八)薫の香に壓倒されたる也
(九)薫が折り取りたるが爲に香勝れたり
(一〇)匂宮
(一一)此香の點につきて競争を試みたく思ひて
(一二)匂は
(一三)薫物、他物の匂を身にうつす意

な清ら、と見ゆる所も無きが、たゞいとなまめかしう恥かしげに、心のおく多かりげなるけはひの、人に似ぬなりけり。香のかうばしさぞ、この世の匂ならず、怪しきまで、うち振舞ひ給へるあたり、遠く隔てたる程の追風も、まことに(一)百歩の外も薫りぬべき心地しける。(二)誰も、然ばかりになりぬる御有様の、いとやつればみ、たゞありなるやはあるべき、様々に、我人に勝らむと、つくろひ用意すべかめるを、(三)かくかたはなるまで、打ち忍び立ちよらむ物の隈も、しるきほのめきの隠れあるまじきに、うるさがりて、をさ〳〵(四)取りもつけ給はねど、あまたの御唐櫃に、埋もれたる香の香どもも、(五)この君のは、言ふよしもなき匂をくはへ、御前の花の木も、はかなく袖かけたまふ梅の香は、(六)春雨の雫にもぬれ、身にしむる人おほく、秋の野に(七)主なき藤袴も、(八)もとの薫はかくれて、なつかしき追風異に、(九)折りなしがらなむ勝りける。かく、怪しきまで人の咎むる香にしみ給へるを、(一〇)兵部卿宮なむ、他事よりも(一一)挑ましく思して、(一二)それはわざと萬の勝れたる(一三)うつしをし

はた、もとよりひとつ御殿にて、宮達諸共に(一)生ひ出で、遊び給ひし御もてなし、をさをさあらため給はず。源「末に生れ給ひて、心苦しう、(二)おとなしうも見おかぬ事」と、院の思し宣ひしを、思ひ出で聞え給ひつゝ、疎ならず思ひ聞え給へり。(三)右の大臣も、我が御子どもの君達よりも、この君をば、こまやかにやむごとなく、もてなしかしづき奉り給ふ。昔光る君と聞えしは、さるまたなき御覺ながら、猜み給ふ人うち添ひ、母方の御後見(四)なくなどありしに、御心ざまも物深く、世の中を(五)思しなだらめし程に、ならびなき御光をば、目映からずもてしづめ給ひ、遂にさるいみじき(六)世の亂も出來ぬべかりしをも、事なく過し給ひて、後の世の御勤も、(七)おくらかし給はず、萬然りげ(八)なくて久しくのどけき御心おきてにこそありしか、この君は、まだしきに世の覺いと過ぎて、思ひあがりたること、こよなくなどぞ(九)物し給ふ。實に、然る(一〇)べくて、いと此の世の人とは造り出でざりける、假に宿れるかとも見ゆること添ひ給へり。顏容貌も、そこはかと、(一一)何處なむすぐれたる、あ

(一)薫が明石姫腹の皇子と一緒に
(二)薫の成人を見て死ぬ事が出來ぬ
(三)夕霧
(四)源氏は父帝の寵は無雙なりしかど
(五)世間に對して穩便に構へし故
(六)須磨退居の時の事情をいふ
(七)不行屆の事なく
(八)何氣なくもてなす氣長な性質なりしに
(九)薫は早くから世間に騷がれて自負が甚だ強い
(一〇)何ぞの因緣で此世の人ならぬ佛などが假に現れたるかと見える點あり
(一一)どことというて

(一)以下薫の心、女三が女盛を尼になりしはどの位道心の深かりし事か知らぬが、或は不圖した失態の爲に世を憂く思ひての出家なるべし
(二)他人も知つて居ぬ筈はなし、隱すべき事柄故我には話してきかせぬならん
(三)薫の心、女三が佛道に精出す樣なれど
(四)眞の悟を開く事は難し
(五)女の五障、梵天、帝釋、魔王、轉輪聖王、佛たるを得ざること
(六)女三の後世だけでも助けたしと
(七)死せし柏木も煩惱を抱きつゝ死せしならんと
(八)生れかはりても
(九)出家の志あれば也
(一〇)抵抗しきれず
㊃ 匂ふ兵部卿宮と薫る中將、二人等しく冷泉院の女一宮を思ふ
(一一)今上も薫の母女三とは兄妹の關係故薫を愛する事深く
(一二)明石姫君

答ふべき人もなし。事に觸れて、我が身に恙ある心地するも、たゞならず物歎かしくのみ、思ひめぐらしつゝ、(一)宮もかく盛の御容貌をやつし給ひて、何ばかりの御道心にてか、俄におもむき給ひけむ、かく思はずなりける事の亂に、必ず憂しと思しなる節ありけむ、(二)人もまさに漏り出で知らじやは、猶つゝむべき事の聞により、我には氣色を知らする人のなきなゝめり、と思ふ。(三)旦暮勤め給ふやうなゝめれど、はかもなくおほどき給へる女の御悟の程に、(四)蓮の露もあきらかに、玉と磨き給はむ事難し、(五)五つのなにがしも、猶うしろめたきを、我この御心地をたすけて、同じうは(六)後の世をだに、と思ふ。かの過ぎ(七)給ひにけむも、安からぬ思にむすほほれてや、など推量るに、(八)世をかへても對面せまほしき心つきて、(九)元服は物憂がり給ひけれど、(一〇)すまひはてす、自ら世の中にもてなされて、目映きまで花やかなる御身のかざりも、心につかずのみ、思ひしづまり給へり。

(一一)内裏にも、母宮の御かたざまの心よせ深くて、いと哀なるものに思され、(一二)后の宮

年月に勝り給ふけはひにこそは、などかさしも、と見るまでなむ。母宮は、今はたゞ御行をしづかにし給ひて、月ごとの御念佛、年に二度の御八講(一)、をり〳〵の尊き御營ばかりをし給ひて、徒然におはしませば、(二)この君の出で入り給ふを、(三)かへりては親のやうに、頼もしきかげに思したれば、いと哀(四)にて、院(五)にも内裏にも召しまつはし、東宮も、次々の宮達も、なつかしき御遊敵にて、作ひ給へ(六)ば、暇なく苦しうて、(七)いかで身を分けてしがなと覺え給ひける。(八)幼心地にほの聞き給ひし事の、をり〳〵いぶかしう、覺束なく思ひ渡れど、問ふべき人もなし。宮に(九)は、ことの氣色にても、知りけりと思されむ、かたはらいたき筋なれば、世とと(一〇)もの心にかけて、薫(一一)如何なりける事にかは。何の契にて、かう安からぬ思ひ添ひたる身にしもなり出でけむ。善巧太子(一二)の我が身に問ひけむ悟をも得てしがな」とぞ、獨言たれ給ひける。

薫(一三)おぼつかな誰に問はましいかにしてはじめもはても知らぬ我身ぞ

(一)女三宮
(二)薫の
(三)女三が却て薫を親の樣に思ひて
(四)薫が女三をあはれに思ひて
(五)自分は冷泉院にも今上にも常に呼びつけられ
(六)薫を相手にする故
(七)女三に孝養する暇の無きを嘆く也
(八)柏木と自分との關係を幼時子耳にはさみし也
(九)女三に自分が此祕密を一すでも知り居れりと思はれんは
(一〇)絶えず氣にかけて
(一一)どうした事情でありしやらん
(一二)未詳、釋尊の子羅睺羅尊者が人に敎へられずして父を認りし事大論に見えたるを指すならんといふ
(一三)我實父の分らぬを我身の始も知らず終も知られぬ佛理に言ひかけたる也

實に長からぬにしも、覺え増るものになむ。

(一)二品の宮の若君は、(二)院のきこえつけ給へりしまゝに、(三)冷泉院の帝、取分きて思しかしづき、(四)后の宮も、皇子達などおはせず、心細う思さるゝに、(五)うれしき御後見に、まめやかに頼み聞え給へり。御元服なども、(六)院にてせさせ給ふ。十四にて、二月に侍従になり給ふ。秋右近の中將になりて、(八)御賜の加階などをさへ、いづこの(七)心もとなきにか、急ぎ加へておとなびさせ給ふ。(九)おはしますおとゞ近き對を、曹司にしつらひなど、(一〇)自ら御覽じ入れて、若き人も、童下仕まで、勝れたるを選りとゝのへ、(一一)女の御けしきよりも、まばゆく整へさせ給へり。(一二)上にも宮にも、侍ふ女房の中にも、容貌よくあてやかにめやすきは、(一三)皆うつし渡させ給ひつゝ、(一四)院の内を心につけて、住みよくありよく思ふべくとのみ、わざとがましき御あつかひぐさに思され給へり。(一五)故致仕のおほい殿の(一六)女御と聞えし御腹に、女宮たゞ一所おはしけるをなむ、限なくかしづき給ふ(一七)御有樣に劣らず。(一八)后の宮の御覺の、

(二二)薫、女三と柏木との間を疑ふ
(一)女三宮
(二)薫
(三)源の頼みし儘に
(四)秋好
(五)薫を丁度よき便りにして
(六)冷泉院にて
(七)薫が
(八)冷泉院の御賜にて特に早く四位に叙する也、御賜は年官年爵をいふ
(九)冷泉の御殿近き對の屋を薫の住居に當て
(一〇)冷泉自ら監督して
(一一)內親王たちに對してよりも薫に力を入れる
(一二)冷泉方の侍女も秋好方の侍女も
(一三)薫方へ
(一四)薫が冷泉院が氣に入りて住みよく思ふ樣にと
(一五)頭中の逝去せしことこゝに見えたり
(一六)弘徽殿、柏木の妹
(一七)薫を大事にする事が
(一八)是も畢竟秋好が薫を段々大事にする故なるべし、共程にせずともよからんにと人目には思はれる位

(一)雲井雁の方と一夜おきに
(二)きちやうめんに
(三)畢竟明石上一人の子孫の住むべき爲に作りし樣なもので、匂宮女一宮二宮など此明石上の孫也
(四)夕霧
(五)源の趣意を受けつぎて
(六)以下夕霧の心、紫上が明石上の樣に生き殘りてありたらば
(七)紫が
(八)源氏
(九)源の事を歎くは勿論

らせ給ひてなむ、三條殿(一)と、夜ごとに十五日づつ、(二)うるはしう通ひ住み給ひける。二條院とてつくりみがき、六條院の春のおとゞとて、世にのゝしりし玉の臺も、(三)唯一人の御末の爲なりけりと見えて、明石の御方は、あまたの宮達の御後見をしつゝ、あつかひ聞え給へり。(四)大殿は、いづかたの御事をも、(五)昔の御心おきてのままに、改めかはる事無く、あまねき親心に仕うまつり給ふにも、(六)對の上の、かやうにてとまり給へらましかば、如何ばかり心をつくして、仕うまつり見え奉らまし、遂にいさゝかも取りわきて、我が心よせと見知り給ふべき節もなくて、過ぎ給ひにしことを、口惜しく飽かず悲しう、(七)思ひ出で聞え給ふ。

天の下の人、(八)院を戀ひ聞えぬなく、とにかくにつけても、世はたゞ火を消ちたる樣に、何事も榮なき歎をせぬ折なかりけり。まして殿の内の人々、御方々宮達などは更にも聞えず、(九)限なき御事をはさるものにて、またかの紫の上の御有樣を、心にしめつゝ、萬の事につけて、思ひ出で聞え給はぬ時の間なし。春の花の盛は、

(一)相手が進んで來れば應ぜぬでもなき態度を示して
(二)夕霧の第六女典侍腹

㊁夕霧落葉宮を六條院に移す

(三)源の逝去後
(四)婦人達
(五)二條東院を源の遺産處分に貰ひ受けて其所にあり
(六)女三
(七)明石姫君
(八)六條院
(九)主人の死後生時の形がなくなりて
(一〇)せめて自分の生涯だけでも
(一一)元の花散里の殿
(一二)落葉宮

は樣のものと、さのみうるはしうは、としづめ給へど、又(一)さる御氣色あらむをば、もて離れてはあるまじうおもむけて、いといたうかしづき聞え給ふ。六の(二)君なむ、その頃少しわれはと思ひのぼり給へる親王達上達部の、御心盡すくさはひにものし給ひける。

院(三)かくれ給ひて後、さまぐ集ひ給へりし御方々(四)、泣く〳〵遂におはすべき住處どもに、おの〳〵うつろひ給ひしに、花散里と聞えしは、東(五)の院をぞ、御處分の所にて渡り給ひにける。入道(六)の宮は、三條の宮におはします。今后(七)は内裏にのみ侍ひ給へば、院(八)のうち寂しく、人少になりにけるを、右の大臣、夕霧「人の上にて、いにしへの例を見聞くにも、生けるかぎりの世に、心を留めて造り占めたる人の家居の、名殘(九)なくうち捨てられて、世のならひも常なく見ゆるは、いと哀にはかなさ知らるゝを、我が(一〇)世にあらむかぎりだに、この院荒らさず、ほとりの大路など、人影かれ果つまじう」と思し宣はせて、丑寅(一一)の町に、かの一條(一二)の宮を渡し奉

(一)紫上の本邸
(二)今上の長子明石姫君腹
(三)無上の貴きものとして特別にしておき
(四)今上も明石姫君も非常に匂を愛し
(五)匂を内裏に置きたがれども
(六)二條院
(七)匂が
(八)今上の長女明石姫君腹
(九)紫上の住みし殿
(一〇)紫時分の
(一一)紫を
(一二)明石姫君腹匂の兄
(一三)内裏へ行きし時の部屋
(一四)夕霧の第二女を妻にしたり
(一五)今の東宮即位の時には東宮になるべき候補者にて
(一六)夕霧
(一七)他に競爭者なき
(一八)以下の娘ども順に二宮や匂に娶はさるべきものと
(一九)夕霧も何も版で押した樣にちやんと順々に匂兄弟に娶はせずともよしと

御心よせ異に、はぐくみ聞え給ひしゆゑ、三宮は(一)二條院におはします。(二)東宮をば、さる(三)やむごとなきものにおき奉り給ひて、(四)帝、后、いみじく悲しうし奉り、かしづき聞えさせ給ふ宮なれば、(五)內裏住をせさせ奉り給へど、猶心易き(六)故鄕に、住みよくし給ふなりけり。(七)御元服し給ひては、兵部卿の宮と聞ゆ。(八)女一宮は、六條院の南の町の(九)東の對を、(一〇)そのよのしつらひを改めずおはしまして、朝夕に(一一)戀ひ忍び聞え給ふ。(一二)二宮も、おなじおとゞの寢殿を、時々の御休み所にし給ひて、梅壺を(一三)御曹司にし給ひて、(一四)右の大殿の中姫君を得奉り給へり。(一五)次の坊がねにて、いとおぼえ異に重々しう、人柄もすくよかになむものし給ひける。(一六)大殿の御女は、いとあまたものし給ふ。大姫君は東宮に參り給ひて、(一七)またきしろふ人無き樣にて侍ひ給ふ。(一八)そのつぎ〳〵皆序のまゝにこそはと、世人も思ひきこえ、后の宮も宣はすれど、この兵部卿宮は、然しも思したらず。我が御心より起らざらむことなどは、すさまじくも思しぬべき御氣色なめり。(一九)大臣も、なにか

匂宮

梗概

㊀源氏逝去以後の人々の有樣。㊁夕霧、落葉宮を六條院に移す。㊂薫、女三と柏木との間を疑ふ。㊃匂ふ兵部卿宮と薫る中將。二人等しく冷泉院の女一宮を思ふ。㊄夕霧、六の君を落葉宮の養子として風流才子を釣らんとす。騎射の還饗。

(一)光隠れ給ひにし後、(二)かの御影に立ち繼ぎ給ふべき人、そこらの御末々にありがたかりけり。(三)おりゐの帝をかけ奉らむは辱し、當帝の(四)三宮、そのおなじ御殿にておひ出で給ひし宮の若君と、(五)この二所なむ、とり〴〵に淸らなる御名とり給ひて、實にいとなべてならぬ御有樣なめれど、(六)いと目映き際にはおはせざるべし。(七)唯世の常の人樣に、めでたくあてになまめかしくおはするをもととして、(八)さる御なからひに、人の思ひ聞えたるもてなし有樣も、いにしへの御ひゞきけはひよりも、やや立ち勝り給へる、覺がらなむ、かたへはこよなういつくしかりける。紫の上の

㊀源氏逝去以後の人々の有樣、匂宮と薫、夕霧の娘たち

(一)源の逝去後、源嵯峨院に隠居して數年の後逝去の趣後の文に見えたり

(二)源の二代目となるべき人物子孫の中になし

(三)冷泉を源の子孫の中に數へんは憚りあり

(四)匂宮

(五)匂宮と同じく六條院にそだちし薫との二人

(六)見るもまばゆき程の優れたる器量には非ず

(七)尋常一樣に

(八)源の子孫といふ迄で人の氣受が源の幼時より超えたる故非常に美しい氣持がする氣味もある

雲隱

此卷古來名のみありて本文なし。蓋し此卷に源氏逝去の事を書くべきなれど、前卷既に紫の逝去につきて哀をつくしたれば、作者故らに、更に一層の傷心事を寫すことを避けて、只卷の名によりて、源氏の逝去を知らせたるならんといふ。さて前の幻の卷と次の匂宮とは其の間凡そ八箇年を隔てたりと知るべし――校訂者

(一)此導師を饗應する爲に源がはじめて居間より出て人に接したる也

(二)追儺とて大晦日に鬼を追出す儀式あり、其時には何にても成るたけ音を高くして追ふ事なりし也

(三)我出家したらば此兒の愛らしき樣子を見る事もなからんと

(四)今迄は院の拜禮とて源が元旦に人々の參賀を受けしを、其も來春限りなれば萬事念入りに人々の待遇をよくせよと言はるゝ也

人々多く詠みおきたれど漏らしつ。(一)その日ぞ出でゐ給へる。御容貌、昔の御光にも又多くそひて、ありがたくめでたく見え給ふを、このふりぬる齢の僧は、あいなう涙もとゞめざりけり。年暮れぬと思すも心細きに、若宮の、「(二)儺やらはむに、音高かるべきこと、何わざをせさせむ」と、走りありき給ふも、(三)をかしき御有樣を見ざらむ事と、よろづに忍びがたし。

源　もの思ふと過ぐる月日もしらぬまに年も我が世もけふや盡きぬる

(四)朔日のほどのこと、常より異なるべくと掟てさせ給ふ。親王たち大臣の御引出物、品々の祿どもなど、二無う思し設けてとぞ。

御佛名も、(一)今年ばかりにこそは、と思せばにや、常よりも異に、錫杖の聲々などあはれに思さる。(二)行末ながきことを(三)請ひ願ふも、佛の聞き給はむことかたはらいたし。雪いたう降りて、まめやかに積りにけり。導師のまかづるを、御前に召して、盃(四)など常の作法よりも、さしわかせ給ひて、殊に祿など賜はす。年頃久しくまゐり、おほやけにも仕う奉りて、院にも御覽じ馴れたる御導師の、頭はやうやう色(五)かはりて侍ふも、哀に思さる。例の宮達上達部など、あまた參り給へり。梅の花の僅に氣色ばみはじめて、雪に(六)もてはやされたる程をかしきを、御遊などもありぬべけれど、猶今年までは物(七)の音もむせびぬべき心地し給へば、時(八)によりたるものうち誦じなどばかりぞせさせ給ふ。まことや、導師の盃の序に、

御かへし、

源　春(九)までのいのちも知らず雪のうちにいろづく梅をけふかざしてむ

導師(一〇)　ちよの春見るべき花といのりおきて我が身ぞ雪とともにふりぬる

(一)歳暮の廿一日より三日間僧を招きて佛名を唱へしむる儀式
(二)今年だけぢやと
(三)僧が源の壽命長久を祈る也
(四)佛名終りて導師に酒を賜はるは常の事也
(五)はげて
(六)雪の爲に一人美くしく見えるのが
(七)衆の悲の爲に音樂も咽ぶが如く聞ゆる也
(八)場合相當の朗詠などするなるべし
(九)我は來春梅の盛まで生きるか分らねば、せめて今未開の梅をかざして心遣りとすべし
(一〇)君が永久に花の盛を見らるゝ樣御壽命長久を祈りつゝ私は此樣に年寄りました

(一)是程情の籠りて居らぬ文でも
(二)文を
(三)筆の跡を越えたる路の跡にかけたり
(四)まともには開けねど
(五)今は其にも増して幽明境を異にしたれば一入の悲に涙もせきあへぬ也
(六)是より以上に取亂しては女々しくて見つともなかるべければ
(七)細々と書きてある紫の文の端に
(八)紫が烟となりて立昇りし其同じ空の烟となれ

からぬ人々二三人ばかり、御前にて破らせ給ふ。いと(一)かゝらぬ程の事にてだに、過ぎにし人の跡と見るは哀なるを、ましていとゞかき昏らし、それとも見わかれぬまで降りおつる御涙の、水茎に流れそふを、人もあまり心弱しと見奉るべきが、かたはらいたう、はしたなければ、(二)押遣り給ひて、

源 死出の山越えにし人を慕ふとて(三)跡を見つゝもなほまどふかな

侍ふ人々も、(四)まほにはえ引きひろげねど、それとほのぐ見ゆるに、心惑ひども疎ならず。この世ながら遠からぬ御別のほどを、いみじと思しけるまゝに書い給へる言の葉、實に(五)その折よりもせきあへぬ悲しさ、やらむ方なし。いとうたて、(六)今ひときはの御心惑ひも、女々しく人わろくなりぬべければ、能くも見給はで、(七)こまやかに書き給へるかたはらに、

源 かきつめて見るもかひなしもしほ草(八)おなじ雲居の烟とをなれ

と書きつけさせ給ひて、皆燒かせ給ひつ。

やしかりし日影のをり(一)、さすがに思し出でらるべし。

【源】みやびとは豊明にいそぐ今日日影もしらで暮しつるかな(二)

今年なばかくて忍び過しつれば(三)、今はと世を去り給ふべきほど、近く思し設くるに、哀なること盡きせず。やうやう(四)然るべき事ども、御心のうちに思しつゞけて、侍ふ人々にも、ほどほどにつけて物賜ひなど(五)、おどろおどろしく、今なむ限としなし給はねど、近う侍ふ人々は、御本意遂げ給ふべき氣色と見奉るまゝに、年の暮れゆくも心細う、悲しきこと限なし(六)。落ちとまりてかたはなるべき人の御文ども、「破れば惜し」(七)と思されけるにや、少しづつ殘し給へりけるを、物のついでに御覽じつけて、破らせ給ひなどするに、かの須磨の頃ほひ、所々より奉り給ひけるもある中に、かの御手なるは(八)、殊に結ひあはせてぞありける。自らし置き給ひける事なれど、久しうなりにける世の事と思すに、たゞ今のやうなる墨つきなど、實に(九)千歳の形見にしつべかりけるを(一〇)、見ずなりぬべきよと思せば、かひなくて、疎

(一)筑紫の五節に文をやりし時の事
(二)五節の舞姫の日蔭のかつらに日暮をきかせたる也
㊤ 歳暮に出家の用意、佛名
(三)近々出家すべしと心構へするに
(四)相當の準備
(五)仰山に是限り出家するとて騒ぎはせねど
(六)跡に殘りては見つともなかるべき
(七)「破れば惜し破られば人に見えぬべし泣く泣くもなほ返す文哉」
(八)紫の書きたる文丈は特に一纏めにしてあり
(九)「かひなしと思ひなはてそ水莖のあとぞ千歳のかたみなりけり」
(一〇)是限り見る事が出來ぬのぢやと思へばあつけなくて



と書きそへ給ふ。
九月になりて、九日、(一)綿おほひたる菊を御覧じて、
源　もろともにおきゐし菊の朝露もひとり袂にかゝるあきかな
神無月は、大方も時雨がちなる頃、いとゞ眺め給ひて、夕暮の空の氣色なども、えも言はぬ心細さに、源「降りしかど」(二)と獨言ちおはす。雲居をわたる雁の翼も、羨ましくまもられ(三)給ふ。
源　(四)大空をかよふまぼろし夢にだに見えこぬ魂の行方たづねよ
何事につけても、紛れずのみ月日に添へておぼさる。
(五)五節などいひて、世の中そこはかとなく今めかしげなる頃、(六)大將殿の君達、殿上し給ひて參り(七)給へり。(八)同じ程にて、二人いと美しきさまなり。御叔父の頭中將、藏人少將など小忌にて、(九)青摺の姿ども、淸げにめやすくて、皆うち續き、もて(一〇)かしづきつゝ、諸共に參り給ふ。思ふ事なげなる樣どもを見(一一)給ふに、いにしへあ

(一)きせ綿とて菊の花の上に綿をおほひ置きて花の露を綿にうつし其にて身をぬぐひて不老のまじなひにしたる也
(二)「神無月いつも時雨は降りしかど斯く袖ひづる折はなかりき」
(三)眺めらる
(四)雁を見て飛行自在の仙術の士を思ひ其が紫の魂の在處を尋ね來んことを願ふ也、長恨歌の臨邛の道士が楊貴妃の魂を尋ねて蓬萊宮にて尋ね逢ひし故事を思ひてよめり
(五)五節の舞は十一月の行事也
(六)夕霧の男の子が童殿上とて幼少にて見習の爲禁中に勤むるを許されたる也
(七)源方へ
(八)二人同じ年輩にて、いづれも雲井雁腹
(九)新嘗會の役人に大忌小忌の別あり、小忌は專務の役人にて青摺とて山藍にて摺れる袍を著る
(一〇)童殿上の子供を世話しつゝ
(一一)源が

源　よるを知る螢を見てもかなしきは時ぞともなき思ひなりけり

七月七日(一)も、例にかはりたること多く、御遊などもし給はで、徒然にながめくらし給ひて、星合見る人もなし。まだ夜深う、一所起き居給ひて、妻戸押しあけ給へるに、前栽(二)の露いと繁く、渡殿の戸よりとほりて見渡さるれば、出で給ひて、

源　たなばたの逢ふせは雲のよそに見て別のにはに露ぞおきそふ

風の音さへ(三)たゞならずなり行く頃しも、御法事の營にて、朔日(四)頃は紛らはしげなり。今まで經にける月日よと思すにも、あきれて明しくらし給ふ。御正日(五)には、上下の人々皆齋して、かの曼陀羅など今日ぞ供養ぜさせ給ふ。例の宵の御行に、御手水まゐらする中將の君の扇に、

中將　君こふる涙はきはもなきものを今日をば何のはてといふらむ

と書きつけたるを取りて見給ひて、

源　人こふる我(六)が身も末になりゆけどのこりおほかる涙なりけり

(一)螢の火は夜のみ光るに我が思の火は晝夜の別さへなきが悲し、朗詠に「蒹葭水暗螢知夜」

(十)七月七日

(二)牽牛星の天の川を渡るを見る也

(十一)八月紫上の一周忌、九月、十月、十一月

(三)次第に秋の愁を添ふる頃

(四)八月朔日

(五)紫の祥月命日

(六)我命は最早いくらもなきに涙のみは無限なり

(一)君は紫をいふ、郭公は冥途の鳥なりといふ俗說あるによりて、君が故鄕の橘今盛也と紫に告げよといへる也
(二)此時多く歌をよみたれど書く事は見合せたり
(三)紫在世の時分には迚も寄り附かれざりし處の近くに立寄るにつけて夕霧の感ずる事多し
(九) 六月頃蓮を見る
(四)此引歌未詳
(五)「我のみや哀と思はんきり〴〵す鳴く夕かげの大和撫子」紫を慕ふ心を言外にもらしたり
(六)長恨歌「夕殿螢飛思悄然、孤燈挑盡未成眠」

夕霧　ほとゞぎすきみにつてなむふるさとの花橘は今ぞさかりと(一)

女房など多く言ひあつめたれどとゞめつ。大將の君は、やがて御宿直に侍ひ給ふ。(二)さびしき御獨寢の心苦しければ、時々かやうに侍ひ給ふを、(三)おはせし世にはいと氣遠かりし御座のあたりの、いたうも立ち離れぬなどにつけて、思ひ出でらるゝ事ども多かり。

いと暑き頃、涼しき方にて眺め給ふに、池の蓮の盛なるを見給ふに、(四)「いかに多かる」などまづ思し出でらるゝに、ほれ〴〵しくて、つく〴〵とおはする程に、日も暮れにけり。蜩の聲はなやかなるに、御前の撫子の夕映を、一人のみ見給ふには、實にぞかひなかりける。(五)

源　つれ〴〵とわが泣き暮す夏の日をかごとがましき蟲の聲かな

螢のいと多う飛びちがふも、源(六)「夕殿に螢飛んで」と、例の故事も、かゝる筋にのみ口なれ給へり。

(一)紫の書き寫し若しくはつくらせ置きし
(二)紫の趣意を
(三)紫の遺志の如くにする上に又新に搭へてすべき事
(四)佛事に關する事を紫が生前より特に志しておきたるは紫の後生の爲にも安心なれど
(五)紫が此世に緣薄くて短命なりしを思へば形見に見るべき子のなきが殘念なり
(六)此世に緣厚き長命の婦人等の腹にも我子の數は少ければ、其は紫の事にあらずして源自身の殘念さ也
(七)其方こそ子供が多くて行末家門の繁昌の基なるべし
(八)「古の事語らへば時鳥如何に知りてか古聲に啼く」

度なむ供養すべき。經(一)なども數多ありけるを、なにがし僧都、皆(二)その心くはしう聞き置きたゝなれば、又加(三)へてすべき事どもも、かの僧都の言はむに從ひてなむ、物すべき」など宣ふ。夕霧「(四)かやうの事ども、もとよりとりたてて思し掟てけるは、後やすきわざなれど、(五)この世にはかりそめの御契なりけりと見給ふには、形見といふばかり留め聞え給へる人だに、ものし給はぬこそ、口惜しう侍りけれ」と申し給へば、源「それは、假初(六)ならず命ながき人々にも、さやうなることの大方少かりける。自らの口惜しさにこそ。(七)そこにこそは、門はひろげ給はめ」など宣ふ。何事につけても、忍びがたき御心弱さのつゝましくて、過ぎにし事いたうも宣ひ出でぬに、待たれつる杜鵑のほのかにうち鳴きたるも、「(八)いかに知りてか」と、聞く人たゞならず。

源「なき人をしのぶるよひの村雨にぬれてや來つる山ほとゝぎす

とて、いとゞ空をながめ給ふ。大將、

なむと、待たるゝ程に、俄に立出づる村雲のけしき、いと生憎にて、おどろ〳〵しう降り來る雨にそひて、さと吹く風に燈籠も吹き惑はして、空闇き心地するに、源「窓をうつ聲」(一)など、めづらしからぬ故事を、うち誦じ給へるも、折からにや、妹(二)が垣根におとなはせまほしき御聲なり。源「獨住は、殊にかはる事なけれど、怪しうさう〴〵しくこそありけれ。深き山住せむにも、かくて身をならはしたらむは、(三)こよなう心澄みぬべきわざなりけり」など宣ひて、源「女房こゝに菓子など參らせよ。男ども召さむもこと〴〵しき程なり(四)」など宣ふ。心にはたゞ、空を眺め給ふ(五)御氣色の、つきせず心苦しければ、かくのみ思し紛れずば、(六)御行にも御心澄まし給はむこと難くや、と見奉り給ふ。ほのかに見し御面影だに忘れがたし、まし(七)て理ぞかし、と思ひ居給へり。夕霧「昨日今日と思ひ給ふる程に、御はてもやうや(八)う近うなり侍りにけり。如何樣にかおきて思召すらむ」と申し給へば、(九)源「何ばかり、世の常ならぬ事をかは物せむ。(一〇)かの志しおかれたる極樂の曼陀羅など、(一一)この

(一)長恨歌「耿々殘燈背レ壁影、蕭々暗雨打レ窓聲」
(二)催馬樂の「あづまやのまやのあまりの雨濺ぎ我立ち濡れぬ此戸開かせ」などの意ならん
(三)此の如く豫め獨住に身をならしたらば
(四)仰山なる時刻
(五)「大空は戀しき人のかたみかは物思ふ毎にながめらるらん」
(六)夕霧の心、所ろ紫の事ばかり思ひ詰めて居る樣では
(七)夕霧の心。
(八)紫の一周忌
(九)御法事をどの樣になさる思召か
(一〇)どれ程通常に變つた事をせうぞ
(一一)紫が志ありて作らせおきたる



いと小やかにをかしき様して、起き上りたり。つらつき花やかに、匂ひたる顏もて(一)かくして、少しふくだみたる髮のかゝりなど、いとをかしげなり。紅の黄ばみたる氣添ひたる袴、萱草色の單衣、いと濃き鈍色に黑きなど、うるはしからず重り(二)て、裳、唐衣も脱ぎすべしたりけるを(三)、とかく引きかけなどするに、葵を傍に置きたりけるを、とり給ひて、源「如何にとかや。この名こそ忘れにけれ」と宣へば、

中將さもこそはよるべの水に水草ゐめけふのかざしよ名さへ忘るゝ(四)

と恥らひて聞ゆ、げにといとほしくて、(五)

源大かたはおもひ捨ててし世なれども葵はなほやつみをかすべき(六)

など、一人ばかりは思し放たぬけしきなり。(七)

五月雨はいとゞながめくらし給ふより外の事なく、さうざうしきに、十餘日の月花やかにさし出でたる雲間の珍らしきに、大將の君御前に侍ひ給ふ。(八)花橘の、月影にいときはやかに見ゆる薫も、追風なつかしければ、「千代をならせる聲」(九)もせ

(一)顏を袖などにて隱して
(二)よくも揃はずに重りて、寢亂れたる形
(三)脱ぎすべらせ
(四)いくら御情がなくなりたりとて昔我に逢ひ給ひし事さへ御忘れなさるとは恨めし、よるべの水は神前に供へて神を其に留まらしむる神聖なる水、其に水草の生じたるは水の腐りたる也、かざしは葵也
(五)源の心
(六)其方に逢ふといふ罪だけはまだ犯したき心持がする
(七)此中將の君だけは
❽　五月雨の頃源氏夕霧と物語る
(八)夕霧
(九)「色かへぬ花橘に時鳥千代をならせる聲きこゆなり」

(一)無暗に打解けて仕舞ひはせず、其間に品をつけて甘くあしらひたりし紫のやり方は人には分らざりし

(二)通り一遍に明石上を源が訪問する事はあれども、泊る樣の事は丸で無くなつたらしい

(三)「に」は衍文なるべし

㊆ 更衣の節、賀茂祭の日

(四)花散里

(五)「すゝみ」は「すさみ」の誤にて、今日丈は深き嘆も和らぎはせぬかとの意なるべしといふ

(六)賀茂祭

(七)女中どもは見物にも出られずして退屈なるべし

互に心ばせを見知るどちにて、後やすき方にはうち頼むべく、思ひかはし給ひながら、またさりとて一向(一)にはた打解けず、故ありてもてなし給へりし心掟を、人はさしも見知らざりきかし、など思し出づ。せめてさうぐ\しき時は、かやうに(二)唯大方に、うちほのめき給ふ折々もあり。昔の御有樣(三)には、名殘なくなりにたるべし。

(四)夏の御方より、御更衣の御装束奉り給ふとて、

花散 夏衣たちかへてける今日ばかり深きおもひもすゝみ(五)やはせぬ

御かへし、

源 羽衣のうすきにかはる今日よりはうつせみの世ぞいとゞ悲しき

(六)祭の日いと徒然にて、源「今日は物見るとて、人々心地よげならむかし」とて、御社の有樣など思しやる 源「(七)女房など如何にさうぐ\しからむ。里に忍びて出でて見よかし」など宣ふ。中將の君の東面に轉寢したるを、歩みおはして見給へれば、

にはあらず、幼き程よりおほしたてし有樣、諸共に老いぬる末の世に、打捨てられて、(一)我が身も人の身も思ひつゞけらるゝ悲しさの堪へ難きになむ。すべて物の哀も、故ある事も、をかしき筋も、(二)廣う思ひめぐらす方々添ふことの、淺からずなるになむありける」など、夜更くるまで、昔今の御物語に、(三)かくても明しつべき夜をと思しながら、かへり給ふを、女も物哀に思ふべし。(四)我が御心にも、怪しくもなりにけるかなと、思し知らる。(五)さても又例の御行に、夜中になりてぞ、晝の御座にいとかりそめに寄り臥し給ふ。つとめて御文奉り給ふに、

源　泣く〳〵も歸りにしかなかりの世はいづくもつひの常世ならぬに(六)

(七)昨夜の御有樣は恨めしげなりしかど、いとかく、あらぬ樣に思し耄れたる御氣色の心苦しさに、身の上はさしおかれて、涙ぐまれ給ふ。

明石上　かりがゐし苗代水の絶えしよりうつりしはなのかげをだに見ず(八)

(九)ふり難う由ある書きざまにも、なまめざましきものに思したりしを、末の世には、(一〇)

(一)紫の身の上
(二)色々思出の多き程悲は深きものと見える
(三)此儘此處に泊りてもよしと源が思ひながら
(四)源の心にも自分ながら前とは違つて來たわいと思ふ
(五)我方に歸りても又
(六)何處も假の世と思ふ故其方にも泊らずに歸りたり、かり—假、雁
(七)源が泊らず歸りしを明石上は恨めしく思ひし樣なりしかど
(八)紫上の逝去せられし以來は我方へ源が更に來られなくなられしといふ意なるべし
(九)明石上の手紙の書き樣を見るにつけても紫を思ひ出す也
(一〇)以下源の追懷、紫が初は明石上をけしからぬ女と思ひ居しに、晩年には互に人物を理解しあひて

（一）容易に決行せぬ位の方が一旦出家したらば飽迄道心堅固に一生を送る事にならんと
（二）何ぞ心を動かすことの如くならぬ事などありて出家する例多き様なるが其はよき事に非ず、一時の感情に激してなしたる出家は末の遂げ難きをいふ
（三）出家の期をのばして
（四）今上の皇子等
（五）明石姫君腹の皇子が皇太子に立つを見る迄は今の儘にて御出あることそ
（六）其程長く見合せては心深きも却て淺きに劣る
（七）藤壺
（八）「深草の野べの櫻し心あらば今年ばかりは墨染に咲け」
（九）源が特に藤壺を悲みし眞の原因をかくして語らず、別に理窟をつけて說明する也
（一〇）終焉の悲みも
（一一）深く哀を感ずるは何も特別の關係の有無にはよらぬ
（一二）年來連添ひたる妻に死別れて
（一三）夫婦の中故悲しきのみにあらず

て、なか〳〵なる事など侍るなるを、（一）思したつ程鈍きやうに侍らむや、遂に住みはてさせ給ふ方、深う侍らむと、思ひやられ侍りてこそ。古の例などを聞き侍るにつけても、（二）心に驚かれ、思ふより違ふふしありて、世を厭ふ序になるとか。それは猶わるき事とこそ。猶しばし（三）思しのどめさせ給ひて、（四）宮たちなどもおとなびさせ給ひ、まことに動きなかるべき御有樣に、見奉りなさせ給はむまでは、亂れなく侍らむこそ、（五）心安くも嬉しくも侍るべけれ」など、いとおとなびて聞えたる氣色、いとめやすし。源（六）「さまで思ひのどめむ心深さこそ、淺きに劣りぬべけれ」など宣ひて、昔より物を思ふことなど語り出で給ふ中に、源（七）「故后の宮のかくれ給へりし春なむ、花の色を見ても、誠に（八）心あらばと覺えし。（九）それは、大方の世につけて、をかしかりし御有樣を、幼くより見奉りしみて、（一〇）さるとぢめの悲しさも、人より殊におぼえしなり。（一一）自らとりわく志にしも、物の哀はよらぬわざなり。（一二）年經ぬる人に後れて、心をさめむかたなく忘れがたきも、（一三）唯かゝる中の悲しさのみ

(一)我と我が機嫌のとり惱きに苦しむ
(二)女の愛に溺るゝは
(三)執念の殘らぬ樣にと
(四)須磨退居の時分など
(五)身を棄つるも別段差支なき樣に思ひたりしに
(六)晩年に
(七)臨終近き身で却て
(八)家を失ひたる悲ばかりにかけては言はねど
(九)他人から見ては出家しても少しも惜げなき人でも
(一〇)源は
(一一)淺々しく輕く出家すると却て出家後に批難を受くべき輕忽なる擧動などもあるもので出家せぬ方がよい位のものなるを

らでこそ、故よしをもてなし給へりしかと、思し較べらるゝにも、面影に戀しう悲しさのみ増れば、いかにして慰むべき心ぞと、いとくらべ苦し。(一)此方にてはのどやかに昔物語などし給ふ。「(二)人をあはれと心留めむは、いとわろかるべき事と、古より思ひ得て、すべて如何なる方にも、この世に執(三)とまるべき事なくと、心づかひをせしに、大方の世につけて、(四)身の徒にはふれぬべかりし頃ほひなど、とざまかうざまに思ひめぐらしゝに、命をも自ら捨つべく、野山の末にはふらか(五)さむに、殊なる障あるまじうなむ思ひなりしを、末(六)の世に、今(七)はのかぎりの程近き身にてしも、あるまじき絆多うかゝづらひて、今まで過してけるが、心弱うもどかしきこと」など、さして一筋の悲しさにのみは宣はねど、思したるさまの理に心苦しきを、いとほしう見奉りて(八)、明石上(九)大方の人目に何ばかり惜しけなき人だに、心のうちのほだし、自ら多う侍るなるを、(一〇)ましていかでかは心安くも思し捨てむ。さやうにあさへたる(一一)事は、かへりて輕々しき、もどかしさなども立ち出で

(一)
世に見えぬ花のさまなれ。房の大さなどよ。(二)品高うなどはおきてざりける花にやあらむ、花やかに賑はゝしき方は、いと面白きものになむありける。植ゑし人なき春とも知らず顔にて、常よりも匂ひかさねたるこそ哀に侍れ」と宣ふ。御答に、

女三「谷には春も(三)」と何心もなく聞え給ふを、(四)ことしもこそあれ、心憂くもと思さるゝにつけては、(五)その事のさらでもありなむかしと、思ふに違ふふしなくてもやみにしかな、といはけなかりし程よりの御有樣を、いで何事ぞやありしと思し出づるには、まづ(六)其のをりかの折、かど〳〵しうらう〳〵じう、匂多かりし心ざま、もてなし、言の葉のみ、思ひ續けられ給ふに、例の涙のもろさは、ふとこぼれ出でぬるもいと苦し。

夕暮の霞たど〳〵しう、をかしき程なれば、やがて明石の御方に渡り給へり。久しうさしものぞき給はぬに、覺なき折なれば、(七)打驚かるれど、樣ようけはひ心憎くもてつけて、猶こそ(八)人には優りたれと、(九)見給ふにつけては、(一〇)又かうざまにはあ

(一)珍しき花の形
(二)山吹は品格よく咲かんとは思はぬ花と見える
(三)「光なき谷には春も餘所なれば咲きてとく散る物思もなし」
(四)源の心、いふべき事もあらうにいやな事をいふと
(五)紫は源が斯樣な事は無かれかしと思ふ事は必ず無く、少しも源の心に違ふ事なくて末まで通したる事哉と
(六)紫の幼時以來の有樣を追懷するに
㊅　源氏明石上を訪ふ
(七)明石上が
(八)明石上が
(九)源が
(一〇)紫は又明石上とは面目を異にして

(一)源の
(二)平絹の直衣
(三)紫が居ぬからとて彼の人が心にかけて世話したる此邸を荒らす事か

㊄ 源氏、女三宮を訪ふ

(四)女三宮
(五)匂宮
(六)薫と
(七)前に匂が花のめぐりに几帳を立てんといひしを受けて子どもの頑是なさを言へる也
(八)女三宮
(九)女三の出家はどれ程深く思込みてした譯でもなかりしかど
(一〇)佛道修行の一方に凝り固まりて世間を忘れたるを源が羨しく思ふ
(一一)淺はかなる
(一二)佛前の花
(一三)佛前の花のうつくしく見ゆれば也
(一四)元の紫の住居

自ら(一)の御直衣も、色は世の常なれど、殊更にやつして、無紋(二)を奉れり。御しつらひなども、いと疎にことそぎて、淋しく物心細げにしめやかなれば、

源　今(三)はとてあらしやはてむなき人の心とゞめし春のかきねを

人やりならず悲しう思さる。

いと徒然なれば、入道(四)の宮の御方に渡り給ふに、若宮(五)も人に抱かれておはしまして、こなたの若君(六)と走り遊び、花惜み(七)給ふ心ばへども深からず、いといはけなし。宮(八)は、佛の御前にて經をぞ讀み給ひける。何(九)ばかり深う思しとれる御道心にもおらざりしかど、この世に怨めしく御心亂るゝ事もおはせず、のどやかなるまゝに、紛れなく行ひ給ひて、一つ方(一〇)に思ひはなれ給へるも、いと羨まし。かくあさへ(一一)給へる女の御志にだにおくれぬる事、とくち惜しう思さる。閼伽(一二)の花の夕映していと面白く見ゆれば、源「春に心寄せたりし人なくて、花の色もすさまじくのみ見なさるゝを、佛(一三)の御飾にてこそ見るべかりけれ」と宣ひて、源「對(一四)の前の山吹こそ、猶



て、八重咲く花櫻さかり過ぎて、樺櫻はひらけ、藤は後れて色づきなどこそはすめるを、その(一)遲く疾き花の心を能くわきて、いろ〳〵を盡し植ゑおき給ひしかば、時(二)を忘れず匂ひ滿ちたるに、若宮匂(三)「まろが櫻は咲きにけり。いかで久しく散らさじ。木のめぐりに几帳を立てて帷子をあげずば風もえ吹き寄らじ」と、かし(四)こう思ひ得たりと思ひて宣ふ顏のいと美しきにも、うち笑まれ給ひぬ。源(五)「掩ふばかりの袖もとめけむ人よりは、いとかしこう思し寄り給へりかし」など、この宮ばかりをぞもてあそびに見奉り給ふ。源(六)「君に馴れ聞えむことも殘少しや。命とい(七)ふもの、今しばしかゝづらふべくとも、對面はえあらじかし」とて、例の涙ぐみ給へれば、いとものしと思して、匂(八)「はゝの宣ひし事を、まが〳〵しう宣ふ」とて、伏目になりて、御衣の袖を引きまさぐりなどしつゝ紛(九)らはしおはす。隅(一〇)の間の勾欄におしかゝりて、御前の庭をも、御簾の内をも、見渡して眺め給ふ。女房なども、かの御形(一一)見の色かへぬもあり。例(一二)の色あひなるも、綾など花やかにはあらず。

(一)紫が花の遲速をよく辨別して
(二)各種の花が其時々を知りて
(三)紫の遺言の櫻をいふなるべし、但其は二條院にある筈、こゝは六條院なり、作者が忘れて混同したる歟
(四)甘く考へたと思ひて
(五)「大空に掩ふばかりの袖もがな春散る花を風にまかせじ」
(六)匂宮にいふ詞、其方と一所に此世に居るも今しばらくの中
(七)命は今暫くつゞくとしても逢ふことは出來まい、出家の心あればかくいふ也
(八)紫のいつた通の事を仰しやる緣起でもないと
(九)涙を
(一〇)源が
(一一)喪服をまだ着かへぬもあり
(一二)常の衣にかへたるも

(一)どこへも無沙汰して
四 源氏匂宮を寵愛す、六條院の寂しき春
(二)明石中宮は內裏へ歸りて
(三)匂宮を源氏の慰に六條院に置きたり
(四)紫の遺言なればとて
(五)匂が世話をやき
(六)源が
(七)未だ盛ならぬも
(八)源が
(九)以下六條院の有樣
(一〇)紫上の住居
(一一)花故に心の暇なきではなく胸の悶に心の落つかぬ也
(一二)源が

て、(一)何方にも覺束なきさまにて過し給ふ。(二)后の宮は、內裏に參らせ給ひて、(三)三の宮をぞ、さうぐ〵しき御なぐさめには、おはしまさせ給ひける。(四)匂「はゝの宣ひしかば」とて、對の御前の紅梅、取りわきて(五)後見ありき給へるを、いと哀と(六)見奉り給ふ。二月になれば、花の木どもの盛になるも、(七)まだしきも、梢をかしう霞み渡れるに、かの御かたみの紅梅に、鶯のはなやかに鳴き出でたれば、(八)立ち出でて御覽ず。

源 植ゑて見し花のあるじもなき宿に知らずがほにもきゐる鶯

とうち嘯きありかせ給ふ。

(九)春深くなりゆくまゝに、(一〇)御前の有樣いにしへに變らぬを、めで給ふ方にはあらねど、(一一)靜心なく、何事につけても胸いたう思さるれば、大方の世の外のやうに、鳥の音も聞えざらむ山の末ゆかしうのみ、(一二)いとゞなり增り給ふ。山吹などの、心地よげに咲き亂れたるも、うちつけに露けくのみ見なされ給ふ。外の花は一重散り

ものをと、思し出づるにつけて、かの御形見(一)のすぢをぞ哀と思したる。(二)心ばせ容貌などもめやすくて、(三)うなゐ松に覺えたるけはひ、たゞならましよりは、らうらうじと思ほす。疎き人には更に見え給はず。(四)上達部なども、睦まじき、(五)又御兄弟の宮達など、常に參り給へれど、(六)對面し給ふ事をさ〳〵なし。(七)人に向はむ程ばかりは、さかしく思ひしづめ、心をさめむと思ふとも、月頃は耄けにたらむ身の有樣、頑しき僻事まじりて、末の世の人にもて惱まれむ、後の名さへうたてあるべし。(八)思ひほれてなむ人にも見えざゝなると言はれむも、同じ事なれど、猶音に聞きて思ひやることのかたはなるよりも、見苦しき事の目に見るは、こよなく際勝りてをこなり、と思せば、(九)大將の君などにだに、御簾隔ててぞ對面し給ひける。かく、(一〇)心がはりし給へるやうに、人の言ひ傳ふべきころほひをだに思ひのどめてこそはと、念じ過し給ひつゝ、憂き世をもえ背きやり給はず。(一一)御方々に稀にもうちほのめき給ふにつけては、先づいとせき難き涙の雨のみ降り增れば、いと理なく

(一)紫の形見としてふびんにする
(二)中將の性質容貌
(三)此句意義未詳、舊説には馬の鬣の如くに築き立てたる塚の上に生ひたる松をうなゐ松といふ故に塚の松を見て亡き人を偲ぶの意味なりといふ
(四)源が面會せず
(五)源の
(六)源が
(七)以下源の心、人に對する間丈は氣を引きしめて居る積でも、此頃の愚痴さ加減では必ず應對の間に愚にもつかぬ事を仕でかすべく、此爲後々までも彼是言はるゝは嫌なり
(八)愚痴になりて人にも逢はぬと言はるゝも
(九)夕霧
(一〇)愁傷に轉倒したりと噂されさうな當座だけでも過して出家せんと我慢して過しつゝ
(一一)婦人達の方へたまに顏を出せば

(一)死期近くなりてかゝる悲しき紫の死を見たるによりて我が運命も自分の心の腑甲斐なさも見極めがつきて
(二)紫の生前にも勝りて親しくする誰彼に別るゝ時は又一層怨みに心を取亂すならん
(三)涙を
(四)左樣に源に捨てらるゝ悲を銘々言ひ出したくはあれど
㊂ 源氏の籠居
(五)かくし妾なりし侍女達を
(六)幼少より源に仕へしを源が窃に手をつけしものと見える
(七)中將が
(八)源に近しくもせざりしを
(九)色戀の沙汰ではなく
(一〇)紫が取分け此中將を愛して目をかけしにと

ひて知らぬ顔にながらふれば、かく今は(一)の夕近き末に、いみじき事のとぢめを見つるに、宿世の程も自らの心のきはも、殘なく見はてて心安きに、今なむ露のほだしなくなりにたるを、これかれ(二)斯くて、ありしよりけに目ならす人々の、今はとて行き別れむ程こそ、今一際の心亂れぬべけれ。いとはかなしかし。わろかりける心の程かな」とて、御目おし拭ひかくし給ふに、紛れずやがてこぼるゝ御涙を、見奉る人々、ましてせきとめむ(三)方なし。さて(四)打捨てられ奉りなむがうれはしさを、各うち出でまほしけれど、然もえ聞えず、むせかへりて歇みぬ。かくのみ歎き明し給へる曙、眺め暮し給へる夕暮などの、しめやかなる折々は、かのおしなべてには思したらざりし人々を、御前近くて、かやうの御物語などし給ふ。(五)中將の君とて侍ふは、まだ(六)小くより見給ひ馴れしを、いと忍びつゝ見給ひ過さずやありけむ。(七)いと傍痛きことに思ひて、(八)狎れも聞えざりけるを、かく亡せ給ひて後は、(九)その方にはあらず、(一〇)人より殊にらうたきものに、心留め思したりし

（一）出家して此世から消えてなくなりたしとは思ひながら心外にも今だに本意を遂げずに居る、ゆき―行き、雪、ふる―降る經る
（二）佛前の勤をする
（三）二人とも源のかくし妾たりし侍女
（四）源の心、自分迄が此女どもを棄てゝ出家せば
（五）一通りに思つて居てさへ
（六）現世の果報からいへば
（七）人よりも非常に運の惡き事故と思ふ事絶えず
（八）我は此世のはかなきを知れと佛にわざとかゝる目に合せられたるなるべし

折の心地するに、御傍の寂しきも、いふ方なく悲し。

源うき世（一）にはゆき消えなむと思ひつゝおもひの外になほぞほどふる

例の紛らはしには、御手水召して行ひ給ふ（二）。埋みたる火起し出でて、御火桶まゐらす。中納言（三）の君、中將の君など、御前近くて御物語きこゆ。源「獨寢常よりも寂しかりつる夜の樣かな。斯くてもいと能く思ひすましつべかりける世を、はかなくも拘づらひけるかな」とうち眺め給ふ。（四）我さへうち捨ててば、この人々のいとど歎きわびむ事の、哀にいとほしかるべき、など見渡し給ふ。忍びやかにうち行ひつゝ、經など讀み給へる御聲を、（五）よろしう思はむ事にてだに、涙とまるまじきを、まして袖の柵せきあへぬまで、あはれに旦暮見奉る人々の心地、つきせず思ひ聞ゆ。源「（六）この世につけては、飽かず思ふべき事をさ〳〵有るまじう、高き身には生れながら、又人（七）よりも異に、口惜しき契にもありけるかなと、思ふこと絶えず。（八）世のはかなく憂きを知らすべく、佛などの掟て給へる身なるべし。それを強

（一）紫に
（二）紫の性質は
（三）紫は人の心の底をも見抜いては居ながら怨み通す樣の事はせざりしかど
（四）一事件毎にいつも一應は此末どうなる事かと思ひて多少なりとも心配したるらしきを思ひて後悔に堪へぬ
（五）女中等
（六）少しづつ其時々の紫の樣子を話し出すもあり
（七）女三の與入の當時
（八）紫が
（九）源が
（一〇）其時の紫の樣子
（一一）紫が
（一二）強ひて作らしたる
（一三）たとへ夢の中にても再び逢ふ事はいつ出來るか分らぬと
（一四）上にいへる雪の曉の時

つけても、さやうなる心を（一）見え奉りけむ、（二）何事にもらうらうじうおはせし御心ばへなりしかば、（三）人の深き心もいとよう見知り給ひながら、怨じはて給ふことはなかりしかど、（四）一わたりづつは、如何ならむとすらむと思したりしに、少しにても心を亂り給ひけむことの、いとほしう悔しう覺え給ふ樣、胸よりも餘る心地し給ふ。その折のことの心をも知り、今も近う仕う奉る（五）人々は、（六）ほのぼの聞え出づるもあり。（七）入道の宮の渡り始め給へりし程、その折はしも、色には更に（八）出し給はざりしかど、事に觸れつゝ、味氣なのわざやと、思ひ給へりし氣色の哀なりし中にも、雪降りたりし曉に（九）立ち休らひて、我が身も冷え入るやうに覺えて、空の氣色はげしかりしに、（一〇）いとなつかしうおいらかなるものから、袖のいたう泣き濡らし給へりけるを、（一一）ひき隱して、（一二）せめて紛らはし給へりし程の用意などを、夜もすがら、（一三）夢にてもまたは如何ならむ世にかと思し續けらる。曙にしも、曹司におるゝ女房なるべし、「いみじうも積りにける雪かな」といふを聞きつけ給へる、唯（一四）その

(一)螢の
(二)螢こそ花を見はやすべき人と見えたり
● 源氏往事を悔恨す。
(三)年來紫に仕へたるは
(四)源が丸で他の婦人達の處へ行かず始終此方に居らるゝを見るが心ゆかしで
(五)心底から寵愛するといふ程ではなけれど時々は源が手をかけたる女中達も
(六)他の女中同樣に取扱ひて
(七)多くの女中達を
(八)遠ざけて
(九)道心
(一〇)どうせ末までは遂げぬ朧月夜や女三などの中の事につきて紫が源を恨む樣子の折々ありしを源が思ひ出すと
(一一)源の心

紅梅の下に歩み出で給へる御樣の(一)いとなつかしきにぞ、(二)これより外に見はやすべき人なくやと見え給へる。花はほのかに開けさしつゝ、をかしき程の匂なり。御遊もなく、例に變りたること多かり。

女房なども、年頃(三)經にけるは、墨染の色こまやかにて著つゝ、悲しさも改めがたく、思ひさますべき世なく戀ひ聞ゆるに、(四)絶えて御方々にも渡り給はず、まぎれなく見奉るを慰にて、馴れ仕うまつる。年頃、(五)まめやかに御心留めてなどはあらざりしかど、時々は見放たぬやうに思したりつる人々も、なかなか、かゝる淋しき御獨寢になりては、いと(六)おほぞうにもてなし給ひて、夜の御宿直などにも、これかれと數多を(七)、御座のあたり(八)引きさけつゝ侍はせ給ふ。徒然なる儘に、いにしへの物語などし給ふ折々もあり。名殘なき御聖心(九)の深くなり行くにつけても、(一〇)然しもあり果つまじかりける事につけつゝ、中頃物怨めしう思したる氣色の、時々見え給ひしなどを思し出づるに、(一一)などて戯にても、又まめやかに心苦しきことに

幻（まぼろし）

梗概

❶ 螢兵部卿宮、源氏を訪ふ。❷ 源氏往事を悔恨す。❸ 源氏の籠居。❹ 源氏、匂宮を寵愛す。六條院の寂しき春。❺ 源氏、女三宮を訪ふ。❻ 源氏、明石上を訪ふ。❼ 更衣の節。賀茂祭の日。❽ 五月雨の頃、源氏、夕霧と語る。❾ 六月頃、蓮を見る。❿ 七月七日 ⓫ 十月、十一月。⓬ 歳暮に出家の用意。佛名。

春の光を見（一）給ふにつけても、いとゞ昏れ惑ひたる樣にのみ、御心ひとつは、悲しさの改まるべくもあらぬに、外には例のやうに人々參り（二）給ひなどすれど、御心地惱ましき樣にもてなしたまひて、御簾の内にのみおはします。兵部卿の宮わたり給ふにぞ、たゞ（四）打解けたる方にて對面し給はむとて、御消息（三）きこえ給ふ。

源　我がやどは（五）花もてはやす人もなしなにゝか春のたづね來つらむ

宮、うち涙ぐみ給ひて、

螢（六）香をとめて來つるかひなく大方の花のたよりと言ひやなすべき

❶ 螢兵部卿宮源氏を訪ふ

（一）源が。此詞にて新年になりしことを知らせたり

（二）年賀に

（三）螢

（四）儀式ばらずくつろぎて

（五）春を愛せし紫が亡くなりたれば也

（六）紫のなき跡をなつかしみて來れる我なるを、只一通りの花の便を告ぐる使と我を思ひ給ふな

(一)今日出家せんか明日にせんかとのみ
(二)月日の
(三)明石姫君

る、(一)今日やとのみ、我身も心づかひせられ給ふをり多かるを、はかなくて(二)積りにけるも、夢の心地のみす。(三)中宮なども、おぼし忘るゝ時の間なく、戀ひきこえ給ふ。

今なむ理知られ侍りぬる。

とありけるを、物(一)おぼえぬ御心にも、うちかへし、措きがたく見給ふ。いふかひあり、をかしからむ方の慰には、この宮ばかりこそおはしけれ、と聊物紛るゝ(二)樣に思し續くるにも、涙のこぼるゝを、袖のいとまなく、え(三)かきやり給はず。

源　のぼりにし雲井ながらもかへり見よわれあきはてぬつねならぬ世に

おし包(四)み給ひても、とばかりうち眺めておはす。(五)すくよかにも思されず、我ながら、殊の外にほれぼれしく思し知らるゝ事多かる(六)紛らはしに、女方(七)にぞおはします。佛の御前に人繁からずもてなして、のどやかに行ひ給ふ。千年をも諸共(八)にと思しゝかど、限ある別ぞいと口惜しきわざなりける。今は蓮(九)の露も他事に紛るまじく、後の世をと、ひたみちに思し立つ事たゆみなし。されど人聞を憚り給ふなむ、あぢきなかりける。御わざ(一〇)のことども、はかばかしく宣ひ掟つる事なかりければ、大將(一一)の君なむ、とりもちて仕う奉り給ひけ

(一)悲に分別を失へる源の心にも
(二)源の心
(三)涙をかき拂ひ盡さず
(四)亡き紫も空から見てくれ我は此の無常の世がいやになりたり、「のぼりにし雲井」は秋好の后位に居れる意を兼ねたる歟
(五)返事の文を
(六)源が氣を丈夫に持つ事も出來ず
(七)女の居る方にのみ居る
(八)紫と共に經んと
(九)後世を願ふ心專になりて
(一〇)紫の法會に關する準備
(一一)夕霧專ら擔當して

べき大臣の御心様なれば、めやすき程にと、源「度々のなほざりならぬ御訪ひの重りぬる事」と悦び聞え給ふ。

「薄墨」(一)と宣ひしよりは、今すこしこまやかにて奉れり。(二)世の中に幸ありめでたき人も、あいなう大方の世にそねまれ、善きにつけても心の限驕りて、(三)人のため苦しき人もあるを、(四)怪しきまで漫なる人にもうけられ、はかなくし出で給ふ事も、何事につけても、世に譽められ心にくゝ、折ふしにつけつゝ、らう〱じく、有り難かりし人(五)の御心ばへなりかし。さしもあるまじき(六)大凡の人さへ、その頃は、風の音蟲の聲につけつゝ、涙落さぬはなし。ましてほのかにも見奉りし人の、(七)思ひ慰むべき世なし。年頃睦まじく仕うまつり馴れたる人々、しばしも(八)殘れる命、怨めしき事を歎きつゝ、尼になり、この世の外の山住などに思ひ立つもありけり。冷泉院の(九)后の宮よりも、あはれなる(一〇)御消息絶えず、盡せぬ事ども聞え給ひて、

秋好(一一)枯れはつる野邊を憂しとやなき人のあきにこゝろをとゞめざりけむ

(一)葵上逝去の時の源の歌「限あれば薄墨衣淺けれど涙ぞ袖を淵となしける」葵の時よりも今少し濃く喪服を染めて源が著て居る
(二)以下紫の性格をいふ
(三)他人の迷惑になる人もなきに
(四)紫は不思議な位其程にもなき人に迄贔屓され
(五)紫の
(六)無關係の人まで
(七)紫を失ひたる悲を
(八)紫に死後れたる命
(九)秋好
(一〇)源へ
(一一)紫が秋を好かざりしは凋落を厭ひての事なりし事が今分りたり

(一)心任せに出家も出來ぬ嘆
(二)頭中
(三)何ぞの折にははづさずに慶弔を折目正しくする心掛の人にて
(四)源を慰問す
(五)葵上
(六)同じ八月なりし也
(七)頭中が
(八)葵上を
(九)柏木の弟
(一〇)紫の喪にあひて葵上の事迄思ひ出されて一層の悲を增す
(一一)源が
(一二)葵上死去の時の事
(一三)昔の事も今の悲もごたまぜになりて只歎きにのみ沈む我には秋といふものがつらく思はる
(一四)思ふ通りに悲みを返事に書きたらば
(一五)源のさてもいくぢ無き事よと注目して見るべき頭中の性格故其樣な批難を受けぬ樣にと源が注意して

留らむ名を思しつゝむになむ、身(一)を心に任せぬ歎をさへうち添へ給ひける。

致仕の大臣、(二)哀をも折過し給はぬ御心にて、(三)かく世に類なく物し給ふ人のはかなく亡せ給ひぬることを、口惜しく哀に思して、いとしば〳〵訪ひ聞え給ふ。(四)昔大將の御母上(五)うせ給へりしもこの頃(六)の事ぞかし、と思し出づるに、(七)いと物悲しく、その折かの御身を惜み聞え給へりし人の、多くもうせ給ひにけるかな、後れ先だつ程なき世なりけりや、(八)など、しめやかなる夕暮に眺め給ふ。空の氣色もたゞならねば、御子の藏人の少將(九)して奉り給ふ。哀なることなど細やかに聞え給ひて、端に

頭中(一〇)いにしへの秋さへ今のこゝちして濡れにし袖に露ぞおきそふ

折からに、萬の古事思し出でられて、(一一)何となくその秋の事(一二)戀しうかき集め、こほるゝ涙を拂ひもあへ給はぬ紛に、御かへし、

源(一三)露けさはむかし今ともおもほえず大かた秋のよこそつらけれ

物(一四)のみ悲しき御心のまゝならば、待ちとり給ひては、心弱くもと、(一五)目留め給ひつ

㈥源氏の哀傷、頭中將の慰問、秋好中宮の慰問、源氏出家の望切なり
(一)源が
(二)我身の過去より今迄の有様を
(三)以下源の心、容貌のすぐれたるを第一として萬事が
(四)幼少にして母に死別れたるを始として、佛が此世を厭へと殊更に我を導くかと思はるゝ身の上を堪へ忍びて
(五)紫との死別の悲
(六)專ら佛道を修行せんに
(七)氣の締め樣もなき此悲しさでは
(八)氣がかりなる意歟
(九)紫に對する悲をよい加減に忘れさせて下されと
(一〇)きまりの弔禮のみに止まらず
(一一)源の心では最早何事も此世に心のひかさるゝ事もなく氣懸りなる事もなくて早速出家もしたけれど
(一二)愚痴になつたと思はれたくなし
(一三)妻の死位の事で心弱く出家したりと

さるものにて、法華經など誦ぜさせ給ふ。かたぐ\いとあはれなり。(一)臥しても起きても涙の干る間なく、霧りふたがりて明し暮し給ふ。(二)いにしへより御身の有様思しつゞくるに、(三)鏡に見ゆる影をはじめて、人には異なりける身ながら、(四)いはけなき程より、悲しく常なき世を思ひ知るべく、佛などのすゝめ給ひける身を、心づよく過して、(五)遂に來し方行く先も例あらじと覺ゆる悲しさを見つるかな、今はこの世に後めたき事殘らずなりぬ、(六)ひたみちに行におもむきなむに、さはり所あるまじきを、(七)いとかくをさめむ方なき心惑にては、願はむ道にも入りがたくや、と(八)やゝましきを、(九)この思少し斜に忘れさせ給へと、阿彌陀佛を念じ奉り給ふ。所々の御訪、内裏をはじめ奉りて、(一〇)例の作法ばかりにはあらず、いと繁く聞え給ふ。(一一)思しめしたる心の程には、さらに何事も目にも耳にもとゞまらず、心にかゝり給ふ事あるまじけれど、(一二)人にほけ〳〵しき樣に見えじ、今更に我世の末に、かたくなしく(一三)心弱きまどひにて、世の中をなむ背きにけると、流れ

(一)源が
(二)紫に死後れたりとて餘命は幾許もなき事故
(三)出家の望
(四)紫の死を悲みての出家と思はれては餘り氣が弱しと誹らるゝ恐ある故
(五)夕霧
(六)源の側近く
(七)源の
(八)夕霧が
(九)野分の夕紫を隙見せし事もありしにと
(一〇)紫の終焉の時
(一一)繰る
(一二)ごまかし
(一三)野分の夕に見し紫の俤のみ戀しきに終焉の時の俤はいよ〳〵身にしみて忘れ難し
(一四)「夢ぞ」と歌よりつゞく

にさしあがりて、野邊の露も隠れたる隈なくて、世の中思し(一)つゞくるに、いとゞ厭はしくいみじければ、後る(二)とても幾世かは經べき、かゝる悲しさの紛に、昔よりの御本意(三)も遂げまほしくおもほせど、(四)心よわき後のそしりを思せば、この程を過さむとし給ふに、胸のせきあぐるぞ堪へがたかりける。(五)大將の君も、御忌に籠り給ひて、あからさまにも罷出給はず、旦暮近く(六)侍ひて、心苦しくいみじき(七)御氣色を、理に悲しく見奉り給ひて、萬に慰め聞え給ふ。風野分だちて吹く夕暮に、昔の事思し出でて、ほのかに見奉りしものをと、戀しく覺え給ふに、又限(一〇)の程の夢の心地(八)せしなど、人知れず(九)思ひつゞけ給ふに、堪へがたく悲しければ、人目にはさしも見えじとつゝみて、夕霧「阿彌陀佛々々々々」とひき(一一)給ふ數珠の數に紛らはしてぞ、涙の玉は(一二)もてけち給ひける。

夕霧(一三)　いにしへの秋の夕のこひしきにいまはと見えしあけぐれの夢

ぞ名(一四)殘さへ憂かりける。やむごとなき僧ども侍はせ給ひて、定まりたる念佛をば



(一)葬送の用意をする
(二)身にしみ〴〵と悲を感じた事はなかりしに、今度こそは過去にも將來にも悲しさ類なき心地す

㊄ 葵上の葬送、源氏の愁嘆

(三)葬送す
(四)屍骸を見つゝ暮す事も出來ぬ、「うつせみは骸を見つゝも慰めつ深草の山烟だに立て」
(五)會葬者などが
(六)火葬に附せられて烟となりて立昇りたるも
(七)源の樣子
(八)扶けられて葬送の供に立ちしを
(九)あれ程貴き御身でありながらと
(一〇)供人等が
(一一)葵上
(一二)源が
(一三)あの時はまだ人心地がありしものと見えて
(一四)葬送の日は

れず思さるゝ御心地をあながちにしづめ給ひて、限の(一)御事どもし給ふ。いにしへも、悲しと思す事も數多見給ひし御身なれど、いと(二)斯うおり立ちてはまだ知り給はざりけることを、すべて來しかた行く末類なき心地し給ふ。やがてその日、とかく納め(三)奉る。限ありける事なれば、(四)骸を見つゝもえ過し給ふまじかりけるぞ、心憂き世の中なりける。遙々と廣き野の、所もなく立ち込(五)みて、限なく嚴しき作法なれど、いとはかなき烟にて、程なく(六)のぼり給ひぬるも、例の事なれどあへなくいみじ。(七)空を歩む心地して、(八)人にかゝりてぞおはしましけるを、見奉る人も、(九)然ばかりいつかしき御身をと、物の心知らぬ下種さへ泣かぬはなかりけり。御送の女房は、まして夢路に惑ふ心地して、車よりまろび落ちぬべきをぞ、(一〇)もてあつかひける。昔大將の君の御母君(一一)失せ給へりし時の曉を(一二)思ひ出づるにも、(一三)かれは猶物のおぼえけるにや、月の顏の明かに覺えしを、今宵はたゞ昏れ惑ひ給へり。十四日に失せ給ひて、(一四)これは十五日の曉なりけり。日はいと花やか

へば、ほの〴〵と明け行く光も覺束なければ、大殿油近くかゝげて見奉り給ふに、(一)飽かず美しげに、めでたう淸らに見ゆる御顏のあたらしさに、この君のかく覗き(二)給ふを見る〳〵、あながちに隱さむの御心も思されぬなめり。源「かく何事もまだ變らぬ氣色ながら、(三)限の樣はしるかりけるこそ」とて、御袖を顏におしあて給へる程、大將の君も涙にくれて、目も見え給はぬを、强ひてしぼりあけて見奉るに、なか〳〵飽かず悲しきこと類無きに、誠に心惑もしぬべし。(四)御髮の唯うちやられ給へる程、こちたく淸らにて、露ばかり亂れたる氣色もなう、艶々と美しげなる樣ぞ限なき。燈のいと明きに、御色はいと白く光るやうにて、とかくうち紛らはす事ありし現の御もてなしよりも、いふかひなき樣に、何心なくて臥し給へる御有樣の、飽かぬ所なしと言はむも更なりや。(五)斜にだにあらず、類なきを見奉るに、(六)死に入る魂の、やがてこの御骸にとまらむと思ほゆるも、理なき事なりや。仕うまつり馴れたる女房などの、(七)物おぼゆるも無ければ、院ぞ、(八)何事も思しわか

(一)源が紫の死顏を
(二)夕霧の覗くは承知して居ながら
(三)いよ〳〵死んだ事は明白なるが悲し
(四)紫の髮がつくろはずにある處が
(五)大體の美しさでなく
(六)夕霧が見とれてやがて死んで仕舞ひさうに思はるゝ自分の魂が其儘紫の死體に留りさうに思はるゝも
(七)人心地のある者なければ
(八)源が悲歎にくれた心をしひて落附けて

(一)人に心配させんとて斯く長い間氣絶させておく事もあれば、紫上も其類かも知れませぬ
(二)御本望の出家を遂げさする事は
(三)只一晝夜の間五戒を保ちても其功德はあるものなれど
(四)若し直に死んでしまはれたものならば後で尼にした處が別段功德にもならず只目前の悲を増すばかりの事なるが如何致したものか
(五)誰彼と呼び集めて
(六)夕霧が取計らふ
(七)以下夕霧の心
(八)素に戀はしかけざりしも
(九)野分の時位にても見る事が出來よう
(一〇)夕霧が
(一一)源に口をきく拍子に

御心亂らむとて(一)かゝることも侍めるを、然もやおはしますらむ。さらば、とてもかくても御本意の事は(二)、よろしき事に侍るなり。一日一夜にても(三)、忌む事のしるしこそは、空しからず侍るなれど、誠にいふかひなくなり果てさせ給ひて(四)、後の御髪ばかりをやつさせ給ひても、殊なるかの世の御光ともならせ給はざらむものから、目の前の悲のみ勝るやうにて、如何侍るべからむ」と申し給ひて、御忌に籠り侍ふべき志ありてまかでぬ僧、その人かの人など召して(五)、然るべき事ども、(六)この君ぞ行ひ給ふ。年頃(七)何やかやと、おほけなき心は(八)なかりしかど、如何ならむ世に、ありしばかりも(九)見奉らむ、ほのかにも御聲をだに聞かぬことなど、心にも離れず思ひ渡りつるものを、聲は遂に聞かせ給はずなりぬるにこそはあゝめれ、空しき御骸にても、今一度見奉らむの志叶ふべき折は、只今より外にいかでかあらむ、と思ふに、つゝみもあへず泣かれて(一〇)、女房の、ある限騷ぎ惑ふを、夕霧「あなかま、しばし」としづめ顏にて、御几帳のかたびらを、物宜ふ紛に(一一)引きあけて見給

させ給へど、かひもなく、明けはつる程に消え果て給ひぬ。宮も、(一)帰り給はでかくて見奉り給へるを、限なく思す。誰も〳〵、理の別にて(二)類あることとも思されず、珍らかにいみじく、明けぐれの夢に惑ひ給ふほど、(三)更なりや。さかしき人お(四)はせざりけり。侍ふ女房なども、ある限、更に物覚えたるなし。院はまして思し鎮めむ方なければ、大將(五)の君近く參り給へるを、御几帳のもとに呼び寄せ奉り給ひて、源「かく今(六)は限の樣なめるを、年頃(七)の本意ありて思ひつる事、斯る際に、その思ひ違へ(八)て止みなむがいといとほしきを、御加持に侍ふ大德たち、讀經の僧なども、皆聲(九)やめて出でぬなめるを、さりとも、立ち留りてものすべきもあらむ。この世には空しき(一〇)心地するを、佛の御しるし、今はかの暗き(一一)道のとぶらひにだに頼み申すべきを、頭おろす(一二)べきよし物し給へ。さるべき僧誰か留りたる」など宣ふ御氣色、心強く思しなすべかめれど、御顏の色もあらぬ樣にいみじく、堪へかね、御涙のとまらぬを、理に悲しく見奉り給ふ。夕霧「御物怪(一三)などの、これも人の

(一)明石姫君も我方に歸らずして紫の死目に逢ひたるを非常に喜び悲む
(二)常然の道理にて誰にもある事の樣には思はれず
(三)夜明際の夢の如き心持にて途方にくれる樣子言ふまでもなし
(四)分別のある人は一人もなし
(五)夕霧
(六)紫が
(七)出家の事
(八)本意を遂げさせずに仕舞ふは可愛想故
(九)祈禱をやめて去つた樣なるが
(一〇)佛の利益も
(一一)冥途の
(一二)尼にする用意をし給へ
(一三)非常にかはりて

(一)其方に死におくれたくはなし
(二)露の如きはかなき此世を唯草の事とのみ思ひて我身の其に似たるを思はぬものはなし
(三)紫が
(四)自分の御部屋に御歸りなされ
(五)いくら大病の中とはいひながら失禮千萬
(六)臨終と思はるゝ故
(七)僧に祈禱をたのむ使
(八)先々も此樣になりては又生き返るになれて

きを、

源 やゝもせば消えをあらそふ露の世に後れ(一)さきだつ程へずもがな

とて、御涙を拂ひあへ給はず。宮、

明石姫(二)秋風にしばしとまらぬつゆの世をたれか草葉のうへとのみ見む

と聞えかはし給ふ、御容貌どもあらまほしく、見るかひあるにつけても、かくて千年を過すわざもがなと思さるれど、心にかなはぬ事なれば、かけとめむ方なきぞ悲しかりける。(三)紫「今は渡らせ(四)給ひね。みだり心地いと苦しくなり侍りぬ。(五)言ふかひなくなりにける程といひながら、いと無禮げに侍りや」とて、御几帳引寄せて臥し給へる様の、常よりもいと頼もしげなく見え給へば、如何に思さるゝにかとて、宮は御手をとらへ奉りて、泣く〳〵見奉り給ふに、誠に消えゆく露の心地して、限(六)に見え給へば、御誦經(七)の使ども、數も知らず立ち騷ぎたり。(八)前々もかくて生き出で給ふ折にならひ給ひて、御物怪と疑ひ給ひて、夜一夜さま〳〵の事を盡

たはらいたけれど、げに見奉らぬもかひなしとて、(一)こなたに御しつらひを殊にせさせ給ふ。(二)こよなう痩せ細り給へれど、斯くてこそ、あてになまめかしき事の限なさも勝りて、めでたかりけれと、來し方あまり匂多く、(三)あざ／＼とおはせし盛は、なか／＼この世の花の薫にもよそへられ給ひしを、(四)限もなくらうたげにをかしげなる御樣にて、いと假初に世を思ひ給へる氣色、似るものなく心苦しく、すずろに物がなし。風凄く吹き出でたる夕暮に、前栽見給ふとて、(五)脇息に倚り居給へるを、院渡り給ひて、見奉り給ひて、源「今日はいとよく起き居給ふめるは、(六)この御前にては、こよなく御心も晴々しげなめりかし」と聞え給ふ。(七)かばかりの隙あるをもいと嬉しと思ひ聞え給へる御氣色を見給ふも心苦しく、(八)つひに如何に思しさわがむと思ふに、哀なれば、

紫 (九)おくと見るほどぞはかなきともすれば風にみだるゝ萩のうは露

(一〇)げにぞ折れかへり、とまるべうもあらぬ花の露もよそへられたる、折さへ忍び難

(一)紫方にて間を別にして明石姫君を置く
(二)紫の容態
(三)水際立ちて美しかりし女盛の時分は
(四)今は
(五)紫が
(六)明石姫君の側では
(七)此位な一寸した快さでも源が非常に喜ぶを見て紫が氣の毒になりて
(八)死にたらばどの位の御歎きならんと
(九)少しの風にも亂るゝ露の如き我身なればおく(置く、起く)と見るも暫時の事なるべし
(一〇)萩が風にゆられて上の露はとまりさうにもなきが紫の身の上に思ひ比べられて

をこそ勝りて思ひ聞ゆれ。おはせずば心地むづかしかりなむ」とて、目おし摩りて紛はしたまへる様、をかしければ、ほゝ笑みながら涙はおちぬ。紫「大人になり給ひなば、(一)こゝに住み給ひて、この對の前なる、紅梅と櫻とは、花の折々に心留めてもてあそび給へ。然るべからむ折は、佛にも奉り給へ」と聞え給へば、うちうなづきて、(二)御顔をまもりて、(三)涙の落つべかめれば、立ちておはしぬ。とりわきておほしたて奉り給へれば、この宮と姫宮とをぞ、見さし聞え給はむこと、(四)口惜しく哀におぼされける。

秋待ちつけて、世の中すこし涼しくなりては、御心地も聊(五)さわやぐやうなれど、(六)猶ともすればかごとがまし。さるは(七)身にしむばかり思さるべき秋風ならねど、露けき折がちにて過し給ふ。中宮は(八)參り給ひなむとするを、今しばしは御覽ぜよとも、聞えまほしう(九)思せども、(一〇)さかしきやうにもあり、(一一)内裏の御使の隙なきも煩しければ、さも聞え給はぬに、(一二)あなたにもえ渡り給はねば、(一三)宮ぞ渡り給ひける。(一四)か

(一)此二條院に
(二)匂が紫の顔を見つめて
(三)匂が
(四)匂と女一宮とは紫が特に手にかけて育てたる故二人の生先を見ぬ事を殘念がりて
㊃紫上逝去
(五)快き樣なれど
(六)動もすれば少しの事が病氣に障る
(七)それ程冷き風ではなけれど
(八)内裏へ
(九)紫が
(一〇)其樣に言うては出過ぎたる樣にもあり
(一一)參內催促の使
(一二)紫が中宮の方へ行く譯にもゆかぬ故
(一三)明石姫君が紫方へ
(一四)中宮たる人を呼び附くるは

れど、さかしげに、亡からむ後など宣ひ出づる事もなし。唯なべての世の常なき有様を、おほどかに(一)言少なる物から、淺はかにはあらず宣ひなしたるけはひなどぞ、言に出でたらむよりも哀に、物心細御氣色はしるう見えける。宮達を見奉り給うても、紫「(二)各の御行末をゆかしく思ひ聞えけるこそ、斯くはかなかりける身を惜む心の交りけるにや」とて、涙ぐみ給へる御顏の匂、いみじうをかしげなり。(三)など斯うのみ思したらむと思すに、中宮うち泣き給ひぬ。(四)ゆゝしげになどは聞えなし給はず、物の序などにぞ、紫「(五)年頃仕うまつり馴れたる人々の、特なるよるべ無ういとほしげなる、この人かの人、(六)侍らずなりなむ後に、御心とゞめて、尋ね思ほせ」などばかり聞え給ひける。(七)御讀經などによりてぞ、例のわが(八)御方に渡り給ふ。(九)三の宮は、あまたの御中に、いとをかしげにて步き給ふを、(一〇)御心地のひまには、前にすゑ奉り給ひて、人の聞かぬ間に、紫「(一一)まろが侍らざらむに、思し出でなむや」と聞え給へば、匂「いと戀しかりなむ。(一二)まろは内裏の上よりも宮よりも、(一三)はゝ

(一)我が死後はどうかう抔と言ひ出さず
(二)皇子等
(三)なぜ斯樣に迄紫の氣が弱くなりたるならんと
(四)紫が事々しくは言はずして序の折々
(五)紫方に仕へたる人々の中で
(六)我が死後に
(七)中宮には季の御讀經とて四季に定まりて佛に讀經せしむる事あり、里に下り居る間にても行はるゝ也
(八)東の對の明石姫君の住居
(九)匂宮
(一〇)紫が氣分の快き時に我前に呼びて
(一一)我が死にたらば
(一二)今上よりも明石姫君よりも
(一三)「ばゝ」なるべし、但古來「はゝ」とよませて、紫を母と思ひ違へたる也と註せり

(一)紫がどうなるのかと
(二)心が眞暗になりて
(三)明石姫君が二條院へ下る
(四)明石姫君は二條院の東對に居る筈なれば、寢殿なる紫方でも待受の用意をする
(五)紫の孫分なる息子たちがまだ幼稚にして立太子即位などに間のあるをいふ
(六)宿直の武官の交代の時に名を名乘る事
(七)明石姫君と紫と
(八)源氏
(九)明石姫君の來たる爲に何時も離れぬ紫の側を離れて行くを鳥の巢を離るゝに譬ふ
(一〇)源自身の居間へ
(一一)其時紫の起き居たるを見て源が嬉しく思ふも
(一二)明石姫君にいふ詞別々の處に御出ては姫君の方から度々御出下さるも勿體なし、我が參上することも出來ぬ今の仕儀なれば
(一三)姫君が紫方に
(一四)紫上

げに所せく惱み給ふ事もなし。侍ふ人々も、(一)如何におはしまさむとするにかと思ひ寄るにも、まづかきくらし、(二)あたらしう悲しき御有樣と見奉る。斯くのみおはすれば、(三)中宮この院にまかでさせ給ふ。(四)東の對におはしますべければ、こなたにはた待ち聞え給ふ。儀式など、例に變らねど、(五)この世の有樣を見はてず成りぬるなどのみ思せば、萬につけて物哀なり。(六)名對面を聞き給ふにも、その人かの人など、耳とゞめて聞かれ給ふ。上達部など、いと多く仕う奉り給へり。久しき御對面のとだえを珍しく思して、(七)御物語こまやかに聞え給ふ。(八)院入り給ひて、源「今宵は(九)巣離れたる心地して、無德なりや。まかりて休み侍らむ」とて、(一〇)渡り給ひぬ。(一一)起き居給へるを、嬉しと思したるも、いとはかなき程の御慰なり。(一二)紫「方々におはしましては、彼方に渡らせ給はむも辱なし。參らむことはた理なくなりにて侍れば」とて、しばしは(一三)此方におはすれば、明石の御方も渡り給ひて、心深げにしづまりたる御物語ども聞えかはし給ふ。(一四)上は御心のうちに、思し廻らす事多か

はし給ふ方々は、誰も久しくとまるべき世にはあらざなれど、まづ我ひとり行方知らずなりなむを思しつゞくる、いみじう哀なり。

事果てて、おのがじし歸り給ひなむとするも、遠き別めきて惜しまる。花散里の御方に、

紫(一)絶えぬべきみのりながらぞ頼まるゝ世々にとむすぶ中のちぎりを

御かへり、

花散(二)結びおくちぎりは絶えじ大かたののこりすくなきみのりなりとも

やがてこのついでに、不斷の讀經懺法などたゆみなく、尊き事どもをせさせ給ふ。御修法は異なるしるしも見えで程經ぬれば、例の事になりて、(三)うちはへさるべき所々に寺々にてぞせさせ給ひける。

夏になりては、例の暑さにさへ、(四)いとゞ消え入り給ひぬべき折々多かり。(五)その事と、おどろ〳〵しからぬ御心地なれど、唯いと弱き樣になり給へれば、むづかし

(一)やがて死すべき我なれど今日佛に緣を結びたる效により生々世々君とめぐりあはんと思へば頼もし、みのり―御法、身

(二)竝一通りの御法なりとも結緣の爲には十分なるに、況や特別の御志にて行はれし今日の法會は來世における功德無量なるべし

(三)引續き

(三)明石姫君、紫上の病により二條院に下る

(四)紫が

(五)特別に何處が惡いといふ容態ではなけれど

行く朝ぼらけ、霞の間より見えたる花のいろ〳〵、猶春に（一）心とまりぬべく匂ひわたりて、百千鳥のさへづるも、笛の音に劣らぬ心地して、物の哀も面白さも殘らぬ程に、「陵王」（二）の舞ひて、急になる程の末つかたの樂、花やかに賑しく聞ゆるに、皆人のぬぎかけたる（三）物のいろ〳〵なども、物の折からにをかしうのみ見ゆ。親王達上達部の中にも、物の上手ども、手のこさず遊び給ふ。上下心地よげに、興ある氣色どもなるを見（四）給ふにも、殘少しと身を思したる御心のうちには、萬の事哀におぼえ給ふ。

きのふ例ならず起き居給へりし名殘にや、（五）いと苦うて臥し給へり。年頃かゝる物の折ごとに、參りつどひ遊び給ふ人々の、御容貌有樣の、おのがじしの才ども、琴笛の音をも、今日や見聞き給ふべきとぢめなるらむとのみ思さるれば、さしも目とまるまじき人の顏どもも、哀に見渡され給ふ。まして夏冬の時につけたる遊戯にも、（六）なま挑ましき下の心は、自ら立ちまじりもすらめど、さすがに情をか

（一）矢張紫上の好通り春の方が秋よりよく思はるる樣に
（二）「蘭陵王」なるべし、但舞の序破急の三段の中の急は「蘭陵王」にはなしといふ、よりて此陵王は「新蘭陵王」ならんかといふ説あり
（三）脫ぎて舞人等に與へたる衣
（四）紫が
（五）紫が
（六）花散里明石上などと內々競爭する點はありしにもせよ親みあひし中なるを思へば、誰も死ぬるものではあれど我一人先死行くを哀に思ふ



(一)明石上等も法會に參會せり
(二)紫が
(三)花散等の
(四)極樂淨土
(五)信心
(六)法華八講五日間の中の日に薪の行道といふ事あり、行基菩薩の「法華經をわが得し事は薪こり菜摘み水汲み仕へてぞ得し」といふ歌を謠ひつゝ人々揃ひて歩みめぐる
(七)謠ふ聲
(八)無事なる時でさへ身に染むものなるに
(九)匂宮、此時三歳
(一〇)死すること、釋迦佛の死を形容して如薪盡火滅といへるよりいふ
(一一)心細き樣な返歌をしたらば人に聞かれて氣がきかぬと思はれんかとてどちらつかずの返歌をしたり「わざにや」の下に「と」あるべし
(一二)法華經に、「奉事經於千歳」とある如く今日をはじめとして末永く法を願ひ給へと命の長からんことを祝したる也

御方、明石(一)なども渡り給へり。南東の戸をあけておはします(二)。寢殿の西の塗籠なりけり。北の廂に、方々(三)の御局どもは、障子ばかりを隔てつゝしたり。三月の十日なれば、花盛にて、空の景色などもうらゝかに物面白く、佛の(四)おはすなる處の有樣遠からず、思ひやられて、異なる(五)深き心もなき人さへ、罪を失ひつべし。(六)薪こるほどの讚歎の聲も、そこら集ひたる響、おどろ／＼しきを、うち休(八)みてしづまりたる程(七)だに、哀に思さるゝを、ましてこの頃となりて、何事につけても、心細くのみ思し知る。明石の御方に、三の宮(九)して聞え給へる。

紫　惜しからぬこの身ながらもかぎりとて(一〇)薪つきなむことのかなしさ

御かへり、(一一)心細きすぢは、後の聞も心おくれたるわざにや、そこはかと無くぞあンめる。

明石上　(一二)薪こるおもひはけふをはじめにてこの世にねがふのりぞはるけき

夜もすがら、尊きことに、うちあはせたる鼓の聲絶えず面白し。ほの／＼と明け

（一）此の如き障ありて出家の出來ぬは我身の罪の重きならんと
㊀二條院の法華八講、心細き紫上
（二）紫が
（三）紫が
（四）讀師、講師、咒願等の役僧
（五）紫が別に法事の事を源に話しもせざりし故
（六）源が
（七）女の差圖としては行屆きて
（八）源が感心して
（九）源が
（一〇）夕霧
（一一）布施物、供物
（一二）此法會の準備を
（一三）紫が
（一四）「いそのかみの」は唯世々を經たるを事々しく言はん爲の枕詞

我が御身をも、罪輕かるまじきにやと、後めたく思されけり。（一）年頃わたくしの御願にて、（二）書かせ奉り給ひける、法華經千部、急ぎて供養じ給ふ。（三）我が御殿とおぼす、二條院にてぞし給ひける。（四）七僧の法服などしなぐ＼賜はす。物の色縫目よりはじめて、淸らなる事かぎりなし。大方何事も、いと嚴しきわざどもをせられたり。（五）ことぐ＼しき樣にも聞え給はざりければ、委しき事どもも知（六）らせ給はざりけるに、（七）女の御掟にはいたり深く、佛の道にさへ通ひ給ひける御心の程を、（八）院はいと限なしと見奉り給ひて、大方の御しつらひ、何かの事ばかりをなむ、（九）營ませ給ひける。樂人舞人などのことは、（一〇）大將の君とりわきて仕う奉り給ふ。內裏、東宮、后の宮達をはじめ奉りて、御方々此處彼處に御誦經、（一一）捧物などばかりの事を、うちし給ふだに所せきに、ましてその頃（一二）この御いそぎを仕う奉らぬ所なければ、いとこちたき事どもあり。（一三）いつの程に、いと斯くいろ＼／＼思し設けけむ。實に（一四）いそのかみの世々を經たる御願にやとぞ見えたる。花散里と聞えし

めにと、(一)尊き事どもを多くせさせ給ひつゝ、いかで猶本意(二)ある樣になりて、暫時もかゝづらはむ命の程は、行をまぎれなくと、たゆみなく思し宣へど、更にゆるし聞え(三)給はず。さるは我が(四)御心にも、然思しそめたる筋なれば、かく懇に思ひ給へる序にもと催されて、同じ道にも入りなむと思せど、一度家を出で給ひなば、假にもこの世を顧むとは思しおきてず、後の世には、同じ蓮の座を分けむと、契りかはし聞え給ひて、賴をかけ給ふ御中(五)なれど、(六)こゝながらつとめ給はむ程は、同じ山なりとも峯(七)を隔てて、あひ見奉らぬ住處に、かけはなれなむ事をのみ思しまうけたるに、かくいと賴もしげなきさまに、(八)惱みあつい給へば、いと心苦しき御有樣を、今はと往き(九)離れむきざみには捨てがたく、なかなか山水の住處濁りぬべく、思し滯るほどに、唯うちあさへ(一〇)たる、思のまゝの道心起す人々には、こよなうおくれ給ひぬべかゝめり。(一一)御許なくて、心ひとつに思し立たむも、さまあしく本意なきやうなれば、この事によりてぞ、(一二)女君は怨めしく思ひ聞え給ひける。

(一)佛事供養など
(二)尼になりて
(三)生きて居る間は紛るる事なく一心に佛前の勤をしたしと絶えず願へども源が許さず
(四)源も出家は兼ての望なれば紫の懇望を機として一緒に出家せんかとも思へど
(五)紫との中
(六)生前出家し居る間は
(七)紫と
(八)紫に苦み給へば
(九)出家して彌々山に籠る際には紫の大病が氣にかゝりて山に籠りても道心が亂れさうなるを心配して躊躇する故
(一〇)淺べたるにて淺はかなるの意なるべしといふ
(一一)源が許さぬに自儘に出家するも
(一二)紫上が源を

● 紫上病篤し、出家を望めども許されず

(一)紫に死後るゝ事を源が非常に悲しく思ひ
(二)紫自身
(三)心をひかさるゝ子もなき事なれば強ひて生き延びたしとも思はねど
(四)源との契が絶えて源に歎をかける事ばかりが

御法

梗概

㊀ 紫上病篤し。出家を望めども許されず。㊁ 二條院の法華八講。心細き紫上。㊂ 明石姫君、紫上の病によりて二條院に下る。㊃ 紫上逝去。㊄ 紫上の葬送。源氏の愁嘆。㊅ 源氏の哀傷。頭中將の慰問。秋好中宮の慰問。源氏出家の望切なり。

紫の上いたう煩ひ給ひし御心地の後、いとあつしくなり給ひて、そこはかとなく悩み渡り給ふこと久しくなりぬ。いとおどろ〳〵しうはあらねど、年月重なれば、頼もしげなく、いとゞあえかになりまさり給へるを、院の思ほし歎く事かぎりなし。しばしにても(一)後れ聞え給はむことをば、いみじかるべく思し、(二)自らの御心地には、この世に飽かぬことなく、後めたき絆だにまじらぬ御身なれば、あながちにかけとゞめまほしき、御命とも(三)思されぬを、年頃の(四)御契かけはなれ、思ひ歎かせ奉らむ事のみぞ、人知れぬ御心のうちに、物哀に思されける。後の世のた

ほい君、中の君、四の君、五の君とおはす。内侍は三の君、六の君、次郎君、五郎君とぞおはしける。すべて十二人が中に、かたほなるなく、いとをかしげに、とりどりに生ひ出で給ひける。内侍腹の君達しもなむ、容貌をかしう、心ばせかど(一)ありて、皆優れたりける。三の君、二郎君は、(二)東の御殿にぞ、とりわきてかしづき奉り給ふ。(三)院も見馴れたまひて、いとらうたくし給ふ。(四)この御中らひのこと、言ひやる方なくとぞ。

(一)才ありて
(二)花散里
(三)源氏
(四)夕霧と雲井雁落葉との關係

(十九) 藤内侍文を贈りて雲井雁を慰む
(一)落葉の
(二)雲井雁
(三)藤内侍、惟光の娘
(四)藤内侍の心、雲井雁は常に我をけしからん奴と仰せらるゝに、今は又うか〳〵しては居られぬ
落葉といふ者が出來て氣の毒ぢやと思ひて
(五)私が人がましき身ならば落葉の事を聞いては自分の爲に歎くべき處なれど、私は數ならぬ身故寧ろ雲井雁の爲に同情す
(六)雲井雁が
(七)藤内侍も落葉の事を聞きて快くもあるまじと
(八)我は他人の不幸を見て氣の毒とは思ひても身にかへて歎かんと泣は思はざりしに、君が同情の忝き事よ
(九)思ふ通りを述べたるならんと藤内侍が感動して見る
(一〇)夕霧と雲井雁と隔り居し間
(一一)再び雲井雁を娶りて後は
(一二)藤内侍腹の子供
(一三)雲井雁腹

いとゞしく心よからぬ御氣色、(一)あくがれ惑ひ給ふ程、(二)大殿の君は、日頃經るまゝに、おぼし歎くこと繁し。(三)典侍かゝる事を聞くに、(四)われを世とともに、許さぬものに宣ふなるに、かく侮り憎きことも、出できにけるを、と思ひて、文などは時々奉れば、聞えたり。

藤内　(五)数ならば身にしられまし世のうさを人のためにも濡らす袖かな

なまけやけしとは見給へど、(六)物の哀なる程の徒然に、(七)彼もいとたゞには覺えじと思す片心ぞつきにける。

雲井人　(八)の世のうきを哀と見しかども身にかへむとは思はざりしを

とのみあるを、(九)思しけるまゝと哀に見る。

(一〇)この昔の御中絶の程には、この内侍のみこそ、人知れぬものに思ひとめ給へりしかど、(一一)ことあらためて後は、いとたまさかにつれなくなり勝り給ひつゝ、流石に(一二)君達は數多になりにけり。(一三)この御腹には、太郎君、三郎君、四郎君、六郎君、お

(一)貴方の方では馴染扱にはして下さらぬのか
(二)御返事をなさらねば餘り御心が若々しき樣也代筆で申上げるでもあるまいと
(三)落葉の心、母御息所存生ならば
(四)斯る場合を甘く扱ひて我爲にぼろをかくして下されたのにと
(五)私如き數ならぬ者を或は恨み或は哀まるゝは何事ぞ
(六)斯く他人扱にせられては便りなき心持
(七)奥へ通る事をも許されさうな

色なり。少將「參り馴れにたる心地して、初々しからぬに、(一)さも御覽じ許さずもやあらむ」などばかりぞかすめ給ふ。落葉「われは更にえ書くまじ」と宣へば、人々「(二)御志もうたて若々しきやうに。宣旨書はた聞えさすべきにやは」と、集りて聞えさすれば、まづ打泣きて、(三)故上おはせましかば、いかに心づきなしと思しながらも、(四)罪を隱い給はまし、と思ひ出で給ふに、涙の水莖にさきだつ心地して、書きやり給はず。

落葉「何ゆゑか世に數ならぬ身ひとつを憂しとも思ひかなしともきく

と(五)のみ思しけるまゝに、書きもとぢめ給はぬ樣にて、おし包みて出し給ひつ。少將は、人々と物語して、少將「時々侍ふに、(六)かゝる御簾の前は、たづきなき心地し侍るを、今よりはよすがある心地して、常に參るべし。(七)内外などもゆるされぬべき、年頃のしるしあらはれ侍る心地なむし侍る」など、氣色ばみおきて出でたまひぬ。

(一)雲井の言ふことをきくな
(二)雲井雁の如く物をよく分別する事の無きは
㊅　頭中將落葉宮に文を贈る
(三)頭中
(四)雲井雁の事を
(五)雲井雁を叱る詞、當分じつと見て居ないでなぜ歸つて來た
(六)夕霧にも分別はあるべきに
(七)言ひ出した上は馬鹿になつて不意に三條へ戻る樣な事はせぬがよい
(八)夕霧の
(九)落葉
(一〇)柏木の事につけては憐と思ひ夕霧の場合には恨めしく思ふ
(一一)頭中の子どもの中で

いと哀と見奉り給ひて、夕霧「母君(一)の御教にな叶ひ給ひそ。いと心憂く、思ひとる方なき心あるは、いと惡しきわざなり」と、言ひ知らせ奉り(二)給ふ。

(三)大臣かゝる事を聞き給ひて、人笑はれなるやうに思し(四)歎く。頭中「しばし(五)はさても見給はで、自らおもふ處、物せらるらむものを。女の斯くひききりなるも、かへりては輕く覺(六)ゆるわざなるを。よし斯く(七)言ひそめつとならば、何かはおれてふとしも歸り給ふ。おのづから人(八)の氣色心ばへは、見えなむ」と宣はせて、この(九)宮に藏人の少將の君を、御使にて奉り給ふ。

頭中　契あれや君を心にとゞめおきてあはれとおもひうらめしときく(一〇)

猶え思しはなたじ。

とある御文を、少將持ておはして、たゞ入りに入り給ふ。南面の簀子に圓座さし出でて、人々もの聞えにくし。宮はましてわびしと思す。この君は、(一一)中にいと容貌よく、めやすき樣にて、のどやかに見まはして、いにしへを思ひ出でたる氣

(一)子供
(二)歸れとも言はず
(三)中途半ばなる事故と、落葉は未だ全く手に入らず雲井雁は背き去りたれば也
(四)落葉方
(五)どの樣な奴が戀を面白いものと思ふならんと
(六)雲井雁へ言遣る詞、此樣に何時迄もして居ては若々しくて見苦しき故全く嫌なら嫌で其樣にせん
(七)三條邸に殘されたる子ども
(八)置いて來たのには置いて來た理由があるべしとは思へど、棄て置く譯にもゆかぬ故我が了簡で取計らひ置くべし
(九)雲井雁の心、夕霧がさつぱりと子ども迄落葉方へ連れて行つて仕舞ふかも知れぬと
(一〇)其方の連れて來た女の子をかへして呉れ
(一一)以來は顏を見に來るも極り惡き故
(一二)三條にも可愛い子どもがある故

はた直るべきにもあらぬを、何かはとて。怪しき人々(一)は、思し捨てずば嬉しうこそはあらめ」と聞え給へり。夕霧「なだらかの御答や。言ひもて行けば、誰が名か惜しき」とて、強ひて渡(二)り給へとも無くて、その夜は一人臥し給へり。怪しう中空(三)なる頃かなと思ひつゝ、君達を前に臥せ給ひて、彼處(四)に又いかに思し亂るらむ樣、思ひやり聞え、安からぬ心づくしなれば、(五)如何なる人かうやうなる事をかしう覺ゆらむなど、物懲しぬべう覺え給ふ。明けぬれば、夕霧(六)「人の見聞かむも若々しきを、限と宣ひはてば、さて試みむ。(七)かしこなる人々も、らうたげに戀ひ聞ゆめりしを、(八)選り殘し給へるやうあらむとは見ながらも、思ひ捨て難きを、ともかくもてなし侍りなむ」と、おどし聞え給へば、(九)すがすがしき御心にて、この君達をさへや、知らぬ所に率て渡し給はむと危し。夕霧「(一〇)姫君をいざ給へかし。見奉り(一一)に、かく參り來ることもはしたなければ、常にも參り來じ。彼處(一二)にも人々のらうたきを、同じ所にてだに、見奉らむ」と聞え給ふ。まだいとはけなく、をかしげにておはす。

(一)子供も一部分は殘り居る故
(二)雲井雁が連れて里へ行きたり
(三)殘り居し子供が夕霧を
(四)雲井雁
(五)夕霧が度々雲井雁へ手紙をやり迎の人をやれども
(六)雲井雁の仕方を不快に思へど、頭中の手前もあれば自分で雲井雁の處へ出かけたり
(七)いつも雲井雁の居る殿には
(八)人を以て雲井雁に言はしむる也、若々しい仕方哉、子供を此處彼處に打棄て置きて寢殿へ行つて女御杯ど一緒になつて遊んで居るとは
(九)我妻として不相應な氣立とは心得居たれど
(一〇)其方が可愛くて
(一一)子供がごた〳〵澤山居るから
(一二)批難し
(一三)夕霧に飽きられた此身故、今更御氣に入る樣に直す事も出來ず仕方がなくて里へ歸れる也

見じ、聞かじなど、僻々しき事どもし出で給ひつべきと、驚かれ給ひて、三條殿に渡り給へれば、(一)君達もかたへは留り給へれば、姫君たち、さてはいと幼きとをぞ(二)率ておはしにける。(三)見つけて悦び睦れ、あるは(四)上を戀ひ奉りて、憂へ泣き給ふを、心苦しと思す。(五)消息たび〳〵聞えて、迎に奉れ給へど、御返だになし。かく頑しう輕々しの世やと、(六)ものしう覺え給へど、大臣の見聞き給はむ所もあれば、暮らして自ら參り給へり。寢殿になむおはするとて、(七)例の渡り給ふ方は、御達のみさぶらふ。若君達ぞ、乳母に添ひておはしける。夕霧「(八)今更に若々しの御交らひや。かゝる人を、こゝかしこにおとしおき給ひて、など寢殿の御まじらひは、(九)ふさはしからぬ御心のすぢとは、年頃見知りたれど、然るべきにや、昔より(一〇)心に離れがたう思ひ聞えて、今は(一一)斯く〳〵しき人の數々哀なるを、互に見捨つべきにやはと、賴み聞えける。はかなき一節に、斯うはもてなし給ふべくや」と、いみじう(一二)あばめ恨み申し給へば、雲井「何事も(一三)今はと見飽き給ひにける身なれば、今

衣、青鈍などを著かへさせ、薄色のも、青朽葉などを、とかく紛らはして、御臺(一)はまゐる。女所(二)にて、しどけなく萬の事ならひたる宮のうちに、ありさま心留めて、僅なる下人をも言ひとゝのへ、(三)この人一人のみあつかひ行ふ。かく(四)覺えぬやむごとなき客人のおはすると聞きて、もと勤めざりける家司など、(五)うちつけに參りて、政所などいふ方にさぶらひて營みけり。

かく(六)せめて住み馴れ顏つくり給ふ程(七)、三條殿、かぎりなゝめりと、(八)さしもやはとこそかつは頼みつれ、實人の心かはるは名殘なくなむと聞きしは誠なりけり、と世を試みはつる心地して、如何樣にして、(九)このなめげさを見じと思しければ、大殿(一〇)へ、方違へむとて渡り給ひにけり。(一一)女御の御里におはする程などに、對面し給ひて、少し物思はるけ所(一二)におぼされて、例のやうにも急ぎ渡り給はず。大將殿も聞き給ひて、(一三)さればよ、いと急に(一四)物し給ふ本性なり、(一五)この大臣もはた、大人々々しうのどめたる所流石になく、(一六)いとひききりに花やい給へる人々にて、(一七)めざまし、

(一)食事を差上ぐ
(二)此處は女主人の邸故萬事不規律にしなれたるに
(三)大和守のみ
(四)不意の貴客即ち夕霧が來て居る由聞き附けて
(五)突然やつて來て
●雲井雁怒りて父の邸に歸る、夕霧迎へに行く
(六)夕霧が落葉方に
(七)雲井雁が彌〻是切りの縁ぢやと悲觀し
(八)まさか此樣でもあるまいと一方では氣樂に構へて居たるに、堅氣者が墮落すると丸で正體がなくなるものと聞きしは本道の事ぢやわいと
(九)夕霧の不埒な仕方をどうかして見たくなしと
(一〇)父の邸
(一一)弘徽殿女御が
(一二)雲井雁が癇癪の收まる樣に思はれて急には
(一三)夕霧の心三條へ歸らず
(一四)雲井雁は氣の短い女ぢや
(一五)頭中
(一六)一徹にて
(一七)夕霧の仕方が不埒なり、是切り逢ひも見もせじ抔と

（一）落葉のかぶり居る
（二）落葉の髪を夕霧が
（三）すまして居る時より
（四）柏木は格別よい男でもなかりしに、其さへ非常に己惚れて落葉は器量がよくないと何ぞの折には思ひ居りしを思へば
（五）落葉の心、況や夕霧程の男が今はまして衰へたる我を少しの間でも辛抱して見て居る筈がない
（六）落葉が
（七）自から我心を慰め力をつくる也
（八）朱雀や頭中將などに聞かれて申譯なきに
（九）落葉が塗籠より出てたる也
（一〇）黑色の
（一一）丁子染
（一二）沈香にて作れる二段の棚
（一三）未だ喪中故色のはでならぬを選びたる也
（一四）濃紫の衣

でたるけはひ漏り來たるに、埋もれたる御衣ひきやり、いとうたて亂れたる御髪（二）かき遣りなどして、ほの見奉り（一）給ふ。いとあてに女しう、なまめいたるけはひし給へり。男の御様は、（三）うるはしだち給へる時よりも、打解けて物し給ふは、限もなう清げなり。（四）故君の異なる事なかりしだに、心の限思ひあがり、御容貌まほにはおはせずと、事の折に思へりし氣色を思しいづれば、（五）ましてかういみじう衰へにたる有様を、しばしにても見忍びなむや、と思ふも、いみじう恥かし。（六）とざまかうざまに思ひ廻らしつゝ、（七）我が御心をこしらへ給ふ。唯かたはらいたう、（八）此處も彼處も、人の聞き思さむことの罪さらむ方なきに、折さへいと心憂ければ、慰め難きなりけり。御手水御粥など、（九）例の御座の方に參れり。（一〇）色異なる御しつらひも、忌々しきやうなれば、東面は屏風をたてて、母屋の際は（一一）香染の御几帳など、ことごとしき様に見えぬもの、（一二）沈の二階などやうのを立てて、心ばへありてしつらひたり。大和守のしわざなりけり。人々も（一三）鮮かならぬ色の、山吹、掻練、（一四）濃き



衣を(一)ひきくゝみて、たけきこととは音を泣き給ふ樣の、心深くいとほしければ、(二)いとうたて、如何なればいと斯う思すらむ、(三)いみじう思ふ人も、かばかりになりぬれば、自らゆるぶ氣色もあるを、岩木より勝に靡きがたきは、(四)契遠うて憎しなど思ふ樣あなるを然や思すらむと思ひよるに、餘りなれば心憂くて、(五)三條の君の思ひ給ふらむ事、いにしへも何心もなう、(六)あひ思ひかはしたりし世の事、年頃今はと(七)うらなき樣にうちたゆみ、解け給へる樣を思ひ出づるも、(八)我が心もて、いと味氣なう思ひ續けらるれば、あながちにも(九)こしらへ聞え給はず、歎きあかし給ひつ。斯うのみ(一〇)痴がましうて、出で入らむも怪しければ、今日は留りて、心のどかにおはす。(一一)斯くさへひたぶるなるを、あさましと宮は思いて、いよ〳〵疎き御氣色の勝るを、(一二)をこがましき御心かなと、かつはつらきものから哀なり。塗籠も、殊に(一三)細なる物多うもあらで、香の御唐櫃、御厨子などばかりあるは、此方彼方に(一四)かきよせて、氣近うしつらひてぞおはしける。內は闇き心地するに、朝日さし出

(一)肌を離れぬ樣に引締め居る也
(二)夕霧の心
(三)何程堅く構へる女でも此場になれば
(四)全く緣がないので男を憎く思ふといふ樣な事も世間にはあるが其類かも知れぬと
(五)雲井雁
(六)雲井雁と
(七)雲井雁と隔なく
(八)自らが落葉を戀したばかりで雲井雁との中がつまらぬ事になりしよと
(九)落葉を賺し宥めず
(一〇)いつも本意を遂げずに出たり入つたりするも異なもの故
(一一)泊り込んでまで居る一本氣な夕霧の仕方を
(一二)夕霧の感じ
(一三)手道具類
(一四)片附けて

のいとうたてあり。又かゝりとて、(一)かき絶え參らずば、人の御名いかゞはいとほしかるべき。(二)ひとへに物を思して、幼げなるこそいとほしけれ」など、(三)この人を責め給へば、實にと思ひ、見奉るも今は心苦しう、辱う覺ゆる(四)さまなれば、(五)人通はし給ふ塗籠の、北の口より(六)入れ奉りてけり。(七)いみじうあさましうつらしと、侍ふ人をも、げにかゝる世の人の心なれば、これより勝る目をも見せつべかりけりと、頼もしき人も無くなりはて給ひぬる御身を、返す〴〵悲しうおぼす。男は萬に(八)思し知るべき理を聞え知らせ、言の葉おほう、哀にもをかしうも聞え盡し給へど、つらく心づきなしとのみ思いたり。夕霧「いと斯う(九)言はむ方なき者に思されける身の程は、類なう恥かしければ、(一〇)あるまじき心の著きそめけむも、心地なく悔しうおぼえ侍れど、(一一)とり返すものならぬうちに、何のたけき御名にかはあらむ。(一二)いふかひなく思し弱れ。思ふにかなはぬ時、身をなぐる例も侍るなるを、(一三)唯かゝる志を、深き淵に思し準へ給ひて、捨てつる身と思しなせ」と聞え給ふ。(一四)單衣の御

(一)私がふつつり來なかつたらば又私に棄てられた事になりて御名譽の程も如何也
(二)一徹に考へて
(三)少將
(四)夕霧の
(五)内の者の出入口なる
(六)夕霧を
(七)落葉の心
(八)落葉が納得する樣な理屈を色々言ひきかせ
(九)不埒千萬な奴と君に思はれたる
(一〇)君を懸想する抔といふ不届な心を起したるも不心得な事と後悔すれど
(一一)今更取返す事もならぬといふ中にも、いくら心配してもどれ程御名が清くなるでもなし
(一二)仕方がないと御諦めなされ
(一三)私の切なる志を
(一四)落葉の樣、單衣は下に著る衣也

（一）恨みの有る丈並べる
（二）「過さむ」迄落葉の詞を取次ぐ也、少しでも落著いた時に夕霧が尚我を忘れずに居て下されたらば御返事も申すべし
（三）夕霧の落葉へ通ふ事を
（四）私は人とは違つて御逢になつても手簡になどする樣な御氣遣はないに
（五）いつもの處に御出なさるならば
（六）辛抱して
（七）喪中の取亂したる中
（八）外聞惡さの大方ならぬ私のつらさはつらさとして、人の氣も知らずに入浸らるゝ御心のつらさは數が知れぬ
（九）遠ざかつてのみ居る
（一〇）斯樣な風にばかりもして居られまい、是では人に自分をつまらぬ物に評判されても仕方がないと
（一一）此宮内での外聞をも思ふ故
（一二）内々は仰の通り手も出さずに當分御心を破るまじ、併此體裁では餘り勝手が違つて異なもの也

面し給はず。夕霧「戯れにくゝ珍らかなり」と（一）聞え盡し給ふ。人もいとほしと見奉る。侍女「（二）聊も人心地する折あらむに、忘れ給はずば、ともかうも聞えむ、この御服の程は、一筋に思ひ亂るゝこと無くてだに過さむ、となむ深く思し宣はするを、斯くいと生憎に、（三）知らぬ人なくなりぬめるを、猶いみじうつらきものに聞え給ふ」と聞ゆ。夕霧「（四）思ふ心は又異ざまに後安きものを、思はずなりける世かな」と打歎きて、夕霧「（五）例の樣にておはしまさば、物越などにても、思ふ事ばかり聞えて、御心破るべきにもあらず。（六）數多の年月をも過しつべくなむ」など、盡きもせず聞え給へど、落葉「猶かゝる亂に（七）添へて、理なき御心なむいみじうつらき。（八）人の聞き思はむことも萬に斜ならざりける、身の憂さをば然るものにて、殊更に心憂き御心がまへなり」と、又言ひかへし恨み給ひつゝ、（九）遙にのみもてなし給へり。（一〇）さりとて斯くのみやは、人の聞き漏さむことも理と、はしたなう、（一一）こゝの人目もおぼえ給へば、夕霧「（一二）内内の御心づかひは、この宣ふさまに叶ひても、しばしは情ばまむ。世づかぬ有樣

かりけるかな、と思ひ出で給ふ。(一)なよびたる御衣ども脱ぎ給うて、心殊なるをとりかさねて、(二)焚きしめ給ひ、めでたうつくろひ假粧じて出で給ふを、(三)火影に見出して、忍び難く涙の出で來れば、脫ぎ留め給へる單衣の袖をひき寄せて、

雲井「(四)なるゝ身をうらみむよりは松島のあまのころもにたちやかへまし

(五)猶現人にては、え過すまじかりけり」と、獨言に宣ふを、立ち止りて、夕霧「さも心憂き御心かな。

(六)松島のあまのぬれぎぬなれぬとてぬぎかへつてふ名をたゝめやは」

うち急ぎて、いと直々しや。

(七)彼處には猶さし籠り給へるを、人々、「斯くてのみやは。若々しうけしからぬ聞えも(八)侍りぬべきを、例の御有樣にて、(九)あるべき事をこそ聞え給はめ」など、萬に聞えければ、然もある事とは思しながら、(一〇)今より後の餘所の聞えをも、我が御心の過ぎにし方をも、心づきなく、怨めしかりける人のゆかりと思し知りて、その夜も對(一一)

(一)夕霧が落葉へ行く支度をする也
(二)香を
(三)雲井雁が
(四)古くさくなりて飽かるゝ我身をくよくよ思ふよりはいつそ尼になつたがましであらう、なるゝは著なれて古くなるの意
(五)俗體の此儘では居られぬ
(六)自分が古くなつて身につくとて其を厭ひて尼になつたと言はれては君にとつてもよくあるまじ
(七)急いでよみし返歌故一向つまらぬ歌ぢや
● 猶打解けざる落葉宮、夕霧終に塗籠に入る
(八)落葉は不相變塗籠に閉籠り居ると
(九)常の所に出て居て夕霧に斷るなら斷りなされたら宜しからん
(一〇)今後の外聞の惡きも從來の我歎きも皆夕霧の爲ぞと思ひ込みて
(一一)夕霧に

たてて、強うもの〳〵しき、人のけはひには見え給はねど、もし猶本意(一)ならぬことにて、尼になども思ひなり給ひなば、をこがましうもあんべいかな、と思ふに、暫(二)はとだえ置くまじう、あわたゞしき心地して、暮れ行くまゝに、今日も御返(三)だになきよと思して、心にかゝりて、いみじう眺をし給ふ。昨日今日(四)つゆも參らざりける物、聊參りなどしておはす。夕霧「昔より、御爲に志の疎ならざりし樣、大臣(五)のつらくもてなし給ひしに、世の中の痴がましき名をとりしかど、堪へ難きを念じて、(六)こゝかしこすゝみ氣色ばみしあたりを、數多聞き過しゝ有樣は、女だにさしもあらじとなむ、人ももどきし。今思ふにも、いかでか然ありけむと、我が心ながら、(七)いにしへだに重かりけりと思ひ知らるゝを、今はかく憎み給ふとも、思しすつまじき人々、いと所せきまで數添ふめれば、御心ひとつにもて離れ給ふ(八)べくもあらず。又よし見(九)給へや。命こそ定なき世なれ」とて、打泣き給ふ事もあり。女も昔の事を思ひ出で給ふに、哀にもありがたかりし御中の、さすがに契深

(一)夕霧に添ふが嫌さに
(二)當分は繁々通はねばならぬと
(三)夕霧より落葉へやりたる文の返事がなき也
(四)雲井雁が氣持悪くして食事もせざりし也
(五)頭中が我を
(六)方々から我妻にならんと進んで來りし女のありしを相手にならずに過し來りし我が辛抱は女でも出來ぬ藝ぢやと人から批難された
(七)身分輕き若い時分でさへ中々よく持重して居りし事よと思はるゝに
(八)棄てるにも棄てられぬ子どもが多き事故自分一人勝手に出て行く事も出來まじ
(九)長い目で見てくれ

(一)つまらなく連添ひ來りし事さへ悔しきものを
(二)此鬼はもつと勿體なげな處を附ければ安つぽくていけぬ
(三)おとなしく死んでお仕辨ひなされ
(四)見れば憎し云々と其方は言ふが、生きて居る以上は側には居ずとも遠くて噂を聞かぬ譯にはゆかぬ
(五)我に死ねといふは我と君と如何に契深きかといふ處を知らせる積か
(六)死なば諸共とは前々からの約束ではないか
(七)雲井雁の性質
(八)よい加減なだまし口上とは思ひながら
(九)機嫌が直りゆくを
(一〇)夕霧が
(一一)落葉の事を思へば氣が氣でなく
(一二)以下夕霧の心、落葉も我の強いどつしりした氣象の人とも見えねど

ねば、いづちも〳〵亡せなむとす。猶斯くだにな思し出でそ。(一)あいなく年頃を經けるだに、悔しきものを」とて、起きあがり給へる樣は、いみじう愛敬づきて、匂ひやかにうち赤み給へる顏、いとをかしげなり。夕霧「かく心幼げに腹立ちなし給へればにや、目馴れて、この鬼こそ今は怖ろしくもあらずなりにたれ。(二)神々しき氣を添へばや」と、戲に言ひなし給へば、雲井「何事言ふぞとよ。(三)おいらかに死に給ひね。まろも死なむ。見れば憎し。聞けば愛敬なし。見捨てて死なむは後めたし」と宣ふに、いとをかしき樣のみ勝れば、こまやかに笑ひて、夕霧(四)「近くてこそは見給はざらめ、餘所にはなどか聞き給はざらむ。(五)さても契深かゝなる瀨を知らせむの御心なゝなり。(六)俄にうち續くべかゝなる冥途のいそぎは、さこそは契り聞えしか」と、いとつれなく聞えて、何くれとこしらへ聞え慰め給へば、(七)いと若やかに心美しう、らうたき心はたおはする人なれば、(八)なほざり事と見給ひながら、(九)自らなごみつゝ物したまふを、(一〇)いと哀と思すものから、(一一)心は空にて、(一二)彼もいと我が心を

ちまもり給へるに、(一)いとめでたく淸らに、この頃こそねびまさり給へる御盛なン
めれ。さる樣のすきごとをし給ふとも、人の(二)もどくべき樣もし給はず、鬼神も罪
許しつべく、あざやかに物淸げに、若う盛に匂を散し給へり。(三)物思ひ知らぬ若人
の程にはたおはせず、かたほなる處なうねび整ほり給へる、(四)理ぞかし、(五)女にてな
どかめでざらむ、鏡を見てもなどか傲らざらむ、と我が御子ながらも思す。
日たけて(六)殿には渡り給へり。入り給ふより、若君たち(七)すぎ〳〵美しげにて、(八)まつ
はれ遊び給ふ。(九)女君は帳の內に臥し給へり。(一〇)入り給へれど目も見あはせ給はず。
つらきにこそはあンめれ、と見給ふも理なれど、(一一)憚り顔にももてなし給はず、(一二)御
(一三)衣をひき遣り給へれば、雲井「(一四)何處とておはしつるぞ。まろは早う死にき。(一五)常に鬼
と宣へば、同じくはなり果てなむとて」と宣ふ。夕霧「(一六)御心こそ鬼よりけにもおはす
れ、樣は憎げにもなければ、え疎み果つまじ」と、何心もなう言ひなし給ふも、心
惱しうて、雲井「(一七)めでたき樣になまめい給へらむあたりに、あり經べき身にもあら

(一)夕霧の容貌、以下源氏の心
(二)批難すべき
(三)丸で憂いつらいを知らぬ若者といふ年輩でもなく
(四)浮氣するも尤
(五)女が惚れるも尤
㊟雲井雁の嫉妬、夕霧又一條邸に行く
(六)頭中郎
(七)次々
(八)夕霧に
(九)雲井雁
(一〇)夕霧が帳の內に入れども雲井雁が見向きもせず
(一一)夕霧の心
(一二)ひけ目を見せず
(一三)雲井雁の
(一四)比處を何處ぢやと思うて來給ひしぞ
(一五)常に私の事を鬼とおつしやる故いつそ本の鬼にならんとて
(一六)心は鬼よりひどいが顏は可愛いから棄てきりにも出來ぬ
(一七)君の如き派手な色男の所には勤まりかねる私故、どこへか行つて仕舞ひませう

(一)花散御自身の事で考へて御覧なされ
(二)終に勝を取る
(三)がみ〳〵言ふ女も面倒なればとて共に憚りて男が憫む事もあれど、何時も其樣にしても居られぬ事故
(四)お互に氣まづくなる
(五)紫上
(六)花散里
(七)例に引出される故却つて我身の數ならぬのが目立つ樣な氣がする
(八)源が自分の女好を棚へあげて置いて、夕霧に少しでも浮氣らしい事があると大騷ぎして叱り
(九)又陰にも言はれるは
(一〇)利口ぶる人が自分の身の上の事が分らぬ樣な物
(一一)女の方
(一二)親父の説法を聞かされなくてもよく辛抱はして居るのに
(一三)夕霧が源の前に
(一四)落葉との關係
(一五)知つて居る顏をするでもなしと源が思ひて
(一六)夕霧の顏を

(一)有様どもにても、推し量らせ給へ。なだらかならむのみこそ、人は遂の(二)事には侍るめれ。さがなく(三)ことがましきも、暫しはなまむづかしう、煩しきやうには憚らるゝ事あれど、それにしも隨ひ果つまじきわざなれば、事の亂れ出で來ぬる後、(四)我も人も憎げに飽きたしや。(五)猶南の御殿の御心用こそ、樣々に有りがたう、さてはこの(六)御方の御心などこそは、めでたきものには見奉りはて侍りぬれ」など、ほめ聞え給へば、笑ひ給ひて、花散「物の例(七)に引きいで給ふ程に、身の人わろき覺こそあらはれぬべう。さてをかしき事は、(八)院の、自らの御癖をば人知らぬやうに、聊あだ〳〵しき御心づかひをば、大事と思いて、いましめ申し給ふ、(九)後言にも聞え給ふめるこそ、(一〇)さかしだつ人の、己が上知らぬやうに覺え侍れ」と宣へば、夕霧「然なむ、(一一)常にこの道をしもいましめ仰せらるゝ。(一二)さるはかしこき御敎ならでも、いとよくをさめて侍る心を」とて、實にをかしと思ひ給へり。

(一三)御前に參り給へれば、(一四)かの事は聞召したれど、(一五)何かは聞き顔にもと思いて、(一六)唯う

りの志も侍りしことにて、かく思ひ給へなりぬるを、様々いかに人あつかひ侍らむかし。さしもあるまじき事をも、怪しう人こそ物いひさがなきものにあれ」と、打笑ひつゝ、夕霧「(一)かの正身なむ、猶世に經じと深う思ひたちて、尼になりなむと思ひむすぼほれ給ふめれば、(二)なにかは。(三)此方彼方に聞き悩くも侍るべきを、(四)さやうに嫌疑はなれても、又かの遺言は違へじと思ひ給へて、唯かくいひ扱ひ侍るなり。(五)院のわたらせ給へらむにも、事のついで侍らば、(六)かう様にまねび聞えさせ給へ。(七)ありありて心づきなき心つかふと、思し宣はむを憚り侍りつれど、(八)實にかやうの筋にてこそ、人の諫をも、自らの心にも隨はぬ樣に侍りけれ」と、忍びやかに聞え給ふ。花散(九)「人の僞にやと思ひ侍りつるを、誠にさる様ある御氣色にこそは。(一〇)皆世の常のことなれど、(一一)三條の姫君の思さむ事こそいとほしけれ。(一二)のどやかにならひ給うて」と聞え給へば、夕霧「(一三)らうたげにも宣はせなす姫君かな。いと鬼々しう侍るさがなものを」とて、夕霧「(一四)などてかそれをも疎にはもてなし侍らむ。かしこけれど、御

(一)本人の落葉はもう夫は持たぬと深く思込みて
(二)どうして私の言ふ事を聞きますものか
(三)落葉を娶りては雲井雁と雙方の中が甘くも行くまじければ
(四)落葉が尼になりて人の疑のなき様になりても御息所の遺言は守らんと思ひて色々世話をやく也
(五)源が此處へ來られたらば
(六)此由に傳へて下されば
(七)今迄堅くして來て今更つまらぬ擧動をすると源が思はるゝを恐れたれど
(八)女の事につきてこそ
(九)あの噂は人の作り言ならんと思ひ居しに
(一〇)男の女狂は常の事なれど
(一一)雲井雁
(一二)雲井雁は今迄氣樂にして來た人なれば
(一三)姫君抔と仰しやれば如何にもやさしさうてあるが
(一四)雲井雁を粗末にする譯ではない

は、何のもてはなるゝ事かはと、のどかに思して、萬に思ひあかし給ふ。山鳥の(一)心地ぞし給ひける。辛うじて明方になりぬ。(二)斯くてのみ、こととい へば、直面なるべければ、出で給ふとて、夕霧「唯聊の隙をだに」と、いみじう聞え給へど、いとつれなし。

夕霧「恨みわびむねあきがたき冬の夜にまた鎖しまさる關(三)のいはかど

聞えむ方なき御心なりけり」と、泣く〳〵出で給ふ。

六條院にぞおはして、(四)やすらひ給ふ。東の上、花散「一條の宮わたし奉り給へる事と、かの大殿(五)わたりなどに聞ゆるは、いかなる御事にかは」と、いとおほどかに宣ふ。御簾に御几帳添へたれど、側よりほのかには猶見え(六)奉り給ふ。夕霧「さやうにも、猶人の言ひなしつべき事に侍り。故御息所は、(七)いと心強うあるまじき樣に、言ひ放ち給ひしかど、限のさまに、御心地の弱りけるに、又見(八)讓るべき人のなきや悲しかりけむ、亡からむ後の後見にとやうなることの侍りしかば、(九)もとよ

(一)山鳥は雌雄谷を隔てて棲むといへば也
(二)斯うばかりして居ては仕事といつては睨み合をして居るばかり故
(三)塗籠の戸をいふ
(西) 夕霧花散里と女を批評す
(四)夕霧が
(五)雲非雁の方で評判するは
(六)花散が夕霧に見える
(七)初は落葉を我に嫁する事を氣強く斷りたれど
(八)外に落葉を頼む所のないのが悲しかつたのであらうか、我死後は落葉を頼むと我に言はれしかば
(九)柏木に對する情誼もあれば引受けたるを

宣ひ續くれば、少將「いでや、たゞ今は、(一)又いたづら人に見なし奉るべきにやと、あわたゞしき亂り心地に、萬思ひ給へわかれず。あが君、(二)とかく押したちて、ひたぶるなる御心なつかはせ給ひそ」と手を摺る。(三)夕霧「いとまだ知らぬ世かな。(四)憎くめざましと、(五)人よりけに思し貶すらむ身こそいみじけれ。(六)いかで人にもことわらせむ」と、いはむ方なしと思して宣へば、流石にいとほしうもあり。少將「(七)まだ知らぬは、實に世づかぬ御心がまへのけ故にこそはと。(八)(九)理はげに、何方にかは寄る人侍らむとすらむ」と、少しうち笑ひぬ。かく心ごはけれど、(一〇)今はせかれ給ふべきならねば、やがて(一一)この人をひきたてて、推し量りに入り給ふ。宮はいと心憂く、情なくあはつけき(一二)人の心なりけりと、ねたくつらければ、(一三)若々しきやうには言ひ騒ぐともと思して、塗籠に(一四)御座ひとつ敷かせ給ひて、内より鎖して大殿籠りにけり。(一五)これも何時までにかは、かばかりに亂れ立ちにたる人の心どもは、いと悲しう口惜しうおぼす。男君は、めざましうつらしと思ひ聞え給へど、(一六)斯ばかりにて

(一)又落葉が亡くなられるのかと
(二)餘り踏込んだ事をして手籠になどなさるゝな
(三)あやまる貌
(四)此樣な目には遇うた事がない
(五)落葉に輕蔑されるのがつらい
(六)何方が無理か人にも聞いて貰ひたい
(七)之を「まだ知らぬ」杯と仰せらるゝは君がまだ世間を御存じなき故也
(八)此「と」は衍文なるべしといふ説あり、さもあるべし
(九)人に聞いて見たしと仰せらるれど、人が聞いたら何方に團扇を揚げるか知ら
(一〇)少將が氣強く反對すれど、今は抑留されて居るべき場合でないから
(一一)少將を連れて夕霧が落葉の方へ入り行く
(一二)夕霧の
(一三)假令若々しい仕方なりとて夕霧や女等がやかましく言ふとも儘よと
(一四)疊一帖
(一五)落葉の心、此樣な事をしても何時迄免れらるゝ事ぞ、女共迄皆是程に夕霧方になつて仕舞ひたれば と悲しく思ふ
(一六)もう斯うなつてはどうも免すものではない

人、「俄にあさましうなり給ひぬるかな。(一)いつの程にありし事ぞ」と驚きけり。(二)なよよかにをかしばめる事を、好ましからず思す人は、かくゆくりかなる事ぞ打ちまじり給うける。されど(三)年經りにける事を、音なく氣色も漏さで過し給ひけるなりとのみ思ひなして、(四)かく女の御心ゆるび給はぬと思ひ寄る人もなし。とてもかくても、(五)宮の御爲こそいとほしけれ。

(六)御まうけなど樣變りて、物のはじめ忌々しげなれど、物まゐらせなど皆靜まりぬるに、(七)わたり給ひて、少將の君をいみじう責め給ふ。少將「(八)御志まことに長う思されば、今日明日を過して聞えさせ給へ。なか〳〵(九)立ちかへりて、物思し沈みて、亡き人のやうにてなむ臥させ給ひぬる。こしらへ聞ゆるをも、つらしとのみ思されたれば、(一〇)何事も身の爲こそ侍れ。いと煩はしう聞えさせにくゝなむ」と聞ゆ。夕霧「いと怪しう、推量り聞えさせしには違ひて、いはけなく心得難き(一一)御心にこそありけれ」とて、(一二)思ひよれる樣、人の御爲も、我が爲も、世のもどきあるまじう

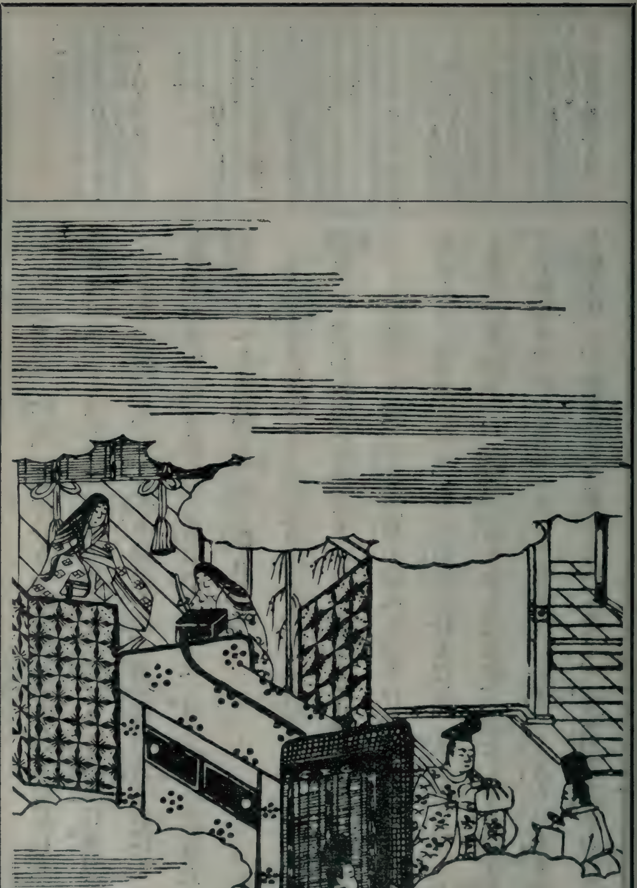
(一)夕霧が落葉の聟になつたとは何時からの事ぞ
(二)作者の評、夕霧の如き色めかしき事の嫌な人は斯く突飛な仕方をする事があるものぢや
(三)人々は夕霧と落葉との關係が古へよりの事なりしを今迄隱して居た事とのみ推量して
(四)落葉がまだ不承諾なることは誰も氣がつかず
(五)落葉が可愛想ぢや、これも作者の評
(六)忌中の事故婚禮の準備の品々なども常に變りて
(七)夕霧が落葉の方へ
(八)眞實氣長に御待ちなさるならば
(九)此處へ歸りたるにつけて落葉が悲を新にして
(一〇)落葉の機嫌を損ねては我身の爲も惡かるべければ御免を蒙りたし
(一一)落葉の
(一二)夕霧の思附き

(一)落葉が
(二)此處へ引移り來し時は母御息所が病氣の苦しい中から自分の世話をやいてくれし事を思ひ出すと
(三)車より
(四)守刀
(五)侍女の持ちて陪乘するなるべし
(六)かたみ―形見、筐、玉の箱は經箱
(七)經箱の說明、忌中は經箱と黑色の物を用ふる筈なれども、まだ黑き經箱は出來ず
(八)母御息所の持馴れた
(九)御息所は布施にやる積なりしを
(一〇)玉の箱を形見に見るは浦島の子の樣な心持
(一一)落葉が一條邸へ
(一二)前とは違つた景氣
(一三)落葉が
(一四)夕霧
(一五)永く居馴染んだ顏をして居る
(一六)雲井雁方では

箱、唐櫃、萬の物を、はかぐ〵しからぬ袋やうのものなれど、皆さきだてて運びたれば、一人とまり給ふべうもあらで、(一)泣く〳〵御車に乘り給ふものから、傍のみまもられ給ひて、(二)こち渡り給ひし時、御心地の苦しきにも、御髮かき撫でつくろひ、(三)おろし奉り給ひしを思し出づるに、目も霧りていみじ。(四)御佩刀にそへて、經箱を添へたるが、(五)御傍も離れねば、

落葉　(六)戀しさのなぐさめがたきかたみにて涙にくもる玉のはこかな

(七)黑きもまだしあへさせ給はず、(八)かの手ならし給へりし、螺鈿の箱なりけり。(九)誦經にせさせ給ひしを、形見に留め給へるなりけり。(一〇)浦島の子が心地なむ。(一一)おはしまし著きたれば、殿の內悲しげもなく、人氣多くて、(一二)あらぬ樣なり。御車よせて下り給ふを、更に故里とおもほえず、疎ましうたて思さるれば、頓にも(一三)下り給はず。いと怪しう若々しき御樣かなと、人々も見奉り煩ふ。(一四)殿は東の對の南面を、我が御方に假にしつらひて、(一五)住みつき顏におはす。(一六)三條殿には、人



るまじき事をも、御心どもに仕う奉りそめ給ひて」と、言ひつゞけて、左近、少將(一)を責む。集りて聞え(二)こしらふるに、いと理なく、鮮なる御衣ども、人々の奉りかへさするも、我にもあらず、猶いとひたぶるに削ぎ捨てまほしう思さるゝ御髪を、かき出で見給へば、六尺ばかりにて、少し細りたれど、人はかたはにも見(三)奉らず。(四)自らの御心には、いみじの衰や、人に見ゆべき有樣にもあらず、樣樣に心憂き身を、と思しつゞけて、また臥し給ひぬ。人々「(五)時違ひぬ。夜も更けぬべし」と、皆さわぐ。時雨いと心あわたゞしう吹きまがひ、萬に物悲しければ、

落葉(六)「のぼりにし峰の煙にたちまじり思はぬかたになびかずもがな

心ひとつには強く思せど、その頃は御鋏などやうのものは、皆とり隠して、人々のまもり聞えければ、(七)かくもて騒がざらむにだに、何の惜しげある身にてか、をこがましう若々しき樣にはひき忍ばむ、(八)人聞もうたて、おずましかゝべきわざを、と思せば、その(九)本意のごともし給はず。人々は皆急ぎ立ちて、おの〳〵、櫛、手

(一)二人とも落葉の侍女
(二)落葉に引越を勸むる故
(三)人が見ては醜くもない
(四)落葉自身では此髪を見て身の衰を感ずる也
(五)時間の豫定が狂った
(六)いつそ母の跡を追つて死んで仕舞つて、思はぬ夕霧に從ふ樣な事のない樣にしたし
(七)此樣に大騒ぎして顯番せずとも何も惜しげのある身ではなし、大層ぶりて若々しく忍んで尼になる杯の事はせぬのに、落葉の捨鉢なる心
(八)強ひて出家する杯は人に聞かれても餘り強々し過ぎる
(九)願通り出家もせず

(一)幕の類
(二)大和守の自宅にて調べさせる
㊃ 落葉宮一條邸に歸る、塗籠に籠りて夕霧を拒む
(三)夕霧が三條宮に行つて居て
(四)小野へ
(五)其仰には從ひかねます
(六)任國へ
(七)托すべき人なき故誠に恐れ多くてどうした物と思ひ居しに
(八)夕霧が
(九)男女關係の方から見れば夕霧に從ふは然るべき事でもなけれど
(一〇)古の人でも心ならず夫を持ちたる例も多し其點で強ち落葉が特に批難を受けもすまじ
(一一)其を兎や角思ふは幼稚な考なり
(一二)何程踏張ても女が獨身で立行く事は出來ぬ
(一三)深い思慮分別も男の力にすがりてこそ顯す事が出來る
(一四)一體女中達がよく申上げぬが惡い
(一五)一方ではせずともよき文の取次などを女中達の了簡でして置きながら

(一)壁代、御屛風、几帳、御座などまで思し寄りつゝ、大和守に宣ひて、(二)かの家にぞ急ぎつかうまつらせ給ふ。

その日は(三)我おはし居て、御車御前など(四)奉れ給ふ。宮は更に渡らじとおぼし宣ふを、人々いみじう聞え、大和守も、「(五)更に承らじ。心細く悲しき御有樣を見奉り歎き、この程の宮仕は、堪ふるに隨ひて仕うまつりぬ。今は、國の事も侍り、(六)罷り下りぬべし。宮の内の事も見給へ(七)讓るべき人も侍らず、いとたい〴〵しう、如何にと見給ふるを、(八)かく萬に思し營むを、實に(九)この方にとりて思ひ給ふるには、必ずしもおはしますまじき御有樣なれど、さこそは(一〇)古も、御心にかなはぬ例多く侍れ、一所やは世のもどきをも負はせ給ふべき。(一一)いと幼くおはしますことなり。(一二)たけう思すとも、女の御心ひとつに、我が御身を取り認め、顧み給ふべき樣かあらむ。猶人の崇めかしづき給へらむに助けられてこそ、(一三)深き御心のかしこき御掟も、それにかゝるべきものなれ。(一四)君達の聞え知らせ奉り給はぬなり。(一五)かつはさ

と度々聞え給ひけり。(一)この浮きたる御名をぞ聞しめしたるべき。(二)さやうの事の思はずなるにつけて倦じ給へると、言はれ給はむことを、思すなりけり。さりとて(三)又顯れて物し給はむもあは〳〵しう、心づきなき事と思しながら、(四)恥かしと思さむもいとほしきを、何かは(五)我さへ聞きあつかはむと思してなむ、この筋はかけても聞え給はざりける。

(六)大將も、(七)とかく言ひなしつるも、今はあいなし、(八)かの御心に許し給はむことは、難げなめり、(九)御息所の心知りなりけりと人には知らせむ、如何はせむ、(一〇)亡き人に少しあさき咎はおほせて、(一一)何時ありそめし事ぞともなく紛はしてむ、更がへりて懸想だち、涙を盡しかゝづらはむも、いと初々しかるべし、と思ひ給ひて、(一二)一條にわたり給ふべき日、その日ばかりと定めて、大和守召して、あるべき作法宣ふ。宮のうち掃ひしつらひ、(一三)さこそ言へども、女どちは草繁う住みなし給へりしを、磨きたる樣にしつらひなして、御心づかひなど、あるべきかぎりめでたう、

(一)以下朱雀が落葉の出家をとめる心持を説明す
(二)夕霧との中が面白からぬ故出家せりと言はれることを恐れての事也
(三)夕霧との中の面白からぬが知れて其儘にして居るのも
(四)落葉が
(五)自分迄が口を出すてもないと
(六)夕霧
(七)以下夕霧の心、今迄は落葉が心から靡く樣に色々と口說いたけれども埒があかぬ
(八)落葉の心に
(九)御息所が許して落葉に逢はせた事に人前を作るべし
(一〇)思慮の足らぬといふ批難を御息所に負はせて
(一一)落葉との中は
(一二)落葉を一條の本邸に移らしむべき日を何日と定めて
(一三)何と言うても女ばかりでは手が届かず

(一)頭中
(二)夕霧に其樣に世話して貰ふ譯はない、是も落葉が惡いのぢやと
(三)落葉
(四)法事の日は柏木の緣を思ひて頭中の子どもが立會ふ
(五)頭中よりも
(六)頭中の子ども等も各立派に布施物などを寄せたれば
(七)時めき居る人の法會にも劣らず
㊉朱雀院落葉宮の出家を止む、夕霧落葉宮を一條邸に歸らしめんとす
(八)落葉は小野の山莊に引込切りにする積なりしに
(九)幾度も夫を持つも褒めた事でもなけれど
(一〇)後楯をもたぬ女の身では尼になつて却て浮名を立て罪をつくる事もあるもので、さうなると今生も後生も取りはづして仕舞ふ事になる
(一一)我と女三とが既に出家して我が子孫の無い樣に人が言ふのも
(一二)同じ樣なものにならんと
(一三)世がつらいとて出家するは外聞惡き事也

え、おのづから隱なければ、(一)大殿などにも聞き給ひて、(二)然やはあるべきなど、(三)女方の心淺きやうに、思しなすぞ理なきや。(四)かの日は昔の御心あれば、君達もまうで訪ひ給ふ。誦經など、(五)殿よりもいかめしうせさせ給ふ。(六)これかれも樣々劣らずし給へれば、(七)時の人のかやうのわざに劣らずなむありける。

(八)宮はかくて住み果てなむと思し立つ事ありけれど、院に人の漏らし奏しければ、朱雀「いとあるまじき事なり。實に(九)數多とざまかうざまに、身をもてなし給ふべき事にもあらねど、(一〇)後見なき人なむ、なか〱然る樣にて、あるまじき名を立ち、罪得がましきとき、此世後の世、中空にもどかしき咎負ふわざなる。(一一)こゝに斯く世を捨てたるに、三の宮の同じごと身をやつし給へる、末無きやうに人の思ひ言ふも、捨てたる身に思ひ惱むべきにはあらねど、必ずさしも、(一二)樣のものと、爭ひ給はむもうたてあるべし。世の憂きにつけて厭ふは、なか〱人わろきわざなり。心と思ひとるかたありて、(一三)今すこし思ひしづめ、心すましてこそ、ともかうも」

侍る、いと哀なるわざなりや。はかぐ\しきよすがなき人は、生ける世の限にて、かゝる世の果こそ悲しう侍りけれ」(一)と、聞え給ふ。源「院(二)よりも訪はせ給ふらむ。かの御子(三)いかに思ひ歎き給ふらむ。はやう聞きしよりは、この近き年頃、事にふれて聞き見るに、この更衣こそ、口惜し(四)からずめやすき人の中なりけれ。大方の世につけて惜しきわざなりや。さて(六)もありぬべき人の、かう亡せゆくよ。院(七)もいみじう驚き思し(五)たりけり。かの御子こそは、こゝ(九)に物し給ふ入道の宮よりさしつぎには、らうたうし給ひけれ。人様(八)もよくおはすべし」と宣ふ。夕霧「御子(一〇)はいかゞ物し給ふらむ。御息所は、こと(一一)もなかりし人のけはひ心ばせになむ。親しう打解け給はざりしかど、はかなき事の序に、自ら人の用意は顯なるものになむ侍る」と聞え給ひて、宮(一二)の御事もかけず、いとつれなし。かばかり(一三)のすくよか心に、思ひそめてむこと、諫めむにかなはじ、用ゐ(一四)ざらむものから、我さかしらに言出でむもあいなし、と思して止みぬ。かくて御法事(一五)に、萬とりもちてせさせ給ふ。事の聞

(一)しつかりしたる身寄のなき人は生きて居る間だけの事で死後は見じめなもの
(二)朱雀院
(三)落葉
(四)此頃事の序に見聞する所によれば、此御息所は兼ての噂とは違ひて一廉の批難なき人物ぢや
(五)此人を失ひたるは
(六)生きて居て貰ひたき人が
(七)朱雀院
(八)落葉
(九)女三の次には朱雀が可愛がられた人ぢや
(一〇)落葉はどうあらうか一向存じませぬ
(一一)難のない
(一二)落葉の事は口に出さず何氣なく裝つて居る
(一三)源の心、此の如き眞面目な了簡で思ひ込んだ事を止めても止まるものではない
(一四)用ひられぬのに入らざる口を出すでもないと
(一五)御息所の法事に夕霧が萬事世話をやく

も、常なき世の徒然をも慰むべきぞは、(一)大方物の心を知らず、いふかひなき者にならひたらむも、生ほしたてけむ親も、いと口惜しかるべきものにはあらずや、心にのみ籠めて、無言(二)太子とか、法師ばらの悲しきことにする、昔の譬のやうに、悪しき事善き事を思ひ知りながら埋もれなむも、いとかひなし。(三)我が心ながらも、よき程にはいかで保つべきぞ、と思しめぐらすも、今はたゞ女(四)一の宮の御爲なり。

(五)大將の君參り給へる序ありて、思ひ(六)給へらむ氣色もゆかしければ、源「御息所(七)の忌果てぬらむな。昨日今日と思ふほどに、(八)三十年よりあなたの事になる世にこそあれ。哀にあぢきなしや。(九)夕の露のかゝる程の貪よ。いかでこの髪剃りて、萬背き捨てむと思ふを、(一〇)然ものどやかなる樣にても過すかな。いと惡きわざなりや」と宣ふ。夕霧「誠に惜しげなき人だに、(一一)おのがじしは離れ難く思ふ世にこそ侍るめれ」など聞えて、夕霧「御息所の四十九日のわざなど、大和守某の朝臣、一人あつかひ

(一)されば又無心な者になつて居れば親の名迄も下す事になる
(二)波羅奈國王の太子休魄容貌端正にして十三年無言なりしこと太子休魄經に見ゆとぞ、無言の行といふ事これに起るといふ
(三)自分の心では有りながら思ひ通り中庸を得てゆく事はむつかしいと
(四)明石姫君腹、紫の養女
(五)夕霧が源方へ
(六)夕霧が何と思つて居るか知りたくて
(七)落葉の母
(八)此御息所が朱雀の寵を受けしは既に三十年の昔になりける上の意なるべし
(九)はかなき命の間に何をか貪るべき
(一〇)我ながら油斷して其日々々をおくる事哉
(一一)つまらぬ人でも其身になれば世を捨て難く

怪しや、など斯うしも思ふらむ、と思ひかへし給へど、えしも叶はず。

六條院にも聞召して、いとおとなしう(一)萬を思ひしづめ、人の譏り所なく、めやすくて過し給ふを、おもだたしう(二)、我がいにしへ少しあざればみ、仇なる名をとり給ひし面おこしに、嬉しう思しわたるを、いとほしう(三)何方にも心苦しき事のあるべきこと、さし(四)離れたる中らひにてだにあらで、大臣などもいかゞ思ひ給はむ、さ(五)ばかりの事たどらぬにはあらじ、宿世といふもの遁れ(六)わびぬる事なり、(七)ともかくも口入るべき事ならず、と思す。(八)女の御爲のみこそ何方にもいとほしけれど、あいなく聞召し歎く。紫の上にも、來し方行く先のこと(九)思し出でつゝ、(一〇)かうやうの例を聞くにつけても、亡からむ後、うしろめたう思ひ聞ゆる樣を宣へば、御顔うち赤めて、心憂く、さま(一一)でおくらかし給ふべきにやと思したり。(一二)女ばかり、身をもてなすべきさまも所せう、哀なるべき者はなし、物の哀をもをかしきことをも、見知らぬさまに引入り、沈みなどすれば、何につけてか、世に經る榮々しさ(一三)

㊟ 源氏夕霧を誡めんとして果さず
(一)源の心、夕霧は老成にて萬事に分別あり
(二)父たる自分も面目あり
(三)落葉を戀するとは可愛やどちらの爲にもまづい事になるであらう
(四)近しき親族關係の事故頭中なども何と思ふならん
(五)其位の事を辨へぬ夕霧でもなし
(六)遁れがたきの意なるべし
(七)我が口を出すべき事にあらずと
(八)落葉も雲井雁も氣の毒と
(九)源が
(一〇)落葉の話を聞くにつけても我が死後は其方も何をするか知れぬと氣懸りなる由を源が宣へば
(一一)紫の心、其程自分が跡に殘るのかしらと
(一二)紫の心、女程身の持ち樣の窮屈な者はなし
(一三)「榮々しさも」の下脱字あるべし

(一)「いかにしていかでよからん小野山の上よりおつる音無しの瀧」
(二)夕霧が手紙を渡す
(三)雲井雁の心
(四)御返事を小野より
(五)生めかしからず
(六)例の通り返事せり
(七)落葉に申上げても無效なる由を書きて
(八)夕霧からの文に
(九)落葉が此方の文を見る事は見たのぢやと
(一〇)見つともない
(一一)小野の山奥に絶えず悲み居る我が涙は音無しの瀧と流るゝ
(一二)とても讀みつゞけたものか、ちぎれ〳〵の紙をよせて讀めば也
(一三)古歌
(一四)夕霧の心、他人が此樣に戀にうき身をやつすを見ては
(一五)我身の上の事となれば

上より落つる。(一)とや書い給へらむ、おしつゝみて、名殘も、夕霧「いかでよからむ」など口ずさび給へり。人召して賜ひつ。(二)御返事(三)をだに見つけてしがな、猶如何なることぞと、氣色見まほしう思す。日たけてぞ持て(四)參れる。紫の濃かなる紙(五)すくよかにて、小少將ぞ例の(六)聞えたる。唯同じ樣に、かひなき(七)由を書きて、落葉「いとほしさに、かのあ(八)りつる御文に、手習ひすさみ給へるを盜みたる」とて、中にひき破りて入れたり。(九)目には見給ひてけりと思すばかりの嬉しさぞ、いと人悪(一〇)かりける。そこはかとなく書き給へるを、見つゞけ給へれば、

落葉朝夕(一一)になくねをたつる小野山は絶えぬなみだやおとなしの瀧

とや、取りなすべからむ。故事(一三)など、物思はしげに書きみだり給へる、御手など(一二)見所あり。人の上(一四)などにて、かやうのすき心思ひ入らるゝは、もどかしう現心ならぬ事に見聞きしかど、身(一五)の上にては、實にいと堪へ難かるべきわざなりけり、

(一)此樣な事は今迄はなかりしに
(二)雲井雁
(三)以下雲井雁の心、夕霧が此頃はのぼせて居らるゝと見える
(四)大勢で爭ひもせず源氏一人を守り居る源の妻妾達を動もすればよい手本にして、我が悋氣するを不嗜なめ過ぎた奴と夕霧が思ひ居るはつらい事
(五)同じ妻妾仲間がありつけたのならば
(六)夕霧は珍らしい堅人ぢやとて
(七)あやかりもの
(八)此頃の樣子では今になつて落葉に見かへられて恥かく事が出來はせぬかと
(九)背中合せて
(一〇)落葉への文を夕霧が
(一一)雲井雁が
(一二)下の歌を吟ずる也
(一三)前に夢見る如き此想が薄らぎたらば御禮も申すべしと落葉がいへる詞を受けて此はいつの事と思ひて待つべきぞと也

とひとりごちつゝ殿におはしても、月を見つゝ、心は空にあくがれ給へり。侍女等「さも見苦しう、あらざりし御癖かな」(一)と、御達も憎みあへり。上(二)はまめやかに心憂く、(三)あくがれたちぬる御心なゝめり、(四)もとよりさる方にならひ給へる、六條院の人々を、ともすればめでたき例にひき出でつゝ、心づきなくあいだちなきものに思ひ給へる、理なしや、我も、昔より然(五)ならひなましかば、人目も馴れて、なか〳〵過してまし。(六)世の例にしつべき御心ばへと、親兄弟よりはじめ奉り、めやすきあ(七)えものにし給へるを、あり〳〵て末に、恥がましき事やあらむなど、いといたう歎い給へり。夜も明け方近く、(八)互にうち解け給ふことなくて、(九)背き〳〵に歎きあかして、朝霧の晴間もまたず、(一〇)例の文をぞ急ぎ書きたまふ。いと心づきなしと思(一一)せど、ありし樣にも奪ひ給はず。いと細やかに書きて、うち置きて嘯き(一二)給ふ。忍び給へど、漏りて聞きつけらる。

夕霧(一三)いつとかはおどろかすべき明けぬ夜の夢さめてとかいひしひとこと

（一）忍びたる吟聲
（二）夕霧が色々落葉へ取次にて言へど
（三）恐の薄らぐ時もあらば始終御見舞下さる御禮も申上ぐべし
（四）きつぱりと
（五）夕霧が
㊉ 雲井雁の嫉妬、夕霧の戀彌〻切なり
（六）小暗と名に負へる小倉山も覺束なからぬ程の明るさで歸り來るに
（七）落葉の本邸
（八）荒れて
（九）どこ迄も戸締りしてありて
（一〇）すみ―住み、澄み
（一一）柏木
（一二）柏木の死をいふ

と宣へば、

少將ふぢごろも露けき秋の山人は鹿のなく音に音をぞ添へつる

よからねど、折からに、忍びやかなる聲づかひ（一）などを、よろしう聞きなし給へり。御消息（二）とかう聞え給へど、宮「今はかくあさましき夢の世を、少しも思ひさます折（三）あらばなむ、絶えぬ御訪らひも聞えやるべき」とのみ（四）、すくよかに言はせ給ふ。いみじういふかひなき御心なりけりと、歎きつゝ（五）歸り給ふ。

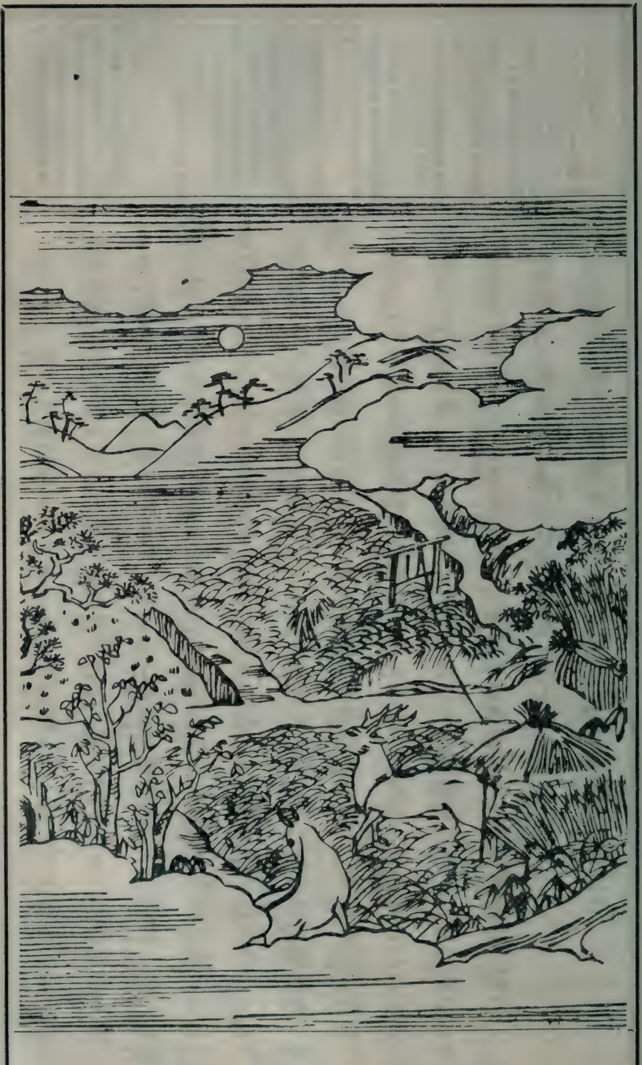
道すがらも、哀なる空を眺めて、十三日の月いと花やかにさし出でぬれば、小倉（六）の山もたどるまじうおはするに、一條（七）の宮は道なりけり。いとゞうちあばれて（八）、未申の方のくづれたるを見入るれば、はるぐ〵（九）とおろしこめて、人影も見えず。月のみ、遣水の面をあらはにすみなしたる（一〇）に、大納言（一一）こゝにて遊などし給ひし折々を、思ひ出で給ふ。

夕霧見し人（一二）のかげすみはてぬ池水にひとりやどもる秋の夜の月

る弱目に、例の物怪のひき入れ奉るとなむ見給へし。(一)過ぎにし御事にも、ほとほと御心惑ひ給ひぬべかりし折々多く侍りしを、(二)宮の同じさまに沈み給ひしを、こしらへ聞えむの御心強さになむ、やうやう物覺え給ひし。(三)この御歎をば、御前には、唯われかの御氣色にて、あきれてくらさせ給ひし」など、のどめがたげに打歎きつゝ、(四)はかばかしうもあらず聞ゆ。夕霧「そよや。そも(五)餘りにおほめかしう、いふかひなき御心地なり。今は(六)辱くとも、誰をかはよるべに思ひ聞え給はむ。(七)御山住も、いと深き峯に、世の中を思し絶えたる雲の中なゝめれば、聞え通ひ給はむこと難し。いとかく(八)心憂き御氣色聞えしらせ給へ。(九)萬の事さるべきにこそ。(一〇)世にあり經じと思すとも、從はぬ世なり。(一一)まづはかゝる御別の、御心にかなはば、あるべき事かは」など、萬に多く宣へど、(一二)聞ゆべき事もなくて、打歎きつゝ居たり。鹿のいといたく鳴くを、夕霧「(一三)われ劣らめや」とて、

夕霧里とほみ小野の篠原わけて來て我も(一四)しかこそ聲もをしまね

(一)柏木逝去の時にも
(二)落葉が矢張悲しみ入れるを慰めんと氣を張りてやつと取亂さざりし也
(三)御息所の逝去の時には落葉は只茫然として居られたり
(四)甘く續けても話さず
(五)覺束なく
(六)失禮ながら私の外に便りになる者はあるまじ
(七)朱雀院の御住居も
(八)落葉の強情を意見してくれ給へ
(九)萬事はまはり合せ次第
(一〇)いくら夫をもつまじと思召してもさうは世の中がさせぬ
(一一)世の中が心に叶ふものならば御息所との死別もない筈
(一二)少將は言ふべき詞もなくて
(一三)「秋なれば山とよむ迄鳴く鹿に我劣らめやひとりぬる夜は」
(一四)しかこそ―其樣にこそ、鹿こそ





ひの慰にしつべく、笑ましき顔の匂にて、少將の君をとりわきて召寄す。簀子の程もなけれど、奥に人やあらむと後めたくて、え細かにも語らひ給はず。夕霧猶近くて(一)を、な離ち給ひそ。かく山深く分け入る志は、隔殘る(二)べくやは。霧もいと深しや」とて、わざとも(三)見入れぬさまに、山の方を眺めて、夕霧「なほ〳〵」(四)と切に宣へば、鈍色の几帳を、簾のつまより少しおし出でて、裾を(五)ひきそばめつゝ居たり。大和守の妹(六)なれば、離れ奉らぬうちに、幼くより生ほし立て(七)給ひければ、衣(八)の色いと濃くて、橡(九)の喪衣一襲、小袿著たり。夕霧「かく盡せぬ(一〇)御事はさるものには、聞えむ方なき(一一)御心のつらさを思ひ添ふるに、心魂もあくがれはてて、見る人毎に咎められ侍れば、今は更に忍ぶべき方なし」と、いと多く恨みつゞけ給ふ。かの今はの御文のさまも宣ひ出でて、いみじう泣き給ふ。この人も、ましていみじう泣き入りつゝ、少將「(一二)その夜の御返さへ見え侍らずなりにしを、今は限の御心に、やがて思はし入りて、暗うなりにし程の空の氣色に、御心地惑ひにけるを、さ

(一)我に近く居れ、離るるな
(二)まだ心に隔があるべきでなし
(三)殊更眺める樣子でもなく
(四)もつと此方へ寄れと
(五)少將が
(六)落葉には從姉妹
(七)御息所が手元で
(八)喪服も黑色の濃きを著て
(九)橡は黑の染料
(一〇)御息所を悲しむは勿論の事で
(一一)落葉のつらさ
(一二)夕霧の返事まで容易に來ざりしを危篤なる御息所が心配して

(一)小野の山莊の様

(二)鳴子板

(三)外の草は枯れたるに氣長に生き殘りて

(四)夕霧が

(五)女でも斯く泣美しくはなしと

じと、頼もしかりけり。九月十餘日、野山の氣色は、ふかく見知らぬ人だにたゞにやは覺ゆる。(一)山風に堪へぬ木々の木末も、峯の葛葉も心あわたゞしう、爭ひ散る紛に、尊き讀經の聲かすかに、念佛などの聲ばかりして、人のけはひいと少う、木枯の吹き拂ひたるに、鹿は唯籬のもとに佇みつゝ、山田の引板(二)にも驚かず、色濃き稻どもの中にまじりて、打鳴くも愁へ顏なり。瀧の聲は、いとゞ物思ふ人を驚かし顏に、耳かしがましう轟き響く。叢の蟲のみぞ、より所なげに鳴き弱りて、枯れたる草の下より、龍膽のわれひとりのみ、心長う(三)這ひ出でて、露けく見ゆるなど、皆例のこの頃の事なれど、折から所からにや、いと堪へ難き程の物悲しさなり。(四)例の妻戸のもとに立ち寄り給ひて、やがて眺め出して立ち給へり。なつかしき程の直衣に、色濃かなる御衣の擣目、いとけうらに透きて、影弱りたる夕日の、さすがに何心も無うさし來たるに、眩げに、わざとなく扇をさし隱し給へる手つき、女こそかうはあらまほしけれ、(五)それだに斯うはあらぬをと見奉る。物思

覺束なきこそ心憂けれ。

とあれば、ほゝ笑みて、(一)樣々にかく思ひよりて宣ふ、似げ無の亡きがよそへや、と思す。いと疾く、(二)ことなしびに、

夕霧 いづれとかわきてながめむ消えかへる露も草葉のうへと見ぬ世を

(三)大方にこそ悲しけれ。

と書い給へり。(四)猶かく隔て給へる事と、露の哀をばさしおきて、たゞならず歎きつゝおはす。

猶かく覺束なく思しわびて、(五)又わたり給へり。(六)御忌など過して、のどやかにと思し靜めけれど、さまでもえ忍びはつまじう、(七)今はこの(八)御なき名の、何かは強ちにもつゝまむ、(九)たゞ世づきて、つひの思ひかなふべきにこそは、と思し立ちにければ、(一〇)北の方の御思ひやりをあながちにもあらがひ聞え給はず。(一一)正身は強う思し離るとも、(一二)かの一夜ばかりの御恨文をとらへ所にかこちて、(一三)えしもすゝぎはて給は

(一)夕霧の心、色々の想像をして言ふものぢや、御息所が戀しいかとは飛んでもない事をいふ
(二)何げなき體にいふ
(三)特にどの人を思ふといふ事はなし、愁みに沈み居る我も明日をも知らぬ身と思へば
(四)やつぱり此樣に我に隱し立をなさると夕霧の心細い樣な言草はそつけにして雲井雁が歎く
九の夕霧、小野山莊に容易に靡かぬ落葉宮を訪ふ
(五)夕霧が小野へ
(六)御息所の忌が明けてから、ゆつくり行かんと思ひたれど
(七)夕霧の覺悟
(八)既に無き名を立てられし上は強ひて遠慮するにも及ばぬ
(九)濡れかけて本望を遂げるがましぢやと
(一〇)雲井雁が推量して兎やかくいふをも強ひて爭はず
(一一)夕霧の心、落葉は氣強くはねつける積でも
(一二)御息所の只一夜でも棄てたりとの恨の文をつかまへ所にして口說かば
(一三)落葉が潔白だてもしおほすまじと

(一)夕霧の心、方角違ひの面白可笑しさうな事でも言ひたらば顏も立つべきが、自分の悲しんで居る事につきて見舞ひてくれる人はなつかしく思ふが常前
(二)我が祖母の亡くなられし時
(三)死別は世間の通例として
(四)親の爲にし
(五)法事
(六)自分の骨肉とはいふものゝ
(七)柏木
(八)氣象に惚れた
(九)柏木の人柄をいふ
(一〇)雲井雁
(一一)夕霧と落葉との關係が不審で
(一二)雲井雁の心
(一三)夕霧が
(一四)御慰め申したいのであるが、一體御息所を悲しまるゝのか落葉を戀しがらるゝのか分らぬので困る

めしう、他事のすぢに、花や蝶やとかけばこそあらめ、我心に哀と思ひ、物歎かしき方様の(一)ことを、いかにと問ふ人は、睦まじう哀にこそ覺ゆれ。(二)大宮の亡せ給へりしを、いと悲しと切に思ひしに、致仕の大臣のさしも思ひ給へらず、(三)理の世の別に、公々しき作法ばかりの事を、(四)孝じ給ひしに、つらく心づきなかりしに、六條院のなかく\懇に、後の(五)御事をも營み給ひにしが、(六)我がかたざまといふ中にも、嬉しう見奉りしその折に、(七)故衞門督をば、取りわきて(八)思ひつきにしぞかし、(九)人がらのいたう靜まりて、物をいたう思ひ留めたりし心に、哀も勝りて人より深かりしが、なつかしう覺えし、など徒然と物をのみ思しつゞけて、明し暮し給ふ。女君、(一〇)猶この(一一)御中の氣色を、(一二)如何なるにかありけむ、御息所とこそ、文かよはしも細やかにし給ふめりしか、など思ひ得難くて、夕暮の空を眺め入りて臥し(一三)給へるところに、若君して奉れ給へる。はかなき紙のはしに、

雲井(一四)哀をもいかに知りてかなぐさめむあるや戀しきなきやかなしき

❽夕霧の落葉宮に對する慰問
(一)隱れ
(二)すべてが物悲しき時分なれば
(三)落葉が
(四)夕霧
(五)御見舞の文をよこせど
(六)母御息所が大病の中で飛んでもない勘違ひをして其儘に死なれし事を思へば、其が母の後生の障にもならんかと落葉は胸が一杯で
(七)夕霧の事を側の者が口に出しさへすれば
(八)途方にくれて居るからの事であらうと夕霧が思ひ居しに
(九)夕霧の心
(一〇)此樣に迄我が心盡しを構はぬ筈はない

るも思しわかねど、月頃經ければ、九月になりぬ。

山おろしいと烈しう、木の葉のかくろへ(一)無くなりて、萬の事いといみじき程なれば、大方の空に催されて、干る間も無くて思し歎き、命(二)さへ心にかなはずと、厭はしういみじう思す。侍ふ人々も、萬に物悲しう(三)思ひ惑へり。大將殿は、日々に訪らひ聞え給ふ。淋しげなる念佛の僧など慰むばかり、萬の物(四)を遣し訪らはせ給ひ、宮の御前には、哀に心深き言の葉を盡して恨み聞え、かつは盡きもせぬ御(五)とぶらひを聞え給へど、取りてだに御覽ぜず、漫(六)にあさましき事を、弱れる御心地に、疑ひなく思ししみて、消え失せ給ひにし事を思し出づるに、後の世の御罪にさへやならむと、胸に滿つ心地して、(七)この人の御事をだにかけて言へば、いとどつらく心憂き涙の催しに思さる。人々も聞え煩ひぬ。一行の御返だになきを、しばしは心惑ひ(八)のし給へるなど思しけるに、餘に程經ぬれば、悲(九)しき事も限あるを、などか斯く(一〇)あまり見知り給はずはあるべき、いふかひなく若々しき樣に、と怨

猶聞え慰め給ひて、聊の御返もあらばなむ」など宣ひおきて、立ち(一)煩ひ給ふも輕輕しう(二)、さすがに人騷がしければ、歸り給ひぬ。今宵(三)しもあらじと思ひつる事どものしたゝめ、いと程なくきはぐしきを、いとあへなしと思いて、近き御庄の人々召し仰せて、さるべき事ども仕うまつるべく、掟て定めて出で給ひぬ。事の俄なれば、そぐやうなりつる事ども嚴しう、人數なども添ひてなむ。大和守(四)も、「ありがたき殿の御心掟」など悦びかしこまりきこゆ。名(五)殘だに無くあさましき事と宮(六)は臥しまろび給へどかひなし。親(七)と聞ゆとも、いと斯くはならはすまじきものなりけりと、見奉る人々も、この御事を又忌々しう歎き聞ゆ。大和守、殘の事どもしたゝめて、大和守「かく心細(八)くてはえおはしまさじ。いと御心(九)のひまあらじ」など聞ゆれど、猶峯の煙(一〇)をだに氣近くて思ひ出で聞えむと、この山里に住み果てなむと思いたり。御忌にこもれる僧は、東面のそなたの渡殿下屋などに、はか(一一)なき隔しつゝ、かすかに居たり。西の廂をやつして、宮はおはします。明け暮る

(一)落葉を慰めて少しても御自身の御返事がある樣にして下されたらば嬉しかるべし
(二)ぐづ〳〵して居るも
(三)まだ今夜ではあるまじと思ひし葬式の準備が非常に早くてきぱきしたるを不足に夕霧が思ひて
(四)俄の事にて萬事省略したりしに、夕霧の助力によりて立派になり
(五)死體を取納めて仕舞ひたれば
(六)落葉
(七)親でも此樣に餘り親しくはせぬ方がよいと落葉の歎の甚しきを見て人人が思ふ也
(八)落葉の身を氣遣ふ
(九)悲を忘るゝ隙あらじ
(一〇)火葬の時の煙をでも近處に居て思ひ出して慰めたしと
(一一)一寸した仕切をして

(一)御返事を何と申上げませう
(二)夕霧が重い御身分で
(三)わざ〳〵
(四)御親切が分ちぬ樣な挨拶をするも餘り無躾なるべし
(五)よい加減に御返事を申上げよ
(六)死人も同樣な落葉の御樣子
(七)夕霧が御出の趣は
(八)取次の侍女等も
(九)落葉が落附きたる時分に又參るべし
(一〇)御臨終の前後の御樣子が承りたし
(一一)露骨には言はねど御息所が夕霧の事につきて心配せし樣子を少しづつ申上げて
(一二)是では夕霧に不足を申上げる樣になりて相濟まぬ
(一三)申上げそこなふ
(一四)落葉の
(一五)御目にかゝるべし

ば、答をだにし給はず。人々「(一)いかに聞えさせ給ふとか、聞えさせ侍るべき。いと(二)輕らかならぬ御樣にて、(三)かくふりはへ急ぎ渡らせ給へる(四)御心ばへを、思しわかぬ樣ならむも、餘に侍りぬべし」と、口々きこゆれば、落葉「たゞ(五)推量りて。我は言ふべきことも覺えず」とて、臥し給へるも理にて、人々「只今は、(六)亡き人と異ならぬ御有樣にてなむ。(七)渡らせ給へるよしは、聞えさせ侍りぬ」と聞ゆ。(八)この人々も噎せかへる樣なれば、夕霧「聞えやるべき方もなきを、今少し自らも思ひのどめ、(九)又しづまり給ひなむに參り來む。如何にしてかく俄にと、(一〇)その御有樣なむゆかしき」と宣へば、まほにはあらねど、かの思ほし歎きし有樣を、かたはしづつ聞えて、人々「(一二)かこち(一一)聞えさする樣になむなり侍りぬべき。今日はいとゞ亂りがはしき心地どもの惑に、(一三)聞えさせ違ふる事どもも侍りなむ。さらば、かく思し惑へる(一四)御心地も、限あることにて、少ししづまらせ給ひなむ程に、(一五)聞えさせ承らむ」とて、我にもあらぬ樣なれば、宣ひ出づることも口塞がりて、夕霧「實にこそ闇に惑へる心地すれ。

日より後、日序惡しかりけり」など、人聞には宣ひて、いとも悲しう哀に宮の思し歎くらむ事を、推量り聞え給ひて、「斯くしも急ぎ渡り給ふべき事ならず」と、人々諫め聞ゆれど、強ひておはしましぬ。(一)程さへ遠くて、入り給ふ程いと心凄し。(二)忌忌しげに引き隔てめぐらしたる、儀式のかたは隠して、この西面に(三)入れ奉る。大和守出で來て、泣く〳〵かしこまり聞ゆ。(四)妻戸の簀子におしかゝり給ひて、女房呼び出でさせ給ふに、(五)ある限、心もをさまらず物覺えぬほどなり。斯くわたり給へるにぞ、聊慰めて、(六)少將の君はまゐる。(七)物もえ宣ひやらず。(八)涙もろにおはせぬ心強さなれど、所のさま、人のけはひなどを、思しやるもいみじうて、常なき世の有樣の、人の上ならぬもいと悲しきなりけり。やゝためらひて、夕霧「(九)よろしうおこたり給ふ樣に承りしかば、思ひ給へたゆみたりし程に、(一〇)夢もさむる程侍ろなるを、いとあさましうなむ」と聞え給へり。(一一)思したりし樣、これに多くは御心も亂れにしぞかしと思すに、(一二)さるべきとは言ひながらも、いとつらき人の御契なれ

(一)路が遠く思はれて
(二)屏風抔にて圍ひたる式場の方は見せぬ樣にして
(三)夕霧を
(四)開き戸の外の縁側に居て勾欄に寄りかゝれるなるべし
(五)居合す侍女等殘らず
(六)侍女の名
(七)夕霧が悲しくて
(八)夕霧の性質をいふ
(九)御病氣が御快い樣に
(一〇)はかなき夢さへ醒むるには間があるに、其夢よりもはかなく逝去されたるをあさましく思ふ
(一一)落葉の心、母が生前の氣苦勞も夕霧故なりしと思へば
(一二)生死は運命とはいふものゝ

ど、すくみたる様にて、物も覺え給はず。修法の壇毀ちて、ほろ〳〵と(一)出づるに、(二)さるべき限、かたへこそ立ちとまれ、今は限の樣、いと悲しう心細し。(三)所々の御とぶらひ、いつの間にかと見ゆ。(四)大將殿も限なく聞き驚き給ひて、まづ聞え給へり。六條院よりも、致仕の大殿よりも、すべていと繁う聞え給ふ。(五)山の帝も聞しめして、いと哀に御文書い給へり。宮はこの御消息にぞ、御頭もたげ給ふ。

朱雀日頃おもく惱み給ふと聞きわたりつれど、(六)例もあつしうのみ聞き侍りつるならひに、うちたゆみてなむ。(七)かひなき事をばさるものにて、思ひ歎い給ふらむ有樣、推し量るなむ哀に心苦しき。なべての世の理に思し慰め給へ。

とあり、目も見え給はねど、御返きこえ給ふ。(八)常に然こそあらめと宣ひける事とて、今日やがてをさめ奉るとて、御甥の大和守にてありけるぞ、萬にあつかひ聞えける。骸をだにしばし見奉らむとて、(九)宮は惜み聞え給ひけれど、然てもかひあるべきならねば、皆急ぎたちて、(一〇)忌々しげなる程にぞ(一一)大將殿おはしたる。(一二)夕霧今

(一)僧等がばら〳〵と退散するに
(二)居殘るべき一部分の僧は居殘れども
(三)諸方からの悔み
(四)夕霧
(五)朱雀
(六)御息所はいつも病氣勝の人故見舞もせず油斷して居たり
(七)死者を悲むは勿論
(八)御息所が常に我死なば久しく留め置かず早速葬れと言ひ置きし事故
(九)落葉
(一〇)葬式の出る際なるべし
(一一)夕霧來會せり
(一二)今日落葉を見舞はねばあとは日が惡くてゆかれぬを口實にして

る山籠を、斯くまでおぼろげならず出立ちて、壇毀ちてかへり入らむ事の、面目なく、佛もつらく覺え給ふべき事を、心を起して祈り申し給ふ。宮の泣き惑ひ給ふ事、いと理なりかし。

かく騒ぐ程に、（一）大將殿より御文取入れたる、ほのかに聞き給ひて、今宵もおはすまじきなゝめりとうち聞き給ふ。（二）心憂く、世の例にもひかれ給ふべきなゝめり、何に（三）我さへさる言の葉を殘しけむ、と樣々思し出づるに、（四）やがて絶え入り給ひぬ。あいなくいみじと言へばおろかなり。昔より物怪には、時々煩ひ給ひ、限と見ゆる折々もあれば、例のごと（五）取入れたるなゝめりとて、加持參り騒げど、今は樣はしるかりけり。（六）宮は後れじと思しいりて、つと添ひ臥し給へり。人々參りて、「今は言ふかひなし。いとかう思すとも、限ある道は、（七）返りおはすべき事にもあらず。慕ひきこえ給ふとも、いかでか御心には叶ふべき」と、（八）さらなる理を聞えて、人々「いと忌々しう、（九）亡き御爲にも罪深きわざなり。今は去らせ給へ」と、ひき動かい奉れ

㊆ 御息所逝去、葬送、夕霧の手厚き世話
（一）夕霧より文の來し由を御息所が聞きて
（二）御息所の心、落葉は世間の噂の種になるならん
（三）「一夜ばかりの宿をかりけむ」の歌を贈りし事
（四）御息所が
（五）物怪が氣絶せしめたるならんと
（六）一緒に死んで行きたしと
（七）生返るべきに非ず
（八）言はずともの理屈を申上げて
（九）側に附添ひて歎くは亡者の爲にもならぬ



(一)柏木に死なれてつまらぬ御身の上にはなりたれど、元々是は落葉一人の仕損ひといふでもなければ只天を恨みてのみ過し來りたるに
(二)夕霧の爲にも落葉の爲にも外聞惡き事が起つたのが厭な事であるが
(三)其でも人の噂は構はぬとした所で、夕霧との關係が圓滿にゆけば斯うしてゆく間にはまた善い事もあるならんとも思へど、一度切で來ぬとはひどい仕方
(四)御息所が何もかも押つかぶせて言ふ故落葉が辯解することも出來ず
(五)落葉を見つめつゝ
(六)跋扈する
(七)御息所が氣絶して
(八)律師は誓を立てゝ命の限再び山を出でじと決心せし事故斯く祈禱の爲に下り來れるは一通りの事ではなきに、其效驗なくて祈禱の壇を毀ちて山に歸るは面目なき趣を佛に申して祈る

院よりはじめ奉りて、思し靡き、この父大臣にも許い給ふべき御氣色ありしに、おのれ一人しも心をたてて、いかゞはと思ひ弱り侍りし事なれば、(一)末の世までものしき御有樣を、我が御過ならぬに、大空をかこちて見奉り過すを、いとかう(二)人のため我がため、萬に聞きにくかりぬべき事の出で來添ひぬべきが、(三)さても餘所の御名をば知らぬ顏にて、尋常の御有樣にだにあらば、自らあり經むにつけても、慰むこともやと思ひなし侍るを、こよなう情なき人の御心にも侍りけるかな」と、つぶ〳〵と泣き給ふ。いと理無し。(四)おしこめて宣ふを、諍ひはるけむ言の葉もなくて、唯打ち泣き給へる樣、おほどかにらうたげなり。(五)うちまもりつゝ、

御息所「あはれ何事かは人に劣り給へる。いかなる御宿世にて、安からず物を深く思すべき契深かりけむ」など宣ふまゝに いみじう惱しうし給ふ。物怪なども、かゝる弱目に所(六)得るものなりければ、(七)俄に消え入りて、たゞ冷えに冷え入り給ふ。律師も騷ぎたち給うて、願など立てのゝしり給ふ。(八)深き誓にて今は命を限りけ

（一）母の方が非常に心配するを見て
（二）辯解の仕樣がなくて
（三）母が氣の毒に思ひて落葉は何處迄も心配すべき運命の女よと思ふも
（四）言ふまじと
（五）人に批難さるべき事を
（六）注意し給へ
（七）自分は
（八）育てあげて仕舞つたと
（九）女としての分別を具へる點に附ては安心して居しに、一向幼稚で御心に取締のなかつたはどうした事ぞと氣がもめるに附けて
（一〇）二人の夫を持つ事は
（一一）さう滅多に
（一二）柏木に逢ひしをさへ私は意外で面白からぬ事に思ひしかど
（一三）其は斯くあるべき運命ならん、朱雀も同意し頭中も承知なるに私が一人反對するでもなしと諦めたる事なれば

まぬを、（一）かくいみじう覺いたるを、あさましう恥かしう、（二）あきらめ聞え給ふ方なくて、例よりも物恥し給へる氣色見え給ふを、（三）いと心苦しう、物をのみ思し添ふべかりけると見奉るも、胸つと塞がりて、悲しければ、御息所「今更にむづかしき事をば（四）聞えじと思へど、猶御宿世とはいひながら、思はずに心幼くて、（五）人のもどきを負ひ給ふべき事を、取り返すべき事にはあらねど、今よりは猶（六）さる心し給へ。（七）數ならぬ身ながらも、萬にはぐくみ聞えつるを、今は何事をも思し知り、世の中のとざまかうざまの有樣をも、思したどりぬべき程に、（八）見奉りおきつる事と、（九）そなたざまは後安くこそ見奉りつれ、猶いといはけて、強き御心掟のなかりける事と、思ひ亂れ侍るに、今しばしの命も留めまほしうなむ。たゞ人だに、少しよろしくなりぬる女の、（一〇）人二人と見る例は、心憂くあはつけきわざなるを、ましてかかる御身には、（一一）さばかりおぼろけにて、人の近づき聞ゆべきにもあらぬを、（一二）思の外に心にもつかぬ御有樣と、年頃も見奉り惱みしかど、（一三）さるべき御宿世にこそは、

（一）一夜泊りてあとを行かずに居ることに對する御叱りが甚だ氣にかゝる
（二）御見舞には參りたれど落葉に情をかはしたる事はなし
（三）申譯するも異なものなれど
（四）昨夜參らざりし御咎に對してはだんまりでも居られぬ
（五）女二への文には
（六）うつし鞍、唐式の鞍
（七）あの夜御供せし人
（八）昨夜も夕霧が行かぬを御息所が恨みて
（九）以ての外に思ひて
（一〇）御息所の
（一一）當人の落葉は夕霧の處置に對して特につらく感ずる點もなければ
（一二）思もよらぬ夕霧に

夕霧いと珍らしき御文を、かた〴〵嬉しう見給ふるに、この御とがめをなむ（一）。いかに聞召したる事にか。

（二）秋の野の草のしげみは分けしかどかりねの枕むすびやはせし

（三）あきらめ聞えさするもあやなけれど、よべ（四）の罪はひたやごもりにや。

とあり。宮には（五）、いと多く聞え給ひて、御廐に、足疾き御馬に（六）うつしおきて、（七）一夜の大輔をぞ奉れ給ふ。夕霧「よべより六條院に侍ひて、たゞ今なむ罷でつると言へ」とて、言ふべき樣さゝめき敎へ給ふ。彼處には、よべ（八）もつれなく見え給ひし御氣色を、忍びあへで、後の聞えをもつゝみあへず、恨み聞え給ひしを、その御返だに見えず、今日の暮れはてぬるを、いかばかりの御心にかはと（九）、もてはなれて、あさましう心も碎けて、よろしかりつる（一〇）御心地、又いといたう惱み給ふ。なかなか（一一）正身の御心のうちは、このふしを殊に憂しとも思し驚くべき事しなければ、唯（一二）覺えぬ人に打解けたりし有樣を見えし事ばかりこそ口惜しけれ、いとしも思しし

御座の奥の少しあがりたる所を、試にひきあげ給へれば、(一)これにさしはさみ給へるなりけりと、嬉しうもをこがましうも覺ゆるに、うち笑みて見給ふに、(二)かう心苦しきことなむありける。胸つぶれて、一夜のことを、(三)心ありて聞き給ひけると思すに、いとほしう心苦しう、(四)昨夜だに、(五)いかに思ひ明し給ひけむ、今日も今まで文をだにと、いはむ方なくおぼゆ。(六)いと苦しげにいふかひなく、書き紛はし給へる樣にて、(七)おぼろけに思ひあまりてやは、かく書き給ひつらむ。(八)つれなくて今宵のあけつらむと、いふべき方のなければ、(九)女君ぞいとつらう心憂き。漫にかく(一〇)あだへ隱して、(一一)いでや我がならはしぞやと、樣々に身もつらく、すべて泣きぬべき心地し給ふ。やがて(一二)出立ち給はむとするを、(一三)心やすく對面もあらざらむものから、(一四)人もかく宣ふ、いかならむ、(一五)坎日にもありけるを、もしたまさかに思ひ許し給はば、惡しからむ。猶よからむ事をこそと、うるはしき心に思して、まづこの御返を聞え給ふ。

(一)文が其處にありし也
(二)前にあげたる如き氣の毒な意味の事が書いてあつた
(三)最早情を通じたる樣に母は思ひ居らるゝと
(四)夕霧の心
(五)母御息所が
(六)御息所の文の書き樣を見て夕霧が思ふ也
(七)大抵の心配で書いたものではあるまい
(八)夕霧が來るか〳〵と待居しにとう〳〵來ずに
(九)雲井雁が恨めしくなる
(一〇)惡いたづらして文を隱して
(一一)是も自分が雲井雁を我儘にしつけたからぢやと
(一二)小野へ行かんとしたれど
(一三)落葉が逢ひもすまじければど
(一四)母御息所は承知の樣にいふし、どうしたものであらう
(一五)今日は坎日なれば若し我戀の叶ふ樣ならば幸先惡かるべし、坎日は出行其他萬事愼むべき日

給ふ。誰も〳〵(一)御臺參りなどして、長閑になりぬる晝つかた、思ひ煩ひて、夕霧「よべの御文は何事かありし。怪しう見せ給はで。今日も(二)訪ひ聞ゆべし。惱ましうて、(三)六條にもえ參るまじければ、文をこそは奉らめ。何事かありけむ」と宣ふが、(四)いとさりげなければ、(五)文はをこがましうとりてけりと、すさまじうて、その事をばかけ給はず、雲井「(六)一夜の深山風に、あやまち給へる惱ましさなゝなりと、をかしきやうにかこち聞え給へかし」と聞え給ふ。夕霧「いで、この僻事な常に宣ひそ。(七)何のをかしき樣かある。(八)世の人になずらへ給ふこそなか〳〵恥かしけれ。(九)この女房達も、かつは怪しきまめざまを、かく宣ふとはゝ笑むらむものを」と、戲れごとに言ひなして、夕霧「その文よ。いづら」と宣へど、頓にもひき出で給はぬ程に、猶物語など聞えて、(一〇)しばし臥し給へる程に、暮れにけり。蜩の聲に(一一)驚きて、(一二)山の陰いかに霧塞がりぬらむ、あさましや、(一三)今日この御返事をだにと、いとほしうて、唯知らず顏に硯おしすりて、(一四)如何になしてしにかとりなさむと、眺めおはする。

(一)食事して
(二)花散里を見舞ふべし
(三)花散の所へ
(四)如何にも何げなき言ひ方故
(五)雲井雁の心、文を奪つたのは馬鹿な仕方であつたと氣がすまずして文の事は言はず
(六)小野へ行つて引いてきた風で煩つて居りますとでも言つておやりなされ、落葉の事をほのめかしていふ
(七)小野へ行きたりとて何の面白い事がある物か
(八)其方に世間並の浮氣男と思はれるのが恥しい
(九)此處の侍女等も此偏屈な生眞面目男に見當違の悋氣をなさると笑ふならんに
(一〇)夕霧が
(一一)目さめて
(一二)夕霧の心、小野の山莊
(一三)せめて返事でもやらんと
(一四)あの文をどうした事にして返事せんかと

(一)六位宿世といひて夕霧を罵りし人也
(二)雲井雁が隠して仕ひたれば、夕霧が強ひてさがして取りもせず
(三)夕霧が
(四)夕霧が胸がもえて
(五)何が書いてあつたのか知らと
(六)それとなく探せど
(七)夕霧が
(八)夕霧も
(九)夕霧が別に探さうともせぬ樣なりしを見て、實際懸文ではなかりしならんと思ひて氣にも留めざりし故
(一〇)夕霧は文の事ばかり思ひて早く返事がしたけれど
(一一)あの文を見ない樣な返事をやらば、扨はあの文は無くしたる躰と思はれるならんと

はず。(一)大輔の乳母いと苦しと聞きて、物も聞えず。とかく言ひしろひて、この御文は(二)ひきかくし給ひつれば、せめてもあさり取らで、つれなく(三)大殿籠りぬれば、(四)胸はしりて、いかで取りてしがなと、御息所の御文なゝめり、(五)何事ありつらむと目もあはず、思ひ臥し給へり。女君の寢給へるに、よべの御座の下など、(六)さりげ無くて探り給へど無し。隱し給へらむ程もなければ、いと心やましくて、明けぬれど頓にも(七)起き給はず。女君は、君達に驚かされて、ゐざり出で給ふにぞ、(八)我も今起き給ふやうにて萬にうかゞひ給へど、え見つけ給はず。(九)女はかく覓めむとも思ひ給へらぬを、實に懸想なき御文なりけりと、心にも入れねば、君達のあわて遊び、雛つくりすゑて遊び給ひ、文讀み手習ひなど、さま〴〵にいとあわたゞしく、小き兒這ひかゝり引きしろへば、取りし文のことも思ひ出で給はず。(一〇)男は他事もおぼえ給はず、かしこに疾く聞えむと思すに、昨夜の御文のさまも、え確に見ずなりにしかば、(一一)見ぬ樣ならむも、散らしてけると推量り給ふべしなど、思ひ亂れ

にもたけからずや。(一)あまたが中に猶際まさり殊なる差別見えたるこそ、餘所の覺も心にくゝ、(二)我が心地も猶古りがたく、をかしき事も哀なる筋も絶えざらめ。(三)かく翁の某守りけむやうに、(四)おれ惑ひたれば、いとぞ口惜しき。いつこの榮かあらむ」と、さすがに(五)この文の(六)氣色なく(七)をこづりとらむの心にて、欺き申し給へば、いと匂ひやかにうち笑ひて、雲井「(八)物のはえ〴〵しさつくり出で給ふ程、ふりぬる人くるしや。(九)いと今めかしくなりかはれる御氣色のすさまじさも、見習はずなりにける事なれば、いとなむ苦しき。(一〇)かねてよりならはし給はで」とかこち給ふも、憎くはあらず。夕霧「(一一)俄にとおぼすばかりには、何事か見ゆらむ。いとうたてある御心の隈かな。(一二)よからず物聞え知らする人ぞあるべき。怪しう、(一三)もとよりまろをば許さぬぞかし。猶かく(一四)緣の袖の名殘、侮らはしきにことつけて、(一五)もてなし奉らむと思ふやうあるにや、いろ〳〵聞きにくき事どもほのめくめり。(一六)あいなき人の御爲にも、いとほしう」など宣へど、(一七)遂にあるべき事と思せば、殊にあらが

(一)大勢妻妾のある中で特に重んぜられてこそ
(二)夫なる夕霧が見ても常に新らしい心持がしても
(三)萬葉十六に田舍の翁が衆人の中で己の妻の殊に美しきを嘆美して、「住吉のをつめに出て現にもおの妻ずらを鏡と見つも」といふ歌をよめる事あり、其をいへるならんかといふ
(四)我は馬鹿堅くしなれたれば
(五)「この文を」なるべし
(六)何げなく
(七)だまして取る積にて
(八)どうかして榮のあるやうにと御心配をなさる程古くなつた我身がつらい
(九)打つて變つた御身の浮氣も私は今迄見馴れぬ事故
(一〇)「かねてよりつらさを人に習はさで俄に物を思はする哉」
(一一)前の引歌の詞によりていへり
(一二)詰らぬ事を其方に告口する人があるならん
(一三)其方は前から我をやかましくいふ
(一四)昔六位なりし事
(一五)人が其方に氣をもたせんとするならん
(一六)落葉にも氣の毒
(一七)落葉との情交は終に成立つべき事と

（一）花散里
（二）源氏
（三）再び御見舞もせざりし故
（四）下品な仕方ぢや
（五）我がさげしみを恥かしと思はぬか
（六）ひきしろひ
（七）雲井が文を直にひろげても見ずに
（八）段々侮るとは貴方の方の事
（九）夕霧が落着き拂ひて居るに氣おくれして
（一〇）其樣な事のいさかひは常の事なり
（一一）相當な身分の男が我が如く一人の女を守り居るは外にはあるまい
（一二）「せろ」とは鷹の雄をいふ、雄鷹は雌鷹を恐るゝ故せろの如き物と喩へたるならんといふ
（一三）一人の女を守り居る如き偏屈物に守られ居るは君の爲にも榮にもならぬ

給はで、大殿油近うとりよせて見給ふ。女君物隔てたるやうなれど、いと疾く見つけ給ひて、這ひよりて、御後より取り給ひつ、あさましう、夕霧「こはいかにし給ふぞ。あなけしからず。六條の東の上（一）の御文なり。今朝風おこりて惱ましげにし給へるを、院（二）の御前に侍りて出づる程、又もまうでずなりぬれば（三）、いとほしさに、今の間いかにと聞えたりつるなり。見給へよ、懸想びたる文の樣か。さても（四）なほなほしの御樣や。年月に添へて、いたう侮り給ふこそうたてけれ（五）。思はむ所をむけに恥ぢ給はぬよ」と、打ちうめきて、惜み顏にもひこじろひ（六）給はねば、（七）さすがにふとも見で持給へり。雲井（八）「年月に添ふる侮らはしさは、御心ならひなンべかンめり」とばかり、かく（九）うるはしだち給へるに憚りて、若やかにをかしき樣して宣へば、うち笑ひて、夕霧「そはともかくもあらむ。（一〇）世の常のことなり。（一一）又あらじかし、よろしうなりぬる男の、かくまがふ方なく、ひとつ所を守らひて、物懼したる鳥のせ（一二）うやうの物の樣なるは。いかに人笑ふらむ。（一三）さる頑しき者に守られ給ふは、御爲

いと晴々しからぬさまに物し給ふめれば、見給へ煩ひてなむ。

（一）女郎花しをるゝ野邊をいづことてひと夜ばかりの宿をかりけむ

とたゞ書きさして、おしひねりて出し給ひて、臥し給ひぬる儘に、いといたく苦しがり給ふ。（二）御物怪のたゆめけるにやと、人々言ひ騷ぐ。（三）例の驗ある限、いと騷がしうのゝしる。宮をば、猶（四）渡らせ給ひねと、人々聞ゆれど、御身の憂きまゝに、（五）後れ聞えじと思せば、つと添ひ給へり。

（六）大將殿は、この晝つ方より（七）三條殿におはしにけり。（八）今宵立ちかへりまうで給はむに、事しもあり顏に、まだきに聞き苦しかるべしと念じ給ひて、いとなかなか年頃の心もとなさよりも、千重にものを思ひ重ねて歎き給ふ。（九）北の方は、かゝる御（一〇）ありきの氣色をほのきゝて、心やましと聞き居給へるに、（一一）知らぬやうにて、君達もてあそび紛らはしつゝ、我が晝の御座に（一二）臥し給へり。宵過ぐるほどにぞ、この（一三）御かへりもて參れるを、かく例にもあらぬ鳥の跡のやうなれば、頓にもえ見解き

（一）落葉を何人と思ひて只一夜だけの慰み物にして今夜は來給はぬぞ、落葉はふさいで居るのに
（二）今迄快さゝうに見えたるは物怪が油斷させたのかしらと
（三）祈禱の上手な僧は皆
（四）御歸りなされと
（五）母と共に死んで仕舞ひたしと
㊅　夕霧雲井雁に御息所の返事を奪はる、夕霧の返事、御息所の愁嘆
（六）夕霧
（七）雲井雁の方
（八）引返して小野へ行きたらば恰も已に成立った戀の樣で
（九）雲井雁
（一〇）小野行の一件を
（一一）其を知らぬ風して
（一二）雲井雁が
（一三）前の夕霧の文の返事、母御息所の書きたるもの

(一)案外につれなき御心を
(二)却つて無理押附な事もしたくなる
(三)迚も浮名の立つを防ぎ切れぬならば、其を防がんとするは却つて心の淺きを現はす樣なものなるべし
(四)病の苦しき爲に
(五)夕霧の態度のはつきりした書方ではなく此方を輕蔑して得意で居る樣な書方で今夜來もせぬをひどい仕方と母が思ふ
(六)母の心、柏木の仕向が惡かりし時
(七)上べは非常に大事にされた故
(八)是は又格別ひどい待遇ぢや
(九)雲井雁の方で何と思ひ居るならんと
(一〇)夕霧が何といふか
(一一)御手紙は落葉が病を見舞に來て居る時に來し故御返事せよと勸めたれど、落葉が氣持惡さうにして居る故困つて私が代つて申上げます

苦しけれど奉りつ。

夕霧あさましき御心のほどを、(一)見奉り顯いてこそ、なか〳〵(二)ひたぶる心もつき侍りぬべけれ。

(三)せくからにあさくぞ見えむ山川のながれての名をつゝみはてずば

と詞も多かれど、見もはて給はず。(五)この御文もけざやかなる氣色にもあらで、めざましげに心地よ顔に、(四)今宵もつれなきを、いといみじとおぼす。(六)かんの君の御心ざまの思はずなりし時、いと憂しと思ひしかど、(七)大方のもてなしは又ならぶ人なかりしかば、此方に力ある心地して、慰めしだに、世に心もゆかざりしを、(八)あないみじや。(九)大殿のわたりに思ひ宣はむ事、と思ひしみ給ふ。(一〇)猶いかゞ宣ふと、氣色をだに見むと、心地のかき亂りくるゝ樣にし給ふを目をおししぼりて、怪しき鳥の跡のやうに書きたまふ。

御息所(一一)頼もしげなくなりにて侍る、訪に渡り給へる折にて、そゝのかし聞ゆれど、

なくて見奉り給ふ。(一)物づつみをいたうし給ふ本性に、きはぐ\しう宣ひさわやぐべきにもあらねば、恥かしとのみ思すに、(二)いといとほしうて、(三)如何なりしなども問ひ聞え給はず、大殿油などいそぎ參らせて、(四)御臺などこなたにて參らせ給ふ。(五)物聞しめさずと聞き給ひて、とかう手づからまかなひ直しなどし給へど、(六)觸れ給ふべくもあらず。(七)唯御心地のよろしう見え給ふぞ、胸すこしあき給ふ。

(八)かしこより又御文あり。心知らぬ人しも(九)取入れて、「大將殿より、少將の君にとて御文あり」といふぞ、又わびしきや。少將御文はとりつ。御息所「いかなる御文にか」と、さすがに問ひ給ふ。(一〇)人知れず思しよわる御心もそひて、したに待ち聞え給ひけるに、(一一)さもあらぬなゝめりと思すも、心騷して、御息所「いでその御文、(一二)なほ聞え給へ。(一三)あいなし。人の御名を(一四)よさまに言ひ直す人は難きものなり。底に心清う思すとも、(一五)しか用ゐる人は少くこそあらめ。(一六)心美しきやうに聞えかよひ給ひて、猶ありし儘ならむこそよからめ。(一七)あいなきあまえたる樣なるべし」とて(一八)召し寄す。

(一)落葉は非常に内氣な性質故夕霧の事を尋ねてもきつぱりと言ひ聞くなどの事はする筈がなき故
(二)母が氣の毒に思ひて
(三)夕霧の一條をどういふ次第ぞと問ひもせず
(四)食膳
(五)落葉が食べたくなしといふを聞きて母自ら
(六)箸もつけぬ
(七)母の病のよささうなるに心が少し靜まる
五 夕霧の文、御息所の返事
(八)夕霧より
(九)受取りて
(一〇)母の心、落葉が夕霧になびく氣になりて今夜來るのを内々待ち居しに夕霧が來ぬならんと
(一一)文の來たるを以て見れば夕霧が今夜は來ぬならんと
(一二)御返事申上げられよ
(一三)返事せずしては
(一四)辯護する人は有りにくきもの也
(一五)其を信用する人は
(一六)快く夕霧をあしらひて今迄進み居たる事情に随ひて行くがよし
(一七)返事せずしては
(一八)文を

(一)母に
(二)夕霧が此儘には濟まさず、此先兎や角と持ち懸けて來るのがうるさく
(三)心弱く夕霧の心に随ひたらばどれ程名譽を傷づくるならんと
(四)實際は潔白な丈に自ら慰むる點はあれど
(五)我如き境遇の我位の貴人があの如く無暗に男に對面する筈はないと
(六)向ふにも此方にも戸ある也
(七)母の方へ
(八)母が
(九)缺かず
(一〇)永い間逢はぬ心持がする
(一二)親子は一世の契なれば、死後に又逢はれるか逢はれぬか分らぬ
(一一)同じ時と場所に生れ合せた所が、互に見知らねば甲斐あるまじ
(一三)もう直に其方と永訣すべき此世なるに、今迄無暗に睦まじくしたるが後悔也

みじう物(一)をのみ思はせ奉る事と、生けるかひなく思ひつゞけ給ひて、この人は(二)かうでも止まで、とかく言ひかゝづらひ出でむも、煩はしう聞苦しかるべう、萬におぼす。まいて、いふ(三)かひなく、人の言によりて、如何なる名をくたさましなど、少し(四)思し慰むる方はあれど、かばかり(五)になりぬる高き人の、かくまでも漫に人に見ゆる様はあらじかしと、宿世心憂く思し屈して、夕つ方ぞ、「猶わたらせ給へ」とあれば、中の塗籠の戸(六)あけ合せてわたり給へる(七)。苦しき御心地にも、なのめならず畏まり(八)かしづき聞え給ふ。常の御作法あやまたず(九)、起きあがり給うて、御息所「いと亂りがはしく侍れば、渡らせ給ふも心苦しうてなむ。この二日三日ばかり見奉らざりける程の、年月(一〇)の心地するも、且はいとはかなくなむ。後(一二)必ずしも、對面の侍るべきにも侍らざゝめり。又めぐり(一一)參るとも、かひやは侍るべき。思へば唯時(一三)の間に隔たりぬべき世の中を、あながちにならひ侍りけるも、悔しきまでなむ」など泣き給ふ。宮も物のみ悲しうとり集め思さるれば、聞え給ふことも

參りて、（一）然なむ聞えさせ給ふとばかりきこゆ。（二）渡り給はむとて、御額髮の濡れまろがれたる、ひき繕ひ、單衣の御衣ほころびたる、著かへなどし給ひても、頓にもえ動い給はず。（三）この人々もいかに思ふらむ、（四）まだえ知り給はで、後にいさゝかも聞き給ふ事あらむに、（五）つれなくてありしよと思し合せむも、いみじう恥かしければ、又臥し給ひぬ。落葉「心地のいみじう惱ましきかな。（六）やがて直らぬ様にもなりなば、いとめやすかりぬべくこそ。（七）脚の氣の上りたる心地す」と、（八）おしくださせ給ふ。物をいと苦しう、さまざまに思すには、氣ぞあがりける。少將「（九）上にこの御事ほのめかし聞えける人こそはべりけれ。如何なりし事ぞと問はせ給へれば、ありの儘に聞えさせて、（一〇）御障子のかためばかりをなむ、（一一）少し事添へて、けざやかに聞えさせつる。もし（一二）然やうにかすめ聞えさせ給はば、同じさまに聞えさせ給へ」と申す。（一三）歎い給へる氣色は聞え出でず。（一四）さればよといとわびしくて、物も宣はぬ御枕より雫ぞおつる。この事にのみもあらず、（一五）身の思はずになりそめしより、い

（一）落葉に小少將が傳言だけをいふ
（二）落葉が行くとて
（三）落葉の心、侍女等も何と思ひ居るならん
（四）母がまだ昨夜の事を知らずして
（五）何氣なくして隱して居たかと母に思はれるのも
（六）此儘死んで仕舞ひたらば
（七）脚にあるべき熱氣が頭に上りたる心地
（八）按摩さするなるべし
（九）母御息所に昨夜の事を申上げた人があると見えます
（一〇）襖がしめてあつた事丈を
（一一）つくり事を加へてはつきりと申上げました
（一二）御息所が其點を匂はして聞かれたらば口を合せて下され
（一三）母の歎は言はず
（一四）落葉の心
（一五）思はず柏木に嫁してより以來

らで、(一)忍びて人の聞えけると思ふ。物も宣はで、いと憂く口惜しと思すに、涙ほろほろとこぼれ給ひぬ。(二)見奉るもいといとほしう、何にありの儘に聞えつらむ、苦しき御心地を、いとゞ思し亂るらむ、と悔しう思ひゐたり。小少將「(三)障子はさして」なんど、萬によろしきやうに聞えなせど、御息所「とてもかくても、然ばかりに、何の用意もなく、輕らかに、(四)人に見え給ひけむこそ、いといみじけれ。(五)内々の御心清うおはすとも、斯くまで言ひつる法師ばら、よからぬ童べなどは、(六)まさに言ひ殘してむや。(七)人には、いかに言ひあらがひ、然もあらぬ事と言ふべきにかあらむ。(八)すべて心幼き限しも、こゝに侍ひて」ともえ宣ひやらず。いと苦しげなる御心地に、物を思し驚きたれば、いといとほしげなり。(九)氣高うもてなし聞えむと思いたるに、(一〇)世づかはしう、輕々しき御名の立ち給ふべきを、疎ならずおぼし歎かる。御息所「かう少し物覺ゆるひまに、(一一)渡せ給ふべう聞えよ。其方へ參り來べけれど、動くべうもあらでなむ。(一二)見奉らで久しうなりぬる心地すや」と、涙を浮けて宣ふ。

(一)誰か外の人が申上げたるものと思ひ居る
(二)小少將の心、御息所の心配する樣子を見るも氣の毒にて
(三)其時隔の襖はさしてありし杯と
(四)夕霧に逢うたのがいけぬ
(五)内實は潔白なるにもせよ
(六)其點丈を綺麗にいふ筈がない
(七)他人に對してどうして言譯をして打消す事が出來るものか
(八)氣のきかぬ者共ばかり附いて居るからの事
(九)母が落葉を
(一〇)浮氣らしく
(一一)此方へ來る樣に落葉に申上げよ
(一二)落葉に逢はずして

むとてなむ、しばし立ちとまり給へると、此處(一)なる御達いひしを、さやうにて泊り給へるにやあらむ。大方(二)いとまめやかに、すくよかに物し給ふ人を」と、おほ(三)めい給ひながら、心のうちに、さる(四)事もやありけむ、たゞならぬ(五)御氣色は、折々見ゆれど、(六)人の御樣のいとかど〳〵しう、あながちに人の譏あらむことは省きすて、うる(七)はしだち給へるに、容易く(八)心ゆるされぬ事はあらじと、打解けたるぞかし、人少にておはする氣色を見て、這ひ入りもやし給ひけむ、と思す。律師立ちぬる後に、小少將の君を召して、御息所「かゝることなむ聞きつる。如何なりし事ぞ。など(九)かおのれには、然なむ斯くなむとは聞かせ給はざりける。然しも(一〇)あらじとは思ひながら」と宣へば、いとほしけれど、ありし樣を初より委しう聞ゆ。今朝の御文のけしき、宮(一一)もほのかに宣はせつるやうなど聞え、小少將「年頃(一二)忍びわたり給ひける心のうちを、聞え知らせむとばかりにや侍りけむ。あり(一三)がたう用意ありてなむ、明しもはてで出で給ひぬるを、人は如何に聞え侍るにか」と、律師とは思ひもよ

(一)御息所附の侍女等
(二)夕霧は
(三)不審に思ふ風は見せながら
(四)御息所の心
(五)夕霧の
(六)夕霧の人柄が人物くさく
(七)謹敷らしくつとめ居らるゝ故
(八)油斷のならぬ事はあるまじと
(九)なぜ夕霧の事を我には斯樣々々と知らせざりしぞ
(一〇)其樣な事はあるまいとは思ふが
(一一)落葉の內々の仰は斯く〳〵と申上げ
(一二)夕霧が奥へ這入りたるは、昨年來の思を言ひ知らせる丈の事にてありしならん
(一三)眞に打解けはせずして

(一)見わけ
(二)伴僧等
(三)伴僧等の詞
(四)夕霧に違なしと
(五)夕霧は
(六)落葉が夕霧に逢はるるはよくもなき事なり
(七)夕霧の人物は
(八)夕霧の幼時より
(九)夕霧の祖母に言附けられたれば
(一〇)然るべき御用は今も夕霧から承り居れど
(一一)落葉と夕霧との情交はよくない
(一二)雲井雁
(一三)雲井雁の里方の一家は當時の權門にて
(一四)雲井腹の
(一五)落葉が雲井雁を壓倒する譯にはゆくまじ
(一六)女が死後惡道に墮ちて浮ばれぬは
(一七)色戀の罪によりて
(一八)嫉妬沙汰が起らば
(一九)不賛成なり
(二〇)夕霧は色めかしい處はない人ぢや
(二一)御息所附の侍女の御息所にいひし詞、夕霧が心地惡しき故

の出で給へるを、霧深くて、某ばえ見わい(一)奉らざりつるを、この(二)法師ばらなむ、大將殿の出で給ふなりけり、昨夜も御車もかへして泊り給ひける、と口々申しつ(三)る。實にいとかうばじき香の滿ちて、頭痛きまでありつれば、實に(四)然なりけりと思ひあはせ侍りぬる。(五)常にいとかうばしう物し給ふ君なり。(六)この事いと切にもあらぬことなり。人は(七)いと有職にものし給ふ。某等も、童(八)にものし給ひし時より、かの君の御爲の事は、修法をなむ、(九)故大宮の宣ひつけたりしかば、一向に(一〇)さるべきこと、今に承る所なれど、(一一)いと益なし。本妻(一二)強くものし給ふ。(一三)さる時にあへる族類にて、いとやむごとなし。(一四)若君達は七八人になり給ひぬ。(一五)え御子の君推し給はじ。又女人(一六)のあしき身をうけ、長夜の闇に惑ふは、唯(一七)かやうの罪によりなむ、さるいみじき報をも受くるものなる。(一八)人の御怒出できなば、長き絆となりなむ。專らうけひかず」(一九)と、頭ふりて、たゞ言ひに言ひ放てば、御息所「いと怪しき事なり。(二〇)更にさる氣色にも見え給はぬ人なり。(二一)萬心地の惑ひにしかば、うち休みて對面せ

など、睦じう侍ふ限は、おのがどち思ひみだる。御息所もかけて知り給はず。物怪に煩ひ給ふ人(一)は、重しと見れど、さわやぎ(二)給ふ隙もありてなむ、物おぼえ給ふ。晝つかた、日中の御加持はてて、阿闍梨一人とゞまりて、猶陀羅尼讀み給ふ。(三)よろしうおはします悅びて、律師「大日如來虚言し給はずば、などてか、かく某が心をいたして仕うまつる御修法に、驗なき樣はあらむ。惡靈は執念きやうなれど、業障(四)にまつはれたる、はかなものなり」と、聲はかれて怒り(五)給ふ。いと聖だちすくすくしき律師にて、ゆくり(六)もなく、律師「そよや(七)、この大將は、いつよりこゝには參り通ひ給ふぞ」と問ひ給ふ。御息所「さる事も侍らず。故大納言(八)のいとよき中にて、語らひ(九)つけ給へる心違へじと、この年頃、さるべき事につけて、いと(一〇)怪しくなむ語らひ物し給ふも、かくふりはへ、煩ふを訪ひにとて立ち寄り給へりければ、辱く聞き侍りき」と聞え給ふ。律師「いであなかた(一一)は。某に隱さるべき事にもあらず。今朝(一二)後夜にまうのぼりつるに、かの西の妻戸より、いとうるはしき男

四　加持の僧御息所に夕霧の事を語る、御息所の推測と煩悶、痛からぬ腹を探らるゝ落葉宮の煩悶

(一)母御息所
(二)心持よき
(三)病氣の快き悅びをいひて
(四)己が犯したる罪に妨げられて成佛し得ぬつまらぬ奴なり
(五)物怪を怒る也
(六)突然と
(七)ほんにあの夕霧が落葉へ通ふは何時よりの事ぞ
(八)柏木
(九)交情を破らじとて
(一〇)珍らしく親切にして下さるれど
(一一)見つともない
(一二)私が今朝後夜の勤に參上したるに

せ給はざらむも、覺束なく若々しき樣にぞ侍らむ」など聞えて、ひろげたれば、
落葉「怪しう何心(一)もなき樣にて、人にかばかりにても見ゆるあはつけさの、自らのあやまちに思ひなせど、思ひやり(二)無かりしあさましさも、慰めがたくなむ。(三)え見ずとを言へ」と、(四)殊の外にて寄り臥させ給ひぬ。(五)さるは憎氣もなく、いと心深う書い給ひて、

夕霧(六)「たましひをつれなき袖にとゞめおきて我が心からまどはるゝかな

(七)外なるものはとか、昔も類ありけりと思ひ給へなすにも、更に行く方知らず(八)のみなむ。

など、いと多かゝめれど、人はえまほにも見ず。(九)例の氣色なる今朝の御文にもあらざゝめれど、猶え思ひはるけず。人々は(一〇)御氣色もいとほしきを、歎かしう見奉りつゝ、「いかなる(一一)御事にかはあらむ、何事に(一二)つけても、ありがたう哀なる御心ざまは程經ぬれど、かゝるかたに賴み聞えては、見おとりやし給はむと思ふも危く」

(一)うつかりして居て夕霧に逢ひたる不注意は自分の過なれど
(二)無遠慮なる夕霧の理不盡さも堪忍がならぬ
(三)此御手紙は見ぬと返事せよ
(四)以ての外の不機嫌にて
(五)夕霧の文の樣
(六)我魂は落葉の袖に置いて來た故何事もわからずぼんやりして居る
(七)「身をすてゝいにやしにけん思ふより外なるものは心なりけり」
(八)心の行方が分らぬ
(九)夕霧の文が當前の戀文めきたるものでなき事は分つて居ても侍女等はなほ合點がゆかず
(一〇)落葉の樣子が氣の毒げなるを
(一一)侍女等の心
(一二)萬事につけて夕霧が落葉に親切を盡すは長い事なれど、情人となりては見劣りがして却て夕霧の情が薄らぐかも知れぬ

(一)夕霧の夏冬の衣類を花散里が立派に用意しおく故
(二)未詳、甲の歟
(三)取出して
(四)源の前へ
(五)落葉へ
(六)落葉の心
(七)此樣な事のあらんとは母は夢にも知らぬ所へ自分がけしからず心配して居る樣子を見せ又他から母の耳に入りたらば
(八)自分を隔てゝ打明けぬと母に思はれるもつらければ
(九)いつそ侍女等が昨夜の事情を有の儘に母に語りてくれゝばよい
(一〇)落葉母子は
(一一)落葉はさういふ氣にはなれぬ
(一二)母に聞かれても實際密通でもした樣に心配するが物はなし
(一三)侍女同士
(一四)夕霧の手紙があけて見たけれど
(一五)返事なされぬも

たまふ。常に夏冬(一)といと淸らにしおき給へれば、かう(二)の御唐櫃よりとうでて(三)奉り給ふ。御粥などまゐりて、御前(四)に參り給ふ。

かしこ(五)に御文奉り給へれど、御覽じも入れず。俄に(六)あさましかりし有樣、めざましうも恥かしうも思すに、心づきなくて、御息所の漏り聞き給はむことも、いと恥かしう、又(七)かゝる事やとかけて知り給はざらむに、たゞならぬふしにても見づけ給ひ、人の物言ひかくれなき世なれば、自ら聞きあはせて、隔て(八)けると思さむが、いと苦しければ、人々(九)ありしまゝに聞えもらさなむ、憂しと思すとも、いかゞはせむ、と思す。親子の御中と聞ゆる中にも、露(一〇)へだてずぞ思ひかはし給へる。餘所の人は漏り聞けども、親に隱す類こそは、昔物語にもあめれど、さは(一一)た思されず。人々は、「何か(一二)はほのかに聞き給ひても、事しもあり顏に、とかく思し亂れむ、まだきに心苦し」などいひ合せて、いかならむと思ふ(一三)どち、この(一四)御消息のゆかしきを、ひきも開けさせ給はねば、心もとなくて、女房「猶むげに聞えさ(一五)

ふ。げにこの御名の、(一)たけからず漏りぬべきを、(二)心の問はむにだに、口清う答へむとおぼせば、いみじうもて離れ給ふ。

落葉「わけゆかむ草葉の露をかごとにて猶ぬれ衣をかけむとや思ふ

珍らかなる事かな」と、あばめ給へる樣、いとをかしう恥かしげなり。(三)年頃人に違へる心ばせ人になりて、さま〴〵になさけを見え奉る名殘なくうちたゆめ、すきずきしき樣なるが、いとほしう、心恥かしげなれば、疎ならず思ひかへしつゝ、(四)斯うあながちに隨ひ聞えても、後をこがましくやと、さま〴〵に思ひ亂れつゝ出で給ふ。道の露けさもいと所せし。

かやうのありきならひ給はぬ心地に、をかしうも心づくしにも覺えつゝ、(五)殿におはせば、(六)女君のかゝる濡を、あやしと咎め給ひぬべければ、六條院の東の(七)御殿にまうで給ひぬ。まだ朝霧もはれず、まして(八)彼處にはいかにと思しやる。「例ならぬ御ありきもありけり」と、人々はさゝめく。しばし打休み給ひて、御衣ぬぎかへ

(一)詮なく浮名が立つべけれど、自分にはやましい處はないと思ふ故

(二)「なき名ぞと人には言ひてありぬべし心の問はゞいかゞ答へん」

(三)夕霧の心、年來無類な堅人になりて色々深切を見せた甲斐なく、相手に油斷させて置いて好色の本性を出した樣に見ゆるのが氣の毒で

(四)無理に落葉のいふに隨ひて我慢して見ても却て馬鹿らしき結果になりはせぬかと

◎ 夕霧京に歸りて落葉宮に文を贈る

(五)三條邸へ行きたらば

(六)雲井雁が

(七)花散里の方

(八)小野の山里は

心ひとつに、斯うつよう思ふとも、人の物言ひいかならむ。(一)御息所の知り給はざらむも、罪得がましう、(二)かく聞き給ひて、心幼くと思し宣はむもわびしければ、落葉「明さでだに出で給へ」と、(三)やらひ聞え給ふより外のことなし。夕霧「あさましや。(四)ことあり顔にわけ侍らむ、朝露の思はむ所よ。猶さらば(五)思し知れよ。かうをこがましき様を見え奉りて、(六)かしこう賺い遣りつと思し離れむこそ、(七)その際は心もえをさめあふまじう、知らぬ事々(八)と、けしからぬ心づかひもならひはじむべう、思ひ給へ寄らるれ」とて、(九)いと後めたくなか〳〵なれど、(一〇)ゆくりかにあざれたる事の、誠にならはぬ御心地なれば、いとほしう、(一一)我が御自らも心劣りやせむなど思いて、誰が御爲にも顯なるまじき程の、霧に立ち隱れて、出で給ふ。心地そらなり。

夕霧「荻原や軒ばのつゆにそほちつゝやへたつ霧をわけぞゆくべき

(一二)濡衣は猶えほさせ給はじ。かう理なうやらはせ給ふ御心づからこそは」と聞え給

(一)夕霧に斯く對面したる事を
(二)母が後に聞きて今度の我が仕方をノ人げなしと評すべきもつらければ
(三)追出し口上をいふより外なし」
(四)本意も遂げぬに戀人の許から歸る様な風して行くは朝露の手前も恥かし
(五)御覺悟あれ
(六)君が甘くだまして私を追拂つたと思つて是ぎりになさる様ならば
(七)其時は堪忍袋の緒が切れて自分ながらどんな理不盡な事を仕出來すかも知れぬ様な心持がする
(八)此「と」衍文なるべし
(九)此後の成行が心配で出るにも出られねど
(一〇)附穂もないじやらつきはしつけぬ眞面目な夕霧なれば
(一一)其様な事をしては落葉にも氣の毒、自分も落葉から見下げられるかも知れぬと遠慮して
(一二)最早浮名の立つは避け難し、其も無理に我を追出さるゝ君の御心から也



(一)落葉が
(二)御安心あれ
(三)決して手は出さぬ
(四)落葉の樣子
(五)柏木
(六)夕霧が
(七)落葉が夕霧を柏木ほどには思ひ居らぬを夕霧が恨む
(八)落葉の
(九)以下落葉の心、柏木はまだ位も卑しかりしかど
(一〇)柏木が我を疎略にのみしたりき
(一一)夕霧と關係するはあるまじき事にて
(一二)夕霧は他人でもなく、雲井雁は柏木の妹
(一三)頭中などが何と思はれるならん
(一四)朱雀
(一五)關係ある人々の思はくを思ひまはせば
(一六)落葉の心、自分丈で操を守り居ても其は人に分らぬ事故、他人は何と評判するか分らぬ

(一)心強うもてなし給へど、はかなう引きよせ奉りて、夕霧「かばかり類なき志を御覽じ知りて、(二)心やすうもてなし給へ。御許あらでは、(三)更に〳〵」といとけざやかに聞え給ふ程、明方近うなりにけり。月隈なく澄みわたりて、霧にも紛れずさし入りたり。あさはかなる廂の軒は、ほどもなき心地すれば、月の顔に向ひたるやうなる、怪しうはしたなくて、(四)紛はし給へるもてなしなど、いはむ方なくなまめき給へり。(五)故君の御事も(六)少し聞え出でて、樣ようのどやかなる物語をぞ聞え給ふ。さすがに(七)猶かの過ぎにし方に思しおとすをば、怨めしげに恨み聞え給ふ。(八)御心のうちにも、(九)彼は、位などもまだ及ばざりける程ながら、誰も〳〵御ゆるしありけるに、自らもてなされて見馴れたまひにしを、(一〇)それだにいとめざましき心のなりにし樣よ。(一一)まして斯うあるまじき事に、(一二)餘所に聞くあたりにだにあらず、(一三)大殿などの聞き思ひ給はむことよ。なべての世の譏をば更にもいはず、(一四)院にもいかに聞召し思されむなど、(一五)離れぬ此處彼處の御心を思しめぐらすに、いと口惜しう、(一六)我が

こよなく思しおとしたるに、えなむ鎭めはつまじき心地し侍る。(二)世の中をむげに(一)思し知らぬにしもあらじを」と、萬に聞えせめられ給ひて、いかゞ言ふべきと侘しう(三)思しめぐらす。(四)世を知りたる方の心安きやうに、折々ほのめかすも、めざましう、實に類なき身の憂さなりやと、思しつゞけ給ふに、死ぬべくおぼえ給うて、

落葉「(五)憂き自らの罪を、思ひ知るとても、いと斯うあさましきを、いかやうに思ひなすべきにかはあらむ」と、いとほのかに哀げに泣い給ひて、

落葉「(六)我のみやうき世を知れるためしにてぬれそふ袖の名をくたすべき

と宣ふともなきを、(七)我が心につゞけて忍びやかに打ち誦じ給へるも、(八)かたはらいたく、如何に言ひつる事ぞと思さるゝに、夕霧「(九)實にあしう聞えつかし」など、ほゝ笑み給へる氣色にて、

夕霧「(一〇)大かたはわがぬれぎぬをきせずともくちにし袖の名やはかくるゝ

(一一)ひたぶるに思しなりねかし」とて、月あかき方に誘ひ聞ゆるも、(一二)あさましと思す。

(一)私を貴方が輕蔑されるので却て我慢が出來ず無理な事もしたくなる樣な心地がする
(二)男女の情は御存知ないでもなからうに
(三)落葉が
(四)落葉の心、男女の情を知り居る故相手にし易い樣な事を夕霧が言ふのがけしからず思はれて
(五)柏木に添ひて男女の情を味ひたるが我が罪であるとしても、斯迄ひどい夕霧の御仕打を何と分別してよいやら
(六)柏木に逢ひたる上に又夕霧に逢ひて只管に我が器量を下ぐべきに非ず
(七)腹の中で綴りて
(八)自分で自分の行を傍痛く思ふ也
(九)惡い事を申上げました
(一〇)斯くなりたる上は假令私が強ひて立てずとも御浮名は隱れなかるべし
(一一)其樣な事は顧みずして度胸をすゑて逢うて下され
(一二)落葉が

(一)役にも立たぬ防禦なれど
(二)せめて是丈の隔てでもしておきたしと
(三)勝手な振舞はせず
(四)夕霧
(五)是も夕霧の容姿をいふ
(六)素朴なる心なしの人間でも
(七)戸締りもせず
(八)私の情を酌んで下さらぬ御樣子を見て却つて御心が深くない樣に思はる
(九)私の變屈な程に馬鹿正直な事は無類と思はれるに
(一〇)輕々しき人こそ私の樣な者を馬鹿者と笑ひて

給へるは、いと(一)物はかなきかためなれど、引きもあけず。夕霧「(二)かばかりのけぢめをと、強ひて思さるらむこそ哀なれ」と、うち笑ひて、(三)うたて心のまゝなる樣にもあらず。(四)人の御有樣の、なつかしうあてになまめい給へること、さはいへど殊に見ゆ。(五)世と共にものを思ひ給ふけにや、痩せ〳〵にあえかなる心地して、うちとけ給へるまゝの御袖のあたりもなよびかに、氣近うしみたる匂など、とり集めてらうたげに、柔なる心地し給へり。

風いと心ぼそう更け行く夜の氣色、蟲の音も、鹿のなく音も、瀧の音も、ひとつに亂れて艶なる程なれば、(六)唯ありのおはつけ人だに、寢覺しぬべき空の氣色を、(七)格子もさながら、入り方の月の山の端近きほど、とめがたう物哀なり。夕霧「なほ(八)斯うおほし知らぬ御有樣こそ、かへりては淺う御心の程知らるれ。(九)かう世づかぬまで、しれ〴〵しき後安さなども、類あらじと覺え侍るを、(一〇)何事にもかやすき程の人こそ、かゝるをば、しれものなど打笑ひて、つれなき心もつかふなれ、あまり

(一)飛んでもない御心底
(二)唯是丈の事をして居るのを其樣にけしからず思はれる筈がない
(三)私は卑しき身なれども私の切なる思は隨分前から御承知の筈
(四)おちついて
(五)落葉が
(六)斯く迄不意に近附かれたる事よと悔しく思ふ心が一杯故
(七)是以上近づく事は御得心がなければせぬ
(八)我が切なる志は御存じの筈なるに
(九)餘儀なく此樣な事もする
(一〇)見さかひが無く
(一一)此儘本望を遂げずに仕舞ふ歎かしさを聞いて戴きたさにする事也
(一二)何と言つてよいか分らぬ落葉の御樣子が恨めしけれど、勿體なければ此以上の事はせぬ
(一三)落葉が

あさましう、(一)思ひ給へよらざりける御心の程になむ」と、泣きぬばかりに聞ゆれど、夕霧「(二)かばかりにて侍はむが、人よりけに疎ましう、めざましう思さるべきにやは。(三)數ならずとも、御耳なれぬる年月も重りぬらむ」とて、いとのどやかに樣よ(四)くもてしづめて、思ふ事を聞え知らせ給ふ。(五)聞き入れ給ふべくもあらず、悔しう、(六)かくまでと思す事のみ、やるかたなければ、宣はむ事はたまして覺え給はず。夕霧「いと心憂く若々しき御樣かな。人知れぬ心にあまりぬる、すきずきしき罪ばかりこそ侍らめ、(七)これより狎れ過ぎたる事は、更に御心ゆるされでは御覽ぜられじ。いかばかり、千々に碎けはべる思に堪へぬぞや。さりとも(八)自ら御覽じ知るふしも侍らむものを、強ひておぼめかしう、氣疎うもてなさせ給ふめれば、聞えさせむ方なさに、(九)いかゞはせむ。(一〇)心地なく憎しと思さるとも、(一一)かうながら朽ちぬべきうれへを、さだかに聞え知らせ侍らむとばかりなり。(一二)言ひ知らぬ御氣色のつらきものから、いと辱ければ」とて、あながちに情深う用意し給へり。(一三)障子をおさへ

て、承りて立ちぬ。さて、夕霧「道いとたど〳〵しければ、このわたりに宿かり侍る。おなじうは、(一)この御簾のもとに許されあらなむ。(二)阿闍梨のおるゝ程までなむ」と、(三)つれなく宣ふ。例はかやうに長居して、(四)あざればみたる氣色も見え給はぬを、うたてもあるかな、と宮はおぼせど、(五)ことさらめきて、(六)輕らかにあなたにはひ渡り給はむも樣あしき心地して、唯音せでおはしますに、(七)とかく聞えよりて、(八)御消息聞えつたへにゐざりいる人のかげにつきて入り給ひぬ。まだ夕暮の霧にとぢられて、内は暗くなりにたる程なり。あさましうて(九)見かへりたるに、宮はいとむくつけうなり給ひて、北の御障子の外にゐざり出でさせ給ふを、(一〇)いとようたどりて、ひきとゞめ奉りつ。(一一)御身は入りはて給へれど、御衣の裾の殘りて、(一二)障子はあなたより鎖すべき方なかりければ、ひき閉てさして、水のやうに戰きおはす。人々もあきれて、いかにすべき事とも思ひ得ず。こなたよりこそ鎖す錠などもあれ、(一三)いと理なくて、(一四)荒々しくは、え引きかなぐるべく、はたものし給はねば、人々「いと

(一)此處に泊ることを許して戴きたし
(二)阿闍梨の勤がすみて下る時分まで居りたし
(三)何氣なく
(四)色めかしき樣子
(五)わざとらしく
(六)母の方へ行つて仕舞ふのも不體裁に思ひて
(七)夕霧が何とかかとか言草をこしらへて
(八)取次に簾内に入る侍女の後について夕霧も簾内に入りたり
(九)取次の女が夕霧を
(一〇)夕霧がうまく探り寄りて
(一一)落葉の身體は襖の向ふに入りて仕舞ひたれど裾が此方に殘りて
(一二)向ふからは錠を下すことが出來ぬ襖故
(一三)向ふからは錠を下す事が出來ぬ故仕方がなくて
(一四)夕霧の人柄が無暗に引退ける事も出來ぬ人柄故



かな。家路は見えず、(一)霧の籬は、立ちとまるべうもあらず、やらはせ給ふ。(二)つきなき人はかゝる事こそ」などやすらひて、(三)忍び餘りぬる筋もほのめかし聞え給ふに、年頃もむげに(四)見知り給はぬにはあらねど、知らぬ顔にのみもてなし給へるを、かく言に出でて恨み聞え給ふを、煩はしうて、いとゞ御答もなければ、(五)いたう歎きつゝ、心のうちに、(六)又かゝる折ありなむやと思ひめぐらし給ふ。(七)情なうあはつけき者には思はれ奉るとも、いかゞはせむ、思ひわたる様をだに知らせ奉らむ、と思ひて、人を召せば、(八)御司の將監よりかうぶり得たる、睦まじき人ぞ參れる。忍びやかに召し寄せて、夕霧「この律師に必ず言ふべき事のあるを、(九)護身などに暇なげなめるを、只今はうち休むらむ。今宵このわたりに宿りて、(一〇)初夜の時はてむ程に、かの居たる方に物せむ。(一一)これかれ侍はせよ。隨身などの男どもは、栗(一二)栖野の庄近からむ。(一三)秣などとり飼はせて、こゝに人あまた聲なせそ。かうやうの旅寢は、(一四)輕々しきやうに、人もとりなすべし」と宣ふ。あるやうあるべしと心得

(一)こゝには泊る事の出來ぬ樣に追ひ出しなさる
(二)色事に不適當な私如き者はこんな場合にまごつく
(三)落葉に對する戀
(四)落葉も丸で感附かぬでもなければど
(五)夕霧が
(六)此樣な機會は滅多になしと
(七)情なく思遣りのない奴と落葉に思はれても仕方がない、夕霧の心
(八)右近衞將監にて五位に叙せられたる
(九)律師は御息所の加持に忙しさうなるが
(一〇)初夜の時の勤の終る時分に律師を訪ふべし
(一一)誰彼はこゝに居らせよ
(一二)夕霧の領地
(一三)栗栖野へ行きて馬に秣を與へなどさせて此處には大勢居らぬ樣にせよ
(一四)用心せねば夕霧がつまらぬ忍び歩きでもする樣に噂するならん

ろし心凄く、松の響木深く聞えわたされなどして、不斷經讀む時かはりて、鐘打ちならすに、立つ聲も居代るも、一つにあひて、いと尊く聞ゆ。(一)所から萬のこと、心ぼそう見なさるゝも、(二)哀に物思ひつゞけらる。出で給はむ心地もなし。律師も加持する音して、陀羅尼いと尊く讀むなり。(三)いと苦しげにし給ふなりとて、人々もそなたに集ひて、大方もかゝる旅所に、數多參らざりけるに、いとゞ人少にて、宮は眺め給へり。しめやかにて、(四)思ふ事も打ち出でつべき折かなと、思ひ居給へるに、霧のたゞこの軒のもとまで立ち渡れば、夕霧(五)「まかでむ方も見えずなりゆくは、いかゞすべき」とて、

夕霧 山里のあはれをそふる夕霧にたち出でむそらもなき心地して

ときこえ給へば、

落葉 山賤のまがきをこめて立つ霧も(六)こゝろそらなる人はとゞめず

ほのかに聞ゆる御けはひに慰めつゝ、(七)誠にかへるさ忘れはてぬ。夕霧(八)「中空なるわざ

(一)代りあひて絶えず經を讀む僧の交代の時間で
(二)夕霧が
(三)御息所が苦痛せられるとて
(四)我が胸を打明けるに丁度よき機會と夕霧が思ひ居たるに
(五)歸り路が分らなくなるのを如何すべき
(六)君の如き浮氣な人を誰がとめるものか
(七)夕霧が
(八)どちらつかずにて困つた事哉

（一）夕霧があれ程に播口說かれるに御返事がなくては御聞分のない樣に思はれる
（二）母に代りて私が御挨拶申上ぐる筈なれど、母の容態が非常に惡かりしを看護し居る内に自分迄が心地勝れずして御挨拶申上げぬ
（三）畏まりたる也
（四）御息所の御病氣を私が身にかへて心配するをどういふ譯と思召すぞ
（五）御息所の心持が爽かにならるゝ迄は落葉が達者で居らるのが皆の爲と思ふ故斯く心配もする譯也
（六）其を只御息所の方のみを私が心配する樣に取られて、私の落葉に對する志を見て下されなくてはつまらぬ

聞え出でむは、恥かしう」などつきじろひて、侍女（一）「かゝる御うれへ聞召し知らぬ樣なり」と、宮に聞ゆれば、落葉（二）「自ら聞え給はざめるかたはらいたさに、代り侍るべきを、いと怖ろしきまで物し給ふめりしを、見あつかひ侍りし程に、いとゞあるかなきかの心地になりてなむ、え聞えぬ」とあれば、夕霧「こは宮の御消息か」と居なほりて、（三）夕霧（四）「心苦しき御惱を、身に替ふばかり歎き聞えさせ侍るも、何のゆゑにか。辱けれど、（五）物を思し知る御有樣など、はれ〴〵しき方にも見奉りなほし給ふまでは、たひらかに過し給はむこそ、誰が御爲にも頼もしき事には侍らめと、推し量り聞えさするによりなむ。唯あなたざまに思し讓りて、積り侍りぬる志をも、知しめされぬは、本意なき心地なむ（六）」と聞え給ふ。「實に」と人々も聞ゆ。

日入り方になりゆくに、空の氣色も哀に霧りわたりて、山の蔭は小暗き心地するに、蜩鳴きしきりて、垣ほに生ふる撫子の、打ち靡ける色もをかしう見ゆ。御前の前栽の花どもは、心に任せて亂れあひたるに、水の音いと涼しげにて、山お

(一)落葉
(二)落葉の樣子が夕霧の方へ知れる
(三)落葉に違なしと思ひて夕霧が聞き居たり
(四)夕霧が
(五)母御息所の方への口上の取次が間がある隙に
(六)母御息所の姪
(七)柏木死して三年になる也
(八)落葉が他人あしらひにせられるのが恨めしい
(九)此樣な目にまだ逢うた事がない
(一〇)我が此古風な堅くるしさを見て嘲人々が笑はるゝならんと極が惡し
(一一)若くて身分の輕い時分でも
(一二)私の樣に野暮に阿呆らしく暮し居る人は
(一三)夕霧の樣子が如何にも尤らしければ、侍女等が夕霧の意を推量して

給ふる心の程よりは、こよなくおろかに御覧ぜらるゝことの、苦しう侍る」など、聞え給ふ。(一)宮は奥の方にいと忍びておはしませど、こと〴〵しからぬ旅の御しつらひ、淺きやうなる御座の程にて、(二)人の御けはひ自らしるし。いと柔に打ちみじろきなどしたまふ御衣の音なひ、(三)さばかりなりと聞き居給へり。(四)心も空におぼえて、(五)あなたの御消息通ふほど、少し遠う隔たるひまに、例の(六)少將の君など、さぶらふ人々に物語などし給ひて、夕霧「かう參り來なれ承る事の、(七)年頃といふばかりになりにけるを、(八)こよなう物遠うもてなさせ給へる怨めしさなむ。かゝる御簾の前にて、人傳の御消息などの、ほのかに聞え傳ふることよ。(九)まだこそならはね。(一〇)いかに古めかしき樣に、人々ほゝゑみ給ふらむと、はしたなくなむ。(一一)齡積らず輕らかなりし程に、ほの好きたる方に面馴れなましかば、かううひ〳〵しうも覺えざらまし。更に(一二)かばかりすく〴〵しう、おれて年經る人は、類あらじかし」と宣ふ。(一三)實にいと侮りにくげなる樣し給へれば、さればよと、侍女「なか〳〵なる御答

ならねど、(一)松が崎の尾山の色なども、(二)さる巖ならねど、秋の氣色づきて、(三)都に二なくとつくしたる家居には、猶哀も興もまさりてぞ見ゆるや。(四)はかなき小柴垣も、故あるさまにしなして、假初なれどあてはかに住ひなし給へり。寢殿とおぼしき東の(五)放出に、修法の壇ぬりて、北の廂に(六)おはすれば、西面に(七)宮はおはします。(八)御物怪むづかしとて、とゞめ奉り給ひけれど、いかでか離れ奉らむと、慕ひわたり給へるを、(九)人にうつり散るを怕ぢて、少しの隔ばかりに、(一〇)あなたには渡し奉り給はず、客人の居給ふべき處の無ければ、宮の御方の簾の前に入れ奉りて、上﨟だつ人々、御消息聞え傳ふ。御息所「いと辱く、(一一)かうまで宣はせ渡らせ給へるをなむ。若し(一二)かひなくなりはてて侍りなば、このかしこまりをだに聞えさせでやと、思ひ給ふるになむ、今しばし(一三)かけとゞめまほしき心つき侍りぬる」と、聞え出し給へり。夕霧(一四)渡らせ給ひし御送にもと思ひ給へしを、六條院に承りさしたる事侍りし程にてなむ。日頃もそこはかとなく紛るゝこと侍りて、(一五)思ひ

(一)比叡の山麓の地名
(二)格別な巖でもなけれど
(三)數寄をこらしたる邸の庭よりも
(四)山莊の様
(五)造り出したる間
(六)母御息所が
(七)落葉
(八)物怪に觸れぬ樣に落葉を京に留れと御息所が勸めたれど
(九)物怪が
(一〇)此の庇の間へは落葉を入れず
(一一)斯く遠方迄御見舞下さるを有難く思ふ
(一二)此儘死にたらば此御禮も申上ずに仕舞ふのかしらと
(一三)命を取留めたき
(一四)御引移の際の御見送にも參り度く思ひしに
(一五)思ふ程は行届かず非常に無禮を申上げ居るが心苦し

はまうで訪ひ給はずなりにけり。この君は（一）、いとかしこう、さりげなく聞え馴れ（二）給ひにたゝめり。修法（三）などせさせ給ふと聞きて、僧の布施淨衣（四）などやうの、細なるものをさへ奉れ（五）給ふ。なやみ給ふ人はえ聞え（六）給はず。なべての（七）宣旨書は、ものしと思しぬべく、ことぐ\しき御樣なりと、人々聞ゆれば、宮（八）ぞ御かへり聞え給ふ。御手（九）はいとをかしげにて、唯一行など、おほどかなる書きざま、言葉もなつかしき所かきそへ給へるを、いよ\/（一〇）見まほしう目とまりて、繁う聞えかよひ給ふ。なほ（一一）遂にある樣あるべき御中らひなめりと、北の方けしきとり給へれば、煩はしくて、まうで（一二）まほしう思せど、頓にえいで立ち給はず。

八月中の十日ばかりなれば、野邊の氣色もをかしき頃なるに、山里の有樣のいとゆかしければ、夕霧「某律師（一三）の珍しう下りたゝ（一四）なるに、切に語らふべき事あり。御息所のわづらひ給ふなるも訪ひがてら、まうでむ」と、大方（一五）にぞ聞えごちて出で給ふ。御前ことぐ\しからで、したしき限五六人ばかり、狩衣にて侍ふ。殊に深き（一六）道

（一）夕霧は
（二）何氣なく懇意になりたり
（三）山莊にて
（四）修法の時下々の者の著る料
（五）夕霧から
（六）母御息所は返事せず
（七）つまらぬ處へやる樣な侍女の代筆では夕霧が不快なるべく又餘り勿體らしと
（八）落葉
（九）落葉の返事の文面が
（一〇）夕霧が尚此上にも落葉の文が見たく
（一一）此分では仕舞には落葉とよい中になるのであらうと雲井雁が感附きたる故面倒で
（一二）夕霧が小野へ行きたけれど急には出にくし

㊂　夕霧御息所の病を訪ふ、落葉宮に戀を打明く

（一三）御息所の賴みたる僧
（一四）山から
（一五）よい加減に口實を設けて
（一六）山深き

給ひける。御息所(一)も、哀にありがたき御心(二)ばへにもあるかなと、今はいよ〳〵物淋しき御徒然を、絶えずおとづれ給ふに、慰め給ふ事ども多かり。初(三)より懸想びても聞え給はざりしに、ひきかへし懸想ばみなまめかむもまばゆし、唯深き志を見え奉りて、打解け給ふ折もあらじやは、と思ひつゝ、さるべき事につけても、宮(四)の御けはひ有樣を見給ふ。(五)自らなど聞え給ふことは更になし。如何(六)ならむ序に、思ふことをも(七)まほに聞え知らせて、人の御けはひをも見むと思し渡るに、御息所物怪にいたう煩ひ給ひて、小野といふわたりに、山里(八)持給へるに渡り給へり。(九)早うより御祈(一〇)の師にて、物怪など拂ひ捨てける律師の、山ごもりして、里に出でじと誓ひたるを、麓(一一)近くて、請じおろし給ふ故なりけり。御車よりはじめて、御前など、大將(一二)殿よりぞ奉れ給へる。なか〳〵誠の昔の近き(一三)ゆかりの君達は、事わざしげき己がじしの營に紛れつゝ、得しも(一四)思ひいで聞え給はず。辨の(一五)君はた、思ふ(一六)心なきにしもあらで、氣色ばみけるに、殊の(一七)外なる御もてなしには、強ひて

(一)落葉の母
(二)夕霧の
(三)夕霧の落葉に對する心、初から色無の沙汰ではなかりし故今更打つて變つて色氣を見せるは極り惡し
(四)落葉の
(五)落葉自身夕霧に挨拶する事は丸でなし
(六)夕霧の心
(七)有直に話して落葉の樣子を見る事が出來るかと
(八)山荘
(九)山荘に行きたる理由は
(一〇)母御息所の
(一一)此山荘は其籠れる山の麓の近處にて、其處の律師を呼びたれば也
(一二)夕霧
(一三)柏木の兄弟等
(一四)氣がつかず
(一五)紅梅、柏木の弟
(一六)落葉に氣が無いでもなくて
(一七)取つても附かれぬ落葉の態度に避易して

夕霧

梗概

〔一〕落葉宮に對する夕霧の戀。母御息所病によりて小野の山莊に移る。夕霧の世話。〔二〕夕霧、御息所の病を訪ふ。落葉宮に戀を打明く。〔三〕夕霧京に歸りて文を落葉宮に贈る。〔四〕加持の僧、御息所に夕霧の事を語る。御息所の推測と煩悶。痛からぬ腹を探らるゝ落葉宮の煩悶。〔五〕夕霧の文、御息所の返事。〔六〕夕霧、雲井雁に御息所の返事を奪はる。夕霧の返事。御息所の愁嘆。〔七〕御息所逝去。葬送。夕霧の手厚き世話。〔八〕夕霧の落葉宮に對する慰問。〔九〕夕霧、小野の山莊に落葉宮を訪ふ。容易に靡かぬ落葉宮。〔十〕雲井雁の嫉妬。夕霧の戀彌ゝ切なり。〔十一〕源氏、夕霧を誡めんとして果さず。〔十二〕朱雀院、落葉宮の出家を止む。夕霧、落葉宮を一條邸に歸らしめんとす。〔十三〕落葉宮一條邸に歸る。塗籠に籠りて夕霧を拒む。〔十四〕夕霧、花散里と女を批評す。〔十五〕雲井雁の嫉妬。夕霧又一條邸に行く。〔十六〕猶打解けぬ落葉宮。夕霧終に塗籠に入る。〔十七〕雲井雁怒りて父の邸に歸る。夕霧迎へに行く。〔十八〕頭中將、落葉宮に文を贈る。〔十九〕藤内侍文を贈りて雲井雁を慰む。

〔一〕 落葉宮に對する夕霧の戀、母御息所病によりて小野の山莊に移る、夕霧の世話

(一)堅人といふ評判をとりて
(二)夕霧
(三)落葉宮の樣子が氣に入り惚れ込みて
(四)舊交を忘れぬといふ風に見せて

(一)まめ人の名をとりて、さかしがり給ふ大將(二)、この一條(三)の宮の御有樣を、なほあらまほしと心に留めて、大方の人目には、昔を(四)忘れぬ用意見せつゝ、いと懇にとぶらひ聞え給ふ。下の心には、かくては止むまじくなむ、月日に添へて思ひまさり

(一)秋好
(二)讓位後却つて
(三)冷泉に附切りにして
(四)秋好が不足の事はなけれど
(五)尼になる事は
(六)秋好と心を合せて
(七)法華八講

(一)中宮ぞ、(二)なか〳〵罷出給ふ事もいと難うなりて、たゞ人の中のやうに(三)ならびおはしますに、今めかしう、なか〳〵昔よりも花やかに、御遊をもし給ふ。(四)何事も御心やれる有様ながら、唯かの御息所の御事を思しやりつゝ、行の御心すゝみにたるを、(五)人のゆるし聞え給ふまじきことなれば、功徳のことを、たてて思し營み、いとゞ心深う、世の中を思し取れるさまになり勝り給ふ。(六)六條院にも諸心に急ぎ給ひて、(七)御八講など行はせ給ふとぞ。

のから、玉の簪捨てさせ給はむも、(一)この世には怨残るやうなるわざなりや。や(二)うやうさる御志をしめ給ひて、かの御烟はるくべき事をせさせ給へ。(三)しか思ひ給ふること侍りながら、物騒しきやうに、靜なる本意も無きやうなる樣に、明け暮し侍りつゝ、自らのつとめに添へて、(四)今靜にと思ひ給ふるも、實にこそ心幼きことなれ」など、世の中なべてはかなく、厭ひ捨てまほしきことを、聞えかはし給へど、猶やつしにくき御身の有樣どもなり。(五)

昨夜はうち忍びてかやすかりし(六)御ありき、今朝はあらはれ給ひて、上達部なども、參り給へる限は皆御おくり仕う奉り給ふ。東宮の女御(七)の御有樣のならびなく、齋きたて給へるかひぐしさも、大將(八)のまたいと人に異なる御樣をも、いづれとなくめやすしと思す(九)に、猶この冷泉院を思ひ聞え給ふ御志(一〇)は、勝れて深く哀にぞおぼえ給ふ。院(一一)も常にいぶかしう思ひ聞えたまひしに、御對面(一二)の稀にいぶせうのみ思されけるに、急がされ給ひて、かく心安きさまにと思しなりにけるになむ。

(一)出家するも殘念也
(二)尼にならずとも心に菩提を希ひて母の後世を助くべき功徳を積み給へ
(三)自分も其をしたしとは思ひながら
(四)出家でもしてから自分の爲の功徳に合せて御息所の追善をも行ふべしと思ひ居るも幼稚な考ずや
(五)源も秋好も今の盛の身では中々出家は出來にくさう也
(六)たやすかりし
(七)明石姫君
(八)夕霧
(九)源が
(一〇)源の
(一一)冷泉も常に源をゆかしく思ひ居たりしに
(一二)在位の儘では源に興逢ふ事も叶はず氣がかり故急ぎて讓位もありし也

(一)死後迄人に嫌はるゝ樣な死靈になりて現れし事を源は隱したれど
(二)秋好が
(三)死靈が名のりし時の事を委しく聞きたけれど
(四)六條御息所
(五)死靈の現はれし事
(六)死靈になりて現はれずとも罪深からんとは思はるべきなれど
(七)只死別の悲に紛れて母の死後の事迄は思ふ暇なかりしは腑甲斐なき事なれば「物はかなきを」とあるべき語勢也
(八)よく說法しくれる僧の敎を受けて、せめて私が佛に仕へて母の苦患を助けたしと
(九)年の
(一〇)遁まはしに
(一一)源の心
(一二)誰も死後の罪は恐ろしながらも命のある間は世を捨て兼るが常也
(一三)母の死後の苦を救はん爲に盂蘭盆會を始めたる也

の中に惑ひ給ふらむ、亡きかげにても、人にうとまれ奉り給ふ御名のりなどの、出で來たりける事、かの(一)院にはいみじう隱したまひけるを、自ら人の口さがなくて、傳へ(二)聞しめしける後、いと悲しういみじくて、なべての世の厭しく思しなりて、かりにても、(三)かの宣ひけむ有樣の委しう聞かまほしきを、まほにはえ打ち出で聞え給はで、たゞ、秋好(四)「亡き人の御有樣の、罪輕からぬ樣に、(五)ほの聞く事の侍りしを、(六)然るしるし現ならでも、推し量りつべき事に侍りけれど、(七)後れし程の哀ばかりを忘れぬ事にて、物のあなた思ひ給へやらざりけるが物はかなさを、(八)いかでよう言ひ聞かせむ人の、すゝめをも聞き侍りて、自らだに彼の焰をも醒し侍りにしがなと、やう〱(九)積るになむ、思ひ知らるゝ事もありける」など、(一〇)かすめつつぞ宣ふ。(一一)實にさも思しぬべき事と、哀に見奉り給ひて、源(一二)「その焰なむ、誰も遁れまじきことと知りながら、朝露のかゝれるほどは、思ひ捨てられ侍らぬになむ。目蓮が佛に近き聖の身にて、(一三)たちまちに救ひけむ例にも、え繼がせ給はざらむも

(一)内裡住居の頃よりも却て御無沙汰勝な昨今の體たらくが案外で嫌で
(二)人が背く此世を我も嫌になる事もあれどまだ私の了簡を君に申上げぬ故、何事も第一に君を便りにして居る私の心では氣がすまぬ
(三)中宮たりし時分は、長くは出來ぬにしても御宿下りを時々は待ち受ける事も出來たりしに
(四)御宿下り
(五)御身の如く別に不足のなき人は
(六)さつぱりと
(七)遁世しても別に殘念な事もなき身分の者でさへ心に掛る事多くて出家は出來難きに、御身抔が人眞似に尼にならんとは以ての外で人からつまらぬ疑を受ける種になる
(八)秋好の心、源が我が心を
(九)秋好の心、六條御息所が冥途にて責苦を受くる樣子は

へ」など、まめやかなる様に聞えさせ給ふ。例のいと若うおほどかなる御けはひにて、秋好「九重(一)のへだて深う侍りし年頃よりも、覺束なさの勝るやうに、思ひ給へらるゝ有様を、いと思の外にむづかしうて、(二)皆人の背き行く世を、厭はしう思ひなる事も侍りながら、その心のうちを聞えさせ承らねば、何事もまづ頼もしきかげには聞えさせならひて、いぶせく侍る」と聞え給ふ。源「實に、(三)おほやけざまにては、限ある折節の御里居も、いとよう待ちつけ聞えさせしを、今は何事につけてかは、御心に任せさせ給ふ(四)御移も侍らむ。定なき世と言ひながらも、(五)さして厭はしき事なき人は、(六)さわやかに背き離るゝも有難う、(七)心やすかるべき程につけてだに、自から思ひかゝづらふ絆のみ侍るを、などかその人眞似にきほふ御道心は、かへりて僻々しう、推量り聞えさする人もこそ侍れ。かけてもいとあるまじき御事になむ」と、聞え給ふを、(八)深うも汲みはかり給はぬなめりかしと、つらう思ひきこえ給ふ。(九)故御息所の、御身の苦しうなり給ふらむありさま、如何なる煙

(一)冷泉の年とりて整へる容貌彌々源にそつくり也
(二)來訪の人々の感想
(三)詩も歌も
(四)十分聞き取り得ず一端を傳ふる丈では
(五)詩などをよみあげて
(六)秋好
(七)準太上天皇にて眞の太上天皇でもなく平人にてもなきをいふ
(八)誰來訪するも極り惡く
(九)朧月夜など我より若き人々に出家を魁けられて
(一〇)じつとしては居られぬ心持する故
(一一)出家して閑居したしと
(一二)我が後に殘る明石姫君杯の役にも立たぬを世話して下されと前々ら頼みたる其趣意を空しくせずに氣をつけてやつて下され

待ち悦び聞え給ふ。(一)ねびとゝのひ給へる御容貌、いよ〳〵ことものならず。いみじき御盛の世を、御心と思し捨てて、しづかなる御有様に、(二)哀すくなからず。その夜の歌ども、(三)唐のも大和のも、心ばへ深う面白くのみなむ。例の(四)事足らぬかたはしは、まねぶもかたはら痛くてなむ。明方に(五)文など講じて、疾く人々まかゝで給ふ。

六條院は、(六)中宮の御方に渡り給ひて、御物語など聞え給ふ。「今はかう靜なる御住居に、しば〳〵も參りぬべく、何とはなけれど、過ぐる齢に添へて、忘れぬ昔の御物語など、承り聞えまほしう思ひ給へるに、(七)何にもつかぬ身の有様にて、(八)流石にうひ〳〵しく、所せくも侍りてなむ。(九)我より後の人々に、方々につけて後れ行く心地し侍るも、いと常なき世の心細さの、(一〇)のどめ難うおぼえ侍れば、(一一)世離れたる住居にもやと、やう〳〵思ひ立ちぬるを、のこりの人々の物はかなからむ、たゞよはし給ふなと、さき〴〵も聞えつけし、(一二)心違へず思し留めて、物せさせ給

(一)冷泉が
(二)來よと言ひ越されしは勿體なし
(三)冷泉へ
(四)冷泉は昔にかはらぬ御有様なれども、我身は今は昔の様にもあらず
(五)別に面白き歌でもなけれど、只今昔の感を有の儘に述べたるなり
㊃ 源氏、冷泉院を訪ふ、秋好出家の望、源氏の諫止
(六)順序をたてゝ向きを立て替へ、冷泉院へ打連れて行くべき準備
(七)源の車に螢が同乘し
(八)夕霧
(九)源と螢と二人也、直衣に下襲を著するは身分高き人に限れりとぞ
(一〇)儀式張る必要ある時には
(一一)嚴めしく堅くろしき儀式を具へて
(一二)源が
(一三)冷泉が

は(一)のどやかにおはしますに、參り馴るゝ事もをさ〳〵なきを、本意なき事に思しあまりて(二)驚かさせ給へる、辱し」とて、俄なる様なれど、(三)參り給はむとす。

源(四)月かげはおなじ雲井に見えながらわが宿からの秋ぞかはれる

(五)異なることなかゝめれど、たゞ昔今の御有様の、思し續けられけるまゝなゝめり。御使にさかづき賜ひて、祿いと二なし。

人々の御車次第(六)のまゝにひき直し、御前の人々立ちこみて、靜なりつる御あそび紛れて、出で給ひぬ。(七)院の御車に、親王奉り、(八)大將、左衞門督、藤宰相など、おはしけるかぎり皆參り給ふ。直衣にて輕ろかなる御装どもなれば、(九)下襲ばかり奉り加へて、月やゝさしあがり、更けぬる空おもしろきに、わかき人々、笛などわざとなく吹かせ給ひなどして、忍びたる御參のさまなり。(一〇)うるはしかるべき折ふしは、(一一)所せくよだけき儀式を盡して、互に御覽ぜられ給ふ。又古のたゞ人ざまに思しかへりて、今宵は輕々しき様に、(一二)ふとかく參り給へれば、(一三)いたう驚き

(一)白樂天の句、「三五夜中新月色、二千里外故人心」
(二)思ひやちるれ
(三)柏木
(四)彼が死後は
(五)趣を解し
(六)如何にもしをらしかりしに
(七)女三も此噂を注意して聞き居るならんと一方では思ひながらも
(八)柏木を
(九)二めぐり許
(一〇)以下御消息ありたる理由をいふ
(一一)紅梅
(一二)わが位を遁れたる後の棲所にも月は相變らずさし入る
(一三)同じくば來てもらひたしの意、「あたら夜の月と花とを同じくば心知れらん人に見せばや」
(一四)自分はどれ程出入に窮屈な身分でもないに

をりは無き中に、今宵(一)の新なる月の色には、實に猶我が世の外までこそ、よろづ(二)思ひ流さるれ。故權大納言(三)、何の折々にも、亡きにつけていとゞ偲ばるゝ事多く、(四)おほやけわたくし、物の折ふしの匂亡せたる心地こそすれ。花鳥の色にも音にも(五)思ひわきまへ、いふかひある方の、いとうるさかりし(六)ものを」など宣ひ出でて、自らもかき合せ給ふ御琴の音にも、袖ぬらし給ひつ。(七)御簾の内にも、耳留めてや聞き給ふらむと、片つ方の御心にはおぼしながら、かゝる御遊の程にはまづ戀し(八)う、内裏などにもおぼし出でける。源「今宵は鈴蟲の宴にて、明してむ」と思しのたまふ。御土器(九)ふたわたりばかり參る程に、冷泉院より御消息あり。(一〇)御前の御あそび俄にとまりぬるを口惜しがりて、左大辨(一一)、式部大輔、又人々ひきゐて、さるべき限參りたれば、大將などは、六條院にさぶらひ給ふと、聞召してなりけり。

冷泉(一二)「雲の上をかけはなれたるすみかにも物わすれせぬ秋の夜の月

(一三)おなじくば」と聞え給へれば、源(一四)「なにばかり所せき身の程にもあらずながら、今



など聞え給ひて、琴の御琴召して、珍らしく(一)彈き給ふ。宮御數珠(二)ひきおこたり給ひて、御琴(三)に猶心いれ給へり。月さし出でて、いと花やかなる程も哀なるに、空(四)をうち眺めて、世の中さまぐ＼につけて、はかなく移り替る有樣も、思しつゞけられて、例よりも哀なる音に、かき鳴らし給ふ。

今宵は例の(五)御遊にやあらむと、推量りて、兵部卿(六)の宮渡り給へり。大將(七)の君、殿上人のさるべきなど具して參り給へれば、此方(八)におはしますと、御琴の音を尋ねてやがて參り給ふ。「いと徒然にて、わざと遊びとはなくとも、久しく絕えにたる、珍らしき物の音など、聞(九)かまほしかりつる獨ごとを、いとよう尋ね給ひける」とて、宮(一〇)も、此方に御座よそひて入れ奉り給ふ。內裏の御前に、今宵は月の宴あるべかりつるを、とまりて(一一)さうぐ＼しかりつるに、この院に人々參り給ふと聞き傳へて、これかれ上達部なども參り給へり。蟲の音のさだめ(一二)をし給ひて、御琴どもの聲々かきあはせて、おもしろき程に、「月見る宵の、いつとても物哀ならぬ

(一)源が
(二)數珠を繰りやめて
(三)女三は琴に熱心なる人なり
(四)源が
(五)十五夜故源方に音樂もあるべきかと推量して
(六)螢
(七)夕霧
(八)源が女三方に居らるるとて
(九)聞きたくて獨りて彈き居たる所へ
(一〇)螢をも
(一一)觀月の宴がやめになりて寂しかりしに
(一二)品評

たり給ひて、源「蟲の音いとしげう亂るゝ夕かな」とて、我も忍びてうち誦(一)じ給ふ。(二)阿彌陀の大呪、いと尊くほのぐ聞ゆ。實に聲々(三)聞えたる中に、鈴蟲のふり出でたる程、はなやかにをかし。源「秋の蟲の聲いづれとなき中に、松蟲なむすぐれたるとて、中宮の(四)遙けき野邊を分けて、いとわざと尋ねとりつゝ、放たせ給へる、し(五)るく鳴き傳ふるこそ少かゝなれ。名には(六)違ひて、命の程はかなき蟲にぞあるべき。心にまかせて、人聞かぬ奥山、遙けき野の松原に、聲惜まぬも、いと隔(七)心ある蟲になむありける。鈴蟲は(八)心やすく、今めいたるこそらうたけれ」など宣へば、宮、

女三(九)大かたの秋をば憂しと知りにしをふり捨てがたきすゞむしの聲

と忍びやかに宣ふ。いとなまめいて、あてにおほどかなり。源「いかにとかや。(一〇)いで思の外なる御事にこそ」とて、

源(一一)こゝろもて草のやどりをいとへどもなほすゞ蟲の聲ぞふりせぬ

(一)經を
(二)眞言の呪文
(三)蟲の聲々
(四)秋好
(五)それと分る程に幾秋も鳴くは少し
(六)壽命長き筈の松といふ名には違ひて短命なる蟲と思はる
(七)遠慮する蟲ぢやわい
(八)氣輕に常世風で何處でも構はぬのが可愛し
(九)全體から言へば秋はいやなものと思へど鈴蟲の音ばかりは棄てられぬ
(一〇)何ともつしやる
(一一)其方は心から世を厭ひて尼にはなりたれども、其若さではまだ〳〵捨てられぬ

り。心ならぬ(一)人すこしも交りぬれば、かたへの人苦しう(二)、あは〳〵しき聞出で來るわざなり」と、諫め給ひて、十餘人ばかりの程ぞ、容貌(三)異にては侍ふ。この野に蟲ども放たせ給ひて、風すこし涼しくなり行く夕暮に、渡り(四)給ひて、蟲の音をきゝ給ふやうにて、猶(五)思ひ離れぬさまを聞え惱まし給へば、例(六)の御心はあるまじきことにこそあンなれと、偏にむづかしきことに思ひ(七)聞え給へり。人目(八)にこそ變ることなくもてなし給ひしか(九)、内には憂を知り給ふ氣色しるく、こよなう變りにし御心を(一〇)、いかで(一一)見え奉らじの御心にて、おほうは思ひなり給ひにし御世の背なれば、今はもて離れて心安きに、猶かやうになど聞え給ふぞ苦しうて、人離れ(一二)たらむ御住居にもがな、と思しなれど、およ(一三)ずけてえさも強ひ申し給はず。十五夜の月のまだ(一四)影かくしたる夕暮に、佛の御前に宮おはして(一五)、端近うながめ給ひつゝ念誦し給ふ。若き尼君たち二三人花奉るとて、鳴らす(一六)閼伽杯の音、水のけはひなど聞ゆる、樣變りたるいとなみに(一七)、そゝきあへるいと哀なるに、例(一八)のわ

(一)心からの望でなくて出家した人
(二)不謹愼なる噂の立つものぢや
(三)尼姿で御奉公申して居る
(四)源が女三方へ
(五)女三を思切りかねたる趣をうるさく言ふ故
(六)御定りの源の癖が始つた、けしからん事と
(七)女三が
(八)源が女三に對して
(九)柏木の事を知りて以來女三に對して内々けしからんと思ひ居る樣子著しく
(一〇)源の
(一一)どうかして源に顏を見られたくなしと思ふのが先に立ちて出家もした事なれば
(一二)人の來ぬ所に住みたしと
(一三)小癪に其樣な事を強ひて言ひ出さず
(一四)まだ昇らぬ
(一五)女三
(一六)水を盛りて佛に奉る器
(一七)忙がしがりあへる
(一八)源が來て

(一)三條宮
(二)女三の領地より生ずる收入
(三)三條宮の藏を
(四)朱雀の財産處分の際多く女三が貰ひたる物など朱雀關係の物は一切三條宮へ送り附け
(五)女三の奉養
(六)女三方の上下の人々の一切の費用は皆源の支辨にて
㊂ 六條院の庭に鈴蟲を放つ、十五夜の宴
(七)女三の御殿の西の渡殿の
(八)尼君の住居に相應したる樣に
(九)女三と共に出家になりたしと願ひたる女どもの中
(一〇)尼にて生涯を送り得られさうな女を選びて尼にしたり
(一一)時のはづみにて競ひて出家を望みたれども

はてじ」と聞え給ひつゝ、かの宮(一)をもいとこまかに淸らにつくらせ給ふ。御封(二)のものども、國々の御庄、御牧などより奉るものども、はか〲しき樣のは、皆かの三條の宮の御藏に納めさせ給ふ。又も建て添へ(三)させ給ひて、樣々の御寶物ども、院(四)の御處分に數もなく賜はり給へるなど、あなたざまの物は、皆かの宮に運びわたし、細にいかめしうし置かせ給ふ。旦暮(五)の御かしづき、そこらの女房の事ども、上下(六)のはぐくみは、おしなべて我御あつかひにてなむ、急ぎつかうまつらせ給ひける。

秋頃、西(七)の渡殿の前の、中の塀の東のきはを、おしなべて野につくらせ給へり。閼伽の棚などして、その方(八)にしなさせ給へる御しつらひなど、いとなまめきたり。御弟子(九)にしたひ聞えたる尼ども、御乳母ふる人どもはさるものにて、若き盛りのも、心定まり、さる方(一〇)にて世を盡しつべき限は、選りてなむなさせ給ひける。然るき(一一)ほひには、我も〳〵ときしろひけれど、大臣の君聞しめして、源「あるまじき事な

のいと尊く、事(一)の心を申して、(二)この世にすぐれ給へる盛を厭ひはなれ給ひて、長き世々に絶ゆまじき(三)御契を、蓮のいとに結び給ふ、尊く深き様をあらはして、(四)只今の世に才もすぐれ、寛けきさきらを、(五)いとゞ心して言ひつゞけたる、いと尊ければ、皆人々しほたれ給ふ。(六)これはたゞ忍びて、御念誦堂のはじめと思したることなれど、内裏にも、(七)山の帝にも聞しめして、皆御使どもあり。御誦經の布施など、いと所せきまで、俄になむ事廣ごりける。(八)院にまうけさせ給へりける事ども、殺ぐと思しゝかど世の常ならざりけるを、まいて(九)今めかしき事どもの加りたれば、夕の寺におき所なげなるまで、所せき勢になりてなむ、僧どもは歸りける。

(一〇)今しも心苦しき御心添ひて、はかりもなくかしづき聞え給ふ。院(一一)の帝は、(一二)この御處分の宮に住み離れ給ひなむも、終のことには目やすかりぬべく聞え給へど、(一三)餘所餘所にては覺束なかるべし。旦暮見奉り聞え承らむ事怠らむに、本意たがひぬべし。(一四)實にありはてぬ世幾許あるまじけれど、(一五)猶生ける限の志をだに、失ひ

(一)表白といふ願文を讀む也
(二)女三が若く美しき盛なるに拘はらず出家して
(三)法華經に縁を結ぶ
(四)表白の文に載せて
(五)さきらは吻、辯舌
(六)今日の法會は只内々女三の念誦堂の開きはじめを行ふ積なりしに
(七)朱雀院
(八)一體六條院にての用意も省略する積のが大層になりたる上
(九)内裏朱雀よりの布施杯をいふ
㊂ 源氏女三宮の爲に三條の宮を經營す
(一〇)女三が出家してから源が氣の毒になりて非常に大事にする
(一一)朱雀
(一二)女三が朱雀より讓られたる三條の宮に別居する方がよかるべし、どうせ終には爰に住むべきなればと勸むれども
(一三)別居は心懸りなり
(一四)どうせ死ぬべき此世で先も短かるべけれど
(一五)生きて居る間丈でも情をつくしたしと



(一)多分女三が源の迹に殘るものと思ひし故、女三と一緒にかゝる物用意せんとは思ひ寄らざりし也
(二)一蓮托生と思へ
(三)未來の一蓮托生の契はあれど、現在に夫婦ならぬが悲しの義なるべし
(四)墨を
(五)丁子染、黄色
(六)一蓮托生と仰せらるれども、君は我と一つ蓮に棲む御心はあるまじ、すまじ—澄まじ、棲まじ
(七)見下げられる事哉
(八)源が
(九)佛前の供物
(一〇)講師、讀師以下の役々の僧、法服は布施の品也
(一一)袈裟の布地に綾を用ひたる也
(一二)袈裟の縫目まで評判に上るとはいやに細かな事哉

り給へる、佛の御しつらひ見やり給ふも、さま〴〵に、源「かゝる方の御いとなみをも、(一)諸共に急がむものとは思ひ寄らざりし事なり。よし後の世にだに、かの花の中の宿に、(二)隔なくと思ほせ」とて、打泣き給ひぬ。

源(三)はちす葉をおなじうてなと契りおきて露のわかるゝけふぞ悲しき

と御硯に(四)さしぬらして、香染(五)なる御扇に書きつけ給へり。宮、

女三へだて(六)なくはちすの宿をちぎりても君がこゝろやすまじとすらむ

と書き給へれば、源「いふかひなくも思ほしくたすかな」(七)と、打笑ひながら、猶哀と物をおもほしたる(八)御氣色なり。

例の御子達なども、いと數多參り給へり、御方々より、我も〳〵と營み出で給へる、(九)御捧物のありさま心ことに、所せきまで見ゆ。(一〇)七僧の法服など、すべて大方の事どもは、皆紫の上せさせ給へり、(一一)綾のよそひにて、袈裟の縫目まで、見知る人は、世になべてならずとめでけりとや。(一二)むづかしう細なる事どもかな。講師

堂かざりはてて、講師まうのぼり、行香(一)の人々參り集ひ給へば、院もあなたに(二)出で給ふとて、宮(三)のおはします西の廂にさしのぞき給へれば、狹き心地する假の御(四)しつらひに、所せく暑氣なるまで、こと〴〵しく裝束きたる女房、五六十人ばかり集ひたり。北の廂の簀子まで童などはさまよふ。火取(五)どももあまたして、烟たきまであふぎ散らせば、さし寄り給ひて、源「そらに(六)燒くは、いづくの烟ぞと思ひわかれぬこそよけれ。富士(七)の峰よりもけに、くゆり滿ち出でたるは、本意なきわざなり。講說(八)のをりは、大方の鳴をしづめて、のどかに物の(九)心も聞きわくべき事なれば、憚なき衣の音なひ、人のけはひ、しづめてなむよかるべき」など、例の物深からぬ若人どもの、用意教へ給ふ。宮は人氣におされ給ひて、いと小くをかしげにて、ひれ臥し給へり。源「若君(一〇)らうがはしからむ。抱きかくし奉れ」など宣ふ。北の御障子も取り放ちて御簾かけたり。そなたに人々は入れ給ふ。しづめて(一一)、宮(一二)にも物の心知り給ふべきしたかた(一三)を、聞え知らせ給ふ、いと哀に見ゆ。御座(一四)を讓

(一)佛前にて燒香すべき
(二)法會の席に
(三)女三
(四)假の座敷
(五)香を焚く爲の火入
(六)空燒物卽ち室間を薰ずる爲の香は何處からともなく匂ふのがよし
(七)富士の烟にも勝る位に
(八)僧の說法
(九)說法の意味をよく聞き取らねばならぬ故
(一〇)薰がこゝに居てはそこらが亂雜になるであらう
(一一)そこらを靜にして後
(一二)女三
(一三)用意
(一四)女三が己の座を明け渡して佛の壇にしたるを

をたき給へり。阿彌陀佛、脇士(一)の菩薩、おの〳〵白檀して作り奉りたる、こまかに美しげなり。閼伽の具(二)は、例のきは(三)やかに小くて、青き白き、紫の蓮(四)を調へて、荷葉の方(五)を合せたる名香、蜜(六)をかくしほろゝげて、焼き匂はしたる、ひとつ薫に匂ひあひて、いとなつかし。經(七)は六道の衆生のために、六部かゝせ給ひて、自らの御持經(八)は、院(九)ぞ御手づから書かせ給ひける。これをだにこの世の結縁にて、互(一〇)に導きかはし給ふべき心を、願文に作らせ給へり。さては阿彌陀經、唐の紙はもろくて、朝夕の御手ならしにも如何とて、紙屋(一一)の人をめして、殊に仰事賜ひて、心異に淸らに漉かせ給へるに、この春の頃ほひより、御心とゞめて急ぎ書かせ給へるかひありて、はし(一二)を見給ふ人々、目も輝きまどひ給ふ。罫かけたる金の筋よりも、墨づき(一三)の上に輝くさまなども、いとなむ珍らかなりける。軸、表紙、箱のさまなど、いへば更なりかし。これは殊に沈(一四)の花足の机にすゑて、佛の御(一五)おなじ帳臺の上にかざられ給へり。

(一)脇本尊、觀音勢至
(二)水を奉る具
(三)際だちて
(四)造花
(五)荷葉方は日本の方也
(六)合せ香は皆蜂蜜を入る、是は入れたる樣に見せずぼろ〳〵にしたる也
(七)天、人、修羅、餓鬼、畜生、地獄の六道に輪廻して成佛の出來ぬ人間共の爲に法華經を六部かゝせて
(八)女三の持料の經は
(九)源氏
(一〇)源と女三と今生の緣は薄くとも未來は互に善智識となるべしとの意を
(一一)禁裡附の紙漉所
(一二)片端をあけて見る人々
(一三)源の筆跡の美しき樣
(一四)沈香
(一五)本尊と同じ壇上に源書寫の經を飾りたり

鈴蟲

梗概

㊀ 女三宮の持佛供養。源氏自ら女三宮の爲に法華經を書寫す。㊁ 源氏、女三宮の爲に三條の宮を經營す。㊂ 六條院の庭に鈴蟲を放つ。十五夜の宴。冷泉院よりの招待。㊃ 源氏、冷泉院を訪ふ。秋好、出家の望。源氏の諫止。

㊀ 女三宮の持佛供養、源氏法華經を書寫す
(一)六條院の池の
(二)女三
(三)造立したるを
(四)源の發願
(五)供養の折に飾りたり
(六)鹿子染
(七)女三の寢る爲の帳臺を佛壇にしたる也
(八)造り花なるべし
(九)佛前に焚く香
(一〇)香の名

夏頃、(一)蓮の花のさかりに、入道の姫宮(二)の御持佛どもあらはしいで給へる、供養せさせ給ふ。この度は大臣(四)の君の御志にて、御念誦堂(三)の具ども、こまかに調へさせ給へるを、(五)やがてしつらはせ給ふ。幡のさまなどなつかしう、心ことなる唐の錦を選び縫はせ給へり。紫の上ぞ、急ぎせさせ給ひける。花机の被など、をかしき目染(六)もなつかしう、淸らなる匂、染めつけられたる心ばへ、目なれぬ樣なり。(七)夜の御帳の帷子を、四面ながらあけて、後の方に法華の曼陀羅かけ奉りて、銀の花瓶に、高くことごとしき(八)花の色を調へて奉れり。(九)名香には、唐の百歩の香(一〇)

とゞ憚りて、(一)頓にも打出できこえ給はねど、(二)せめて聞かせ奉らむの心あれば、今しも事の序に思ひ出でたる様に、おほめかしうもてなして、夕霧「(三)今はとせし程に、訪ひにまかりて侍りしに、亡からむ後の事ども言ひ置き侍りし中に、(四)然々なむ深くかしこまり申すよしを、返すぐ〵ものし侍りしかば、如何なる事にか侍りけむ、今にその故をなむえ思ひ給へ寄り侍らねば、覺束なく侍る」と、(五)いとたどく〵しげに聞え給ふに、(六)されぱよと思せど、何かはその程の事、顯し宣ふべきならねば、(七)しばしおぼめかしくて、源「(八)しか人の怨みとまるばかりの氣色は、何の序にかもり出でけむと、自らもえ思ひ出でずなむ。さて今靜に、(九)かの夢は思ひ合せてなむ聞ゆべき。(一〇)夜かたらずとか、女ばらの傳に言ふことなり」と宣ひて、をさく〵御答もなければ、(一一)うち出で聞えてけるをいかに思すにかと、(一二)つゝましく思しけりとぞ。

(一)容易に柏木の事を言ひ出されねど
(二)是非源に聞かせたしと思ふ故
(三)柏木臨終の際
(四)源に申譯なく思ふ由を呉々言ひし故
(五)一向分らぬ顔をして
(六)果して夕霧が知つて居るわいと源が思へど
(七)しばらく考へる振して
(八)柏木に根に持つて恨まるゝ程の事をいつ仕出來したか自分でも思ひ出されぬ
(九)とくと考へてから話すべし
(一〇)夢話は夜せぬものと女などが云ひ傳へて居る
(一一)自分が此事を打明けたことを源が何と思はるゝのかしらと
(一二)夕霧が

(一)落葉が
(二)私が眞面目でふざけず浮氣筋には一向初心なる所を氣安く落葉が思はるゝにや
(三)落葉の
(四)夕霧が話の機會をつくりて
(五)柏木を夢見し話
(六)源が
(七)我が持つべき仔細あり
(八)紫の父、此人の死こゝに初めて見ゆ
(九)非常によく笛を吹きしを感心して
(一〇)落葉は事の仔細がよく分らずして夕霧に贈りたるならん
(一一)柏木の靈が末の世永くといひしは薫に傳へたき意に相違なし、さう思ひし答ぢや
(一二)源の心、この君は夕霧
(一三)源の沈思する樣子を夕霧が見て

は、折からのよしづきて、をかしうなむ侍りし。何事も人により、事に隨ふわざにこそ侍るべかゝめれ。(一)齡なども、やう〳〵いたう若び給ふべき程にもものし給はず、また(二)あざれがましく、すき〴〵しき氣色などに、物馴れなどもし侍らぬに、うちとけ給ふにや、大かたなつかしうめやすき人の(三)御有樣になむ、物し給ひける」など聞え給ふに、(四)いとよき序つくり出でて、少し近く參りより給ひて、(五)かの夢語を聞え給へば、(六)頓に物も宣はで聞しめして、思しあはする事どもあり。源「その笛は(七)こゝに見るべき故あるものなり。かれは陽成院の御笛なり。それを(八)故式部卿宮の、いみじきものにし給ひけるを、かの衛門督は、童より(九)いと異なる音を吹き出でしに感じて、かの宮の萩の宴せられける日、贈物にとらせ給へるなり。(一〇)女の心は深くもたどり知らず、しか物したるなゝなり」など宣ひて、(一一)末の世の傳は、又何方にとかは思ひまがへむ、さやうに思ひなりけむかし、などおぼして、(一二)この君もいといたり深き人なれば、思ひよる事あらむかしとおぼす。(一三)その御氣色を見るに、い

㊅ 夕霧、源氏に夢の事笛の事を語る
(一)源が紫方へ
(二)夕霧が
(三)源が
(四)昔の事に關係したる事柄につきては源が口を挾みなどするに
(五)落葉が想夫戀をひきたる心意氣は
(六)人に感動を與へる程の奧床しさをも容易に人に示さぬがよしと
(七)其方が柏木との交情を忘れず
(八)永く友情を保つ由を人に知らせた以上は
(九)落葉に懸想してつまらぬ不品行をする抔の事なき樣にするのが
(一〇)夕霧の心
(一一)他人には立派な事を言つて其樣な浮氣は御自分の方があぶないもの
(一二)一旦同情をよせた所を當座丈で顧みぬ樣な事をしたらば却て疑を避くるかと思はれるのが嫌さに行き通ふまでの事
(一三)落葉が自ら進で彈いてこそ憎くもあらうが

對(一)へ渡り給ひぬれば、のどやかに御物語など聞えておはする程に、日も暮れかゝりぬ。昨夜かの一條宮にまうでたりしにおはせし有樣(二)など聞え出で給へるを、微(三)笑みて聞きおはす。哀なる昔(四)の事かゝりたる節々は、あへしらへなどし給ふに、源「かの想夫戀(五)の心ばへは、實にいにしへの例にも、ひき出づべかりける折ながら、女はなほ人の心うつる(六)ばかりの故由をも、おぼろげにては漏すまじうこそありけれと、思ひ知らるゝ事どもこそ多かれ。過ぎにし方の(七)志を忘れず、かく長(八)き用意を人に知られぬとならば、同じうは心清くて、とかくかゝづらひ(九)、ゆかしげなき亂なからむや、誰が爲も心にくゝ、めやすかるべき事ならむとなむ思ふ」と宣へば、さかし、(一〇)人(一一)の上の御教ばかりは心強げにて、かゝるすきはいでや、と見奉り給ふ。夕霧「何の亂か侍らむ。猶(一二)常ならぬ世の哀をかけそめ侍りにしあたりに、心みじかく侍らむこそ、なかなか世の常の嫌疑あり顏に侍らめとてこそ。想夫戀は、心(一三)とさしすぎて言出で給はむや、憎き事に侍らまし。物の序にほのかなりし

きこと、(一)御子達よりもこまかにをかしげにて、つぶ〲と淸らなり。(二)なま目とまる心も添ひて見ればにや、眼居など、これは今すこし強うかどあるさま勝りたれど、眦のとぢめをかしうかをれる氣色など、いとよく(三)覺え給へり。(四)口つきの、ことさらに花やかなる樣して、うち笑みたるなど、(五)わが眼のうちつけなるにやあらむ、大臣は必ず思しよすらむと、いよ〲(六)御氣色ゆかし。(七)宮達は、思ひなしこそけだかけれ、世の常の美しき兒どもと見え給ふに、(八)この君は、いとあてなるものから、樣殊にをかしげなるを、(九)見くらべ奉りつゝ、(一〇)いであはれ、(一一)もし疑ふ故も實ならば、(一二)父大臣のさばかり、世にいみじう思ひほれ給ひて、子と名のり出でくる人だになきこと、(一三)形見に見るばかりの名殘をだに留めよかし、と泣きこがれ給ふに、(一四)聞かせ奉らざらむ罪得がましさ、など思ふも、いで、(一五)いかで然はあるべき事ぞと、猶心得ず思ひ寄るかたなし。(一六)心ばへさへなつかしうあはれにて、(一七)睦れ遊び給へば、いとらうたく覺ゆ。

(一)明石姫君腹の宮達
(二)さう思ひて見る故かして眼中など柏木よりはりゝしけれど
(三)柏木に似て居る
(四)夕霧の心
(五)只一寸見てさう思ふのか知ら
(六)源の了簡が聞きたし
(七)明石姫君腹
(八)薫
(九)夕霧が
(一〇)夕霧の心
(一一)薫が柏木の子ならんといふ我推量正しくば
(一二)頭中が彼程悲み入りて
(一三)せめて柏木の形見と見るべき子でもあれかし
(一四)此子のある事を
(一五)其樣な事があらう筈がないと
(一六)薫が
(一七)夕霧になじみて

がはしき御有様どもかな。おほやけ(一)の御近きまもりを、わたくしの隨身に領ぜむと爭ひ給ふよ。三の宮こそいとさがなくおはすれ。常に兄に(二)きほひ申し給ふ」と、諫め聞えあつかひ給ふ。大將も笑ひて、夕霧「二の宮は、こよなく兄心に所さり(三)聞えたまふ御心深くなむおはしますめる。御年の程よりは、怖ろしきまで見えさせ給ふ」など聞え給ふ。打笑みて(四)、いづれもいとうつくしと思ひ聞えさせ給へり。源「(五)見苦しく輕々しき公卿の御座なり。あなたにこそ」とて(六)渡り給はむとするに、宮たち(七)まつはれて、更に離れ給はず。宮の若君は(八)、宮たちの御列にはあるまじきぞかし、と(九)御心のうちに思せど、なかなか(一〇)その御心ばへを、母宮の、御心の鬼にや思ひよせ給ふらむと、これも心の(一一)癖にいと(一二)ほしう思さるれば、いとらうたきものに思ひかしづき聞え給ふ。大將は、この君(一三)をまだえよくも見ぬかなと思して、御簾の隙より(一四)さし出で給へるに、花の枝の枯れて落ちたるをとりて、見せ奉りて(一五)招き給へば、走りおはしたり。二藍の直衣(一六)のかぎりを著て、いみじう白う光り美し

(一)帝の護衛たる夕霧を自分の從者にせんと
(二)兄君の二宮に楯をつく
(三)遠慮なさる
(四)源が
(五)夕霧は公卿なれば其樣な處に居るは不體裁なり
(六)紫の方の我御殿へ
(七)源に取附きて
(八)薫は明石姫君腹の宮たちと一列に取扱ふべきでなしと
(九)源が
(一〇)自分がさう思ふのを女三が已に弱味のある丈に氣がつくかも知れぬと
(一一)思ひやり深き源の癖で
(一二)薫を
(一三)薫
(一四)薫が
(一五)夕霧が
(一六)直衣ばかりを、薫の様子

經せさせ給ふ。又かの(一)心よせの寺にもせさせ給ひて、この笛をば、(二)わざと人のさる故深きものにて、ひき出で給へりしを、たちまちに(三)佛の道におもむけむも、尊き事とはいひながら、あへなかるべし、と思ひて、六條院に參り給ひぬ。(四)女御の御方におはします程なりけり。(五)三の宮三つばかりにて、(六)中に美しくおはするを、こなたにぞ又とりわきておはしまさせ給ひける。走り出で給ひて、匂「(八)大將こそ、(七)宮抱き奉りて、あなたへ率ておはせ」と、(九)自らかしこまりて、いとしどけなげに宣へば、打笑ひて、夕霧「おはしませ。いかでか(一〇)御簾の前をば渡り侍らむ。いと輕々ならむ」とて、抱き奉りて居給へれば、匂「人も見ず。(一一)まろ顏はかくさむ。なほ〳〵」とて、御袖してさし隱し給へば、(一二)いとうつくしうて率て奉り給ふ。(一三)こなたにも二の宮の若君(一四)とひとつにまじりて遊び給ふを、(一五)うつくしみておはしますなりけり。隅の間の程におろし給ふを、二の宮見つけ給ひて、二宮「まろも大將に抱かれむ」と宣ふを、三の宮、(一六)「我が大將をや」とて(一七)ひかへ給へり。院も御覽じて、源「いとみだり

(一)頭中方の歸依の寺にても法會をさせて
(二)落葉が特に傳來ある貴重品として取出しくれたるを
(三)寺に寄附して仕辨ふも
(四)明石姫君方に源が行きたる留守
(五)匂宮
(六)明石姫君腹の子どもの中で特に
(七)紫方に子分にしてをく也
(八)夕霧よ、我を抱きてあちらへ行け
(九)自分で自分に敬語をつかひて
(一〇)紫の居間の前
(一一)其方の顏をかくしてやらん
(一二)可愛くて匂を連れて明石姫君の方へ行く
(一三)明石姫君方
(一四)明石姫君の第二皇子が薫と一緒になりて
(一五)源が可愛がりて
(一六)夕霧が匂を
(一七)夕霧をつかまへて居る

月めでに、格子もあげられたれば、例の物怪の入り來たるなめり」など、いと若くをかしき顔してかこち給へば、うち笑ひて、夕霧「(一)あやしの物怪のしるべや。まろ格子あげずば、道なくて、げに(二)え入り來ざらまし。(三)數多の人の親になり給ふまゝに、(四)思ひいたり深く、物をこそ宣ひなりにたれ」とて、うち見やり給へるまみの(五)、いと恥しげなれば、さすがに物も宣はで、雲井「いで、入り給ひね。(六)見苦し」とて、あきらかなる火影を、さすがに恥ぢ給へるさまも憎からず。誠にこの君(七)なづみて、泣きむづかり明し給ひつ。

(八)大將の君も、夢おぼし出づるに、(九)この笛の煩はしうもあるかな、(一〇)人の心留めて思へりしものの、(一一)女の御傳はかひなきをや、(一二)いかゞ思ひつらむ、この世にて(一三)數に思ひ入れぬ事も、かの今はのとぢめに、一念の怨めしきにも、もしは哀とも思ふにまつはれてこそは、(一四)長き世の闇にも惑ふわざなゝなれ、かかればこそは、何事にも執は留めじと思ふよなれ、など思しつゞけて、(一五)愛宕に誦

(一)飛んでもない物怪の手引をした事ぢや
(二)物怪が
(三)わざと雲井雁を褒めて嘲る詞
(四)思慮深い口を利く樣になつた
(五)夕霧の
(六)我がしどけなき姿を見らるゝを恥ぢたる也
(七)心持惡くて
❺ 夕霧柏木の爲に法會を營む、薰を見て柏木と女三宮との間を疑ふ
(八)夕霧
(九)夕霧の心、此笛は面倒な代物ぢや
(一〇)柏木の執心なりし此笛お方に傳ふるは正當ならず
(一一)女から傳へられたのでは傳へられたにならぬ
(一二)柏木の亡魂が
(一三)何とも思はぬ事も
(一四)死後長く浮かばれぬ事にもなる
(一五)珍皇寺にて法會を營む



(一)柏木
(二)笛の音にひかれて來たるならんと
(三)此笛を同じものならばわが子の薫に傳へたしと也
(四)薫に傳へたしと深く思ひ込み居たり
(五)夕霧の子
(六)乳を吐く事
(七)雲井雁
(八)鬢の毛を耳にはさむ事、かひ〳〵しく働く時の樣
(九)彼是と世話して
(一〇)雲井雁の樣子
(一一)乳の出ぬを氣休めに含ませてだます
(一二)夕霧
(一三)散米、米を撒くは惡魔を拂ふ呪
(一四)此兒が苦しさう也
(一五)落葉の

覺え給ひけり。少し寢入り給へる夢に、かの衞門督(一)、唯ありし樣の袿姿にて、傍にゐて、この笛をとりて見る。夢のうちにも、亡き人の、煩はしう(二)、この聲をたづねて來たると思ふに、

柏「笛竹(三)にふきよる風のことならば末の世ながきねにつたへなむ

(四)思ふかた異に侍りき」といふを、問はむと思ふ程に、若君の寢おびれて(五)、泣き給ふ御聲にさめ給ひぬ。この君いたく泣き給ひて、つだみなどし給へば(六)、乳母も起き騷ぎ、上(七)も大殿油近くとり寄せさせ給ひて、耳はさみして(八)、そゝくりつくろひて(九)、抱きて居たまへり。(一〇)いとよく肥えて、つぶ〳〵とをかしげなる胸をあけて、乳などくゝめ給ふ。兒もいと美しうおはする君なれば、白くをかしげなるに、御乳はいとかはらかなるを(一一)、心をやりて慰め給ふ。(一二)男君も寄りおはして、夕霧「如何なるぞ」など宣ふ。うちまき(一三)しちらしなどして、亂がはしきに、夢の哀も紛れぬべし。

雲井「惱ましげ(一四)にこそ見ゆれ。(一五)今めかしき御有樣の程にあくがれ給うて、夜深き御

ふ。格子あげさせ給ひて、御簾まきあげなどし給ひて、端近く臥し(一)給へり。夕霧かかる夜の月に、(二)心やすく夢みる人はあるものか。少し出で給へ。あな心憂」など聞え給へど、(三)心やましう打ち思ひて、聞き忍び給ふ。君達の、いはけなく寝おびれたるけはひなど、こゝかしこにうちして、女房も(四)さしこみて臥したる、人氣も賑はしきに、(五)ありつる所の有樣思ひあはするに、多くかはりたり。この笛をうち吹き給ひつゝ、いかに名殘もながめ給ふらむ、御琴どもは、しらべ變らず遊び給ふらむかし、御息所(六)も、和琴の上手ぞかし、など、思ひやりて臥し給へり。(七)いかなれば故君の、唯大方の心ばへは、やむごとなくもてなし聞えながら、いと深き氣色なかりけむと、それにつけてもいといぶかしう覺ゆ。(八)見劣せむ事こそ、いといとほしかるべけれ。大方の世につけても、(九)限なく聞くことは、必ず然ぞあるかし、など思ふに、(一〇)我が御中のうち氣色ばみたる思ひやりもなくて、睦びそめたる年月の程をかぞふるに、哀にいと斯う(一一)おしたちて、おごりならひ給へるも、理に

(一)夕霧が
(二)月を眺めずして
(三)雲井雁が
(四)込みあひて
(五)落葉の邸
(六)夕霧の心、我が歸りし後を如何に眺めて居らるゝならん
(七)夕霧の心、なぜ柏木は表面落葉を大事にしながら情は深からざりしならんと
(八)夕霧の心、落葉も手に入りたらば見劣する女かも知れぬ、それでは弱らせられる
(九)非常によいといふ評判のものは必ず見劣するに極つて居る
(一〇)雲井雁との中はついぞ移り氣らしき樣子もなくて
(一一)雲井雁が高飛車に氣が強くなつて居るのも道理と思ふ

(一)和琴位はひきても御許を蒙りたるが、此笛を吹くことは氣恥しければ御免を蒙りたし
(二)今夜ばかりは柏木の在世中にかはらぬ蟲の音を聞きたり、笛の音を蟲の音にいひなしたる也
(三)笛の音は昔の如くなれども、柏木を思ひてなく音のみ盡きせず

四　雲井雁の悋氣、夕霧夢に柏木の歌よむを見る

(四)夕霧が自邸に
(五)夕霧が落葉に懸想して
(六)雲井雁に
(七)雲井雁が
(八)催馬樂「妹と我と入佐の山の山あらゝぎ手なふれそや香をまさすがにやとゝまさすがにや」
(九)引込勝なる事哉

思ひ出で給ふに、今少し哀多く添ひて、試に吹きならす。盤渉調のなからばかり吹きさして、夕霧「昔を(一)忍ぶ獨語は、さても罪ゆるされ侍りけり。これはまばゆくなむ」とて出で給ふに、

御息所　露(二)しげきむぐらの宿にいにしへの秋にかはらぬ蟲のこゑかな

と聞えいだし給へり。

夕霧　横(三)笛のしらべはことにかはらぬを空しくなりし音こそつきせね

出で難にやすらひ給ふに、夜もいたく更けにけり。

(四)殿にかへり給へれば、格子などおろさせて皆寢給ひにけり。(五)この宮に心かけ聞え給ひて、かく懇がり聞え給ふぞなど、人の聞え知らせ(六)ければ、かやうに夜ふかし給ふもなま憎く(七)て、入り給ふをも聞く〳〵、寢たるやうにて物し給ふなるべし。夕霧「妹(八)と我といるさの山の」と、聲はいとをかしうて、ひとりごち歌ひて、夕霧「こは何ぞかく鎖し固めたる。あな埋れや(九)。今宵の月を見ぬ里もありけり」と、うめき給

み給ひぬれば、(一)怨めしきまで覺ゆれど、夕霧「すきぐ\しさを、さまぐ\にひき出でても御覽ぜられぬるかな。秋の夜ふかし侍らむも、(三)昔の(二)咎やと憚りてなむ、罷出侍りぬべかゝめる。(四)又殊更に心してなむ侍ふべきを、この御琴どもの調かへず待たせ給はむや。(五)引き違ふることも侍りぬべき世なれば、後めたくこそ」など、(六)まほにはあらねど、打ち匂はしおきて出で給ふ。御息所「今宵の御すきには、人ゆるし聞えつべくなむありける。そこはかと無きいにしへ(七)語にのみ紛らはさせ給ひて、(八)玉の緒にせむ心地もし侍らぬ、殘り多くなむ」とて、御贈物に笛を添へて奉れ給ふ。御息所「これになむ、(九)誠にふるき事も傳はるべく聞きおき侍りしを、かゝる蓬生に埋もるゝも哀に見給ふるを、(一〇)御先驅にきほはむ聲なむ、餘所ながらもいぶかしく侍る」と聞え給へば、夕霧「(一一)似つかはしからぬ隨身にこそ侍るべけれ」とて、見給ふに、これもげに(一二)世と共に身に添へてもてあそびつゝ、(一三)自らも更にこれが音の限は、え吹きとほさず、思はむ人にいかで傳へてしがな、と折々聞えごち給ひしを

(一)夕霧が
(二)琵琶和琴などを彈きて我が好きぐ\しき程を御目にかけて仕舞ひたる事哉
(三)亡き柏木に叱られるかと
(四)あらためて
(五)約束變改する事も
(六)露骨には口說かねど戀情をほのめかしておいて
(七)今夜の君の好きぐ\しさ位は誰も咎め手はなし
(八)聞いて壽命の延びる程彈き給はぬは殘念
(九)此笛こそ由來ある物と聞き居りしに、其貴重品が此草深き中に埋沒するも氣の毒故奉る
(一〇)之を車中にて吹き給へ、御先拂の聲に競ひて聞ゆる御笛の音が聞きたし
(一一)私の隨身には其樣な貴重品は不似合なるべし、御先に競ふといふ詞につきて隨身といへる也
(一二)柏木が
(一三)以下「傳へてしがな」迄柏木の曾ていひし詞

ひても聞え給はず。月さし出でて曇なき空に、羽うちかはす雁がねも、列をはなれぬ、羨しく聞き（一）給ふらむかし。風のはだ寒く、物哀なるに誘はれて、箏の琴をいとほのかに掻き（二）鳴し給へるも、おく深き聲なるに、（三）いとゞ心とまりはてて、なかなかにおもほゆれば、琵琶をとり寄せて、いとなつかしき音に、想夫戀をひき給ふ。夕霧（四）「おもひおよび顔なるは、かたはらいたけれど、これはこと問はせ給ふべくや」とて、切に（五）簾のうちをそゝのかし聞え給へど、ましてつゝましきさしいらへなれば、宮は唯物をのみ哀と思しつゞけたるに、

夕霧（六）ことに出でていはぬをいふに増るとは人にはぢたる氣色をぞみる

と聞え給ふに、たゞ末つ方をいさゝか（七）彈き給ふ。

落葉（八）ふかき夜の哀ればかりはきゝわけどことよりほかにえやは言ひける

飽かずをかしき程に、さるおほどかなる物の音がらに、深き人の心しめてひき傳へたる、同じ調の物といへど、哀に心すごきものの、（九）かたはしをかき鳴して止

（一）落葉の心を夕霧が推測る也
（二）落葉が
（三）夕霧が
（四）落葉の心を推測したる様なるは想夫戀をひきたるをいふ
（五）夕霧が
（六）恥ぢ給へる氣色にて言はぬはいふに勝る君の御心の中が知られる
（七）落葉が
（八）君の想夫戀を彈かれたる其憐は聞き知らぬにはあらねど、我は只この琴を以て答ふるのみ、其外に言はぬはいふに勝る思ひなどはなし
（九）落葉が

し給ふ。故君(一)の常にひき給ひし琴なりけり。をかしき手ひとつなど、すこしひき給ひて、夕霧「哀いと珍らかなる音に、(二)かきならし給ひしはや。(三)この御琴にもこもりて侍らむかし。承りあらはしてしがな」と宣へば、御息所「(四)琴の緒絶えにし後より、昔の御童遊の名残をだに、(五)思ひ出で給はずなむなりにて侍るめる。(六)院の御前にて、女宮たちのとりどりの御琴ども、試みきこえ給ひしにも、(七)かやうの方はおぼめかしからず物し給ふとなむ、定め聞え給ふめりしを、(八)あらぬ様にほれぼれしうなりて、眺め過し給ふめれば、(九)世のうきつまにといふやうになむ見給ふる」と聞え給へば、夕霧「いと理の御思なりや。(一〇)限だにある」と打ち眺めて、琴はおしやり給へれば、御息所「(一一)かれなほさらば、聲に傳はることもやと、聞きわくばかりならさせ給へ。物むづかしう思う給へしづめる耳をだに、(一二)あきらめ侍らむ」と聞え給ふを、夕霧「(一三)しか傳はる中の緒は殊にこそ侍らめ。それをこそ承らむと聞えつれ」とて、御簾のもと(一四)近くおし寄せたまへど、頓にしもうけひき給ふまじきことなれば、強

(一)柏木
(二)柏木は
(三)是は柏木の彈きならしたる琴なれば、此琴には柏木の音が籠りてあるべし、其が聞きたし
(四)柏木の歿してよりの意なるべし、伯牙斷琴の故事によれる詞づかひ也
(五)落葉が
(六)朱雀の御前
(七)落葉は音樂の道に暗からずといふ評判なりしに
(八)今は丸で昔の樣ではなく
(九)此引歌未詳
(一〇)「戀しさの限りだにある世なりせば年經て物は思はざらまし」
(一一)それならばあの琴を柏木の彈きたる聲が之に傳はり居るか否かを聞きわけのつく丈彈き給へ
(一二)爽かにすべし
(一三)夫婦の中にて傳へたる手は別段なるべし、其別段なる落葉の琴を聞きたしと申上げし也
(一四)琴を

㊂ 夕霧落葉宮を訪ふ、柏木の遺物の笛を贈らる
(一)夕霧が
(二)落葉が
(三)奥深く御席を設くる暇もなくての意歟
(四)侍女等
(五)夕霧の三條の自邸
(六)集り
(七)此邸が夕霧には
(八)傍に有合せたる也
(九)以下夕霧の心
(一〇)放埒なる浮氣者は思ふ儘に人柄惡しき振舞をなして

又かの人の思ひ入りたりし樣をも、聞しめさせむと思ひわたり給ふ。

秋の夕の物哀なるに、一條の宮を思ひやり聞え給ひて、(一)わたり給へり。打解けしめやかに、(二)御琴どもなど彈き給ふ程なるべし。(三)深くもえとりやらで、やがてその南の廂に入れ奉り給へり。端つかたなりつる人の、(四)ゐざり入りつるけはひどもしるく、衣の音なひも、大方の匂かうばしく、心にくきほどなり。例の御息所對面し給ひて、昔の物語ども聞えかはし給ふ。(五)わが御殿の、明暮人しげくて、物さわがしく、幼き君達など、(六)すだきあわて給ふにならひ給ひて、(七)いと靜に物あはれなり。うち荒れたる心地すれど、あてに氣高く住みなし給ひて、前栽の花ども、蟲の音しげき野邊とみだれたる夕榮を、見わたし給ふ。(八)和琴をひきよせ給へれば、律に調べられて、いとよく彈きならしたる、人香にしみて、なつかしう覺ゆ。(九)かやうなるあたりに、(一〇)思ひのまゝなるすき心ある人は、しづむること無くて、樣惡しきけはひをも現し、さるまじき名をも立つるぞかしなど、思ひ續けつゝ搔きなら



（一）柏木密通の事は忘れざれども此子を見れば可愛くなる、と一子、此
（二）外の處へ薫を連れて行つて
（三）あわたゞしく
（四）薫
（五）段々美しくなる
（六）源の心、薫の生るべき因縁にて柏木一件も起りしならん、是非に及ばぬ運命ぢやと
（七）源の心、わが身の運命にも不滿足の點多し
（八）婦人を
（九）女三ばかりは資格等缺點と謂はるゝ所なく人物も十分なるべき答なるに案外な事になつたと
（一〇）密通の事
（一一）夕霧
（一二）柏木が臨終の遺言を
（一三）源に話したく、其に對する源の樣子も見たく思ふに
（一四）薄々感づいた事もあれば、却つて言ひ出すのも氣が咎めて
（一五）柏木の祕密がよくわかり、柏木の深き嘆を源に知らせたものかと

源　（一）うきふしも忘れずながらくれ竹のこは棄てがたきものにぞありける

と（二）率てはなちて宣ひかくれど、うち笑ひて、何とも思ひたらず、いと（三）そゝかしう這ひおり騷ぎ給ふ。月日に添へて、（四）この君の美しう、ゆゝしきまで（五）おひまさり給ふに、誠にこの「憂きふし」皆おぼし忘れぬべし。（六）この人のいでものし給ふべき契にて、さる思の外の事もあるにこそはありけめ、遁れがたかンなるわざぞかしと、少しは思し直さる。（七）自らの御宿世も、猶飽かぬこと多かり。（八）數多つどへ給へる中にも、（九）この宮こそは、かたほなる思まじらず、人の御有樣も、思ふに飽かぬ所なくてものし給ふべきを、かく思はざりし樣にて、見奉る事、と思すにつけてなむ、（一〇）過ぎにし罪ゆるし難く、なほ口惜しかりける。（一一）大將の君は、（一二）かの今はのとぢめに、留めし一言を、心ひとつに思ひ出でつゝ、如何なりし事ぞとは、（一三）いと聞えまほしう、御氣色もゆかしきを、（一四）ほの心えて思ひ寄らるゝ事もあれば、なか〳〵うち出で聞えむもかたはらいたくて、如何ならむ序に、（一五）この事の委しき有樣もあきらめ、

今より氣高くものものしう、樣異に見え給へる氣色などは、我が御鏡の影にも似げなからず見なされ給ふ。僅に歩みなどし給ふ程なり。この筍(一)の罍子に、何とも知らず立ちよりて、いとあわたゞしう取散らして、食ひかなぐりなどし給へば、源「あな亂がはしや。いと不便なり。彼とり隱せ。食物に目とゞめ給ふと、物いひ(二)さがなき女房もこそ言ひなせ」とて笑ひ給ふ。(三)かき抱き給ひて、源「この君の眉のいと氣色あるかな。(四)ちひさき程の兒を、數多見ねばにやあらむ、かばかりの程は、唯いはけなきものとのみ見しを、今よりいとけはひ異なるこそ煩はしけれ。(五)女宮ものし給ふめるあたりに、かゝる人おひ出でて、(六)心苦しきこと、誰が爲にもありなむかし。あはれその各の老いゆく末までは、(七)見はてむとすらむやは。(八)花の盛はありなめど」と、うちまもり聞え給ふ。「うたて(九)忌々しき御事にも」と、人々はきこゆ。(一〇)御齒のおひ出づるに、(一一)食ひあてむとて、筍をつと握り持ちて、雫もよゝ(一二)と食ひぬらし給へば、源「(一三)いとねぢけたる色このみかな」とて、

(一)鏡にて見たる源の俤にも似て居る樣に思はる
(二)口の惡い侍女はつくつて言ふならん
(三)源が
(四)赤兒を多く見ぬ故斯く思はるゝのか知らんが此位の間は只譯のわからぬものとばかり思ひしに此兒は
(五)明石姫君腹には姫宮多き也
(六)姫宮の爲にも薫の爲にも心配な事が起らねばよいが
(七)我は老年故見届ける事も出來まじ
(八)「春毎に花の盛はありなめど逢ひ見ん事は命なりけり」
(九)縁起でもない事を仰しやる
(一〇)薫が
(一一)齒ぐきのかゆき故也
(一二)よゝは涎の垂れる貌
(一三)變な色男もあつたものぢや、前に「女宮ものし給ふあたりに」云々と言へるを受けての戯言

(一)只さへ朱雀が女三の身の上を心配して居らるるのに
(二)源にとりて迷惑
(三)女三が源に
(四)源が
(五)なぜ此樣に疎々しき中にはなつた事ぞと動もすれば心の動きさうなれば
(六)額
(七)源の
(八)衣が引きずられて
(九)後にばかり著物がたまりて前があきたるは子供の常なれど
(一〇)すらりとして
(一一)はたる草の汁で彩色したる如く
(一二)柏木の顏が
(一三)源の心、柏木は斯う水際立ちて美しくはなかりしに
(一四)女三

源「うしろめたげなる(一)御氣色なるに、このあらぬ所もとめ給へる、いとうたて(二)心憂し」と聞え給ふ。今はまほにも見え奉り給はず(三)、いと美しうらうたげなる御額髪、頰つきのをかしさ、唯兒のやうに見え給ひて、いみじうらうたきを、見奉り(四)給ふにつけては、など(五)斯うはなりにし事ぞと、罪得ぬべく思さるれば、御几帳ばかり隔てて、又いとこよなう氣遠く、疎々しうはあらぬ程にもてなし聞えてぞおはしける。若君(六)は乳母の許に寢給へりける、起きて這ひ出で給ひて、御袖(七)を引きまつはれ奉り給ふさま、いと美し。白き羅に、唐の小紋の紅梅の御衣の裾、いと長くしどけなげに引きやられて(八)、御身はいと顯にて、後(九)の限に著なし給へるさまは、例の事なれど、いとらうたげに白くそびやかに(一〇)、柳を削りて作りたらむ樣なり。頭は月草(一一)して殊更に色どりたらむ心地して、口つき美しう匂ひ、眉のびらかに、恥かしうかをりたるなどは、猶(一二)いとよく思ひ出でらるれど、かれ(一三)はいとかやうに、際離れたる淸らは無かりしものを、いかで斯からむ、宮(一四)にも似奉らず、

ばかりになむ。

(一)世をわかれ入りなむ道はおくるともおなじところを君もたづねよ

(二)いと難きわざになむある。

と聞え給へるを、(三)涙ぐみて見給ふほどに、(四)大臣の君わたり給へり。例ならず、御前近き(五)罍子どもを、何ぞ怪しと御覧ずるに、院の御文なりけり。見給へば、いと哀なり。(六)今日か明日かの心地するを、對面の心にかなはぬ事など、こまやかに書かせ給へり。この(七)「おなじところ」の御伴ひを、(八)ことにをかしき節も無き聖言葉なれど、實にさぞ思すらむかし、(九)我さへ疎なる樣に見え奉りて、いとゞ後めたき御思の添ふべかめるを、いといとほしと思す。(一〇)御返つゝましげに書き給ひて、御使には、青鈍の綾一襲たまふ。(一一)書きかへ給へりける紙の、御几帳の側よりほの見ゆるを、(一二)とりて見給へば、御手はいとはかなげにて、

女三うき世にはあらぬところのゆかしくて(一三)そむく山路に思ひこそいれ

(一)其方の出家は我より後なれども我と同じく極樂往生を願ひ給へ、ところ一所。野老
(二)極樂往生を一筋に願ひて心を亂さぬは
(三)女三が
(四)源氏が來たり
(五)菓子などを盛る漆器、これに野老を入れてある也
(六)朱雀の文に、自分の餘命長からぬ心地する故女三にも逢ひたけれど逢はれぬ趣など
(七)朱雀の歌に、「おなじところを」と女三を佛道の友にした言ひまはしを見て
(八)源の心
(九)自分迄が女三につらく當りて朱雀の心配を增すを氣の毒に思ふ
(一〇)女三が
(一一)書き直して反故にした紙
(一二)源が
(一三)朱雀の世を背きて居らるゝ山に

まりよろこび聞えさせ給ふ。大將(一)の君も、事ども(二)多くしたまひ、とりもちて(三)懇に營み給ふ。かの一條の宮(四)をも、この程の御志深くとぶらひ聞え給ふ。兄弟(五)の君達よりも、優りたる御心の程を、いとかくは思ひ聞えざりきと、大臣上(六)もよろこび聞え給ふ。(七)亡き跡にも、世の覺重くものし給ひける程の見ゆるに、いみじうあたらしうのみ、(八)思し焦るゝこと盡せず。

山の帝(九)は、二の宮(一〇)もかく人笑はれなるやうにて、眺め給ふなり、入道の宮(一一)も、この世の人めかしきかたは、かけ離れ給ひぬれば、樣々に飽かず思さるれど、すべてこの世(一二)をおぼし惱まじと忍び(一三)給ふ。御行の程にも、同じ道(一四)をこそは勤め給ふらめなど思しやりて、(一五)かゝる樣になり給ひて後は、はかなき事につけても、絶えず聞え給ふ。御寺(一六)の傍近き林に、ぬき出でたる筍、その邊の山に掘れる野老(一七)などの、山里につけてはあはれなれば、奉れ(一八)給ふとて、御文こまやかなる端に、

朱雀「春の野山、霞(一九)もたどたどしけれど、志深く掘り出でさせて侍る、しるし

(一)夕霧
(二)色々の追善供養を營み
(三)取りしきりて
(四)落葉をも此法事の前後に懇に見舞ふ
(五)夕霧の懇切は柏木の兄弟にも優りたるを
(六)頭中夫妻
(七)柏木が人に重んぜられし樣子は死後に迄見ゆる故
(八)父母が

㊂ 朱雀院筍野老を女三宮に贈る、蕭筍をかじる

(九)朱雀
(一〇)落葉宮
(一一)女三宮
(一二)尼になりたれば也
(一三)現世の事は氣にすまじと
(一四)女三も我と同じく佛道を勤むるならんと
(一五)女三出家の後は
(一六)朱雀の寺、仁和寺の
(一七)薯蕷に似て苦きもの
(一八)女三へ
(一九)霞の爲によく見えぬけれども其方に差上げたさに掘らせたる驗に此品を御目にかける

横笛

槃梗

㊀柏木の一週忌に源氏法會を營む。㊁朱雀院、筍野老を女三宮に贈る。薫筍をかじる。㊂夕霧、落葉宮を訪ふ。柏木の遺物の笛を贈らる。㊃雲井雁の悋氣。夕霧夢に柏木の歌よむを見る。㊄夕霧、柏木の爲に法會を營む。薫を見て柏木と女三宮との中を疑ふ。㊅夕霧、源氏に夢の事笛の事を語る。

(一)故權大納言のはかなく亡せ給ひにし悲しさを、飽かず口惜しきものに、戀ひ偲び給ふ人多かり。六條院にも、(二)大方につけてだに、世にめやすき人のなくなるをば惜み給ふ御心に、(三)ましてこれは、朝夕親しく參り馴れつゝ、人よりも御心留め思したりしかば、如何にぞやおぼし出づる事はありながら、(四)哀は多く、折々につけて偲び給ふ。御終にも、(五)誦經など、とりわきせさせ給ふ。(六)よろづも知らず顏に、いはけなき御有樣を見給ふにも、(七)さすがにいみじく哀なれば、御心のうちに、また心ざし給ひて、(八)黄金百兩をなむ別にせさせ給ひける。(九)大臣は心も知らでぞ、(一〇)畏

㊀柏木の一周忌に源氏法會を營む
(一)柏木
(二)別に親しくもなき者の事につけてさへ
(三)柏木は
(四)不都合なと思ふ點はありながら
(五)柏木の一週忌
(六)法事に誦經せし僧への布施
(七)薫の
(八)薫の柏木に對する志として
(九)僧に施したり
(一〇)頭中は其譯は知らずして

（一）柏木は眞面目な方で役に立ちしは勿論

（二）帝

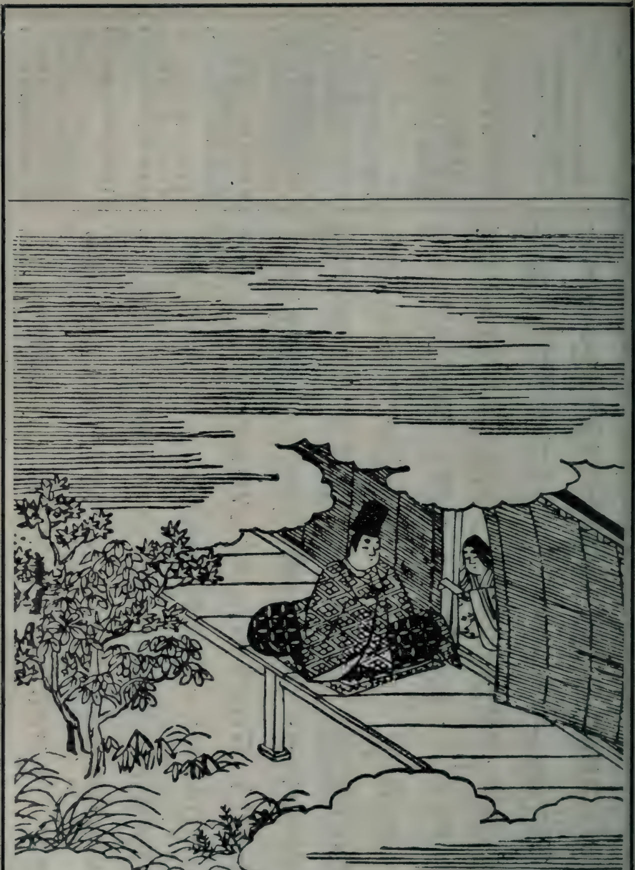
（三）薰を源一人の心には柏木の形見と思へど

（四）薰

みだるやうなりし世の中に、高きも下れるも、惜みあたらしがらぬは無きも、（一）むべむべしき方をばさるものにて、あやしう情をたてたる人にぞ物し給ひければ、さしもあるまじきおほやけ人、女房などの年古めきたるどもさへ、戀ひかなしみ聞ゆる。まして上（二）には、御遊などの折ごとにも、まづおぼし出でてなむ、しのばせ給ひける。「あはれ衞門督の」といふことぐさ、何事につけても言はぬ人なし。六條院には、まして哀と思し出づる事、月日に添へて多かり。（三）この若君を、御心ひとつには形見と見なし給へど、人の思ひよらぬ事なれば、いとかひなし。秋つかたになれば、（四）この君は這ひゐざりなど。

心のおく見え給へ、哀げにいかに人わらはれなる事を、(一)とり添へて思すらむと思ふも、たゞならねば、いたう心とゞめて、(二)御有樣も問ひ聞え給ひけり。(三)容貌ぞいとまほにはえ物し給ふまじけれど、いと見苦しうかたはら痛き程にだにあらずば、などて見る目により、人をも思ひ猒き、又さるまじきに心をも惑はすべきぞ、樣(四)あしや、(五)唯心ばせのみこそ、言ひもてゆかむには、やむごとなかるべけれ、と思す。夕霧「今は猶昔(六)におもほしなずらへて、疎からずもてなさせ給へ」など、わざと懸想びてはあらねど、懇に氣色ばみて聞え給ふ。(七)直衣姿いと鮮やかにて、(八)丈だちものものしう、そゞろかにぞ見え給ひける。(九)「かの大臣はよろづの事なつかしうなまめき、あてに愛敬づき給へることの竝なきなり。(一〇)これは雄々しう花やかに、あな淸らとふと見えたまふ匂ぞ、人に似ぬや」とうちさゝめきて、「同じうは、(一一)かやうにても出で入り給はましかば」など、人々いふめり。夕霧「(一二)右將軍が塚に草はじめて靑し」と、うち口ずさびて、(一三)それもいと近き世のことなれば、(一四)さま〱近う遠う、心

(一)柏木に嫁せしさへ既に外聞でもなきに、又死別れたれば一層人に批評されんことを心配せらるべしと
(二)落葉の起居を尋ねて慰めたり
(三)夕霧の心、落葉は容量は端麗ではあるまじけれど非常に醜くゝさへなければよい
(四)容貌によつて女を嫌ひ、又は無理な戀をしかけて苦勞する杯はけしからん事
(五)畢竟は心が第一
(六)私を柏木と思つて
(七)夕霧の容貌
(八)ひよろ高く
(九)侍女等の詞、源氏は
(一〇)夕霧
(一一)夕霧が落葉の許へ始終出入する樣ならさぞよからうと
(一二)紀在昌が藤原保忠の死を悼める句「天與善人吾不信、右將軍塚草初秋」
(一三)保忠の死も此頃の事なれば、保忠は時平の子
(一四)色々の人の死が人の心を亂せし中、取分け柏木に對しては惜まぬ人なきは



夕霧「ことならばならしの枝にならさなむ葉守の神のゆるしありきと（一）
御簾の外の隔ある程こそ、怨めしけれ」とて、長押により居給へり。「（二）なよび姿は
た、いといたうたをやぎけるをや」と、これかれつきじろふ。（三）このあへしらへ聞ゆ
る少將の君といふ人して、

落葉「（四）かしは木にはもりの神はまさずとも人ならすべき宿のこずゑか

（五）うちつけなる御言の葉になむ、淺う思ひ給へなりぬる」と聞ゆれば、實にとおぼす（六）
に、少しほゝゑみ給ひぬ。（七）御息所少しゐざり出で給ふけはひすれば、やをら居直（八）
り給ひぬ。御息所「憂世の中を思う給へしづむ月日の積るけぢめにや、みだり心地も
あやしう、ほれぐ〵しうて過し侍るを、かく度々かさねさせ給ふ御とぶらひの、い
と忝きに、（九）思う給へおこしてなむ」とて、實に惱ましげなる御けはひなり。夕霧「思
ほし歎くは、世の理なれど、又いと然のみはいかゞ。（一〇）萬の事さるべきにこそは侍
るめれ。さすがに限ある世になむ」と慰め聞え給ふ。（一一）この宮こそ聞きしよりは、

（一）柏木と我とは親交ありし中なれば、同じことならば柏木も許したる我に靡き給への意なるべし、ならしの枝といふ事少し解し難し
（二）夕霧の姿を侍女等の評する詞
（三）侍女の誰彼が私語しあふ
（四）我は今夫はなけれどさりとて君に靡くべき身には非ず、「柏木に葉守の神のましけるを知らでぞ折りし祟りなさるな」後撰集
（五）突然な御詞に貴方を輕んずる心が起つた
（六）夕霧が
（七）母御息所が出て來たる也
（八）落葉の方へ近寄りて居たるを退きて座り直したる也
（九）奮發して起き出したり
（一〇）何事も天命
（一一）夕霧の心、落葉こそ聞きしよりは心立優れたる人なり

(一)夕霧が一條の宮へ
(二)庭に敷きたる砂の薄い物かげの處に
(三)柏木がなるべし
(四)細き篠の莖にて編みたる簾
(五)几帳の垂布を夏のに取換へたる也
(六)やゝ濃き黑色の
(七)喪服なれば也
(八)落葉宮が
(九)侍女等が落葉の對面する迄座を取持ち居る也
(一〇)此柏と楓とは如何なる縁か枝をさし交して睦じくして居るは頼もし

づの事につけて靜に心細く、暮しかね給ふに、例の渡り給へり。(一)庭もやう〳〵青み出づる若草見えわたり、此處彼處の、砂子(二)うすき物のかくれの方に、蓬も所得顔なり。前栽に心入れて(三)つくろひ給ひしも、心に任せて繁りあひ、一村薄も頼もしげに廣ごりて、蟲の音添はむ秋思ひやらるゝより、いと物哀に露けくて、分け入り給ふ。伊豫簾(四)かけわたして、鈍色の几帳(五)の衣がへしたる透影、涼しげに見えて、よき童の、こまやかに(六)にばめる汗衫のつま、頭つきなどほの見えたる、をかしけれど、なほ(七)目驚かるゝ色なりかし。今日は簀子に居給へば、褥さし出でたり。いと輕らかなる御座なりとて、例の御息所驚かし聞ゆれど、この頃惱ましとて(八)寄り伏し給へり。(九)とかく聞え紛はすほど、御前の木立ども、思ふことなげなる景色を見給ふも、いと物哀なり。柏木と楓との、物よりけに若やかなる色して、枝さしかはしたるを、夕霧(一〇)「いかなる契にか、末あへる頼もしさよ」など宣ひて、忍びやかにさし寄りて、

(一)どの樣な事があつても此悲は消えさうにない
(二)夕霧の見せたる
(三)子を喪ひて此春は親が逆樣に子の爲に喪に服する悲しさ、こ—木ノ子
(四)親に喪服を著て貰はんとは柏木も思はざりしならん
(五)花を柏木に比す
(六)法事
(七)雲井雁
(八)夕霧
㊈ 夕霧、落葉宮に戀情をほのめかす
(九)夕霧が
(一〇)一條の宮

がたく戀しかりけれ。何ばかりの事にてかは、思ひ醒すべからむ」と、空を仰ぎて眺め給ふ。夕暮の雲の氣色、(一)鈍色にかすみて、花の散りたる梢どもをも、今日ぞ目とゞめ給ふ。この御疊紙に、(二)

頭中　このしたの雫にぬれてさかさまにかすみの衣きたるはるかな(三)

大將の君、

夕霧　なき人もおもはざりけむうちすてて夕のかすみ君著たれとは(四)

辨の君、

うらめしや霞のころも誰著よとはるよりさきに花の散りけむ(五)

(六)御わざなど世の常ならず、嚴しうなむありける。大將殿の(七)北の方をばさるものにて、殿は(八)心ことに、誦經なども、哀に、深き心ばへを加へ給ふ。

かの一條の宮にも、常にとぶらひ聞え給ふ。(九)卯月ばかりの空は、そこはかとなう心地よげに、ひとつ色なる四方の梢もをかしう見えわたるを、(一〇)物思ふ宿は、よろ

ちて、え留め給はず。つきせぬ御事どもを聞えかはし給ふ。一條の宮にまうでたりつる有樣など聞え給ふ。いとゞしく春雨かと見ゆるまで、軒の雫に異ならず、濡し添へ給ふ(一)。疊紙に、かの「柳のめにぞ」(二)とありつるを、書い給へるを奉り給へば、頭中「目も見えずや」と、おししぼりつゝ見給ふ。(三)うちひそみつゝ見給ふ御樣、(四)例は心強うあざやかに、誇かなる御氣色名殘なく人わろし。さるは殊なることなかンめれど、この「玉はぬく」とある節の、實にと思さるゝに(五)心亂れて、久しうえためらひ給はず。頭中「君の(六)御母君のかくれ給へりし秋なむ、世に悲しき事のきは(七)にはと覺え侍りしを、女は限ありて、(八)見る人少う、とある事もかゝる事も、顯ならねば、かなしみも隱ろへてなむありける。(九)はかぐ\しからねど、おほやけも捨て給はず、やうぐ\人となり、官位につけて(一〇)あひ頼む人々、おのづから次々に多うなりなどして、(一一)驚き口惜しがるも、類に觸れてあるべし。(一二)かう深き思は、その大方の世のおほえも、官位も思ほえず、唯異(一三)なる事なかりし、自らの有樣のみこそ、堪へ

(一)頭中が涙を流す
(二)母御息所の歌を夕霧が懷紙に書き留めおきたる也
(三)泣顏しつゝ
(四)頭中のいつもの氣強く得意げなる樣子が凡でなく見つともなし
(五)此歌は格別よい處もないのであらうけれど
(六)葵上
(七)極點
(八)人にも多く遇はぬ故
(九)柏木は男だけに役にも立たねど帝にも御寵愛を蒙り
(一〇)力にしあふ人々
(一一)柏木の死を
(一二)我が柏木を深く悲むは
(一三)穩やかなりし人柄が戀しき也

（一）「春毎に花の盛はありなめど逢ひ見ん事は命なりけり」
（二）柏木の死したるあとの落葉をたとへたる也
（三）柳の芽を我が目に、花を柏木に比したり
（四）母御息所の人となりをいふ
（五）才ありと
（六）夕霧が
⑧ 夕霧、頭中將を訪ふ、落葉宮の母御息所の歌を示す
（七）頭中へ夕霧が
（八）表座敷
（九）頭中が
（一〇）親の喪中にも勝りて
（一一）夕霧の心、餘り取亂りなく落る涙
（一二）つとめて涙を隱す
（一三）頭中
（一四）夕霧は柏木と別離なりしにと

ば、夕霧「あひ見むことは」（一）と口ずさびて、

夕霧　時しあればかはらぬ色に匂ひけり片枝（二）枯れにし宿の櫻も

わざとならず誦じなして立ち給ふに、いと疾う、

御息所　この春は柳（三）のめにぞ玉はぬく咲散る花のゆくへ知らねば

と聞え給ふ、（四）いと深きよしにはあらねど、今めかしう、（五）かどありとは言はれ給ひし更衣なりけり。實にめやすき程の用意なりけりと見給ふ。（六）

（七）致仕の大殿にやがて參り給へれば、君達あまた物し給ひて、「こなたに入らせ給へ」とあれば、大臣の御出居（八）のかたに入り給へり。（九）ためらひて對面し給へり。古りがたう清げなる御容貌、いたう痩せ衰へて、御髭などもとりつくろひ給はねば、しげりて、（一〇）親の孝よりもけにやつれ給へり。見奉り給ふよりいと忍び難ければ、（一一）あまりにをさまらず亂れ落つる涙こそはしたなけれ、と思へば、（一二）せめてぞもて隱し給ふ。（一三）大臣も、とりわきて御中（一四）よく物し給ひしをと見給ふに、たゞ降りに降り落

憂きにも嬉しきせは交り侍りけり」とて、いといたう泣い給ふけはひなり。大將も頓に(一)えためらひ給はず。夕霧「怪しう、いとこよなく(二)およずけ給へりし人の、(三)斯かるべうてや、この二三年のこなたなむ、いたう濕りて、物心細げに見え給ひしかば、(四)あまり世の理を思ひ知り、物深うなりぬる人の(五)すみ過ぎて、かゝる例、心美しからず、かへりては(六)あざやかなる方のおぼえ、薄らぐものなりとなむ、常に(七)はかばかしからぬ心に、諫め聞えしかば、(八)心あさしと思ひ給へりし。(九)萬よりも、人にまさりて實にかの思し歎くらむ御心のうちの、辱けれど、いと心苦しうも侍るかな」など、懐しうこまやかに聞え給ひて、やゝ程經てぞ出で給ふ。(一〇)かの君は五六年の程の(一一)このかみなりしかど、猶いと若やかになまめき、(一二)あいだれて物し給ひし。(一三)これはいとすくよかに重々しく、雄々しきけはひして、顔のみぞいと若う清らなること、人に勝れ給へる。(一四)若き人々は、物悲しさも少し紛れて(一五)見出し奉る。御前近き櫻のいとおもしろきを、(一六)「今年ばかりは」とうち覺ゆるも、忌々しき筋なりけれ

(一)涙とゞめかねて
(二)老成なりし柏木が
(三)斯うなるせいであつたか
(四)以下夕霧が柏木を諫めし詞、君の如く道理を悟りて
(五)悟りすぎて仕舞ふと美しき情がなく
(六)人に氣受よく思はるる事薄くなるものなりと
(七)足らはぬ私が
(八)柏木は私を
(九)何はさて置き人一倍なる落葉の御歎が御氣の毒なり
(一〇)柏木
(一一)夕霧よりも年長
(一二)あまえて
(一三)夕霧は
(一四)侍女等
(一五)夕霧を見送る
(一六)「深草の野べの櫻し心あらば今年ばかりは墨染に咲け」

事を、大臣の御心むけも心苦しう、院にもよろしき様に思し許いたる御氣色などの侍りしかば、さらば(一)自らの心おきての及ばぬなりけりと、思う給へなしてなむ(二)見奉りつるを、かく(三)夢のやうなる事を見給ふるに、思ひ給へ合すれば、自らの心の程なむ、(四)同じうは強うも諍ひ聞えましをと思ひ侍るに、猶いと悔しう。(五)それもかやうにしも思ひより侍らざりきかし。(六)御子達は、おぼろげの事ならで、惡しくも善くも、かやうに世づき給ふことは、え心にくからぬことなりと、(七)古めき心には思ひ侍りしを、(八)何方にもよらず、中空に憂き御宿世なりければ、何かは、かゝるついでに、(九)煙にも紛れ給ひなむは、この御身の爲、人聞きなどは殊に口惜かるまじけれど、然りとても、(一〇)然すくよかに、え思ひすつまじう、悲しう見奉り侍るに、いと嬉しう淺からぬ御とぶらひの、度々になり侍るめるを、(一一)ありがたうもと聞え侍るも、さらば(一二)かの御契ありけるにこそはと、(一三)思ふやうにしも見えざりし御心ばへなれど、今はとてこれかれにつけおき給ひける御遺言の、哀なるになむ。

(一)柏木を嫌ふは我が分別の足らぬならんと
(二)縁組せしに
(三)柏木の死
(四)斷うなる位ならあの時もつと強情を張るのであつたと
(五)柏木との縁組を嫌ひたるも此樣な事にならんと思ひての事には非ず
(六)皇女といふ者はとにかくよく／＼の事でなければ夫を持つ事は奥床しからぬ事ぢやと
(七)我が老人の心には
(八)獨身にも非ず又夫にも別れて中途半ぱの運の惡さ故
(九)落葉が死んで仕舞ふのは常人の爲に外聞惡き事でもなければど
(一〇)さうさつぱりと思ひ切つても仕舞はれず
(一一)人の出來ぬ事と
(一二)柏木の遺言のありし故の事ならんと思へば
(一三)柏木生前は餘り情が十分厚くはなかりしかど、臨終に人々にし置きたる遺言の哀なるを思へば流石に嬉し

などのしげき頃ほひ、(一)私の志にまかせて、つく〴〵と籠り居侍らむも、例ならぬ事なりければ、立ちながらはた、なか〳〵に飽かず思う給へらるべうてなむ、日頃は過し侍りにける。(二)大臣などの心をみだり給ふさま、見聞き侍るにつけても、親子の道の闇をばさるものにて、(三)かゝる御中らひの、深く思ひ留め給ひけむ程を、推量り聞えさするに、(四)いと盡きせずなむ」とて、しば〳〵おし拭ひ、鼻打ちかみ給ふ。(五)あざやかに氣高きものから、懐しうなまめいたり。御息所も鼻聲になり給ひて、御息所「哀なることは、その常なき世のさがにこそは。いみじとても、(六)又類なき事にやはと、(七)年つもりぬる人は、しひて心づよう(八)醒まし侍るを、(九)更におぼし入りたる樣の、いと忌々しきまで、(一〇)しばしも立ち後れ給ふまじきやうに見え侍れば、すべていと心憂かりける身の、(一一)今までながらへ侍りて、(一二)かく方々にはかなき世の末の有樣を、見給へ過すべきにやと、いと靜心なくなむ。自ら(一三)近き御中らひにて、聞き及ばせ給ふやうも侍りけむ。(一四)初つかたより、をさ〳〵うけひき聞えざりし御

(一)柏木の悲あればとて勝手に引籠り居るも例なき事なれば、出仕に暇なくさりとて折角見舞ひて立の儘にて直に歸るも飽氣なき故今迄御無沙汰致せり
(二)頭中
(三)夫婦の中
(四)悲盡きず
(五)夕霧の樣子
(六)いくら悲しとて外に類のない事でもなしと
(七)我々如き老人は
(八)悲を
(九)落葉が
(一〇)やがて柏木の跡を追ひて死にさうに見ゆる故
(一一)我身
(一二)柏木と落葉と
(一三)夕霧は柏木とは近親の間柄故
(一四)我は柏木との縁談は初から不承知なりしに頭中の希望が氣の毒にもあり朱雀も御承知らしき御樣子なりし故

も、とり離ちやつされて音を立てぬも、いとうもれ(一)痛きわざなりや。御前の木立いたうけぶりて、花は時忘れぬ氣色なるをながめつゝ、もの悲しく、侍ふ人々も、鈍色にやつれつゝ、淋しう徒然なる晝つかた、先はなやかに追ふ音して、こゝに(二)とまりぬる人あり。「あはれ(三)故殿の御けはひとこそ、うち忘れては思ひつれ」とて泣くもあり。(四)大將殿のおはしたるなりけり。御消息聞え入れ給へり。例の(五)辨の君、宰相などのおはしたると思しつるを、(六)いと恥かしげに、淸らなる御もてなしにて入り給へり。母屋の廂に御座よそひて入れ奉る。(七)おしなべたる樣に、人々のあへしらひ聞えむは、かたじけなき樣し給へれば、(八)御息所ぞ對面し給へる。夕霧(九)いみじきことを思ひ給へ歎く心は、さるべき人々にも越えて侍れど、(一〇)限あれば聞えさせやる方なうて、世の常になり侍りにけり。(一一)いまはの程にも、宣ひ置く事侍りしかば、疎ならずなむ。(一二)誰ものどめ難き世なれど、後れ先だつ程のけぢめには、思ひ給へ及ばむにしたがひて、深き心の程をも御覽ぜられにしがなとなむ。(一三)神わざ

(一)沈入りきつた
(二)一條の宮の御前にて
(三)柏木の來られしと
(四)夕霧
(五)二人共に柏木の弟
(六)思もよらぬ夕霧が
(七)一通りの客人の樣に侍女等に應接させるのは失禮なるべき夕霧の樣子なれば
(八)落葉の母
(九)張んでもない柏木の死を
(一〇)詞には限ありて特別の悲を述ぶべき樣もなければ、常前の御悔を申上ぐるのみ
(一一)柏木臨終にも私に御遺言ありしかば、あなたに對して隔意はなし
(一二)誰も死は免れ難き世なれど、私存生中は出來るだけ御世話申上げたし
(一三)二月は朝廷に神事繁き頃也、此時は三月頃

(一)源氏
(二)柏木が斯く〳〵遠まはしに言ひたりと源に語りて源の樣子が見たしと思へり
(三)柏木の父母
(四)柏木の法事
(五)柏木の兄弟姉妹等
(六)紅梅
(七)其仕方につきて人が聞くと
(八)親が子の爲に心盡すは却つて子の冥途の障となる
(九)死んだ樣に
(一〇)落葉
(一一)柏木が
(一二)柏木が
(一三)役人等
(一四)落葉が
(一五)柏木が

さるべき序無うて、(一)院にもまた聞え出で給はざりけり。さるは、(二)かゝる事をなむかすめしと申し出でて、御氣色も見まほしかりけり。

(三)父大臣母北の方は、涙のいとまなく思し沈みて、はかなく過ぐる日數をも知り給はず、(四)御わざの法服、御裝束、何くれのいそぎをも、(五)君達御方々とりどりになむせさせ給ひける。經佛のおきてなども、(六)左大辨の君せさせ給ふ。七日々々の御誦經などを、(七)人の聞えおどろかすにも、頭中「我にな聞かせそ。かくいみじと思ひ惑ふに、(八)なかなか道妨にもこそ」とて、(九)亡きやうに思しほれたり。

一條の宮には、まして覺束なくて別れ給ひにし恨さへ添ひて、日頃ふるまゝに、(一〇)廣き宮のうち、人げすくなう心細げにて、(一一)親しく使ひならし給ひし人は、猶參りとぶらひきこゆ。(一二)好み給ひし鷹、馬など、その方の(一三)あづかりどもも、皆屬く所なう思ひ倦んじて、かすかに出入るを(一四)見給ふも、ことにふれて哀は盡きぬものになむありける。(一五)もてつかひ給ひし御調度ども、常にひき給ひし琵琶、和琴などの緒

色を見てましを、いふがひなきとぢめにて(一)、折あしう、いぶせう、哀にもありしかな、と面影忘れがたくて、兄弟の君達よりも、しひて悲しと覺え給ひけり。女(二)宮のかく世を背き給へる有樣、おどろ〲しき御惱にもあらで、すがやかに思し(三)立ちける程よ、又さりとも許し(四)聞え給ふべき事かは、二條の上(五)の、さばかり限にて、泣く〲申し給ふと聞きしをば、いみじき事におぼして、遂にかく(六)かけ留め奉り給へるものを、など取り集めて思ひ碎くに、猶昔より(七)(八)絶えず見ゆる心ばへ、え忍ばぬ折々もありきかし、いとようもてしづめたる(九)上べは、人よりけに用意ありのどかに、何事をこの人の心の中に思ふらむと、見る人も苦しきまでありしかど、少し弱き所つきて、なよび過ぎたりし(一〇)けぞかし、いみじくとも(一一)、さるまじき事に心を亂りて、かくしも身に代ふべき事にやはありける、人(一二)の爲にもいとほしう、我が身はた、徒にやなすべき、さるべき(一三)昔の契といひながら、いと輕々しう、味氣なきことなりかし、など心ひとつに思へど、女君(一四)にだに聞え出で給はず、

(一)死際にて
(二)女三、以下夕霧の心
(三)さつぱりと思ひ切りて實行して仕舞つた處がをかしい
(四)源が許すべきでは無い
(五)紫上
(六)出家をさし留め
(七)以下夕霧の心
(八)女三を戀するらしき柏木の情
(九)平氣を裝ふ、以下柏木の性質をいふ
(一〇)弱々しすぎたる故にあの如き過をも犯したるなり
(一一)何程思ひ込みたりとも
(一二)女三
(一三)斯うなるのも因縁とはいひながら
(一四)雲井雁にも話さず

(一)源が
(二)頭中夫婦、以下源の心
(三)柏木の子
(四)あれ程氣位高く
(五)侍女等
(六)薫
(七)こんな可愛いものを捨てゝ尼になつてよいものか
(八)此子は誰の胤ぞと問はれたらば其方は何と答ふるぞ、「梓弓礒邊の小松誰が世にか萬代かけて種をまきけん」
(九)女三が
(一〇)源の心
(一一)女三も流石平氣でも居られぬならんと
㊆ 夕霧の推測、夕霧落葉宮の母御息所と語る
(一二)夕霧
(一三)柏木が
(一四)夕霧の心
(一五)あの時柏木が心確なりしならば、あの位話し出したる事故事情がわかりしならんに

とよく似通ひたりけりと見給ふに、(一)親たちの、(二)子だにあれかしとなげい給ふらむにも、え見せず、人知れずはかなき形見ばかりを(三)留め置きて、(四)さばかり思ひあがり、およずけたりし身を、心もて失ひつるよ、と哀におぼしければ、めざましと思ふ心もひきかへし、うち泣かれ給ひぬ。(五)人々すべり隠れたる程に、宮の御許により給ひて、源「(六)この人をばいかゞ見給ふや。(七)かゝる人を捨てて、背きはて給ひぬべき世にやありける。あな心憂」とおどろかし聞え給へば、顔うち赤めておはす。

源「(八)誰が世にかたねはまきしと人とはばいかゞ岩根の松はこたへむ

哀なり」など忍びて聞え給ふに、御答も無うて、(九)ひれふし給へり。理とおぼせば、強ひても聞え給はず。(一〇)如何に思すらむ、物深うなどはおはせねど、(一一)いかでかはただにはと、推し量り聞え給ふも、いと心苦しうなむ。

(一二)大將の君は、(一三)かの心にあまりてほのめかし出でたりしを、(一四)如何なる事にかありけむ、(一五)少し物覺えたる樣ならましかば、さばかり打出でそめたりしに、いとよう氣

(一)目つき
(二)氣のせいかしてよく柏木に似たり
(三)今のうちから
(四)目つきおだやかに
(五)一風かはりて
(六)女三は其程見分がつかず
(七)源一人
(八)縁起を祝ふ日であるのにと
(九)白樂天の詩の句、「五十八翁方有レ後、靜思堪レ喜亦堪レ嗟」
(一〇)源今年四十八
(一一)晩年
(一二)上の詩のつゞきに「持レ盃祝願無二他語一、愼勿レ頑愚似二汝爺一」
(一三)内密の事情を知れる人、以下源の心
(一四)知れる女房は今日の我が様子を見て馬鹿らしく思ふならんと
(一五)自分の馬鹿らしく思はるゝ方はまだ我慢も出來る、どちらかといへば女三がさう思はれるのが氣の毒ぢや
(一六)無心が
(一七)秘密を知らぬ人はどう思ふか知らぬが

敬づき、まみ(一)のかをりて、笑勝なるなどを、いと哀と見給ふ。思ひなしにや(二)、猶いとよう覺えたりかし。たゞ今(三)ながら(四)、まなこゐのどかに、恥かしきさまも様(五)はなれて、かをりをかしき顏ざまなり。(六)宮はさしも思しわかず、人はた更に知らぬことなれば、唯(七)一所の御心の中にのみぞ、哀はかなかりける人の契かなと見給ふに、大方の世のさだめなさも思し續けられて、涙のほろ〳〵とこぼれぬるを、今日は事忌(八)すべき日をと、おし拭ひかくし給ひて、源「靜(九)に思ひて歎くに堪へたり」と、うち誦じ給ふ。五十八を十とりすてたる御齡(一〇)なれど、末(一一)になりぬる心地し給ひて、いと物哀におぼさる。「汝が父に」(一二)とも、諫めまほしう思しけむかし。この(一三)事の心知れる人、女房の中にもあらむかし、知らぬこそ妬けれ、(一四)をこなりと見るらむ、と安からずおぼせど、(一五)我が御咎あることはあへなむ、二ついはむには、女の御ためこそいとほしけれ、など思して、色にも出し給はず。いと(一六)何心なう物語して笑ひ給へる、まみ口つきの美しきも、心(一七)知らざらむ人はいかゞあらむ、猶い



古りがたう理なき心地する涙の人わろさを、いと斯う、(一)思ひすてられ奉る身の(二)咎に思ひなすも、さま〴〵に胸いたう口惜しうなむ。(三)取り返すものにもがなや」と、打歎き給ひて、源「今はとて思しはな(四)れば、誠に御心と(五)厭ひ捨て給ひけると、恥かしう心憂くなむおぼゆべき。猶哀とおぼせ」と聞え給へば、女三(六)「かゝるさまの人は、物の哀も知らぬものと聞きしを、(七)ましてもとより知らぬ事にて、いかゞは聞ゆべからむ」と宣へば、源「かひなの事や。(八)思し知る方もあらむものを」とばかり宣ひさして、若君を見奉り給ふ。御乳母たちは、やむごとなくめやすき限、數多さぶらふ。(九)召し出でて、(一〇)仕う奉るべき心おきてなど宣ふ。源「あはれ、殘すく(一一)なき世に、おひ出づべき人にこそ」とて、抱きとり給へば、(一二)いと心やすくうち笑みて、つぶ〳〵と肥えて白う美し。(一三)大將などの御兒生ひ、ほのかに思し出づるには似給はず。(一四)女御の宮たちはた、父帝の御方ざまに、王氣づきて、氣高うこそおはしませ、殊に勝れてめでたうしもおはせず。(一五)この君はいとあてなるに添へて、愛

(一)いつ迄も堪難き悲に涙がこぼれて見つともなきを
(二)其方に棄てられた自分が悪いからと考へても
(三)「取返すものにもがなや世の中をありしながらの我身と思へば」
(四)我を棄てられなば
(五)其方の心から我を嫌ひたるものと思ひて
(六)出家したる者は
(七)物の哀などは元から我は知らぬ事なれば
(八)柏木に對しては餘り知らぬと言はれまいに
(九)源が自分の前へ乳母を呼出して
(一〇)薫に奉仕する心得
(一一)我餘命幾許もなき今になりて
(一二)薫が
(一三)源の記憶に殘れる夕霧の幼立などには似ずに
(一四)明石姫君腹の皇子たちも
(一五)薫

（一）源が女子ならば同じ女なる母親が出家したるは忌むべきであるが
（二）源の爲に
（三）源が實は柏木の子なる由を知らぬ故
（四）源が
（五）女三
（六）尼は切りたる髪を束ねずしておく故也
（七）源が
（八）當前より長く殘して切りたる故
（九）切つたか切らぬか分らぬ位
（一〇）次々、段々に重なりたる也
（一一）紅色
（一二）尼として落附わるき
（一三）出家はせられても

様を、人々いかになど聞えやすらへど、院わたらせ給ひて、源「何か。女（一）に物し給はばこそ、同じ筋にて、忌々しくもあらめ」とて、南面に、（二）ちひさき御座などよそひて、參らせ給ふ。御乳母いと花やかに裝束きて、御前の物いろ／＼に盡したる、籠物檜破子の心ばへどもを、内にも外にも、（三）ことの心をしらぬ事なれば、取り散し、何心もなきを、いと心苦しうまばゆきわざなりやと（四）思す。（五）宮もおき居給ひて、（六）御髪のするの所せう廣ごりたるを、いと苦しとおぼして、額など撫でつけておはするに、（七）几帳をひきやりて居給へば、いと恥かしうて背き給へる、いとどちひさう細り給ひて、御髪はをしみ聞えて、（八）長うそぎたりければ、後はことにけ（九）ぢめも見え給はぬ程なり。すぎ／＼（一〇）見ゆる鈍色の御衣どもの、黄がちなる今やう（一一）色など著給ひて、（一二）まだありつかぬ御傍目、かくてしも美しき子供の心地して、なまめかしうをかしげなり。源「いであな心憂。墨染こそ猶いとうたて、目もくるゝ色なりけれ。（一三）かやうにても見奉ることは絶ゆまじきぞかしと、思ひ慰め侍れど、

り歎き給ふ事かぎりなし。大臣北の方などは、まして言はむかたなく、我こそ先だため、(一)世の理なうつらい事と、焦れ給へど何のかひなし。(二)尼宮は、(三)おほけなき心もうたてのみ思されて、世に長かれとしも思さゞりしを、かくなむと聞き給ふは、流石にいと哀なりかし。(四)若君の御ことを、(五)さぞと思ひたりしも、實にかゝるべき契にてや、(六)思の外に心憂き事もありけむ、と思し寄るに、さま〴〵物心細うて、打泣かれ給ひぬ。

三月になれば、空の氣色も物うらゝかにて、(七)この君五十日の程になり給ひて、いと白う美しう、程よりはおよずけて、物語などし給ふ。大臣わたり給ひて、「御心地はさわやかになり給ひにたりや。いでや、(八)いとかひなくも侍るかな。(九)例の御有樣にて、かく見なし奉らましかば、いかに嬉しう侍らまし。心憂く思し捨てける事」と、涙ぐみて恨み聞え給ふ。日々に渡り給ひて、(一〇)今しも、(一一)やむごとなく限なき樣にもてなし聞え給ふ。御五十日に(一二)餅參らせ給はむとて、(一三)かたち異なる御

(一)逆樣事にて
(二)女三
(三)柏木のけしからぬ戀が憎さに永く生きて居て貰ひたくもなかりしかど死んだと聞いては
(四)女三の子、薫
(五)柏木が我子ぞと思ひ込みしも
(六)柏木に手籠にされし事
㊅薫五十日の祝、源氏の感慨
(七)薫
(八)尼になりたるをいふ
(九)前通りの御姿で
(一〇)源が女三方へ
(一一)尼になつて後却て
(一二)祝の餅
(一三)女三が尼姿故、通常の通りにするも如何なものと

は多かるべけれど、心地せむ方なくなりにければ、出でさせ給ひねと、(一)手かき聞え給ふ。加持まゐる僧ども近う參り、上大臣などおはし集まりて、人々も立ち騷げば、(二)泣く〳〵出で給ひぬ。女御(三)をば更にも聞えず、この(四)大將の御方なども、いみじう歎き給ふ。(五)心おきての、あまねく人のこのかみ心にものし給ひければ、右の大殿の北の方(六)も、この君をのみぞ、睦まじきものに思ひ聞え給ひければ、よろづに思ひ歎き給ひて、御祈などとりわきて(七)せさせ給ひけれど、(八)やむ藥ならねば、かひなきわざになむありける。(九)女宮にも、遂に對面し聞え給はで、泡の消え入るやうにて亡せ給ひぬ。(一〇)年頃下の心こそ懇に深くもなかりしか、(一一)大方には、いとあらまほしくもてなしかしづき聞えて、氣なつかしう心ばへをかしう、打解けぬさまにて過い給ひければ、つらき節もことになし。唯かく(一二)短かりける御身にて、怪しくなべての世すさまじく思ひ給へけるなりけり、と思ひ出で給ふに、いみじうて、(一三)思し入りたるさまいと心苦し。(一四)御息所も、いみじう人笑に口惜しと、見奉

(一)手眞似で夕霧に乞ふ
(二)夕霧が
(三)弘徽殿女御、冷泉の女御、柏木の妹
(四)雲井雁
(五)柏木の氣立人の兄らしく萬人を憐む心ありし人なれば
(六)玉鬘
(七)玉鬘が
(八)病の歇む藥「我こそや見ぬ人戀ふる病すれあふひならではやむ藥なし」
(九)落葉
(一〇)以下落葉の柏木に對する思出
(一一)上べは何不足なく落葉を大事にして
(一二)短命な丈にすべて世の中を悲觀して居られたのぢやわいと
(一三)女二の沈み入りたる樣
(一四)落葉の母

させ給へ。亡からむ後にも、(一)この勘事許されたらむなむ、御徳に侍るべき」など宣ふまゝに、いと苦しげにのみ見えまされば、いみじうて、(二)心の中に思ひ合する事どもあれども、さして確にはえしも推しはからず。夕霧「(三)いかなる御心の鬼にかは、更にさやうなる御氣色もなく、かく重り給へるよしをも聞き驚き歎き給ふ事かぎりなうこそ、口惜がり申し給ふめりしか。などかく思す事あるにては、今まで(四)へだて殘い給ひつらむ。(五)此方彼方あきらめ申すべかりけるものを、今はいふかひなしや」とて、とりかへさまほしく悲しく思さる。柏木「げにいさゝかも隙ありつる折に、聞え承るべうこそ侍りけれ。されどいとかう、(六)今日明日としもやはと、自らながら知らぬ命のほどを(七)思ひのどめ侍りけるも、はかなくなむ。この事は更に御心より漏らし給ふまじ。さるべき序侍らむ折には、(八)御用意くはへ給へとて、聞えおくになむ。一條に物し給ふ宮、(九)ことに觸れて訪ひ聞え給へ。心苦しき様にて、(一〇)院などにも聞しめされ給はむを、つくろひ給へ」など宣ふ。(一一)言はまほしき事

(一)源の御勘氣を許されたらば君の御恩を感謝すべし
(二)女三の一件なるべしと
(三)其は疑心暗鬼でさう思はるゝならん、源には一向其樣な風は見えず
(四)我に隔てを置いて言はずに居られしは何事ぞ
(五)話されたらば我雙方の間に立ちて事を明白にしてさばきを附けたものを
(六)まさか今日や明日死ぬ樣な事もあるまじと
(七)油斷して居たるも
(八)御含ありて然るべく取計らひて下されとて申上げ置くなり
(九)落葉宮を何ぞの折には尋ねて下され
(一〇)朱雀院などにも御心配あるべきが、よき樣に計らひ給へ
(一一)柏木が

(一)終焉の際に臨みて口外すべきでないと
(二)兄弟も多けれども色々事情ありて此事を其となく話すも話しにくし
(三)少しまづい事がありて
(四)御詫して居る事
(五)病氣になつたと思ひし時分六條院から召されて
(六)御目にかゝりしに
(七)私をけしからん奴と思ひ居られる様な御目つきを見て
(八)源は我を人がましくも思はれざりしならんが
(九)源を
(一〇)死後に念が殘るべければ
(一一)冥路のさはり
(一二)よく聞き置きて
(一三)我が爲に源に辯解してくれ給へ

方の歎をばさるものにて、又心のうちに思ひ給へ亂るゝ事の侍るを、かゝる(一)今はのきざみにて、何かは漏すべきと思ひ侍れど、猶忍びがたきことを、誰にかは愁へ侍らむ。これかれ(二)數多ものすれど、様々なることにて、更にかすめ侍らむも、あいなしかし。六條院に(三)いさゝかなる事のたがひめありて、月頃心のうちに、(四)かしこまり申すことなむ侍りしを、いと本意なう世の中心細う思ひなりて、(五)病ひづきぬとおぼえ侍りしに、召ありて、院の御賀の、樂所の試の日まゐりて、(六)御氣色を給はりしに、(七)猶ゆるされぬ御心ばへあるさまに、御目尻を見奉り侍りて、いとゞ世にながらへむ事も憚多う覺えなり侍りて、味氣なう思う給へしに、心の騷ぎそめて、かく靜まらずなり侍りぬるになむ。(八)人數には思し入れざりけめど、いはけなう侍りし時より、(九)深く頼み申す心の侍りしを、いかなる讒言などのありけるにかと、これなむこの世の憂にて(一〇)殘り侍るべければ、論無うかの(一一)後の世の妨にもやと思ひ給ふるを、事のついで侍らば、(一二)御耳とゞめて、よろしう(一三)あきらめ申

(一)長病の割合にはやつれて居らぬ
(二)この御病氣が一體何に原因するかといふ事が分らぬ
(三)是程の中のよさでありながら分らぬ
(四)急に此樣に重くならんとは思はざりし中に
(五)ぐづ〳〵して生きて居るも
(六)我から死を急ぐ樣になる
(七)此世に念の殘る事は
(八)親に心配させ
(九)一身の爲にも
(一〇)出世せぬ

氣して、枕を欹てて、物など聞え給ふけはひ、いと弱げに、息も絶えつゝあはれげなり。夕霧「(一)久しう煩ひ給ふ程よりは、殊に痛うもそこなはれ給はざりけり。常の御容貌よりも、なか〳〵まさりてなむ見え給ふ」と宣ふものから、涙おし拭ひて、夕霧「後れ先だつ隔なくとこそ契り聞えしか。いみじうもあるかな。(二)この御心地のさまを、何事にて重り給ふとだに、え聞きわき侍らず。(三)かく親しき程ながら、覺束なくのみ」など宣ふに、柏木「心には、重くなるけぢめも覺え侍らず。そこ所と苦しき事もなければ、(四)たちまちにかうも思ひ給へざりし程に、月日も經で弱り侍りにければ、今は現心も失せたるやうになむ。惜げなき身を、樣々にひき留めらるゝ、祈、願などの力にや、流石に(五)かゝづらふも、なか〳〵苦しう侍れば、(六)心もてなむ急ぎたつ心地のし侍る。さるは、(七)この世の別れさりがたきことは、いと多うなむ。親にも仕う奉りさして、今更に(八)御心どもを惱まし、君に仕う奉る事も半の程にて、(九)身をかへりみるかた、はた況て、(一〇)はか〴〵しからぬ恨を留めつる、大



(一)昔から、夕霧と柏木との中をいふ
(二)昇進の祝に來た歸なれば
(三)夕霧が
(四)少しは力が附いたかと
(五)昔の我とも思はれぬ様になれり
(六)かぶりて
(七)夕霧の目に
(八)むさくろしき様子になるものなるに
(九)柏木は

たに入らせ給へ。いと亂がはしきさまに侍る罪は、自ら思し許されなむ」とて、臥し給へる枕上のかたに、僧などしばし出し給ひて、入れ奉り給ふ。早うより(一)、いさゝか隔て給ふことなく、睦びかはし給ふ御中なれば、別れむ事の悲しく戀しかるべき歎、親兄弟の御思にも劣らず。今日はよろこび(二)とて、心地よげならましものをと思ふに、いと口惜しうかひなし。夕霧「など斯く頼もしげなくはなり給ひにける。(三)今日はかゝる御よろこびに、(四)聊すくよかにもやとこそ思ひ侍りつれ」とて、几帳のつまをひきあけ給へれば、柏木「いと口惜しう、(五)その人にもあらずなりにて侍りや」とて、烏帽子ばかり(六)おし入れて、少し起きあがらむとし給へど、いと苦しげなり。白き衣どもの、なつかしうなよゝかなるを數多かさねて、衾ひきかけて臥し給へり。御座のあたり物清げに、けはひ芳ばしう、心憎くぞ住みなし給へる。うちとけながら用意ありと(七)見ゆ。重く煩ひたる人は、自ら髪鬚も亂れ、(八)物むつかしきけはひも添ふわざなるを、(九)瘦せさらぼひたるしも、いよ〳〵白うあてはかなる

うまで行くさきの事をば宣ふ」とて、泣きにのみ泣き給へば、え聞えやり給はず、(一)左大辨の君にぞ、大方の事どもは委しう聞えつけ給ふ。(二)心ばへのどかに、よくおはしつる君なれば、弟の君達も、又末々のわかきは、親(三)とのみ頼み聞え給へるに、かう心細う宣ふを、悲しと思はぬ人なく、殿のうちの人も歎く。おほやけにも惜み口惜しがらせ給ふ。かく限と聞召して、俄に(四)權大納言になさせ給へり。(五)悦に思ひおこして、今一度も參り給ふやうもやあると、思し宣はせけれど、更に(六)えためらひやり給はで、苦しき中にも、かしこまり申し給ふ。(七)大臣も、かく重き御おぼえを見給ふにつけても、いよ〳〵悲しう、あたらしと思し惑ふ。(八)大將の君、常にいと深う思ひ歎き、とぶらひ聞え給ふ。(九)御悦にもまづまうで給へり。このおは(一〇)する對のほとり、こなたの御門は、馬車たち込み、人騒がしう騒ぎみちたり。今年となりては、起きあがる事も、をさ〳〵し給はねば、(一一)重々しき御樣に、亂れながらはえ對面し給はで、(一二)思ひつゝ弱りぬる事と思ふに、口惜しければ、柏木「猶こな

(一)紅梅、柏木の弟
(二)柏木は
(三)柏木を親の樣に力にして居たるに
(四)柏木を
(五)昇進の喜に奮發して今一度柏木が參内もするかと帝が思はれし也
(六)病を助けて參内も出來ず
(七)父頭中
(八)夕霧
(九)昇進の祝にも第一に夕霧が訪ひ來たり
(一〇)柏木の住居の對の屋
(一一)夕霧の重々しき人柄には、寢亂したる寢姿で對面する事も出來ず
(一二)よく考へて我身の弱りたる事を知れば、對面せぬも殘念と思ひて

に(一)頼む方すくなうなり給ひにたり。(二)女宮の哀に覺えたまへば、(三)こゝに渡り給はむことは、今更に輕々しきやうにもあらむを、上も大臣もかくつと添ひおはすれば、自らとりはづして、(四)見奉り給ふやうもあらむに。(五)味氣なしとおぼして、柏木「(六)かの宮に、とかくして今一度まうでむ」と宣ふを、更に(七)ゆるし聞え給はず。(八)誰にもこの宮の御事を聞えつけ給ふ。初より(九)母御息所は、をさ〳〵心ゆき給はざりしを、この(一〇)大臣のゐたち懇に聞え給ひて、志深かりしに負け給ひて、(一一)院にもいかゞはせむと思し許しけるを、(一二)二品の宮の御事を、思ほし亂れける序に、朱雀「なか〳〵(一三)この宮は、行く先後安く、(一四)まめやかなる後見まうけ給へり」と、宣はすと聞き給ひしを、(一五)かたじけなく思ひ出づ。柏木「(一六)かくて見捨て奉りぬるなゝめりと思ふにつけては、様々にいとほしけれど、心より外なる命なれば、堪へぬ契怨めしうて、思し歎かれむが(一七)心苦しきこと。(一八)御志ありて、とぶらひ物せさせ給へ」と、母上にも聞え給ふ。母「いであな忌々し。(一九)後れ奉りては、いくばく世に經べき御身とて、斯

(一)恢復の望少く
(二)柏木が落葉宮が不便に思はるゝ故
(三)落葉が頭中郎へ來る事は
(四)落葉を
(五)柏木が
(六)落葉方へ
(七)父母が
(八)柏木が誰に對しても落葉の事を頼む
(九)落葉の母御息所は柏木との縁組を好まざりしに
(一〇)頭中が懇望して
(一一)朱雀も其迄にいふのなら仕方がないと
(一二)女三を持てあまして心配したる時分朱雀が
(一三)落葉は
(一四)よき夫
(一五)柏木が
(一六)此盛中途で落葉を見捨てゝ死行くのぢやと
(一七)落葉が可愛相なれど
(一八)氣をつけて落葉を世話して下され
(一九)其方に死なれてはやがて引續き死に行くべき我なるに

(一)場合に應じて然る可く世話して下され
(二)女三が尼になりたるをいふ
(三)自分が執殺すべきを甘く取返したりと
(四)紫上
(五)女三の傍に窃に此頃は居たる也
(六)六條御息所の靈の
(七)女三
(八)出家してはつまらぬ樣に
㊄柏木危篤、後事を夕霧に託す、柏木逝去
(九)柏木
(一〇)女三出家の事

き山里などにかけ離れたらむ有樣も、又さすがに心細かるべくや。樣にしたがひ(一)て、猶思し放つまじくなむ」と聞え給へば、源「更にかくまで仰せらるゝなむ、かへりて恥かしう思ひ給へらるゝ。みだり心地、とかく亂れ侍りて、何事もえ辨へ侍らず」とて、實にいと堪へがたげに思したり。後夜の御加持に、御物怪出で來て、物怪「斯う(二)ぞあるよ。いとかしこう取りかへしつと(三)、一人(四)をば思したりしが、いと妬かりしかば、(五)このわたりに然りげなくてなむ、日頃さぶらひつる。今は歸りなむ」とてうち笑ふ。いとあさましう、さはこの物怪の(六)、こゝにも離れざりけるにやあらむと思すに、いとほしう悔しう思さる。(七)宮、少し生き出で給ふやうなれど、猶賴みがたげにのみ見え給ふ。侍ふ人々も、(八)いといふがひなく覺ゆれど、かうでも平にだにおはしまさばと念じつゝ、御修法また延べて、たゆみなく行はせなど、よろづにせさせ給ふ。

かの衛門督は、(九)かゝる御事を聞き給ふに、(一〇)いとゞ消え入るやうにし給ひて、むげ

させ給ふ。いとさかりに清らなる御髪をそぎ棄てて、忌むこと受け給ふ作法、悲しう口惜しければ、大臣はえ忍びあへ給はず、いみじう泣い給ふ。院(一)はた素より、とりわきてやむごとなう、人(二)よりも勝れて見奉らむと思しゝを、この(三)世にはかひなき様になし奉るも、飽かず悲しければ、うちしほたれ給ひて、朱雀「かくても平(四)にて、同じうは念誦をも勤め給へ」と聞えおき給ひて、明けはてぬに急ぎ出でさせ給ひぬ。宮(五)は、猶弱う消え入る様にし給ひて、はかぐしうもえ見奉り給はず、(六)物なども聞え給はず。大臣も、「夢のやうに思ひ給へ亂るゝ心まどひに、かう昔(七)覺えたる御幸のかしこまりをも、え御覽ぜられぬらうがはしさは、殊更に參り侍りてなむ」と聞え給ふ。御送に人々參らせ給ふ。朱雀「(八)世の中の今日か明日かに覺え侍りし程に、又知る人もなくて漂はむ事の、哀にさり難う覺え侍りしかば、御本意にはあらざりけめど、かく聞えつけて、年頃は心安く思う給へつるを、もしも(九)生き留り侍らば、樣ことにかはりて、人繁き住居はつきなかるべきを、さるべ

(一)朱雀
(二)女三を他の子どもよりは出世させんと思ひしに
(三)出家は未來の爲にはよき事故此世にはかひなきといふ也
(四)病氣が直りて
(五)女三
(六)朱雀の歸りを見送らず
(七)昔を思出す御幸の御禮も申上げ兼ねたり、失禮の段は特に參上して御詫申上ぐべし
(八)我が死ぬか生るかの大病の時外に女三を世話する者もなくては可愛想と思ひし故、御迷惑ながら君に引取りて貰ひて
(九)女三の病直りたらば尼姿で今迄の如き賑かな生活も不似合なるべきが

り給へるを、繕ひて住ませ(一)奉らむ。我がおはします世に、さる方にても(二)、後めたからず聞きおき、又か(三)の大臣も、さ言ふとも、いと疎にはよも思ひ放ち給はじ(四)、その心ばへをも見はてむ、など思ほし取りて、朱雀「さらば、かく物したる序に、忌(五)むこと受け給はむをだに、結縁にせむかし」と宣はす。大臣の君、憂しと思す方も忘れて、こは如何なるべき事ぞと、(六)悲しく口惜しければ、え堪へ給はず、内に入りて、源「など斯う、(七)幾世しも侍るまじき身をふり捨てて、かうは思しなりにけるぞ。猶しばし心をしづめ給ひて、御湯まゐり物などをもきこし食せ。(八)尊き事なりとも、御身弱うては行をもし給ひてむや。(九)かつはつくろひ給ひてこそ」と聞え給へど、頭ふりて、いとつらう宣ふと思したり。(一〇)つれなくて、怨めしと思す事もありけるにやと、見奉り給ふに、いとほしう哀なり。とかく(一一)聞えかへさひ、思しやすらふ程に、夜明け方になりぬ。(一二)かへり入らむに、道も晝ははしたなかるべしと、急がせ給ひて、御祈に侍ふ僧の中に、やむごとなく尊き限召し入れて、御髪(一三)おろ

(一)女三を
(二)出家でもよいから安心の出來る様にしておき
(三)源は何といふても粗末にする筈はなし
(四)源の仕打
(五)五戒を受ける事を
(六)女三を尼にするのが
(七)生先短い我を捨てゝ出家せんとは思ひ立ちたるぞ
(八)出家は尊い事であつても
(九)一方には療治をしてこそよけれ
(一〇)何げなき顔をして實は我を恨み居し事もあるのかと
(一一)源が尼になる事に反對して
(一二)朱雀が寺へ歸るのに
(一三)女三の髪を切髪にする

(一)女三が出家を望むのであるが
(二)危篤ならば暫時なりとも助かる樣に尼にせんと思ふ
(三)其に從ひて惡い事ならば從はぬもよいが
(四)朱雀の
(五)何處迄も安心して女三を源に預けたるに、我頼を受けながら源は女三を寵愛せず、朱雀の思ふ樣にならぬ不足を
(六)世間の噂が殘念と
(七)此病氣の際に出家して仕舞ひたらば
(八)夫として寵愛して貰ふ譯にはゆかずとも、一通りの後見人としては源は矢張頼もしい人物
(九)一通りの世話がして貰へるのを今迄預け置きししるしと思ひて
(一〇)朱雀が桐壺より貰ひたる

朱雀「かくなむ(一)進み宣ふを、今は限のさまならば、片時の程にても、その助あるべきさまにてとなむ、思ひ給ふる(二)」と宣へば、源「日頃もかくなむ宣へど、邪氣などの、人の心たぶちかして斯る方にすゝむる樣も侍るなるをとて、聞きも入れ侍らぬなり」と聞え給ふ。朱雀「もののけの教にても、(三)それに負けぬとて、惡しかるべき事ならばこそ憚らめ、弱りにたる人の、限とて物し給はむことを、聞き過さむは、後の悔心苦しうや」と宣ふ。(四)御心のうちには、(五)限なううしろやすく、讓り置きし御事を、うけとり給ひて、さしも志深からず、我が思ふやうにはあらぬ御氣色を、事に觸れつゝ、年頃聞召し思しつめけること、色に出でて恨み聞え給ふべき事にもあらねば、(六)世の人の思ひ言はむ所も、口惜しうおぼしわたるに、(七)かゝる折にもてはなれなむも、何かは人笑に、世を恨みたる氣色ならで、さもあらざらむ。(八)大かたの後見には、猶頼まれぬべき御掟なるを、(九)唯預け置き奉りししるしには思ひなして、憎氣に背く樣にはあらずとも、御處分に、廣くおもしろき宮賜は(一〇)

ひて、(一)うるはしき御法服ならず、墨染の御姿、あらまほしう淸らなるも、羨まし
く見奉り給ひ、例のまづ淚おとし給ふ。源「わづらひ給ふ御さま、ことなる御惱に
(二)も侍らず。唯月頃よわり給へる御有樣に、はかぐしう物なども參らぬ積にや、か
く物し給ふにこそ」など聞え給ふ。女三「かたはら痛き御座なれども」とて、(三)御帳の前
に、御褥まゐりて(四)入れ奉り給ふ。(五)宮をも、とかう人々つくろひ聞えて、(六)床の下に
おろし奉る。御几帳少し押しやらせ給ひて、朱雀「夜居の加持の僧などの心地すれ
ど、(八)まだ驗つくばかりの(七)行にもあらねば、かたはらいたけれど、(九)たゞ覺束なく覺
え給はむさまを、さながら見給ふべきなり」とて、御目おし拭はせ給ふ。宮も、い
と弱げに泣い給ひて、女三「生くべうも覺え侍らぬを、かくおはしましたる序に、
尼になさせ給ひてよ」と聞え給ふ。朱雀「さる御本意あらば、いと尊き事なるを、さ
すがに(一〇)限らぬ命のほどにて、(一一)行末とほき人は、かへりて事の亂あり、世の人に譏
らるゝやうありぬべきことになむ、猶憚りぬべき」など宣はせて、(一二)大臣の君に、

(一)立派な衣を著ず
(二)源が
(三)女三の
(四)朱雀を
(五)女三
(六)對面の爲
(七)朱雀が
(八)祈禱の效驗ある程に修行が積らぬ我故、加持僧めかしてこゝに居るも氣恥かしけれど
(九)逢ひたしと思ひ居られし我が姿を十分に見給へ
(一〇)まだ死ぬとも定まらぬ身で
(一一)先の長い人はなまじ出家して却て迹に面倒がおこり
(一二)源氏

山の帝(一)は、珍らしき(二)御事平かなりと聞召して、哀にゆかしう思ほすに、かく惱み給ふ由のみあれば、いかに物し給ふべきにかと、御行も亂れて思しけり。さばかり弱り給へる人の、物を聞し食さで日頃經給へば、いと賴もしげなくなり給ひて、女三「年頃見奉らざりし(三)程よりも、院(四)のいと戀しく覺え給ふを、またも見奉らずなりぬるにや」と、いたう泣き給ふ。かく聞え給ふさま(五)、さるべき人して傳へ奏せさせ給ひければ、いと堪へがたう悲し(六)とおぼして、あるまじき事とは思召しながら、夜にかくれて出で(七)させ給ふ。かねてさる御消息もなくて、俄にかく渡りおはしまいたれば、あるじの院驚きかしこまり聞え給ふ。朱雀「世の中を顧みすまじう思ひ侍りしかど、猶惑ひ醒めがたきものは、この道(八)の闇になむ侍りければ、行も懈怠して、若し後(九)れさきだつ道の道理のまゝならで別れなば やがてこの恨(一〇)もや形見に殘らむと、あぢきなさに、この世の譏をば知らで、かくものし侍る」と聞え給ふ。御容貌(一一)ことにても、なまめかしうなつかしき樣に、うち忍びやつれ給

四　朱雀院女三宮を見舞ふ、女三宮出家、六條御息所の靈出現
(一)朱雀院
(二)女三の安產を聞きて
(三)女三
(四)朱雀が戀しく思はるるにもう逢はれぬのか知ら
(五)女三の希望を源が人を以て朱雀に傳へしめたれば
(六)朱雀が
(七)朱雀が寺を出でて六條院へ御幸ある也
(八)子を思ふ道
(九)逆樣に子たる女三が親たる我に先だちて死ぬ樣な事あらば
(一〇)生前に逢はぬ恨
(一一)出家せしても、朱雀の容貌

では思す。かゝる事は、さのみこそ怖ろしかゝなれど、さてながらへぬわざならばこそはあらめ」(一)と聞え給ふ。御心のうちには、(二)誠にさも思しよりて宣はば、(三)さやうにて見奉らむは、哀なりなむかし、(四)かつ見つゝも、事に觸れて心おかれ給はむが心苦しう、(五)我ながらもえ思ひ直すまじう、憂き事うち交りぬべきを、(六)自からおろかに人の見咎むる事もあらむが、いといとほしう、院などの聞召さむことも、(七)我がおこたりにのみこそはならめ、御惱にことつけて、(八)さもやなし奉りてまし、など思し寄れど、又いと(九)あたらしう哀に、かばかり遠き御髮の生先を、然やつさむことも心苦しければ、源「なほ強く思しなれ。(一〇)けしうはおはせじ。(一一)限と見ゆる人も、平かなる例近ければ、さすがに賴ある世になむ」など聞え給ひて、(一二)御湯まゐり給ふ。(一三)いといたう青み瘦せて、あさましうはかなげにて、打臥し給へる御さま、(一四)おほどき美しげなれば、(一五)いみじき過ありとも、心弱く許しつべき御さまかな、と見奉り給ふ。

(一)産は恐ろしい事には違なけれど、死ぬと定まつた事でもないに
(二)女三が本氣でさう言ふのならば、以下源の心
(三)女三を尼にして
(四)此儘では連添ひ居ながら何かにつけて隔のあるが氣の毒で
(五)さりとて自分で自分の心が直せさうにもなく
(六)女三と我との睦まじからぬ樣子が人目につく事もあるべし其が氣の毒で
(七)源自身が惡い事になるであらう
(八)尼にして仕舞はうかしらと
(九)あつたらもので
(一〇)大丈夫ぢや
(一一)危篤の病人も直るから
(一二)湯を女三に呑ませる
(一三)女三の樣子
(一四)大樣にて
(一五)源の感じ

にはするなどを、とりわきても見奉り給はずなどあれば、老いしらへる人などは、「いでや疎(一)にもおはしますかな。珍らしう(二)さし出で給へる御有樣の、かばかりゆゝしきまでにおはしますを」と、うつくしみ聞ゆれば、片耳に聞き給ひて、(三)さ(四)のみこそは、思し隔つることも勝らめと、恨めしう、我身つらくて、尼にもなりなばやの御心つきぬ。夜なども、こなたには大殿ごもらず、晝つ方などぞさしのぞき給ふ。(五)源「世の中のはかなきを見るまゝに、行末みじかう、物心ぼそくて、行(六)がちになりにて侍れば、(七)かゝる程のらうがはしき心地ずるにより、え參りこぬを、いかゞ、御心地は、爽かに思しなりにたりや。心苦しうこそ」とて、御几帳のそばよりさし覗き給へり。御頭もたげ給ひて、女三「なほ、え生きたるまじき心地なむし侍るを、(八)かゝる人は罪も重かゝなり。尼になりて、若し其にや生きとまると試み、又亡くなるとも、(九)罪を失ふことにもやとなむ思ひ侍る」と、常の御けはひよりはいと大人びて聞え給ふを、源「いとうたて、忌々しき御事なり。などてか然ま

(一)情のない事ぢや
(二)生れなされた此御兒が
(三)女三が
(四)女三の心、其樣な風に是から段々源の我を憎みなさるのがひどくなるのであらうと
(五)源が女三方には泊らず
(六)佛いぢりがち
(七)産所のごた〳〵がうるさく思はるゝ故寄り附かぬが
(八)産の爲に死ぬ人は後世の罪が重いといふ事
(九)罪障を消滅させる爲にもなる

などのこゝろばへも、殊更に心々(一)いどましさ見えつゝなむ。五日の夜は(二)中宮の御方より、(三)子持の御前のもの、女房の中にも、(四)しな〴〵に思ひ當てたるきは〴〵、公事に嚴しうせさせ給へり。御粥、(五)屯食五十具、所々の饗、(六)院の下部、(七)廳の召次所、なにかの隈まで、いかめしうせさせ給へり。(八)宮づかさ(九)大夫よりはじめて、(一〇)院の殿上人みな參れり。七日の夜は、(一一)内裏より。(一二)それもおほやけ樣なり。致仕の大臣など、心ことに仕う奉り給ふべきに、この頃は(一三)何事も思されで、おほざうの御とぶらひのみぞありける。宮達、上達部などあまた參り給ふ。(一四)大かたの氣色も、(一五)世に無きまでかしづき聞え給へど、大臣の御心のうちに、心苦しと思す事ありて、いたうもてはやし聞え給はず、御遊などは無かりけり。(一六)宮は、さばかり(一七)ひはづなる御樣にて、いとむくつけう、(一八)ならはぬ事の怖ろしう思されけるに、御湯なども聞し食さず、(一九)身の心憂き事を、かゝるにつけても思し入れば、さばれ、この序にも死なばや、と思す。大臣は、いとよう人目を飾りおほせど、まだ(二〇)むづかしげ

(一)趣向を競ふ所が見える
(二)秋好
(三)女三の食膳
(四)是は誰それの分とそれぞれ當てはめたる
(五)今の握飯
(六)六條院
(七)源の院司
(八)中宮職の役人
(九)中宮大夫
(一〇)冷泉院
(一一)帝より御産養あり
(一二)表向の格式資格で行はる
(一三)柏木の病氣の爲他を顧る暇なく一通りの見舞のみ也
(一四)全體の樣子が
(一五)女三の御産を大事がり騷げども
(一六)女三宮
(一七)か細き
(一八)しつけぬ御産
(一九)柏木との一條
(二〇)赤兒を別に見んともせざる故

な口惜しや、(一)思ひまじる方なくて見奉らましかば、珍らしく嬉しからまし、とおほせど、人には氣色漏さじとおほせば、驗者など召し、御修法はいつとなく不斷にせらるれば、伴僧どもの中に、驗あるかぎり皆參りて、加持參り騷ぐ。夜一夜惱みあかさせ給ひて、日さしあがる程に生れ給ひぬ。(二)男君と(三)聞き給ふに、(四)かく忍びたる事の、あやにくにいちじるき顏つきにて、さし出で給へらむこそ苦しかるべけれ、女こそ、何となく紛れ、數多の人の見るものならねば、安けれ、とおほすに、(五)又かく心苦しき疑まじりたるにては、心やすき方に物し給ふもいとよしかし、さても怪しや、(六)我が世と共に怖ろしと思ひし事の報なめり。この世にて、(七)かく思ひかけぬ事に(八)むかはり來ぬれば、後の世の罪も、少し輕みなむや、と思す。人はた知らぬ事なれば、(九)かく心ことなる御腹にて、末に出でおはしたる御おぼえいみじかりなむと、思ひいとなみ仕うまつる。御産屋の儀式いかめしう、おどろおどろし。御方々、さま〳〵にしいで給ふ御産養、世のつねの折敷、(一〇)衝重、高杯

(一)是が密夫の子なるべしといふ疑なくて
(二)之を薫大將と名づく
(三)源が
(四)源の心、柏木の一件は祕密なるに、此子が生憎男にて人にも目につく様ならば弱つた事ぢや
(五)密夫の子ならば寧ろ取扱ひ易き男の方がよいかも知れぬ
(六)藤壺に通じて冷泉を生ましめたる事
(七)かの一件の報を斯く意外の處にて受けたれば是にて帳消しとなりて後生に受る罪は輕くなるべし
(八)報いられ
(九)身分高き女三の腹にて而も末子なれば源の御寵愛一入なるべしと思ひて
(一〇)今の重箱の如きもの

(一)我死なば人は必ず死因を怪しがりて女三故なりと感附くならんが

(二)いつもならば何時迄も側に引附け置きて、以下小侍從の心

(三)柏木の乳母、小侍從の伯母

(四)頭中

㈢女三宮、薫を生む、源氏の感情、女三宮出家を望む

(五)女三宮

(六)御産の模樣

(七)源氏にも申上げたれば

(八)源の

しなりて、かひなき哀をだに絶えずかけさせ給へ。

など、書き亂りて、心地の苦しさ增りければ、柏木「よし。いたう更けぬさきに、歸り參りたまひて、かく限の樣になむとも聞え給へ。(一)今更に人あやしと思ひあはせむを、我世の後さへ思ふこそ苦しけれ。いかなる昔の契にて、いとかゝる事しも心にしみけむ」と、泣く〳〵ゐざり入り給ひぬれば、(二)例は無期にむかへすゑて、すずろ言をさへ言はせまほしうし給ふを、言少にても、と思ふが哀なるに、えも出でやらず。御有樣を(三)乳母も語りて、いみじう泣きまどふ。(四)大臣などの思したる氣色ぞいみじきや。頭中「昨日今日少しよろしかりつるを、などかいと弱げには見え給ふ」と騷ぎ給ふ。柏木「何か猶とまり侍るまじきなめり」と聞え給ひて、自らも泣い給ふ。

(五)宮はこの暮つ方より、惱ましうし給ひけるを、(六)その御氣色と見奉り知りたる人々騷ぎみちて、(七)大臣にも聞えたりければ、驚きて渡り給へり。(八)御心のうちには、あ

め思ひしみ給へるさまの深きを、かつはいとうたて怖ろしう思へど、哀は堪へ忍ばず、この(一)人もいみじう泣く。紙燭めして御返(二)見給へば、御手も猶いとはかなげに、をかしきほどに書い給ひて、

女三 心苦しう聞きながら、いかでかは。(三)唯おしはかり。(四)「殘らむ」(五)とあるは、

立ちそひて(六)消えやしなまし憂きことを思ひみだるゝ煙くらべに

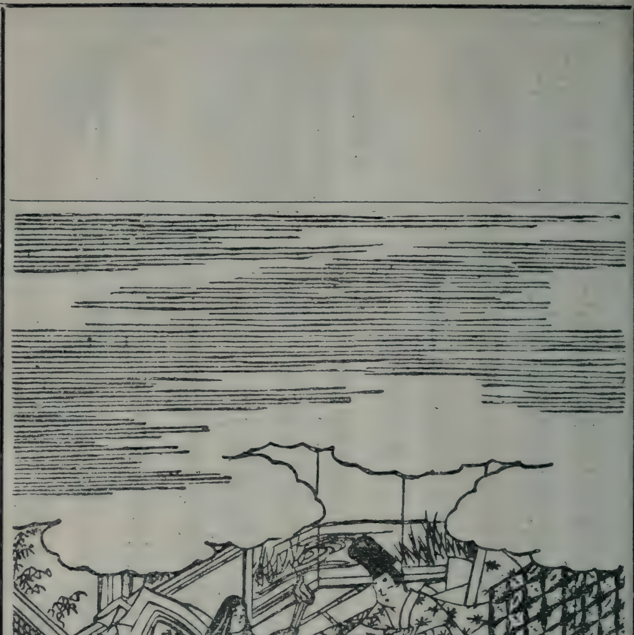
後る(七)べうやは。

とばかりあるを、哀にかたじけなしと思ひ宣ふ。柏木「いでや、此煙(八)ばかりこそは、この世の思ひいでならめ。はかなくもありけるかな」と、いとゞ泣きまさり給ひて、御返、臥しながらうち休みつゝ書い給ふ。言の葉のつゞきもなく、怪しき鳥の跡のやうにて、

柏木 行方なき空のけぶりとなりぬとも思ふあたりをたちははなれじ(九)

夕はわきてながめさせ給へ。咎め(一〇)聞えさせ給はむ人目をも、今は心やすく思

(一)小侍從
(二)女三の返事を柏木が
(三)御返事もよう出來ぬ
(四)推量し給へ
(五)柏木の歌の句
(六)我も嘆きに堪へぬ身なれば、君と共に煙となりて此世から消え去りて仕舞はうか
(七)君に後れて此世に殘らんや
(八)女三の歌をさす
(九)死後空と立昇りても我魂は君があたりを立離るまじ
(一〇)自分が死んで後ならば何程ながめても誰も見咎むまじければ安心して



（一）源の御心に我が祕密を知られて
（二）源の御威光の特別なる故なるべし
（三）宴會の時目を源と見合せし夜以來
（四）魂が女三を慕ひて六條院の内を浮れ歩かば
（五）衣の下がひの褄を結びて魂を結びとゞむるといふ事のありし也、「魂は見つ主は誰とも知らねども結びとゞめつ下がひの褄」
（六）ぬけがらの樣なる
（七）女三宮
（八）小侍從が
（九）柏木の心に
（一〇）女三の
（一一）わが魂が女三のあたりへ行くのかしらと
（一二）女三の事は口にも出すまじ
（一三）女三が我が未來のほだしになるかと思ふと
（一四）御懷胎の事を
（一五）御安產といふ事だけも聞いて死にたし
（一六）猫を夢に見しが懷胎の兆なりし事を我心一つだけで悟りて

名をも立て、身をも顧みぬ類、昔の世にも無くやはありけると、思ひなほすに、猶けはひ煩はしう、（一）かの御心に、かゝる咎を知られ奉りて、世にながらへむ事もいとまばゆく覺ゆるは、（二）實に異なる御光なるべし。深き過もなきに、（三）見合せ奉りし夕の程より、やがてかき亂り、惑ひそめにし魂の、身にもかへらずなりにしを、（四）かの院の内にあくがれありかば、（五）結び留め給へよ」など、いと弱げに、（六）からの樣なる樣して、泣きみ笑ひみ語らひ給ふ。（七）宮も物をのみ恥かしう、つゝましう思したるさまを（八）語る。（九）さてうちしめり、面瘦せ給へらむ（一〇）御さまの、面影に見奉る心地して思ひやられ給へば、（一一）實にあくがるゝ魂やゆき通ふらむなど、いとどしき心地にも亂るれば、柏木「今さらに、（一二）この御事よ、かけても聞えじ。この世は斯うはかなくて過ぎぬるを、（一三）長き世のほだしにもこそと思ふなむ、いといとほしき。（一四）心苦しき御事を、（一五）平にとだにいかで聞きおい奉らむ。（一六）見し夢を心ひとつに思ひ合せて、又語る人もなきが、いみじういぶせくもあるかな」など、とり集

(一)頭中が
(二)山の奧までも
(三)葛城の僧
(四)目つき恐ろしげにて
(五)經文の諷誦すべき所、陀羅尼は能持の義、能く善法を持して惡を拂ふの義なりとぞ
(六)柏木は寢入りたりと頭中に言はせたれば
(七)頭中の樣子
(八)よく惡口いふ頭中が
(九)だら〳〵と長引きて
(一〇)小侍從にいふ詞、父と僧との話を聞けと也
(一一)古の通り女三の御執心が我身に附纏ひ居るならば我身も貴きものになるべし
(一二)不埒な所行をはたらき

やと思せど、更に物怪の顯れ出で來るもなきに、(一)思ほし煩ひて、かゝる(二)隈々をも尋ね給ふなりけり。(三)この聖も、長高やかに、(四)まぶじつべだましくて、荒らかにおどろおどろしく(五)陀羅尼讀むを、柏木「いであな憎や。罪の深き身にやあらむ。陀羅尼の聲高きは、いと氣恐しくて、いよ〳〵死ぬべくこそ覺ゆれ」とて、やをらすべり出でて、この侍從と語らひ給ふ。大臣はさも知り給はず、(六)うちやすみたると、人人して申させ給へば、さ思して、忍びやかにこの聖と物語し給ふ。(七)おとなび給へれど、猶花やぎたる所つきて、(八)物笑し給ふ大臣の、かゝる者どもと向ひ居て、この煩ひそめ給ひし有樣、何ともなく(九)うちたゆみつゝ、重り給へること、頭中「誠にこの物怪あらはるべく、念じ給へ」など、細やかに語らひ給ふも、いとあはれなり。柏木「(一〇)かれ聞き給へ。何の罪とも思し寄らぬに、占ひよりけむ女の靈こそ、(一一)誠にさる御執の身に添ひたるならば、厭はしき身もひきかへ、やむごとなくこそなりぬべけれ。さてもおほけなき心ありて、(一二)さるまじき過をひき出でて、人の御

(一)今明日にも死ぬべき心持がして
(二)大體の上から柏木の死を悲しむ事は知つて居れど
(三)重々しき
(四)源の
(五)正面からは柏木の一件を何とも言はぬが
(六)小侍従が返事を書けと
(七)小侍従が柏木方へ
㊂ 小侍従女三宮の返事を携へて柏木を訪ふ
(八)柏木の父頭中
(九)有驗の高僧
(一〇)憎らしくすかぬ樣子したる
(一一)柏木の病は女の靈のなす業なりとのみ

れをとぢめにもこそ侍れ」と聞ゆれば、女三「我も、今日か明日かの(一)心地して、物心細ければ、大方の(二)哀ばかりは思ひ知らるれど、いと心憂き事と思ひ懲りにしかば、いみじうなむつゝましき」とて、更に書い給はず。御心の本性の、強くづし(三)やかなるにはあらねど、恥しげなる人(四)の御氣色の、折々にまほならぬが(五)、いと怖ろしうわびしきなるべし。されど御硯などまかなひて責め聞ゆれば(六)、しぶ〳〵に書い給ふをとりて、忍びて、よひの紛に、彼處(七)に參りぬ。

大臣(八)はかしこ(九)き行人、葛城山より請じ出でたる、待ちうけ給ひて、加持參らせむとし給ふ。御修法讀經なども、いとおどろ〳〵しう騒ぎたり。人の申すまゝに、さま〳〵聖だつ驗者などの、をさ〳〵世にも聞えず、深き山に籠りたるなどをも、弟の君だちを遣はしつゝ、尋ね召すに、(一〇)けにくゝ心づきなき山伏どもなども、いと多くまゐる。煩ひ給ふさまの、そこはかとなく、物を心細く思ひて、音をのみ時々は泣き給ふ。陰陽師なども、多くは女の靈とのみ(一一)占ひ申しければ、然る事も

(一)なぜ此樣に自分の肩身を狹くしたるならん
(二)女三宮へ
(三)どうしたと注意して聞いて下さる事さへ無きも道理なれど
(四)書く中に手が頻りに震へる也
(五)君を慕ふ心の殘るによりて我死後の火葬の烟もすら〳〵と立昇り得ざるべし
(六)あはれと言つて下さる其御詞に氣を靜めて
(七)小侍從
(八)面會して
(九)小侍從
(一〇)柏木を
(一一)女三に對する柏木のけしからぬ心
(一二)死ぬと聞いては
(一三)此柏木の文の返事をなされ、是が最後の御返事なるべし

も、うちかへしいとゞあぢきなし。(一)などかく程もなくしなしつる身ならむと、かきくらし思ひ亂れて、枕も浮きぬばかり、人やりならず流し添へつゝ、いさゝか隙ありとて、人々立ちさり給へる程に、(二)かしこに御文奉れ給ふ。

柏木「今は限になりにて侍る有樣は、おのづから聞し召すやうも侍らむを、(三)如何なりぬるとだに、御耳留めさせ給はぬも理なれど、いと憂くも侍るかな。

など聞ゆるに、(四)いみじう戰けば、思ふ事もみな書きさして、

柏木(五)今はとてもえむ煙もむすぼほれ絶えぬおもひのなほや殘らむ

哀とだに宣はせよ。(六)心のどめて、人遣ならぬ闇に惑はむ道の光にもし侍らむ。

と聞え給ふ。(七)侍從にも、こりずまに、哀なる事どもを言ひ遣せ給へり。柏木「(八)みづからも、今一たび言ふべき事なむある」と宣へれば、(九)この人も、わらはより、さる便に參り通ひつゝ、(一〇)見奉りなれたる人なれば、(一一)おほけなき心こそうたて覺え給へけれ、(一二)今はと聞くはいとかなしうて、泣く〳〵、侍從「(一三)なほこの御かへり、誠にこ

の世の中すさまじう思ひなりて、後の世の(一)行に本意深くすゝみにしを、親たちの御恨を思ひて、野山(二)にもあくがれむ道の、重きほだしなるべく覺えしかば、とざまかうざまに紛はしつゝ過しつるを、遂になほ世に立ちまふべくも覺えぬ物思(三)ひの、一方ならず身に添ひにたるは、我(四)より外に誰かはつらき、心(五)づからもて損ひつるにこそあめれ、と思ふに、恨むべき人もなし(六)、神佛をもかこたむ方なきは、これ皆然るべきにこそあらめ、誰(七)も千年の松ならぬ世は、つひに留まるべきにもあらぬを、かく人にも少しうち偲ばれぬべき程にて、なげ(八)の哀をもかけ給ふ人(九)あらむをこそは、一(一〇)つ思に燃えぬるしるしにはせめ、せめて(一一)ながらへば、自からあるまじき名をも立ち、我(一二)も人も安からぬ亂出で來る樣もあらむよりは、なめ(一三)しと心おい給へらむあたりにも、さりともおぼし許いてむかし、よろづの事、今(一四)はのとぢめには、皆消えぬべきわざなり、又(一五)ことざまの過しなければ、年頃物の折節ごとに、纒しならひ給ひにし方の哀も出で來なむ、など、つれ〴〵に思ひ續くる

(一)佛いぢりに
(二)要水の出家となるにも親にひかさるゝ心が邪魔になるべしと思ひし故
(三)女三に對する戀
(四)皆我が心から也
(五)我心から仕損ひたるなりと
(六)「なし」は「なく」の誤歟
(七)誰も命は限あるもの故
(八)假初の情
(九)女三宮
(一〇)「夏虫の身を徒になすことも一つおもひによりてなりけり」
(一一)無理に生きて居たら
(一二)柏木も女三宮も
(一三)我を無禮な奴と思ひて隔て居らるゝ源氏にも
(一四)臨終には善惡共に消える。
(一五)外には別に過失もなければ

柏木

梗概

㊀柏木の病彌〻重し。煩悶。女三宮へ文を贈る。㊁小侍従、女三宮の返事を携へて柏木を訪ふ。㊂女三宮、薫を生む。源氏の感情。女三宮出家を望む。㊃朱雀院、女三宮を見舞ふ。女三宮出家。六條御息所の靈出現。㊄柏木危篤。後事を夕霧に託す。柏木逝去。㊅薫五十日の祝。源氏の感慨。白樂天の句を誦す。㊆夕霧の推測。夕霧、落葉宮の母御息所と語る。㊇夕霧頭中將を訪ふ。落葉宮の母、御息所の歌を示す。㊈夕霧、落葉宮に戀情をほのめかす。

㊀柏木の病彌〻重し、煩悶、女三宮へ文を贈る
(一)柏木
(二)柏木の父母
(三)柏木が
(四)以下柏木の心、強ひて思ひ切りたるも其効なく、却つて父母に先だつ不幸の罪重かるべしと思案する
(五)非常に氣位を高く持ちしかど

(一)衛門のかんの君、かくのみ惱みわたり給ふこと、猶おこたらで、年もかへりぬ。(二)大臣北の方、思し歎くさまを見奉るに、(三)(四)強ひてかけはなれなむ命かひなく、罪おもかるべきことを思ふ心は心として、又あながちに、この世に離れがたく、惜み留めまほしき身かは、いはけなかりし程より、思ふ心ことにて、何事をも、人には今一きは勝らむと、公私のことにふれて、(五)斜ならず思ひのぼりしかど、その心かなひ難かりけりと、一つ二つの節ごとに、身を思ひおとしてしこなた、なべて

ふ。例の五十寺の御誦經、又かのおはします御寺にも、摩訶毘盧遮那の。

(一)五十の賀故五十ケ寺にて息災延命の祈禱を行はしむる也
(二)布施
(三)朱雀院の居らるゝ仁和寺にても摩訶毘盧遮那佛即ち大日如來に祈禱を捧げしめし也

（一）食物を取らざりしに
（二）手もつけず
（三）じり〳〵と弱り行く樣
（四）當時のきけものが斯く重病なれば
（五）朱雀院
（六）夕霧
（七）病床に近づきて
（十五）朱雀院五十の賀
（八）朱雀の賀は十二月廿五日に延びたり
（九）柏木
（一〇）前々から幾度となく故障ありし上の事にて中止する譯にもゆかぬ故
（一一）廿五日に行はれし由を是にてきかせたる也
（一二）女三
（一三）源が

萬にさわぎ給ふ。さるは、忽におどろ〳〵しき御心地の樣にもあらず、月頃物な（一）どを更に參らざりけるに、いとゞはかなき柑子などをだに觸れ（二）給はず、唯やうやう物に引き入るゝ（三）樣にぞ見え給ふ。さる時の有識の、斯くものし給へば、世の中惜みあたらしがりて、御とぶらひに參り（四）給はぬ人なし。內裏よりも、院（五）よりも、御とぶらひしば〳〵聞えつゝ、いみじく惜み思召したるにも、いとゞしき親達の御心のみ惑ふ。六條院にも、いと口惜しきわざなりと思し驚きて、御とぶらひに度度懇に、父大臣にも聞え給ふ。（六）大將は、ましていとよき御中なれば、氣（七）近く物し給ひつゝ、いみじく歎きありき給ふ。

（八）御賀は廿五日になりにけり。かゝる時のやむごとなき上達部（九）の、重く煩ひ給ふに、親兄弟あまたの人々、さるたかき御中らひの歎きしをれ給へる頃ほひにて、物すさまじき樣なれど、月々に（一〇）滯りつる事だにあるを、さて止むまじき事なれば、いかでかは（一一）思しとゞまらむ。（一二）女宮の御心地のうちをぞ、（一三）いとほしく思ひ聞えさせ給

に御覧じはてられずやなり侍りなむと思ひ給ふるになむ、とまり難き心地にも、(一)えゆきやるまじく思ひ給へらるゝ」など、互に泣き給ひて、暫にも(二)えわたり給はねば、又母(三)北の方、後めたくおぼして、北方「などか、(四)まづ見えむとは思ひ給ふまじき。我は、心地も少し例ならず心細きときは、(五)あまたの中にまづ取り別きて、ゆかしくも頼もしくもこそ覺え給へ。(六)かくいと覺束なき事」と怨み聞え給ふも、又いと理なり。柏木「(七)人より先なりけるけぢめにや、取りわきて思ひならひたるを、今になほかなしくし給ひて、暫も見えぬをば苦しきものにし給へば、心地のかく(八)限に覺ゆる折しも、見え奉らざらむ、罪深くいぶせかるべし。(九)今はと頼みなく聞かせ給はば、いと忍びてわたり給ひて御覧ぜよ。必ずまた對面賜はらむ。(一〇)怪しくたゆく愚なる本性にて、(一一)事にふれて疎に思さるゝ事ありつらむこそ、くやしく侍れ。かゝる命の程を知らで、行末長くのみ思ひ侍りける事」と泣く〳〵(一二)渡り給ひぬ。(一三)宮はとまり給ひて、いふ方なく思しこがれたり。(一四)大殿に待ち受け聞え給ひて、

(一)死ぬにも死なれぬ心持がする
(二)父の邸へ
(三)柏木の母
(四)なぜ第一に父母に逢はんとは思はぬ
(五)多くの子どもの中にて柏木を第一に力にして居る
(六)然るに其方の病氣の時は何時迄も父母の許へ來ずに待たせる
(七)私が長子なる故にや父母が昔から特別に私を愛せらるゝに
(八)今も祕藏にせられて
(九)我病危篤なりと聞かれたらば竊に父邸に來て下され
(一〇)私は
(一一)從來何かにつけて無情なりと思はれたる事がありしならんと其が殘念
(一二)父の邸へ
(一三)落葉宮
(一四)頭中邸

の醉の惑にもあらざりけり。やがていといたく煩ひたまふ。大臣母北の方おぼし騒ぎて、餘所々々にていと覺束なしとて、殿(一)にわたし奉り給ふを、女宮(二)のおぼしたる樣、又いと心苦し。(三)事なくて過す月日は、心のどかにあひなだのみして、(四)いとしもあらぬ御志なれど、(五)今はと別れ奉るべき門出にやと思ふは、哀に悲しく、後れておぼし歎かむ事のかたじけなきを、いみじと思ふ。(六)母御息所も、いといみじく歎き給ひて、御息所「(七)世の事として、親をばなほさる物におき奉りて、かゝる御中らひは、とある折もかゝる折も、離れ給はぬこそ例のことなれ、かく引き別れて、(八)たひらかに物し給ふまでも、過し給はむが心づくしなるべき事を、(九)暫しこゝにてかくて試み給へ」と、御傍に御几帳ばかりを隔てて(一〇)見奉り給ふ。柏木「理や。數ならぬ身にて(一一)及びがたき御中らひになまじひに許され奉りて侍ふしるしには、長く世に侍りて、(一二)かひなき身の程も、少し人とひとしくなるけぢめをもや御覽ぜらるゝ、とこそ思う給へつれ。いといみじく(一三)斯くさへなり侍れば、(一四)深き志をだ

(一)父の邸
(二)落葉宮
(三)落葉が平生はゆつくり構へて、今は柏木の情も薄けれど末には睦じくもなるべしと當にもならぬ事を當にして
(四)さ程深くもなき
(五)之が死別の門出かと思へば
(六)落葉の母
(七)世間の習かゝる時には親は親として別に置き妻こそは如何なる場合にも一所に居るが通例なるに
(八)柏木の病が直るまでも
(九)しばらく自邸に居て
(一〇)落葉が側について居る
(一一)皇女を妻に下されたる驗には
(一二)拙き身ながら人並に官位も昇る處を見て戴かんとこそ思ひしに
(一三)かゝる重病に罹りたれば
(一四)私の情の如何に厚きかを見せる事が出來ずに仕舞ふかと

て、御鼻(一)の色づくまでしほたれさせ給ふ。あるじの院、源「過ぐる齢にそへては、醉泣こそ留め難きわざなりけれ。衞門督(二)心留めてほゝゑまるゝ、いと心はづかしや。さりとも今(三)暫しならむ。逆様(四)にゆかぬ年月よ。老はえ遁れぬわざなり」とて、打見(五)やり給ふに、人(六)よりけにまめだち屈して、誠に心地もいと惱ましければ、いみじき事も目もとまらぬ心地する人をしも、さしわきて(七)空醉をしてかく宣ふ、戯れのやうなれど、いとゞ胸(八)つぶれて、盃のめぐり來るも頭いたく覺ゆれば、(九)氣色ばかりにてまぎらはすを、御覽(一〇)じとがめて、持たせながらたび〳〵強ひ給へば、はしたなくて、もて煩ふさま、なべての人に似ず(一一)をかし。

(一二)心地かき亂りて、堪へ難ければ、まだ事も果てぬに、まかで給ひぬるまゝに、いといたく惑ひて、例(一三)のいとおどろ〳〵しき醉にもあらぬを、如何なればかゝるならむ、つゝましと物を思ひつるに、氣(一四)ののぼりぬるにや、いと然言(一五)ふばかり、臆すべき心弱さとは覺えぬを、いふかひなくもありけるかな、と自ら思ひ知らる。暫

(一)泣いて鼻の赤くなるまでに
(二)柏木が我が老耄の體を注目して笑はれるのが恥かしい、柏木に對するあてこすり也
(三)我生きて居るももう暫くの事なるべし
(四)「逆様に年もゆかなん取りもあへず過ぐる齢や共にかへると」
(五)柏木を
(六)柏木は他人よりも殊に眞面目にて
(七)わざと特別に名をさして
(八)柏木がぎつくりして
(九)飲む振ばかりして
(一〇)源が
(一一)盃を柏木に
㊟ 柏木の病重し、父の邸に移る
(一二)柏木が
(一三)柏木の心、いつも程の大醉でもなきに
(一四)のぼせたるにや
(一五)それ程に

(一)髭黒
(二)御馳走は立派ならず
(三)母は玉鬘
(四)母は雲井雁
(五)兵部卿の子也
(六)惟光の娘
(七)紫上の兄弟也
(八)髭黒
(九)母は玉鬘
(一〇)母は雲井雁
(一一)習ひ得たる所
(一二)源がどの孫をも可愛く思ふ

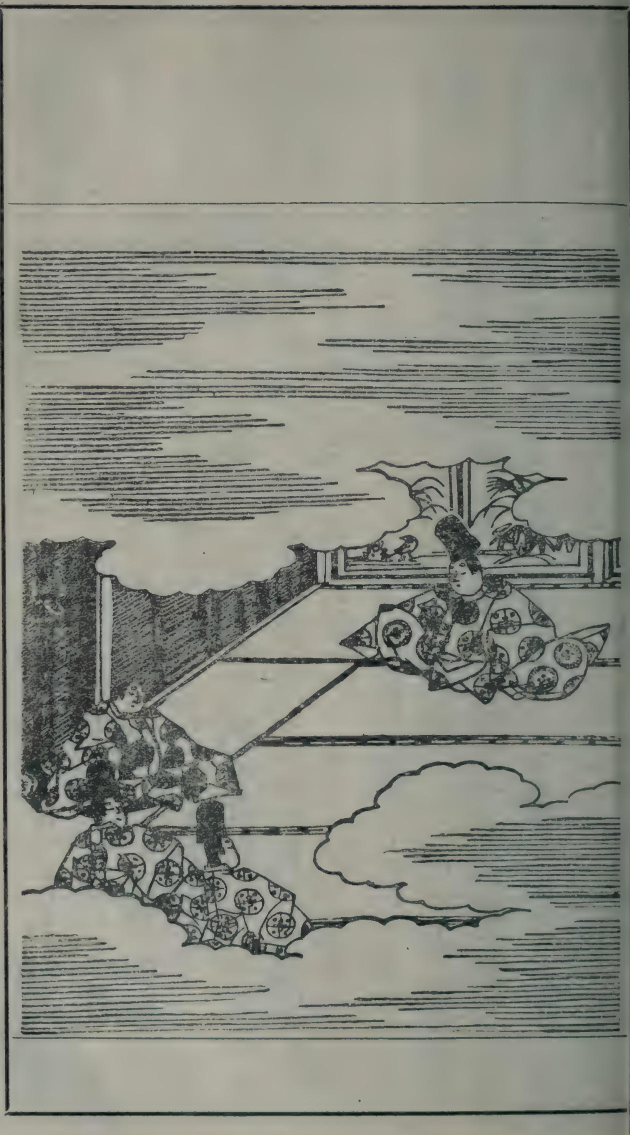
しませば、式部卿の宮(一)、右の大臣ばかりさぶらひ給ひて、それより下の上達部は簀子に、わざとならぬ日のことにて、御あるじ(二)など氣近き程に仕うまつりなしたり。右の大殿の四郎君(三)、大將殿の三郎君(四)、兵部卿宮の孫王(五)の君達二人は「萬歳樂」、まだいと小き程にて、いとらうたげなり。四人ながらいづれとなく、高き家の子にて、容貌をかしげにかしづき出でたる、思ひなしもやむごとなし。又大將の(六)典侍腹の二郎君、式部卿の宮(七)の兵衞督といひし、今は源中納言の御子「皇麞」、右の(八)大殿(九)の三郎君「陵王」、大將殿の太郎君(一〇)「落蹲」、さては「太平樂」「喜春樂」などいふ舞どもをなむ、同じ御なからひの君達、大人たちなど舞ひける。暮れゆけば、御簾あげさせ給ひて、物の興まさるに、いと美しき御孫の君達の容姿にて、舞のさまも世に見えぬ手を盡して、御師どもも、おのおの手のかぎりを教へ聞えけるに、深きかど(一一)かどしさを加へて、珍らかに舞ひ給ふを、(一二)いづれもいとらうたしと思す。老い給へる上達部たちは、皆涙おとし給ふ。式部卿の宮も、御孫をおぼし

れて、舞の童べの用意心ばへ、よく加へたまへ。物の師などいふものは、たゞ我(一)が立てたることこそあれ、いと口惜しきものなり」など、いと懐かしく宣ひつくるを、(二)嬉しきものから、苦しくつゝましくて、言少にて、この御前を疾く立ちなむと思へば、例のやうに(三)こまやかにもあらで、やうやうすべり出でぬ。

(四)東の御殿にて、大將のつくろひ出し給ふ、樂人舞人の裝束の事など、またく(五)行ひ加へ給ふ。(六)あるべき限いみじく盡し給へるに、いと委しき心しらひ添ふも、げに(七)この道はいと深き人にぞものし給ふめる。

今日はかゝる試の日なれど、(八)御方々物見給はむに見所なくはあらせじとて、かの(九)御賀の日は、赤き白橡に、葡萄染の下襲を(一〇)著るべし、今日は、青色に蘇芳襲、樂人三十人、今日は白襲を著たり。辰巳の方の釣殿につゞきたる廊を樂所にて、山の南の側より御前に出づる程、「仙遊霞」(一一)といふもの遊びて、雪のたゞいさゝか散るに、(一二)春の隣近く、梅の氣色見るかひありてほゝゑみたり。廂の御簾の内におは(一三)

(一)其道の師匠といふ者は自分の道だけの事は熟練もして居るけれど
(二)柏木の心
(三)色々の話もせず
(四)花散里方
(五)柏木の意見にて加ふる事ある也
(六)夕霧が已に一通りの事は盡してある上に
(七)柏木が
(八)折角婦人達の見物せらるゝに
(九)朱雀院にて行ふ當日は
(一〇)舞童が
(一一)曲名、以下萬歲樂皇麞など皆曲名
(一二)春も已に間近くて
(一三)源が



(一)不似合なり
(二)柏木は官位卑しけれども志の深き所は異なる事なし、其の志を顯はして御祝を申上げよと
(三)御賀に朱雀へ參りたり、落葉の行きし時の事
(四)朱雀が閑寂なる山住居に凝り固まりて
(五)靜に物語したしとの朱雀の願の叶ふ樣になさる方寧ろよかるべし
(六)落葉宮の賀の事
(七)落葉のした事と言はず父邸中の發意の樣に言ひなすも巧者な言方と
(八)見らるゝ通り萬事略式なり
(九)事情がよく分つて居る其方が省略を勸めらるゝによりて、彌々思ひ當りて省く事にする氣になる
(一〇)夕霧
(一一)政務の方では
(一二)氣がすゝまぬのかして一向むからぬ
(一三)朱雀
(一四)いくら今は樂の事を捨てゝ仕舞はれた樣でも
(一五)やる方では却て心遣なり
(一六)其方が夕霧と一緒に肝煎りて

(一)つく所なし。げに(二)下﨟なりとも、同じごと深き所侍らむ。その心御覽ぜられよと、もよほし申さるゝことの侍りしかば、重き病をあひ助けてなむ、(三)參りて侍し。今はいよいよ(四)いと幽なる樣におぼしすまして、嚴しき御よそひを待ち受け奉り給はむこと、願はしくも思すまじく見奉り侍りしを、事どもをば省がせ給ひて、(五)靜なる御物語の、深き御願かなはせ給はむなむ、まさりて侍るべき」と申し給へば、いかめしく聞きし(六)御賀の事を、(七)女二の宮の御方ざまには言ひなさぬもらうありと思す。源「(八)唯かくなむ。事省ぎたる樣に世の人は淺く見るべきを、さはいへど、(九)心えて物せらるゝに、さればよとなむ、いとゞ思ひなられ侍る。(一〇)大將は、(一一)おほやけ方は、やうやう大人ぶめれど、かやうに情びたる方は、もとより(一二)しまぬにやあらむ。(一三)かの院、何事も心および給はぬ事は、をさをさ無きうちにも、樂のかたの事は御心とゞめて、いとかしこく知り整へ給へるを、さこそ(一四)思し捨てたるやうなれ、靜に聞召しすまさむこと、今しもなむ(一五)心づかひせらるべき。(一六)かの大將と諸共に見人

仕うまつり給ふべくありしを、(一)つぎ〳〵滯ることしげくて、かく(二)年もせめつれば、え思ひの如くもしあへで、形のごとくなむ、(三)精進の御鉢參るべきを、御賀などいへば、事々しき樣なれど、家に生ひ出づる童べの數多くなりにけるを、御覽ぜさせむとて、舞など習はしはじめし、(四)その事をだにはたさむとて、拍子とゝのへむこと、(五)又誰にかはと思ひめぐらしかねてなむ、月頃訪ひものし給はぬ怨も捨ててける」と、宣ふ御氣色の(六)うらなき樣なるものから、いとゞ恥かしきに、顏の色違ふらむと覺えて、御いらへもとみにえ聞えず。柏木「月頃(七)かた〴〵に思し惱む御こと、承り歎き侍りながら、春の頃ほひより、例も煩ひ侍る、みだり(八)脚病といふもの、所せく起り煩ひ侍りて、はか〴〵しく踏みたつる事も侍らず、月頃に添へて沈み侍りてなむ、内裏などにも參らず、世の中跡絶えたるやうにて籠り侍る、(九)院の御齡足り給ふ年なり、(一〇)人よりさだかに數へ奉り仕うまつるべきよし、致仕の大臣思ひおよび申されしを、(一一)冠をかけ、(一二)車を惜まず捨てし身にて、進み仕うまつらむに、

(一)段々差支ありて
(二)暮に近づきたれば
(三)精進料理を朱雀に奉る筈なるが
(四)舞樂の事だけでも豫期の如くせんとて
(五)其方を措きて適當の人を得かねて
(六)奥底なき
(七)方々の御病人につきての御心配
(八)脚氣
(九)五十に滿つる
(一〇)他人よりも一層力を入れて御祝を申上げたしと父も存寄りましたれど
(一一)退官したる身にて
(一二)孝經に、「七十老致仕、懸其所仕之車、置諸廟」

さるは、そこはかと苦しげなる病にもあらざンなるを、思ふ心のあるにやと、心苦しくおぼして、(一)取りわきて御消息つかはす。(二)父大臣も、(三)「などかかへさひ申されける。ひが〳〵しきやうに、院にも聞召さむを、おどろ〳〵しき病にもあらず、助けて參り給へ」とそゝのかし給ふに、かく重ねて宣へれば、苦しと思ふ〳〵參(四)りぬ。上達部などもまだ集ひ給はぬ程なりけり。例の氣近き御簾の内に入れ(五)給ひて、母屋の御簾おろしておはします。(六)げにいといたく痩せ〳〵に青みて、(七)例も誇りかに花やぎたる方は弟の君達にはもて消たれて、いと用意あり顔にしづめたる樣ぞ殊なるを、いとどしづめでさぶらひ給ふ樣、などかは御子(八)達の御傍にさし並べたらむに、更に咎あるまじきを、たゞ事(九)の樣の、誰も〳〵いと思ひやりなきこそ、いと罪許しがたけれ、など御目とまれど、さりげなくいとなつかしく、

源(一〇)「その事となくて、對面もいと久しくなりにけり。月頃は、いろ〳〵の病者を見あつかひ、心のいとまなき程に、院の御賀のため、こゝに物し給ふ御子(一一)の、法事

(一)源が特に招待の手紙をやる
(二)頭中
(三)なぜ斷つた
(四)柏木が六條院へ
(五)柏木を
(六)源の眼より見たる柏木の容態
(七)丈夫な時でも
(八)女三の如き内親王の聟にしても差支ない男なれど
(九)かの密通の一件が男も女も餘り無遠慮なるがけしからぬ
(一〇)別に何といふ譯なしに
(一一)女三宮

み思ひわたるを、(一)大將の君ぞ、(二)あるやうある事なるべし、(三)すきものは定めて、(四)我が氣色とりし事には忍ばぬにやありけむ、と思ひ寄れど、(五)いとかく定かに殘りなき様ならむとは、思ひより給はざりけり。

十二月になりにけり。(六)十餘日と定めて、(七)舞どもならし、殿の内ゆすりてのゝしる。(八)二條院の上は、まだわたり給はざりけるを、この試樂によりてぞ、(九)えしづめはてで渡り給へる。(一〇)女御の君も里におはします。このたびの(一一)御子は、又男にてなむおはしましける。(一二)すぎ〳〵いとをかしげにておはするを、明暮もてあそび奉り給ふになむ、過ぐる齡のしるし、嬉しく(一三)おぼされける。試樂に、(一四)右大臣殿の北の方もわたり給へり。(一五)大將の君、(一六)丑寅の町にて、まづ内々に(一七)調樂のやうに、明暮遊びならし給ひければ、(一八)かの御方は、御前のものは見給はず。(一九)衛門督を、かゝることの折も交らはせざらむは、いと榮なくさう〴〵しかるべき中にも、(二〇)人怪しとかたぶきぬべき事なれば、(二一)參り給ふべきよしありけるを、重く煩ふよし申して參らず。

(一)夕霧
(二)仔細ある事なるべし
(三)柏木は
(四)我がけ取った女三へ懸想の一件を
(五)是程迄に源に確に知られたる事とは
● 六條院の試樂、柏木召されて試樂の事務を執行す、源氏の柏木に對するあてこすり
(六)朱雀院の賀の當日を
(七)六條院にて試樂あり
(八)紫はまだ六條院に歸らざりしに
(九)さう落附いても居られず歸り來たり
(一〇)明石姫君
(一一)姫君腹の子、之を匂兵部卿宮といふ、宇治十帖の副主人公
(一二)明石姫君の子達が次々に愛らしきを
(一三)源が
(一四)玉鬘
(一五)夕霧
(一六)花散里方にて
(一七)練習
(一八)花散里は源の御前の試樂は見ず
(一九)柏木
(二〇)不寐すべき
(二一)來れと源から招きたるに

(一)朱雀の賀に源夫婦が
(二)落葉宮
(三)朱雀の忌月、即ち桐壺帝の祥月
(四)月の重なる程懐胎の姿が見苦しく朱雀に見えるならんと
(五)快く振舞て
(六)女三を
(七)柏木
(八)源が相談せられしに
(九)柏木へ
(一〇)源が
(一一)女三と柏木との中を我が知らぬと思ひて柏木が我を馬鹿らしく思はんも恥かしく
(一二)柏木の顔を見たら我心も平ならざるべしと
(一三)柏木の長い間源方へ伺候せぬをも咎めず
(一四)大抵の人は柏木の長き不沙汰を解釋して
(一五)柏木の病が長びきて
(一六)六條院

はし給ふらむかしと思しやるに、いと憎ければ、よろづの哀も醒めぬべけれど、言葉など教へて書かせ奉り給ふ。(一)参り給はむことは、この月かくて過ぎぬ。(二)二の宮の御勢ことにて参り給ひけるを、ふるめかしき御身ざまにて、立ちならび顔ならむも、憚ある心地しけり。源「霜月は(三)自らの御忌月なり。年のをはりはた、いと物さわがし。又(四)いとゞこの御姿も見苦しく、待ち見給はむをと思ひ侍れど、さりとてさのみ延ぶべき事にやは。むづかしく物おぼし亂れず、(五)あきらかにもてなし給ひて、このいたく面痩せ給へる、つくろひ給へ」など、いとらうたしと流石に(六)見奉り給ふ。(七)衞門督をば、何ざまの事にも、ゆゑあるべき折節には、必ず殊更にまつはし給ひつゝ、(八)宣はせあはせしを、絶えてさる(九)御消息もなし。人怪しと思ふらむとおぼせど、見むにつけても、いと(一一)ほれぐ\しき方はづかしく、(一二)見むにはまた我心(一〇)もたゞならずやと思し返されつゝ、やがて(一三)月頃参り給はぬをも咎なし。(一四)大方の人は、なほ例ならず惱み(一五)わたりて、(一六)院にはた、御遊などなき年なれば、との

御も、かくて行末は知り難けれど、御子達數そひ給ふめれば、(一)自らの世だにのどけくばと見置きつべし。その外は、誰も〳〵(二)、あらむに從ひて、諸共に身を捨てむも、惜しかるまじき齢どもになりにたるを、やう〳〵(三)すゞしく思ひ侍る。院の御世の殘久しくもおはせじ。いとあつしくいとゞなりまさり給ひて、物心ぼそげにのみ思したるに、今更に(四)思はずなる御名漏り聞えて、御心亂り給ふな。この世はいと安し。事にもあらず。(五)後の世の御道の妨げならむも、罪いと怖ろしからむ」など、(六)まほにその事とは明し給はねど、つく〴〵と聞え續け給ふに、(七)涙のみおちつゝ、我にもあらず思ひしみておはすれば、(八)我もうち泣き給ひて、源(九)「人のうへにても、もどかしく聞き思ひしふる人のさかしらよ、身に變ることにこそ。いかにうたての翁やと、むづかしくうるさき御心添ふらむ」と、恥ぢ給ひつゝ、御硯ひき寄せ給ひて、手づから押し磨り、紙取りまかなひ、(一〇)書かせ奉り給へど、御手もわなゝきて、え書き給はず。(一一)かのこまかなりし返事は、いとかくしもつゝまず、通

(一)源生存中さへ無事ならばと
(二)どの婦人も
(三)安心に
(四)浮名を立てゝ朱雀に心配をかけ給ふな
(五)冥途の障
(六)正面から柏木の事とは言はねど
(七)女三の樣
(八)源氏
(九)昔は人が言ふのを聞きてくだらぬと思ひし老人のよまひ言を今は自分が言ふ樣になつた
(一〇)女三に返事を
(一一)源の心、柏木のあの詳しき手紙に對しては此樣に恥かしからずに文の遣取もするならんにと

りけりと、思ひ合せ奉れば、今より後も（一）萬になむ。（二）斯うまでもいかで聞えじと思へど、（三）上の御心に背くと聞召すらむことの、安からずいぶせきを、（四）こゝにだに聞え知らせでやはとてなむ。（五）至すくなく、たゞ人の聞えなす方にのみ寄るべかめる御心には、（六）唯おろかに淺きとのみおぼし、又今は（七）こよなくさだすぎにたる有様も、侮らはしく目馴れてのみ見なし給ふらむも、（八）方々に口惜しくもうれたくも覺ゆるを、（九）院のおはしまさむ程は、猶心をさめて、（一〇）かの思しおきてたる様ありけむ、さだすぎ人をも、同じくなずらへ聞えて、いたくな輕め給ひそ。（一一）いにしへより本（一二）意深き道にも、たどり薄かるべき女がたにだに、皆思ひ後れつゝ、（一三）いとぬるき事多かるを、（一四）自らの心には、何ばかり思ひ迷ふべきにはあらねど、（一五）今はと捨て給ひけむ世の、後見に讓りおき給へる御心ばへの、哀に嬉しかりしを、引き續き（一六）爭ひ聞ゆるやうにて、同じさまに見捨て奉らむことの、あへなく思されむにつゝみてなむ。心苦しと思ひし人々も、今はかけ留めらるゝ絆ばかりなるも侍らず。（一七）女

（一）萬事に注意せよ
（二）此樣な事言ひたくもなけれど
（三）朱雀の
（四）其方にでもせめて言はねばならぬと思ひて
（五）物がよく分らず只他人の言ふ儘になる其方の心では
（六）只無暗に我が其方を粗末にする樣に思ひ
（七）ひどく年とりたる我を
（八）色々の點から
（九）朱雀の存命中は注意して
（一〇）此一句插入文、朱雀の御考にてなされし事なれば
（一一）我如き老人をも柏木と同じに思ひてさう輕蔑し給ふな
（一二）昔からの望なる出家の事につきても
（一三）緩漫なる
（一四）自分丈のことにすれば何もぐづ〱して出家し兼ねる譯もなければ
（一五）朱雀出家の時其方に紿まれし
（一六）朱雀と競爭する樣に我も出家して其方を捨て行くを朱雀が不本意に思はるゝならんと憚りて出家もせぬ
（一七）明石姫君

(一)別に用もなき故度々音信もせぬ由に
(二)其方の事が
(三)源との情が濃かならず思の外なる目に遇ふとも
(四)さ程でもない事で其を感じ居る樣子を見せて怨めし相な顏を夫に見せるは下品な仕方
(五)此手紙を見て源の感じ、朱雀に氣の毒で
(六)女三の不品行を知て居らるゝ譯はなし、女三の苦惱を源の罪の樣にのみ思ひ居らるゝならんと
(七)其方の仕方をけしからんと思ふ事があるにしても
(八)人が見て其方を粗末にすると思ふ樣な事はせぬ積
(九)此御手紙の趣は其方の幼稚な了簡を朱雀が知り居らるゝ故氣遣し給ふならんと

朱雀その事となくて、しば／＼も聞えぬほどに、覺束なくてのみ、年月の過ぐ(一)るなむ哀なりける。惱み給ふなるさまは、くはしく聞きし後、念誦のついでにも思ひやらるゝは(二)、いかゞ。世の中(三)さびしく思はずなる事ありとも、忍び過し給へ。恨めしげなる氣色など(四)、おぼろげにて見知り顏にほのめかす、いとしな後れたるわざになむ。

など、敎へ聞え給へり。(五)いといとほしく心苦しく、かゝる内々(六)のあさましきをば、聞召すべきにはあらで、我がおこたりに本意なくのみ聞き思すらむことを、とばかり思しつゞけて、源「この御返をばいかゞ聞え給ふ。心苦しき御消息に、まろこそいと苦しけれ。思はずに思ひ聞ゆる事ありとも、(八)おろかに人の見咎むばかりは有らじとこそ思ひ侍れ。(七)誰が聞えたるにかあらむ」と宣ふに、恥ぢらひて背き給へる御姿も、いとらうたげなり。いたく面痩せて、物思ひ屈し給へる、いとどあてにをかし。源(九)「いと幼き御心ばへを見置き給ひて、いたく後めたがり聞え給ふな

しげにおはしませば、(一)院は心憂しと思ひ聞え給ふかたこそあれ、(二)いとらうたげにあえかなる樣して、かく惱みわたり給ふを、如何におはせむと歎かしくて、さまざまに思し歎く。(三)御祈など、今年は紛多くて過し給ふ。(四)御山にも聞召して、らうたく戀しと思ひ聞え給ふ。(五)月頃かく外々にて、渡り給ふこともをさ〳〵なき樣に、人の奏しければ、(六)如何なるにかと御胸つぶれて、世の中も今更に怨めしくおほして、(七)對の方の煩ひける頃は、猶そのあつかひにと聞し召してだに、なま安からざりしを、(八)その後なほり難く物し給ふらむは、その頃ほひ便なきことや出で來たりけむ、(九)自ら知り給ふ事ならねど、善からぬ御後見どもの心にて、如何なる事かありけむ、(一〇)內裏わたりなどの、みやびをかはすべき中らひなどにも、けしからず憂きことい ひ出づる類も聞ゆかし、とさへ思しよるも、こまやかなること思し捨ててし世なれど、(一一)猶この道は離れ難くて、(一二)宮に御文こまやかにてありけるを、(一三)大臣おはします程にて見給ふ。

(一)源が柏木の事を思ひてつらく思ふ所はあるが
(二)女三が
(三)今年は多く祈禱などの爲にごた〳〵して暮す
(四)朱雀院も女三の病氣を聞きて
(五)源が外の處にのみ在りて女三方へは一向行かぬ樣に
(六)朱雀が
(七)紫の病中は看病の爲紫方にのみ居ると聞きてさへ胸が穩かならざりしに
(八)紫が快くなりても依然として源の疎遠なるは源の留守中女三に不都合があつたのでは無きか
(九)女三自身は知らぬにしても
(一〇)宮中に仕へて折につけて風流なる贈答などをして差支なき男女の交際にもけしからぬ噂をする事もある
(一一)子どもの事は忘れかねて
(一二)女三に
(一三)源氏も丁度居合せて

(一)一具は花散里に拵へさせん
(二)形の如くのころもでは
(三)紫は
(四)禁中にある金銀の細工所
(五)細工にかゝる樣に言ひ附ける
(廿) 朱雀院、女三宮の病を見舞ふ、源氏女三宮を敎訓す、柏木と源氏との疎隔
(六)朱雀の五十の賀
(七)夕霧の母葵上の忌月故かれて音樂方の世話やくべき夕霧が差支あり
(八)弘徽殿
(九)女三宮
(一〇)落葉宮が十月に賀の爲に朱雀院へ參れり
(一一)頭中が其賀の世話をやきて
(一二)柏木
(一三)奮發して朱雀院へ參れり
(一四)女三宮
(一五)懷胎の

らふべきを、袈裟などは如何に縫ふものぞ。それせさせ給へ。一具(一)は六條の東の君にものしつけむ。うるはしき(二)法服だちては、うたて見る目も氣疎かるべし。さすがにその心ばへ見せてを」など聞え給ふ。靑鈍の一具を、こゝには(三)せさせ給ふ。作物所(四)の人召して、忍びて、尼の御具どもの然るべき、はじめ宣はす(五)。御褥、上席、屏風、几帳などの事も、いと忍びて、わざとがましく急がせ給ひけり。

かくて、山(六)の帝の御賀も延びて秋とありしを、八月は大將(七)の御忌月にて、樂所のこと行ひ給はむに、便なかるべし、九月は院の大后(八)の隱れ給ひにし月なれば、十月にと思しまうくるを、姫宮(九)いたく惱み給へばまた延びぬ。衞門督の御あづか(一〇)りの宮なむ、その月には參り給ひける。太政大臣(一一)居立ちて、嚴しくこまかに、物の淸ら儀式をつくし給ひけり。かんの君(一二)も、その序にぞ、思ひ起して(一三)出で給ひける。猶なやましく例ならず、病づきてのみ過し給ふ。宮(一四)も、うちはへて物をつゝましく、いとほしとのみ思し歎くけにやあらむ、月(一五)多く重り給ふまゝに、いと苦

かるべきわざなりけり。(一)宿世などいふらむものは、目に見えぬわざにて、親の心にまかせ難し。(二)おひ立たむ程の心遣ひは、なほ力入るべかゝめり。(三)よくこそ、數多かたがたに、心を亂るまじき契なりけれ。(四)年深く至らざりし程に、さうぐ〳〵しのわざや、様々に見ましかばとなむ、歎かしき折々ありし。(五)若宮を心しておふしたて奉り給へ。(六)女御は物の心を深く知り給ふ程ならで、かく暇なき交らひをし給へば、何事も心もとなき方にぞ物し給ふらむ。(七)御子達なむ、なほ飽くかぎり人に點つかるまじくて、世をのどかに過し給はむに、後めたかるまじき心ばせ、附けまほしきわざなりける。(八)限ありて、とざまかうざまの後見設くるたゞ人は、自からそれにも助けられぬるを」など聞え給へば、紫「(九)はかぐ〳〵しき樣の御後見ならずとも、世にながらへむ限は、見奉らぬ様あらじと思ふを、(一〇)如何ならむ」とて、猶物を心細げにて、かく心にまかせて、行をも滯なくし給ふ(一一)人々を、羨ましく思ひ聞え給へり。源「(一二)かんの君に、さま變り給へらむ裝束など、まだ立ちなれぬ程はとぶ

(一)其子の運不運は
(二)そだつ際の注意は大に力を用ひざる可らず
(三)我は子供が少く大勢に氣をくばる事がなくて仕合せぢや
(四)我が若い時分には子供が少くて寂しい、大勢あつたらばよからうと
(五)明石姫君腹
(六)明石姫君は幼稚の時より宮仕をのみして居る故、何事につけても至らぬ勝なるべし
(七)皇女といふものは飽迄非難される脈なくゆつくり世を送るに、側から心配することの入らぬ様な風に仕立てたいものぢや
(八)身分卑くてどの樣なのにもせよ夫を持つ女は
(九)碌な世話は出來ぬにしても
(一〇)命が續くかしら
(一一)槿、朧月夜など
(一二)朧にころもを當分は還らねばならぬが

げに、

あま船にいかゞはおもひおくれけむあかしの浦にいさりせし君

(一)回向には、(二)普き方にてもいかゞは。

とあり。濃き青鈍の紙にて、樒にさし給へる、例の事なれど、(三)いたく過したる筆遣ひ、猶古り難くをかしげなり。二條院におはします程にて、(四)(五)女君にも、今はむげに絶えぬる事にて、見せ奉り給ふ。源「いと痛くこそ(六)辱められたれ。實に(七)心づきなしや。(八)樣々に心細き世の中の有樣を、よく見過しつる樣なるよ。なべての世の事にても、はかなく物を言ひ交し、時々によせて、哀をも知り、故をも過さず、餘所ながらの睦び交しつべき人は、(九)齋院とこの君とこそは殘ありつるを、かく皆背きはてて、(一〇)齋院はた、いみじう勤めて、紛なく行に染み給ひにたゝめり。猶こゝらの人の有樣を聞き見る中に、(一一)深く思ふ樣に、(一二)流石に懷かしき事の、かの人の御なずらひにだにも有らざりけるかな。女子をおふし立てむ事よ、いと難

(一)明石浦の鹽まで踏んで來た君が、あま(尼—蜑人)に後れたとはどうした事ぞ
(二)假令一切衆生に普く及ぼす回向なりとも君の爲にとけ念ずまじ
(三)非常に氣取りたる
(四)源が居る時で
(五)疾くに過ぎ去りたる昔の關係故、憚らずして紫にも朧の文を示す
(六)「普き方にても」とあるをさして言ふ
(七)源自身の所業が思へば至らぬ
(八)自分は色々の心細き目にあひても出家もせず其を平氣で過して來た樣に見える
(九)槿と朧月夜
(一〇)出家して仕舞ひて
(一一)槿の出家の事こゝらに初めて書けり
(一二)思慮深くて愛嬌ある事槿に及ぶ女はなし

(一)朧月夜出家したりと聞きて
(二)源が
(三)是から出家すると薄薄知らせもせぬ恨を
(四)わが須磨の退居も君故なれば、君の尼になるを餘所に聞き流しては居られぬ
(五)出家を君に妨けられたる殘念さを
(六)我を思ひ捨てても、御囘向の時には第一に我が爲にも佛を念じ下さるならんと思ふ
(七)朧の出家は疾くよりの望なれど源の妨げたる爲に延引し
(八)源に妨げられたりとは人に知らせねど
(九)のがれぬ源との契
(一〇)朧が
(一一)其方に先を越されたりと

きものに思し知りて、この御心弱さも少し輕く思ひなされ給ひけり。遂に御本意(一)のごとし給ひてけりと聞き給ひては、いと哀に口惜しく御心動きて、まづ(二)とぶらひ聞え給ふ。(三)今なむとだに匂はし給はざりけるつらさを、淺からず聞え給ふ。

源　あまの世をよそに聞かめや須磨の浦にもしほたれしも誰ならなくに

樣々(四)なる世の定なさを、心に思ひつめて、(五)今まで後れ聞えぬる口惜しさを、(六)思し捨てつとも、さり難き御囘向のうちには、まづこそはと哀になむ。

など、多く聞え給へり。(七)疾く思し立ちにし事なれど、この御妨にかゝづらひて、(八)人には然あらはし給はぬことなれど、心のうちあはれに、昔よりつらき(九)御契を、さすがに淺くしも思し知られぬなど、かたぐ\に(一〇)おほし出でらる。御かへり、今はかくしも通ふまじき御文のとぢめと思せば、哀にて、心とゞめて書き給ふ、墨つぎなどいとをかし。

朧　常なき世とは身ひとつにのみ知り侍りにしを、後れぬと(一一)宣はせたるになむ、

(一)柏木の樣に懸想する男が出來たらば、其男は柏木以上に心を亂すならん
(二)一かどもなく柔和なる女をば人も輕蔑するのかして
(三)つまらぬ處で人に目をつけられ
(四)源の心
(五)玉鬘
(六)源も世間體は親らしくして内心は色氣がないでも無かりしに
(七)鬚黑が小辨の如き心無しと示し合せて
(八)鬚黑に肌を許さぬ趣を判然と人に分らせ
(九)公然許を得た事にして鬚黑に緣附き
(一〇)鬚黑と玉鬘とは
(一一)夫婦中の久しくかはらぬ點は
(一二)最初の成立が玉鬘の一了簡で鬚黑に靡いた事と人が知り居らば、自ら玉鬘に對して輕蔑の念あるべし
(一三)玉鬘は中々よくやつたわいと
㊟朧月夜尼になる、源氏の見舞
(一四)朧月夜
(一五)源が
(一六)女三の事につけて無理なる密の厭ふべきを悟りて、朧月夜の靡き易きを輕蔑する樣になれり

(一)かやうに心かけ聞えむ人は、まして心亂れなむかし。(二)女はかうはるけ所なくなよびたるを、人もあなづらはしきにや、(三)さるまじきにふと目とまり、心強からぬ過はし出づるなりけり、と思す。(四)右の大臣の(五)北の方の、取り立てたる後見もなく、幼くより物はかなき世にさすらふる樣にて生ひ出で給ひけれど、かど〳〵しく勞ありて、(六)我も大方には親めきしかど、憎き心の添はぬにしもあらざりしを、なだらかにつれなくもてなして過し、この大臣の、(七)さる無心の女房に心合せて入り來りけむにも、(八)けざやかにもて離れたるさまを人にも見え知られ、(九)殊更に許されたる有樣にしなして、我が心と罪あるには爲さずなりにしなど、今思へばいかにかどある事なりけり、(一〇)契深き中なりければ、(一一)長くかくて保たむことは、とてもかくても同じ如有らましものから、(一二)心もてありし事とも、世の人も思ひ出では、少し輕々しき思加はりなまし、(一三)いと痛くもてなしてしわざなり、と思し出づ。

(一四)二條の尙侍の君をば、(一五)なほ絶えず思ひ出で聞え給へど、かく(一六)後めたき筋の事、憂

(一)女三自身
(二)女三を輕んじ非難しながら矢張女三の今の境遇に同情をよせる
〔二十〕源氏の女三宮に對する態度
(三)女三宮
(四)源が
(五)女三を
(六)いやな女とは思ふものゝ又戀しくもありて苦しければ
(七)源が女三方へ
(八)女三に對する大體の取扱は
(九)目立たぬ樣にして
(一〇)源が
(一一)女三の心中
(一二)源は柏木の文を見たとも何とも言はぬに、女三が自分から面目ながるのが子供らしし
(一三)源の心、是だから、あの樣な事も出來たのぢや
(一四)女三の性質の批評
(一五)明石姫君
(一六)おつとりして居るのが心配

き給ふ事も無くて、かくいとほしき御身のためも(一)、人のためも、いみじき事にもあるかなと(二)、かの御事の心苦しさも、え思ひ放たれ給はず。

宮(三)はいとらうたげにて、惱みわたり給ふさまの、なほいと心苦しく(四)、かく思ひはなち給ふ(五)につけては、あやにくに(六)、憂にまぎれぬ戀しさの苦しくおぼさるれば、渡(七)り給ひて見奉り給ふにつけても、胸いたくいとほしく思さる。御祈など、さまざませさせ給ふ。(八)大方の事はありしにかはらず、なかなか勞はしく、やむごとなくもてなし聞ゆるさまを增し給ふ。氣近くうち語らひ聞え給ふさまは、いとこよなく御心隔たりて、かたはらいたければ、人目ばかりを(九)めやすくもてなして、思し(一〇)のみ亂るゝに、(一一)この御心の中しもぞ苦しかりける。(一二)さること見きともあらはし聞え給はぬに、自らいと理なく思したる樣も、いと心をさなし。(一三)いと斯くおはするけぞかし、(一四)よき樣といひながら、あまり心もとなく後れたる、賴もしげなきわざなり、と思すに、世の中なべて後めたく(一五)、女御のあまり柔かに(一六)おびれ給へるこそ、

(一)氷る心持して
(二)柏木の心、年來用向に附ても遊に附ても六條院へは不斷呼ばれて參り馴れしに
(三)他人よりも我を寵に目をかけて下されしに
(四)是から源に飛でもない奴と睨まれて居ては
(五)丸で姿を見せずに居るのも目立ちて
(六)源にもあの一件故來ぬのぢやと思はれるのもつらし
(七)此樣な事にならんとは初から思はぬでもなかりしにと
(八)柏木の心
(九)女三方は
(一〇)あの樣な處に居て人に見られるとは然る可らざる事
(一一)夕霧
(一二)女三に對する戀情を醒ましたさに
(一三)女三に
(一四)柏木の心、いくら大樣なるがよいと言うても
(一五)女三の如き人
(一六)假初に傍に居る人

たはらいたきに、朝夕涼も無き頃なれど、身も(一)しむる心地して、言はむかたなく覺ゆ。年頃、(二)まめごとにもあだごとにも、召しまつはし參りなれつるものを、人(三)よりはこまやかに思しとゞめたる御氣色の、哀になつかしきを、あさましくおほけなきものに、心置かれ奉りては、いかでかは目をも見合せ奉らむ、(四)さりとてかき絶え、(五)ほのめき參らざらむも人目怪しく、(六)かの御心にも思し合せむ事のいみじさ、など安からず思ふに、心地もいと惱ましくて、內裏へも參らず。さして重き罪には當るべきならねど、身の徒になりぬる心地すれば、(七)さればよと、かつは我が心も、いとつらく覺ゆ。(八)いでや、靜やかに(九)心にくきけはひ見え給はぬわたりぞや、まづはかの御簾の間も、(一〇)さるべき事かは、輕々しと、(一一)大將の思ひ給へる氣色見えきかし、など今ぞ思ひあはする。強ひて(一二)この事を思ひさまさむと思ふ方にて、あながちに難つけ(一三)奉らまほしきにやあらむ。(一四)よき樣とても、あまりひた赴きに、(一五)おほどかにあてなる人は、世の有樣も知らず、(一六)かつさぶらふ人に心お

（一）帝の手前ばかりを心配して當人の女の事を思はぬとは情の淺い事ぢや
（二）六條院へ歸る事は
（三）其方と一緒にゆつくり歸るべし
（四）私は
（五）女三の心
小侍從、祕密の露顯を柏木に告ぐ、柏木の煩悶
（六）女三宮
（七）源の無沙汰を今迄は源のせいにのみしたるが
（八）今では自分も惡いのぢやと思ふと
（九）朱雀が源と疎遠なる樣子を聞かれたらば
（一〇）柏木からは切に音信して來れども
（一一）源に文を見られたる次第を柏木に語りたれば
（一二）柏木の心
（一三）長い間には自然と樣子で分る事があるかも知れぬと
（一四）確な證據を源に見られたかと思へば

たどり深き事、とやかくやとおほよそ人の思はむ心さへ思ひめぐらさるゝを、こ（一）れはたゞ、國王の御心やおき給はむとばかりを憚らむは、淺き心地ぞしける」と、ほゝゑみて宣ひ紛らはす。（二）渡り給はむことは、源「（三）諸共にかへりてを、心のどかにあらむ」とのみ聞え給ふを、紫「（四）こゝには暫し心安くて侍らむ。まづ渡り給ひて、人（五）の御心も慰みなむ程にを」と、聞えかはし給ふ程に日頃經ぬ。

姫宮（六）は、かく（七）渡り給はぬ日頃の經るも、人の御つらさにのみ思すを、（八）今は我が御おこたり打交ぜて斯くなりぬると思すに、（九）院も聞召しつけて如何に思召さむと、世の中つゝましくなむ。（一〇）かの人もいみじげにのみ言ひわたれども、小侍從も煩はしく思ひ歎きて、（一一）かゝる事なむありしと告げてければ、（一二）いとあさましく、いつの程にさる事出で來けむ、かゝる事は、（一三）あり經れば、おのづから氣色にても、漏り出づるやうもやと思ひしだに、いとつゝましく、空に目つきたる樣に覺えてしを、ましてさばかり、（一四）違ふべくもあらざりし事どもを見給ひてけむ、恥かしく辱くか

けれ、と(一)近きためしをおぼすにぞ、(二)戀の山路はえもどくまじき御心まじりける。(三)つれなしづくり給へど、物思し亂るゝさまの著ければ、女君、(四)消え殘りたるいとほしみに、わたり給ひて、人やりならず心苦しう、(五)思ひやり聞え給ふにやと思して、紫「(六)心地はよろしくなりにて侍るを、(七)かの宮の惱ましげにおはすらむに、(八)疾く渡り給ひにしこそ、いとほしけれ」と聞え給へば、源「然かし。例ならず(九)見え給ひしかど、異なる心地にもおはせねば、おのづから心のどかに思ひてなむ。内裏よりは度々(一〇)御使ありけり。今日も御文ありつとか。(一一)かの院のいとやむごとなく聞えつけ給へれば、上もかく思したるなるべし。(一二)少し疎になどもあらむは、こなたかなた思さむことの、いとほしきぞや」とて、うめき給へば、紫「内裏の聞召さむよりも、(一三)自らうらめしと思ひ聞え給はむこそは、心苦しからめ。(一四)我はおぼし咎めずとも、よからぬさまに聞えなす人々、必ずあらむと思へば、いと苦しくなむ」など宣へば、源「げに、(一五)あながちに思ふ人の爲には、煩はしきよすがなれど、よろづに

(一)自分の例を考へると
(二)他人の戀路に迷ふ無分別も惡く言はれぬ氣もする
(三)平氣を裝へども
(四)我が死にそこなひたるを可愛く思つて
(五)女三を
(六)私の病氣は
(七)女三
(八)早く御歸りなされたはおいとしい
(九)女三が
(一〇)女三方へ
(一一)女三の事は朱雀が力を入れて今上に賴みある故
(一二)少しでも女三を粗末にしたらば方々の御不機嫌が恐ろしい
(一三)女三自身の恨の方が御氣の毒
(一四)女三は何とも思はぬ事でも、側の人々が何のかのと智惠をつけるに違ないと思ふ故
(一五)自分の深く思ふ女の爲には、皇女といへば面倒な關係である事は勿論ながら、色々と深く考へて世間の人の思はく迄も心配するが常なれど

なり、女御更衣といへど、とある筋かゝる方につけて、かたほなる人もあり、心ばせ必ず重からぬうち交りて、(一)思はず(二)なる事もあれど、(三)おほろけの定かなるあやまち見えぬ程は、さても交らふ樣もあらむに、ふとしも現ならぬ紛ありぬべし、かくばかりまた無きさまにもてなし聞えて、内々の志ひくかたよりも、いつくしく(四)辱きものに思ひはぐくまむ人をおきて、かゝる事は更に類あらじ、と爪彈せられ給ふ。(五)帝と聞ゆれど、たゞすなほに、おほやけざまの心ばへばかりにて、宮仕の程も物すさまじきに、志深き私の願言になびき、おのがじし哀を盡し、見過し難きをりのいらへをも言ひそめ、自然に心かよひそむらむ中らひは、同じけしからぬ筋なれど、よる方ありや、(六)我が身ながらも、さばかりの人に心わけ給ふべくは覺えぬをと、いと心づきなけれど、又氣色に出すべき事にもあらずなど、思し亂るゝにつけて、(七)故院のうへも、かく御心には知ろしめしてや、知らず顏をつくらせ給ひけむ、思へばその世の事こそは、いと怖ろしくあるまじき過なり

(一)貞操の點にかけては缺點のある人もあり
(二)案外なる失行
(三)失行のよくわからぬ間は其で濟んでゆくので
(四)女三の如く本妻にすゑて内心氣に入りたる緊にも優りて大切にする夫を措きて他人に密通するとは類のない話
(五)源の心、帝に仕ふると言ひても只一通の宮仕にて御寵遇もなく面白からぬ身が、他の男に慇懃に言ひ寄られてよい中になる抔は不埒ながらも又廉がある
(六)自分の事ながら柏木風情に愛を分けられる身とは思はぬにと
(七)源の心、桐壺帝も我と藤壺との關係を知りては居ながら

て、心安からぬすぢを書き盡したる言葉、いと見所ありて哀なれど、いと斯く(一)さやかには書くべしや、あたら人の、文をこそ思ひやりなく書きけれ、(二)落ち散ることもこそと思ひしかば、昔かやうのこまかなるべき折節にも、(三)ことそぎつゝこそ書きまぎらはしゝか、しか人の深き用意は難きわざなりけりと、(四)かの人の心をさへ見おとし給ひつ。(五)さても、(六)この人をばいかゞもてなし聞ゆべき、(七)珍らしきさまの御心地も、かゝる事の紛にてなりけり、いであな心憂。かく、(八)人傳ならず憂きことを知る〳〵、ありしながら見奉らむよと、我が御心ながらも、(九)え思ひなほすまじく覺ゆるを、(一〇)等閑のすさびと、初より心を留めぬ人だに、又ことざまの心わくらむと思ふは、心づきなく思ひ隔てらるゝを、ましてこれは、(一一)樣殊におほけなき人の心にもありけるかな、(一二)帝の御妻をもあやまつ類、昔もありけれど、それは又いふかた異なり、(一三)宮仕といひて、(一四)我も人も同じ君に馴れ仕うまつる程に、おのづから、さるべき方につけても、心をかはし初め、(一五)物のまぎれ多かりぬべきわざ

(一)斯う明白に書くべきではない
(二)自分が書く時には
(三)簡單にごまかしの利く樣に書きたりき
(四)柏木の腹の中まで見下げたり
(五)以下次頁五行目「更に類あらじ」迄源の心
(六)女三宮を如何に處分すべき
(七)懷胎も柏木の胤を宿したるものぢやわい
(八)正しく不埒を認めながら不相變に女三を待遇するのかしらと
(九)心を取直すことが出來にくゝ
(一〇)初から一時の慰物と思つて居る女でも、他人に愛を分つ樣に見えると嫌氣になるが常なるに
(一一)柏木の了簡が非常に不埒なり
(一二)后妃に密通する類
(一三)別に理由がある
(一四)男も女も
(一五)不義密通もあり勝な筈

（一）誰の文があるものぞ
（二）柏木
（三）源に少しでも知れては一大事とこはがり居られしに
（四）間もなく
（五）思慮が足らぬ故鞠の會の時人に姿を見られる樣の事をなされしかば
（六）それ故柏木が見初めて取持せよと年來私を責められし譯なるが
（七）柏木の言分は只御目にかゝりて詞を交したしといふ丈にて此樣な事にならんとは思はざりし也
（八）女三が氣のおけぬ若き人故小侍從も狎れて無遠慮に口をきく也
（九）女三が
（一〇）女三が此樣に苦まるゝを御存じの癖に源は直つて仕舞つた紫の世話ばかり御燒きなさる
（一一）女三の侍女等が
（一二）源氏
（一三）女三の侍女等の中で誰か柏木の僞筆をしたるかと
（一四）きら〳〵しく華やかにて他人では眞似の出來ぬ所あり
（一五）年來の戀が叶ひて、以下源が此文を心中に評する也

れば（一）いづくのかはあらむ。小侍從「あないみじ。（二）かの君もいといたく怖ぢ憚りて、（三）氣色にても漏り聞かせ給ふ事あらばと、かしこまり聞え給ひしものを、（四）程だに經ず、かゝる事の出でまうで來るよ。すべて（五）いはけなき御有樣にて、人にも見えさせ給ひければ、（六）年頃さばかり忘れがたく、怨みいひ渡り給ひしかど、（七）かくまで思ひ給へし御ことかは。誰が御爲にも、いとほしく侍るべき事」と、憚もなく聞ゆ。（八）心やすく若くおはすれば、狎れきこえたるなめり。いらへもし給はで、たゞ泣きにのみぞ泣き給ふ。（九）いと悩ましげにて、露ばかりの物も聞し食さねば、（一〇）「かく悩ましくせさせ給ふを、見おき奉り給ひて、今はおこたりはて給ひにたる御あつかひに、心を入れ給へる事」と、（一一）つらく思ひいふ。（一二）大臣は、この文のなほ怪しく思さるれば、人見ぬ方にて、打ち返しつゝ見給ふ。（一三）さぶらふ人々の中に、かの中納言の手に似たる手して書きたるか、とまで思し寄れど、言葉づかひ（一四）きら〳〵と、紛ふべくもあらぬ事どもあり。（一五）年を經て思ひわたりける事の、たまさかに本意かなひ

どまゐる方に(一)目も見やらず。(二)いでさりともそれにはあらじ、いといみじく、(三)然る事はありなむや、隠し給ひてけむ、と思ひなす。(四)宮は何心もなく、まだ大殿ごもれり。(五)あないはけな、かゝるものを散らし給ひて、我ならぬ人も見つけたらましかば、と思すも、(六)心おとりして、(七)さればよ、いとむげに(八)心にくき所なき御有樣を、後めたしとは見るかしとおぼす。(九)出で給ひぬれば、人々少し散れぬるに、侍從寄り來て、小侍從「(一〇)昨日の物は如何にせさせ給ひてし。今朝院の御覽じつる文の色こそ、似て侍りつれ」と聞ゆれば、あさましと思して、(一一)涙のたゞ出で來に出で來れば、いとほしきものから、いふかひなの御樣やと見奉る。小侍從「いづくにかは置かせ給ひてし。(一二)人々の參りしに、事あり顏に近く侍はじと、(一三)さばかりの忌をだに、心の鬼に去り侍りしを、(一四)入らせ給ひし程は、少し程經侍りにしを、隱させ給ひつらむとなむ、思う給へし」と聞ゆれば、女三「いさとよ。(一五)見しほどに入り給ひしかば、(一六)ふともえ置きあへで插みしを、忘れにけり」と宣ふに、(一七)いと聞えむかたなし。寄りて見

(一)小侍從が一心に文にのみ目を注ぎ居る也
(二)小侍從の心、いくら何でも柏木の文ではあるまじ
(三)あの文を見附かる樣な事のあらう筈がない
(四)女三宮
(五)無分別、源の女三を心中に批判する詞
(六)女三が今更安く思はれて
(七)源の心
(八)女三が奧床しき處のないのをかねて覺束なく思ひしに、果して此樣な事になつた
(九)源が
(一〇)柏木の文
(一一)女三が
(一二)昨日の事をいふ也
(一三)一寸した嫌疑でも受けぬ樣にと氣をつけしに
(一四)源の來られし迄には少し間がありし故
(一五)文を見て居る間に
(一六)一寸は隱し得ずして
(一七)小侍從の心

(一)源が
(二)此聲を聞きては嘸もさぞ待つならんと思へば兩方に心がひかれる、「來めやとは思ふ物から蜩の鳴く夕暮は打待たれつゝ」
(三)女三方に
(四)紫の方を思ひて也
○源氏柏木の艶書を發見す、源氏の煩悶
(五)紫の方へ
(六)昨夜持ち居たる扇をなくした、今持ち居る扇は風が涼しくない
(七)檜扇なるべし
(八)斜になりたる端より
(九)柏木
(一〇)源の傍に居て理髪の世話する侍女は
(一一)通常の源の見らるべき筈の文なるべしと

しや」とうち歎き給ふ。

源「待つ里も(一)いかゞ聞くらむかたぐ〜に心さわがすひぐらしのこゑ

など思(二)しやすらひて、猶情なからむも心苦しければ、とまり(三)給ひぬ。靜(四)心なく、さすがに眺められ給ひて、御菓子ばかり參りなどして、大殿籠りぬ。

まだ朝すゞみの程に渡り(五)給はむとて、疾く起き給ふ。源「よべ(六)のかはほりを落して、これは風ぬるくこそありけれ」とて、御扇(七)をおき給ひて、昨日うたゝねし給へりし御座のあたりを、立ちとまりて見給ふに、御褥の少しまよ(八)ひたるつまより、淺緑の薄様なる文の、押し卷きたる端見ゆるを、何心もなく引き出でて御覽ずるに、男の手なり。紙の香などいと艶に、ことさらめきたる書きざまなり。二重にこまごまと書きたるを見給ふに、紛るべき方なく、(九)その人の手なりけりと見給ひつ。御(一〇)鏡など開けて參らする人は、(一一)なほ見給ふ文にこそはと、心も知らぬに、小侍從見つけて、昨日の文の色と見るに、いといみじく胸つぶ〜と鳴る心地す。御粥な

(一)はさみ給ひつ。夜さりつかた、二條院(二)へわたり給はむとて、御暇聞え給ふ。源「こ(三)こには、けしうはあらず見え給ふを、(四)まだいと漂はしげなりしを、見捨てたるやうに思はるゝも、今更にいとほしくてなむ。(五)ひが〳〵しく聞えなす人ありとも、ゆめ心おき給ふな。(六)今見なほし給ひてむ」と語らひ給ふ。例は、(七)なまいはけなき戯言なども、打解け聞え給ふを、いたく湿りて、さやかにも(八)見合せ奉り給はぬを、唯世のうらめしき御氣色と心え給ふ。晝の御座に打臥し給ひて、御物語など聞え給ふ程に暮れにけり。少し(九)大殿籠り入りにけるに、蜩のはなやかに鳴くに(一〇)驚き給ひて、源「さらば道(一一)たど〳〵しからぬ程に」とて、御衣など奉りなほす。女三「(一二)月待ちてともいふなるものを」と、いと若やかなる樣して宣ふは、憎からずかし。「その間にも」とや思すと、心苦しげに思して、(一三)立ちとまり給ふ。

女三(一四)夕露に袖ぬらせとやひぐらしの鳴くを聞く〳〵起きてゆくらむ

(一五)かたなりなる御心に任せて言ひ出で給へるもらうたければ、つい居て、源「あな苦

(一)柏木の文を
(二)源が
(三)其方の容態は格別でもない樣なるが
(四)紫はまだ直るとも直らぬともきまらぬ容態なりしを
(五)自分が紫ばかりを大切にする杯と間違つた事を言ひ聞かする人ありとも隔がましき心を持ち給ふな
(六)やがて打て變つて其方をのみ大事にする時が來る
(七)女三が子供らしき冗談なども憚らず言ふのであるが
(八)源に目を
(九)源が
(一〇)源が目さめて
(一一)暗くならぬ中に
(一二)「夕闇は路たどたどし月待ちてかへれわがせ子其間にも見ん」
(一三)源が
(一四)蜩の鳴くを聞きて日の暮るゝに程なきを承知で居ながら出行くは我に泣けとの事か
(一五)未熟なる

(一)明石上など其後打絶えて懷胎せる事なきをいふ歟
(二)懷胎かどうか分らぬと
(三)やつとの事で思立つて女三方へ來た事なれば
(四)紫の事が氣にかゝる故
(五)二日か三日の間に何の書く事があるのであらう
(六)女三の柏木との事を知らぬ侍女等は女三の肩を持つ
(七)柏木
(八)心得違して、源が女三方にありと聞きて妬心を起したるなるべし
(九)手紙を女三へ
(一〇)紫の居し方へ源が一寸行きし隙に
(一一)小侍從が
(一二)はしに書きたる文言
(一三)女三が

經ぬる人々(一)だにもさることなきを、(二)不定なる御事にもやとおぼせば、殊にともかくも宣ひあへしらひ給はで、唯打ち惱み給へるさまの、いとらうたげなるを、あはれと見奉り給ふ。(三)辛うじておぼし立ちて渡り給ひしかば、ふともえ歸り給はで、二三日おはするほど、いかに〳〵と(四)後めたく思さるれば、御文をのみ書き盡し給ふ。「(五)いつの間につもる御言の葉にかあらむ。いでややすからぬ世をも見るかな」と、(六)若君の御あやまちを知らぬ人はいふ。侍從ぞ、かゝるにつけても胸うち騷ぎける。(七)かの人も、かく渡り給へりと聞くに、おほけなく(八)心あやまりして、いみじき事どもを書き續けて、(九)おこせ給へり。(一〇)對にあからさまに渡り給へる程に、人間なりければ忍びて(一一)見せ奉る。女三「むづかしき物見することそいと心憂けれ。心地のいとゞ惡しきに」とて臥し給へれば、小侍從「猶たゞこの(一二)はしがきの、いとほしげに侍るぞや」とて擴げたれば、人の參るに、いと苦しくて、御几帳ひき寄せて去りぬ。いとゞ(一三)胸つぶるゝに、院入り給へば、えよくも隱し給はで、御褥の下にさし



宣へば、自らも哀と思ほして、

紫「消えとまるほどやは經べきたまさかに蓮のつゆのかゝるばかりを(一)

と宣ふ。

源「契りおかむこの世ならでもはちす葉に玉ゐる露のこゝろへだつな(二)

出で給ふかたざまは物憂けれど、(三)内裏にも院にも聞し召さむ所あり、惱み給ふと聞きても程經ぬるを、(四)目に近きに心を惑はしつる程、見奉ることもをさ〳〵なかりつるに、かゝる雲間にさへやは絶えこもらむ、(五)と思し立ちて、渡り給ひぬ。(六)

宮は、(七)御心の鬼に、見え奉らむも(八)恥かしうつゝましく思すに、物など聞えたまふ(九)御いらへも、聞え給はねば、日頃のつもりを、(一〇)流石にさりげなくてつらしと思しけると、心苦しければ、とかくこしらへ聞え給ふ。大人びたる人召して、御心地のさまなど問ひ給ふ。例のさまならぬ御心地になむと、(一一)煩ひ給ふ御ありさまを聞ゆ。源「怪しく程へて珍らしき御事にも」(一二)とばかり宣ひて、御心のうちには、年頃

(一)一旦直りたりとて命は原來はかなきものなれば此先幾許も餘命はあるまじ
(二)未來の一蓮托生を今より約して置かんと也
(三)行きたくもなき女三の處へなれど
(四)差當りての紫の病氣に紛れて一向女三に逢はざりしに
(五)しばらく隙のあるのに女三へ行かずに居るでもあるまいと
(六)女三方へ
(七)女三
(八)源に逢ふも
(九)源が話しかけても返事もせぬ故
(一〇)源の心、此頃の無沙汰を其と言はずに恨むならんと
(一一)御懷胎の御樣子なりと
(一二)懷胎すべき時分を經過して

(一)源が女三方へ
(二)紫上
(三)髮を洗ひて
(四)臥したる儘にて髮をとりひろげて干したれば
(五)くせづきくねりたる毛はなくて
(六)拔け出したる
(七)直るか直らぬか分らぬ樣子
(八)二條院には此頃源が一向居らざりし也
(九)紫の快方に向へるによりて心に暇の出來たる也
(一〇)源が
(一一)紫が
(一二)此位よくなりたるを見るは夢の樣に思はれる

召してぞわたり給ふ。(一)女君(二)はあつくむづかしとて、御髪(三)すまして、少しさわやかにもてなし給へり。臥(四)しながらうちやり給へりしかば、頓にもかわかねど、露ばかり打ちふくみまよふ筋もなくて(五)、いと淸らにゆら〳〵として、靑み衰へ給へるしも、色は眞靑に白く美しげに、透きたるやうに見ゆる御膚つきなど、世になくらうたげなり。もぬけたる(六)蟲の殼などのやうに、まだいとたゞよはしげ(七)におはす。年頃住み給はで、少し荒れたりつる院のうち、たとしへなく狹げにさへ見ゆ。昨日今日(八)かくもの覺え給ふひまにて(九)、心ことにつくろはれたる遣水前栽の、うちつけに心よげなるを見出し給ひても(一〇)、哀に今まで經にけるを思ほす。池はいと涼しげにて、蓮の花の咲きわたれるに、葉はいと靑やかにて、露きら〳〵と玉のやうに見え渡るを、源「かれ見給へ。おのれひとりも涼しげなるかな」と宣ふに、起き(一一)あがりて見出し給へるも、いとめづらしければ、源「かくて(一二)見奉るこそ夢の心地すれ。いみじく、我身さへかぎりと覺ゆるをり〳〵のありしはや」と、涙を浮けて

(一)思遣のなき様なれば
(二)奮發して
(三)やゝ快くなりし也
(四)源が
(五)紫の病氣が危く思はれて
㊆ 女三宮懐胎、源氏の見舞、柏木文を女三宮に贈る
(六)女三宮
(七)柏木との逢瀬
(八)懐胎せる也
(九)五月、柏木に逢へるは四月
(一〇)柏木
(一一)女三の許へ忍び行きたる也
(一二)女三は柏木との事につきて非常に源を怖れ居る上に
(一三)様子も人品も源と柏木とは比べ物にならぬ
(一四)柏木は
(一五)幼時より源を見馴れ居る女三の目には
(一六)柏木の胤を宿したるは
(一七)懐胎の様子を

奉らむが、いと思ひぐま(一)なかるべければ、思ひ起して、(二)御湯などいさゝかまゐるけにや、六月になりてぞ、時々御頭もたげ給ひける。(三)珍らしく見奉り給ふにも、(四)猶いとゆゝしくて、(五)六條院にはあからさまにもえ渡り給はず。

姫宮は、(六)怪しかりしことを、(七)思し歎きしより、やがて例のさまにもおはせず、(八)なやましくし給へど、おどろ〳〵しくはあらず、立ちぬる月より、(九)物聞食さで、いたく青みそこなはれ給ふ。かの人は、(一〇)わりなく思ひあまる時々は、夢のやうに見(一一)奉りけれど、宮はつきせずわりなき事に思したり。院をのみ(一二)いみじくおぢ聞え給へる御心に、有様も人のほども、(一三)等しくだにやはある、いたく(一四)由めきなまめきたれば、大方の人目にこそ、なべての人には優りてめでらるれ、幼くより(一五)さる類なき御有様に、ならひ給へる御心には、めざましくのみ見給ふ程に、かく悩みわ(一六)たり給ふは、哀なる御宿世にぞありける。御乳母達見奉り咎めて、(一七)「院のわたらせ給ふ事も、いとたまさかなるを」と、つぶやき怨み奉る。かく悩み給ふと聞し

(一)源が紫の傍に
(二)源の心
(三)紫の命を助け
(四)紫の氣分勝れざれど
(五)我が成佛する樣に功徳をつみてくれよと物怪に賴まれたれば也
(六)紫の枕元にても
(七)物怪が一旦現はれてからは常に出て來て
(八)源が
(九)紫の病みほうけたる心にも源の心勞を氣の毒に思ひて
(一〇)紫の心、自分は死にても殘念でもなけれど是程心配されるのに死にては

人わろく御傍(一)に添ひ居給ひて、涙おし拭ひ給ひつゝ、佛を諸心に念じ聞え給ふさま、世にかしこくおはする人も、いとかく御心惑ふ事にあたりては、えしづめ給はぬわざなりけり。(二)如何なるわざをして、(三)これを救ひ、かけ留め奉らむとのみ、晝夜思し歎くに、ほれ〴〵しきまで、御顏も少し面痩せ給ひにたり。五月などは、ましてはれ〴〵しからぬ空の氣色に、(四)えさわやぎ給はねど、ありしよりは少しよろしき樣なり。されどなほ絶えず惱みわたり給ふ。(五)物怪の罪救ふべきわざ、日ごとに法華經一部づつ供養ぜさせ給ふ。何くれと尊きわざせさせ給ふ。(六)御枕がみ近くても、不斷の御讀經、聲尊きかぎりして讀ませ給ふ。(七)あらはれそめては、折々悲しげなる事どもを言へど、更にこの物怪去りはてず。いとゞあつき程は息も絶えつゝ、いよ〳〵弱り給へば、いはむ方なく(八)思し歎きたり。(九)なきやうなる御心地にも、かゝる御氣色を心苦しく見奉り給ひて、(一〇)世の中になくなりなむも、我が身には更に口惜しき事殘るまじけれど、かく思し惑ふめるに、空しく見なされ

(一)訪問し下されたる御禮は改めて申上ぐべし
(二)柏木
(三)此詞漢字意義ともに明かならず
(四)源が
(五)存生中さへ小うるさかりし六條御息所の
(六)蛇身などに生れ變りたる樣子を
(七)秋好は御息所の子なれば也
(八)女三方の女樂の後の夜紫と婦人達の噂せし事を物怪が言出したるによりて眞に御息所の靈なりと思へば
(九)出家を紫が切望する故
(一〇)受戒の效驗もあるべきかとて
(一一)戒を保つ事の功德無量なるよし

き程にてなむ。殊更になむ、かく(一)物し給へるよろこびは、聞ゆべき」と宣へり。(二)かんの君は胸つぶれて、かゝるをりのらうろう(三)ならずはえ參るまじく、けはひはづかしく思ふも、心の中ぞ腹ぎたなかりける。かく生き出で給ひての後しも、怖ろしくおぼして、(四)又々いみじき法どもをつくして、くはへ行はせ給ふ。(五)現人にてだに、むくつけかりし人の御けはひの、まして世かはり、(六)怪しきものの様になり給へらむを思しやるに、いと心憂ければ、中宮をあつかひきこえ給ふさへぞ、(七)このをりは物憂く、言ひもてゆけば、女の身は皆同じ罪深きもとるぞかしと、なべて世の中厭はしく、かの又人も聞かざりし御中の睦(八)ものがたりに、少し語り出で給へりしことを、いひ出でたりしに、誠とおぼし出づるに、いと煩はしくおぼさる。(九)御髪おろしてむと、切におぼしたれば、(一〇)忌むことの力もやとて、御頂しるしばかり剪みて、五戒ばかり受けさせ奉り給ふ。御戒の師、(一一)忌むことの勝れたるよし、佛に申すにも、哀に貴きことまじりて、

(一)紫の父
(二)式部卿宮に弔詞を傳言すれども其を取次ぐ事すら出來ず
(三)夕霧
(四)自分が女三に對してけしからぬ了簡を持ち居るに習ひてか
(五)夕霧が
(六)臨終の體なりしに
(七)取亂して
(八)源自身も落附いても居られず

ぶらひに參り給へるに、かく人の泣きさわげば、誠なりけりと打ち騷ぎ給へり。式部卿(一)の宮も渡り給ひて、いといたく思しほれたるさまにてぞ入り給ふ。人々(二)の御消息も、え申し傳へ給はず。(三)大將の君、涙を拭ひて立ち出で給へるに、柏木「いかにいかに。ゆゝしきさまに人の申しつれば、信じ難きことにてなむ。唯久しき御惱を承り歎きて、參りつる」など宣ふ。夕霧「いと重くなりて、月日經給へるを、この曉より絶え入り給へりつるを、物怪のしたるになむありける。やうやう生き出で給ふやうに聞きなし侍りて、今なむ皆人心しづむめれど、まだいと頼もしげなしや。心苦しき事にこそ」とて、誠にいたく泣き給へる氣色なり。目も少し腫れたり。衛門督(四)、わがあやしき心ならひにや、(五)この君の、いとさしも親しからぬ繼母の御ことに、いたく心しめ給へるかなと、目をとゞむ。かく、これかれ參り給へるよし聞召して、源「重き病者の俄に(六)とぢめつる樣なりつるを、女房などは心(七)もえをさめず、亂りがはしく騷ぎ侍りけるに、自ら(八)もえのどめず、心あわたゞし

て渡し奉り給ふ。

かく亡せ給ひにけり(一)といふ事世の中に滿ちて、御弔に聞え給ふ人々あるを、いとゆゝしく思す(二)。今日のかへさ(三)見に出で給ひける上達部など、歸り給ふ道に、かく人の申せば、「いといみじき事にもあるかな。生けるかひありつる幸人の、光失ふ(四)日にて、雨はそぼ降るなりけり」と、(五)うちつけごとし給ふ人もあり。又、「かく足らひ(六)ぬる人は、必ずえ長からぬことなり。(七)何を櫻にといふ故事もあるは。かゝる人のいとゞ世にながらへて、世の樂をつくさば、傍の人苦しからむ。今こそ二品宮(八)は、もとの御覺あらはれ給はめ。いとほしげに壓されたりつる御覺を」など、うちさゝめきけり。衞門督、昨日いと暮し難かりしをおもひて、今日は御弟ども、左大辨、頭宰相(九)など、(一〇)奧の方に乘せて見給ひけり。かく言ひあへるを聞くにも(一一)、胸打ちつぶれて、柏木「何か(一二)うき世に久しかるべき」と、打ち誦じひとりごちて、かの院へ皆參り給ふ。確ならぬ事なればゆゝしく(一三)やとて、唯大方の御と

● 紫上逝去の噂、落髮、病やゝ快し
(一)紫上逝去の噂
(二)源が
(三)賀茂祭の歸の行列、下賀茂より神輿が上賀茂へ渡り又上より下へ歸る也
(四)紫上逝去の由を
(五)當座のざれ口
(六)缺點なき人は
(七)「待てといふに散らでしとまるものならば何を櫻に思ひまさまし」
(八)女三宮は以前の榮華を回復すべし
(九)柏木
(一〇)我車の尻に陪乘せさせ祭の行列を見物せり
(一一)紫逝去の噂を
(一二)「散ればこそいとゞ櫻はめでたけれ憂世に何か久しかるべき」
(一三)悔をいふは憚あるべしとて

るものなりける。その中にも、(一)生きての世に、人より貶して、思し捨てしよりも、(二)思ふどちの御物語のついでに、心よからず憎かりし有樣を、宣ひ出でたりしなむ、いと恨めしく、今はたゞ亡き(三)に思し許して、こと人のいひ貶しめむをだに、省き隱し給へとこそ思へと、うち思ひし許りに、(四)かくいみじき身のけはひなれば、かく所せきなり。(五)この人を深く憎しと思ひ聞ゆる事はなけれど、(六)まもりつよく、いと御あたり遠き心地して、え近づきまゐらず、御聲をだにほのかに聞き侍る。よし今はこの罪輕(七)むばかりのわざをせさせ給へ。修法讀經とのゝしる事も、(八)身には苦しく侘しき焰とのみ纏はれて、更に尊きことも聞えねば、いと悲しくなむ。(九)中宮にもこのよしを傳へ聞え給へ。(一〇)ゆめ御宮仕のほどに、人ときしろひ嫉む心つかひ給ふな。齋宮におはしましゝ頃ほひの、(一一)御罪輕むべからむ功德のことを、必ずせさせ給へ。(一二)いと悔しき事になむありける」など、言ひつゞくれど、物怪に向ひて物語し給はむも、かたはらいたければ、(一三)封じこめて、上をば、また他方に忍び

(一)我が存生中君に棄てられし恨よりも
(二)紫上との物語、前に女三宮の女樂の後に六條御息所を評せし事、源が思出さるゝ事を言へと言ひしにつきて之を言出したる也
(三)死んだ者だからとそれに免じて人が惡く言ふのをも辯護して下されかしと思ふにと恨めしく思ひし故
(四)かく物怪になりて紫に憑きし故に紫の病氣がかく重き也
(五)紫上
(六)源は神佛の守厚く
(七)我が執心の罪輕くなりて成佛する樣に法事をして下され
(八)調伏の意味なれば也
(九)秋好
(一〇)以下秋好を戒むる詞
(一一)佛を忌み嫌ひし罪
(一二)齋宮になりて佛に遠ざかりし事をいふなるべし
(一三)物怪のつきたる童を一室に押込め置きて

心苦しさをえ見過さで、遂に現れぬること。更に知られじと思ひつるものを」と
て、髪を振りかけて泣くけはひ、たゞ(一)昔見給ひし物怪のさまと見えたり。(二)あさま
しくむくつけしと、思ししみにし事の變らぬもゆゝしければ、この童の手をとら
へて、引きすゑて、(三)樣惡しくもせさせ給はず。源「誠に(四)その人か。よからぬ狐など
いふなる物の、(五)たふれたるが、(六)亡き人の面伏なる事いひ出づるもあんなるを、確
なる名告せよ。又人の知らざらむ事の、(七)心に著く思ひ出でられぬべからむを言へ。
さてなむ、いさゝかにても信ずべき」と宣へば、ほろ〳〵といたく泣きて、
物怪「(八)我身こそあらぬさまなれそれながらそらおぼれする君はきみなり
いとつらし〳〵」と泣き叫ぶものから、さすがに物恥したる(九)けはひ變らず、なか
なかいと疎ましく心憂ければ、物言はせじとおぼす。物怪「(一〇)中宮の御事にても、い
と嬉しくかたじけなしとなむ、(一一)天がけりても見奉れど、(一二)道ことになりぬれば、(一三)子
の上までも深く覺えぬにやあらむ。猶自らつらしと思ひ聞えし、(一四)心の執なむとま

(一)葵上の時現れし六條御息所の靈
(二)葵上を取殺したる時の樣子に變らぬのが忌はしくて
(三)紫の側へよせぬ樣にする也
(四)六條御息所か
(五)狂ひたる奴が
(六)故人の面目を傷つくる事
(七)源の心にはつきり思出し得る事を言へ
(八)我こそ生れ變りて仕舞ひたれども君は元の儘の君なれば其方にこそ思當る事がある筈なるに空知らずするとは聞えぬ仕方
(九)六條御息所其儘
(一〇)秋好の事につきても
(一一)草葉のかげから
(一二)別の世界に生れ變りたれば
(一三)我子の事でも深くは感ぜぬならん
(一四)嫉妬の執念丈は殘るものぢやわい



立て添へさせ給ふ。勝れたる驗者どものかぎり召集めて、「限ある御命にてこの世(一)つき給ひぬとも、たゞ今暫しのどめ給へ(二)。不動尊の御本の誓(三)あり。その日數(四)をだにかけ留め奉り給へ」と、頭よりまことに黑烟を立てて、いみじき心を起して加持し奉る。院も、(五)たゞ今一度目を見合せ給へ、いと敢なく限りなりつらむ(六)程をだに、え見ずなりにける事の、悔しく悲しきを、と思し惑へるさま、(七)とまり給ふべきにもあらぬを、見奉る心地ども、たゞ推しはかるべし。いみじき御心(八)のうちを、佛も見奉り給ふにや、月頃更に現れ出で來ぬ物怪、ちひさき童にうつりて、呼ひのゝしる程に、やうやう(九)生きいで給ふにも(一〇)、嬉しくもゆゝしくも思し騷がる。いみじく調ぜられて(一一)、物怪「人は皆去りね。院一所の御耳に聞えむ。(一二)おのれを月頃調じ、侘びさせ給ふが、情なくつらければ、(一三)同じくば思し知らせむと思ひつれど、さすがに命も(一四)堪ふまじく、身を碎きて思し惑ふを見奉れば、今こそかく(一五)いみじき身を受けたれ、(一六)いにしへの心の殘りてこそ、かくまでも參り來たるなれば、物の

(一)葵の命數盡きたりとも
(二)延し給へ
(三)定業盡きたる者にも六月の命を延し與ふるは不動尊の本誓なりとぞ、不動尊立御儀軌「又正報盡者能延六月住」
(四)六ケ月間
(五)源の心、葵が今一度目をあいてくれよ
(六)死目にあはざりし事
(七)源の命が危き様子を
(八)源の
(九)葵が
(一〇)源が
(一一)物怪が僧に祈り伏せられて
(一二)我を此間から祈り伏せて苦しめなさるが恨めしき故
(一三)飽迄葵を取殺して吾恨を源に思ひ知らせてやらんと思ひしかど
(一四)源が命も危い程に心配するを見れば
(一五)惡報によりて蛇などに生れ變りたる也
(一六)人間たりし時の心

れど、(一)同じくば今ひと際及ばざりける宿世よと、なほ覺ゆ。

柏木(二)もろかづら落葉を何にひろひけむ名は睦まじきかざしなれども

と書きすさび居たる、いとなめげなる後言なりかし。

大臣の君は、(三)まれ〳〵渡り給ひて、得ふとも立ちかへり給はず、(四)靜心なく思さるるに、(五)絶え入り給ひぬとて、人參りたれば、更に何事も思しわかれず、御心もくれて(六)渡り給ふ。道の程の心もとなきに、げにかの(七)院は、ほとりの大路まで人たち騒ぎたり。殿の内泣きのゝしるけはひ、いとまが〳〵し。我にもあらで入り給へれば、「日頃は(八)いさゝか隙見え給へるを、俄になむ斯くおはします」とて、侍ふかぎりは、(九)我も後れ奉らじと、惑ふさまども限なし。御修法どもの壇毀ち、僧なども、(一〇)さるべき限こそまかでね、(一一)ほろ〳〵と騒ぐを見給ふに、さらば限にこそはと思し果つるあさましさに、何事かは類あらむ。源「さりとも物怪のするにこそあらめ。いと斯くひたぶるにな騒ぎそ」と鎭め給ひて、いよ〳〵いみじき願どもを

(一)同じものなら女三を得たかりしに、其が叶はざりし我運の拙さよと
(二)桂と葵とは何れも賀茂祭の時頭にかざすものにて離れぬものなれば其を落葉と女三とに比したり、落葉をなぜ娶つたのであらうと後悔する也
【去】紫上危篤、大條御息所の靈出現
(三)たまに女三方へ來たる事故
(四)紫の事が心にかゝりて氣が氣でない處へ
(五)紫が
(六)二條院へ
(七)二條院
(八)病氣が少しよき樣なりしに
(九)自分も一緒に死んで行きたしと
(一〇)詰切りの僧等は居殘れども、一時の祈禱をさせありし僧等は退出せんとて立騒ぐ也
(一一)はら〳〵と

(一)柏木
(二)賀茂祭
(三)同行を
(四)落葉をば只崇めて置くのみにて
(五)賀茂祭の日なれば也
(六)葵を女三に比し、插みを罪にかけたり
(七)賀茂祭の騒ぎ也
(八)落葉も柏木の苦悶の樣子が分り居る故
(九)落葉が
(一〇)柏木の感じ

思されて、宮は、人知れず涙ぐましく思さる。(一)かんの君はまして、なか〳〵なる心地のみ増りて、起き臥し明し暮し侘び給ふ。(二)祭の日などは、物見に爭ひ行く君達かきつれ來て、(三)言ひそゝのかせど、惱ましげにもてなして、ながめ臥し給へり。(四)女宮をば、畏まりおきたる樣にもてなし聞えて、をさ〳〵打解けても見え奉り給はず、我が方に離れ居て、いと徒然に心細く眺めゐ給へるに、(五)童べの持たる葵を見給ひて、

　柏木(六)くやしくぞつみをかしけるあふひ草神のゆるせるかざしならぬに

と思ふもいとなか〳〵なり。世の中(七)靜ならぬ車の音などを、餘所の事に聞きて、人やりならぬつれ〴〵に、暮し難くおほゆ。(八)女宮も、かゝる氣色のすさまじげさも、見知られ給へば、何事とは知り給はねど、恥かしくめざましきに、物思はしくぞ思されける。女房など物見に皆出でて、人少にのどやかなれば、(九)打眺めて、箏の琴なつかしく彈きまさぐりておはするけはひも、(一〇)流石にあてになまめかしけ

(一)色々の場合即ち女三の如き場合に立ちても相手の男に靡き心を通はす人もあれど女三は然らず
(二)女三は
(三)柏木との關係を
(四)女三の病氣の事を源へ通知ありしかば
(五)源氏
(六)紫の病氣
(七)女三方へ
(八)女三の樣子
(九)顏もろくに源にあはせぬを見て
(一〇)源の心
(一一)紫の病氣の噂などして
(一二)紫は今度の病氣で死ぬらしい
(一三)永らく連添ひて今更不實に思はれまいとて
(一四)紫の幼時から手にかけて
(一五)萬事を放擲して紫の病氣にかゝつて居る
(一六)源が何にも知らぬを

きにも從はぬ、したの心添ひたるこそ、(一)とあることかゝることにうち靡き、心かはし給ふ類もありけれ、(二)これは深き心もおはせねど、ひたおもむきに物怖し給へる御心に、たゞ今しも(三)人の見聞きつけたらむやうに、まばゆく恥かしく思さるれば、あかき所にだにえゐざり出で給はず、いと口惜しき身なりけりと、自ら思し知るべし。(四)惱ましげになむとありければ、(五)大臣聞き給ひて、いみじく御心を盡し給ふ(六)御事にうち添へて、又いかにと驚かせ給ひて、(七)わたり給へり。(八)そこはかと苦しげなることも見え給はず、いといたく恥らひ滋りて、(九)さやかにも見合せ奉り給はぬを、(一〇)久しくなりぬる絶間を恨めしくおぼすにや、といとほしくて、(一一)かの御心地のさまなど聞え給ひて、源「(一二)今はのとぢめにもこそあれ。(一三)今さらに疎なるさまを見えおかれじとてなむ、(一四)いはけなかりし程よりあつかひそめて、見放ちがたければ、かう月頃(一五)よろづを知らぬさまに過し侍るぞ。おのづからこの程過ぎば、見なほし給ひてむ」など聞え給ふ。(一六)かく氣色も知り給はぬも、いとほしく心苦しく

(一)柏木の、「あかざりし袖の中にや入りにけんわが魂のなき心地する」の歌をうけて「まことに」といへる也
(二)落葉宮
(三)父の邸へ柏木が
(四)女三の懷妊も定かなるまじき事
(五)柏木の心
(六)人に合す顏もないと
(七)女三に取りての迷惑は勿論
(八)源の妻たる女三を犯したるは特に不埒の事と思ふ故
(九)柏木の心、皇后を犯して
(一〇)是程の苦を感ずるならば殺されても苦しからじ
(一一)源に睨まれる事は
㊃女三宮の苦悶、病氣、柏木の悔恨
(一二)好色の心
(一三)表面は勿體らしく大樣に構へて內心はさうでもなく浮氣なる女こそは

とはかなげに宣ふ御聲の、若くをかしげなるを、聞きさすやうにて出でぬる、魂は、(一)まことに身を離れてとまりぬる心地す。

(二)女宮の御許にもまうで給はで、(三)大殿へぞ忍びておはしぬる。打ち臥したれど目もあはず、(四)見つる夢のさだかにあはむ事も難きをさへ思ふに、かの猫のありし樣、いと戀しく思ひ出でらる。(五)さてもいみじき過しつる身かな、(六)世にあらむ事こそまばゆくなりぬれど、怖ろしくそら恥かしき心地して、ありきなどもし給はず(七)女の御ためは更にもいはず、我が心地にもいとあるまじき事といふ中にも、(八)むくつけく覺ゆれば、思のまゝにもえ紛れありかず。(九)帝の御妻をも取り過ちて、事の聞あらむに、(一〇)かばかり覺えむことゆゑには、身の徒にならむことも苦しく思ゆまじ。然いちじるき罪にはあたらずとも、(一一)この院に目をそばめられ奉らむことは、いと怖ろしく恥かしくおぼゆ。

かぎりなき女と聞ゆれど、(一二)少し世づきたる心ばへまじり、(一三)上はゆゑあり兒めかし

き抱きて出づるに、(一)はては如何にしつるぞと、(二)あきれて思さる。すみの間の屏風をひき廣げて、戸を押しあけたれば、渡殿の南の戸の、昨夜入りしがまだ明きながらあるに、まだ(三)あけぐれの程なるべし、ほのかに(四)見奉らむの心あれば、格子をやをら引きあけて、柏木「斯ういとつらき御心に、(五)現心も失せ侍りぬ。(六)少し思ひのどめよと思されば、哀とだに宣はせよ」と、威し聞ゆるを、(七)いと珍らかなりと思して、物も言はむとし給へど、戰かれて、いとわかくしき御樣なり。たゞ明けに明け行くに、いと心あわたゞしくて、柏木「(八)哀なる夢がたりも聞えさすべきを、(九)かく憎ませ給へばこそ。さりとも(一〇)今思しあはする事も侍りなむ」とて、のどかならず立ち出づる明けぐれ、秋の空よりも心づくしなり。

柏木(一一)おきて行く空も知られぬあけぐれにいづくの露のかゝるそでなり

(一二)ひき出でてうれへ聞ゆれば、(一三)出でなむとするに少し慰め給ひて、

女三(一四)あけぐれの空にうき身は消えななむ夢なりけりと見てもやむべく

(一)終には我をどうするのかしらと
(二)女三が
(三)夜明前の暗さ
(四)女三を
(五)分別もなくなりたり
(六)私に少し氣を落附けよと思はれるならば
(七)飛でもない事と
(八)夢の御話をも申上げたいのであるが、猫の夢の事
(九)憎まるゝ故其もやめる
(一〇)思ひ當る事があろう、女三の懷妊を信じ居る也
(一一)行くべき方もわからぬ此明暮に我此袖の濕りは何がかゝりしぞ
(一二)袖を引出し示して
(一三)柏木の立去る樣子に女三が少し安堵して
(一四)昨夜の事を夢にして我は此儘死んで仕舞ひたし

ざりけると思しなせ。みづから（一）の心ながらも、現心にはあらずなむ覺え侍る」（二）かの（三）おぼえ無かりし御簾のつまを、猫の綱びきたりし夕のことも、聞え出でたり。（四）實にさはたありけむよと口惜しく、ちぎり心憂き御身なりけり。（五）院にも今はいかでかは見え奉らむと、悲しく心ぼそくて、いとをさなげに泣き給ふを、いとかたじけなく哀と見奉りて（六）、（七）人の御涙をさへ拭ふ袖は、いとゞ露けさのみまさる。明けゆく氣色なるに、出でむかた無くなか〳〵なり（八）。柏木「いかゞはし侍るべき。いみじく憎ませ給へば、（九）又聞えさせむ事もありがたきを、唯ひとこと御聲を聞かせ給へ」と、よろづに聞え惱ますも、煩く（一〇）わびしくて、物の更に言はれ給はねば、柏木「果々はむくつけく（一一）こそなり侍りぬれ。又かゝる樣はあらじ」と、いと憂しと（一二）思ひ聞えて、柏木「さらば不用なゝめり（一三）。身を（一四）徒にやはなしはてぬ。いと捨て難き（一五）によりてこそ、かくまでも侍れ。今宵（一六）にかぎり侍りなむもいみじくなむ。つゆにても御心（一七）ゆるし給ふ樣ならば、それに代へつるにても捨て（一八）侍りなまし」とて、掻（一九）

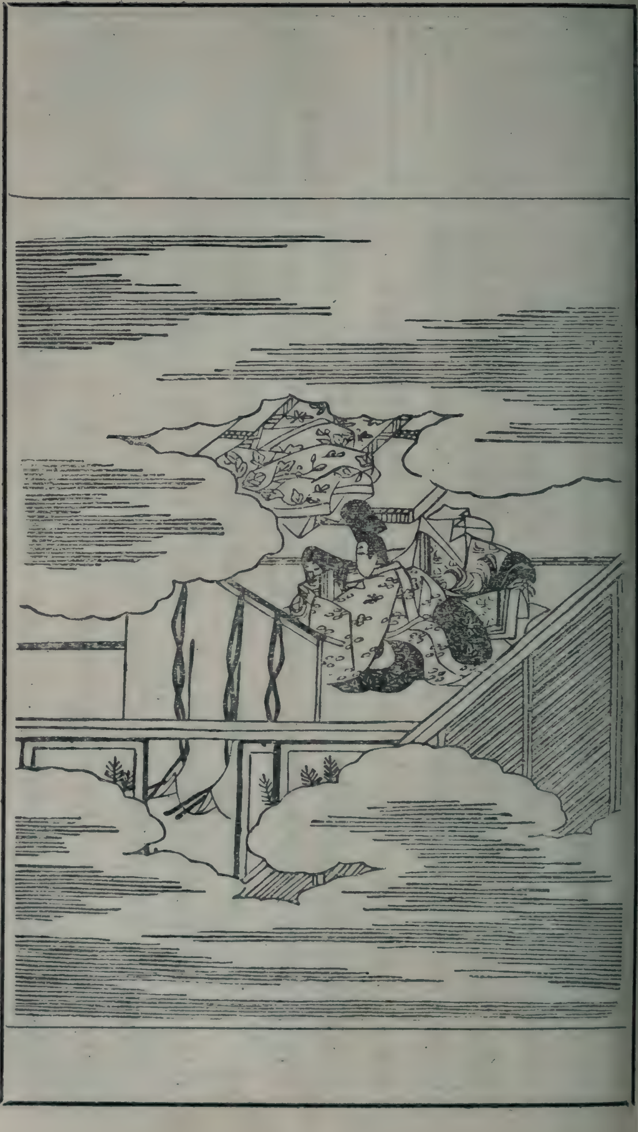
（一）私自身
（二）「かの」の上に「とて」を脱したるなるべし
（三）不慮に起りたる
（四）女三の心
（五）女三の心、今は源に合せる顔もなしと
（六）柏木が
（七）女三の
（八）逢ひて却て嘆を増す
（九）又御目にかゝる事も出來にくかるべければ
（一〇）女三が
（一一）氣味惡く
（一二）女三の仕方をつらく思ひて
（一三）我身は生きて居てもつまらぬ
（一四）命も棄てかねませぬ、「夏蟲の身を徒になすことも一つ思によりてなりけり」
（一五）身を
（一六）我命を
（一七）我に
（一八）命を
（一九）女三を

いと心憂くて、(一)なか〳〵ひたぶるなる心もこそつき侍れ。哀とだに宣はせば、そ
れを承りてまかゝでなむ」と、よろづに聞え給ふ。(二)餘所の思ひやりはいつくしく、
物なれて見え奉らむも恥かしく推し量られ給ふに、唯かばかり思ひつめたる片
端聞え知らせて、なか〳〵(三)かけ〳〵しきすぢはなくて止みなむと思ひしかど、い
とさばかり氣高う恥かしげにはあらで、なつかしくらうたげに、やは〳〵とのみ
見え給ふ御けはひの、あてにいみじく覺ゆることぞ、人に似させ給はざりける。(四)さ
かしく思ひしづむる心も失せて、いづちも〳〵ゐて隱し奉りて、(五)我が身も世に
經る樣ならず、跡絶えて止みなばや、とまで思ひ亂れぬ。唯いさゝかまどろむと
しもなき夢に、(六)この手ならしゝ猫の、いとらうたげに打ち鳴きて來たるを、(七)この
宮に奉らむとて、我が率て來たると覺えしを、何しに奉りつらむと思ふ程に、
おどろきて、いかに見えつるならむと思ふ。宮は、いとあさましく、現とも覺え
給はぬに、胸塞がりて(八)おぼしおぼほるゝを、柏木「猶かく遁れぬ御宿世の、淺から

(一)却て無理に手籠にもしたくなる
(二)柏木の今迄の心をいふ、今迄の推量では女三は端然たる貴女で犯る可らざる所ある人と思はれし故
(三)實際に手を出す樣の事はせずに置かんと思ひ居しに逢つて見れば
(四)此樣子を見て柏木の分別らしく自ら制する心もなくなりて
(五)世間を捨てゝ
(六)柏木の夢の趣也
(七)此猫は女三に奉る積で自分が連れて來た猫ぞと思ひ又奉らねばよかりしとも思ひ居る中に目さめて、獸を夢見るは懷胎の兆なりといふ古諺によりて女三の柏木の胤を孕めるを暗示せる也
(八)途方にくれて居るを

（一）女三の
（二）此れ程に御身に嫌はるべき私とは思はれず
（三）戀慕の情
（四）胸一つにをさめて
（五）朱雀院
（六）私の希望を非常にけしからぬ望として排斥もせられざりしに力を得て
（七）我身の數ならぬ丈に一段人より志は深きを
（八）源に定まりし以上はもう仕方がなしと思ひ返しても
（九）どれ程執心が深いのやら
（一〇）こらへかねて
（一一）身の程も辨へず推參して無禮の體を御目にかけるも
（一二）思遣を缺きたる仕方て
（一三）實際に女三を犯す如き事はせぬ積
（一四）こは柏木ぢやと
（一五）女三の只管に怕れ惑ふは道理なれど
（一六）主ある女に戀するも世間に例のある事なるに無暗に振附けられては

（一）わなゝき給ふさま、水のやうに汗もながれて、物も覺え給はぬ氣色、いと哀にらうたげなり。柏木「數ならねど、（二）いと斯うしも思召さるべき身とは、思う給へられずなむ。昔より（三）おほけなき心の侍りしを、（四）ひたぶるに籠めて止み侍りなましかば、心の中に腐して過ぎぬべかりけるを、なか〳〵漏し聞えさせて、（五）院にも聞召されにしを、（六）こよなくもて離れても宣はせざりけるに、頼をかけそめ侍りて、（七）身の數ならぬひときはに、人より深き志を空しくなし侍りぬる事と、動かし侍りにし心なむ、（八）よろづ今はかひなき事と思う給へ返せど、（九）如何ばかりしみ侍りにけるにか、年月に添へて、口惜しくも、つらくも、むくつけくも、哀にも、いろ〳〵に深く思う給へまさるに、（一〇）せきかねて、（一一）かくおほけなき様を御覽ぜられぬるも、かつはいと（一二）思ひやりなく恥かしければ、（一三）罪重き心も更に侍るまじ」と言ひもてゆくに、（一四）この人なりけりと思すに、いとめざましく怖ろしくて、つゆいらへもし給はず、柏木「（一五）いと理なれど、（一六）世に例なき事にも侍らぬを、珍らかに情なき御心ばへならば、



（一）女三に語りたらば
（二）女三が
（三）賀茂の齋院が祭に先だちて御禊を行ふ儀式
（四）女三より女官を手傳にやる也
（五）御禊の儀式を見物に行かんと
（六）女三の
（七）女三の側近く詰めて居る
（八）按察の情人
（九）小侍從
（一〇）小侍從が
（一一）柏木を
（一二）是程にせずともの事、此句作者の評と見る說と柏木の心と見る說と兩說あり
（一三）女三
（一四）其男が
（一五）惡魔にもそはるゝ心持して
（一六）強ひて
（一七）源にあらぬ別人
（一八）其男が思ひもよらぬ事を言ふ

でられ給ふ御有樣を、少し氣近くて見奉り、思ふ事をも聞え知らせてば、（一）一行（二）の御返などもや見せ給ひ、哀とやおぼし知る、とぞ思ひける。四月十餘日ばかりの事なり。御禊（三）明日とて、齋院（四）に奉り給ふ女房十二人、ことに上臈にはあらぬ、若人童べなど、おのがじし物縫ひ假粧などしつゝ、物見む（五）と思ひ設くるも、とりどりに暇なげにて、御前（六）の方しめやかに、人しげからぬ折なりけり。近く侍ふ（七）按察の君も、時々かよふ源中將（八）せめて呼び出させければ、下りたるまに、唯この侍從（九）ばかり、近くはさぶらふなりけり。よき折と思ひて（一〇）、やをら御帳の東面の御座の端に（一一）すゑ奉りつ。さまでもあるべき事なりやは（一二）。宮は（一三）何心もなく大殿ごもりにけるを、近く男のけはひのすれば、院のおはすると思したるに、打ち（一四）かしこまりたる氣色見せて、床のしもに抱きおろし奉るに、物に（一五）おそはるゝかと、せめて（一六）見上げ給へれば、あらぬ（一七）人なりけり。怪しく（一八）聞きも知らぬ事どもをぞ聞ゆるや。あさましくむくつけくなりて、人召せど近くも侍らはねば、聞きつけて參る者なし。

(一)どれ程の女三の身のひけにもなるまじ
(二)けしからん事として反對もしたれど
(三)斷りきれずして
(四)源氏

⑬柏木密に女三宮に逢ふ、柏木の煩悶
(五)小侍従が柏木に
(六)小侍従より柏木へ
(七)柏木が女三の許へ
(八)柏木自身の心にも
(九)女三に近づきて後の煩悶の種を增す程の擧動に出でんと迄は思はず
(一〇)蹴鞠の會の時の事

を、見奉りなれ給へる御心に、數にもあらず怪しきなれ姿を、打ち解けて御覽ぜられむとは、更に思ひかけぬ事なり。たゞ一言、物越にて聞え知らすばかりは、何(一)ばかりの御身のやつれにかはあらむ。神佛にも思ふ事申すは、罪あるわざかは」と、いみじき誓言をしつゝ宣へば、暫しこそ、いとあるまじき事に言ひかへしけ(二)れ、物深からぬ若人は、人の斯く身にかへていみじく思ひ宣ふを、え否びはてで、(三)

小侍従「若しさりぬべき隙あらば、たばかり侍らむ。(四)院のおはしまさぬ夜は、御几帳のめぐりに人多く侍ひて、御座のほとりに、さるべき人必ずさぶらひ給へば、いかなる折をかは隙を見つけ侍るべからむ」と、侘びつゝ參りぬ。

いかに〳〵と日々に責められ(五)困じて、さるべき折伺ひつけて、(六)消息しおこせたり。悦びながら、いみじくやつれ忍びて(七)おはしぬ。誠に(八)我が心にもいとけしからぬ事なれば、(九)氣近く、なか〳〵思ひ亂るゝことも勝るべき事までは思ひもよらず、唯いとほのかに、(一〇)御衣のつまばかりを見奉りし春の夕の、飽かず世と共に思ひ出

（一）無暗に相手を突き離すこと、蜂吹の義なりといふ
（二）物をひどく言ひすぎる
（三）次第によりては他人に逢ふ事が無いでは無し
（四）女三の身の上は
（五）人から見れば無上の幸寵を極めて居らるゝ樣なれど
（六）朱雀が己の姫宮達の中にて特別に寵愛せられし
（七）源に嫁しては劣等なる身分の女等の中に交りて
（八）物を一圖にきめて仕舞つて退引ならぬ口をきくものではない
（九）女三が人に輕蔑されるからとて、今更もつとよい口をさがす譯にも行くまじ
（一〇）源と女三との中は通常の夫婦關係ではなし
（一一）女三が身の定まらずに居るよりは源に養女の樣な風にして引取つて貰はんとて嫁らした事なれば、源も女三も互に其積で居らるゝならん
（一二）無雙の源を見馴れた女三に、數ならぬ我がみすぼらしきしどけなき姿で逢はんとは思はず

はあらむ。いとむくつけき事をも思し寄りけるかな。何しに參りつらむ」と、（一）はちぶく。柏木「いであな聞き悄く。（二）あまりこちたく物をこそ言ひなし給ふべけれ。世はいと定なきものを、女御、后も（三）あるやうありて、物し給ふたぐひ無くやは。ましてその（四）御有樣よ、（五）思へばいと類なくめでたけれど、内々は心やましきことも多かるらむ。（六）院の、あまたの御中に、又竝なき樣にならはし聞え給ひしに、（七）さしも等しからぬきはの御方々にたち交り、めざましげなる事もありぬべくこそ。いとよく聞き侍りや。世の中はいと常なきものを、（八）ひときはに思ひ定めて、はしたなくつききりなる事な宣ひそよ」と宣へば、小侍從「（九）人に貶され給へる御有樣とて、めでたき方に改め給ふべきにやは侍らむ。（一〇）これは世の常の御有樣にも侍らざめり。ただ（一一）御後見なくて、漂はしくおはしまさむよりは親ざまに、と讓り聞え給ひしかば、互にさこそ思ひかはし聞えさせ給ひためれ。あいなき御貶め言になむ」と、はてはては腹立つを、萬に言ひこしらへて、柏木「まことは、（一二）さばかり世になき御有樣

れ」と、打ちうめき給へば、小侍從は、「いで、(一)あなおほけな。(二)それをそれとさし置き奉り給ひて、又いかやうに限なき御心ならむ」と言へば、うちほゝ笑みて、柏木「(三)さこそは物はありけれ。(四)宮にかたじけなく聞えさせ及びける樣は、院にも内裏にも聞召しけり。などてかは、(五)さても侍はざらまし、となむ事の序には宣はせける。いでや、たゞ(六)今少しの御勞あらましかば」などいへば、小侍從「いと難き御事なりや。(七)御宿世とかいふ事侍るなるをもとにて、(八)かの院のことに出でて懇に聞え給はむに、立ち竝び妨げ聞えさせ給ふべき、御身のおぼえとや思されし。(九)この頃こそ、少しもの〳〵しく、(一〇)御衣の色も深くなり給へれ」といへば、いふかひな(一一)くはやりかなる口强さに、え言ひはて給はで、柏木「今はよし、(一二)過ぎにし方をば聞えじや。唯かく(一三)有難きもののひまに、(一四)氣近き程にて、この心の中に思ふ事のはし、少し聞えさせつべくたばかり給へ。(一五)いとおほけなき心はすべて、よし見給へ、いと怖ろしければ、思ひ離れて侍り」と宣へば、小侍從「これよりおほけなき心は、如何

(一)勿體ない
(二)既に落葉を娶りて置きながら尚女三を思ひ懸けるとは何といふ慾に際限のない御心ぞ
(三)物は其樣なものぢや
(四)女三の聟になりたしと柏木が望みたる事は朱雀も帝も御存知なり
(五)柏木に與へても苦しくないと
(六)も少し其方が骨折りさへすれば出來る事ぢや
(七)緣といふものが第一にて、次には身分の相違がある
(八)源が女三を懇望するに對抗する事の出來る御身分と思はれるか
(九)柏木が
(一〇)中納言は三位相當にて淺紫の袍を著す
(一一)小侍從がぽん〳〵と言ひまくる故
(一二)前の事は言ふまい
(一三)得難き隙なれば
(一四)女三に近づきて
(一五)けしからん了簡などは決して出さぬ

だ宮(一)幼くおはしましゝ時より、(二)いと清らになむおはします、帝のかしづき奉り給ふさまなど、聞きおき奉りて、かゝる思もつきそめたるなりけり。(三)かくて院も離れおはします程、人目少くしめやかならむを推量りて、小侍従を迎へ取りつゝ、いみじう語らふ。柏木「昔より、かく命も堪ふまじく思ふ事を、(四)かゝる親しきよすがありて、御有様を聞き傳へ、堪へぬ心の程をも(五)聞召させて頼もしきに、更にそのしるしの無ければ、いみじくなむつらき。(六)院の上だに、かく(七)數多にかけ〲しくて、(八)人におされ給ふやうにて、一人大殿籠る夜な〲多く、徒然にて過し給ふなり、など人の奏しけるついでにも、少し(九)悔いおぼしたる御氣色にて、(一〇)同じくば、たゞ人の心安き後見を定めむには、まめやかに仕う奉るべき人をこそ、定むべかりけれ、と宣はせて、(一一)女二の宮のなか〲後やすく、行末ながきさまにて物し給ふなる事と、宣はせけるを傳へ聞きしに、いとほしうも口惜しうも、いかゞ思ひ亂るゝ。げに(一二)同じ御筋とは尋ね聞えしかど、それはそれとこそ覺ゆるわざなりけ

(一)女三
(二)柏木の聞く噂也
(三)紫の病氣騒にて源も女三に遠ざかり居る時分
(四)乳母の關係をいふ
(五)女三の耳に入れて
(六)朱雀
(七)源が多くの婦人に關係して居て
(八)女三が紫に壓倒されゐる状態で
(九)女三を源に嫁せしめたる事を後悔したる御樣子で
(一〇)どうせ平人に嫁せしめる位なら
(一一)女二は柏木に嫁して安心ぢや
(一二)同じ姉妹といふても格別に違ふものぢやわい

(一)源の心
(二)直らぬのかしらと
(三)どこが悪いといふでもなし
(四)源が
〔十二〕柏木、落葉宮を娶る、猶女三宮を慕ひて小侍從に謀る
(五)柏木
(六)帝が
(七)羽振よき人
(八)女三に對する戀の
(九)女三の姉、落葉宮と名づく
(一〇)落葉は
(一一)柏木が憚る所なく
(一二)落葉の輕蔑氣味なり
(一三)元から思込んで居る女三の方に矢張熱心深き故
(一四)「我が心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」
(一五)女三への戀
(一六)女三の乳母名は侍從といふ女の娘
(一七)柏木
(一八)昔より柏木が女三の様子は耳近く聞き居て

日を經給へば、(一)猶如何におはすべきにか、(二)よかるまじき御心地にや、と思し歎く。御物怪などいひて出で來るもなし、惱み給ふ様(三)そこはかと見えず、たゞ日に添へてよわり給ふ様にのみ見ゆれば、いともく悲しくいみじく(四)思すに、御心の暇も無げなり。

まことや(五)衛門督は、中納言になりにきかし。今の御世には、いと親しく(六)思されて、いと時の人(七)なり。身のおぼえ勝るにつけても、(八)思ふ事のかなはぬ憂はしさを思ひ侘びて、(九)この宮の御姉の二の宮をなむ得奉りてける。(一〇)下﨟の更衣腹におはしましければ、(一一)心やすき方まじりて、思ひ聞え給へり。(一二)人がらも、なべての人に思ひ準ふれば、けはひこよなくおはすれど、(一三)もとよりしみにし方こそなほ深かりけれ。(一四)慰め難き姨捨にて、人目に咎めらるまじきばかりに、もてなし聞え給へり。猶かの(一五)下の心忘れず小侍從といふかたらひ人は、(一六)宮の御侍從の乳母の女なりけり。その乳母の姉ぞ、(一七)このかんの君の御乳母なりければ、(一八)早くより氣近く聞き奉りて、ま

見奉りあつかひ給ふ。紫「(一)たゞにもおはしまさで、物怪などいと怖ろしきを、(二)早參り給ひね」と、苦しき御心地にも聞え給ふ。(三)若宮のいと美しうておはしますを見奉り給ひても、いみじく泣き給ひて、紫「おとなび給はむをえ見奉らずなりなむ事。(四)忘れ給ひなむかし」と宣へば、女御せきあへず悲しと思したり。明「ゆゝしく、かくな思しそ。さりとも(五)けしうは物し給はじ。(六)心によりなむ、人はともかくもある。おきて廣きうつはものには、幸もそれに隨ひ、狹き心ある人は、(八)さるべきにて、(七)貴き身となりても、ゆたかに寛べる方はおくれ、急なる人は久しく常ならず、心ぬるくなだらかなる人は、(九)長きためしなむ多かりける」など、佛神にも(一〇)この御心ばせのありがたく罪輕きさまを申しあきらめさせ給ふ。御修法の阿闍梨たち、(一一)夜居などにても、近く侍ふかぎりのやむごとなき僧などは、いとかく思し惑へる御けはひを聞くに、いといみじく心苦しければ、(一二)心を起して祈り聞ゆ。少しよろしきさまに見え給ふ時五六日うちまぜつゝ、また重り煩ひ給ふこと、いつとなくて月

(一)懐胎の身で
(二)宮中へ歸り給へ
(三)明石姫君腹の女一宮
(四)御生長の後は我を覺えては居られぬならん
(五)死ぬ樣な事はない
(六)人の運命は心次第のものぢや
(七)寛大なる人には
(八)運よくて
(九)長生する
(一〇)紫の心立が珍らしく罪のなき趣を願文に認めて祈る
(一一)夜詰の僧
(一二)出精して

(一)紫が死なれたらば源も出家するに違なしと
(二)夕霧
(三)夕霧が
(四)兼々願の出家の事を許されぬが恨めしと紫が源に怨を言へども
(五)源の心
(六)我こそ出家の望は深きなれど、其方が跡に殘りて寂しからんと思ひて
(七)源の心
(八)女三方へは一寸も行かず
(九)六條院
(一〇)今迄の六條院の全盛は畢竟紫一人の勢力なりし樣に思はる
(一一)明石姫君も二條院へ行きて
(一二)源と共に

院も聞し召し歎く。この人亡せ給はば、院も必ず世を背く御本意遂げ給ひてむと、(二)大將の君なども、(一)心を盡して見奉りあつかひ給ふ。御修法などは、大方のをばさるものにて、取り分きて(三)仕う奉らせ給ふ。いさゝか物思し分くひまには、紫「聞ゆる(四)事をさも心憂く」とのみ怨み聞え給へど、(五)限ありて別れはて給はむよりも、目の前に我が心とやつしすて給はむ御有樣を見ては、更に片時堪ふまじくのみ、惜しく悲しかるべければ、源「昔より、(六)自らぞかゝる本意深きを、とまりてさうぐ〳〵しく思されむ心苦しさに、ひかれつゝ過すを、さかさまに打捨て給はむとや思す」とのみ、惜み聞え給ふに、(七)げにいと頼みがたげに弱りつゝ、限のさまに見え給ふ折々多かるを、いかさまにせむ、と思し惑ひつゝ、(八)宮の御方にも、あからさまにわたり給はず。御琴どももすさまじくて、皆ひき籠められ、(九)院のうちの人々は、皆あるかぎり二條院につどひ參りて、この院には火を消ちたる樣にて、唯女どちおはして、(一〇)人ひとりの御けはひなりけりと見ゆ。(一一)女御の君もわたり給ひて、(一二)諸共に

（一）源が紫に今年は特に愼み給へと戒めし事
（二）源が
（三）紫方にて源へ差上げたれど源が食べんともせず
（四）紫が
（五）源が
（六）何所が特に惡いと云ふ事なく
（七）假令重病でもめきめきとよくなる樣子が見えれば賴もしけれど、紫のは格別惡くもなく一向よくもならぬ故源が心細く思ふ也
（八）朱雀院の賀
（九）朱雀院
（一〇）源が
（一一）六條院

れば、昨日（一）聞え給ひし御つゝしみのすぢなど思し合せ給ひて、いと怖ろしくおぼ（二）さる。御粥などこなた（三）に參らせたれど、御覽じも入れず、日一日添ひおはして、よろづに見奉り歎き給ふ。（四）はかなき御菓物をだに、いと物憂くし給ひて、起きあがり給ふこと絶えて日頃經ぬ。如何ならむと（五）思し騷ぎて、御祈ども數知らず始めさせ給ふ。僧召して、御加持などせさせ給ふ。（六）そこどころともなく、いみじく苦しくしたまひて、胸は時々おこりつゝ煩ひ給ふさま、堪へ難く苦しげなり。樣々の御つゝしみ限なけれど、しるしも見えず。（七）重しと見れど、おのづからおこたる差別あるはたのもしきを、いみじく心細く悲しと見奉り給ふに、他事思されねば、（八）御賀の響もしづまりぬ。（九）かの院よりも、かく煩ひ給ふよし聞召して、御とぶらひいと懇に、たび〳〵聞え給ふ。同じさまにて、二月も過ぎぬ。言ふかぎりなく（一〇）思し歎きて、試に所をかへ給はむとて、二條院に渡し奉り給ひつ。（一一）院の内ゆすり滿ちて、思ひ歎く人多かり。冷泉

㊉ 紫上病氣、二條院に移る、源氏の憂悶

(一)對には、例のおはしまさぬ夜は、宵居し給ひて、人々に物語など讀ませて聞き給ふ。(二)かく、世のたとひにいひ集めたる昔語どもにも、あだなる男、色ごのみ、二心ある人にかゝづらひたる女、かやうなる事を言ひ集めたるにも、遂にはよる方(三)ありてこそあゝめれ、(四)怪しく浮きても過しつる有樣かな。げに、宣ひつる(五)やうに、人より異なる宿世もありける身ながら、人の忍び難く飽かぬ事にする物思ひ放れぬ身にてや止みなむとずらむ、味氣なくもあるかな、など思ひつゞけて、夜更けて大殿籠りぬる曉方より、御胸をなやみ給ふ。人々見奉りあつかひて、(六)御消息聞えさせむと聞ゆるを、紫「いと便ない事」と制し給ひて、堪へ難きをおさへて明し給ひつ。御身もぬるみて、(七)御心地もいと惡しけれど、(八)院も頓に渡り給はぬ程、斯くなむとも聞えず。(九)女御の御方より御消息あるに、かく悩ましくてなむと聞え給へるに、驚きてそなたより(一〇)聞え給へるに、胸つぶれて急ぎわたり給へるに、いと苦しげにておはす。源「いかなる御心地ぞ」とて探り奉り給へば、いと熱くおはす

(一)紫上は源の留守には夜長く起きて居て
(二)紫の心
(三)どれか一人の女に定まつて仕舞ふ
(四)自分は其と違ひて何時迄も身分がきまらずに過し來し事かな
(五)源の
(六)源へ
(七)熱が出て
(八)源も一寸とは女三から歸つて來ぬ間
(九)明石姫君より紫へ手紙の來た其返事に
(一〇)姫君から源へ知らせたれば

(一)其に比べては何とも譬へ方なき自分の明放したる性質をどう思はれんかと恥かしけれど
(二)明石女御
(三)源の心、紫が從來はあれ程けしからぬ者に思ひし明石上を今では心易く附合ふも明石姫君を眞實に愛するからの事と
(四)與底が無いでは無いが
(五)打解くる所と打解けぬ所と
(六)解しがたし、或は「けしき」は「けしろ」の誤なるべしといふ
(七)女三に琴のうまく彈けたる喜を言はんとて
(八)源が女三へ
(九)女三は自分に氣兼する女のありなしなどは氣がつかず
(一〇)女三が熱心に源に琴を習ふ故にいふ也
(一一)先生といふ者には滿足を與へねばならぬ
(一二)我が安心が出來るほど上手になられた

のづから氣色見る折々もあるに、いと打解けにくゝ、心はづかしき有樣しるきを、(一)いとたとしへなき裏なさを、いかに見給ふらむとつゝましけれど、女御(二)はおのづから思し許すらむとのみ思ひてなむ」と宣ふ。(三)さばかりめざましと、心おき給へりし人を、今はかくゆるして見えかはしなどし給ふも、女御の御ための眞心なるあまりぞかしと思すに、いとありがたければ、源「君こそは、さすがに(四)隈なきにはあらぬものから、人により事に從ひ、いとよく(五)二みちに心づかひはし給ひけれ。更にこゝら見れど、御有樣に似たる人はなかりけり。いとけしき(六)こそ物し給へ」と、ほゝ笑みて聞え給ふ。源(七)「宮に、いとよく引き取り給へりしことのよろこび聞えむ」とて、夕つかたわたり(八)給ひぬ。(九)我に心おく人やあらむとも思したらず、いといたく若びて、ひとへに御琴に心入れておはす。源(一〇)「今は暇ゆるして打ち休ませ給へかし。(一一)物の師は心ゆかせてこそ。いと苦しかりつる日頃のしるしありて、(一二)後安くなり給ひにけり」とて、御琴もおしやりて大殿籠りぬ。

(一)お互に打解けて
(二)打解けて輕蔑されてはならぬ杯と思ひて餘り體裁を作り居し中に
(三)源との浮名を謡はれて
(四)御息所の人柄から言ひても、あの様な事になりしは源の罪の様に思はれて
(五)かまはず
(六)御息所が草葉の陰で機嫌を直されしならん
(七)明石姫君の母明石上は
(八)輕き身分と頭から馬鹿にして
(九)外の女達の事は見ぬ事故わからぬが
(一〇)明石上をばちよいちよいと様子を見る事もあるが

く怨ぜられしこそ、いと苦しかりしか。心ゆるびなく恥かしくて、我も人も(一)うちたゆみ、朝夕の睦をかはさむには、いとつゝましき所のありしかば、打ちとけて(二)は見おとさるゝ事やなど、あまりつくろひし程に、やがて隔たりし中ぞかし。いとあるまじき名を立ちて(三)、身の淡々しくなりぬる歎を、いみじく思ひしめ給へりしがいとほしく、げに人がら(四)を思ひしも、我が罪ある心地して止みにし慰に、中宮を斯く、さるべき御契とはいひながら、取りたてて、世の譏人の怨をも(五)知らず、心よせ奉るを、(六)かの世ながらも見なほされぬらむ。今も昔も、なほざりなる心のすさびに、いとほしく悔しき事も多くなむ」と、來し方の人の御上、少しづつ宣ひ出でて、源「(七)内裏の御方の御後見は、何ばかり(八)の程ならずと侮りそめて、心安きものに思ひしを、なほ心の底見えず、際なく深き所ある人になむ。うはべは人に靡き、おいらかに見えながら、打解けぬ氣色したに籠りて、そこはかとなく恥かしき所こそあれ」と宣へば、紫(九)「こと人は見ねば知らぬを、(一〇)これは、まほならねど、お

を、見はて給へ」とのみ聞え給ふを、例のことと心やましくて、(一)涙ぐみ給へる氣色を、いと哀と見奉り給ひて、よろづに聞え紛らはし給ふ。源「多くはあらねど、人(二)の有樣の、とり〴〵に口惜しくはあらぬを、見知りゆくまゝに、誠の心ばせおい(三)らかに落ち居たるこそ、いと難きわざなりけれとなむ思ひ果てにたる。(四)大將の君を、幼かりし程に見そめて、やむごとなくえさらぬ(五)すぢには思ひしを、常に中よからず、隔ある心地して止みにしこそ、今思へばいとほしく悔しくもあれ。又我が過にのみもあらざりけりなど、心ひとつになむ思ひ出づる。(六)うるはしく重りかにて、そのことの(七)飽かぬかなと覺ゆる事もなかりき。唯いとあまり亂れたる所なく、(八)すく〳〵しく、少し賢しとやいふべかりけむと、思ふには頼もしく、見るには煩はしかりし人ざまになむ。中宮の御母御息所(九)なむ、樣ことに心深くなまめかしき例には、まづ思ひ出でらるれど、(一〇)人見えにくゝ、苦しかりし心ざまになむありし。怨むべきふしぞ、げに理と(一一)覺ゆるふしを、やがて長く思ひつめて、深

(一)紫が
(二)女の氣象樣子のそれぞれ一節あるを
(三)穩かに落附きたるは中々得難きものと
(四)葵上
(五)疎末には出來ぬ
(六)葵の性質
(七)是ぞといふ不足の點はなかりき
(八)強く
(九)六條御息所
(一〇)機嫌取りにくゝ
(一一)怨むも尤なる事柄なれど

(一)紫が源の娘の樣にして育てられたる如き氣樂さは中々得がたし
(二)氣苦勞のなき點に於ては
(三)女三
(四)我が紫に對する一層の厚き情を
(五)よもや分らぬ筈はないと思ふ
(六)數ならぬ私には過ぎたる果報と人には見ゆべけれど
(七)物歎かしさのあるのが却て私の祈禱になりて今迄命もつゞきしならん
(八)言ふべき事を多く言ひ殘したる如き樣子
(九)餘命幾許もなき心持
(一〇)尼になる事
(一一)源自身が
(一二)紫に對する情の如何に深きかを

につけても心みだれ、人に爭ふ思の絶えぬも、安げなきを、(一)親の窓のうちながら過し給へるやうなる、心やすきことはなし。(二)そのかたは、人に勝れたりける宿世とはおぼし知るや。思の外に、(三)この宮のかく渡り物し給へるこそは、なま苦しかるべけれど、それにつけては、いとゞ加ふる志のほどを、御自らの上なれば、思し知らずやあらむ。物の心も深く(四)知り給ふめれば、(五)さりともとなむ思ふ」と聞え給へば、紫「宣ふやうに、物は(六)かなき身には過ぎにたる餘所の覺はあらめど、心に(七)堪へぬ物歎かしさのみうち添ふや、さは自らの祈なりける」とて、殘(八)おほげなるけはひ恥かしげなり。紫「まめやかには、いと(九)行先すくなき心地するを、今年もかく知らず顔にて過すは、いと後めたくこそ。(一〇)さきざきも聞ゆる事、いかで御ゆるしあらば」と聞え給ふ。源「それはしも、あるまじき事になむ。さてかけ離れ給ひなむ世に(一一)殘りては、何のかひかあらむ。唯かく何となくて過ぐる年月なれど、旦暮のへだてなき嬉しさのみこそ、勝すことなく覺ゆれ。なほ(一二)思ふさま異なる心の程

(一)源が氣のつかぬ事もあるべければ
(二)紫が自分で考へて
(三)大きなる法事などをする樣ならば
(四)紫の伯父、北山の僧都、今は既に死したる也
(五)特別の事でなくても祈禱を賴むにはよき人なりしに
(六)他人に勝れて父帝の殊寵を被り今の榮華も類稀なり
(七)父帝母后葵などを先立てたるをいふ
(八)藤壺に對する戀などをいふ
(九)其代りに思の外命も長く
(一〇)須磨の退居の時の別居を除きては其前も其後も
(一一)高貴の人の中に交るにつけても

りも取分きて、今年は愼み給へ。物騷しくのみありて、(一)思ひ至らぬこともあらむを、なほ(二)思しめぐらして、(三)大きなる事どもし給はば、おのづからせさてむ。(四)故僧都の物し給はずなりにたるこそ、いと口惜しけれ。(五)大方にて打ち頼まむにも、いとかしこかりし人を」など宣ひ出づ。源「自らは、幼くより、(六)人に異なるさまにて、ことごとしく生ひ出でて、今の世のおぼえ有樣、來し方にたぐひ少くなむありける。されど又世に勝れて、悲しきめを見る方も、人には勝りけりかし。まづは(七)思ふ人にさまざま後れ、殘りとまれる齡の末にも、飽かず悲しと思ふこと多く、味氣なく(八)然るまじき事につけても、怪しく物思はしく、心におかず覺ゆる事添ひたる身にて過ぎぬれば、(九)それにかへてや、思ひし程よりは、今までもながらふるならむとなむ思ひ知らるる。君の御身には、(一〇)かの一節の別より、あなたこなた、物思とて心亂り給ふばかりの事あらじとなむ思ふ。后といひ、ましてそれより次々は、やむごとなき人といへど、皆必ず安からぬ物思添ふわざなり。(一一)高きまじらひ

(一)琴だけでも敎へて、其をせめて特に女三を預けられたるしるしにせんと
(二)紫の子供時代に源が世話せし事
(三)其時分は暇もなくて自ら敎へもせざりし紫の琴が、今日押出して見ると大に面目を施して
(四)夕霧の感服したる樣子も
(五)音樂の道につけても、以下紫に對する源の感
(六)孫たちの世話
(七)引受けて
(八)分らぬ事
(九)紫の
(一〇)斯樣に缺點なき人は早死するものと
(一一)源が
(一二)紫の如く總てに缺點なきは
(一三)連添ひ來りし
(一四)紫の息災延命の祈禱

いとほしく、さりともさばかりの事をだに、かく取りわきて御後見にと、あづけ給へるしるしにはと、(一)思ひ起してなむ」など聞え給ふついでにも、源「(二)昔世づかぬ程をあつかひ思ひしさま、(三)その世には暇もありがたくて、心長閑に取りわき敎へ聞ゆる事などもなく、近き世にも、何となく次々まぎれつゝ過して、聞きあつかはぬ御琴の音の、出榮したりしも面目ありて、(四)大將のいたく傾き驚きたりし氣色も、思ふやうに嬉しくこそありしか」など聞え給ふ。(五)かやうの筋も、今は又おとなおとなしく、(六)宮達の御あつかひなど、(七)取持ちてし給ふさまも、至らぬことなく、すべて何事につけても、もどかしく(八)たど〳〵しき事まじらず、ありがたき(九)人の御有様なれば、(一〇)いとかく具しぬる人は、世に久しからぬ例もあンなるをと、ゆゝしきまで思ひ聞え給ふ。樣々なる人の有樣を(一一)見集め給ふまゝに、(一二)取り集め足らひたる事は、誠に類あらじとのみ思ひ聞え給へり。今年は三十七にぞなり給ふ。(一三)見奉り給ひし年月のことなども、哀に思し出でたる序に、源「(一四)さるべき御祈など、常よ

(一)琴を
(二)祖母に
(三)しみ／＼習ひ取りもせず
(四)夕霧の前では
(五)雲井雁が流石お人よし一方でもなく

⊕源氏、紫上と往事を語り、六條院の婦人達を評す

(六)源氏は紫の方へ歸る
(七)紫は女三方に止りて
(八)わが方へ歸れり
(九)女三方にて
(一〇)褒めにくかりしが
(一一)あの位一生懸命に敎へなさるからは上達もする筈
(一二)源の自評
(一三)女三
(一四)琴だけは源が必ず女三に敎ふるならんと仰せらるゝ由故それが御氣の毒で

大宮の敎へ(一)聞え給ひしかど、心にもしめ給はざりし程に、(二)わかれ奉り給ひにしかば、(三)ゆるらかにも彈き取り給はで、(四)男君の御前にては、恥ぢて更にひき給はず、何事も唯おいらかに、打ちおほどきたる樣して、子どものあつかひを、暇なくつぎつぎし給へば、をかしき所もなく覺ゆ。(五)さすがに腹惡しくて、物妬打ちしたる、愛敬づきて美しき人ざまにぞ物し給ふめる。

(六)院は、對へわたり給ひぬ。上は、(七)とまり給ひて、宮に御物語など聞え給ひて、曉にぞ(八)わたり給へる。日高うなるまで大殿ごもれり。源「宮の御琴の音は、いとうるせくなりにけりな。いかゞ聞きたまひし」と聞えたまへば、紫「初つかた、彼方に(九)てほの聞きしは、(一〇)いかにぞやありしを、いとこよなくなりにけり。いかでかは、(一一)かく他事なく敎へ聞え給はむには」といらへ聞え給ふ。源「然かし。手をとる／＼、(一二)覺束なからぬ物の師なりかし。これにも、(一三)うるさく煩はしくて、暇いるわざなれば、敎へ奉らぬを、院にも内裏にも、琴は(一四)さりとも習はし聞ゆらむと宣ふと聞くが

(一)鬚黑の子
(二)夕霧の子
(三)紫より
(四)夕霧
(五)女三
(六)御褒美ならば先づ琴の師たる我を丁寧に扱ひて第一に我に下さる筈と源の戲言也
(七)源に
(八)皆退出際の事なるに
(九)源の笛に合せたる也
(一〇)女三の琴夕霧の笛も、源の教を受けたるものは何れも無二の伎倆なるを見て、源自身の才藝を自ら貴く思ふ
(一一)夕霧
(一二)わが子供
(一三)紫上の彈きし也

無きを、聞きわく程の耳敏からぬたどたどしさに、いたく更けにけり。心無きわざなりや」とて、笙の笛(一)吹く君に、土器さし給ひて、御衣脱ぎてかづけ給ふ。(二)横笛の君には、(三)こなたより、織物の細長に、袴など事々しからぬさまに、氣色ばかりにて、大將の君(四)には、宮(五)の御方より杯さし出でて、宮の御裝束一領かづけ奉り給ふを、大臣、源「あやしや。(六)物の師をこそまづは物めかし給はめ。うれはしき事なり」と宣ふに、宮のおはします御几帳のそばより、御笛を奉る。(七)うち笑ひ給ひてとり給ふ。いみじき高麗笛なり。少し吹きならし給へば、(八)皆立出で給ふほどに、大將立ちとまり給ひて、御子の持ち給へる笛を取りて、いみじく面白く(九)吹き立て給へるが、いとめでたく聞ゆれば、(一〇)いづれもいづれも、皆御手を離れぬものの傳へ傳へ、いと二なくのみあるにてぞ、我が御才の程ありがたく思し知られける。

(一一)大將殿は、(一二)君達を御車に乘せて、月の澄めるにまかで給ふ。道すがら、(一三)箏の琴のかはりていみじかりつる音も、耳につきて戀しく覺え給ふ。わが北の方は、故

(一)絃を押へて揺る音
(二)箏の彈方は
(三)右の無名指中指食指の三つを次第にはねて三聲あるをいふとぞ
(四)呂より律にうつるをいふとぞ
(五)女三が彈く也
(六)搔手、片垂、水宇瓶、蒼海波、雁鳴調、以上五ケ條のしらべ也とぞ
(七)「はら」又「はち」に作る、未詳
(八)女三の琴の用ひ樣源の教へし通にして
(九)源が
(一〇)夕霧髭黒等の子ども
(一一)短時間に切上ぐる積なりしに
(一二)やめるのが惜しき

うやうさしあがるまゝに、花の色香もてはやされて、げにいと心にくき程なり。箏の御琴は、女御の御爪音は、いとらうたげになつかしく、母君の御けはひ加はりて、(一)ゆの音ふかく、いみじくすみて聞えつるを、(二)この御手づかひは又様かはりて、ゆるらかに面白く、聞く人たゞならず坐はしきまで、愛敬づき、(三)輪の手など、すべて更に、いとかどある御琴の音なり。(四)かへり聲に、皆調べかはりて、律のかきあはせども、懐かしく今めきたるに、(五)琴は、(六)五個の調、あまたの手の中に、心留めて必ずひき給ふべき、五六のはらを、(七)いと面白くすまして彈き給ふ。更にかたほならず、いとよくすみて聞ゆ。春秋よろづの物にかよへる調にて、通はしわたしつゝ彈き給ふ。(八)心しらひ教へ聞え給ふさま違へず、いとよく辨へ給へるを、いと美しくおもだたしと思ひ聞え給ふ。(一〇)この君達のいとうつくしく吹き立てて、(九)切に心入れたるを、らうたがり給ひて、源眠たくなりにたらむに、今宵の遊は長くはあらで、(一一)僅なるほどにと思ひつるを、(一二)とゞめ難き物の音どもの、いづれとも

りもなき物なゝなり。況むや、多くの調、煩はしき曲多かるを、(一)心に入りし盛には、世にありとあり、(二)こゝに傳はりたる譜といふものの限を、遍く見合せて、後後は師とすべき人もなくてなむ、好み習ひしかど、なほ(三)あがりての人には、當るべくもあらじをや。ましてこの後といひては、傳はるべき末もなき、いと哀になむ」など宣へば、大將、げにいと口惜しく恥かしとおぼす。源「(四)この御子達の御中に、思ふやうに生ひ出で給ふものし給はば、その世になむ、(五)そもさまでながらへ留るやうあらば、(六)いくばくならぬ手の限も、留め奉るべき。(七)二の宮今より(八)氣色ありて見え給ふを」など宣へば、(九)明石の君は、いとおもだたしく、涙ぐみて聞き居給へり。

女御の君は、箏の御琴をば、(一〇)上にゆづり聞えて、寄り臥し給ひぬれば、(一一)あづまを大臣の御前に參りて、少し氣近き御遊になりぬ。「(一二)葛城」あそび給ふ。花やかにおもしろし。(一三)大臣をりかへし謠ひ給ふ御聲、譬へむかたなく愛敬づきめでたし。月や

(一)我が琴に熱中せし當時は
(二)支那より傳來せる
(三)昔の人には
(四)源の孫たちの中に然るべく生長する人あらば其時に
(五)其も其時迄自分が生きて居ればであるが
(六)どれ程もなき我が彈法を敎へ置くべし
(七)明石姫君腹
(八)前途有望らしき樣子が見える
(九)明石上
(一〇)紫上
(一一)和琴を源にすゝめて
(一二)催馬樂、葛城「葛城の寺の前なるや豐浦の寺の西なるや。榎葉井に白玉しづくや眞白玉しづくやをしとゞとしとゞ。しかしてば國ぞ榮えんや家ぞ富せんやをしとゞとしとゞ」
(一三)源氏

知らぬ國にすぐし、身をなきになして、このことをまねび取らむと惑ひてだに、爲得るは難くなむありけるを、げにはた、あきらかに(一)空の月星をうごかし、(二)時ならぬ霜雪を降らせ、雲雷をさわがしたるためし、あがりたる世にはありけり。かく限なきものにて、そのまゝに習ひとる人のありがたく、世の末なればにや、(三)いづこのそのかみの片端にかあらむ。されどなほかの(四)鬼神の耳とゞめ、かたぶき初めにけるものなればにや、(五)なま〳〵に學びて、思ひかなはぬ類ありけるのち、これをひく人よからずとかいふ難をつけて、うるさきまゝに、今はをさ〳〵傳ふる人なしとか。いと口惜しきことにこそあれ。琴の音をはなれては、何事をか(六)物を整へ知るしるべとはせむ。げに、萬の事衰ふるさまは易くなりゆく世の中に、(七)一人出で離れて、心を立てて、唐土高麗と、この世に惑ひありき、親子を離れむことは、世の中にひがめる者になりぬべし。(八)などか斜にて、なほこの道をかよはし知るばかりの端をば、知りおかざらむ。調ひとつに(九)手を彈きつくさむ事だに、はか

(一)未詳
(二)宇津保物語に、俊蔭琴を彈ずれば六月の半に霜雪の如くに凝りて降ると見えたり
(三)今の人の手には昔の名人の片端も殘っては居らぬ
(四)琴は最初に鬼神の感動したるものなる故か
(五)生中に習ふ時は却てあしき事ありし故
(六)樂器
(七)宇津保物語の俊蔭の身の上をいふなるべし
(八)俊蔭の如き行をしては變人になつて仕舞ふべけれど、其程にせずとも大抵に琴の大意に通ずる位の稽古はしたきものぢや
(九)十分に彈方を習ひ取る

ぬ弟子どもなりかし。琵琶(一)はしも、こゝに口入るべき事まじらぬを、さ言へど、物のけはひ異なるべし。覺え(二)ぬ所にて聞き始めたりしに、珍らしき物の聲かなとなむ覺えしかど、その折よりは又こよなく勝りにたるをや」と、せめてわれ賢(三)にかこちなし給へば、女房などは少しつきしろふ。源「よろづの事、道々につけて習ひ學ばば、才といふもの、いづれも際なく覺えつゝ、我が心に飽くべき限なく習ひ取らむことはいと難けれど、何かは、その(四)たどり深き人の、今の世にをさ〳〵無ければ、片端をなだらかにまねび得たらむ人、さる片かどに心をやりてもありぬべきを、琴なむなほ煩はしく、手觸れにくきものにはありける。この事は、まこと(五)にあとのまゝに、尋ねとりたる昔の人は、天地を靡かし、鬼神の心をやはらげ、よろづの物の音のうちに從ひて、かなしび深きものも、よろこびにかはり、賤しく貧しき者も、高き(六)世にあらたまり、寶(七)にあづかり、世にゆるさるゝ類多かりけり。この國に彈き傳ふる初つかたまで、深くこの事を心得たる人は、多く(八)の年を、

(一)明石上の琵琶は源の敎へしにあらねば也
(二)思もよらぬ所、明石をいふ
(三)身贔屓ばかりする故
(四)奥義を極めたる人は當世になき故、僅に一端を解したる者も其れ丈で滿足して居てもよき譯なれど
(五)實際に琴の奥義を極めたる昔の人は
(六)高貴の身となり
(七)財寶を得
(八)宇津保物語の俊蔭が波斯國に到り艱難を凌ぎて仙人に逢ひ琴の祕傳を授かりし事をいふなるべし

怪しく、人の才(一)はかなくとりする事どもも、物のはえありてまさる所なる。その御前の御遊などに、(二)ひときざみに選ばるゝ人々、それかれと如何にぞ」と宣へば、(三)大將、夕霧「それをなむとり申さむ(四)と思ひ侍りつれど、あきらかならぬ心のまゝに、(五)およずけてやはと思ひ給ふる。(六)のぼりての世を、聞き合せ侍らねばにや、衞門督(七)の和琴、兵部卿の宮の御琵琶などをこそ、この頃珍らかなるためしに引き出で侍るめれ。げに傍なき(八)を、今宵うけたまはるものの音どもの、皆ひとしく耳驚き侍れば、猶かくわざと(九)もあらぬ御遊と、かねて思ひ給へたゆみける、心の騒ぐにや侍らむ、(一〇)唱歌などいと仕う奉りにくゝなむ。和琴は、かの大臣(一一)ばかりこそ、かく折につけて、(一二)こしらへなびかしたる音など、心にまかせてかき立て給へるは、いと殊にものし給へ、(一三)をさく\/際離れぬものに侍るめるを、いとかしこく整ひてこそ侍りつれ」と、めで聞え給ふ。源「いと然(一四)ことぐ\/しき際にはあらぬを、わざとうるはしくも取りなさるゝかな」とて、したり顔にほゝゑみ給ふ。源「げにけしうはあら

(一)人の才藝や一寸した仕草でも六條院は他所に勝れり
(二)帝の前
(三)一段と人選して選ばるゝ人々と我六條院の人人との優劣如何
(四)申上げんと
(五)餘り大人ぶりて言ふも如何と差控へ居たり
(六)昔の事を知らぬ様か
(七)柏木
(八)柏木や螢の技倆は無雙に思はるゝに
(九)晴の音樂でもなければと輕く見て居た爲に意外に思はれるのでもあらん
(一〇)恥かしくて
(一一)頭中
(一二)場合に應じて工夫したる
(一三)要するに和琴は幼稚の境界を脱せぬものなるに
(一四)さう譽め立てる程の業の技倆でもないのに

(一)取つて附けた樣な
(二)詩經に「有女懷春」
(三)春秋の優劣論
(四)論明し得られざるべし
(五)音樂の調子
(六)十二調子を六律六呂に分ち律を陽の音とし呂を陰の音とし律は師なり呂は助なりとせり、然るに律を次のものといへるは如何なる譯にや
(七)帝の御前抔にて音樂を奏するに
(八)其中にての俊秀と自らは思へる人々も、實はどれ程の修業もして無いのかして
(九)ぼんやり覺えて居る今夜の連中の仲間に入れて一緒に彈かせても水際立つて聞えさうにも思はれぬ

れど、なほ殊更に(一)作り合せたるやうなる空の氣色、花の露もいろ〳〵目移ろひ心散りて、かぎりこそ侍れ。春の空のたど〳〵しき霞の間より、朧なる月かげに、靜に吹き合せたるやうには、いかでか、笛の音なども、艶に澄みのぼり果てなむ。(二)女は春をあはれむと、古き人のいひ置き侍りける、實にさなむ侍りける。なつかしくものの整ほることは、春の夕暮こそ殊に侍りけれ」と申したまへば、源「否、この(三)さだめよ。古より人の分きかねたることを、末の世に下れる人の、(四)えあきらめはつまじくこそ。(五)物のしらべ曲のものどもはしも、げに(六)律をば次のものにしたるは、さもありかし」など宣ひて、源「いかに、たゞ今有職の覺たかきその人かの人、(七)御前などにて、度々試みさせ給ふに、勝れたるは、數少くなりにたゝめるを、(八)その兄と思へる上手ども、いくばくえまねび取らぬにやあらむ、このかく(九)ほのかなる女たちの御中に、彈きまぜたらむに、際離るべくこそ覺えね。年頃かく埋れて過すに、耳なども少し僻々しくなりにたるにやあらむ。口惜しうなむ。

の上の、見し折よりも、ねびまさり給へらむ有樣ゆかしきに、しづ心もなし。(二)宮をば、(一)今少しの宿世及ばましかば、我が物にても見奉りてまし、(三)心のいとぬるきぞくやしきや、(四)院はたび〳〵さやうにおもむけて、後言にも宣はせけるを、とねたく思へど、(五)少し心安き方に見え給ふ御けはひに、侮り聞ゆとはなけれど、いとしも心は動かざりけり。(六)この御方をば、何ごとも思ひ及ぶべき方なく、氣遠くて、年頃過ぎぬれば、(七)いかでか唯おほかたに、心よせあるさまをも見え奉らむとばかりの、口惜しく歎かしきなりけり。(八)あながちに、あるまじくおほけなき心などは更に物し給はず、いとよくもて(九)をさめ給へり。

夜更け行く風のけはひ冷かなり。(一〇)臥待の月はつかにさし出でたる、源「心もとなしや、春の朧月夜よ。秋の哀はた、かうやうなる物の音に、蟲の聲より(一一)合せたる、ただならず、こよなく響きそふ心地すかし」と宣へば、大將の君、夕霧「秋の夜の隈なき月には、よろづの物の滯なきに、琴笛の音もあきらかに、澄める心地はし侍

(一)野分の卷に野分の朝夕霧が紫を隙見せし事あり
(二)夕霧の心。宮は女三
(三)我心の機微ならぬが殘念なり、氣がきいて甘くやれば女三は我物になりたるにの意
(四)源は毎度女三を娶れと我にすゝめて
(五)女三の樣子が氣のきけぬ風に見ゆる故
(六)紫上をばもとで手の屆かぬ物の樣に思ひて疎遠にのみして居たる故
(七)どうかして自分の好意を懷いて居る事を紫に知られたしと
(八)戀想心などは丸でなく
(九)嗜みがよい
(一〇)十九日の月
(一一)撚り合せたる歟

はら〳〵と淸らにて、火影の御姿世になく美しげなるに、紫の上は、葡萄染にやあらむ、色濃き小袿、薄蘇枋の細長に、御髮のあまれるほど、こちたくゆるらかに、大さなどよき程に、樣體あらまほしく、あたり匂ひ滿ちたる心地して、花といはば櫻にたとへても、なほ物より勝れたるけはひ、殊に物し給ふ。かゝる御あたりに、（一）明石はけおさるべきを、いとさしもあらず、もてなしなど氣色ばみはづかしく、心の底ゆかしき樣して、そこはかとなくあてになまめかしく見ゆ。柳の（二）織物の細長、萌黄にやあらむ、小袿著て、羅の物はかなげなる引きかけて、殊更卑下したれど、けはひ思なしも心にくゝ、侮らはしからず。高麗の青地の錦の、端さしたる褥に、（三）まほにもゐで、琵琶をうち置きて、たゞ氣色ばかり彈きかけて、たをやかにつかひなしたる撥のもてなし、音を聞くよりも、又ありがたくなつかしくて、五月まつ花橘の（四）花も實も具しておし折れるかをり覺ゆ。これもかれも、打解けぬ御けはひどもを聞き（五）見たまふに、（六）大將も、いと內ゆかしく覺え給ふ。（七）對

（一）明石上は壓倒されて見ゆる筈なるに
（二）明石上の衣裳
（三）眞直に坐らず、謙遜したる也
（四）花實ともに具へたる枝を折りとりたる趣
（五）夕霧が簾外に居て見聞する也
（六）夕霧
（七）紫上

(一)女三を源がのぞきて見たれば
(二)上もなき貴女の樣姿なるべしと
(三)明石姫君
(四)春の末に咲ける藤が夏期に入りて散らず
(五)腹部が大分膨脹して
(六)姫君は身體が小さくて
(七)從前の大さなれば
(八)延び上りたる樣にて
(九)紅梅の衣裳

月心もとなき頃なれば、燈籠こなたかなたにかけて、火よき程にともさせ給へり。宮の御方をのぞき給へれば、人よりけにちひさく美しげにて、たゞ御衣のみある(一)心地す。にほひやかなる方は後れて、唯いとあてやかにをかしく、二月の中の十日ばかりの青柳の、僅にしだり始めたらむ心地して、鶯の羽風にも亂れぬべく、あえかに見え給ふ。櫻の細長に、御髮は左右よりこぼれかゝりて、柳の絲のさましたり。これこそは、(二)限なき人の御有樣なゝめれと見ゆるに、(三)女御の君は、同じやうなる御なまめき姿の、今少し匂加はりて、もてなしけはひ心にくゝ、よしある樣し給ひて、よく咲きこぼれたる藤の花の、(四)夏にかゝりて、傍に竝ぶ花なき朝ぼらけの心地ぞし給へる。さるは、いとふくらかなる程になり給ひて、なやましく覺え給ひければ、御琴も推しやりて、(五)脇息におしかゝり給へり。(六)さゝやかになよびかゝり給へるに、御脇息は例の(七)程なれば、(八)およびたる心地して、殊更にちひさく作らばやと見ゆるぞ、いと哀げにおはしける。(九)紅梅の御衣に、御髮のかゝり



(一)幽玄なる
(二)彈手は紫
(三)專門家の名手
(四)修業
(五)彈手は明石姫君
(六)他の樂音の間々に
(七)彈手は女三
(八)夕霧が
(九)源氏
(一〇)重みありて

て上手めき、(一)かみさびたる手づかひ、澄みはてておもしろく聞ゆ。(二)和琴に、大將も耳留め給へるに、なつかしく愛敬づきたる御つま音に、かき返したる音の珍らしく今めきて、更にこの(三)わざとある上手どもの、おどろ〱しくかき立てたるしらべ調子に劣らず、賑はゝしく、大和琴にもかゝる手ありけりと、聞き驚かる。深き(四)御勞の程現に聞えて面白きに、大臣御心おちゐて、いとありがたく思ひ聞え給ふ。(五)箏の御琴は、(六)物のひま〱に、心もとなく漏りいづる物の音がらにて、美しげになまめかしくのみ聞ゆ。(七)琴は、なほ若き方なれど、習ひ給ふさかりなれば、たど〱しからず、いとよく物に響き合ひて、優になりにける御琴の音かなと、大將聞き給ふ。拍子とりて(八)唱歌し給ふ。(九)院も時々扇うちならして、加へ給ふ御聲、昔よりもいみじく面白く、少し(一〇)ふつゝかに、もの〱しき氣そひて聞ゆ。大將も、聲いと勝れ給へる人にて、夜の靜になり行くまゝに、いふかぎりなくなつかしき夜の御遊なり。

たり。ゆるゝかに打ち吹く風に、えならず匂ひたる御簾の内の薫も吹き合せて、(一)鶯誘ふつまにしつべく、いみじき御殿のあたりの匂なり。御簾の下より、箏の御琴のすそ少しさし出でて、源「輕々しき樣なれど、これが緒整へて調べ試み給へ。(二)こゝに又疎き人の入るべきやうもなきを」と宣へば、うち畏まりて(三)賜はり給ふほど、用意多くめやすくて、一越調の聲に、(四)發の緒を立てて、ふとも調べやらで侍ひ給へば、源「猶(五)かきあはせばかりには、手一つすさまじからでこそ」と宣へば、夕霧「更に今日の御遊のさしいらへに、交らふばかりの手づかひなむ、覺えず侍りけるを」と、氣色ばみ給ふ。源「さもある事なれど、女樂に(六)えことまぜでなむ逃げにけると、傳はらむ名こそ惜しけれ」とて笑ひ給ふ。調べはてて、をかしき程に掻合ばかり彈きて、參らせ給ひつ。この御孫の君達の、いと美しき宿直姿どもにて、吹き合せたる物の音ども、まだ若けれど生先ありて、いみじくをかしげなり。御琴どもの調ども整ひはてて、掻き合せ給へる程、いづれとなき中に、(七)琵琶は勝れ

(一)「花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる」
(二)他人に命ぜんと思へど、かゝる奥向へ他人の立入るべきにもあらざる故
(三)夕霧が箏を受取る樣子
(四)第一の絃なるべしといふ
(五)調子を調べる爲には多少味のあるものを一つ彈かねばならぬ
(六)仲間入が出來ずして逃げたりと
(七)彈手は明石上

（一）源が注意して
（二）夕霧
（三）明石姫君の心
（四）格別むつかしいものでは無いが、かたの定らぬもの故女は却つてまごつく
（五）未詳
（六）天子の御前である立派な試樂よりも

その心しらひ整ふべきを、女はえ張りしづめじを、なほ大將をこそ召し寄せつべかめれ。この笛吹ども、まだいと幼げにて、拍子調へむたのみつよからず」と笑ひ給ひて、夕霧「大將こなたに」と召せば、御方々恥かしく、心づかひしておはす。明石の君を離ちては、いづれも皆捨て難き御弟子どもなれば、御心加へて（一）、大將（二）の聞き給はむに、難なかるべくとおぼす。女御は、常に上の聞し召すにも、物に合せつゝ彈きならし給へれば、後やすきを、（三）和琴こそ、（四）いくばくならぬしらべなれど、あと定まりたる事なくて、なかなか女のたどりぬべけれ、春の琴の音は、皆かき合するものなるを、亂るゝ處もやと、なまいとほしく思す。（五）大將、いといたく心げさうして、（六）御前のことごとしく、うるはしき御試あらむよりも、今日の心づかひは殊に勝りて覺え給へば、あざやかなる御直衣、香にしみたる御衣ども、袖いたくたきしめて、引きつくろひて參り給ふほど、くれ果てにけり。ゆゑある黄昏時の空に、花は去年のふる雪思ひ出でられて、枝も撓むばかり咲き亂れ

(一)襖なるべしといふ、襖は袍の兩腋あきたるもの
(二)女三
(三)何といふても
(四)廂の間の
(五)源氏
(六)下稽古
(七)髭黒の三男
(八)夕霧の長男
(九)女三

あをじ(一)のかざりにて、袙濃く薄く、擣目などえならで著せ給へり。宮(二)の御方にも、かくつどひ給ふべく聞きたまひて、童べの姿ばかりは、殊につくろはせ給へり。青丹に柳の汗衫、葡萄染の袙など、殊に好ましく珍らしきさまにはあらねど、大方のけはひの、いかめしく氣高き事、さ言へど(三)ならびなし。廂(四)の中の御障子をはなちて、此方彼方御几帳ばかりをけぢめにて、中の間は院(五)のおはしますべき御座よそひたり。今日の拍子合(六)には童を召さむとて、(七)右の大殿の三郎、かんの君の御はらの兄君笙の笛、(八)左大將の御太郎横笛を吹かせて、簀子にさぶらはせ給ふ。内には、御しとねども並べて、御琴どもまゐりわたす。祕し給ふ御琴ども、うるはしき紺地の袋どもに入れたる取り出でて、明石の御方に琵琶、紫の上に和琴、女御の君に箏の御琴、宮(九)には、かくこと〴〵しき琴はまだえ弾き給はずやと危くて、例の手ならし給へるをぞ、調べて奉り給ふ。源「箏の御琴は、ゆるぶとなけれど、なほかく物に合する折の調につけて、琴柱のたちど亂るゝものなり。よく

ては、ましていはけなくおはします御有樣、隱なからまし、と人々も見奉る。正月二十日ばかりになれば、空もをかしき程に、風ぬるく吹きて、御前の梅も盛になりゆく。大方の花の木どもも、皆氣色ばみ、霞みわたりにけり。來月たゝば、(一)御いそぎ近く物騷がしからむに、かきあはせ給はむ御琴の音も、試樂めきて人のいひなさむを、この頃靜なる程に試み給へ(二)」とて、寢殿にわたし奉り給ふ。(三)御供に、われも〳〵と物ゆかしがりて、參う上らまほしがれど、こなたに遠きをば、(四)えりとゞめさせ給ひて、少しねびたれど、よしある限えりて侍はせ給ふ。童べは、容貌優れたる四人、赤色に櫻の汗衫、(五)薄色の織物の袙、浮紋のうへの袴、紅の擣ちたる、樣もてなしすぐれたる限を召したり。女御の御方にも、御しつらひなど、いとゞ改まれる頃の曇なきに、(六)おの〳〵いどましく、盡したる裝どもあざやかに二なし。童は、青色に蘇枋の汗衫、唐綾のうへの袴、袙は山吹なる唐の綺を、同じさまに整へたり。明石の御方のは、(七)ことごとしからで、紅梅二人、櫻二人、

(一)來月は五十の御賀も近づきて
(二)琴を彈いたらば賀の時の下稽古の樣に人が言ふべければ
(三)源が女三の方へ紫明石姫君等を招く
(四)女三に親しからぬ女は殘して
(五)上衣の色
(六)正月
(七)明石上

の箏琵琶の音も合せて、女樂試みさせむ。たゞ今の物の上手どもこそ、更にこのわたりの人々の御心しらひどもに勝らね。(一)はかぐしく傳へ取りたることは、をさをさなけれど、何事も、いかで心に知らぬ事あらじとなむ、幼きほどに思ひしかば、世にある物の師といふかぎり、又高き家々の、さるべき人の傳どもをも、殘さず試みし中に、いと深く恥かしきかなと、覺ゆる際の人なむ無かりし。(二)そのかみよりも、又この頃の若き人々の、(三)ざれよしめき過すに、はた淺くなりにたるべし。琴はた、まして、更にまねぶ人なくなりにたりとか。(四)この御琴の音ばかりだに、傳へたる人をさ〳〵あらじ」と宣へば、(五)何心なく打ち笑みて、嬉しくかくゆるし給ふ程になりにけるとおぼす。(六)二十一二ばかりになり給へど、猶いといみじくかたなりに、きびはなる心地して、細くあえかに美しくのみ見え給ふ。源「(七)院にも見え奉り給はで年經ぬるを、(八)ねびまさり給ひにけりと御覽ずばかり、用意くはへて見え奉り給へ」と、ことに觸れて教へ聞え給ふに、げにかゝる(九)御後見なく

(一)我は
(二)自分が修業せし時分よりも
(三)趣を求め氣取り過ぐる故、技術は一層淺薄になりたるなるべし
(四)女三程にも修業したる人あらじ
(五)女三が
(六)女三が
(七)女三が父朱雀に逢はずして
(八)朱雀が女三も年とりてよくなつたと思はれる樣に
(九)源が世話をやかなければ

まかで給へり。御子二所おはするを、(一)又もけしきばみ給ひて、五月ばかりにぞなり給へれば、神事(二)などにことつけておはしますなりけり。十一月過しては、參り給ふべき御消息(三)うち頻りあれど、かゝるついでに、かく面白き夜々の御遊をうらやましく、など(四)我に傳へ給はざりけむと、つらく思ひ聞え給ふ。冬の夜の月は、人に違ひてめで給ふ(五)御心なれば、おもしろき夜の雪の光に、をりに合ひたる手どもひき給ひつゝ、侍ふ人々も、少し(六)この方にほのめきたるに、御琴どもとりどりに彈かせて、遊などし給ふ。年の暮れつかたは、對などにはいそがしく、此方彼方の御いとなみに、(七)おのづから御覽じ入るゝ事どももあれば、紫「春のうらゝかならむ夕などに、いかで(八)この御琴の音聞かむ」と宣ひわたるに、年返りぬ。

院(九)の御賀、まづおほやけよりせさせ給ふ事どもいとこちたきに、さしあひては便なく思されて、少し程過させ給ふ。二月十餘日と定め給ひて、樂人舞人など參りつゝ、御遊絶えずあり。源「(一〇)この對に常にゆかしうする御琴の音、いかでこの人々

(一)明石姫君又々懷胎ありて
(二)宮中の神事に忌むべき由などを口實にして
(三)帝よりの
(四)源がなぜ琴を我には敎へられざりしならんと
(五)源の
(六)音樂の方に心得ある者には
(七)紫が自身心づかひする用向ある故
(八)女三の
㊈紫等女三宮の方に集りて音樂、花に喩へたる人々の批評
(九)朱雀の五十の賀
(一〇)紫が聞きたがつて居る女三の琴

の君も傳へ聞き給ひて、「年頃さりぬべき序ごとには、教へ(一)聞ゆることもあるを、そのけはひは實に優り給ひにたれど、まだ聞召し所ある、もの深き手にはおよばぬを、何心もなくて參り給へらむついでに聞召さむと、ゆるしなくゆかしがらせ給はむは、いとはしたなかるべき事にも」と、いとほしく思して、この頃ぞ御心留めて敎へ聞え給ふ。調殊なる手二つ三つ、面白き大曲(二)ども、四季(三)につけて變るべきひゞき、空(四)のさむさぬるさをとゝのへ出でて、やむごとなかるべき手の限を、取り立てて敎へ聞え給ふに、心もとなくおはするやうなれど、やう／＼心得給ふまゝに、いとよくなり給ふ。晝はいと人しげく、なほ一度もゆしあんずる(五)暇も、心あわたゞしければ、夜々なむ靜に、事の心もしめ(六)奉るべきとて、對(七)にも、その頃は御暇聞え給ひて、旦暮敎へ聞え給ふ。女御(八)の君にも、對の上にも、琴は習(九)はし奉り給はざりければ、このをり、をさ／＼耳なれぬ手ども彈き給ふらむを、ゆかしと思して、女御も、わざとありがたき御暇を、たゞ暫しと聞え給ひて

(一)琴を女三に
(二)琴曲に大曲中曲小曲の別ありとぞ
(三)四季の變化に應じたるそれ／＼の調子
(四)氣候の寒暖に應じたるそれ／＼の調子
(五)琴ひく時に絃をゆする事なりといふ
(六)悟らせ
(七)對にも斷りて暇をもらひて
(八)明石姫君
(九)源が自ら敎ふる事はせざりし故

(一)朱雀は音樂に熱心なりしかば
(二)源が
(三)髭黑
(四)夕霧
(五)螢
(六)女三
(七)父朱雀に別れて源に嫁したれば
(八)朱雀が
(九)源が朱雀を訪ふ序に女三も同行して琴を彈いて聞かせて貰ひたし
(一〇)女三の琴は特別の聞物なるべし
(一一)我も

人の御心しらひども入りつゝ、思しめぐらす。いにしへも遊の方に(一)、御心とゞめさせ給へりしかば、舞人樂人などを、心ことに定め、勝れたる限を整へ(二)させ給ふ。(三)右の大殿の御子ども二人(四)、大將の御子、典侍ばらの加へて三人、又ちひさき七つよりかみのは、皆殿上せさせ給ふ。(五)兵部卿の宮の童孫王、すべてさるべき宮達の御子ども、家の子の君達、皆選び出で給ふ。殿上の君達も、容貌よく同じき舞の姿も、心殊なるべきを定めて、數多の舞のまうけをせさせ給ふ。いみじかるべき度の事とて、皆人心を盡し給ひてなむ。道々の物の師上手、いとまなき頃なり。

(六)宮はもとより、琴の御琴をなむ習ひ給ひけるを、いと若くて、(七)院にもひき分かれ奉り給ひにしかば、(八)覺束なくおぼして、朱雀「(九)參り給はむついでに、かの御琴の音なむ聞かまほしき。さりとも琴ばかりはひき取り給ひつらむ」と、しりうごとに聞え給ひけるを、内裏にも聞召して、帝「げにさりともけはひ異ならむ(一〇)かし。院の御前にて、手つくし給はむついでに、(一一)參りて聞かばや」など宣はせけるを、大臣

(一)女三
(二)明石姫君をば源が帝にあづけ切りたる樣に思ひて、唯女三の事をのみ世話をやく
㊇朱雀院の五十の賀の準備、源氏女三宮に琴を敎ふ
(三)以下朱雀より源への仰
(四)死目が近寄りたる心持
(五)逢はずに死にては心殘なり
(六)朱雀から招かれずとも
(七)以下源の心、突然何の風情もなく行く譯にもゆかぬ
(八)朱雀來年五十に滿つる也

給ひつゝ、對の上にも御對面ありて、あらまほしく聞えかはし給ひけり。(一)姫宮のみぞ、同じさまに若くおほどきておはします。女御の君は、今はおほやけざまに思ひはなち聞え給ひて、この宮をばいと心苦しく、(二)幼からむ御女のやうに、思ひはぐくみ奉り給ふ。

朱雀院の、(三)今はむげに(四)世近くなりぬる心地して、物心細きを、更にこの世の事顧みじと思ひ捨つれど、對面なむ今一度あらまほしきを、(五)もし恨のこりもこそすれ、ことごとしき樣ならで渡り給ふべく、聞え給ひければ、大臣も、源「げに然るべき事なり。かゝる(六)御氣色なからむにてだに、進み參り給ふべきを、ましてかう待ち聞え給ひけるが心苦しき事」と、參り給ふべき事思しまうく。(七)序なくすさまじき樣にてやは、這ひわたり給ふべき、なにわざをしてか、御覽ぜさせ給ふべきと思しめぐらす。このたび(八)足り給はむ年、若菜など調じてや、と思して、さまざまの御法服のこと、齋の御まうけのしつらひ、何くれとさまことに變れる事どもなれば、

はず。内裏の帝さへ、御心よせ(一)ことに聞え給へば、おろかに(二)聞かれ奉らむもいとほしくて、渡り(三)たまふ事やう〳〵等しき(四)樣になりゆく。さるべき事、理とは思(五)ひながら、さればよとのみ安からず思されけれど、なほつれなく同じさまにて過し給ふ。東宮の御さしつぎの女一の宮を、(六)こなたに取別きてかしづき奉り給ふ。その御あつかひになむ、つれ〴〵なる御夜がれの程も慰め給ひける、いづれ(七)もわかず美しくかなしと思ひ聞え給へり。夏(八)の御方は、斯くとり〴〵なる御孫(九)あつかひを羨みて、大將(一〇)の君の典侍(一一)腹の君を、切に迎へてぞかしづき給ふ。いとをかしげにて、心ばへも、程(一二)よりはざれおよずけたれば、大臣の君もらうたがり給ふ。少き(一三)御つぎと思しゝかど、末にひろごりて、此方彼方いと多く(一四)なり添ひ給ふを、今は唯これを(一五)うつくしみあつかひ給ひてぞ、徒然もなぐさめ給ひける。右(一六)の大殿の參り仕う奉り給ふこと、古よりもまさりて親しく、今は北(一七)の方もおとなびはてて、かの(一八)昔のかけ〳〵しきすぢ思ひはなれ給ふにや、さるべき折もわたり(一九)

(一)女三に對する
(二)女三を疎略にする樣に言はれるのが氣の毒で
(三)源が女三の方へ行く事
(四)紫の方へ行くのと
(五)紫が
(六)紫方に引取りて養育す
(七)明石姫君腹の皇子等を紫が
(八)花散里
(九)紫の
(一〇)夕霧
(一一)惟光の娘
(一二)年齢よりは
(一三)源の子どもは少しと思ひしかど
(一四)源の孫が
(一五)源が
(一六)鬚黒
(一七)玉鬘
(一八)源が玉鬘に對して色めかしき事は思ひ切りたるにや
(一九)玉鬘が六條院へ來て。

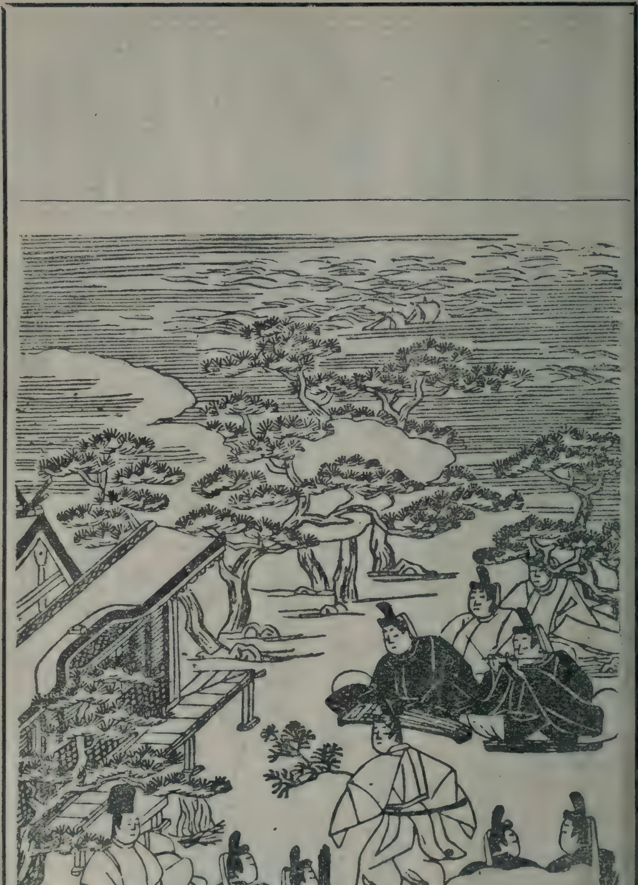
(一)入道があの如く世をふり切りたるは中々出來ぬ事ぢや
(二)併し入道が若隠遁せずして此群に入り居たらば見苦しかるべし
(三)明石尼君等の出世を
㊆紫上、明石姫君腹の女一宮を預かる、花散里、夕霧の三の君を預かる
(四)朱雀
(五)政務にもかまはず
(六)朝覲行幸、天子が父母を訪問する行幸
(七)女三宮の事を朱雀が今も氣にかけて
(八)源をば女三の一通りの後見人と思ひて、細かには今上より女三を世話しくれよと
(九)女三が
(一〇)所領
(一一)紫上
(一二)誰よりも我が寵を受くるにつけて
(一三)以下紫の心
(一四)源の優遇の爲に
(一五)源の寵愛も
(一六)此方から暇をとりて出家してしまひたし
(一七)其樣したらば賢だてをする樣に源に思はれるかも知れぬと憚りて

ざりける。(一)難きことなりかし。(二)まじらはましも見苦しくや。世の中の(三)人これをためしにて、心高くなりぬべき頃なゝめり。萬の事につけてめであざみ、世の言種にて、明石の尼君とぞ、幸人にいひける。かの致仕の大殿の近江の君は、雙六打つ時の詞にも、「明石の尼君々々」とぞ賽は乞ひける。

(四)入道の帝は、御行をいみじくし給ひて、(五)内裏の御事をも聞き入れ給はず。(六)春秋の行幸になむ、昔思ひ出でられ給ふ事もまじりける。(七)姫宮の御事をのみぞ、猶え思しはなたで、(八)この院をば、なほ大方の御後見に思ひ聞え給ひて、うちうちの御心よせあるべく奏せさせ給ふ。(九)二品になり給ひて、(一〇)御封など増さる。いよいよ花やかに御勢添ふ。(一一)對の上、かく年月にそへて、(一二)かたがたに優り給ふ御おぼえに、(一三)我身はたゞ(一四)一所の御もてなしに、人には劣らねど、あまり年積りなば、(一五)その御心ばへも遂に衰へなむ、然らむ世を見はてぬ前に、(一六)心と背きにしがな、とたゆみなく思しわたれど、(一七)さかしき様にや思さむとつゝまれて、はかばかしくもえ聞え給

ぎにたる神樂(一)おもてどもの、おのが顏をば知らで、面白き事に心はしみて、庭燎もかげしめりたるに、なほ「萬歳々々(二)」と榊葉を取り返しつゝ、祝ひ聞ゆる御世の末、思ひやるぞいとゞしきや。萬の事飽かず面白きまゝに、千夜を一夜に(三)なさまほしき夜の、何にもあらで明けぬれば、かへる浪に(四)きほふも口惜しく、若き人々思ふ。松原に、はるばると立てつゞけたる御車どもの、風に打ちなびく下簾のひ(五)まひまも、常磐のかげに、花の錦を引き加へたると見ゆるに、袍衣のいろいろ(六)差別おきて、をかしきかけばん(七)取りつゞきて、物參りわたすをぞ、下人などは目につきて、めでたしとは思へる。尼君の御前にも、淺香(八)の折敷に、青鈍の表(九)おして、精進物を參るとて、「目ざましき女の宿世かな」と、(一〇)おのがじしはしりうごちけり。詣でたまひし道は、事々しくて、煩はしき神寶(一一)、さまざまに所せげなりしを、かへさは萬の逍遙を盡したまひ、言ひ續くるもうるさく、むづかしき事どもなれば(一二)。かゝる御有樣をも、かの入道の、聞かず見ぬ世にかけはなれ給へるのみなむ飽か(一三)

(一)「おもて」は「なのこ」を寫し誤れるなるべしといふ
(二)神樂千歳「千歳々々千歳やちとせの千歳や萬歳々々々々やよろづよの萬歳や」
(三)「秋の夜の千夜を一夜になせりとも詞殘りて雞や鳴きなん」
(四)立かへる浪と先をあらそひて歸るも
(五)車の簾の下端の處より下に垂るゝ布
(六)源以下の人々に給仕する人々を相手によりて其階級を分ちたれば、其人々の袍の色が給仕さる人によりて違ふ也
(七)足附の膳
(八)沈香の木の若きをいふ
(九)表に鼠色の布を張りたる也
(一〇)給仕の人々同志陸口きゝたり
(一一)住吉へ奉納の品々
(一二)「省きたり」などの詞を略したる也
(一三)尼君明石上などの心に



さをさし給はず、ましてかく都の外のありきは、まだ習ひ給はねば、珍らしくをかしく思さる。

紫　住吉の松に夜ぶかくおく霜は神のかけたるゆふかづらかも

篁の朝臣の、「比良の山さへ」(一)といひける雪の朝をおぼしやれば、祭の心うけ給ふ験にやと、いよいよ頼もしくなむ。女御の君、

明石姫　神人の手にとりもたる榊葉にゆふかけ添ふるふかき夜の霜

中務の君、(二)

祝子がゆふうち紛ひおく霜はげにいちじるき神のしるしか

つぎつぎ数知らず多かりけるを、何せむにかは聞きおかむ。かかるをりふしの歌は、例の上手めき給ふ男達も、なかなか出消して(三)、松の千歳より離れて、今めかしき事しなければ、うるさくてなむ。

ほのぼのと明け行くに、霜はいよいよ深くて、本末(四)もたどたどしきまで、酔ひ過

(一)袋草紙に菅原文時の作とて出せる「ひもろぎは神の心にうけつらし比良の高根にゆふかつらせり」の歌なるべしといふ

(二)紫上の侍女

(三)詠みても詠みはえせずしてお定まりの松の千歳の文句より別に斬新な趣向もなければ、うるさくてことに書かず

(四)神楽歌を歌ふには本方末方の二組に分れて歌ふ也

(一)昔の事を知りて老人の其方と昔を語るべき人は我が外にはあらじ・
(二)明石にて
(三)入道
(四)其樣な事を言出すは此場合忌々しき事なればと遠慮して
(五)あまー蜑人、尼
(六)前の歌は源への返歌これは人に聞かせぬ獨言也
(七)屋敷に居ながら

源 たれかまた心を知りてすみよしの神世を經たる松にこと問ふ

御疊紙(一)に書き給へり。尼君うちしをれたり。かゝる世を見るにつけても、かの浦(二)にて今はと別れ給ひし程、女御の君のおはせし有樣など思ひ出づるも、いと辱かりける身の宿世の程を思ふ。世を背き給ひし人(三)も戀しく、さまぐに物悲しきを、(四)かつは忌々しと言忌して、

尼君 住のえをいけるかひある渚とは年經るあま(五)も今日や知るらむ

遲くは便なからむと、たゞうち思ひける儘なりけり。

尼君 昔こそまづ忘られねすみよしの神のしるしを見るにつけても

とひとりごちけり(六)。夜一夜遊び明し給ふ。二十日の月遙にすみて、海の面面白く見えわたるに、霜のいとこちたう置きて、松原も色まがひて、よろづの事そゞろ寒く、おもしろさも哀さも立ち添ひたり。對の上、(七)常の垣根の内ながら、時々につけてこそ、興ある朝夕の遊に、耳ふり目馴れ給ひけれ、御門より外の物見、を

る笛の音も、外にて聞く調には變りて身にしみ、琴にうち合せたる拍子も、鼓を(一)離れて整へとりたる方、おどろ〳〵しからぬも、なまめかしくすごう面白く、所がらはまして聞えけり。山藍(二)にすれる竹のふしは、松の緑に見えまがひ、插頭の(三)花のいろ〳〵は、秋の草に異なるけぢめ分かれで、何事にも目のみまがひいろふ。(四)「求子」(五)はつる末に、若やかなる上達部は、肩ぬぎて(六)おり給ふ。にほひもなく黒き上のきぬに、蘇枋襲葡萄染の袖を、俄に引きほころばしたるに、紅深き袙の袂の、うちしぐれたる(七)に氣色ばかり濡れたる、松原(八)をば忘れて、紅葉の散るに思ひわたさる。見るかひ多かる姿どもに、いと白く枯れたる荻を、高やかにかざして、唯一返まひて入りぬるは、いと面白く飽かずぞありける。

大臣、(九)昔の事思し出でられ、中頃沈みたまひし世のありさまも、目の前のやうに思さるゝに、その世のこと、うち亂れ語り給ふべき人もなければ、致仕の大臣をぞ、戀しく思ひ聞え給ひける。入り給ひて(一〇)、二の車(一一)に忍びて、

(一)東遊には太鼓を用ひざる也
(二)御供の舞人の衣の紋様
(三)舞人陪従等の冠に加へたる飾
(四)「色めく」の意なるべしといふ
(五)東遊の歌曲の名
(六)袍の肩をぬぎて舞ふ也
(七)折から降れる時雨に
(八)此所は松原なる事を忘れて紅葉の散るのかと思はる
(九)源氏
(一〇)棧敷などに居たるなるべし
(一一)明石尼君の車

(一)供の女どもの乘る車
(二)紫の分五臺
(三)明石上の分三臺
(四)總禮にて出かける中へ交つて尼君が行くは氣恥かしい
(五)明石姫君腹の東宮が即位せられる世にもならば、其時こそ尼君を參詣さすべし
(六)尼君が
(七)當然榮華を極むべき身分の人々よりも尼君は運のよさのあらはにわかる身の上なり
(八)「ちはやぶる神の齋垣に這ふ葛も秋にはあへずうつろひにけり」
(九)「紅葉せぬ常磐の山は吹く風の音にや秋を聞き渡るらん」

車には、明石の御方、尼君忍びて乘り給へり。女御の御乳母、心知にて乘りたり。かた〴〵のひとだまひ(一)、上の御方の五つ(二)、女御殿の五つ、明石の御あがれの三つ(三)、目もあやに飾りたる裝束有樣、いへば更なり。さるは、「尼君をば、同じくは、老の浪の皺のぶばかりに、人めかしくてまうでさせむ」と、院は宣ひけれど、明石上「この度は、かく大方の(四)ひゞきに、立ちまじらむもかたはらいたし。もし思ふやう(五)ならむ世の中を待ち出でたらば」と、御方はしづめ給ひけるを、(六)殘の命後めたくて、かつ〴〵物ゆかしがりて、したひ參り給ふなりけり。(七)然るべきにて、もとよりかく匂ひ給ふ御身どもよりも、いみじかりける契、顯に思ひ知らるゝ人の御有樣なり。

十月中の十日なれば、(八)神の齋垣に這ふ葛も色かはりて、松の下紅葉など、(九)音にのみ秋を聞かぬ顏なり。こと〴〵しき高麗唐土の樂よりも、東遊の耳なれたるは、なつかしくおもしろく、浪風の聲に響きあひて、さる木高き松風に、吹き立てた

(一)紫上
(二)萬事を簡略にして
(三)梅枝と鬚黒を除きては
(四)中將少將
(五)樂人
(六)加陪從とて諸家の家禮分なる五位の人を加ふる事ある也
(七)明石姫君と紫上と同車したり

盡し給へれども、なほ世の中にかくおはしまして、かゝるいろ〳〵の榮を見たまふにつけても、神の御助は忘れ難くて、對の上(一)も具し聞えさせ給ひて、詣でさせたまふ。ひゞき世の常ならず。(二)いみじく事どもそぎ捨てて、世の煩あるまじくと省かせ給へど、限ありければ、珍らかに裝ほしくなむ。上達部も、大臣二所(三)を措き奉りては、皆つかうまつり給ふ。舞人は、衞府の佐(四)どもの、容貌淸げにたけだち齊しき限を選らせ給ふ。この選に入らぬをば恥に、憂へ歎きたるすきものどもありけり。陪從(五)も、石淸水、賀茂の臨時の祭などに召す人々の、道々のことに勝れたるかぎり整へさせ給へり。加はり(六)たる二人なむ、近衞府の名高きかぎりを召したりける。御神樂のかたには、いと多く仕うまつれり。内裏、東宮、院の殿上人かた〴〵に分れて、心寄せつかうまつる。數も知らず、いろ〳〵につくしたる上達部の御馬鞍、馬添、隨身、小舍人童、つぎ〳〵の舍人などまで、整へ飾りたる見物、またなき樣なり。女御殿(七)、對の上は、ひとつに奉りたり。次の御

㊅ 源氏住吉詣

(一)源が明石入道より贈られし願文の箱をあけて見れば
(二)入道が春秋毎に神樂を奏し奉りしなるべし
(三)源位の勢力の人ならでは果す事を得ざる程の事を願文の中に書きおけり
(四)入道
(五)源の心、入道は昔の聖僧が縁ありて假に人間に生れしならんかと
(六)願はたしの趣意をかくして
(七)須磨退去の時の事

卑下しものし給へるしもぞ、なか〳〵ゆくさき頼もしげにめでたかりける。尼君も、やゝもすれば、堪へぬ喜の涙、ともすれば落ちつゝ、目をさへ拭ひたゞらして、命長さ嬉しげなる例になりてものし給ふ。

住吉の御願かつ〴〵はたし給はむとて、東宮の女御の御祈に詣で給はむとて、(一)かの箱あけて御覽ずれば、さま〴〵の嚴しき事ども多かり。(二)年ごとの春秋の神樂に、必ず長き世の祈を加へたる願ども、げに(三)かゝる御勢ならでは、はたし給ふべき事とも思ひおきてざりけり。唯走り書きたるおもむきの、才々しくはか〴〵しく、佛神も聞き入れ給ふべき言の葉あきらかなり。いかでさる山伏(四)の聖心に、かゝる事どもを思ひよりけむと、哀にもおほけなくも御覽ず。(五)さるべきにて、暫しかりそめに身をやつしける、昔の世の行人にやありけむ、など思しめぐらすに、いとゞ輕々しくも思されざりけり。(六)この度はこの心をば顯し給はず、唯院の御物詣にて出で立ち給ふ。(七)浦づたひの物騷がしかりし程、そこらの御願ども、皆はたし

思すに、いよ〳〵六條院の御ことを、年月にそへて、限なく思ひ聞え給へり。院(一)の帝、思しめしゝやうに、御幸も所せからで、渡り給ひなどしつゝ、かくしても、實にめでたくあらまほしき御有樣なり。姬宮(二)の御ことは、帝御心留めて思ひ聞え給ふ。大方(三)の世にも、遍くもてかしづかれ給ふを、對の上の御勢には、えまさり給はず。年月經るまゝに、御中(四)いとうるはしく睦び聞えかはし給ひて、いさゝか飽かぬ事なく、隔も見え給はぬものから、紫「今は、かう(五)おほぞうの住居ならで、のどやかに行をもとなむ思ふ。この世は斯ばかりと、見はてつる心地する齢にもなりにけり。さりぬべき樣に思し許してよ」と、まめやかに聞え給ふをり〳〵あるを、源「あるまじくつらき御事なり。自ら(六)深き本意ある事なれど、とまりてさうざうしく覺え給ひ、ある世にかはらむ御有樣の、後めたさによりこそながらふれ。遂にその事遂げなむ後(七)に、ともかくも思しなれ」などのみ、妨げ聞え給ふ。女(九)御の君、唯(八)こなた(一〇)を實の御親にもてなし聞え給ひて、御かたは隱所の御後見にて、(一一)

(一)冷泉
(二)女三宮
(三)世間からも女三が尊敬さるれど紫には勝たれず
(四)源と紫
(五)斯かるごた〳〵したる生活をやめて尼になりたしと思ふ
(六)我も出家は深き望なれど、あとに殘る其方が寂しかるべく
(七)其方の生活が今と萬事かはりたる樣になるのが氣遣はしさに今に出家もせぬのぢや
(八)自分が出家してから
(九)明石姬君
(一〇)紫上
(一一)明石上

を掛けむに、何か惜しからむ」と思し宣ふべし。左大將(一)、右大臣になり給ひてぞ、(二)世の中の政つかうまつり給ひける。女御の君(三)は、かゝる御世をも待ちつけ給はで、亡せ給ひにければ、(四)限ある御位を得給へれど、物のうしろの心地して、かひ無かりけり。(五)六條の女御の御腹の一の宮、(六)坊に居給ひぬ。さるべき事とかねて思ひしかど、さしあたりては猶めでたく、目驚かるゝわざなりけり。右大將(七)の君、大納言になり給ひて、(八)例の左に移り給ひぬ。いよ〳〵あらまほしき御中らひなり。六條院は、おり居給ひぬる冷泉院の、御次おはしまさぬを、飽かず御心の中におぼす。(九)同じ統なれど、(一〇)思ひ悩ましき御事なくて過し給へるばかりに、罪は隱れて、末の世まではえ傳ふまじかりける御宿世、口惜しくさう〴〵しく思せど、人に宣ひ合せぬ事なれば、いぶせくなむ。(一一)東宮の女御は、御子達あまた數そひ給ひて、いとゞ御おぼえ比なし。源氏の、うち續き后に居給ふべき事を、世の人飽かず思へるにつけても、冷泉院の后(一二)は、(一三)故なくて、あながちにかくしおき給へる御心を

(一)髭黒
(二)關白也
(三)髭黒の姉妹、新帝の母
(四)后の位を贈られたれども
(五)明石姫君
(六)東宮
(七)夕霧
(八)左大將になれり、例のとは前に左中將たりしを以ていふ
(九)新東宮も矢張源の系統なれば同じ事なれど
(一〇)冷泉の一代源の祕密が顯れずして過ぎたる爲ぼろは出さずに濟みしかど、冷泉の子孫まで位を傳ふる事は出來ぬ運命を
(一一)明石姫君
(一二)秋好
(一三)自分には皇子もなくて、強ひて源が自分を中宮にしたる源の志を思ひて

(一)氣に入つた女を持つて居ても外に浮氣は絶えざりしに
(二)自邸に
㊄ 冷泉院讓位、今上卽位、源氏一門の榮華
(三)此間四年ばかり
(四)冷泉
(五)冷泉が
(六)帝位を去りて
(七)頭中
(八)老人の退官するのが

事かな、昔いと哀と思ひし人をおきても、猶はかなき心のすさびは絶えざりしかど、かう嚴しき物怨じ(一)は、殊になかりしものを、心づきなく、いとど昔を戀ひ聞え給ひつつ、故鄕(二)にうち眺めがちにのみおはします。さ言ひつつも、二年ばかりになりぬれば、かかるかたに目慣れて、只然るかたの御中にて過し給ふ。

はかなくて年月(三)も重りて、內裏(四)の帝御位に卽かせ給ひて十八年にならせ給ひぬ。冷泉「次の君とならせ給ふべき御子おはしまさず、物の榮なきに、世(五)の中はかなく覺ゆるを、心安く思ふ人々にも對面し、わたくし(六)樣に心をやりて、長閑に過さまほしくなむ」と年頃思し宣はせつるを、日頃いと重く惱ませ給ふ事ありて、俄におりゐさせ給ひぬ。世の人、飽かずさかりの御世を、かく遁れ給ふ事、と惜み歎けど、東宮も大人びさせ給ひにたれば、うち繼ぎて、世の中の政など、殊に變るけぢめもなかりけり。(七)太政大臣致仕の表奉りて、こもり居給ひぬ。頭中「世の中の常なきにより、かしこき帝の君も、位を去り給ひぬるに、年(八)ふかき身の冠

將の君も、さればよ、いといたく色めき給へる親王を(一)と、初より我が御心にゆるし給はざりし事なればにや、ものしと思ひ給へり。(二)かんの君も、(三)かく頼もしげなき御樣を、近く聞き給ふには、さやうなる世の中を見ましかば、(四)此方彼方いかに思し見給はましなど、なまをかしくも(五)哀にも思し出でける。(六)そのかみも、氣近く見聞えむとは思ひよらざりきかし。たゞ情々しう、心深き樣に宣ひわたりしを、(七)あへなく淡つけきやうにや、聞きおとし給ひけむと、いと恥かしく、年頃も思しわたる事なれば、かゝる(八)あたりにて聞き給はむ事も、心づかひせらるべくなどおぼす。これよりも、(九)さるべきことはあつかひ聞え給ふ。(一〇)兄の君たちなどして、かかる御氣色も知らず顏に、憎からず聞えまつはしなどするに、心苦しくて、(一一)もて離れたる御心はなきに、大北の方(一二)といふさがなものぞ、常に許しなく怨じ聞え給ふ。祖母「親王達は、(一三)のどかに二心なくて見給はむをだにこそ、花やかならぬ慰には思ふべけれ」とむづかり給ふを、宮も漏り聞き給ひては、いと聞きならはぬ(一四)

(一)螢をいふ
(二)忌々しく思へり
(三)玉鬘
(四)我若し螢に靡きて眞木柱の如く冷遇されたらば源頭中將が何と思ふならん
(五)螢に挑まれし當時を
(六)其當時も螢に靡く心はなかりしが
(七)螢の情深きを引はづして髯黑に靡きたるを心なき樣に螢が思ひて我をさげすみしならんと
(八)眞木柱が螢から我が噂を聞きて何と思ふならんと心にかゝる
(九)玉鬘からも眞木柱の世話をやく
(一〇)玉鬘は眞木柱と螢との關係の面白からぬを知らぬ顏にて玉鬘の兄弟を以て螢に睦まじげに持ちかくる故
(一一)螢も氣の毒になりて眞木柱を棄てる氣もなきに
(一二)眞木柱の祖母
(一三)親王に娘をやるのは外に女の無いのが取得
(一四)螢の心、とんだ事を聞くもの哉

(一)色々手を盡して辛うじて手に入れらゝば恨を言ふ膽などありて趣深けれど、早速に承諾されては曲折なくして面白からざる也
(二)相手が立派な相手故
(三)眞木柱へ通ひはじめたり
(四)式部卿方で螢を
(五)長女は眞木柱の北、次女は王女御、秋好に壓倒されて勢力なし
(六)螢
(七)眞木柱の實母
(八)髭黑
(九)眞木柱を
(一〇)螢の爲め
(一一)螢
(一二)死せし北方に
(一三)眞木柱も惡からねど前の北方には似ぬと思ふと
(一四)眞木柱と螢との關係を見て
(一五)髭黑

ひて、いたくも惱まし奉り給はず、うけひき申し給ひつ。親王、(一)あまり恨みどころなきを、さう〴〵しと思せど、(二)大方の侮りにくきあたりなれば、えしも言ひ過し給はでおはしましそめぬ。(三)いと二なくかしづき聞え給ふ。大宮は、女子あまた物し給ひて、さま〴〵物歎かしき折々多かるに、(四)物懲りもしぬべけれど、猶こ(六)の君の事の思ひ放ち難く覺えてなむ。(五)「母君(七)は、怪しきひがものに、年頃にそへてなり勝り給ふ。大將(八)はた、我がことに從はずとて、おろかに見捨てられためれば、いとなむ心苦しき」とて、御しつらひをも(一〇)立居御手(九)づから御覽じいれ、よろづに辱く御心に入れ給へり。宮は、(一一)亡せ給ひにける北の方を世と共に戀ひ聞え給ひて、たゞ昔(一二)の御有樣に似奉りたらむ人を見むと思しけるに、惡しくはあら(一三)ねど、さまかはりてぞ物し給ひけると思すに、口惜しくやありけむ、通ひ給ふさまいと物憂げなり。大宮、いと心づきなきわざかな、と思し歎きたり。母君も、さこそひがみ給へれど、現心出でつる時は、口惜しくうき世と思ひはて給ふ。(一四)大(一五)

(一)髯黒
(二)候補者
(三)眞木柱の評判
(四)眞木柱に縁組を申込む人々
(五)式部卿宮が
(六)柏木が望んで來たらば應ぜんと
(七)眞木柱の實母
(八)捨鉢な生活をして居るを眞木柱は殘念がりて
(九)玉鬘
(一〇)眞木柱が
(一一)螢兵部卿宮
(一二)相變らず獨身にて
(一三)望みは皆齟齬して玉鬘を取はづしたるをいふ
(一四)そう無限に氣隨にくらすでもなしと思ひて
(一五)眞木柱に懸想しかかりたれば
(一六)眞木柱の祖母
(一七)大事な娘は宮中へ差上ぐるか、其でなければ宮樣に上げるがよし
(一八)珍重する
(一九)卑しい事ぢや

り仕うまつり、世の人もおもく思ひ聞えけり。(一)大將も、さる世のおもしとなり給ふべき(二)したかたなれば、(三)姫君の御おぼえ、などてかは輕くはあらむ。(四)聞え出づる人々、ことに觸れて多かれど、(五)思しも定めず。(六)衞門督を、さも氣色はまばと思すべかンめれど、猫には思ひおとし奉るにや、かけても思ひよらぬぞ、口惜しかりける。(七)母君の、怪しくなほひがめる人にて、世の常の有樣にもあらず、(八)もて消ち給へるを、口惜しきものに思して、(九)繼母の御あたりをば、心つけてゆかしく思ひて、今めきたる御心ざまにぞ(一〇)物し給ひける。(一一)兵部卿の宮、(一二)猶一所のみおはして、(一三)御心につきて思しける事どもは、皆違ひて、世の中もすさまじく、人わらへに思さるゝに、(一四)さてのみやはあまえて過すべき、と思して、(一五)このわたりに氣色ばみより給へれば、(一六)大宮、「何かは、(一七)かしづかむと思はむ女子をば、宮仕につぎては、親王達にこそは見せ奉らめ。たゞ人の、すくよかになほ〳〵しきをのみ、今の世の人の(一八)かしこくする、(一九)しなきわざなり」と宣

㊃ 螢兵部卿宮、眞木柱の姬君を娶る、兩人の中睦じからず

(一)玉鬘
(二)頭中の子ども、玉鬘の實の兄弟
(三)夕霧
(四)玉鬘は
(五)人なつこく
(六)夕霧に
(七)夕霧
(八)明石姬君
(九)兄妹ならず夫婦ならざるをいふ
(一〇)髭黑
(一一)玉鬘を
(一二)玉鬘腹には女子なければ
(一三)玉鬘が
(一四)眞木柱の祖父式部卿宮
(一五)眞木柱
(一六)式部卿宮は世人の尊敬も厚く帝も非常に重んぜられて
(一七)式部卿宮の執奏する事に對しては
(一八)式部卿宮は全體派手なる御邸故
(一九)源氏、頭中

を語らひ給ふ。

左大將殿の北の方(一)は、大殿の君達(二)よりも、右大將の君(三)をば、なほ昔のまゝに、疎からず思ひ聞え給へり。(四)心ばへのかど〳〵しく、氣近く(五)おはする君にて、(六)對面し給ふ時々も、こまやかに隔てたる氣色なくもてなし給へれば、大將(七)も、淑景舍(八)などの、うと〳〵しく及び難げなる御心ざまの餘りなるに、(九)さま異なる御睦にて、思ひかはしたまへり。男君(一〇)、今はまして、かの初の北の方をも、もて離れはてて、並びなく(一一)もてかしづき聞え給ふ。(一二)この御腹には、男君達のかぎりなれば、さうざうしとて、(一三)かの眞木柱の姬君を得て持てかしづかまほしくし給へど、祖父宮(一四)など、更に許し給はず、式部「(一五)この君をだに、人笑へならぬ様にて見む」と思し宣ふ。親王(一六)の御おぼえいとやむごとなく、内裏にも、この宮の御心よせ、いとこよなくて、(一七)この事と奏し給ふことをば、え背き給はず、心ぐるしきものに思ひ聞え給へり。(一八)大方も今めかしくおはする宮にて、(一九)この院、大殿にさしつぎ奉りては、人も參

(一)これにも勝る猫が御所には居る樣なれば
(二)夜明くれば早速
(三)人馴れざりし猫も
(四)猫の自ら進み來て柏木と共に寢んとするををかしく思へる也
(五)汝の啼くは何と思ひての事ぞ
(六)柏木は不斷は猫などは愛せぬ氣質なるに
(七)東宮より催促すれども猫をかへさず

おのづから魂侍らむかし」など聞えて、柏木「勝るども(一)侍ふめるを、これは暫し賜はり預からむ」と申し給ふ。心のうちに、あながちにをこがましく、かつは覺ゆ。

つひにこれを尋ね取りて、夜もあたり近く臥せ給ふ。明けたて(二)ば、猫のかしづきをして、撫で養ひ給ふ。人氣(三)遠かりし心もいとよく馴れて、ともすれば衣の裾にまつはれ、寄り臥し睦るゝを、まめやかにうつくしと思ふ。いといたく眺めて、端近く寄り臥し給へるに來て、ねう〳〵といとらうたげに鳴けば、かき撫でて、(四)うたてもすゝむかなと、ほゝ笑まる。

柏木「戀ひわぶる人のかたみと手ならせばなれよ何とてなく音なるらむ(五)

これも昔の契にや」と、顏を見つゝ宣へば、いよ〳〵らうたげに鳴くを、懷に入れて眺め居給へり。御達などは、「怪しく俄なる猫のときめくかな。かやうなるも(六)の見入れ給はぬ御心に」と、咎めけり。(七)宮より召すにも參らせず、取籠めてこれ

(一)東宮御所の猫に
(二)東宮が見たがる様に
(三)明石姫君の取次で女三へ貰ひたしと申込みたれば女三より贈り來れり
(四)東宮が女三の猫をはしがらるゝ様子を見て置きて
(五)東宮へ
(六)柏木の幼年時代から
(七)柏木を
(八)朱雀の御出家の御供をしなくなりし後は
(九)東宮
(一〇)六條院にて馴染になりし猫は何處に居るぞ
(一一)我が家の猫も之に劣らぬ
(一二)人を見分くる如き智慧もなきものなれども

く問はせ給ふ。柏木「唐猫の、(一)こゝのに違へる様してなむ侍りし。同じやうなるものなれど、心をかしく人馴れたるは、怪しく懐かしきものになむ侍る」など、(二)ゆかしく思さるばかり聞えなし給ふ。

聞し召しおきて、(三)桐壺の御方より傳へて聞えさせ給ひければ、參らせ給へり。げにいと美しげなる猫なりけりと、人々興ずるを、衛門督は、(四)尋ねむと思したりきと、御氣色を見置きて、日頃經て(五)參り給へり。(六)童なりしより、朱雀院のとりわきて思し(七)つかはせ給ひしかば、(八)御山住に後れ聞えては、また(九)この宮にも親しう參り心よせ聞えたり。御琴など教へ聞え給ふとて、柏木「御猫ども數多集ひ侍りにけり。いづら、(一〇)この見し人は」と尋ねて見つけ給へり。いとらうたく覺えて、かき撫でつ居たり。宮も、東宮「げにをかしき様したりけり。心なむまだなつき難きは、見馴れぬ人を知るにやあらむ。(一一)こゝなる猫ども、ことに劣らずかし」と宣へば、柏木「これは、(一二)さるわきまへ心もをさ〳〵侍らぬものなれど、その中にも心かしこきは、

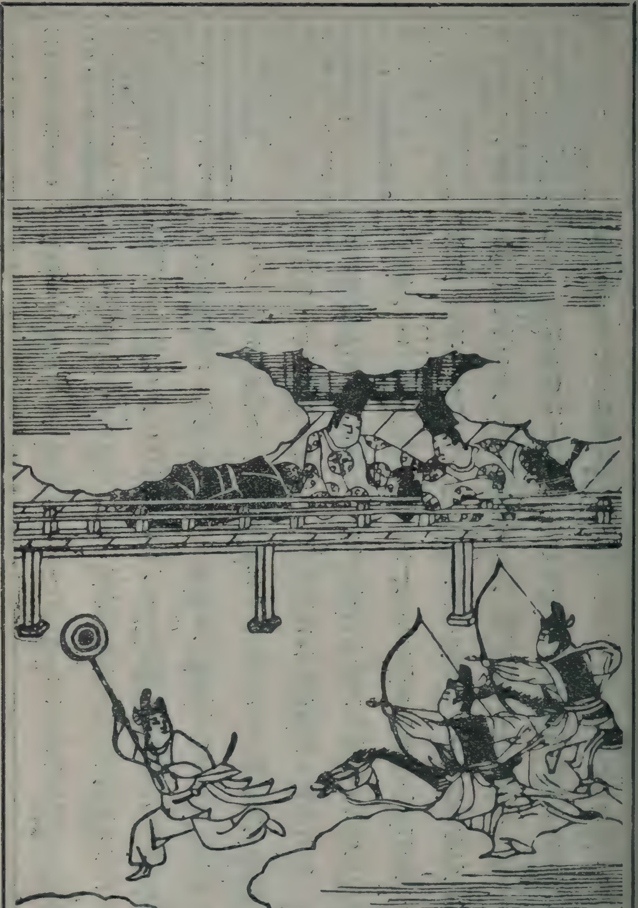
(一)どうかして猫を盗みたしと
㊂ 柏木謀りて六條院の猫を得て寵愛す
(二)弘徽殿、柏木の妹
(三)弘徽殿が面と向つて柏木に對面せず
(四)兄妹の中でさへ
(五)女三が不意に我に見られたるは實にとんでもなき事なりしと汯は思はるれど
(六)深く惚込みたる心がらは其を不謹愼な事とは思はれず
(七)柏木が
(八)兄姉故女三と東宮とは似たる所あるべしと
(九)貴人の事故
(一〇)多く生みたる
(一一)東宮
(一二)女三宮
(一三)珍らしい器量よしで
(一四)東宮は猫好にて

ふ事語らふべくはあらねど、傍さびしき慰にもなつけむ、と思ふに、物狂ほしう、(一)いかでかは盗み出でむと、それさへぞ難き事なりける。

(二)女御の御方に參りて、物語など聞え紛らはしこゝろみる。いと奥深く心恥かしき御もてなしにて、(三)まほに見え給ふこともなし。(四)かゝる御中らひにだに、氣遠くならひたるを、(五)ゆくりかに怪しくはありしわざぞかし、とは流石にうち覺ゆれど、(六)おぼろけにしめたる我が心から、淺くも思ひなされず。東宮に(七)參り給ひて、(八)論無う通ひ給へる所あらむかしと、目留めて見奉るに、匂ひやかになどはあらぬ御容貌なれど、(九)さばかりの御有樣はた、いと殊にて、あてになまめかしくおはします。内裏の御猫の、(一〇)數多ひき連れたりける同胞どもの、所々にあがれて、(一一)この宮にも參れるが、いとをかしげにて歩くを見るに、まづ思ひ出でらるれば、柏木「六條の院の姫宮(一二)の御方に侍る猫こそ、(一三)いと見えぬやうなる顏して、をかしう侍しか。僅かになむ見給へし」と啓し給へば、(一四)猫わざとらうたくせさせ給ふ御心にて、委し

(一)春が今日限りなる
(二)「今日のみと春を思はぬ時だにも立つ事やすき花の陰かは」
(三)賭物の種類によりて賭けたる人の氣風が分る也
(四)楚の養由基百歩を隔てゝ柳葉を射百發百中なりしといふ故事
(五)受合つて必ず
(六)幼稚なる
(七)柏木
(八)柏木の心を略知れる夕霧の目には
(九)夕霧の心
(一〇)夕霧自身迄心配の種を設けた心持
(一一)夕霧と柏木
(一二)柏木に屈託事あるを夕霧が氣の毒がる
(一三)柏木
(一四)柏木の心、此様なけしからぬ了簡は出すべきでなし、一通りの事に附ても人に批難を受くべき事はせじと思ひ居るに
(一五)柏木の心

まどりに方分きて、暮れゆくまゝに、(一)今日にとぢむる霞の氣色も、あわたゞしく亂るゝ夕風に、(二)花の陰、いとゞ立つことやすからで、人々いたく醉ひすぎ給ひて、「艶なる賭物ども、こなたかなた、(三)人々の御心見えぬべきを、(四)柳の葉を百度あてつべき舍人どもの、(五)うけばりて射取る、無心なりや。(六)少しこゝしき手つきどもなこそ、挑ませめ」とて、大將達よりはじめており給ふに、(七)衛門督、人よりけにながめをしつゝ物し給へば、(八)かのかたはし心知れる御目には、見つけつゝ、(九)なほいと氣色異なり、煩はしきこと出で來べき世にやあらむと、(一〇)我さへ思ひつきぬる心地す。(一一)この君達、御中いとよし。さる中らひといふ中にも、心かはして懇なれば、はかなき事にても、(一二)物思はしくうち紛るゝ事あらむを、いとほしく覺え給ふ。(一三)みづからも、大臣を見奉るに、氣怖ろしくまばゆく、(一四)かゝる心はあるべきものか、斜ならむにてだに、けしからず、人に點つかるべき振舞はせじと思ふものを、ましておほけなき事、と思ひわびては、(一五)かのありし猫をだに得てしがな、思



一女三宮を教訓す。柏木と源氏との疎隔。㊁六條院の試樂。柏木召されて試樂の事務を執行す。㊂柏木の病重し、父の邸に移る。㊃朱雀院五十の賀。

理(一)とは思へども、うれたくも言へるかな、いでや、なぞ斯く、殊なる事なきあへしらひばかりを(二)慰にては、いかゞ過さむ、かゝる人傳ならで、一言をも宣ひ聞ゆる世ありなむやと(三)、思ふにつけても、大方(四)にては、惜しくめでたしと思ひ聞ゆる院(五)の御爲、なまゆがむ心(六)や添ひにたらむ。

晦の日は、人々數多參り給へり(七)。なま懶く、すゞろはしけれど(九)、そのあたりの花(一〇)の色をも見てや慰むと思ひて參り給ふ(八)。殿上の賭弓(一一)、二月とありしを過ぎて、三月はた御忌月(一二)なれば、口惜しと人々思ふに、この院(一三)に、かゝるまとゐあるべしと聞き傳へて、例の集ひ給ふ。左右大將(一四)、さる御なからひ(一五)にて參り給へば、すけたち(一六)など挑みかはして、小弓と宣ひしかど(一七)、歩弓(一八)の勝れたる上手どもありければ、召し出でて射させ給ふ。殿上人どもも、つきづきしきかぎりは、皆前後の心(一九)、こ

㊀柏木の煩悶
(一)小侍從の返事を見ての柏木の心、斯かる返事のあるが至當とは思へど
(二)通り一遍の挨拶のみにては堪忍が出來ぬ
(三)直接に女三の詞を一言でも聞く折があればよいと
(四)大體から言へば
(五)源氏
(六)けしからぬ了簡、女三に對する戀をいふ

㊁六條院の賭弓の會
(七)六條院へ
(八)柏木が
(九)六條院へ行くのが憚らるゝ心持はすれども
(一〇)女三の
(一一)禁中弓場殿にて武官等集りて弓を射る儀式
(一二)故藤壺の
(一三)六條院
(一四)髯黒と夕霧
(一五)離れぬ中なれば
(一六)中將少將等
(一七)小弓を射んと
(一八)歩立にて弓射る事
(一九)前後の順序を一人づつ互違に立てる

源氏物語

若菜下

梗概

㊀柏木の煩悶。㊁六條院の賭弓の會。㊂柏木謀りて六條院の猫を得て寵愛す。㊃螢兵部卿宮、眞木柱の姫君を娶る。兩人の中睦じからず。㊄冷泉院讓位。今上即位。源氏一門の榮華。㊅源氏住吉詣。㊆紫上、明石姫君腹の女一宮を預かる。花散里、夕霧の三の君を預かる。㊇朱雀院の五十の賀の準備。源氏、女三宮に琴を敎ふ。㊈紫、明石上、明石姫君等女三宮の方に集りて音樂。花に喩へたる人々の批評。源氏、夕霧と琴につきての物語。㊉源氏、紫上と往事を語り、六條院の婦人達を評す。⑪紫上病氣。二條院に移る。源氏の憂悶。⑫柏木、落葉宮を娶る。猶女三宮を慕ひて小侍從に謀る。⑬柏木、密に女三宮に逢ふ。柏木の煩悶。⑭女三宮の苦悶、病氣。源氏の見舞。柏木の悔恨。⑮紫上危篤。六條御息所の靈出現。⑯紫上逝去の噂。人々の見舞。紫上落髮。病やゝ快し。⑰女三宮懷胎。源氏の見舞。柏木文を女三宮に贈る。⑱源氏柏木の文を發見す。源氏の煩悶。小侍從、祕密の露顯を柏木に告ぐ。柏木の煩悶。⑲源氏の女三宮に對する態度、⑳朧月夜尼になる。源氏の見舞。㉑朱雀院、女三宮の病を見舞ふ。源氏、

紅梅……三五九
竹河……三七五
橋姫……四二七
椎本……四七五
總角……五二一

源氏物語　參　目錄

若菜（下）……一
柏木……一一七
橫笛……一六五
鈴蟲……一八七
夕霧……二〇五
御法……二八九
幻……三一三
雲隱……三四一
匂宮……三四三

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

源氏物語

三



